日本戲曲全集
第二十八卷

義太夫狂言時代物集

東京
春陽堂版

『菅原傳授手習鑑』

二世中村仲藏の車曳の松王丸

三世市川八百藏の車曳の梅王丸

寛政六年七月都座所演

日本戯曲全集　第二十八卷　目次

義太夫狂言時代物篇

大物の船櫓は
うら波競ふ
猛將の忠臣
芳野の花櫓は
やよの風競ふ
化性の孝心

押へて締めて馴れさする、身の代の早鮨は、主從の緣に引かるゝ、內や床しき
惡者の底意は、あふむ返しの下の句は勇者の返禮・威光輝やく高提灯、照ら
して歸る錦の　陣羽織

義經千本櫻

五幕　千本柱

締めつ緩めつ猶豫の調べ、血筋は親子の緣に引かるゝ鼓の愛着、情や床しき
化性の正體、恩返しの賜物と、賢者の添へたる名を、照らしたる狐火は、古栖
へかへる狐の　白羽織

表のカタリは天保六年に上方の芝居で千本櫻をやつた時のそれである。由來義太夫狂言のカタリは割註式の簡單なもので、それを歌舞伎で上演する際にも、時に複雜なカタリを作るといふ場合は少ない。これなぞは異例の方である。

千本櫻といへばいつも「大物の船矢倉、吉野の花矢倉」と並んで書くにきまつてゐたものだ。

左の錦繪は安永三年八月市村座でこの狂言を演じた時の錦繪で、勝川春章の筆だ。二世嵐三五郎の忠信と、瀨川富三郎の靜、川連館の場である。

本文には出來るだけ各場各役にわたり、年代筆者も複雜にして錦繪を集め挿入した。説明は一枚々々附けてある。

義經千本櫻

序幕　堀河御所の場

役名――九郎判官義經。武藏坊辨慶。龜井六郎重清。駿河次郎清繁。土佐坊正尊。川越太郎重頼。義經北の方、卿の君。愛妾、靜御前。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、一面に翠簾を卷上げ、見附け金襖、上の方、床の間、香臺に袱紗を掛け、これに初音の鼓を載せ、次に、鎧櫃の上に鎧長刀飾りあり、二重舞臺上の方に褥を敷き、義經、壺折り衣裳にて、脇息にかゝり居る。下の方に卿の君、裲襠衣裳にて、褥の上に座し、腰元四人居並び、平舞臺上の方、龜井、駿河、上下衣裳、大小にて扣へ居る。眞中に靜、烏帽子裝束にて、中啓を持ち扣へ居る、舞の切にて幕明く。

ト奥にて、

大勢　やんや〳〵。

ト鳴り物。

靜　お望みであるゆゑに、拙い舞ひ振り、お目にかけ、おはもじう存じまする。

卿君　イヤナウ、始めて見ましたが、面白い事。この間より醫の助けを乞うても、心惡しう暮らせしに、我が君樣のお勸めで、今日は思はぬ好い慰み。そもじは、御大儀であつたなの。

靜　ハツ、……その御機嫌に甘へ、申し上げたい、お願ひがござりますが、お取上げ下されませうや。

卿君　アイヤ、そのお尋ねに及ばぬ事。願ひとは餘所々々しい。近う寄つて物語りや。

靜　ハイ、お願ひと申しますは、外の事でもござりませぬ。氣の毒なは武藏坊辨慶どの、何か大きな仕損ひ致しましたとて、樂屋へ參り、おろ〳〵泣いて、私しへ頼み。突詰めた氣の細いお人さうで、餘りと申せばいぢらしい。何卒お詞添へられ、我が君樣の御機嫌も直りまするやう、この事只管お願ひ申し上げまする。

ト申し上ぐれば、御臺はをかしく、君にも笑ひ、駿河の

〽次郎佛頂面。

次郎　イヤハヤ、かゝつた事ではない。六郎、お聞きやつたか。武藏坊辨慶とも云はるゝ者が、女中を頼んでお詫び言。部屋へ行つて泣きましたげな。

六郎　オヽ、ちつとさうであらう〳〵。彼れめと肌の合うた伊勢、片岡、熊井、鷲尾、軍治まつてより、休息のお暇で國々へ歸る。樂みに思ふ佐藤忠信は、母の病氣とあつて、出羽の國へ參る。貴殿と某は相手にならず、とこ打つて舞うて、舞から取入つて詫び言。まそつと懲らして、いつその事、坊主頭な奴にせうと、云うて見たらようござらう

〽内證評議も猶をかしく、御臺は笑ひの内よりも。

卿君　如何なる仕損じせし事ぞ。てもマア、をかしい執成しぢやわいの。

〽仰せあれば義經公。

義經　過つる參内の折から、禁庭にての我まゝ。左大臣朝方公への悪口、御家來を蹈み打擲、その場でキッと叱り付け、我が目通りへは叶はぬと申し付けたが、手綱ゆるすと人喰ふ馬、公卿でも武家でも堪らぬ、持ちあぐんだ鯱坊主。

〽まそつと懲らせと、御上意に、駿河の次郎圖に乘つて。

次郎　自體あの七つ道具が大きな邪魔。源氏には坊主の大工があるかと、お家の名折れ。この儀もキッと止めるやう、仰せ付けられ、然るべう存じまする。

六郎　イヤ、まだ七つ道具は、御普請の役にも立つが、難儀の物は、あの大長刀。柄も四尺、刃も四尺、八尺の物を振り廻すに依つて、そこらあたりの鼻が堪らぬ。太平の代には、役に立たぬ人間。兎角當分押込んで置くが、よろしうござります。

〽評議區々、御臺は笑止と。

卿君　アイヤ、其やうに謗るを聞いたら、また怒らうも知れぬぞや。とも〳〵お詫びをしようわいなう。

静　有り難うござります。

義經　性懲りもなき坊主め。キッと意見し、重ねて荒氣を出さぬやう。静も共に。

〽と仰せの下、駿河龜井を引連れて、一間へこそは入り給ふ。

〽静は嬉しく。

ト義經、龜井、駿河、奥へ入る。

静　サア、急いで武藏どのを、呼びまして下さんせい

な。

腰元 畏まりました。

ト花道へ入る

靜 御前のお詞添へたゆゑ、有り難う存じます。

卿君 アイヤ、そもじのお願ひゆゑぢやわいの。

〽互ひの辭儀も、戀の義理、悋氣嫉妬の角もなく、丸い頭の武藏坊、腰元婢女に引立てられ、怖い〳〵で七尺の軆も三尺八九寸、四尺に餘る大太刀を、引摺らしてぞ這ひ出づる。

ト向うより、腰元、辨慶を連れて、出で來り、舞臺の附け際へ來る。

〽腰元ども口々に。

腰元 さりとては又、片意地な、坊樣ではあるわいな。あれ御覽じませ、後じさりばかり致されますわいな。

ト辨慶へ思ひ入れある。

辨慶 ア、これサ〳〵、其やうに惡く云はぬものぢや。弱味へ付け込んで、酷い和郎達だ。人には報いがあるぞよ。

〽見廻す眼玉に。

腰元 アレ又、睨まれますわいなア。

辨慶 コレサ、細目だ〳〵。

〽目顏しかめて、身を縮む、靜は手を取り、御前へ連れ出で。

ト靜、辨慶の手を取り、好い所へ連れて來り

靜 もう堪忍して、おやりなされて下さりませ。

〽半分笑ひの執成しに、卿の君はしとやかに。

卿君 君は船なり臣は水、波立つ時は自ら、君の御船を覆す、家來の業とて云ひ譯ないぞ。重ねてキッと荒氣を止め、おとなしくなつてもよからうぞや。

〽子供意見に辨慶はたゞ。

辨慶 アイ〳〵。

〽揉み手して、謝り入りし風情なり、然る所へ遠見の役人、篠原藤内、慌たゞしく罷り出で。

藤内 申し上げまする。

卿君 何事ぢや。

藤内 今日、大津坂本の邊を巡見いたせしに、忍び〳〵に鎌倉武士、都へ入込むその中にも、土佐坊正尊、海野の太郎行永、熊野詣でと僞はり、我が君の討手に向ふと、専らの風聞。殊に只今鎌倉の大老、川越太郎重頼、我が君へ直談とて、お次に扣へ罷り在り、如何計らひ申しま

せうや。
〽尋ね申せば卿の君。
卿君　ハテ心得ぬ。その川越太郎は、自らとは故ある人。土佐坊海野が討手の様子、知らさん爲に來りしか。何にもせよ、縁あれば苦しうない、通し申せ。
藤内　ハツ
ト引返して入る。
卿君　その旨、君へも申し上げん。次手に武藏もお目見得な
〽座を立ち給へば、武藏坊。
辨慶　討手とは巧し〳〵。我れ等が世盛り、忝ない。土佐坊でも海野でも、たつた一呑み、ひツ摑んで、首引拔きて參らせん。さうだ。
〽駈け出すを、靜は押留め。
靜　ア、コレ、待たしやんせ……コレ、それがもう惡い。お上の御意も待たず、うとましの坊さんではあるわいの。
〽無理に引立て御臺と共に、義經公の在します、奥の殿へぞ急ぎ行く。
ト卿の君先に、靜、辨慶の手を引き、腰元付いて奥へ入る。
〽程なく入り來る武士は、鎌倉評定の役人、川越太郎重頼、大紋烏帽子、穩かに、年も五十路の分別盛り、廣廂に入り來れば、御主九郎判官、御裝束を改められ、靜々と立出で給ひ。
ト向うより重頼、烏帽子大紋にて出で來る。奥より義經、烏帽子狩衣にて出る。
義經　珍らしや重頼、兄頼朝にもお變りなく、百侯百司も恙なきや。
〽仰せにハツと頭を下げ。
重頼　先づは御健體を拜し、恐悦至極。右大將にも安全に渡らせられ、諸大名も日毎の出勤、賢慮安んじ下さりませう。
義經　して其方は、海野土佐坊、同役にて上りつらん。但しは外に用事ありや。
重頼　されば、頼朝公より君に御不審三ヶ條、一々お尋ね申し上げ、御返答に依つて、海野土佐坊と同役、恐れながら過言は御赦免下され、尋ぬる仔細、御返答承りたう存じ奉りまする。
義經　ムウ、この義經に不審あらば、兄頼朝に成り代り、

返言は赦す。尋ね見よ、申し開かん、淺慮無用。

重賴　ハッ、冥加に餘る仕合せ。とてもの事に、御座改め下されい。

〽席を立てば大將も、末座へ下がつて川越を、上座へこそは請せらるゝ、席改まつて川越太郎。如何に義經、平家の大敵を亡ぼし、勳功を立てながら、腰越より追ひ歸され、無念にあらん。但し、さもなかりしや。

〽ハッと義經、袖搔き合せ。

義經　親兄の禮を重んずれば、無念なとも存せず。

重賴　ヤア、その詞虛言々々。親兄の禮を重んずる者が、平家の首のうち、新中納言知盛、三位中將維盛、能登守敎經、この三人の首は似せ者。なぜ僞はつて渡したぞ……先づこの通りの御立腹、サア、御返答、承りたう存ずる。

義經　オヽ、その云ひ譯、いと易し。似せ首を以て誠とし、實を以て似せとするは、軍慮の奥儀、平家は廿四年の榮華亡び失せても、舊臣陪臣國々へ分散し、赤旗の餘類する時を待つ。一門の中にも、三位中將維盛は、小松の嫡子、平家の嫡流、殊に親重盛、仁を以て人を愛し求め、厚恩の者、その數知らず、維盛長らへあると知らば、殘黨再び取立つるは治定。また新中納言知盛、能登守敎經は古今獨步のえせ者、大將の器量ありと、招きに隨ひ馳せ集るもの多からん。さすれば天下穩かならず、いづれも入水討死と、世上の風聞幸ひに、一門殘らず討取りしと、似せ首を以て欺むきしは、一旦天下を靜謐させん、義經が計略、とあつて、捨て置かれぬ大敵ゆゑ、熊井、鷲尾、伊勢、片岡、屈強の輩を休息と僞はり、國々へ分け遣はし、忍び〳〵に討取る手筈。斯く都に安座すれども、心は今に戰場の苦しみ。兄賴朝は、鎌倉山の星月夜と、諸大名に侍かれ、月雪花の弄び。同じ清和の流れながら、晨には禁廷に膝を屈し、夕には御代長久の基を計る。いつか枕を安んぜん。アヽ、淺ましの我が身の上。

〽打消れ給ふにぞ、實に理りと重賴も、思ひながらも、役目の說破。

重賴　ムウ、さては、その御述懷あるゆゑに、御謀叛思し立てられしな。

義經　ヤア、穢らはしい。謀叛とは、何を以て何を目當、

重賴　君、鎌倉を亡ぼさんと、院宣を乞ひ請け給ひしに、初音の鼓を以て、裏皮は義經、表皮は賴朝、打てと云ふ

文政十一年七月　市村座所演

三世坂東三津五郎の川越　七世市川團十郎の義經

證あるとて、頂戴ありしとは、左大臣朝方公より急の知らせ。

義經　さては朝方が讒言せしな。その鼓の事は、某、兼ね兼ねの叡慮、下し置かるゝ場になつて、叛逆に寄せたる詞の品。これ朝方の計らひとは思へども、院中より下さるゝ恩物、受け納めずば綸命に背く。受けては兄頼朝へ孝心立たずと、望みに望みし一挺なれども、打てば鼓に讎ありと、アレあの如く床に飾りて眺めるばかり、神明佛陀も照覽あれ、打ちもせず、手にも觸れず。

重頼　ハ、ア、その御誓言の上は、何疑ひ奉らん。二つの御仰せ分けられ事明白、さりながら、情なきは今一つ、御簾中卿の君は、平大納言時忠の娘、平家に御縁組まれし心は如何に。

義經　ヤア、愚かな尋ね。兄頼朝の御臺政子は、北條が娘、時政氏は平家にあらずや。

重頼　イヤ、それは主君頼朝、伊豆の伊東に御座ある時、北條一家を味方に付けん、計略の御縁組み。

義經　ヤア、云ふな重頼。もと卿の君は汝が娘、平大納言へ貰はれ、育つたは時忠、肉身血を分けた親は其方、なぜそれ程の事、鎌倉にて云ひ譯せざるや。但し義經と縁あると思はれては、身の瑕瑾と思ひ、隱し包みしか、卑怯至極。

重頼　〽仰せを聞くより川越太郎、居たる所をどつかと居直り。

ヤアお情ない、義經公、淸和天皇の末流、九郎義經を聟に持つたは、恐らく日本の舅頭、五十に餘る川越が、名を惜しんで祿を貪らうや。いま肉縁と明かせば、此方の云ひ譯するも暗く、縁者の證據となるゆゑに、鎌倉では隱した包んだ。影になり日向になり、云ひくろむれども、御前には、讒者の舌は強くなり、智者と云はれし秩父さへ、力に及ばぬ平家と縁組み。今になつて、川越が娘と云うて、得心あらうか、卑怯未練と思し召す、御心根も面目なし。皺腹一つがお土産。

〽差添へ手早に抜き放す。

ト内より卿の君、出かゝり窺ひ居て、

卿君　ア、コレ、待つて下さりませ……その云ひ譯は、自らが。

〽刃物もぎ取り、我が咽喉へ、ぐつと突き立て、撞と伏す、これはと驚ろく義經公、靜も駈け出で抱き起し、薬よ水よとうろたへて、涙より外詞なし、川越は見向きもせず。

ト卿の君、ツカ〳〵と寄つて、重頼が白刃をもぎ取り咽喉へ突き立てる。この時、靜、出で來り、愕りして卿の君を抱き起し、介抱する。義經、重頼、思ひ入れ。

重頼　出かされた、時忠の娘。さうなうては、御兄弟御和睦の願ひも叶はず。疾に呼び出し、我が手にかけんと思ひしが、我れも最期を遂げさして、死後に貞女と云はせたく、わざと自滅と見かけしに、よう拔き身を奪ひ取つた。天晴れ健氣な女中、出かされた。

〽餘所に曇むるも心は淚、義經間近く立寄り給ひ、

義經　斯くあらんと思ひしゆゑ、わざと川越が血筋を顯にし、平家の緣を除かんと、思ひし甲斐もなき最期、淺ましき身の果、由なき契りを交せしよなア。

〽御目に餘る淚の色、靜御前も諸ともに、あなたこなたを思ひやり、泣き沈み給ふにぞ、手負ひは君を戀しげに、打眺め〳〵。

卿君　一つならず二つまで、大切な云ひ譯立て、殘る一つは平家と緣組み。その科、わたしがみんな爲す業。戀ひ慕ふ身をお見捨てなう、これまではいかいお情、世につれないと果敢ないは、明日と定めぬ人の命、短かうお別れ申します。靜どの、我が君樣を大切に、賴むわいなう。

〽賴むぞやいのとせき上げて、ワッとばかりに泣きけるが。

サア、川越どの、平大納言時忠が娘の首、頼朝どのへお目にかけ、御兄弟の御和睦、それが冥途へ好い土産。

〽首差延ばす心根を、思ひやる程、川越太郎、胸に滿ちくる淚をば、呑み込み〳〵側に立寄り。

重頼　似合はざる喩なれども、玄宗の后楊貴妃は、馬嵬が原にて、高力士に討たれ、天下の災ひを拂ふ。御兄弟確執とならば、萬民の嘆き、淸き最期も天下の爲め。出かされた、天晴れ〳〵。赤の他人の某が、介錯して進ぜう。

〽刀すらりと拔き放す。

卿君　その赤の他人のお手を借りるも、深き御緣。とてもの事にたつた一言。

重頼　アイヤ、親子の名乘りは、未來で致さう……さらば

卿君　おさらば。

〽さらば〳〵と討つ首よりも、體は先へ川越が、擬と座してぞ悄れ居る、心ぞ思ひやられたり、靜御前も義經も、歎きに沈み給ふ折から、耳を突貫く鉦太鼓、鯨波をどつとぞ上げにける。

ト　どんちやんになる。

大勢　エイ〳〵オウ。

ト鯨波を上げる、皆々思ひ入れ。

〽こは如何にと、静は仰天、君も驚ろき。

義經　さては海野土佐坊めが、攻めかけしと覺えたり。龜井、駿河は何所にあるぞ。

〽仰せの内より、追取り刀、兩人表へ駈け出るを。

ト奥より次郎、六郎、追取り刀にて、出で來り、花道へツカ〳〵と行きかける。

重頼　ヤレ、待たれよ……仰せ譯を聞くまではと、留め置きしを攻めかけたは、彼れ等も讒者と一味の族。とは云へ、兩人は鎌倉どのゝ名代、過ちあつては敵對するも同然、只速かに追ひ返すか、脅しの遠矢で防がれよ。さなきに、於ては、忽ちに君の仇。

兩人　心得ました。

〽表を指して駈り行く、義經公も川越が、詞至極と、猶も氣を付け。

義經　無分別の辨慶が、心元なし、武藏々々。

〽呼び給へば、腰元立出で。

ト奥より腰元、出て來り

腰元　武藏どのは、最前より、打悄れて居られましたが、

同　鬨の聲を聞くと其まゝに

同　ソレイナア、喜び勇んで

同　行かれましてござりますわいな。

義經　さてこそ事を仕出かさん……静、参つて急ぎ制せよ。矢先危ふし。コレ、鎧。

腰元　ハツ。

ト兩人して、二重舞臺の鎧を持つて來る。

〽その間に長押の長刀掻い込み、表へ走る女武者、堀川夜討に静が働らき、末世に云ふもこれならん。

ト此うち静、二重舞臺に駈けある、長刀を掻い込み、一散に花道へ入る。

〽如何と案じ給ふ所へ、龜井、駿河駈け戻り。

ト向うより次郎、六郎出て來り

六郎　我れ〳〵味方を制して、的矢を射させ、追ひ歸さんと存ぜし所、武藏坊の無法者、玄翁、掛矢を以て、敵を一々粉微塵。

次郎　大鋸にて人を引切り、殊に討手の太將、海野の太郎を、天邊から爪先まで、叩き碎きましてござりまする。

〽申し上ぐれば、大將呆れ、川越太郎はハッとばかりに。

重頼　エヽ、死なしたり、ひろいだり、討手の大將討取つては、御連枝和睦　願ひ叶はず、不便や娘も全く犬死、ハテ、是非もなき世の有様ぢやなア。

⌒悔み涙に義經公。

義經　古人は人を恨まず、傾むく運の爲す業と、思へば恨みもなし、悔もなし、武藏が武骨を幸ひに、都を開かば綸命も背かず、兄頼朝の怒りも休まる、これを思へば殘り多い、卿の君が不便の最期。

⌒殘り多やと御涙、昔夢の世の有爲轉變。

我れも浮世に捨てられて、驛路の鈴の音聞かん。龜井駿河、供せい。

⌒立出で給へば、川越太郎、悄れながら暫しと留め、床に飾りし鼓、携へ。

ト此うち重頼、二重舞臺に飾りある、鼓を取つて來り

重頼　君多年御懇望ありし重寶、殘し置かれては、取落されしと申すも殘念、院勅に打てと云ふ聲ありとは、皮より穢れし讒者の詞、打つて拙者が調べ替へ、再び御連枝和睦の取持ち、長路の旅の御物忘れ。

⌒心を罩めて差出す、義經御手に觸れ給ひ。

義經　親しき兄弟の間をば、打ち切らるゝも運の盡、結び返せよ、太郎重頼。

⌒駿河龜井を御供にて、すご／＼館を出で給ふ、御心根ぞ痛はしき、見送る人も鎌倉へ、是非なく／＼も立歸る、世の成行ぞ。

ト義經先に六郎、次郎付いて花道へ入る。重頼、殘り、思ひ入れあつて、切り首を抱へ、キツとなり、ドンチヤンにて、向うへ入る。矢張りドンチヤンにて、この道具ぶん廻す。

かけり三重。

本舞臺、三間の間、一面の練り塀。爰に土佐坊、鎧、大口、胸當、手甲、臑當の形、付け太刀にて、錣頭巾を冠り、黒馬に乗り、辨慶、誂らへの形、胸當、手甲、臑當、襷、鉢卷にて、七つ道具を背負ひ、長刀を搔い込み、土佐坊が尻馬に乗り、引付けて居る見得、矢張り、ドンチヤンにて、道具留まる。

⌒後は貝鐘、鬨の聲、震動するも理りや、武藏坊辨慶が、海野の太郎を討取つて、次手に土佐坊せしめんと、追ツ駈け廻つて正尊が、乗つたる馬の尻邊に乗り、ぼツ立て、蹴立て、白洲の庭、館も搖ぐ撞き鐘聲。

辨慶　ヤア〳〵、我が君や在する。討手に向ひし、海野は物にして、土佐坊めは生捕つたり。龜井駿河いづくにある。武藏が料理の喰ひ殘し、賞翫せよ。

〽呼はつても、館はひつそと靜まつて、答ふる人もなき有様、こは不思議々々と見廻すうち、坂東一の土佐坊が腰の上帶引切つて、馬より飛び下り大聲上げ。

ト土佐坊、辨慶を振り切り、馬より飛び下り

土佐　ヤレ來いやい。

トどん〳〵にて、向うより軍兵大勢、アリヤ〳〵にて、出で來り、直ぐに辨臺へ來る。

ハレ、討つて取れ。

ト軍兵皆々、バラ〳〵と辨慶を取卷く。

軍兵　動くな。

〽それ討取れと追取り卷く、武藏も馬より一足飛び、太刀も刀も鷲攫み、熊鷹摑みの首の骨、握ると切れる數萬力、雨か霰か人礫、透を見て、土佐坊が、武藏の弱腰しつかと抱く。

ト此うち辨慶、立廻りよろしく、軍兵皆々逃げて入る。土佐坊、辨慶にかゝる。立廻り。

辨慶　しや、小僧めが味をやる。腰の療治で、捻るか揉むか。

〽擦つておけつのぶり〳〵とさり、尻餅ついてもひるまぬ曲者、四尺に餘るだんびらもの、討つてかゝれば、ヒラリと外し、てうと切れば柄先で、しやんと受留め。

ハ、、、、出かす〳〵。腰を擦つたその代り、首筋捻つてくれべいか。

〽違矢と跳ねて、身を交し、大太刀蹴落し、素ッ首摑みグッと引寄せ、腰に引付け。

我が君様、御臺様……龜井やアい、駿河やアい。

〽引摺り廻り、呼び廻り、尋ね廻れど人々の、御行くへも知れざれば。

さては、この家を落ち給ふか。

〽こは何ゆゑと身の科も、思ひよらねば云ふ人も、答ふる人も梢の烏、泣いて詫びする土佐坊を、右と左へ持ち直し。

自體此奴が逃げ廻り、隙取つたゆゑ、お供に遲れた。おのれが首の飛ぶ方が、我が君さまの御行き方。

〽好い投げ算と引ッ摑み、直平頭を頭巾越し、すぽりと抜いて空へ投げ。

ト辨慶、土佐坊が首を引抜き、空へ抛り

こけたる方は、巽の間、菟原小原の方でもあるまい。

寛政十一年九月　市村座所演

初世澤村源之助の義經　初世市川男女藏の辨慶

〽元は牛若、丑の方、巳午の間、よしや吉野も氣遣ひ、
爰に戌亥や、酉ならで。
程はあるまい、追ッ付かん。
〽忠義と思ひせし事も、今になつては未申、思ひ違ひの
荒者か、荒砂蹴立てる響は、どう／＼、どろ／＼／＼、
踏みしめ／＼踏み直し、義經の後を寅の刻、風を起して
追うて行く。
トよろしく、チョン／＼。

幕

二幕目　伏見稻荷の場

役名――九郎判官義經。武藏坊辨慶。龜井六郎重淸。駿河次郎淸繁。佐藤四郎兵衛忠信。逸見の藤太。義經妾、靜御前。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて、朱の大鳥居、これに稻荷社と云ふ額を掛け、上に杉の大樹、下の方、玉垣、石燈籠、下の柱、松の立ち樹、好き所に臺附きの松の樹、すべて伏見稻荷社の體。ドンチヤンにて、幕明く。

ト奧にて

大勢　エイ／＼ワウ。

ト鬨の聲を上げる。

〽吹く風に、連れて聞ゆる鬨の聲、物凄まじき景色かな、
昨日は北闕の守護、今日は都を落人の、身となり給ふ九
郎義經、數多の武士も散り／＼になり、龜井六郎、駿河
の次郎、主從三人大和路へ、夜深に急ぐ旅の空。

ト好き時分、向うより、義經、紺羽織、胸當、手甲、脛當、毛沓にて、金の采を持ち出て來り、後より次郎、半切れ胸當、小手脛當の形、重れ草鞋にて出て來る。

〽後振り返れば堀川の、御所も一時の雲煙り、浮世は夢
の伏見道、稻荷の宮居に差かくれば、龜井の六郎、遲れ
ばせに馳せ付け。

ト本道より、六郎、半切れ小手、脛當の形、重れ草鞋にて、帛紗包みの鼓を持ち出で來り、舞臺へ來て

六郎　正しくあの鯨波は鎌倉勢、後を見するも殘念なり。お許しを蒙むりて、一合戰仕らん。

義經　いやとよ重淸、都にて舅川越太郎が云ひし、鎌倉ど

のゝ憤り、明白に云ひ開き、卿の君の敢へなき最期も、義經が身の云ひ譯なるに、早まつて辨慶が、海野の太郎を討つたゆゑ、止む事を得ず、都を開きしは、親兄の禮を思ふゆゑ。この後は猶以て、鎌倉勢に刃向はゞ、主從の緣もこれ限り。

〽仰せに二人も腕撫で擦り、拳を握つて扣ゆる折柄、義經の御後を、慕ひ焦れて靜御前、こけつ轉びつ來りしが、それと見るより縋り付き。

ト向うより靜御前、前幕の形にて出で來り

靜　エヽ、胴慾な我が君さま。

〽暫し涙に咽びしが。

武藏どのを制せよと、わたしを遣つたその後で、早御所をお立ちと聞き、二里三里遲れうとも、追ひ付くは女の念力、ようも〳〵惨たらしう、この靜を捨て置いて、二人の衆も聞えませぬ。わしも一緒に行くやうに、執成し云うて下さんせいなア。

〽歎けば共に義經も、情に弱る御心、見て取つて駿河の次郎。

次郎　主君にも道すがら、噂なきにはあらねども、行く道筋は敵の中、取分けて落ち行く先は、多武の峯の十字坊、女儀を同道なされては、寺中の思惑如何あらん。

〽透かし宥むる時しもあれ、武藏坊辨慶、息を切つて馳せ着き。

ト向うより辨慶、前幕の形にて、走り出て來り、舞臺へ來て

辨慶　土佐坊、海野を仕舞つて退けんと、都に殘り、思はず遲參仕る。

〽云ひも敢へずに御大將、扇を持つて丁々と、なぐり情も荒法師、目鼻も分かず叩き立て。

義經　坊主、びくとも動いて見よ。義經が手討ちにせん。

〽御怒りの顏色に、思ひがけなき武藏坊、はつと恐れ入りにける。

辨慶　この間大內にて、朋方どのに惡口せしとて御勘當、永々出仕せざりしが、靜さまの詫び言で、御免あつたは昨日今日。その勘當のぬくもりが、手の中にほの〴〵と、また冷め切らぬ其うちに、又もや御機嫌を損なうたさうなれど、辨慶が身に取つて、不調法せし覺え更になし。

義經　ヤア、覺えないとは云はれまい。鎌倉どのと義經が兄弟の不和を取結ばんと、川越が實義、卿の君が最期を無下にして、義經が討手に上りし、鎌倉勢をなぜ切つた。

これでも、汝が誤まりでないか。サア、返答せよ。ドヽ
〽はつたと睨んで宣へば、武藏は返す詞もなく、頭も上げず居たりしが。

辨慶　憚りながら、その事を、存ぜぬにてはあらねども、正しく御所の討手として、上つたる土佐坊、如何に御意が重いとて、主君を狙ふを、まじ／＼と、見て居る者のあるべきか。さある時は日本に、忠義の武士は絶え果てなん。誤まりならば幾重にも、お詫び言仕らん。如何に御家來なればとて、あんまり酷い叱りやう。これと云ふも我が君の、漂泊より起つた事。エヽ、口惜しい。

〽無念々々と拳を握り、ついに泣かぬ辨慶が、足らぬ泪をこぼせしは、忠義ゆゑとぞ知られける、靜も武藏が心を察し。

靜　あれ程に云うてぢや程に、どうぞマア、御料簡遊ばして遣はされませいなア。

〽和らかな詫び言の、その尾に付いて、龜井、駿河、御免々々と詫びければ、義經面を和らげ給ひ。

義經　昔が病氣で故郷へ歸りし、四郎兵衞忠信を、我が供に召連れなば、武藏が詫びは聞かねども、行く先が敵となつて、一人にても好き郎黨を、力にする時節なれば、この度は赦し置く。以後をキッと嗜なみ居らう。

〽仰せに辨慶、ハッとばかりに頭を下げ、坊主頭を撫で廻し。

辨慶　これに懲りよ武藏坊。アヽ、靜さま、重ね／＼の詫び言、いかいお世話でござりまする。

靜　マア、お詫びが濟んでめでたい。これからはこの靜が、君の御供をするやうに、執成し賴む武藏どの。

〽思ひ詰めたるその風情。

辨慶　いま詫び言賴んだとて、當り眼な返報、義理にも、アッと申したけれど、この辨慶その意を得ぬ。御家來さへ後先に、引分れた忍びの旅。落ち付く所は兼ねて聞く多武の峯、これ以て女は叶はず、夕に變る人心なれば十字坊の所存も計り難し。これより道を引違へ、山崎越えに津の國尼ケ崎、大物の浦より御船に召し、豐前の尾形をお賴みあらうも知れず、それなれば長の船路、猶以てお供はなるまい。フッツリと思ひ切つて、都にとゞまり、君の御左右を待ち給へ。

〽云ふにワッと泣き出し。

靜　ハアヽ。

ト泣き落し。

今までお側に居た時さへ、片時お目にかゝらねば、身も世もあられぬこの靜。いつ又逢はれる事ぢややら、行く先知れぬ長の旅、後に殘つて一日も、なんと待つて居られうぞ。如何なる憂き目に逢ふとても、ちつともいとはぬ、武藏どの、連れて行て下さんせいなア。

〽泪ながら我が君に、ひし〳〵と抱き付き、離れがたなき風情なり、靜が別れに判官も、目をしばたゝき在せしが。

義經　只今武藏が云ふ通り、行く先知らぬ旅なれば、都に殘り義經が、迎ひの船を相待つべし……ソレ。

〽龜井に持たせし錦の袋、それこなたへと取出し。

その品これへ。

ト龜井に持たせし鼓を取り

これこそ年來義經が、望みをかけし初音の鼓、この度法皇より下し給はり、我が手には入りながら、一手も打つ事なり難きに、兄頼朝を討てとある、院宣のこの鼓、打たねば違勅の科遁がれず、打つては正しく鎌倉どのに敵對も同然、二つの是非を分け兼ねたるこの鼓、身をも離さず持つたれども、また逢ふまでの印とも、思うて朝夕慰めよ。

ト鼓を靜に渡す。

〽渡し給へば手に取上げ、今まではさり共と、思ふ願ひの綱も切れ、鼓をひしと身に添へて、かつぱと伏して泣き居たる、龜井の六郎進み出で。

六郎　長詮議に時移り、土佐坊が殘黨ばら、討つて來なば御大事。イザ。

〽重滴に諫められ、涙と共に立ち給へば、靜は其まゝ我が君の、御袖に縋り付き。

靜　自ら一人振り捨てられ、焦れ死に死なんより、淵川へなと身を投げて、死ぬる〳〵、死ぬるわいなう。

〽泣き叫べば、人々も持て餘し。

次郎　過ちあつては我が君の、御名の瑕瑾。

〽なんと詮方駿河の次郎、立寄つて會釋もなく、取つて引退け。

幸ひの縛り繩。

〽鼓の調べ引解き、靜の小腕手ばしこく、過ちさせぬ小手縛り、道の枯木に鼓と共に、がんじ絡みに括し付け。

ト鼓の調べを解き、これにて靜を括り、鼓と共に臺付きの松の木へ繋ぎ

サア、邪魔は拂うたり。イザ。

三人　お立ちあられませう。

〽いざさせ給へと諸ともに、道を早めて急ぎ行く。

ト義經先に龜井、駿河、辨慶付いて、鳥居の内へ入る。
靜殘り

〽後に靜は身を跪き、我が君の後影、見ては泣き、泣いては見。

靜　エ、、胴慾な駿河どの、情にてかけられた、縛り繩が恨めしい。引けば悲しやお形見の、鼓が損ねう、なんとせう。解いて死なせて下されいなう。

〽聲をばかりに泣き叫ぶは、目も當てられぬ次第なり、落ち行く義經逃がさじと、土佐が郎黨逸見の藤太、數多の雜兵、銘々松明、腰提灯、道を照らして追ひ駈けしが、枯木の蔭に女の泣き聲、何者ならんと立寄つて。

ト向うより、藤太、半切れ、小手、脛當の形、大小、襷、鉢卷、重れ草鞋にて出て來る。後より軍兵四人、弓張り提灯、十手を持ち、出て來り、舞臺へ來て、靜な見付け

藤太　ヤア、此奴こそ音に聞く、義經が妾の靜と云ふ白拍子。繩までかけて宛行うたは、巧し／＼。この鼓も義經重寶せし、初音と云ふ鼓ならん。この道筋に判官も、隱がれ居るに疑ひなし。福德の三年目、エ、、忝ない。

〽藤太手早く繩切り解き、鼓を奪ひ取り、引立て行かんとする所へ、四郎兵衛忠信、君の御跡慕ひ來て、斯くと見るより飛びかゝり、藤太が肩骨ひッ摑み、初音の鼓を奪ひ返し、宙に引ッ提げ二三間、取つて投げ退け、靜を圍ひ、ふんぢかつて立つたるは、心地よくこそ見えにけれ。

ト向うより、忠信、半切れ、胸當、小手、脛當の形。重れ草鞋にて出で來り、ツカ／＼と寄つて、藤太を取つて見事に投げ退け、靜を圍ひ、見得。

靜　ヤア、忠信どの、好い所へ、ようマア來て下さんしたなア。

ト喜ぶ。藤太、起上がり

藤太　さては忠信、好き敵。搦め取つて高名せん。者ども、ソリヤ。

軍兵　やらぬワ

ト取卷く。

忠信　ヤア、殊勝らしい、うんざいめら。ならば、手柄に搦めて見よ。

〽云はせも置かず双方より、捕つたとかゝるを引外し、首筋摑んで、えいやつと、右と左へもんどり打たせ、隙間もなく後より、大勢抜きつれ切つてかゝれば、心得たりと抜き合せ、茅花の穗先と閃めく刀を、飛鳥の如く飛び越え跳ね越え駈け廻り、肩身肩骨薙ぎ廻れば、わつとばかりに逃げ退きたり。

ト軍兵皆々かゝる。忠信、立廻り、トゞ軍兵下座へ逃げて入る。遅れて逃げる逸見の藤太が首摑んで、撞と投げ、足下に踏まへ

忠信　汝等が分際で、この鼓を取らんとは、胴より厚き面の皮、打破つてくれう。

〽ぽん／＼と踏みのめせば、ギヤツとばかりを最期にて、其まゝ息は絶え果てたり。

ト忠信、藤太を踏み殺す。

〽鳥居の元の木蔭より、義經主從駈け出でゝ。

ト鳥居の內より、義經、次郎、六郎、辨慶出て

義經　珍らしや忠信。

〽仰せを聞くよりハツとばかり、こは存じよらぬ見參と飛び退つて手を突けば、龜井、駿河、武藏坊、互ひに無事を語り合ふ。忠信重ねて頭を下げ。

忠信　先づは變らぬ君の尊顏、拜し申して拙者も安堵。某も母が病氣見舞ひの爲、お暇賜はり、生國出羽に罷り下り、長々の介抱、程なく母も本腹いたし、罷り上らんと存ずるうち、君腰越より追ひ歸され、鎌倉どの御兄弟、御仲不和と承るより、取る物も取り敢へず、都へ歸る道すがら、土佐坊君の討手と聞き、夜を日についで堀川の御所へ今晩駈け付けしに、はや都を開かせ給ふと、聞くよりこれまで御後慕ひ、思ひがけなき靜さまの、御難儀を救ひしは、我が存念の屆きしところ。

〽申上れば、御喜悦あり。

義經　ムウ、我れも當社へ參詣して、今の働らき見屆けたり。鎌倉武士に刃向ふなと、堅く申しつけたれど、土佐坊討たれし上からは、その家來を忠信が、討つたるとて構ひなし。今に始めぬ汝が手柄、天晴れ／＼。取分けて兄繼信も、我が矢面に立つて討死したるは、稀代の忠臣その弟の忠信なれば、我が腹心を分けしも同然、今より我が姓名を讓り、淸和天皇の後胤、源の九郎義經と名乘り、まさかの時は判官に、成り替つて敵を欺むき、後代に名を止めよ。即ち當座の褒美を得させん。

〽家來に持たせし、御着長、忠信にたびければ、ハツと

文政十一年七月　市村座所演

二世坂東簑助の忠信　岩井紫若の靜御前

ばかりに押頂き、頭を土に摺り付け／＼。

ト駿河に持たせし鎧と、忠信の前へ直す。

忠信　土佐坊づれの家來を、追ひ散らせしとあつて、御着長を下し賜はるその上に、御姓名まで賜はるは、生々世世の面目、武士の冥加に叶ひし仕合せ、有り難う存じ奉りまする。

〽天を拜し地を拜し、喜び涙に暮れければ、判官重ねて。

義經　我れはこれより、九州へ立越え、豐前の尾形に心を寄せん。汝は靜を同道して、都に止まり、萬事よろしく計らうてよからう……ナニ靜、便りもあらば音づれん。さらば。

〽さらば／＼と立ち給へば、今が誠の別れかと、立寄る靜を、武藏坊、龜井、駿河立ち隔て、押隔つれば忠信も我が君に暇乞ひ、互ひに無事をうなづき合ひ、嘆く靜を押退けて、心強くも主從四人、山崎越えに尼ケ崎、大物指して出で給ふ。

ト義經先に、六郎、次郎、辨慶下座へ入る。忠信、靜殘つて後を見送り、思ひ入れ。

〽これなら暫し待つてたべと、行くを制し留むれば、御行方を打守り。

靜　御顏を見るやうで、戀しいわいなう。

ト泣き落す。

〽戀しいわいのと地に平伏し、正體もなく泣きければ。

忠信　オヽ、道理々々、さりながら、別れも暫し、この鼓、君の筐とあるからは、君と思うて肌身に添へ、憂さをお晴らしなされませ。

〽下し賜はる御着長、ゆらりと肩にひツかたげ、宥め宥めて手を取れば、靜は泣く／＼筐の鼓、肌身に添へ、盡きぬ名殘に噎せ返り、涙と共に道筋を、辿り／＼て。

ト忠信は鎧、靜は鼓を持つて、兩人花道より入る。

幕

三幕目

渡海屋の場
大物浦の場

役名——九郎判官義經。武藏坊辨慶　龜井六郎重淸。片岡八郎淸繁。娘お安實ハ若君。銀平女房。お柳實ハ典侍の局。渡海屋銀平實ハ新中納言知盛。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。眞中に暖簾口、上の方、赤壁、これにいろ／＼の帳面。この上、誂らへの神棚、神酒德利、燈明、下の方、戸棚、この所に菰包みの荷物を重ね、ズッと上手に、九尺の障子屋體、いつもの所に門口。爰におため、おとく、前垂れ掛けにて、俎板に向ひ、大根を切つて居る。上にお安、寢て居る。布團かけあり、門口の側に灘助、梶六、太郎藏、五郎太、船頭の拵らへにて、右菰包みの荷物を舞臺へ下ろして居る。すべて船問屋の體。てんつゝにて、幕明く。

とく　マア／＼、皆さん一服

ため　のましやんせいなア。

灘助　イヤ、とても事に、この荷物を積込んでしまふべい。

梶六　それ／＼、さうして緩くりしてのまう。

太郎　おためさんや、おとくどんの顏を見ながら

五郎　煙草にして、小當りもよからう。

兩人　又そんな、てんがうばつかり。

灘助　てんがうさまは六月だ。

梶六　囃すもお好き。

太郎　おきやアがれ。

ト此うち四人、荷を門口に運び

灘助　さうして、もう荷はこれきりかよ。

とく　サア、西國へ行く分は、それぎりでござんすが

ため　旦那さんの仰しやるには、まだ牛窓へ行く大事の荷物が

とく　中の間にござんすわいなア。

太郎　そんなら、もう一返り來ずばなるまい。

灘助　さうサ、おいらは殘つて、その荷物を調べるうち

梶六　二人は、船場の遣繰りをするが好い。

五郎　何にしろ、マア、此奴を積込んでしまふべい。

太郎　それがいゝ。サア、やらかせ。

ト灘助、梶六手傳ひ、太郎藏、五郎太、荷を擔ぎ上げ

灘助　そんなら、早く賴むぜ。

梶六　ドレ、奧の荷を調べよう。

ト始終此うちてんつゝ、活け殺しにて、灘助、梶六、暖簾口へ、太郎藏、五郎太、荷を擔ぎ向うへ、双方入る。兩人の女、料理拵らへして居て

とく　成る程、臍の大きな衆ぢやぞいなア。

ため　その大鼾にも構はず、お安さんが爰に好う寐入つて
　とく　サア、風でも引かせ申してはと、わたしが、蒲團を
　かけるも知らず
ため　後生樂のものぢやぞいなア。
　ト云ひながら介抱して居る、合ひ方になり、障子の内より、辨慶、やつし山伏にて、風呂敷包みを背負ひ、出て來る。靜かに雨車の音。
辨慶　イカサマ、今日は日和だと思つたら、又ぼろ付いて來たさうだ。
　ト女中見て
とく　オヽ、これはお客僧さま。さぞマア、御退屈でござりませう。
ため　さうして、おッ付け御膳を出しますのに、どこへお出でなされまする。
辨慶　イヤモウ、川留めに逢つた旅人のやうだと、好く云ひますが、西國への日和待ちで、連れ共もケロリカン。わしもあんまりホッとした。内に只居やうより、西町へ行つて、買ひ物でもして來ようと思つて。
とく　左樣でござりますか。併し、出船の雲が見えるかして、荷物を船へ積みましたれば、晴れ申すと、直ぐに出船。お手間を取らずに、早う戻つて。
辨慶　ムウ、さういふ事なら歸り途、船場へ廻つて來ようわいの。
ため　それでもあなた折角と、外のお客へは鳥貝鱠なれどお出家さまの事ぢやに依つて、わざ／＼と精進料理、ちつと待つてお上がりなされて。
辨慶　イヤ／＼、愚僧は山伏なれば、精進には及ばぬ。鳥貝、鱠の方がよからう。
とく　でも、山伏樣なら、今日は二十八日。
ため　不動さまの御緣日。
辨慶　オヽ、ほんに、それ／＼、大事の精進であつたわいの。マア、何にしろ、行つて來ませう。
　ト云ひながら、お安を跨ぎにかゝる。ドロ／＼。
アイタヽヽヽヽ。
　ト足を擦つて、思ひ入れ。
兩人　どうなされました／＼。
辨慶　イヤ、お娘が爰に寐て居たを、ツイ跨ぎ越したれば、俄かに足がすくばつて。
兩人　エ。
　ト兩人、顏見合せて、思ひ入れッ

辨慶　アヽ、聞えた〳〵。なんぼ小さうても女の子、虫が知らして、しやき張つたものと見えたわえ。
兩人　何をマア、わつけもない。
三人　ハヽヽヽヽ。
辨慶　ドレ、大降りのないうち
兩人　早うお歸りなされませ。
辨慶　ドリヤ、行つて來ようか。
ト唄になり、山下駄を穿き、はつてう笠を冠つて向うへ入る。下女兩人、見送り、思ひ入れあつて
とく　ほんに、此やうな所に、お寐ぢやによつて、今のやうな。
ため　サア〳〵、ちやつとお目を覺ましなされませ〳〵。
ト兩人抱き起す。お安目を覺まし
やす　ほんに、二人がお料理するを見て居ながら、ツイ眠たうなつて。
とく　サア〳〵、お目が覺めたなら、今朝お習ひの淸書を母樣のお側で
ため　好うお書きなされて、旦那さんのお歸りに、お目にかけたら、それこそ又
兩人　御褒美でござりませう。

やす　そんなら、いつものやうに、母樣に字配りしてもらはうか。
兩人　サア、お出でなされませ。
ト兩人、お安を連れ、合ひ方にて奧へ入る。
〽かゝる所へ誰れとも知らぬ、鎌倉武士、家來引具し入り來り。
トこの淨瑠璃のうち、向うより、相模五郎、旅形の侍ひにて、供侍ひ二三人、付添ひ出て、直ぐに門口へ來り
五郎　亭主に逢はう。いづれに居る。
家來　亭主、出ませい〳〵。
ト喚く。奧より、おとく、おため、走り出て來ながら
兩人　ハイ〳〵、何の御用でござりまする。
五郎　其方どもは、なんだ。
兩人　この家の召仕ひでござりまする。
五郎　ヤア、慮外な奴。下女端下の存じた事でない。亭主を出せ〳〵。
兩人　イエ、旦那は他行、私しどもに何なりと。
五郎　ヤア、又しても無禮な奴。大切な御用、他行とあらば呼びにやれ。遲いと曲事だぞ、早くしろ。

家來　キリ／＼致せ。
ヘ權威にほこり罵しるにぞ、女房は驚ろき、奥より立出で。
トこの淨瑠璃にて、奥より典侍の局、好みの女房の拵らへにて、出て來り
典侍　これは／＼、どなた樣かは存じませぬが、女子どもが、端ないは、お免し下さりませ。併し、二人が申します通り、主は問屋廻りに出ましたで、宿にではござりませぬが、私しで濟む事なら、何の御用でござりまするな。
五郎　して、其方は何者だ。
典侍　主銀平が女房でござりまする。
五郎　女房とあらば、云ひ聞かさん。身共は北條が家來、相模五郎と云ふ者。この度義經、尾形を頼み、九州へ逃げ下るとの風聞に依つて、鎌倉どのゝ仰せを請け、主人時政の名代として、討手に只今下れども、打續きし雨風にて、船一艘も調はず、幸ひこの家に借り置きたる船、日和次第に出船と聞いたるゆゑ、その船身共が借り受けて、艪を押切つて下らん爲、罷り越した。旅人あらばぼいまくり、座敷を明けて休息させい。サヽ、早く致せ早く致せ。
ヘ權威を見せてのしあがれば、女房はハッと返答に、當惑しながら側へ寄り。
典侍　それはマア／＼、御大切な御用に船が無うて、さぞ御難儀。此方のお客も二三日以前から、日和待ちして御逗留、今更船を斷わりまして、あなたの御用にも立て難うござります。殊に先樣もお武家方なりや、御同船とも申されますまい。爰は御料簡遊ばして、今夜の所を、お待ちなされましたら、其うちには日和も直り、何艘も何艘も、入船の中を調べて。
五郎　ヤイ／＼默れ、默り居らう。一日でも逗留がなれば、この家へは云ひ付けぬ。所の守護へ權付けに云ひ付けるワ。奥に居る、その侍ひめが怖うて、おのれらが口から云ひ惜いなら、身共が逢つて、直に云うてくれん。
典侍　ア、モシ、お待ち遊ばしませ。お急きなさるは御尤もなれど、あなたを奥へやりまして、直に御相談させましては、船宿の難儀、押付け主も歸りませう。マア、それまでお待ちなされて。
五郎　ヤア、何をそれまで便々と。こりや聞えた。なんだな。奥の武士に逢はさぬは、察するところ平家の餘類か。

但し義經の由縁の者、家來ども、ソレ、拔かるな。
家來 ハア。
五郎 奧へ蹈ん込み、吟味せん。
ト立ちかへるを、局、引留め
典侍 ア、モシ、それではマア、主にお逢ひなされた上で
五郎 何を女郎め。最早誰れに逢はうより、直に相對。そこ退け。
〽止むる女房を跳ね退け、突き退け、また取付くを荒氣なく。
ト五郎、侍ひ、奧へ行かうとするを、局、いろ／＼支へる。下女兩人留めるを、供の侍ひ、引捕へる。この立廻りのうち、雨車になり、向うより銀平、好みの拵らへ、傘をさして出て來る。
〽蹈み倒し蹴倒すを、戻りかゝつて見る、走り入つて彼の侍ひが、腕を取つて。
ト此うち銀平、直ぐに舞臺へ來り、この體を見るより其まゝ內へ入り、女房を圍ひ、五郎が手をグッと捻ぢ上げる。
五郎 アイタ、、、、、。
銀平 イヤ、眞平御免下さりませ。私しは卽ちこの家の亭主、渡海屋の銀平。見ますれば、女どもが、何か定めし不調法、御立腹のその樣子、私しめに一通り、仰しやつて下さりませ。
ト五郎を突き放す。五郎、思ひ入れ。
五郎 ムウ、すりやおのれが、この家の亭主か。亭主なら云うて聞かさう。身は北條の家來なるが、義經の討手を蒙むり、奧の武士が借りた、船、此方へ借らん爲、奧へ蹈ん込み、身が直に、その武士に逢はうと云へば、われの女房が遮つて、止むるゆゑ、今の仕儀だワ。
銀平 ヘイ、憚りながら、そりやあなたが御無理のやうに存ぜられます。なぜと仰しやりませ。人の借りて置いた船を、無理に借りようと仰しやりますは、マア御無理でやアござりませぬか。その上に又、宿借りの座敷へ蹈ん込まうとなさるゆゑ、女どもがお留め申すを、蹈んだり蹴たりなされますは、ちとお侍ひ樣には、似合はぬやうに存じます。一夜でも宿を致しますれば商ひ、旦那、その座敷へ蹈ん込ませましては、どうもお客人へ私しが立ちませぬ。爰の所を御料簡なされまして、お歸りなされて下さりませ。
五郎 イヤ、うぬ、素町人めが。鎌倉武士に向つて、歸れ

とは推參千萬。是非とも奥へ踏ん込んで……うぬ、留立てせば手は見せぬぞ。

ト刀へ手を掛け、思ひ入れ。

銀平　ア、モシ、それはお前樣、御短氣でござりませう。私しも船問屋ではござれ、聞きはづつて居りまする。惣別、刀脇差では、人を切るものぢやアないさうにござりまする。お侍ひ樣方の二腰は、身の要害、人の粗忽、狼藉を防ぐ爲の道具とやら、さるに依つて、武士の武の字は、戈を止めるとやら、書きますさうにござりますぞえ。

五郎　ヤア、小穢なる事を吐かしたな。その頬桁を、切り下げくれん。

〽拔打ちに切りつくるを引ッ外し、相模が利腕むんづと取り。

銀平　こりやモウ、料簡がならぬわえ。町人の家は武士の城廓、敷居の内へ泥臑を踏み込むさへあるに、この刀で、ダヽ誰れを切る氣だ。その上に又、平家の餘類の、イヤ義經の由緣なんのと、旅人を脅すのか。よし又判官どのにもせよ、大物に隱れない、眞綱の銀平が、お匿まひ申したらなんとする。サア、眞綱が扣へた。侍ひめ、ならばピクとも動いて見い、素頭微塵にはしらかし、命を取楫、この世の出船。キリ〳〵爰を、なくなるまいか。

〽刀もぎ取り、宙に引提げ持つて出で、門の敷居に、もんどり打たせば、死入るばかりの痛みを怺へ、顏をしかめて起上がり。

五郎　ヤイ、亭主め、侍ひを捕へて、よく酷い目に合せたな。この返報には、うぬが首を。

ト思ひ入れ。

銀平　どうしたと。

ト立ちかゝる。

五郎　家來ども。サア、來い〳〵。

〽暴風に遭うたる小船の如く、尻に帆かけて主從は　後をも見ずして逃げ失せける。

銀平　ハヽヽヽ。口程にもない侍ひめだ。

典侍　ほんに、好い所へ戻つて、好い態であつたわいな。併し又、どうならうかと、ひや〳〵思うて居りましたわいな。

銀平　なにサ〳〵、とは云ふものゝ、今のもやくやを、定めし奥のお客人が。

典侍　サア、大方お聞きなされたであらうわいな。

ト銀平、貢盆取寄せ、貢のみ、局、下女兩人捨ぜりふ。
ヘ女夫がひそめく話し聲、洩れ聞えてや、一間の障子押開き、義經公、旅の辛苦に、窶れ果てたる御顔ばせ、駿河、龜井も後に從ひ立出づる。
トこの淨瑠璃のうち、障子屋體より、義經先に次郎、六郎付添ひ出で來る。銀平見て
銀平　それ〳〵、お客樣が〳〵。
典侍　これはマア〳〵、端近う。
ト兩人云ひながら、此方へ來て、膝を直し、皆々思ひ入れ。
義經　隱すより顯るゝはなしと、兄頼朝の不興を受け、世を忍ぶ我が身の上、尾形を頼み下らんと、この所に逗留せしに、其方よくも計り知り、時政よりの家來を退け、今の難儀を救ひしは、町人に似合はぬ働らき、我れ一の谷を攻めし時、鷲の尾と云へる木樵の童に、山道の案内させしに、山家には剛なる者。武士となして召使ひしが、それに優つた汝が働らき、天晴れ、世が世の義經なら、武士に引上げ、召使はんに、斯く漂ひの身となつて、あるに甲斐なき事どもぢやなア。
ヘ武勇烈しき大將の、身を悔みたる御詞、駿河、龜井も諸ともに、無念の拳を握りける。
銀平　これは〳〵、有り難いそのお詞。イヤモウ、私しもこの界隈では、鎮綱の銀平と申して、少しばかりは人に知られて居りますれど、高が町人、只今の腕立ても、畢竟申さば鎌將軍、些細な事がお目にとまつて、我れ〳〵づれに御褒美の御意。冥加至極もござりませぬ。殊に君の御顔を見覺え奉るは、先頃八島へ赴むき給ふ時、渡邊福島より、兵船の役にさゝれ、私しが手船も御用に達し、一度ならずこの度も、不思議にお宿仕りまするも、恐れながら深き御緣でござりませう。さるによつて、お爲を存じ申し上げたきは、いま歸りし北條が家來、取つて返さば御大事。一時も早う御乘船が、よろしからうと存じまする。
ヘ云ひもあへぬに、駿河の次郎。
次郎　サア、我れ〳〵もその思案なれど、この天氣にては、御出船如何あらんと、その儀を。
銀平　ア、イヤ、そこに拔かりがござりませうか。弓矢打ち物は、お前樣方の御商賣。船と日和を見る事は、私しどもの又商賣。昨日今日は巽、夜中になれば雨も上がり、明け方には朝嵐に變つて、御出船にはひんぬき上々の日

和、數年の功で、そこらはキッと見極めて置きましたて。
〽見透かすやうに云ひけるは、その道々と知られける。
次郎　オヽ、銀平出かしたり。其方慥かに申す上は、氣遣ひあるまい。雨の晴れ間に片時も早く。
六郎　主君の御供仕らん。
義經　ナニサマ、船中の事は、銀平よろしく計らひ得させよ。
銀平　ハツ、只今も申す通り、幼少より船の事はよく、鍛練仕れば、御安堵あつて御乘船。御見送りの爲、私しも手船にて、須磨明石のあたりまで、御供いたすでござりませう。元船の在る所は、五丁餘り沖の方。船は即ち日吉丸、思ひ立つ日が吉日、吉祥、雨具の用意仕り、後より追ツ着き奉りませう……女房はあなた方に、わざとお口を祝はせ申して、女子どもは濱邊まで御案內申せ。
兩人　ハイ〳〵、畏まりました。
銀平　左様なら、御免下さりませ。
〽挨拶そこ〳〵銀平は、納戸の內へ入りければ。
ト銀平、奥へ入る。下女兩人、此うち銚子、杯、鉢肴など持つてくる。局よろしく
典侍　サア、何もなし、お粗末にはござりまするが、船路の旅を恙なう、おめで鯛の挘り肴で、わざとお祝ひ遊ばされませ。
次郎　これは〳〵、要らぬ事を、銀平の心配。
六郎　殊に女房の心遣ひ、我が君
兩人　お取上げ遊ばしませい。
義經　主が厚き志し、門出を祝うて一獻酌まん。
ト杯を取上げる。
女房　サヽ、お一つ召上がりませう。
ト注ぐを呑んで
義經　サヽ、其方達も、一つ〳〵。
ト杯を廻す。
兩人　然らば頂戴仕りませう。
ト杯を頂く。これより酒事、捨ぜりふにて、ちよつとあつて
義經　最早船場へ赴むかん。
次郎　それがよろしうござりませう。イザ、御案內を。
典侍　ハイ〳〵。ソレ、女子ども。
兩人　畏まりました。
ト雨車、局、思ひ入れあつて
典侍　小雨ながらも、大切なお身の上、暫しのうちもお姿

を。

〽隱れ蓑笠、憚りながら。

　ト蓑笠を取出し、義經に着せる。

義經　オヽ、過分々々。

〽龜井駿河も諸ともに、蓑笠取つて着せ參らせ、二人も手早く紐ら締め、いざさせ給へと主從三人、女が案内に打連れて、船場へこそは。

　トこの淨瑠璃、雨車にて、おとく、おため、傘をさし先に立ち、義經、次郎、六郎、向うへ入る。局、見送るうち、奧より灘助、梶六、薦包みや長持など持ち出て來り

灘助　おかみ樣、親方が云ひ付けた、牛窓へ行く中の間の荷物。

梶六　これで、殘りはごんせぬかな。

典侍　オヽ、こりや、二人の衆。そりや大切の荷物、麁相のないやう、まだ行李もあるであらう。

灘助　オツト、あれも一緒か。ドレ、もう一遍。

梶六　此奴らも、來さうなものだ。

　ト雨車、風の音にて、兩人、奧へ入る。向うより太郎藏、五郎太走り出て、門口へ來り

太郎　牛窓の荷はまだかな。

五郎　艀舟の支度は、すつぱりだ。

典侍　オヽ、いま噂して居ましたわいな。

　ト此うち灘助、梶六、奧より、薦包みの行李を持ち出で

灘助　サア、これ切りだ……丁度いゝ、ちよつとそこまで。

兩人　合點だ。

　ト四人、長持を門口へ運び

灘助　サア、荷はもうこれでよし。

梶六　爰でこそ、一服のんで、と云つたところが

太郎　あの女中衆は、どこへ行きました。

典侍　今お客を船場まで

灘助　送りにか。

五郎　ホイ、しけた。

典侍　イヤ、しけと云へば、此方に知れぬ事ぢやが、此やうな日和でも、船を出さるゝものかいな。

灘助　さればサ。わしらも、この商賣をして居るが、なかなかこの天氣ぢやア、また二三日は上がるまいと思ふのに。

梶六　爰の親方、銀平どのゝ云ふには、この日和は、夜中

にやアぐわらりと上がつて、朝東風に變つた所で、直ぐに出船。

太郎　その時急に、荷を積むの、船拵らへのと云つちやア手遅れ。

五郎　なんでも、今のうち荷も積み込んで、船も支度をして置けとの事。

灘助　それも、これまで云はしやる通り

梶六　逢ひがないゆゑ、此やうに

皆々　支度をするのだ。

典侍　さうかいな。そんなら、大方銀平どのが、キッと日和を見極めた所が

灘助　あればこそ、云ひ付ける通り

梶六　手配り用意も

皆々　充分でござります。

典侍　そんなら、隨分氣を付けて。

四人　サア、運んでしまふべい。

〽おつと合點と船子ども、てんでに荷物を艀舟まで、行く道すがら。

ト四人よろしく、右の荷を擔ぎ、向うへ入る。これに構はず

〽門送りして女子ども、息急き内へ入相時。

ト此うち向うより、おとく、おため戻つて來る。時の鐘、直ぐに内へ入る。

兩人　ハイ、お見送り申しました。

典侍　ヤレ〳〵、マア、お客方も御機嫌好う、立たせ申されば、二人は奥の片付けもの

兩人　畏まりました。

ト時の鐘、どらにて兩人奥へ入る。局、思ひ入れあつて

典侍　兎や斯うするうちもう日暮れ。ドレ、次手にお燈明を。

〽火打鳴らして油さし、神棚の上に灯を照らせば。

ト燧箱を出し神棚より、燈へ火を灯す。この時奥よりお安、清書双紙を持ち出て來り。

やす　母様、清書をしましたわいなア。

典侍　オヽ、お安か。ようしやつた。父さんに見せませうが、今夜は侍ひ衆を元船まで送つてなれば、其方も寐るまで爰に居や。ほんに、こちの人とした事が、千里萬里も行くやうに身拵らへ。もう日も暮れた。用意が好くば行かしやんせぬか。

〽呼べど、くつとも應へなし。
返事せぬは、もし晝の草臥れで、轉寐ではあるまいか。
コレ、銀平どの〳〵。
詞〽抑々これは、桓武天皇九代の後胤、平の知盛の幽靈なり。
ト鳴り物入り、謠切れると後ヨイヤイ、上手の障子引拔くと、內に銀平、本行知盛の拵らへ、長刀を構へ、床几にかゝり居て
銀平　渡海屋銀平とは假の名、新中納言知盛と、實名を顯はす上は。
〽恐れありと娘の手を取り、上座に移し奉り。
ト大小の合ひ方、浪の音。
君は正しく、安德君にて渡らせ給へど、源氏に世を狹められ、所詮勝つべき軍ならねば、知盛諸とも海底に沈みしと欺むき、密かに供奉なし、この年月、お乳の人を妻と云ひ、御介添の二人の侍從を下女となし、勿體なくも我が子と呼び奉り、時節を待ちし甲斐あつて、九郎判官義經を、今宵のうちに討取つて、年來の本望達せん事。アラ喜ばしや、嬉しやなア、典侍の局も、喜ばれよ。
〽勇める顏色、威あつて猛く、平家の大將知盛と、その骨柄に顯はれし。
典侍　さては常々のお願ひ、今宵と思し召し立ち給ふた。ハヽア、勇ましや、さりながら、九郎は鋭き男子とやら。仕損じばし給ふな。
知盛　なにサ〳〵、そのゆゑにこそ手段を巡らし、最前北條が家來、相模五郎と云はせしも、我が手の者、討手と僞はり狼藉させ、我れ義經に荷擔人の體を見せ、今宵の難風を日和と僞はり、船中にて討取る計略なれども、知盛こそ生き殘つて、義經を討つたるなど〻、忽ちに沙汰あつては、末々君を御養育の妨げともなり、また重ねて賴朝に仇も報はれず、さるによつて某、人數を手配りして、艀舟にて後よりぼッ付き、義經と海上にて戰はゞ、西國にて亡びたる、平家の惡靈知盛が幽靈なりと、雨風を幸ひに、彼れらが眼を眩まさん僞、我が出立ちも眼前に、怪しく見する白糸縅、白柄の長刀、追ッ取りのべ、九郎が首取り立歸らんと、その軍用の品取まとめ、彼の牛窓へと積みたる荷物は、皆これかゝる手段の物の具。
典侍　斯ばかり深き御計らひ。必定勝利に疑ひなし。
〽局が喜び、知盛思惟し。
知盛　勝負の場所は、この大物、何條勝利とは思へども、も

し自然この沖に當つて、提灯松明一度に消えたなば、我れ討死の合ひ圖と心得、君にもお覺悟させ參らせ、御亡骸見苦しからぬやうナ、……兼ねてこの事、心得召され。

典侍　アヽモシ、後氣遣はずと、好い吉左右を知らせてたべ。

知盛　云ふにや及ぶ。斯くまで仕込みし我が計略、たとへ義經天地を潜る術ありとも、やわか仕損じ申さんや。一門の仇、鬱憤晴らす時節到來。

トばた〳〵になり、向うより灘助、梶六、白の四天の拵らへにて、松明を持ち、走り出で、直ぐに舞臺へ來り

兩人　お迎ひ。

ト兩人よろしく住ふ。此うち局、以前の銚子と、三方へ載せたる土器を取上げ、思ひ入れあつて、お安に飲ませ

典侍　めでたき出陣

ト知盛へ三方の土器を渡し

知盛頂戴、イザ、御杯。

知盛　ハッ。

ト局、酌して、知盛飲み實に天杯をうながされ、賢命楽り、義戰の旗上げ。

ト此うち八ッの太鼓鳴る、知盛、思ひ入れあつて

八ッの太鼓も、御年の數を象る、合ひ圖の知らせ……オオそれよ……一天四海を治め給へば。

ト知盛諷ひながら、陣扇を持ち立上がり

謠〽國も動かぬこの君の惠みの〳〵、治まる御代こそめでたけれ。

トこの文句一杯に舞ふ事あつて納まる。

ハヽヽヽヽ。

典侍　めでたき門出。

知盛　追ッ付け勝鬨。

やす　知盛、早う。

知盛　ハッ。

〽飛ぶが如くに。

ト風の音、カケリになり、三重にて、知盛思ひ入れ灘助、梶六、先に松明を振り立て向うへ一散に入る。局、後を見送り、舟玉の札箱より、太刀を出してお安に渡す。三重にて

幕

本舞臺、上手に寄せて中足、二間の二重、一面に伊豫簾を下ろし、下手向うは浪手摺り、この前に高き岩組、蘆原、浪の音にて道具納まる。

〽夜も早次第に更け渡り、雨風烈しく聞ゆれば、賤が伏屋も大内の、昔に返る御裝束、初めの姿引かへて、神の御末の御粧ひ、いと尊くも見え給ふ。

ト伊豫簾上がる。おとく、おため、官女の姿にて後に扣へ、典侍局は十二單衣、お安は冠裝束にてよろしく扣へゐる。

ト床の合ひ方にて

典侍 斯くやごとなきお身、如何に計略なればとて、我が娘と呼びなして、賤の姿にやつさせ申せし、畏れ多さ勿體なき、これ皆、平家不善の罪、積ると知らで人々は榮華に月日を送るうち、さてこそ壽永の

〽秋風に、木の葉も共に散る花の、須磨の內裏を攻め落され、云ひ甲斐なくも一門方。

知盛、敎經お二人の、諫めも耳に入らばこそ。

〽崩れ立つたる味方の勢ひ、引立てられて兩卿も、思はず船に打乘つて、波の哀れや海の上、陸には源氏、平家は皆、赤間ケ關や壇の浦、軍の勝敗試さんと、日の丸畫きし陣扇、船の舳に押立てゝ。

これ射給へと玉虫が。

〽招けば敵より武者一騎。

那須の與市宗高と。

〽名乘つて海へざんぶと乘り入り、弓矢番ひし折しもあれ、北風烈しく荒波に、船を搖り上げ搖り落し。

扇も更に定らねば

〽これはと與市も躊躇ふうち。

沖には平家、陸には源氏の諸軍勢、鳴りを靜めて、見物す。

〽宗高一世の浮沈ぞと、心に神を念じけん、少し風間を得たりや應、切つて放せば過たず、要射切つて、バラバラバラ、扇は空へヒラ〳〵〳〵、夕日に映りて皆紅ゐ、水は白波立田川、秋の紅葉と流るれば、敵も味方も一同に、射たりや〳〵と譽むる聲、海に響きて凄まじく。その時、二位の尼君には、はや世は斯くと思しけん、君を抱き參らせて、既に入水とありけるを、知盛卿の計らひにて、密かに供奉し、それよりも、この大物に忍ばせ申し、折を窺ふ今宵の手段、味方の勝利疑ひなし。君にも今に知盛の、吉左右あらん、御待ちあれ、二人も心付け

られよ。
兩人　畏まりました。
〽そよとの音も知らせかと、亂れ轟ろかす鉦太鼓、すはや軍の眞最中と、君のお側に引添うて、知らせを今やと待つ折柄、知盛の郎黨相模の五郎、息吐きあへず、馳せ着けば。
ト　どんちやん烈しく、向うよりバタ〳〵にて、五郎、早打ちの拵らへにて、走り出で來る。局見て
典侍　ヤレ、待ち兼ねし相模の五郎。様子はどうぢや、なんとなんと。
五郎　ハツ、兼ねて主君の手段の如く、暮れ六ツ過ぎより味方の小船を乘り出し、義經が打乘つたる、元船間近く、漕ぎ寄せしに
〽折しも烈しき武庫山颪しに、連れて降りくる雨雷、時こそ來れと味方の軍勢、みな海中に
〽飛び込み〳〵、西國にて亡びし平家の一門、義經に恨みをなさんと、聲々に呼はれば。
敵に用意やしたりけん
〽提灯松明バラ〳〵と、味方の船に乘り移り、爰を先途と戰へば。

味方の駈武者大半打たれ、事危ふく見えて候ふ。某は取つて返し、主君の御先途見屆け申さん。はや、おさらば。
〽申しもあへず、駈り行く。
ト　五郎、注進の振りあつて、トヾ向うへ入る。
典侍　ヤア〳〵、すりや一大事に及びしか。さるにても、知盛の御身の上こそ氣遣はし。
とく　定かにそれと、戰ひの
ため　たとへ黒白は分らずとも
典侍　沖の様子は如何ならん。
〽一間の障子、押明くれば。
ト　典侍、兩人へ思ひ入れ。兩人、外へ見付けの障子を明けると、後打抜き、波手摺り、二重にして、遠見に兵船の模様、高張りを灯し、誂らへの通りある。局お安を抱き上げ立ち身。侍女兩人も引添ひ、海面を見やつて、思ひ入れ。
〽提灯松明星の如く、天を焦せば漫々たる、海も一目に見え渡り、數多の兵船、やり違へ〳〵、船櫓を小楯に取り、敵も味方も入り亂れ、船を跳び越え跳び越えて、追ひつ捲りつ、えい〳〵聲にて、切り結ぶ、人影までもあり〳〵と、戰ふ聲々風に連れ、手に取るやうに聞ゆるに

文政十一年七月市村座所演　七世市川團十郎の相模五郎

そ。
典侍　アレ〳〵、御覽せ。あの中に、知盛の在すらん。
〽やよ何所にと伸び上がり、見給ふうちに。
ト兵船、提灯を段々に消す。
ヤ、、、提灯松明次第々々に、消え失せて、沖もひつそと、靜まりしは。
〽これこそ知盛が討死の合ひ圖かと、あまり呆れて泣かれもせず、途方に暮れて立つたる所に、入江丹藏、朱になつて立歸り。
ト花道より丹藏、手負ひにて駈け出で
丹藏　我が君、典侍のお局さま。
ト本舞臺へ來て平伏する。
典侍　さ云ふは入江の丹藏ならずや。して〳〵樣子は、如何なるぞ。
丹藏　さればに候ふ、義經主從手痛く働らき、既に危ふく見えけるが。
〽味方の手段白浪と、思ひの外に、さとくも察し。
御主君知盛公、大勢に取卷かれ
〽風波烈しく切り立つれば、あしらひ給へど多勢に無勢運の底なる命の引汐。

必定海に飛び入つて、はや御最期と存ずれば、お局にも早、お覺悟の御用意あれ。拙者はこれより御主君の、冥土の御供仕らん。早、おさらば。
〽云ひもあへず諸肌くつろげ、持つたる刀を突き立てゝ、汐の深味へ飛び込めば。
典侍　ヤ、、、さては知盛卿も、敵へなく討たれ給ひしか。
兩人　お局樣。
典侍　ホイ。
〽はつとばかりに撞と伏し、前後も知らず泣きけるが、局は歎きの中よりも、御顏つく〴〵打守り。
二歳餘り見苦しき、この茅屋を玉の臺と、思し召しての御住居、朝夕の供御までも、下々と同じやうに、さもしい物、それさへ君の御心では、殿上にての榮華とも、思うてお暮らしなされしに、知盛亡び給ひては、賤が伏家に御身一つ、置き奉る事さへも、ならぬやうに成り果てゝ
〽遂にはこの浦の土となり給ふかや。
とく　上なき御身にかばかりも
ため　悲しい事の數々が
典侍　續けば續くものかいなう。

〽口說き立て〳〵、身も浮くばかり歎きしが。
ア、、由なき悔み事、今は云うても何かせん。いでお覺悟を。オ、、さうぢや。
〽涙ながら御手を取り、泣く〳〵濱邊に出でけるが、いと尋常なる御姿、この海に沈めんかと、思へば目もくれ心もくれ、身もわな〳〵とぞ顫ひける、君は賢しく在ませど、死ぬる事とは露知り給はず。
やす　コレナウ乳母、覺悟々々と云うて、何國へ連れて行くのぢや。
典侍　オ、、さう思し召すは理り。ようお聞き遊ばせや。この日の本にはな、源氏の武士蔓つて、恐ろしい國、この浪の下こそ、極樂淨土と云うて、結構な都がござりまする。その都には、祖母君、二位の尼御を始め、平家の一門あの知盛も在すれば、君にもそこへ御出であり、物憂き世界の苦しみを、免がれさせ給へや。
〽宥め申せば、打悄れ給ひ。
やす　そりや、嬉しいやうなれど、あの恐ろしい浪の下へ、只一人行くのかや。
典侍　ア、、勿體ない、なんのマア。このお乳が美しう育て上げたる君樣を、只お一人、あの漫々たる千尋の底へやりまして、なんと身も世もあられませう。このお乳がどこまでも、お供いたしまするわいなう。
やす　それなら嬉しい。其方さへ行きやるなら、何國へなりと行くわいなう。
典侍　オ、　よう云うて給はつたなア。
〽引寄せ〳〵、抱き締め。
火に入り水に溺るゝも、前の世の約束なれば。
〽未來の誓ひまし〳〵て。
もうこの上には、天照大神へ、お暇乞ひ遊ばせや。
〽東に向はせ參らすれば、美しき御手を合せ、伏拜み給ふ、御有り樣、見奉れば、氣も消え〳〵。
オ、、ようお暇乞ひ遊ばした。佛の御國は、こなたぞや
〽指さす方には向せ給ひ。
やす　今ぞ知る、御裳裾川の流れには、浪の底にも都ありとは。
〽詠じ給へば。
典侍　ソレ、硯。
ト侍女手早く、硯箱を持つて來り、局へ差出す。
今一度とつくり。
やす　今ぞ知る、御裳裾川の流れには、浪の底にも都あり

とは。
と局、これをサラ／＼と檜扇へ認め、吟じ見て
典侍　オヽ、お出かしなされた、ようお詠み遊ばしたなア
その昔、月花の御遊の折から、斯様にお歌を詠み給はば
なんぼう喜び給はんに、今際の際にこれが、マア、云ふ
に甲斐なき御製ぢやなア。
〽口說き立て／＼、涙の限り、聲の限り、歎き口說くぞ
道理なる。
ア、歎いても詮なき事、片時も早う、極樂への御門出
を急がん。
〽若君しつかと抱き上げて、磯打つ波に、裳裾を浸し、
海の面を見渡し／＼。
ト好き時分より、中の舞を打込み、局、岩組みへ上り、
キツとなつて
如何に八大龍王、恒河の鱗族、君の御幸、守護し給へ。
〽ざんぶと打込む御製の扇、渦く浪に飛び入らんとする
所に、いつの間にかは、九郎義經、龜井、駿河も駈け寄
つて、君を奪ひ取り、局官女を引立つて、一間の内へ
ト局、お安を抱へ、海へ飛び入らんとする所へ、屋體
より、義經、陣立ての形、次郎、六郎、凜々しき拵らへ
にて、付添ひ走り出て、直ぐに義經、お安を奪ひ取り、
局を引立て、次郎、六郎、同じく侍女二人を引立て、
皆々屋體の內へ入る。三重にて、返し。

本舞臺、一面の浪の遠見、眞中に大岩。上下は岩の
張り物にて道具納まる。
〽かゝる所へ知盛は、大童に戰ひなし。
トこの淨瑠璃のうち、ドンチヤンのあしらひ、向うよ
り、知盛、好みの拵らへ、長刀を突き、出て來る。引
下がつて、辨慶、半切れの形にて、付いて出る。花道
にて、知盛、思ひ入れあつて
知盛　我が君は何所にまします。お乳の人、典侍の局。
〽呼はり／＼、撞と伏し。
エヽ、無念、口惜しや。ナニこれしきの手に、弱りはせ
じ。
〽弱りはせじと　長刀杖に立ちあがり。
お乳の人、我が君樣。
〽よろぼひ／＼、駈け廻れば、一間を踏み明け、九郎判
官、君を右手の小脇にひん抱き、局を引附け、突ツ立ち
給へば。

文化五年五月中村座所演　三世中村歌右衛門の知盛

トこの淨瑠璃のうち、義經、お安を抱き、典侍の局、側に、次郎、六郎付添ひ出る。知盛キッと見て

あら珍らしや、如何に義經。

詞〽思ひぞ出づる浦浪の、聲をしるべに出で船の、知盛が沈みしその有樣に、また義經をも海に沈めんと夕浪に浮べる長刀取り直し、巴浪の紋あたりを拂ひ。

サア〳〵、勝負〳〵。

〽勝負々々と詰め寄れば、義經少しも騷ぎ給はず。

義經　ヤア知盛、さな急かれそ。義經が云ふ事あり。

〽靜々と歩み出で。

ト肥前節になり

其方、西海にて入水と僞はり、君を供奉なし、この所に忍び、一門の仇を報はんとは、天晴れ〳〵。我れこの家に逗留せしより、並々ならぬ人相骨柄、察するところ平家にて、何某ならんと思ふゆゑ、辨慶に云ひ含め、その事計り知つたるゆゑ、艀舟の船頭を海へ切り込み、裏海へ船を廻し、夙よりこれへ入込んで、始終詳しく見屆けて、君も我が手に入つたれども、日の本をしろし召す君何條義經が擒となすいはれあらん。恐れあり〳〵、君の御身は義經が、守護し奉れば、氣遣はれな、知盛。

〽聞く嬉しさは典侍の局、

典侍　オヽ、あの詞に違ひなく、先程より義經どの、段々の情にて、我が君の御身の上は、知るべの方へ渡さんとの、武士の堅い誓言。喜んでたべ、知盛卿。

〽聞くに凝つたる氣も逆立ち、局を取つて突きのけ。

知盛　チエ、殘念や、口惜しや。我れ一門の仇を報はんと心魂を碎きしに、今暫時に手段顯はれ、身の上を知られしは、天命々々。まつた、義經、君を助け奉るは、天恩を思ふゆゑ、これ以て知盛が恩に被るべきいはれなし。サア、今こそ汝を一太刀恨み、亡魂へ、イデ手向けん。

〽痛手によろめく足踏みしめ、長刀追ッ取り立向ふ。辨慶押隔て、打ち物業にて叶ふまじと、珠數サラ〳〵と押揉んで。

辨慶　如何に知盛、斯くあらんと期したるゆゑ、我れも疾より、船手へ廻り、計略の裏を缺いたれば、最早惡念發起なせ。

〽持つたるいらたか知盛の、首へヒラリと投げかくれば。

知盛　ムウ、さてはこの珠數かけたるは、知盛に出家とな。

エ、、穢らはし〳〵。そも四姓始まつて、討つては討たれ、討たれては討つは、源平の慣ひ、生き變り死に變り、恨をなさで置くべきか。

〽思ひ込んだる無念の顔色、眼血走り、髪逆立ち、この世からなる惡靈の、相を顯はすばかりなり、君は始終を聞し召し、知盛に向はせ給ひ。

やす　我れを供奉し、長々の介抱は、其方が情、今日また麿を助けしは、義經が情なれば、仇に思ふな、知盛。

〽勿體なくも御涙を、浮べ給へば典侍の局、共に涙に暮れながら、用意の懐劍咽喉に突き立て、名殘り惜しげに、御顔を打守り〳〵。

典侍　よう仰しやつた、いつまでも義經の志し、必らず忘れ給ふなや。源氏は平家の仇敵と、後々までも、このお乳が、仇し心も付けうかと、人々に疑はれん。さあれば生きてお爲にならぬ。君の御事、くれ〴〵も、頼み置くは義經公。

〽さらばとばかりこの世の暇、敢へなく息は絶えにける。思ひ設けぬ局の最期、君は猶更知盛も、重なる憂き目に、勇氣も碎け、暫し詞もなかりしが、御座近く、涙をハラハラと流し。

トこの淨瑠璃のうち、典侍の局、自害して落入ると、知盛、思ひ入れあつて

知盛　ハヽア、果報はいみじく、尊き君と生れさせ給へども、西海の波に漂よひ、海に望めども、汐にて水に渇せしは、これ餓鬼道。

〽或る時は風波に遭ひ、お召しの船を荒磯に吹き上げられ今も命を失はんと。

多くの官女が泣き叫ぶは

〽阿鼻叫喚、陸に源平戰ふは、取りも直さず、修羅道の苦しみ、又は源氏の陣所々々に、夥多の駒の嘶くは畜生道。

いま賤しき御身となり、人間の浮き艱難目前にして、六道の苦しみを受け給ふ、これと云ふも、父清盛、外戚の望みあるに依つて、姫宮を男の子と云ひ觸らし、權威を以て御位につけ、天道を欺むきし、その惡逆、積り〳〵て、一門我が子の身に報いしか。

〽是非もなや。

我れ斯く深手を負うたれば、長らへ果てぬこの知盛、今この海に身を沈め、末代に名を殘さん。大物の沖にて、判官に仇なせしは、知盛が怨靈なりと、傳へよや。サ、、

息あるうちに片時も早く、君の供奉を、頼む〳〵。

義經　ホウ、我れはこれより九州の、尾形の方へ赴むくなり。君の御身は義經が、何所までも供奉なさん。

〽御手を取つて出で給へば、龜井、駿河、武藏坊、御後に引添うたり、知盛ニッコと打笑みて。

知盛　昨日の仇は今日の味方、アラ心安や、嬉しやなア。これぞこの世の暇乞ひ。

やす　知盛、さらば。

知盛　ハッ。

〽振返つて御顏を、見奉るも目は涙、見返り給ふ別れの門出、留まるこなたは冥途の出船。

三途の海の瀨踏みせん。

〽碇を取つて頭に擔ぎ、渦卷く波に飛び入つて、敢へなく消えたる忠臣義心、その亡骸は大物の、千尋の底に朽ち果てゝ、名は引汐に搖られ流れ、搖られ流れて、後白浪とぞ。

トこの淨瑠璃のうち、義經先にお安を抱き上げ、次郎、六郎、辨慶付いて、花道へ來る。知盛碇を持つて、よろしく岩臺の上に上がる。

皆々　さらば。

〽なりにける。

ト段切、知盛、浪間へ飛び込む。

ト直ぐに出端を打ちかける。これにて花道の人數、皆　幕
皆向うへ入る。知らせにつき　シャギリ

四幕目　　下市村の場

役名——若葉の內侍、主馬小金吾武里、猪熊大之進。權太女房、小せん。一子、善太、鮨屋彌左衞門、庄屋作兵衞。いがみの權太。

本舞臺、三間の間、眞中椎の木、稻村。うしろ黑幕、上の方、葭簀張りの出茶屋、爰に小せん、前垂れ掛け、やつし、引摺り、下駄にて、茶を運び居る。善太、木の實を拾ひ居る。仕出し、三人、床几に腰掛け、煙草のみ居る。てんつゝにて幕明く。

トいろ〳〵の仕出し、行違つて兩方へ入る。

仕出　コレ、かみさん、茶を一つ下さい。
同　わしにも、もう一つ下さい。
せん　ハイ／＼。
　ト茶を汲んで出す。
仕出　時にかみさん、夥しい參詣で、儲かりませうの。
せん　イヤモウ、いつも／＼、人の通り絶えぬこの海道、殊に今度は、金峰山の御開帳で、引も切らぬお詣り。お前さん方も、定めしお詣りでござりませう。
仕出　詣らいでわいの。靈驗顯たな藏王彌勒、又と云つて拜まれぬお開帳、今日で三度參りますわいの。
同　其やうに、信心の人もあるに　わしは近所で居ながら、今日が始めて。燈臺元暗しとは、この事でござるわいの。
同　イヤ、長話しするうち、日脚も七ツ下がり。そろそろ行きませうか。
同　それがようござらう。かみさん、茶代は爰に置きましたぞや。
せん　マア、ようござりますわいな。
仕出　イヤ／＼、わしは遠方ぢや。ドリヤ、行きませうか。
同　サア、ござりませう。

　ト辻打になり、皆々向うへ入る。引違へて向うより、駕籠舁き、四つ手駕籠を舁き、出て來る。後より小金吾、半合羽、股引、大小、三度笠を持ち、付添ひ出で來り、直ぐに舞臺へ來り
駕籠　ヤレ／＼、草臥れた、合ひ輿といふものは、滅切りと貫目があるもの。
同　それ／＼、後の立場からこの下市まで、杖無しにぼツ付けたもの。モシ、お客さん、酒手はしつかりでござりませうな。
小金　ハテ、精出して參つたもの、酒手も遣らいで、なんと致さう。
駕籠　それは有り難うござります。
同　時にお侍ひ樣、私しどもは、これまでのお約束でござりまする。もうようござりますかな。
小金　成る程、これまでの極めなれば、これからそろ／＼と、おひろひなさるであらう。極めの駄賃、酒手ともに、これで好いやうに致してくれい。
　ト懷中より一歩の包みを出して遣る。
駕籠　ハイ／＼、これは有り難うござります。
同　モシ、お二人樣、これへ出て、お茶でも上がりませ。

同　お坊さんも、木の實の落ちたのでも、お拾ひなされませ。

同　モシ旦那、お包みは爰へ置きまする。お渡し申しましたぞえ。

ト駕籠に付けたる、柳行李の割掛けの荷物を取つて渡す。

小金　慥かに受取つた。

駕篭　そんなら、立場へ行て、歸りを待たうか。かみさん駕籠を頼みますよ。

同　サア、來やれ〳〵。

ト兩人、下座へ入る。

小金　これは大儀であつた。イザ、これへお越しなされ、四方の見晴らし。先づ〳〵これへ。

〽云ひつゝ小金吾差寄つて、駕籠の內より誘ふは、維盛の御臺若葉の內侍、旅の疲れに面瘦せて、六代君の御手を取り、暫し床几に立寄れば。

ト若葉の內侍、六代御前を伴ひ、駕籠より出る。

せん　サア〳〵、これへお掛けなされませい。

小金　コリヤ女中、お茶一つ。

せん　ハイ〳〵。

〽愛想こぼれて、差出す。內侍は、つく〴〵見給ひて。

ト內侍、六代、床几に息らふ。小せん、茶を持つて來る。內侍、兩人を見て

若葉　こりや、こなたも子持ちよな。自らも連合ひの、忘れ形見を伴ひしに、道より憐みて、貯はへし藥を、殘らず服み切らし俄の難儀。子を持つ者は合ひ互ひ、嗜みの藥もあらば、讓つてたもるまいか。

小金　殊に拙者も、懷中の藥を皆に致したゆゑ、とんと難儀いたす。あなたの仰しやる通り、持合せがござるならなんと上げてはくれまいかな。

せん　それはマア、さぞ御難儀でござりませう。私しどものは生れてから、腹一つ痛めた事はござりませねば、何の用意もござりませぬ。それはマアお氣の毒な……イヤ、ほんにそれ〳〵、幸ひこの村の寺の門前に、洞呂川の陀羅輔を、請賣りする人がござりますれば、モシ、お前さん、一走り行て、買うてお出でなされませいな。

小金　ア、イヤ〳〵、身共は當所不案內。大儀ながら、其方求めてくれまいか。

せん　それはモウ、お易い事でござりまする。わたしが調へて來て上げませう。善太、其方はあなたと一緒に留守

して居やいなう。
善太　イヤ、わしも一緒に行かうわいの。
せん　ほんに、この子とした事が、左樣ならば、お二人樣
小金　頼みますぞや。
せん　ドリヤ、行て參りませうか。
〽器量好ければ心まで、尊い寺の門前へ、藥を買ひに急
ぎ行く。
　ト小せん、善太を連れて、下座へ入る。小金吾、後見
返り
小金　成る程、世間に人鬼は、ないものでござりまする。
若葉　ドレ／＼、六代、爰に大分木の實が落ちてある。拾
うて遊ぶ心はないか。
小金　こりや、ようござりませう。御臺樣もお拾ひ遊ばし
ませ。金吾めも、拾うて遊びませう。
六代　こりや面白い。金吾、拾うてたも。
金吾　畏まりました……ほんに、こりや好いお慰みでござ
りまする。サア／＼、お拾ひ遊ばさりませ／＼。
〽勇みの詞に引立てられ、おれも拾ふと、若君の、機嫌
とる椎、栃の實を、拾うて集むる折からに、若き男の草
臥れ足。

　トてんつゝになり、上手より權太、旅形、三度笠かぶ
り、革籠と風呂敷包み、割掛けにして、出で來り、
〽これも旅立ち風呂敷包み、脊負うて、ぶら／＼茶見世
を見付け。
權太　ドリヤ、一服のんで行かう。
〽包みを取つて床几に下ろし。
御免下さりませ、火を一つ。
　ト床几にかゝり、煙草のみ居て
ハヽア、こりやアお前樣方は、お開帳詣りでござります
か。お坊さんは道草か。わしらが在所の子供と違ひ、ヤ
レヤレ、可愛らしい、綺麗なお生れ付きだなア。
〽賞めても話し仕掛けても、心置く身はそこ／＼に、詞
少なに拾ひ居る、暫らく休んで彼の男。
權太　モシ／＼、その落ちた木の實は、虫入つて、見かけ
は好くても、中は空でござります。木にあるのをお取り
なされませ。
金吾　この男は何をお云やる。二丈餘りのこの高木、駈け
上がる蹴爪は持たぬワ。
權太　サア、そこを易く取りやうがござります。
金吾　して、そりやどうして取りますな。

文政八年五月　市村座上演

岩井紫若の小金吾　二世關三十郎の權太

權太　その取りやうは、斯う致します。
〽小石拾うて打つ礫、枝に當つてバラ〳〵、若君喜び惱みも忘れ、小金吾拾への御機嫌に、內侍も嬉しく。
若葉　ほんに、好い事してもらうた。そこな御人、忝なうござるぞや。
權太　なんのお前さん、お禮で痛み入ります。まつと取つて上げたいが、私しも遠道を抱へて、お相手をしても居られませぬ。
ト包みを持つて立ちあがる。
金吾　こりやモウ、ござりまするか。
權太　御緣もあらば、又お目にかゝりませう。
〽云うてその場を行き過る、小金吾、木の實を拾ひしまひ。
ト權太、向うへ入る。
金吾　サア〳〵、これでモウ御堪忍なされませ。ハテサテ、今の男は、機轉者でござります。時に、日も傾きましたれば、內侍さま、そろ〳〵お步び遊ばされませぬか。
若葉　成る程、さうしようわいの。
ト小金吾、荷物を持ち行かうとして、心得ぬ思ひ入れあつて

金吾　ハテ、この風呂敷包みは、どうやら違うてあり、しかもこれは張り革籠、此方は着類の藤行李。
ト荷物の中括りを解き、いろ〳〵見て
ムウ、すりや、木の實に氣を奪はせ、取替へ失せたか。但しは麁相か。何にもせよ、追ひ駈けて取返さん。さうぢや。
ト荷物を持つて、花道へツカ〳〵と行きかける。向うより權太一散に駈け戻り
權太　ア、モシ〳〵、お侍ひ樣、眞平御免なされませ。日暮れも近し、心は急く、同じ色の風呂敷包み、重い輕いに氣も付かず、取違へた麁相、道にてフツと心付き、取つて返してお詫び言、どうぞ御料簡下されませ。
金吾　ムウ、麁相とあらば云ひ分もないが、萬一、紛失の物あると、免さぬが合點か。
權太　何がさて、間違ひがあらば、臺座の別れ、御存分になされませ。
金吾　その一言なら、疑ふには及ばねども、中改めて受取らん。
〽包みを開き、改め見れど相違もなし。
荷物に相違もなければ、麁相に極まつた。申し分はない。

其方の荷物も、持つてお行きやれ。
ト張り革籠を差出す。權太取つて見て
權太 この中括りの解けたのは。
ト思ひ入れあつて
金吾 イヤ、それは最前、替つたやうには思へども、ちよつと改め見たばかりサ。
權太 ヘイ。
〽云ふ間に開く張り革籠、引ちらけて袷の袖、浴衣の間を捜し見て。
ト革籠を明け、いろ〳〵見る事。中に古袷入れある事あり。
サア、無いワ〳〵。こりやどうだ。
金吾 無い〳〵とお云やるが、そりや何が。
權太 ハヽア、解つた。モシ、冗談なされますな。私しは氣が氣ではござりませぬ。サア、出して下さりませ〳〵。
金吾 コレサ、出せ〳〵と、そりや何を。
權太 コレサ、前髮さん、この革籠の内に、人に賴まれて高野へ上げる祠堂金、二十兩入れて置いたが、お前、わしに膽を潰させやうと、隱しなさつたな。サアモシ、心が急きます、氣が揉めます。モシ、どうぞ出して下さりませ〳〵。
金吾 默れ〳〵、默り居らう……すりや、その金子を、身が盜んだと申すのか。
權太 なんだ〳〵、そんなにお前、膽を潰す事はない、出した〳〵。
〽取つても付かぬ難題に、小金吾ムッと反り打ちかけ。
金吾 武士に向つて、云ひかけひろぐ、慮外な町人。今一度云つて見よ。手は見せぬぞ。
權太 すりや、眞實知らぬと云はつしやるのか。
金吾 諄いわい。
權太 おきやアがれ、べら坊め。盜人猛々しいと、もう地金を出さねばならぬ。よく見りやア見る程、尋常な形をしやアがつて、イケ太い餓鬼めだなア。コレ、おれが物を捲きあげて、そんな甘口な事を喰ふやうな男ぢやねえぞ。
ト金吾、思ひ入れ、柄に手をかけるを
金吾 ムウ。
權太 なんだ〳〵、赤鰯を捻くつて脅すのか。それでこの場を拔けるのか。よしにしろ、べら坊め。コレエ、恐れながらと喰はせりやア、何奴も此奴も、首に繩を付け

る事も知つて居るワ。四の五のなしに、出しやアがれ。
〽がり唯みのねだり者、もう堪忍がと抜きかけしが、
お二方の姿を見て、ヂッと堪えて胸撫で下ろし、

金吾　イヤナニ、若い人、そりや其許の覚え違ひであらう。見らるゝ通り、足弱をお供したれば、たとへ何萬兩落ち散りあつても、目をかける所存はない。とくと其方を吟味召され。

權太　やかましいわえ。コレ、その足弱を連れたが、盗人の付け目。よもやと思はせて、してやるが當世の流行ものだ。何萬兩は要らない。たつた二十兩だ。

金吾　すりや、どうあつても、身が盗んだと申すのか。

權太　知れた事サ。

金吾　ムウ、して又、盗んだ證據あるか。

ト抜きかける。權太、飛び退き

權太　なんだ〳〵、その形は、なんだ。盗んだ證據はこの革籠の、中括りを、なぜ解いた。其方の荷物に躊躇があつたら、免さぬと云つたぢやないか。斯う云ふ金を捲上げて置いて、その顔はなんだ。さうして、赤鰯を捻くり廻して、こりやアおれを切る氣か、こいつは怖い、金を盗まれ、その上切られて見やアがれ……僅か二十兩で、首綱のかゝらぬうち、キリ〳〵金を出しやアがれ。

金吾　もう、料簡が。

ト刀を抜き放す。内侍、慌て留めて

〽もうこれまでと抜き放す、内侍は慌て抱き留め、

若葉　アヽコレ、尤もぢや、道理ぢやが、短氣な事しやつては、わしもこの子も、共に難儀、無念にあらうと堪忍して、あの者の云ふやうに、料簡付けてやつても、足弱連れたを災難と思ひ、胸を靜めてたもいなう。

〽涙にくれてのたまふにぞ、血氣に逸る小金吾も、見るに忍びず。

金吾　エヽ、世が世の時でござらうなら、ズタ〳〵に試しても、慊らぬ奴なれど、何を云うても、茅花の穂にも怯ぢる身の上、御意の通りに致しませう。口惜しうござりまする〳〵。

〽此方は大事の二方の、お供の身なれば、無念を堪え、奥歯噛む程付け上がり。

權太　ハヽア、聞えた、金はもうどこかへこかしてしまつたな。いゝワ。金をこかしたら、その女から引摺つて行く。退きやアがれ。

ト小金吾を引退けて、内侍にかゝるを、首筋摑んで引

戻し、胴巻より包み金を出して打ちつける。

〽首筋摑んで引戻し、用意の路銀、云ふ程出して腕みつけ。

金吾　大切な御方をお供したゆゑ、只取らるゝ二十兩。キリ／＼持つて、うせ居らう。

〽騙りの贋ひ、金見ると、目に佛なく、手ばしこく、拾ひ集めて耳讀み揃へ、

ト權太、金を取つて、改め見て

權太　ても、恐ろしい事、この金を既の事に、あの丁稚めに、してやられうとした。

金吾　エヽ、又その腮を。

ト立ちかゝる。

權太　どうしたと。

トきつとなる。若葉、金吾を押へて

若葉　事ないうちに。

〽事ないうちにと若君引連れ、立出で給へば是非もなく後に引添ひ、小金吾も、無念を堪え、上市の、宿の方へと急ぎ行く。

ト時の鐘にて内侍、六代を伴ひ、小金吾付いて下座へ入る。權太、思ひ入れ、後見送り

權太　例へ百度腕まれても、一度が一分に付きやアしまい。巧い／＼。

〽巧い仕事と、いがみの權太、金を懐に押入れて、盆屋へ急ぐ、向うへスツと、茶屋の女房が立塞がり

ト奥より小せん、善太を連れ、出かけ居て

せん　コレ、權太どの、こなさん、どこへ行かしやんす。

權太　オヽ、小せんか。わりやア店を明けて、どこへ行つた。

せん　アイ、わたしや、旅人のお頼みで、坂本へ藥を買ひに行たわいな。

權太　そりや丁度好かつた、われが居たら、また邪魔をしやうに。

〽云ふ胸倉を取つて引据ゑ。

せん　コレ、こなさんに騙りさゝうと云うて、外しては居ぬぞや。最前戻りかゝつたところに、わつぱさつぱ、差出たら、騙りの正銘顯はれ、どんな事にならうも知れぬと、あの松陰から聞いて居たわいな。エヽ、こなさんは、恐ろしい企みする人ぢやなう。妾は産めども心は産まぬと、親御は釣瓶鮨屋彌助の、彌左衛門さまと云うて、この村で口もきくお方、見限られて勘當同然、御所の町

天保二年八月　市村座所演

三世尾上菊五郎の權太　小佐川常世の小せん

に居た時こそ、道も隔たれ、後の月から、同じこの下市に住んでも、嫁か孫かとお近付きにもならぬのは、皆こなさんの心柄。いがみの權に衣着せて、騙りの權と云はうぞや。この善太郎は可愛うはござんせぬか。わしを賣つてなりと、重ねて悪事は止めて下さんせ。なんの因果で其のやうな、恐ろしい氣にならしやつた。どうぞ心を改めて下さんせいなア。

へ取りつき歎けば、突き飛ばし。

權太　エヽ、やかましいワ。又しても女の際に、ツベコベと世迷ひ言、おれが盜み騙りの根元は、皆うぬから起つた事だ。

せん　ムウ、お前の盜み騙りは、わたしからとは、そりやなんで。

權太　なんでとは覺えがあらう。おれが十五の年、元服して親仁の云付けで、御所の町へ鮨商ひ、隱し女の中に、われが振り袖に、喰ひ込んだが因果の始まり、阿女の臍繰り金、店の賣溜め、得意先のかけ、財產半分、みんなわれに入上げたゆゑ、親仁には追ひ出され、その時この餓鬼は腹に出來る、親方には强請られる、せう事なしに、年貢米を盜んで立て金した、その尻が來て、既に首の飛ぶ所を、庄屋のべら坊めが、年賦にして毎日の催促、その金を濟まさうと思つて、賭博にかゝり、段々と出世して、小强請り騙り。この中も親仁の內へ、矢尻を切つて見たれど、妹のお里と內の男めと、夜通しの鼻聲で、とんとまんが惡かつた。イヤ又、今日のまんの好さ。この勢ひに阿女の鼻毛を强請りかけ、二三貫匁もしてやらにやアならぬ。酒を買つて待つて居ろ。

ト此うち善太、居眠り居るを見附けて

ヤイ〳〵、エヽ、野郎め、起きやアがれ。

ト善太が頭をくらはし

今ツから寐やアがつて、さう云ふ事おやア、おれが商賣は讓られないぞ。小せん、店を片付けて、早く歸れ。

せん　ア、コレ、待たしやんせ。まだこの上に親御の物まで、騙し取らうとは勿體ない。マア、內へ戻つて下さんせ。コリヤ、善太、留めてくれい。

善太　父さん、サア、內へござれ。

ト權太に縋る。

へ手に纏ひ付く蔓葛、子が後追へば惡者は、小手縛りとてうたてがる、鬼でも子には引かさるゝ。

權太　エヽ、折角の首尾次手と思つたに、われが留めるな

ら、歸らざアなるまい。小せん、店を片付けろ。
ト小せん、そこら片付け、權太も手傳ひ、手桶の中へ道具を入れ、權太、善太の手を取り
ヤレ〳〵、冷たい手だなア。
〽冷たい手ぢやと手を引いて、女房諸とも立歸る。
ト唄になり、小せん、手桶を提げ、先に立ち、權太、善太が手を引き、花道へ入る。禪のツトメになり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、一面の板松、眞中に臺付きの松の木、所々に稻村、矢張り禪のツトメにて、道具とまる。
〽夕陽西に入る折から、主馬の小金吾武里は、上市村にて朝方が、追手の人數に取卷かれ、數ヶ所の疵を負ひながら、内侍、若君御供申し、一先づ都へ立歸るを、後に續いて數百人、遁がさぬ遣らぬと追ひ駈けたり、手疵負へども氣は鐵石の武里が、死物狂ひと思ひの刃、爰に三人彼所に七人、バラリ〳〵と薙ぎ倒し、その身は秋の花紅葉、敵は木の葉のその後へ、追手の大將、猪熊大之進、遲れ走せに駈け來り。

ト禪のツトメにて、下座より小金吾、捕り手四人と立廻りながら、内侍、六代を圍ひ出で來り、立廻りあつて、四人を下座へ追ひ込み、右兩人とも下の稻村の蔭へ隱し、ホツと思ひ入れ。又バタ〳〵にて下座より、大之進先に、中通りの黑四天の捕り手四人付き、出で來り、バラ〳〵と小金吾を取卷き
猪熊　小金吾武里
四人　動くな。
金吾　さてはおのれらは、朝方よりの討手だな。
大之　知れた事だワ。いつぞや、嵯峨の奧にて取逃がし、主人朝方の御機嫌散々、すご〳〵館へ歸られず、庵坊主めに白狀させ、付け廻したるこの海道。サア、維盛の御臺若君、二人を渡して、腹かッさばけ。丁稚め、返答は
四人　どうだ、エヽ。
〽手負は流るゝ血汐を、グッと一飲み息を吐き
金吾　小癪な事を。主馬の小金吾武里が、御供申すお二方、やわかわいらに渡さうや。道明けて通せ。
大之　さう吐かせば絕對絕命。者ども、ソレ。
四人　やらぬワ。
トかゝる。小金吾、立廻り、これより誂らへの鳴り物

になり、タテあつて、四人を切つて捨てる。大之進、打つてかゝる。立廻り、鳴り物替つて、兩人タテ。

〽内侍若君、あぶ／＼ひや／＼、小石を拾ひ、砂打ち付け、及び腰なる加勢も念力、手强く見ゆる猪熊が、眼に入つて、目當もくらみ、隙間に切り込むだんびらに、眉間を割られて頭轉倒、乘りかゝるを下よりも、突く切尖は肋骨、金吾ものつけに反り返る、あなたが起れば石礫猪熊切られ、小金吾も、共に深手の四苦八苦、修羅の巷ぞ危ふけれ。

トとゞ小金吾、大之進を取つて押へ、止めを刺す、時の鐘、蟲の音。

〽サア仕負ふせし嬉しやと、思ふ心のたるみにや、ウンとばかりに倒れ伏す、なう悲しやと内侍若君、いたはり抱へ抱き起し。

ト内侍、六代好き時分より窺ひ出て來り

若葉　コレ、金吾イなう、氣をハツキリと持つてたも。其方が死んで自らや、この子はなんとなるものぞ。こりやマアどうせう、なんとせうぞいなう。

〽泣入り給ふ御聲の、耳に通つて、手負ひは顏上げ。

金吾　コレ、内侍さま、六代さま、諦らめて下さりませ。心は矢竹に逸れども、もう叶ひませぬ。我が君維盛さまは、兼ねて御出家のお望み、熊野浦にて逢ひ奉りしと云ふ者あるゆゑ、高野山へと志し、お二方をお供したれど、なか／＼この分では一足も行かれぬ。コレ、若君樣、ようお聞き遊ばせや。御臺樣を伴ひ、紙屋の宿といふ所に、内侍さまを殘し、お前は人を賴んで山へ登り、父樣の名は云はれぬ、今道心の御出家と、尋ねてお逢ひ遊ばしませ。西も東も敵の中、平家の公達と覺られぬやう、お命めでたう御成人の後、金吾めが事、思し召されなば

〽一滴の水、一枝の花。

それが即ち冥土へ御知行。御成長を待つて居ります。

〽云ふも切なき息遣ひ、六代君は取縋り。

六代　死んでくれな小金吾。其方が死ぬと、父樣に逢はれぬわいやい。

〽泣き入り給へば内侍はせき上げ。

若葉　あれ聞いてたも。子心でも、其方一人を力にする。維盛さまに逢ふまでは、死ぬまい／＼と、なぜ思うてはたもらぬ。御一門は殘らず討死。廣い世界を敵に持ち、いつまで長らへ居られうぞ。共に殺してたもいなう。

〽嘆き給へば理りと、手負ひはいとゞ泪にくれ。

金吾　先君小松の重盛さまは、日本の聖人、若君はその孫君、諸神諸佛のお惠みの、ない事はござりますまい。末を頼みに思し召して、必らず短氣をお出しなされますな。アレ〳〵、向うへ提灯の灯影、又も追手の來るも知れず、若君伴ひ、この場を、早く〳〵。

若葉　イヤ〳〵、深手の其方を見捨て置いて、いづくを當に行くべきぞ。共に殺してたもいなう。

金吾　エヽ、腑甲斐ない。六代さまは、大切にはござりませぬか。この手で死ぬる金吾ではござりませぬ。早く落ちて下さりませ。お聞入れなければ、直ぐに切腹いたしませうか。

若葉　アヽコレ、待つてたも。それ程までに思やる事、成る程、先へ落ちませう。必らず死んでたもるなや。

金吾　お氣遣ひなされますな。運に叶ひ、後より直ぐに參ります。

若葉　必らず待つて居るぞや。

〽云ふ間も近付く提灯の、灯影に恐れ是非なくも、若君連れて落ち給ふ、御心根の痛はしさ。

ト内侍、六代の手を引き、心を殘し、花道へ入る。小金吾、後見送り思ひ入れ。

〽手負ひは後を見送り〳〵。

金吾　死なぬと申せしは僞はり。三千世界に運を借つても、なんのこの手で生きられませう。内侍さま、六代さま、これがこの世の、おわかれでござります。

〽思ふ心も斷末魔、知死期の六つも暮れ過ぎて、朝の露と消えにける。程なく來る提灯は、この村の五人組、何やらザワ〳〵話し合ひ、山坂の別れ道に、庄屋作兵衛立どまり。

ト小金吾、いろ〳〵苦しみ落入る。矢張り時の鐘、蟲の音にて、東の揚げ幕より、彌左衛門、釣瓶鮨屋と書きたる小田原提灯を提げて、出で來る。後より、作兵衛、百姓二人、付添ひ出で來り

作兵　コレ、彌助の彌左衛門どの、貴樣は鮨商賣ゆゑ、念押す上に押しかける。今云ひ付けた鎌倉の侍ひは、聞き及んだ蚰蜒、何やらこなたの耳をねぶつて、兀げるほど云ひ付けたら、畏まつた〳〵と、滅多無性に請合つたが、なんぞ覺えのある事かや。

彌左　ハテ知れた事。こなた衆も、常からおれが性根を知らぬか。血を分けた悴でも、見限つたら、門端も踏ませぬ彌左衛門、膝節が碎けても、畏まつたら瘁も切らさぬ。

シタガ、後からの云ひ付けが勿怪、嵯峨の奧から逃げて來た、子を連れた女と大前髮、この村へ入込んだと、追手からの知らせ。それでげぢどのがねぶりかけて、捕へたら褒美とある、こりや又、格別好い仕事。みな油斷せまいぞや。

百一　ハ、ア、そんなら、その前髮と、女を捕へて出せば、褒美になりますかの。

百二　それにつけても、斯ういふ時には、其方の息子、あのいがみの權太どのが居られたら、おいらが片腕となるものを、なんと、權太を尋ねて、頼まうぢやあるまいか。

百一　それがよからう〳〵。

作兵　そんなら彌左衞門どの、もうこれで別れませう。

彌左　今日はいかいお世話でござつた。皆も行て休まつしやれ。

三人　明日逢ひませう。

〽明日逢ひませうと五人組、山道行けば彌左衞門、坂へ折りしも、手負ひにバッタリ行き當り、氣味惡ながら、提灯振り上げ、ソロ〳〵立寄り。

ト時の鐘にて、三人は下座へ入る。彌左衞門、下の方へ行きかゝり、死骸に躓づき、恟り。提灯の明しにて、よくよく見て、驚ろき思ひ入れ、一ッ鉦になり

彌左　ても、惨たらしう、切つたワ〳〵。旅人さうなが、追剝の仕業ならば、丸裸にしさうなもの。路銀を當に、惡者の所爲か。

〽惡い子を持つ親の身は、案じ返して。

コレ〳〵、手負ひどの〳〵。さては縡切れたか。ア、愛しやなア、何國の人か。オヽ、見れば老けた角前髮、袖振り合ふも他生の緣。南無阿彌陀佛々々〳〵〳〵々々。

ト回向して

兎角浮世は老少不定、哀れを見るも佛の意見。人は歪まず眞直ぐに、後生の種が大事ぢやなア。

〽思ひ續けて行き過ぎしが。

ト彌左衞門行きかゝり、花道に立とまり、思ひ入れ。

〽何思ひけん立どまり、といつおいつの思案、そろりそろりと立戻り、あたりを見廻し見廻して、拔き身を拾ひ、取るより早く、死首發矢と打ち落し。

ト彌左衞門、思ひ入れあつて、取つて返し、持つたる提灯の灯にて、あたりを見廻し、提灯を松の木へ引ッかけ、落ちたる白刃を取上げ、回向の思ひ入れあつて死骸の首を打ち落し、袂より手拭を出して包み、これ

を引ッ提げて立ち上がる。

〽提灯吹き消し首引ッ提げ、忝ないと、彌左衛門、直ぐなる道も横飛びに。

ト提灯を下げて、ツカ／＼と、花道へ行きかけ、思ひ入れあつて、灯を吹き消す。

〽我が家を指して●

ト彌左衛門、切り首を引ッ抱へ、一散に花道へ入る。

三重にて幕

五幕目　釣瓶鮨屋の場

役名 ‖ 彌助實ハ三位中將維盛。若葉の內侍。六代君。鮨屋、彌左衛門。同女房、おつぢ。同娘、お里。梶原平三景時。權太女房、小せん。一子、善太。いがみの權太。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け赤壁、納戸口。上の方、押入れ、まいら戸、これに錠前卸しあり、下の方、鮨桶大分積み重れ、いつもの所に門口、釣瓶鮨といふ看板をかけ、舞臺に、おつぢ、やつし女房、前垂れ襷がけにて、鮨を積んで居る。お里、振り袖、やつし前垂れを締め、竹の皮に鮨を包み居る。門口に鮨買ひの仕出し、二人立ちかゝり、てんつゝにて幕明く

〽立歸る、春は來ねども花咲かす、娘がつけた鮨ならば、なれがよかろと買ひに來る、風味も吉野下市に、賣り廣めたる所の名物、釣瓶鮨屋の彌左衛門、留守の內にも商賣に、抜け目も內儀が早漬けに、娘お里が片襷、裾に前垂れほや／＼と、愛に愛持つ鮎の鮨、押へて締めてなれさする、旨い盛りの振り袖が、釣瓶鮨とは物らしく、締木に栓を打込んで、桶片付けて

ト此うち、仕出し鮨を買ひ、捨ぜりふにて、向うへ入る。兩人、そこら片付け

さと　申し母さん、昨日父さんの仰しやるには、晩には內の彌助と祝言さす程に、世間晴れて、女夫になれと云はしやんしたが、日が暮れてもお歸りないは、嘘かいなア。

つぢ　オヽ、アノ云やる事わいの。なんの嘘であらうぞ。器量の好いを見込みに、熊野詣でから連れて戻つて、氣も心も知ると、彌助と云ふ我が名を讓り、主は彌左衛門

と改めて、内の事任せて置かしやるは、其方と婆はす兼ねての心。今日は俄かに役所から、親仁どのを呼びに來て、思はぬ隙入り、迎ひにやろにも人はなし。

さと　サイナ、折惡ら彌助どのも、方々から鮨の誂らへ、仕込みの桶が足るまいと、空き桶を取りに行かれましたりや、もう戻らるゝであらうわいな。

〽噂半ばへ空桶荷ひ、戻る男の取なりも、悧巧で伊達で、色も香も、知る人ぞ知る優男、娘が好いた厚鬢に、冠り着せても恰からず、内へ入る間も待ち兼ねて、お里は嬉しく。

ト向うより彌助、やつし袖なし羽織の形にて、鮨の空桶を擔ひ、出て來り、舞臺へ來て、門口へ入る。

アレ、彌助さん、戻らんしたか。エヽモウ、待ち兼ねたわいな。なぜマア此やうに、遲かつたのぢやえ。もしやどこぞへ寄つてかと、氣が廻つて、大抵案じた事ぢやないわいな。

〽女房顏して云うて見る、流行鮨屋の娘とて、早い馴れとぞ見えにける。母はにこ／＼笑ひを含み。

つぢ　彌助どの、氣にかけて下さんな。この吉野の里は、辨天の教へに依つて、夫を神とも佛とも、戴いて居よとある、天女の掟。その代り、悋氣も深い、また有やうは親の孫、瓜の蔓にではござらぬわいの。

彌助　これはマア、却つて迷惑。段々お世話の上へ、大切なお娘御まで下され、お禮の申しやうもござりませぬ。さりながら、兎角お前には、彌助どの／＼と、どの付けをなされて、さりとては氣の毒、矢ッ張り彌助、どうせい斯うせいと、お心安う、ナア申し。

つぢ　イヤ／＼、それは免して下され。

彌助　そりや又なぜでござります。

つぢ　さればいの。彌助といふ名は、これまで連合ひの呼び名、どの付けせずに、どうせい斯うせいとは、勿體なうて云ひ憎い。慣れたどの付け、さして下されいの。

〽實に夫をば大切に、思ふ掟を幸ひに、娘へこれを聞けがしの、母の慈悲とぞ聞えける。

ほんにわしとした事が、奥に、まだ仕掛けの用、暫らく店を、頼みましたぞや。

〽母は納戸へ入りにける

トおつぢ、思ひ入れあつて奥へ入る。

さと　コレ、彌助、父さんも母さんも、其方と今宵、祝言させうと仰しやるに依つて、これからは、お里さまお里

さまと、さま附けは止めにして、女房どものお里、と呼び捨てにしてたもいなう。
彌助　イヤ〳〵、滅相もない事仰しやりませ。どうして御主人の娘御を、呼び捨てになりませうぞ。
さと　其やうな事云はずと、云うて見や。
彌助　それでも、どのやうに致します事やら。
さと　そんなら、わたしが教へてあげうほどに、よく覺えて置きなさんせ。
彌助　ハイ〳〵、どうぞお教へなされて下さりませ。
さと　斯うやつて、内へ歸つて來たら、オホン、女房とものお里、いま戻つた、斯う云ふのぢやわいなア。
ト仕方して教へる。
彌助　左樣なら、斯う戻つて、女房どものお里さま、いま戻つた。
さと　アレ、矢ツ張り樣ぢやわいなア。
彌助　そんなら、女房どものお里、いま戻つた。
さと　オヽ、嬉し。
〽割りなき仲と見えにける。この家の惣領、いがみの權太。
ト てんつゝになり、向うより權太、スタ〳〵出て
權太　阿母は内にか。
ト内へ入る。お里、思ひ入れ。
お里　兄さん……ようお出でなさんした。
權太　なんだ、その面は。よく來たが悔りか。わりやア彌助と、巧い事をして居るさうな。コレ、彌助もよく聞け。いま追ひ出されて居ても、家の内の物は、竈の下の灰までおれが物だ。今日は親仁の毛蟲が、役所へ行たと聞いたによつて、ちつと阿母に云ふ事があつて來た。二人ながら奥へ行け。行つて阿母を、ちよつと呼んで來い。エヽ、行きやアがれ。
〽睨み廻され、ウヂ〳〵と、これにと云うて立つ彌助、娘も共に引添うて、一間へこそは入りにけれ。母は一間を立出でゝ。
ト彌助、お里、暖簾口へ入る。おつぢ出て思ひ入れ。
つぢ　わりや權太郎ぢやないか。ほんにマア、目に見るさへも腹が立つ……とつとゝおのれ、うせ居らぬか……南無阿彌陀佛々々々々々々々。
ト奥へ行きかゝるを
權太　モシ〳〵、お母さん、ちよつと待つておくんなさいまし。

トおつぢ、思ひ入れ。

つぢ　何にもわれに用は無い……どうなとしをれ。

ト奥へ行きかける。

權太　ア、、モシ〳〵、ちよつと待つて下さいまし。

ト云ひながら側へ寄る。

つぢ　コリヤヤイ、おのれはマア、勘當受けをつた內へ、ノサ〳〵と遠慮もなう、第一世間へ聞えが悪い。サ、、どこへなと、早う行き居らぬか。

權太　ちよつとのうちは、いゝぢやねえか。偶々來たのに、そんなに邪慳に云ひなさんな。コレ、母さん、聞いてくんなさい。イヤモウ、おれも今度と云ふ今度は、コツキリ上を明けやした。イヤサ、ホツカリしたよ。ア、、恐しい恐しい、無頼漢仲間の友達連れ合ひ、頭無しまで借り込んで、今ぢやア首も作り付けのやうだ。誠にみじめ觀念佛が聞いて呆れらア。人を付け。おれが體が、始末におへなくした。

つぢ　こりや又親仁どのゝ留守を考へ、無心に來たか。性懲りもない關白者、其おのれが心から、嫁御があつても足踏み一つさす事ならぬ。聞きやこの村へ來て居るげなが、互ひに知らねば、摺り合つても嫁姑の明き盲目、眼潰れと人々に、云はれるが面目ない。エ、不所存者め。

へ目に角を、立て替つたる機嫌にぐんにやり、直ぐではゆかぬと、いがみの權太、思案し替へて。

權太　申し、母者人、今晩參つたは、無心ではござりませぬ。お暇乞ひに參りました。

つぢ　そりやマアなんで。

權太　私しは遠い所へ參ります程に、親仁樣もお前樣も、隨分おまめでござりませ。

へ惜れかゝれば、母は驚ろき。

つぢ　遠い所は、そりやどこへ。どうした譯で、何に行くのぢや。

へ根問ひは親の騙され小口、サアしてやつたと目を瞬き

權太　親の物は子の物と、お前にこそ無心申せ、いつに人の物を箸片し、いがんだ事も致しませぬに、不孝の罪か、昨夜わしは、大盗人にあひました。

つぢ　や……、なんと云やる。

權太　サア、その中には、代官所へ上げる年貢、銀三貫目といふもの盗み取られ、云ひ譯もなく仕樣もなく、お仕置にあふよりはと、覺悟極めて居りまする。情ない目にあひました。

〽かます袖をば顏に當て、しやくり上げても出ぬ淚、鼻が邪魔して眼の緣へ、屆かぬ舌ぞ恨めしき、甘い中にも分けて母親、實と思ひ目を擂り

つぢ　鬼神に橫道なしと、年貢金を盜まれ、死なうと覺悟は、また出かした。災難にあふも親の罰、よう思ひ知れよ。

權太　アイ〳〵、思ひ知つては居りますけれど、どうで死なねばなりますまい。

つぢ　コリヤ、ヤイ。

權太　ハイ〳〵。

つぢ　常のおのれが性根ゆゑ、これも騙りか知らねども、しやうぶ分けにと思うた金、親仁どのに隱して遣らう。これではつとり、性根を直し居れ。

權太　アイ〳〵〳〵。

〽そろ〳〵戸棚へ、子の蔭で、親も盜みをする。母の、甘い錠さへ明け兼ねる。

ト二重舞臺へ上がり

つぢ　南無三、こりや錠が卸りてあるが、鍵がなうては。

權太　そりやア、雁首で、コチ〳〵が好うござります。

つぢ　オヽ、器用な子ぢやの。

ト腰より煙管を出す。

〽仕馴れたる、おのが手業を教へる不孝、親は我が子が可愛さに、地獄の種の三貫目、後をくろめて持つて出て。

ト權太、煙管にて錠を叩き明ける。おつぢ、戸棚より銀包みを三貫目通り出し

つぢ　アヽコレ、なんぞに包んでやりたいものぢや。

ト思ひ入れ。

〽限りない程甘い親、うまい和郎ぢやといがみの權太、鮨の空き桶好い入れ物、これへ〳〵と梱子して、金をつけたる黄金鮨、蓋しめ栓しめ。

權太　アヽ、そシ、これがようござります。

ト鮨の空き桶を持ち來る。兩人してこれへ金を入れる。

つぢ　サアよいワ。これで目立たぬ。早う持つて行け。

ト桶を權太へ渡す。

〽親子が工合の最中へ、苦い父親彌左衛門、これも癪持の足の裏、アタフタとして門口を。

ト向うより彌左衛門出て來て、門口へ來て

彌左　いま戻つたぞよ。明けいよ〳〵。エヽ、明けぬかい。

ト門口を叩く。兩人、アタフタ思ひ入れ。

權太　南無三、親仁だ。

トうろたへろ。
〽内にはてんだううろたへ廻り、その桶を爰へ／＼と、空き桶と共に並べて、親子はヒソ／＼、奥と口とへ引分かれ、息を詰めてぞ入りにける。
ト右の桶を空き桶と一緒に併べ、暖簾口へ入る。

彌左　なせ明けぬぞい。早う明けぬかい。

〽頻りに叩けば奥より彌助、走り出て、戸を明ける、内入り悪く、あたりを見廻し。
ト奥より彌助出で來り、捨ぜりふにて門口を明ける。彌左衞門、内へ入り
コリヤ、又どいつも寢て居るか。云ひ付けた鮨どもは仕込んであるか。
〽鮨桶を、提げたり、明けたり、くわつたくわた。
こりや思ふほど仕事が出來ぬわい……マ、、茶を一つ。

彌助　ハイ／＼
ト暖簾口へ入る。彌左衞門、思ひ入れあつて、腰より前垂の手拭に包みし切り首を取出し、鮨の空き桶へ隱し、蓋をして居る。奥より彌助、茶を汲み出て來りハイ、お茶おあがりなされませ。
ト差出す。彌左衞門、恟りして

彌左　オ、……ムウ、茶か。
ト桶を片寄せ、茶碗を取つて、茶を呑みさらして、女房どもやお里めは、何をして居るぞ。

彌助　阿母樣もお里さまも、奥に仕事をなされてゞござりまする……これへお呼び申しませう。
ト奥へ行かうとするを、彌左衞門、留めて

彌左　ア、コレ。
トあたりを見廻し、門口を締め
先づ／＼。
ト彌助を二重舞臺へ直す。
〽内外見廻し、表を締め、上座へ直し、手をつかへ。

彌左　君の親御、小松の内府重盛公の、御恩を受けたる某何卒御子維盛卿の、御行くへをと思ふ折柄、熊野浦にてお出逢ひ申し、月代を勸め、この家へお供申したれども、人目を憚り、下部の奉公、餘りと申せば勿體なさ。女房ばかりに仔細を語り、今宵祝言と申すも、心は娘をお宮仕へ。彌助々々と賤しき我が名をお讓り申したも、彌々助くるといふ文字の緣起。人は知らじと存ぜしに、今日鎌倉より、梶原平三景時來つて、維盛卿を圍まひあると
ト合ひ方。

退引きさせぬ詮議、烏を鷺と云ひ拔けては歸れども、邪智深い梶原、もしや吟味に參らるゝも知れずと、心企みは致しは置けど、油斷は怪我の基。明日からでも、我が隱居所。上市村へお越しあられませう。

〽申し上ぐれば維盛卿。

彌助　父重盛の厚恩を、受けたる者は幾萬人、數限りなきその中に、おことがやうな者あらうか。昔は如何なる者なるぞ。

〽訊ね給へば。

彌左　私しめは平家盛りの折柄、唐土育王山へ育堂金をお渡しなさるゝ時、音頭の瀬戸にて、三千兩の金盜み取られ、後日の詮儀、切腹にも及ばん所、有り難いは重盛さま、日の本の金、唐土へ渡す我れこそは、日の本の盜賊と、御身の上に被給ひ、重ねてなんの祟りもなく、お暇を下され、親里へ立歸つて、由緒ある鮨商賣、今日を安樂に暮らせども、悴權太郎めが盜み騙り、殺生の報いぞと、思ひ知つたる身の懺悔。お恥かしうござります。

〽語るに付けて維盛も、榮華の昔父の事、思ひ出され御膝に、落つる涙も痛はしき、娘お里は今宵待つ、月の桂の殿もうけ、寢道具抱へ立出づれば、主はハッと泣く目を隱し。

ト暖簾口よりお里。着布團、二つ枕持ち出し來る。兩人、思ひ入れ。

彌左　コレ、彌助、いま云ひ聞かした通り、上市村へ行く事を、必らずともに忘れまいぞ。今宵はお里と、爰にゆるり。嬶とおれとは離れ座敷、遠いが花の香がなうて、ア、氣樂にあらう、ハヽヽヽ。

〽打笑ひ、奧へ行くのも娘は嬉しく

ト彌左衛門、奧へ入る。彌助、お里殘り

さと　ほんにマア、粹な父さん。離れ座敷は隣り知らず、餅搗きませうと、オヽをかし……ホヽヽヽ、此方は爰に天井拔け、寢て花せう。

〽蒲團敷く、維盛卿はつく〴〵と、身の上、又は都の空、若葉の內侍や若君の、事のみ思ひ出されて、心も澄まず氣も浮かず、打悄れ給ひしを、思はせぶりと、お里は立寄り。

これはマア……エヽ、辛氣な。何案じておやぞいなア、二世も三世も固めの枕、二つ並べて、こちや寢よう。モシ、お月さんも、もう寢たぞえ。

〽先へころりと轉び寢は、戀の罠とぞ見えにけり。維盛

文政十二年三月　中村座所演

五世瀬川菊之丞のお里　　三桝源之助の彌助

枕に寄り添ひ給ひ
　トお里、二枚折り屏風を立て、蒲團着て寢る。
彌助　これまでこそ假の情、夫婦となれば二世の縁、結ぶに辛き一つの云ひ譯、何を隱さう某は、國に殘せし妻子あり、貞女兩夫に見えずの、掟は夫も同じ事、二世の固めは、免してたも
〽流行小袖の綺子とて、解けたやうでもどこやらに、親御の氣風殘りける、神ならず佛ならねば、それぞとも、知らぬ道をば行き迷ふ、若葉の内侍は若君を、宿ある方に預け置き、手負ひの事も頼まんと、思ひ寄る身も縁の端、この家を見かけ、戸を打ち叩き。
　ト向うより若葉の内侍、六代の手を引き出で來り、門口へ來て
若葉　頼みませう……一夜の宿を頼むわいの。
〽一夜の宿をと乞ひ給へば、維盛は、好い退き汐と表の方、叩く扉に聲を寄せ。
彌助　この内は鮨商賣、宿屋ではござらぬわいの。
〽愛想の無いが愛想となり。
若葉　イヤ申し、幼ないを連れた旅の女、是非に一夜を頼むわいの。

〽是非に一夜とのたまふにぞ斷わり云うて歸さんと、戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、ハッと戸をさし、内の樣子、娘の手前も訝かしく、そろ〳〵立寄り見給へば、早くも結ぶ夢の體、表に内侍は不思議の思ひ。
若葉　今のはどうやら我が夫に、似たと思へど、形かたち、頭も青き下男、よもやマア。
〽よもやと思ひ給ふうち、戸を押し開いて維盛卿。
彌助　若葉の内侍か、六代か。
若葉　さては我が夫。
六代　父樣かいなう。
〽なう懷かしやと取縋り、詞は無うて三人が、泣くより外の事ぞなき。
彌助　先づ〳〵内へ。
〽先づ〳〵内へと、密かに伴ひ。
今宵は取分け、都の事を思ひ暮らして居たりしが、親子ともに息災で、不思議の對面、さりながら、某この家に居る事を、誰が知らせしぞ。殊に又、はる〴〵の旅の空供を連れぬは、何とも以て。
〽訊ね給へば若葉の君。
若葉　都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、一

天保二年八月市村座所演　尾上梅之丞の内侍

門殘らず討死と、聞く悲しさも嵯峨の奥、泣いてばつかり暮らせしに、高野とやらんに在すると、云ふ者があるにゑに、小金吾召連れお行くてを、志す道、追手に出逢ひ．

〽可哀や金吾は深手の別れ、頼みの力も無い中に。巡り逢うたは嬉しいが、三位中將維盛さまが、袖の無いお衵織に、このお頭は何事ぢやいなう．

〽むせび絶入り給ふにぞ．面目なさに維盛も、額に手を當て袖を當て、伏し沈みてぞ在します、泪の内にも若葉の君．臥したる娘に目を付け給ひ。

若葉　若い女中の寢入り端、殊に枕も二つあり、定めてお伽の人ならん。斯くゆるがしきお暮らしなら、都の事も思し召し、風の便りもあるべきに、打捨て給ふは、お胴慾でござりまするわいなう。

彌助　それも心にかゝりしかど、父の落ち散る恐れあり．分けてこの家の彌左衛門．父重盛への恩報じと、我れを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情．何かな一禮返禮と、思ふ折柄、娘の戀路、つれなく云はゞ過ちあらん、却つて恩が仇なりと．假の契りは結べども、女は嫉妬に大事を漏らすと、彌左衛門にも口留めして、我が身の上を明かさず、仇な枕も、親への義理。

〽義理にこれまで契りしと、語り給へば臥したる娘．堪え兼ねしか聲上げて、ワッとばかりに泣き出だす、こは何ゆゑと驚ろく內侍．若君引連れ．逃げ退かんとし給へば．

ト　お里、起き上がり

さと　ア、モシ、マア、お待ちなされて下さりませ．

〽涙と共に、お里は駈け寄り。

先づ／＼これへ。

〽內侍若君上座へ直し。

私しは里と申して、この家の娘．いたづら者．憎い奴と、思し召されん申し譯、過ぎつる春の頃、色珍らしい草中へ、繪にあるやうな殿御のお出で。

〽維盛さまとは露知らず、女の淺い心から。

可愛らしい、愛しらしいと

〽思ひ染めたが戀の元。

父も聞えず母さんも、夢にも知らして下さんしたら、例へ焦れて死ぬればとて。

〽雲井に近き御方へ、鮨屋の娘が惚れらりよか。

一生連れ添ふ殿御ぢや、と、思ひ込んで居るものを、二世

の詞とは叶はぬ、親への義理に誓つたとは、情ないお情
に
〽あづかりましたと撞と伏し、身を慄はして泣きければ、
維盛卿は氣の毒と、内侍も道理の詫び涙、乾く間もなき
折からに、村の役人馳け來り、戸を叩いて。
ト向うより、宿役人出で來り、舞臺へ來て、門口を叩
き
役人　コレ／＼、いま爰へ鎌倉から、梶原平三さまがお出
でなさる。内を掃除して置かつしやれ。必らず麁相のな
いやうに、さつしやれや。
〽云ひ捨てゝこそ立歸る。人々ハッと泣く目も晴れ、如
何はせん、假の御夫、お里はさそくに心付き。
ト宿役人、引返して入る。
さと　先づ／＼親の隱居屋敷、上市村へ、早う／＼。
〽と氣をあせる。
彌助　實にその事は彌左衛門、我れにも敎へ置きしかど、
とても開かぬ平家の運命、檢使を引受け潔う、腹掻き切
らん、さうおや。
ト腹切らうとする。内侍、留めて、
若葉　コレ、お待ち遊ばせ。この若のいたいけ盛りを、思
し召し、一先づ爰を。
〽と無理矢理に、引立て給へば維盛も、子に引かさるゝ
後ろ髪、是非なくその場を落ち給ふ、御運の程ぞ危ふけ
れ。
ト彌助、内侍、六代の手を引き三人とも向うへ入る。
〽様子を聞いたかいがみの權太、勝手口より跳り出で、
ト暖簾口より、權太、ツカ／＼と出で來り
權太　お觸れのあつた、内侍、六代、維盛彌助め、ふん縛
つてくれべいか。
〽尻引ッからげ馳け出すを、
さと　コレ、待つて下さんせ。兄さん、これはわたしが一
生の願ひ。どうぞ見遁がして下さんせいなア
ト縋る。
權太　べら坊め、大金になる仕事だワ。エヽ、退きやアが
れ。
〽縋るを蹴飛ばし蹴り飛ばし、最前置きし金の鮨桶、こ
れ忘れてはと引ッ提げて、後を慕うて追うて行く。
ト權太、お里を蹴飛ばし、以前の鮨桶を引ッ抱へ、門
口へ出て、一散に向うへ入る。
さと　申し、父さん……母さんイなう。

文政十一年七月　市村座所演

岩井粂三郎のお里　　七世市川團十郎の權太

〽呼ぶ聲に、彌左衞門、母も駈出で。
ト奥より彌左衞門、おつぢ、出で來り
兩人　ヤア、娘、何事ぢやぞいの。
さと　申し、先刻都から、維盛さまの御臺若君、尋ねさまよひお出であり、積る話しのその中へ、詮議に來ると知らせを聞き、三人連れて上市へ、落しまするを情ない、兄さんが聞いて居て、討取るか生捕つて褒美にすると、たつた今、追ひ駈けてござんしたわいなう。
〽云ふより[illegible]り彌左衞門。
彌左　そりや一大事ぢや。ソレ、脇差寄越せ。
トお里、戸棚より脇差を持つて來て、彌左衞門に渡す
〽嗜みの朱鞘の脇差、腰にぼツ込み、駈け出す向うへ。
ト彌左衞門、一腰を差し、ツカ／＼と花道へかゝる。
〽矢筈の提灯、梶原平三景時、家來數多に十手持たせ、道を塞いで、
ト時の太鼓になり、向うより景時、陣羽織、手甲、臑當うしろ鉢卷、凜々しき形にて、重ね草鞋にて、采を持ち出で來る。軍兵二人、袖なし羽織を着たる形にて矢筈の紋付き、高張り提灯を持ち、後より捕込み四天の捕り手四人付き、出で來り、花道にて、彌左衞門に行き合ひ、キッとなつて
景時　ヤア、老ぼれめ、何所へ行く。逃げるとて逃がさうか。
〽追取り卷かれて、ハッと吐胸、先も氣遣ひ、爰も遁がれず、七轉八倒、心は早鐘、時に時つく如くなり。
ヤア、此奴横道者。おのれ今日、維盛が事詮議すれば、存ぜぬ知らぬと云ひ拔ける。其まゝにして歸せしは、思ひ寄らず踏み込まう爲、この家に維盛隱まひある事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打ち、取るものも、取り敢へず來れども、油斷の體は、おのれを取逃がすまい爲。サア、首討つて渡すか。但し違背に及ぶか。返答ぶて。ド、どうだ。
〽責め付けられ、叶はぬ所と胸を据ゑ。
彌左　成る程、一旦は隱まひないとは申したれども、餘り御詮議が強いゆゑ、隱しても隱されず、はや先達て首討ちましてござります。御覽に入れるでござりませう。何を申すも爰は門中。マヽヽ、これへお通り下さりませ。
ト皆々舞臺へ來り、内へ入る。
〽伴ひ入れば母娘、どうなる事と氣遣ふうち、鮨桶引ッ提げ・彌左衞門、靜々出でゝ向うに直し。

ト梶原、上の方へ通ろ。彌左衛門、桶を取出し、梶原の前へ直し

彌左　三位維盛の首、お受取り下されい。

〽蓋を取らんとする所へ、女房駈け寄り、ちやつと押へ。

つぢ　アヽコレ、親仁どの、この桶の中には、わしがちやつと大事の物を入れて置いた。こなさん、明けてどうさつしやる。

彌左　オヽ、われは知るまい。この桶には、最前維盛卿のお首を討つて、入れて置いた。

つぢ　イヤ〳〵、この桶には、こなたに見せられぬ物があるわいの。

彌左　エヽ、おのれが、何にも知らぬからぢや。

つぢ　イヤ、こなたが知らぬゆゑぢやわいの。

ト兩人爭ふ。

〽爭ひ果てねば梶原平三。

景時　ヤア〳〵、さては此奴等、云ひ合せ、巧んだな、拵らへたな。ソレ、者ども、括れ。

家來　ハツ……動くな。

ト取巻く。

〽縛れ括れと下知の下、捕つた〳〵と取巻く所に。

權太　維盛夫婦、餓鬼めまで、いがみの權太が、生捕りました。

〽討取つたりと呼ばはる聲、ハツとばかりに彌左衛門、女房娘も氣は狂亂、いがみの權太は嚴めしく、若君內侍を猿縛り、宙に引立て目通りに、どつかと引据ゑる。

ト權太、鮨桶を抱へ、內侍六代を縛つて出てくる。

親仁の賣僧が三位維盛を、熊野浦より連れ歸り、道にて頭を剃りこぼち、青二才にして彌助と名を替へ、この節は嫌らしい聟詮索。生捕つて面恥と存じたに、思ひの外手強い奴、村の者の手を借りて、やう〳〵と討取つて、首に致して持參仕りました。御實檢下さりませう。

ト桶を景時の前へ差出す。景時、首を見る事あり

景時　成る程、月代を剃りこぼち、彌助と云ふとは存じながら、先達て云はぬは、彌左衛門めに、思ひ迷ひをさゝう爲。聞き及んだいがみの權太、惡者と聞きしが、お上へ對しては忠義の者。出かした〳〵……內侍六代生捕つたな。ハテ、好い器量。夢野の鹿で思はずも、女鹿子鹿の手に入るは、天晴れの働らき。褒美には、親彌左衛門めが命救してくれう。

權太　アヽ、モシ、親の命位を救してもらはうと思つて、

弘化四年九月　河原崎座所演

六世松本幸四郎の權太　四世中村歌右衛門の梶原

この働らきは致しませぬ。
景時　ムウ、すりや、親の命は取られても、褒美が欲しい
か。
權太　ハテ、親の命は親と相對、私しには、どうぞお金を
お願ひ申します。
景時　ハテ、小氣味の好い奴。褒美くれん。
〽着せし羽織、脱いで渡せば佛頂面。
ト景時、着せし陣羽織を脱ぐ。家來取つて、好き所へ
置く。
コリヤ、その羽織は頼朝公のお召替へ。何時でも鎌倉へ
持參せば、金銀と釣替へ。そくたくの合ひ紋。
權太　成る程、當時は騙りが流行るから、こりや二重取り
をさせぬ分別。ハテ、好くしたものだなア。
〽縄付き渡せば受取つて、首を器に納めさせ。
ト内侍、六代を渡す。捕り手受取り、兩人へ縄を扣へ
る。首桶を持ちし捕り手、右の切り首を取つて、首桶
へ納め、景時は悠々と下へ來り
景時　コリヤ、權太、彌左衛門一家の奴等は、暫らく汝に
預けるぞ
權太　お氣遣ひなされますな。貧乏動ぎもさせる事ぢやア

ござりませぬ。
景時　ハテサテ、健氣な……縄付きを引ッ立てい。
家來　ハア。
〽褒めそやして梶原平三、縄付き引立て立歸る。
ト三重、時の大皷になり、提灯持ち先に景時、花道へ
かゝる。後より内侍、六代、捕り手兩人、この縄を扣
へ、後より同じく捕り手、首桶を引ッ抱へ、この人數
花道へ入る。權太、門口より後見送り
權太　ア、コレ／＼、その次手に、褒美の金を忘れて下
さりますな。お頼み申します。
〽見送る隙間、油斷見合せ彌左衛門、憎さも憎しと引ッ
抱へ、グッと突ッ込む恨みの刃、ウンと仰向に反り返る
見るに親子はハアはつと、憎いながらも悲しさの、母は
思はず駈け寄つて。
ト彌左衛門、一腰を拔き、權太の脇腹へグッと突き立
てる。
つぢ　コレ、天命知れや、不孝の罪、思ひ知れ。
〽思ひ知れやと云ひながら、先立つものは涙にて、伏し
沈みてぞ泣き居たる、彌左衛門齒噛みをなし。
彌左　泣くな女房、なに吠える。不便なの可哀いのと云う

て、こんな奴を生けて置けば、世界の人の大きな難儀ぢや
わい。門端も踏ますなと、云ひ付け置いたに、內へ引入
れ、大事の〳〵維盛さまを殺し、內侍さまや若君を、よ
う鎌倉へ渡したな。腹が立つて〳〵、淚がこぼれて、胸
が裂けるわい。三千世界に子を殺す、親と云ふのはおれ
ばかり、天晴れ手柄な因果者に、ようしをつたな。

權太　コレ、親仁どの、こなたの力で、維盛を、助ける事
は、叶はぬ〳〵。

彌左　コリヤヤイ、今日幸ひと別れ道の、傍らに手負ひの
死人、好い身替りと首討つて戾り、この中に隱し置いた。
コリヤ、これを見居れ。

〽鮨桶取つて打明ければ、グワラリと出たる三貫目。

ト以前の鮨桶を明ける。中より、隱せし三貫目、バラ
バラと出る。彌左衞門、惘りして

ヤア、こりや金ぢや。こりやどうぢや。

〽呆れ果てたるばかりなり、手負ひは顏を打眺め。

權太　おいとしや、親仁樣。私しが性根の惡さに、御相談
の相手もなく、前髮の首を總髮にして渡さうとは、料簡
違ひの危ない所、梶原程の侍ひが、彌助と云うて青二才
の、男に仕立てある事を、知らいで討手に來ませうか。
それと云はぬは彼方も企み。維盛さま御夫婦の、路銀に
せんと盜んだ金、重いを證據に取違へた鮨桶、明けて見
たれば中には首、ハッと思へどこれ幸ひ、月代剃つて突
き付けたは、矢ッ張りお前が、仕込みの首。

彌左　ムウ、その又根性で、御臺若君に繩をかけ、なぜ鎌
倉へ渡したぞ。

權太　オヽ、そのお二人と見えたのは、この權太めが女房、
忰。

彌左　ヤア。して〳〵、維盛さま御夫婦、若君は何所に。

權太　オヽ、逢はせませう。

〽袖より取出す一文笛、吹き立つれば、折よしと維盛卿
內侍は茶汲みの姿となり、若君連れて駈け付け給ひ

ト權太、袖より一文笛を出して吹く。下の方より、維
盛。內侍は小せん、六代は善太の形に着替へ、出で來
り

維盛　彌左衞門夫婦の衆、權太郞へ一禮を。

ト權太を見て

若葉　ヤア、手を負うたか。ホイ。

ト惘りする。

〽手を負うたかと驚ろくも、お替りないかと惘りも、一

度に興をさましける、母は悲しさ手負ひに取付き。
つぢ　斯程正しき性根にて、人に疎まれ謗らるゝ、身持ちはたぜにしてくれた。常が常なら連合ひも、むざと手疵は負はせまい、酷い事ぢや、酷いわいなう。
〽悔み歎けば權太郎。
權太　ヤレ、そのお悔み、無用々々。常が常なら梶原が、身持喰うては騙りませぬ。まだそれさへも疑うて、親の命を褒美にくれう、忝ないと云ふと早、詮議に詮議をかける所存、いがみと見たゆゑ油斷して、一杯喰うて歸りしは、寅ひも三年と、惡い性根の年の明け時、生れ付いて諸勝負に魂ひ奪はれ、今日もあなたを二十兩、騙り取つたる荷物の内、恭々しくも高位の繪姿、彌助に顏の生寫し、合點ゆかねど母人へ、金の無心を囮に入込み、忍んで聞けば維盛卿、御身に迫る難儀の段々。爰で性根を改めずば、いつ親人の御機嫌に、あづかる時節もあるまいと、打つて替へたる惡事の裏。維盛さまの首はあつても、内侍若君の代りに立つる人もなく、途方に暮れし折柄に、女房小せんが伜を連れ、親御の勘當、古主への忠義、なにうろたへる事がある、わしと善太をコレ斯うと、手を廻すれば伜めも、母さんと一緒にと、共に廻した縛り繩、かけても／＼手が外れ、結んだ繩もしやら解け、いがんだおれが直ぐな子を、持つたは何の因果ぞと、思うては泣き、諦めては泣き、後手にしたその時は、心は鬼でも蛇心でも、堪え堪えし血の涙、可哀や不便や女房も、ワッと一聲、その時は、この血を吐きましたわいの。
〽血を吐きましたと語るにぞ、力み返つて彌左衛門、
彌左　聞えぬぞや權太郎、孫めに繩をかける時、血を吐く程の悲しさを、常に持つてはなぜくれぬ、廣い世界に嫁一人、孫と云ふのは彼奴一人、子供が大勢遊んで居れば、親の顏を目印に、苦みの走つた子があるかと、尋ねて見ては、コレ／＼子供衆、權太が子供は居ませぬかと、問へば子供は、どの權太、家名は何と尋ねられ、おれが口からまんざらに、いがみの權とはえゝ云はず、惡者の子ぢやゆゑに、跳ね出されて居るであらうと、思ふ程猶其方が憎さ。いま直る根性が、半歳ばかり前に直つたら、ナウ、婆。
つぢ　親仁どの……嫁や孫の顏、見覺えて置かうのに。
彌左　オヽ／＼／＼、おれも、それぼつかりが。
〽それぼつかりと咽せ返り、ワッとばかりに泣き沈む、

心ぞ思ひやられたり、内侍は始終御涙、維盛卿は身に迫る、いとゞ思ひに搔き暮れ給ひ。

惟盛　彌左衛門が歎き、さる事なれども、逢うて別れ、逢はで死するも皆因緣。汝が討つて歸りたる、首は主馬の小金吾とて、内侍が供せし譜代の家來。生きて盡せし忠義は薄く、死んで身替る忠勤厚し、これも不思議の因緣づく。

〽語り給へば、

彌左　てもさても、そんなら、これも鎌倉の奴等が仕業であらう。

維盛　オヽ、云ふにや及ぶ、右大將頼朝が、威勢に憂る無得心。一太刀恨みぬ、殘念至極。

〽怒りに交る御涙、實にお道理と彌左衛門、梶原が預けたる、陣羽織を取出し。

彌左　オヽ、幸ひ頼朝が着替へとて、褒美の合ひ紋に殘し置きしこの羽織、ズタ〳〵に引ツ裂いても、御一門の數には足られど、一裂きづゝ御手向け……サア、遊ばせ。

ト以前の陣羽織を取つて差出す。

維盛　ナニ、頼朝の着替へとや、

ト羽織を取つて

晉の豫讓が試しを引き、衣を刺して一門の、恨みを晴らさん、思ひ知れ、

〽御佩刀に手をかけて、羽織を取つて引上げ給へば、裏に模樣か歌の下の句。

ト羽織を取つて、裏に目を付け

「内や床しき、内ぞ床しき」と、二ッ並べて書きたるは……ハテ心得ぬ。この歌は小町が詠歌、雲の上にありし昔に替らねど、見し玉垂れの内や床しきとありけるを、その返しとて、人も知つたるこの歌を、物々しく書きたるは心得ず。殊に梶原は、和歌に心を寄せし武士、内や床しきとは、この羽織の、縫ひ目の内ぞ床しき。

〽襟際付け際切り解き、

ト維盛、短刀にて、羽織の裏を切り解く。中より淨土袈裟、法衣、水晶の珠數、出る。維盛取上げ

維盛　こりやコレ、袈裟衣、珠數まで添へて、入れ置いたは。

彌左　こりやどうぢや。

〽こは如何にと呆れる人々、維盛卿

惟盛　ホウ、さもさうず、さもあらん。保元平治のその昔、我が父小松の重盛、池の禪尼と云ひ合せ、死罪に極まる

賴朝を、命助けて伊東へ流人、その恩報じと維盛を、助けて出家させよとの、鸚鵡返しか恩返しか。ハア、敵ながらも賴朝は、天晴れな大將。

〽見し玉垂れの內よりも、心の內の床しさや。

ト衣を取上げ

これとても父重盛のお庇。エヽ、忝ない。

〽喜び給ふぞ道理なる、人々ハツと喜び淚、手負ひの權太は這ひ出で摺り寄り、

權太　及ばぬ智惠で梶原を、誑かつたと思ひしが、彼方が何も皆合點。思へばこれまで騙つたも、殺す命をかたらるゝ、種と知らざる淺ましさ。

〽悔みに近き終り際。

維盛　維盛もこれまでは、佛を騙つて輪廻を離れず、離れる時は今この時。

〽髻りフッツと切り給へば、內侍若君取縋り。

ト維盛、小さ刀を出し、髮を切る。

若葉　共に尼とも姿を替へ

さと　せめてはお宮仕へなりと

若葉　お許しなされて

兩人　下さりませせ。

〽願へば叶はず、打拂ひ〳〵。

維盛　內侍は高雄の文覺へ、六代が事頼まれよ。お里は兄に成り替り、親へ孝行肝要なるぞ。

〽立ち出で給へば彌左衛門。

彌左　女中の供は、年寄りの役。

〽諸ともに旅用意、手負ひを痛はる母親が。

つぢ　アコレ、つれない親仁どの、權太郎が最期も近し。死目に會うて下されいの。

〽留めるにせき上げ彌左衛門。

彌左　現在血を分けた悴を手にかけ、どう死目に會はれうぞ。死んだを見ては一足も、步かるゝものかいの。息ある內は叶はぬとても、助かる事もあらうかと思ふが、せめての力草。留める其方が、胴慾ぢやわいなう。

〽云うて泣き出す父親に、母は取分け、娘は猶、不便不便と維盛の、首に輪袈裟、手に衣。

維盛　手向けの文も阿耨多羅。

彌左　三藐三菩提。

若葉　高雄。

維盛　高野へ

さと　引分くる。

彌左　夫婦の別れに
つぢ　親子の名殘り。
〽手負ひを見送る顏と顏、思ひはいづれ大和路や、芳野
に殘る名物に、維盛彌助といふ鮨屋、今は榮ふる花の里、
その名も高く、
ト維盛、花道。若葉六代、彌左衞門付いて東の歩みへ
かゝる。段切れにて、
〽あらはせり　　　　よろしく幕
ト幕の外。三重になり、双方、揚げ幕へ入る。
　　　　　　シヤギリ

六　幕　目　　芳野山道行の場

淨瑠璃「新曲初音旅」　　常磐津連中
役名――變姿、靜御前　馬士、高名の六藏。子供、
太郎松。同、おちよぼ。庄屋、三之助。佐藤四郎
兵衞忠信。

本舞臺、三間の間、一面の淺黄幕。上の方に高札場
それより下にかけて板松、好き所に、これより芳野
道と書いた、榜示杭。爰に百姓四人、股引がけ或ひ
は脚絆にて、鍬鋤を持ち、こなたに庄屋三之助、尻
からげにて、煙管を持ち、立ちかゝり、話して居る
體。馬士唄にて、幕明く。

百姓　ヤレ〱、小旦那、この間は行き逢ひませぬな。
皆々　どこへマアござりました。
三之　イヤ、長谷の町まで用があつて、いま歸りでござる
て。
皆々　そりや御苦勞でござりました。
三之　その御苦勞で宿老も、この間は粉になりました。今
日も長谷で、鎌倉のお役人樣にお目にかゝつたが、これ
からわれが方へ、段々に廻つて行くとある事ゆゑ、イエ
モウ、維盛や若葉の御詮議なら、その事はもう濟んでし
まひましたと云つたれば、イヤ〱、今度は義經の妾靜
御前の事だといふ事で。
　ト云ひながら懷より書き物を出す。
百姓　ヘエ、その靜御前とやらを、どうしますな。
三之　サア、そりやア、マア、讀んで見ると知れるげな。

どうでこの村方へも、廻るでござらうが、お觸れ書のはまち物に、一遍開いて置かつしやい。

ト書き物を廣げ、逆さまに見る。

皆々　ア、、モシ／＼、それぢやア、逆さまだ／＼。

三之　ハテ、そりやア合點だが、こりやアこなた衆が、無筆ぢやアないかと試して見たのだ。

百姓　要らぬお世話だ。

皆々　サア／＼、讀んで聞かさつしやい／＼。

トせたげる。三之助、困つた思ひ入れ。此うち又、馬士唄になり、向うより六藏、馬士の形にて、腰へ沓を付け、啣へ煙管にて出で來り、直ぐに舞臺へ來る。三之助を見付け

六藏　こりやア下市の小旦那、三之助さま、何をしてござります。

三之　オ、、六藏か。おれが長谷まで行つた歸り道で、お觸れ書を受取つたから、支配下ではなけれども、この豐浦村の甚太郎は馴染みゆゑ、皆の衆へも結緣のため、それを讀んで聞かさうと思つてよ。

六藏　そして、そのお觸れは、マア、なんの事でござんすえ。

三之　さればサ、義經のお妾、靜御前とやらが、この道へ來たとの事。捕まへて出せば、御褒美を下さるげな。委細はこの書いた物を讀むと知れるさうな。

六藏　アノ、そんならそれを讀むと……ドレ。

ト取る。

三之　コレ／＼、六藏、おぬしやア馬方で居ながら、それが讀めるか。

六藏　サア、むづかしくない字さへありやア、どうか斯うか讀みますのサ。

皆々　そりやア隅にやア置かれない。

三之　眞中へ出て讀むが好い。

ト引ッ張つて六藏を眞中へ出す。六藏、書き物を披き

六藏　エヘン……淨瑠璃名題、戀と忠義の道行を、新曲初音の旅。

皆々　ヤア、、。

ト膽を潰す。

三之　イヨ、六藏さま、東西々々／＼。

六藏　淨瑠璃太夫、常磐津太夫誰れ／＼、三味線岸澤誰れ誰れ。相勤めます役人。

三之　ハテ、見かけに依らないものだ。

六藏　瀨川菊之丞、坂東玉三郎、坂東三津五郎、座元市村羽左衞門。
皆々　ヤンヤ〳〵。
三之　みんな讀んだの。
六藏　この位の事はお茶の子だ。併し、この中に、坂東三津右衞門がありさうなものだが、よい〳〵、たとへ名は無くつても、靜と見たなら、淨瑠璃へ出かけて、引ッ捕まへて褒美の金。
百姓　さう巧く行けば好いが。
三之　それ〳〵、忠信とやらいふ强い侍ひが付いて居るとの事。なまじい手を出して、怪我でもせぬやうにするがよいぞえ。
百姓　さうだ。觸らぬ神に祟りなし。
皆々　此方は畑の仕事にかゝりませう。
六藏　ハテ、爰らが一六勝負、氣の弱い衆達だ。
三之　そんなら六藏、おれは歸るから、褒美を貰つたら、裾分けをしやい。
皆々　蟲の好い。
三之　サア、そこらまで一緒に行きませう。
ト始終、馬士唄の合ひ方にて、三之助、百姓、捨ぜりふ云ひながら、向うへ入る。六藏殘つて
六藏　とても、あんなひやうたくれ等にゆかない仕事。なんでも靜を捕まへて、義經が在所を訴人すりやア、また褒美。こいつは兩手に旨い物、奇妙。
ト大きな聲して、我れ知らず云ひ。
藤八五文のやうだ。ハヽヽヽ。
ト馬士唄になり、こなしあつて、下座へ入る。矢張りこの鳴り物にて、チョン〳〵と高札場板松とも引いて取り、淺黃幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、高足の草土手、舞臺先より花道へかけて、土手板、これに春草のあしらひ。日覆より櫻の吊り枝を下し、この草土手に常磐津連中居並び、この道具に納まると、直ぐに淨瑠璃、
〽昔を今になす由も、假名で和らぐ姥嫗の、里は芳野の中道を、その名所も茂りあふ、春の山邊を打連れて。
ト摺り鉦入り、草笛の浮いた合ひ方になり、向うより、太郎松、さら毛の鬘、やつし、手甲、脚絆、草鞋の形にて、鉢卷を締め、鎌を差し、櫻の枝を折り添へし柴を擔ひ、後よりおちよぼ、同じさら毛の鬘、田舍娘の

振り袖を後へ挾み、手覆、脚絆の形にて、これも柴を脊負ひ、出て來り、兩人花道へ留る。

〽氣儘お轉婆、我まゝ育ち、賤の手業も習ふより、馴れた道もせ脇ひらも、水の溜りて岩角木の根、思はず躓きあいたしこ、文にや及ばぬちよと袖ひきやれさ、晩の合ひ圖に目で覺る、鄙の小唄もませた同士、やがて性根に奈良柴に、花折り添へて、くる／＼と、遊びまじくら擔ひ來て。

ト兩人、振りあつて、舞臺へ來り

おち　コレ、太郎松さんお前の花は見事ぢやが、どうぞわたしに下さんせぬか。

太郎　なんの、おちよぼ、それ程好い花持つて居ながら、まだこの花が欲しいかや。

おち　サア、わしが花より、その花が美しいゆゑ、それでアノ。

太郎　そんなら爰で、その花とわしが花とを、蟲拳で

おち　ほんに、こりや好からうわいな。

ト兩人柴を下ろし、互ひに櫻を出して、虫拳をする。

〽都を後にはる／＼と、戀と忠義を一筋に。

直ぐに淨瑠璃

ト三味線入りの次第になり、向うより靜御前、裲襠の上より抱へを締め、鼓を脊負ひ、市女笠を持ち、銀張りの杖を突いて出て

〽靜と云へど人傳の、噂よ杖よ栞にて、心が道を急がれて、早くも君に靑丹よし、奈良の一夜の枕にも、せめて筐の鼓の音、可愛い／＼の袱紗物、明けて云はれぬ思ひより、包むに餘る床しさの、いつか／＼と遣る瀨なく慕ひ行く手に、やう／＼と、辿りてこそは着き給ふ。

ト振りあつて、舞臺へ來り、此うち太郎松、おちよぼ、虫拳をして居て

太郎　わしが勝ぢや／＼。

おち　イエ／＼、わしが。

ト兩人、花を持つて、云ひかゝり、喧嘩の模樣。靜御前、來かゝり、これを見て、中へ分け入り

靜　アヽ、コレ／＼、何か知らぬが、そのお二人の諍ひを、貰ひませうわいの。

おち　アイ／＼、見れば美しいお女中樣が、取さへて下さる事ぢやに依つて

太郎　それ／＼、もう喧嘩しやア致しませぬ。

おち　矢ッ張りこれから

太郎　中好し小よし。

ト兩人、指切りをする

靜　それがよい〳〵。さうして爰から、アノ芳野へは、どれ程あるや。

おち　アイ、これから先は僅かな道。そんならお前は都から、花を見にお出でかえ。

靜　サア。

ト思ひ入れ

おち　初めてお出でのお方なら、お山のあらまし、わたしらが。

靜　ほんに、それが聞きたいわいなう。

おち　そんならお話し

兩人　申しませうか。

〽流れては、妹脊の山のなか〳〵に、詠めもよしや芳野川、控えて六つ田と夕しでの、神のお好が麓より、咲き初めて百町程、奥の院まで皆櫻。〽これは〳〵と右に取り、四手掛けの宮七曲り、爰で見るのが日本が花、アレ御船山、藤井坂、景色も一入吉水院〽そこらで先ヶ燈籠の辻、見上ぐるこなたの花矢櫓、うつかり立の尾、子守りの神脊に小櫻おんぶして、あの山越えて谷越えて〽たが岩倉や躑躅が岡〽櫻本には勝手の明神〽昔男見の幕の内、ころりんしやんの琴のつれ〽天女とやらが袖振る山、五節の舞とか云ふわいな〽お江戸流行りはしん〳〵舞〽金峯山には山伏の、逆の峯入り順の峯。

ト謠らへの手踊りになり

〽今を盛りとめでたい花が、咲いたよしの〽そりやどこに〽こちのお山に黄金の花が、やろか一枝家土産に〽嘘であろ〽嘘ぢやごんせぬ、南無藏王權現さんと拜まんせ〽さうぢやかえ有り難や、振りも好い中、中好しの、二人はこれにと云ひ捨てゝ、家路へこそは。

ト兩人よろしくあつて、銘々、柴を擔ひ、下座へ入る。靜御前、後見送り、思ひ入れあつて

靜　マア、ほんに子供といふものは、話して居ると思ふうち。ても、せうどのない者ではある。それはさうと忠信どのは、先刻から何してぞ。それ〳〵、斯う云ふ折の道の伽、我が君さまより賜はる鼓、せめて心を……オオ、さうぢや。

ト靜御前、包みより鼓を取出す。

〽帛紗解く〳〵初音の鼓、せめて調べて現にも、三ツ地

か長地の道もせを、遅れ走せなる忠信が。

ト雷序の頭ばかり打ち、直ぐに三味線入りの宮神楽にて、向うより忠信、着流し・おしよぼからげの形、手甲、股引・草鞋にて、鎧の包みを背負ひ、簑笠を持ち出で来り、花道に留る。

〽しやんと出立も、小切り目に、軽い取形、風呂敷を、仰せは重き君は今、彼所に菫咲きまさる、蒲丹英の野を懐かしみ、静が鼓の音に連れて、白茅笹原谷峯越えて、若葉隠れに歩み来る。

ト振りあつて、舞臺へ来る。静御前、見て

静　オ、、忠信どの、今かいなう。

忠信　これは〳〵、静さま、さぞお待遠にござりませう。女中のお足と思ひの外、ようマアおひろひなされまするな。

静　サア、慣はぬ旅も我が君に、早うお目にかゝりたさ、それゆゑ道も自から。

忠信　イカサマ、さう思し召すもお道理〳〵。これと申すも佞人どもの、讒言をお用ひあつて、現在の弟君を、憎ませ給ふ鎌倉どのが聞えませぬて。

静　サア、それにつけて我が君さまの、芳野にお忍び遊ばされるは、憂きが中にも自らは、吉瑞であらうかと、心の内で嬉しいわいな。

忠信　ムウ、義經公が、芳野にお出でなさるゝを、吉瑞であらうと仰しやるは。

静　サア、その譯は。

〽語るも畏れ大友の、王子の爲に襲はれて、都を遠く清見原、國栖の翁を頼みにて、芳野に御身を忍ぶ艸〽オ、それよ、暫しは居候ふ置き候ふとて、まさかにも、お茶漬ばかり上げられず、鮎の煮浸し腹赤の御贄、釣の魚より生物の、ぶゑんのおむすが初物に、ちつくりお箸もかけまくも、山家の縁なればこそ、お手を枕に寝した時は、冥加ないのもどこへやら、現ない程愛しさに、帯さへ解いて島田髷・猶いやましの御契り〽それより程も夏たけて萩の錦の御旗を、飜へしたる花紅葉、色に心もお互ひに、そこが人目の關ケ原、眞劍勝負と入り亂れ、矢立さながら雨霰、堪つたものではないわいな、遂に王子は打負け給ひ、天武の御代と太平に、治まる御代こそめでたけれ。

ト兩人よろしくあつて

兩人　ハ、、、、。

静　ほんに氣輕な忠信どの、併し、なんぼ其やうに諫め

られても、我が君さまは、矢ッ張り暫しも忘られぬわい
なう。
忠信　ハテ、その御辛抱も僅か一日。それまでは、マアマ
ア、これをなと、義經公と思し召し．お氣をお晴らしな
されませ。
ト包みを解いて、鎧を出す。
〽姓名添へて賜はりし．御着長を取出し、君と敬ひ奉
る、靜は鼓を御顔と、准へて上に沖の石〽人こそ知らね
君と我が、縁は深き堀川に、御所へ召されしその始め、
見上げていつそいつよりも、扇に心春の蝶
ト唄かゝりにて、靜、扇の手になる
〽菜種菜の花咲き亂れ、花に枝葉に假寢の枕、しどけな
いのが蝶の癖、女夫らしいぢやないかいな、袖にひらひ
ら、エ、辛氣らし〽餘所目もほんに白拍子〽御痛はし
や義經公、壽永三年の戰ひも、既に危ふき八島の浦、こ
は御大事と兄繼信、矢面にこそ立ち塞がる〽オ、聞き傳
ふその時に、平家の方にも名高き強弓、能登の守教經と、
名乘りも敢へずよッぴいて、放つ矢先は繼信が、胸板發
矢と眞逆さま、敢へなき最期に忠臣の、屍は埋めど名は
朽ちず、この御鎧を賜はりしも、皆これ兄が忠義の餘慶

君恩など報ぜんと、筐の品々取納め、いざさせ給への
後から、それと馬方六藏が。
トこの淨瑠璃のうち、下座より六藏出て來て、靜御前
を見て、思ひ入れあつて、後より
六藏　やらぬワ。
ト靜御前にかゝる。靜、恂り振り切る。忠信、ちやつ
と隔て、靜を圍つて
忠信　こりやア、やらぬとは何をするのだ。
六藏　オヽ、やらないのぢやアない。やるのだ。馬をやら
う〳〵。
忠信　ムウ、そんなら馬をやらうと思つて。
六藏　そッサ。これから先は芦原峠、女中さんを乘せてご
ざい。廉くやるべい。どうだな〳〵。
忠信　イヤ〳〵、馬に所望はないて。
靜　それ〳〵、わしや馬は嫌ひぢやわいの。
六藏　ハテ、さう云はずと女中さん、見れば見る程。
忠信　どうしたと。
トきつと云ふ、六藏思ひ入れ。
〽さても見事なじよなめき樣よ、豆が出來たらおらが馬
に、エ、コレ、耳の早い奴、腹へ太鼓を、こりやどうも、

文政三年五月中村座所演　　五世瀬川菊之丞の忠信

岩井粂三郎の靜御前

女形の忠信なので前髪でやつてゐたのである

奈良饅頭より味さうな、その腰付きを畜生め、どうどうどうどう、どうでごんすと立寄れば。

ト靜の側へ寄るを、忠信引退けて

忠信　イヽヤ、さう口先で乘せかけても、その手には乘るまいワ。

六藏　さう云ヤアよいワ。この高名の六藏が乘るだけだ。この仕事に乘らずに、先へ行かれるなら行つて見やれ。落人め。

忠信　なんと。

ト兩人、思ひ入れ。

六藏　義經の妾、靜御前に違ひない。乘せて行つて駄賃より、褒美にするワ。渡して行け。

忠信　ハヽヽヽ。忠信がお供した、靜さまを渡せとは、身の程知らぬ蠅虫めが。

六藏　オヽ、そこを斯うして。

トまた靜御前へ立ちかゝるを、忠信、ちよつと立廻つて。

兩人　ドッコイ。

トこれより所作ダテになる。

〽最早お立ちと小氣味よい程やッつけろ、雪が櫻か櫻が雪か、も一つ杯引ッかけろ、背に切つてやつてくりよ、派手な浮に浮れて品も柳の宿おじやれ、泊らんせ〳〵、よね衆に袖を引かれた。

トよろしく立廻りあつて、六藏が腕を捻ぢ上げ

忠信　イザ、お構ひなく、靜さま。

靜　忠信どの。

ト六藏、ムッと思ひ入れ。

忠信　ござりませい。

〽譽れの程を三芳野の、麓を。

ト此うち靜、花道へかゝる。六藏、振り解いて行かうとするを、忠信、引戾して、ボンと當る。六藏、タヂタヂとなる。忠信、ツカ〳〵と花道へ行く。ちよつと辭儀する。六藏見事に宙返りとする。途端、靜、思ひ入れ。

〽指してぞ。

ト勢ひ三重にかぶせ、片シャギリになり、靜御前先に忠信、花道へ入る。

幕

〽急ぎ行く。

トあとシャギリ。

大詰　川連法眼館の場

役名――九郎判官義經。佐藤四郎兵衞忠信。忠信實ハ源九郎狐。龜井六郎重淸。駿河次郎淸繁。川連法眼。同妻、飛鳥。横川の禪司覚範實ハ能登守教經。

本舞臺、三間の間、一面の山幕、櫻の吊り枝、舞臺所々に、山の構を見せ、すべて芳野山の體。爰に芳野の衆徒四人、いづれも衆徒頭巾、黑の衣の露を取り、太刀、臑當、草鞋にて立ちかゝり居る。山颪し、綴の合ひ方にて、幕明く。

衆徒　時に何れも、今日の會合に、川連どのゝ詞、何とも以て、その意を得ぬ儀と存じたるゆゑ、横川の禪司覺範どのへ、密訴に及びしに。

同　左やう／＼、覺範どのゝ詞では、いよ／＼義經は隱まつてあるに相違なきゆゑ

同　今宵を過さず、川連が館へ押寄せ、夜討にして義經が首討つて

同　鎌倉へ渡して、賴朝の恩賞にあづかれとの指圖。殊に夜討の驅引、覺範どのゝ指揮に從ひ

同　山科の荒法橋は、燈籠ヶ辻より一文字に押寄せ、梵鐘三ッ四ッ打ち立てゝ、敵を騷がす合ひ圖の手配り。

同　また梅本の鬼佐渡は、如意輪寺の裏の手を、眞直ぐに六地藏の橋を引き、敵の逃ぐるを待ちかけて、散々に討つて落し

同　覺範どのには、新坊谷の坊に火をかけ、聖天山より無二無三に驅け散らして、勝利を得んと、評定これに一決して

同　各々合ひ圖の時を待つて、もし敵方に用意のあつては、一山の瑕瑾ゆゑ、我れ／＼四人は裏傳ひ。

同　川連が館へ忍び、拔けがけなして、法眼始め

同　手に立つ奴ばら、片ッ端

同　切つて／＼切りまくり

同　義經が素頭取つて、鎌倉の

皆々　恩賞にあづからん。

衆徒　何れも、これより法眼が、館へ忍んで必ずとも。

三人　云ふにや及ぶ。手柄は仕勝ち。

衆徒　然らば何れも。

三人　合點だ。

ト山颪しになり、皆々勇み立ち、靜々と下座へ入る。チヨンと山幕切つて落す、ト直ぐ淨瑠璃になる。

本舞臺、三間の間、一面に結構なる高足、二重舞臺見附け一面に金襖、正面、瓦燈口。上の方、塗り骨縁張りの障子を斜に見切り、高欄、渡り金鐵物、上り段好みあり、誂らへの通り飾り付け、下の方、萩垣、櫻の立ち木、これに砧を仕かけ、すべて川連館の體。琴唄にて幕明く。

〽鶯の聲なかりせば雪消えぬ、山里いかで春を知らまし、春は來ながら春ならぬ、九郎判官義經を、御慰めの琴三味や、川連法眼が奥座敷、音締めも世上忍び駒、柱に立てる雁金も、春を見捨てぬ志し、實に賴もしき待遇なり

ト向う揚げ幕にて

呼び　お歸り。

〽今朝より他出の法眼、心に一物ある顔に、悠々と立歸れば、妻の飛鳥は出で迎ひ。

ト向うより、法眼、袴長絹にて、中啓を持ち、出で來る。上手の障子を明け、妻飛鳥、裲襠衣裳にて出で迎へ、兩人二重舞臺へ住ひ

飛鳥　我が夫には殊なう早いお歸り。今日の御評定、一山のお仕置か。但しは又、奥のお客義經さまの、御事でござりますかな。

法眼　オヽ、義經の事とも。

飛鳥　ムウ。さては芳野一山は、味方と申すやうな事でござりまするか。

法眼　成る程〳〵、衆徒の中にも、歸り坂の藥醫坊、山科の荒法橋、梅本の鬼佐渡等、別しては横川の覺範、一端立つて、義經に味方と云ふは、我が心を探り見ると知つたるゆゑ、この法眼は鎌倉方と、云ひ放つて歸つたわやい。

飛鳥　ムウ。鎌倉方と仰しやつたは、衆徒の心を此方からも、探つて見るお心よな。

法眼　イヤ、この法眼、今日より心を改め、義經とは敵味方。

飛鳥　ニヽ、アノお前は義經さまと。

法眼　オヽ、鎌倉どのへ討つて出す氣。疑はしくば、これを見よ。

〽懷中の書翰投げ出せば、手に取上げ、文言殘らず讀み終り。

ト法眼、懷中より一通の書面を出して見せる。飛鳥、手に取つて見て、思ひ入れ。

飛鳥　こりや、義經公この山に、お忍びある事、鎌倉へ知れたやうな文體。

法眼　如何にも、汝が云ふ如く、天に口なし、人を以て云はしむる。告げ知らせし者なくして、小舅萩の左衞門より斯く云うて越すべきや。內通せられて知れたる上は、遁がれなき判官どの。人に手柄をさせんより、我が手にかけて討つ所存。

飛鳥　エヽ、そりやお前、眞實でござりますか。

法眼　如何にも。

飛鳥　イヤ、ほんに〳〵、こなさんは、義經を切る心か。

法眼　くどい〳〵。

飛鳥　ハアヽ……さうぢや。

〽夫が刀抜くより早く、自害と見ゆる、女房が、持つたる刃物引ッたくり。

ト飛鳥、法眼、刀を持つて、自害せんとする。法眼留めて

法眼　こりや、何んとする。なんで死ぬる。

〽云ふ顏きつと打守り

飛鳥　なんで死ぬとは法眼どの、なぜ隔てゝは下さんす。恩賞の下し文、千萬遍來たとても、一旦の契約を變ずるこなたの氣質ぢやないが、鎌倉どのゝ忠臣、萩の左衞門が妹飛鳥、義經公の御隱れ家、兄の方へ知らせたかと、この狀が來たゆゑに、疑うての心ぢやの。覺えない云ひ譯を、マザ〳〵として居られうか。疑ふよりは一思ひに、殺して下され。法眼どの。

〽恨み涙ぞ誠なる、法眼始終聞き濟まし、以前の一通取るより早く、寸々に引ッ裂き〳〵。

トこれにて法眼、今の狀を寸々に引裂き捨て

法眼　僞りに命は捨てまじ。女房を疑うたは、未練には似たれとも、義經公へ拔け目なき我が忠節、樂徒らが胸中探り次第、心引き見るこの似せ狀、引ッ裂き捨つれば安堵して、自害をとまれ、女房飛鳥。

〽解ける心は春の雪、恨みも消えてなかりけり。

ト奧にて

義經　法眼歸られしな。それへ參つて面談いたさん。

〽面談ざうと義經公、奧の間より出させ給ひ

ト管絃になり、奥より義經、壺折り衣裳にて、中啓を持ち、出で來り、褥の上に座す。蒔繪の脇息、刀掛けに刀かけある

法眼　鞍馬山のよしみを忘れず、段々の厚志、殊に兼ねて申し談ぜし樂徒の評定、委細あれにて承る。妻女の心底、祝着詞に述べ難し。過分に存ずる

法眼　こは有り難き御諚、師の坊の命と云ひ、只ならぬこなた樣、疎略なき心底、御存知の上は、身に餘る喜び、この上やあるべき。武藏坊どのは、奧州秀衡方へ遣はされ、御家臣とても少なければ、龜井、駿河なんどが如く、思し召し下されませう

ト花道より菖蒲革の足輕、一人出で來り

足輕　ハッ、申し上げまする。佐藤四郎兵衞忠信どの、君の御行くへを尋ね、お出でござりまする。これへ通し申さんや、如何計らひませうな。

義經　ナニ、忠信が參りしとや。對面なさん、これへと申せ。

足輕　ハッ

ト引込んで入る。

法眼　忠信どの入來とあれば、君にも何かと御物語り、暫らく奧へ。

飛鳥　左樣ならば我が君さま。

義經　法眼夫婦。

法眼　後程お目にかゝりませう。

ト法眼、飛鳥、奧へ入る。義經殘る。

〽案内に連れて入り來る、佐藤四郎兵衞忠信、御座の間のこなたに出で、絶えて久しき主君の顏、見るも無念の溜め涙、さし俯向いて詞なし、大將御機嫌斜めならず。

ト向うより、忠信、好みの形にて、出で來り、直ぐに舞臺下の方へ來り、平伏する。義經、思ひ入れ。

義經　汝に別れ爰かしこ、鎌倉どのゝ御詮議強く、身の置き所なかりしに、東光坊の弟子、川連法眼に匿まはれ、心ならざる春を迎へ、暫らくの命をつぐ。我が姓名を讓りし其方、命全たくある事、我が運の盡きざるところ、頼もしゝ喜ばし。その砌り預けたる、靜は如何なりしぞや。

〽御尋ねありければ、忠信不審げに承り。

忠信　こは存じがけなき仰せ。八島の平家一時に亡び、天下一統の凱歌を上げ給ふ折柄、告げ來る母の病氣、聞し

召し及ばれ、お暇賜はつて、本國出羽へ歸りしは、去年三月、程なく別れし母が中陰、忌中に合戰の疵口起り、破傷風といふ病となり、既に命も危ふき半、御兄弟の御仲裂、堀川の御所沒落と承る口惜しさ。胸を射る程重なる病氣、無念さ餘つて腹切らんと存ぜしが、せめては主君の、顔ばせ、今一度拜し參らせんと、念願叶ひて本復と申し、初立ちの長旅、忍びの道中、恙なくこの館へ御入りと承り、只今參つた忠信に、姓名を賜はり、靜御前を預けしなんど、御諚の趣き身に取つて、かつふつ覺えござりませぬ、

〽云はせも敢へず、氣早の大將、

義經　ヤア、とぼけな忠信。堀川の館を立退きし時、折好く汝、國より歸り、靜が難儀を救ひしゆゑ、我が着長を汝に與へ、九郎義經といふ姓名を讓り、靜を預け別れしに、其方、世になき我れを見限りて、靜を鎌倉へ渡し、義經が在所探しに來たか。只今國より歸りしとは、まざ〳〵しき僞はり表裏。漂泊しても、うつけぬ義經、謀らんとは、奇怪至極。不忠二心の人外、アレ引ッ括つて面縛せよ。龜井は居らぬか。駿河、參れ。

〽聲に駈け來る勇士の面々、裾端折つて忠信が、弓手右手に反り打かけ。

ト下座より、次郎、六郎出で來り

次郎　柔細あれにて皆聞いた。サア、腕廻せ、四郎忠信。

六郎　靜御前のお行くへ、サア、明白に白狀せよ。

忠信　サ、それは。

次郎　但し踏み付け繩かけうか。

忠信　サア。

次郎　白狀するか。

忠信　サア。

兩人　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

兩人　なんと〳〵。

〽なんと〳〵に難儀の最中。

トばた〳〵にて、向うより足輕、走り出で來り

足輕　靜御前の御供にて、四郎兵衞忠信どの、御出でにござりまする。

ト引返して入る。皆々思ひ入れ。

義經　ナニ、忠信これにある上に、又ぞろ忠信來りしとは、ハテ心得ぬ。

忠信　ムウ、我が名を騙る胡亂者。引ッ括つて大將への面

晴れ。さうだ。
ト行かうとする。兩人、留めて
六郎　ヤア、ならぬ〳〵。詮議の濟まぬ其うちは。
四郎　動かす事、罷りならぬ。
〽兩人向うを支へたり。
義經　イヤ、さなせそ兩人。忠信これにある上に、また忠信が靜を同道。何にもせよ、仔細であらん。片時も早くこれへ通せ、重清、早く。
六郎　ハッ
〽あつと龜井は次の間へ。
ト六郎、向うへ一散に入る。
〽我が身危ふむ忠信は、默して樣子を窺へば、別れ程經し君が顏。見たさ逢ひたさとつかはと、川連が奧の間に、歩み來る間もとけしなく
ト向うより、靜御前。袱紗包みの鼓を持ち、出で來り、舞臺へ來て
靜　ヤア、我が君樣、お懷かしう、ござりましたわいなア。
〽人目いとはず縋り付き、戀し床しの溜め〳〵を、涙の色に知らせたり。

義經　オヽ、女心に慕ふは尤も。別れし時云ひ聞かせし如く、人の情にあづかる義經、輪廻きたなき振舞ひならねば、つれなくもてなしたり。して、同道せし忠信は、何所に居るぞ。
靜　忠信どのは、たつた今お次まで同道せしが、爰へは未だ參られませぬか……オヽ、それ〳〵、ても早う爰へ來ておや。一緒にお目見得するものを、ちつとの間に先へ拔けがけ。まだ軍場かと思うてか。ほんに、まん勝ちな人ではある。
〽恨み口なる詞に不審、一倍晴れぬ四郎忠信。
忠信　アイヤ、靜さま、我が君もその如く、覺えなき御尋ね。拙者めは今の先、出羽の國より戻りかけ、去年お暇申してから、お目にかゝるは只今始めて。
靜　エヽ、あの人の、じやら〳〵と、てんがうばつかり。
忠信　イヤ、てんがうではござりませぬ。大眞實。
靜　アレ、また眞顏で騙すのか。
〽何氣も媚めく詞のうち、立戻る龜井六郎。
ト向うより、六郎、立戻つて來り
六郎　靜さま同道の忠信、引立て來らんと存ぜしところ、次の間にも有り合さず、玄關長屋、所々方々尋ねました

るところ、皆暮れ相知れませぬやうにござりまする。
〽申すに心迷ひ給ひ。
義經　ムウ、コレ靜、爰に居るは、其方を預けたる忠信ならず、只今國より歸りしと、物語りするうち、靜と同道との案内、二人ある中にも見えざるは不審者、面體似たる似せ者ならずや。靜、心は付かざるにや。
〽仰せのうちに忠信を、つれ〴〵と打眺め。
靜　さう仰しやれば、どうやら小袖も形も違うてある。お待ち遊ばせや……それか……オヽ、さうぢや。思ひ當る。
〽事がある。
君が筐と別れし時、賜はりし初音の鼓、御覽遊ばせ、此やうに、肌身も放さず手に觸れて、忠信の介抱受け、八幡山崎小倉の里、所々に身を忍び居たりしに、折々に留守のうち、君戀しさのこの鼓、打つて慰む度々、忠信歸らぬ事もなく、その音を感に堪える事、ほんに酒の過ぎた人同然、打止めばキョロリと何氣ない顏付きは、よくよく鼓が好きと初手は思ひ、二度三度四度目には、ても變つた事、五度目には不思議立ち、六度目には怖氣立ち、それよりは打たざりしが、君は爰にと聞き付けて、心急く道、忠信に離れた時、鼓の事思ひ出し、打てば不思議や目の前に、來るともなく見えたるは、女心の迷ひ目かと、思うて連れ立ち來りしに、又この場の不思議。こりゃマア、どう云ふ事でござりますぞいな。
〽申し上ぐれば義經公。
義經　ムウ、鼓を打てば歸り來るとは、それぞ好き詮議の近道……忠信に尋ね問ふべき仔細もあれば、奥の廣間へ引摺ゑよ。
次郎　ハツ、忠信、お立ちやれ。
〽龜井駿河も忠信に、引添うてこそ入りにける。
ト忠信、次郎、六郎、下座へ入る。
義經　イヤナニ靜、この詮議は、其方に申し付ける。その鼓を以て、同道なしたる忠信を詮議せよ……もしも怪しき事あらば、この刀で、打つて捨てよ。
ト刀掛けに掛けたる一腰を取つて差出す。
靜　ハツ
ト刀を受取る
義經　我が手で打たれぬ鼓の妙音、心得たか。
靜　畏まりましてござりまする。
義經　しかと詮議を申し付けたぞ。

〽帳臺深く入り給ふ。

ト義經奥へ入る。靜御前、殘る。

〽靜は君の仰せを受け、手に取上げて引き結ぶ、しんき深紅と絢ひ交ぜの、調べ緒んで胴掛けて、手の中締めて肩に上げ、手品も優に打ち鳴らす、聲清らかに澄み渡り、心耳を澄ます妙音は、世に類なき初音の鼓、彼の洛陽に聞えたる、會稽城門の越の鼓、斯くやと思ふ風に、誘はれ來る佐藤忠信、靜が前に兩手を突き、音に聽き惚れしその風情、すわやと見れば、打ち止まず、猶も様子を調べの音色、聽入り聽入る餘念の體、怪しき者とは見て取る靜、折よしと鼓を止め。

ト此うち靜、鼓を取出し、胴を掛けて打つ。好き時分、向うより忠信出て來り、舞臺へ來て、聽き惚れ居る。

靜　遅かりし忠信どの。我が君様の殊ないお待兼ね。サアノ〳〵、奥へ〳〵。

〽詞にハッとは云ひながら、座を立ち遅れ、差し俯むく油斷を見済まし、切り付けるを、ヒラリと飛び退き、飛びしさり。

忠信　こりや靜さま、なんとなされます。

〽咎められて機轉の笑ひ。

靜　ホヽヽヽ。オヽ、あの人のけうとい顔わいの。久し振りの靜が舞、見ようと御意遊ばすゆゑ、八島の軍物語りを。

〽舞の稽古と鼓を早め、斯くて源平入り亂れ、船は陸路へ、陸は海へ、漕ぎよせ打出し打ち鳴らす、鼓に又も聽入つて、餘念他愛もなき所を。

忠信やらぬ。

〽切りかゝる、太刀筋負はしてかい潜るを、付け入る柄元、しつかと取り。

忠信　こりや靜さま、何科あつて騙し打。切らるゝ覺え、かつてござらぬ。

〽刀たぐつて投げつくれば。

靜　ヤア、覺えないとは卑怯な一言。似せ忠信の詮議せよと、仰せを受けしこの靜。云はずば斯うして云はさうか。

〽鼓を押取りはた〳〵〳〵、女のか弱き腕先に、打ち立てられて、ハアはつと、あやまり入つたる忠信に、鼓打ちつけ、サア白狀、サア〳〵〳〵と詰めかけられ、一言半句も詞なく、只平伏して居たりしが、やう〳〵に頭を擡げ、初音の鼓手に取上げ、さも恭々しく押頂き、靜が前

に直し置き、靜々立つて廣庭へ、下りる姿も悄々と、見すぼらしげに手をつかへ。

忠信　今日が日まで隱しおほせ、人に知らせぬ身の上なれども、今日國より歸つたる、誠の忠信に御不審かゝり、難儀とあるゆゑ、據ろなく、身の上を申し上ぐる、始まりは、それなる初音の鼓、桓武天皇の御宇、內裏に雨乞ひありし時、この大和の國に、千年功經る牝狐、牡狐、二疋の狐を狩り出し、その狐の生皮を以て、拵らへたるその鼓、雨の神を諫めの神樂、日に向ひてこれを打てば、鼓は元より浪の音、狐は陰の獸ゆゑ、水を發して降る雨に、民百姓は喜びの、聲を初めて上げしより、初音の鼓と號け給ふ。その鼓は私しが親、私しめは、その鼓の子でござりまする。

〽語るにゾッと怖氣立ち、騷ぐ心を押靜め。

靜　ムウ、其方の親はこの鼓、その子ぢやと云やるからは、さては其方は、狐ぢやの。

トこれにて忠信、狐の姿に引拔く。

忠信　ハツ、成る程、雨の怒りに、兩親の狐を捕られ、殺されたその時は、親子の差別も悲しい事も、辨へなき、まだ子狐、藻をかつく程年もたけ、鳥居の數も重なれど、一日親をも養はず、生みの恩を送らねば、豕狼にも劣りしゆゑ、六萬四千の狐の下座に付き、只野狐と下げしまれ、官上りの願も叶はず、親に不孝な子があれば、畜生よ野良狐よと、人間では、仰しやれども。

〽鳩の子は親鳥より、枝を下がつて禮儀を述べ、烏は親の養ひを、育み返すも皆孝行、鳥でさへその通り、まして人の詞に通じ、人の情も知れる狐、

なんぼ愚痴無智の畜生でも、孝行と云ふ事を、知らいでなんと致しませう。とは云ふものゝ親はなし、まだも賴みはその鼓、千年功經る威德には、皮に魂ひ止まつて、性根入つたは卽ち親、附添うて守護するは、まだこの上の孝行と思へど、淺ましや禁中に、留め置き給へば、八百萬神宿直の御座、恐れあれば寄り付かれず。

〽親みの綱も切れ果しは、

前世に誰れを罪せしぞ。人の爲に怨みする者、狐と生れ來ると云ふ、因果の經文恐めしく、日に三度、夜に三度五臟を絞る血の淚。

〽火焔と見ゆる狐火は、胸を燃やする焔ぞや。

斯程業因深き身も、天道樣のお惠みで、不思議に初音の鼓、義經公の御手に入り、內裏を出れば恐れもなし、八

文政十一年七月　市村座所演

岩井紫若の靜御前　二世坂東簑助の忠信

ハア嬉しや喜ばしやと、その日より付添ふは、義經公の御庇、苛荷の鏃にて忠信が、有り合はさばとの御憐み、せめて御恩を送らんと、その忠信に成り代り、靜さまの御難儀を救ひました御褒美とあつて、勿體なや畜生に、清和天皇の後胤、源九郎義經といふ、御姓名を賜はりしは、空恐ろしき身の冥加。これと云ふも我が親に、孝行が盡したい、親大事と思ひ込んだ心が屆き、大將の御名を下されしは、人間の果を請けたる同然。いよ／＼親が猶大切、片時も離れず付添ふ鼓。

〽靜さまは又我が君を、戀ひ慕ふ調の音、變らぬ音色と聞ゆれども、

この耳へは兩親が、物云ふ聲と聞ゆるゆゑ、呼び返されて幾度か、戻つた事もござりました。只今の鼓の音は、私しゆゑに忠信どの、君の御不審蒙むつて、暫らくも忠臣を苦しまは汝が科、早く歸れと父母の、教への詞に力なく、元の古巢へ歸りまする。今までは大將の、御目を掠めました段、お情には靜さま、お詫びなされて下さりませ。

〽椽の下より伸び上がり、我が親鼓に打向ひ、交す詞のしり聲も、涙ながらの暇乞ひ、人間よりは睦まじゝ。

親仁様、母様、お詞を背きませず、私しはモウお暇申しまする、とは云ひながら、お名殘惜しかるまいか。兩親に別れた折は何にも知らず、一日々々經つに付け、暫しもお側に居たい、產みの恩が送りたいと、思ひ暮らして泣き明かし、焦れた月日は四百年、雨乞ひゆゑに殺されしと、思へば照る日が怨めしく。

〽曇らぬ雨は我が涙。

願ひ叶ふが嬉しさに、年月馴染みし妻狐、中に儲けし我が子狐、不便さ餘つて幾度か、引かるゝ心を胴慾に、荒野に捨てゝ出でながら、飢ゑはせぬか、凍えはせぬか、若し狩人に捕はれはせぬか。我が親を慕ふ程、我が子も丁度このやうに、我れを慕はうかと、案じ過しがせらるるは。

〽切つても切れぬ輪廻の絆、愛着の鎖に繋ぎ留められて、肉も骨も身も碎くる程、悲しい妻子を振り捨てゝ、去年の春から付添うて丸一年、經つや經たずに去ねとあるとて、なんとマア、アッと申して參られませうか、いの／＼お詞背かば不孝となり、盡した心も水の泡、切なさが餘つて、歸るこの身は何たる業。まだせめてもの思ひ出に。大將の賜はつたる、源九郎を我が名にして、末世末代呼

ばるゝとも、この悲しさは何とせん。靜さま、御推量なされて下さりませ。
ヘ泣きつ口說いつ身悶えし、撞と伏して泣き叫ぶ、大和の國の源九郎狐と、云ひ傳へしも哀れなり、靜は流石女氣の、彼れが誠に目もうるみ、一間の方に打向ひ。
靜　我が君さま、お聞き遊ばされましたか。
ヘ申す內より障子を開き。
ト奥より、義經出で來り
義經　オヽ、詳しく聞き屆けた。さては人間にてはなかりしな。今までは義經も、狐とは知らざりし。不便な彼れが心ぢやなア。
ヘ不便の心とありければ、頭をうな垂れ禮をなし、御大將を伏拜み〳〵、座を立ちは立ちながら、皷の方を懷かしげに、見返り〳〵行くとなく、消ゆるともなく春霞。
ト忠信、揚げ幕へ入る。
ヘ人目朧に見えざれば、大將哀れと思し召し。
あれ呼び返せ、皷打て、音に連れ、又も歸り來らん、皷々。
ヘ靜は又も取上げて、打てば不思議や音は出でず、こはこは不思議と取直し、打てども〳〵こは如何に、上とも平とも音せねば。

靜　ムウ、さては魂ひ殘すこの皷、親子の別れを悲しんで、音を留めしよな。人ならぬ身もそれ程に、子ゆゑに物を思ふかいなう
ヘ打悄るれば義經公。
義經　我れとても、生類の、恩愛の節儀、身に迫る。一日の孝もなく、父義朝を長田に打たれ。
ヘ日蔭鞍馬に成長し、せめては兄の頼朝にと、身を西海の浮き沈み、忠も仇なる御憎しみ、親とも思ふ兄親に。
見捨てられたる義經が、名を讓りたる源九郎は、前世の業、我れも業、そもいつの世の宿緣にて、かゝる業因なりけるぞや。
ヘ身につまされし御淚に、靜はワッと泣き出せば、目にこそ見えね庭面、我が身の上と大將の、御身の上を一口には、勿體淚に源九郎、ワッと叫べば我れと我が、姿を包む春霞、晴れて形を顯はせり。
ト薄どろ〳〵になり、下の方の砧を卷上げる。狐忠信顯はれる。
ヘ義經公御座を立ち給ひ、手づから皷取上げて。
義經　ヤヨ、源九郎、汝靜を預かり、永々の介抱、詞には述べ難し。禁廷より賜はりし、大切の品なれど、切な

尾上多見藏の狐忠信

天保十二年五月中村座所演　三世嵐吉三郎の能登

ろ汝が心を感じ、これを汝に得さするぞや。

忠信　ナニ、その鼓を下されんとや。

義經　如何にも。

ト鼓を受取り

忠信　ハア。有り難や、忝なや。焦れ慕ふ親鼓、辭退申さず頂戴せん。重ね／＼深き御恩の御禮、今より君の影身になり、御身の危ふき時は、一方を防ぎ奉らん。返す返すも嬉しやなア。

ト雷序になり

オ、それよ、我が身の上に取紛れ、申す事忘つたり。一山の悪僧ばら、今宵この館を、夜討にせんと企てたり。押寄せさするまでもなく、我れ轉變の通力にて、衆徒を殘らず誑つて、この館へ引入れ／＼。

〽仰向、立割り車切り、又一時にかゝりし時、蜘蛛手かか縄十文字、或ひは右袈裟左袈裟、上を拂へば沈んで受け、裾を拂へばひらりと飛び、けいせう秘術は得たりや得たり。

御手に入つて亡ぼすべし、必らず御油斷、遊ばしまするな。

〽鼓を取つて禮を爲し、飛ぶが如くに行く末の、後をくらまし失せにける。

トどろ／＼、雷序にて、忠信、鼓を持つて、砧にて消える。

義經　源九郎が通力にて、計らず知りし今宵の夜討。これより奥にて何かの用意。靜、來やれ。

〽打連れ、奥へ入り給ふ。

ト管絃にて義經、靜を連れ、奥へ入る。知らせにつき、舞臺へ網代幕を振り落ず。

ドロ／＼、雷序になり、所々へ狐火出る。小狐一疋出て、向うを招く。これより化かされの合ひ方になり、向うより薬醫坊、荒法橋、鬼佐渡、いづれも化かされの衆徒の形にて出で來り、これよりをかしみの仕草、いろ／＼あつて、トヾ皆々上手に入る。鳴り物打上げ知らせにて、道具幕切つて落す

本舞臺、一面の櫻の林。上下、網代塀。日覆より櫻の吊り枝。奥庭の模樣よろしく、道具納まる。

大ザツマ〽それ芳野の花の爛熳と、吹雪に紛れ山風に、連れて群がる數多の狐火、斯くと白刃の大薙刀、石突土に突き鳴らし、衆徒の大將横川の覺範、茫然として佇めり。

ト大太鼓入り、セリ上げの鳴り物になり、ドロ〳〵、狐火。覺範、胸當、手甲、臑當、絆の衣、頭巾姿、重ね草鞋をはき、大薙刀にて小狐を踏まへ、セリ上がる。

覺範　ハテ、訝かしやなア。樹下石上の勤行に、日夜怠慢なきが如く、一門の仇敵はんと、川連が館へ來かゝる道、眠るともなく彳みしは、さては野干が仕業よな。いで息の根をとめてくれん。

〽いで一討と薙ぎ立つれど、通力自在の古狐、あなたこなたへ飛びかはす、さながら野邊の狐火が、風に揉まるる如くなり、猛も鋭き薙刀の、手練に流石の野狐も、あしらひ兼ねしか忽ちに、掻き消す如く失せにけり。

トこの淨瑠璃のうち、狐引抜き、源九郎狐好みの姿になり、覺範と立廻りあつて消える。

〽覺範あとを見送つて

益なき事にて思はぬ隙取り……ヤア〳〵、川連どのは何所にある。客僧これまで參つたり、奧へ推參申さんや。とく〳〵對面いたされよ。

〽呼はり〳〵歩み行く、後の方に聲あつて、

義經　ヤア〳〵、平家の大將、能登守教經待て。

〽聲かけられて、キッと見返り。

ト花道にて覺範、思ひ入れあつて

覺範　ムウ、聲あつて形なきは、我れを呼ぶにはあらざりしか。覺えたき名に驚ろきて、思はぬ氣後れ、人無くて、恥かゝざりし。

〽獨り言して行く所を。

義經　ヤア〳〵、横川の禪司覺範とは假の名、誠は平家の大將、能登守教經へ、九郎判官義經。

忠信　佐藤四郎兵衛忠信。

六郎　龜井六郎重淸。

次郎　駿河の次郎淸榮。

義經　いま改めて見參。

皆々　見參。

覺範　何がなんと。

トつッかけになり、上手より義經、次郎は安德君を抱き、後に六郎、軍兵大勢附いて出る。向うより誠の忠信、槍を持ち、出で來り、覺範を舞臺へ押し戻し、キッと見得。

覺範　ヤア、この覺範を教經とは、何を以て、何を證據に。

義經　愚かや教經。

ト肥前節になり

紅の旗じるしは、衆徒にやつせど隱れなし。安德君は義經が、知盛より預かり奉り、大切に守護なしあるワ。

忠信　過ぎし八島の戰ひに、打ち洩らしたる汝ゆゑ、時節を待つてこの年月、思ひ設けし甲斐あつて、計らず出會ふ兄の仇。

六郎　まつた一味の惡僧ばら、源九郎が通力にて、殘らず打取る上からは、

次郎　最早遁がれぬ尋常に、その名を明かして

皆々　降參〱。

覺範　ヤア、いまはしき降參呼はり、斯くなる上は何をか包まん、横川の禪司覺範と、變名なせし我れこそは、桓武天皇九代の後胤、門脇中納言教盛が嫡男、能登守教經、目近く寄つて、面像拜み奉れエヽ。

ト頭巾を脱ぎ、引拔いてキツト見得。

皆々　さてこそなア。

覺範　斯く本名を現はす上は、片ツ端から死人の山だ。覺悟なせ。

義經　ヤレ待て教經、いま打取るは易けれど、君御安泰にまします上、我が身替りに相果てし、繼信への追善に、この場は一旦見遁がし得させん。

覺範　流石は義經、よく申した。この場は此まゝ別るゝとも

忠信　また重ねての再會には

六郎　折も吉野の花櫓。

次郎　花々しき勝負を遂げん。

義經　先づそれまでは、能登守教經

覺範　方々

皆々　さらば。

ト和歌になり、覺範眞中に、皆々見得よく居並び、キツと見得。

覺範　先づ今日はこれぎり。

義經千本櫻（終り）

道明寺にての御歌

啼けばこそ別れを
　いそげ鷄の音の
　　きこえぬ里の曉もがな

太宰府にての御歌

梅は飛びさくらは
　かるゝ世の中に
　　何とて松はつれなかるらん

菅原傳授手習鑑

表のカタリは、江戸で菅原の狂言をやる時に、よく使つたものである。歌を二首組み合せた簡單なものでゐながら要領を得てゐる。「菅原傳授手習鑑」は原本の義太夫にも割註さへ無いので、歌舞伎で出す時も何にも書かぬ事が多い。

下の出版は、寶暦十四年五月中村座でこの狂言を上場した時の櫓下番附で、中島三甫右衛門は時平の公卿惡で發揮し、四代目團十郎は松王で今日の型を案出し、七三郎は菅丞相で天下一品の稱を得た記念すべき興行である。

本文挿入の錦繪も千本櫻同様、各場の各役を網羅すべく務めた。說明は一々に附けてある。

菅原傳授手習鑑

大序　大內山の場

役名――齊世の君。菅丞相。判官代輝國。藤原時平。三善淸行。左中辨希世。春藤玄蕃之允友景。唐僧、天蘭敬、伊豫の內侍。

本舞臺、三間の間、高足、塗り高欄、階段、翠簾を卷上げてあり。向う正面の翠簾、上げおろしあり、左右弧格子、すべて內裏の道具。眞中、二疊臺に齊世の君、壺折り衣裳にて床几にかゝり、上の方に時平、後に淸行。下の方に菅丞相、後に希世扣へ居る。いづれも冠裝束、參內の體。上の方階下に、照國、龍神卷にて扣へ、下に白張烏帽子の衞士四人居並び、天王立にて幕明く。ト東西の掛け聲あり。

〽蒼々たる姑射の松、化して婥約の美人と顯はれ、珊々たる羅浮山の梅、夢に淸麗の佳人となる、皆これ氣識して變化をなす、豈識の木精ならんや、唐土ばかりか日の本にも、人を以て名付くるに、松と呼び梅といひ、或ひは櫻に准ふれば、花にも情天滿、大自在天神の御自愛ありし御神詠、末世に傳へて有り難し。この神いまだ人臣にまします時、菅原の道眞と申し奉り、文學に達し、筆道の奧義を極め給へば、才學智德兼ね備はり、右大臣に推任あり、權威に漫る左大臣、藤原時平に座を列ね、菅丞相と敬はれ、君を守護し奉る、延喜の御代ぞ豐かなる。然るに主上この程より、御風の心地とて、病の床に臥し給ふ。天顏を伺ひ奉らんと、御弟宮無品齊世の君、參內の御供には院の藏の官人判官代輝國、階下に伺候仕れば、席を正して丞相に打向はせ給ひ。

齋世　今朝院參いたせしところ、法皇仰せあるやうは、當今の御惱、日を追って快然ならず、急ぎ齊世に參內し、龍顏を拜し、御樣子有りの儘に告げ知らせよと、別當判官代を相添へらるゝ。御容體如何渡らせ給ふらん。

〽菅丞相正笏あり。

丞相　さして御變りもなく候ふ、詳しくは道眞にお尋ねあ

らんよりは、直に天氣を伺ひ給へ。

齊世　然らば左樣に致さん。

〽時平にも挨拶あり、常寧殿に入り給ふ。

ト正面の御簾を卷上げ、齊世の君、悠々とこの內へ入る。御簾を下す。

〽かゝる所へ式部省の下司、春藤玄蕃の允友景罷り出で庭上に頭を下げ。

ト此うち笙の入つたる樂になり、向うより玄蕃、侍ひ烏帽子、龍神卷の形にて出て來る。後より仕丁二人、枚臺に珠虎の皮、その外唐物箱、各々臺に載せ持ち出で來り、好き所に置き扣へる。

玄蕃　この度渤海國より來朝せし唐僧、天蘭敬が願ひは、唐土の徽宗皇帝、當今の聖德を傳へ聞き、何卒御姿を繪に寫し歸國せよ。その繪を即ち日本の帝と思ひ、對面せんとの望みにつき、數々の贈り物。即ちこれに。

ト仕丁銘々、唐物を好き所に飾る。

〽庭上に飾らすれば、菅丞相聞き給ひ。

丞相　こは珍らかなる唐僧が願ひ。當今延喜の帝、聖王にて在す事隱れなく、御姿を拜せんと、唐の帝の望みは、誠に我が國の譽なれども、折惡しく天子の御惱。有りの儘に云ひ聞かせ、音物も、唐僧も、唐土へ歸されんや。時平の料簡ましますか。

〽と仰せに冠打振りて。

時平　さうではない道眞、御病氣と申し聞かしても、よも誠には思ふまじ。病氣と云ふは間に合せと、云はるゝは日本の瑕。面倒な事云はさんよりは、御形代を拵らへ、唐僧に拜さすれば、何事なう事は濟む。誰れ彼れと云はんより、この時平が代りを勤め、袞龍の御衣を着し、天子に成つて對面せん。

〽一口に云ひ放す、謀叛の萠ぞ恐ろしき、判官代輝國階下にズッと寄り。

ト時平、思ひ入れ。判官代、階下にズッと寄つて扣へ。

輝國　事新らしき嚴命、唐土の天蘭敬は、時平公の御姿を寫しには參るまじ。背土がつて顏賤しく、頰骨高き延喜の帝、唐僧がよも呑み込むまい。當今の身代とは、鹿を馬との出損なひ。ハ、、、。

〽御無用と嘲笑ふ。

時平　ヤア、舌長し輝國、退り居らう。ヤア〳〵、天蘭敬を內裏へ伴ひ、天子にはこの時平。用意せん。

〽立つ所を菅丞相とゞめ給ひ。

丞相　時平の仰せは天子の爲、御形代とはさる事なれども、もしも彼の僧相人にて、君臣の相をよく見るならば、王孫にあらぬ臣下と知るべし。その時如何仕らん。

〽理窟に時平行當れば、三善の淸行進み出で、

淸行　菅丞相の言葉とも覺えず。彼の坊主を相人とは餘りな先ぐり。念に念が入り過ぎる。左中辨希世どの、さうぢやござらぬか。

〽と差出口。

丞相　イヤコレ、念に念を入れてさへ、過ち仕落ちはある慣ひ。假初ならぬ唐土人へ、御對面の事なれば、輕々しくは計らはれず。

〽暫しが間御思案あり。

所詮天子の御代り、人臣は成り難し。幸ひ御同腹の御弟宮、齊世の君を今日一日の天子と仰ぎ、御姿繪を唐土まで、傳へて耻ぢぬ御裝ひ。この儀如何でござらうな。

〽理に叶ふ、詞に違ふ時平が謀計、目と目を三善の淸行も、口あんぐりと開き居たる、玉簾深き一間より、伊豫の內侍立出で給ひ。

〽ト內侍、白無垢、緋の袴の形にて、檜扇を持ち出で來り

內侍　勅諚、兩臣の御爭ひ、我が君詳しく聞し召され、朕が代りは齊世の君と、直々の勅諚にて、只今御衣を召替へ給ふ。この由申し傳へよ、との勅にて候ふたり。

〽內侍は奥へ入り給ふ。

ト內侍は云ひ捨て、奥へ入る。

〽時平は俄にムツと顏、輝國が悦喜の眉、開く扉は日花門、玄蕃の允が案內にて、渤海國の僧天蘭敬、倭朝に變る衣の衫、庭に覆ひて畏まる。

〽ト此うち唐樂のやうなる鳴り物になり、向うより天蘭敬、鼠衣、唐僧の拵らへにて沓を穿き、如意を持ち、出で來り、花道中程に平伏する。

時平　ムウ、唐土の僧、天蘭敬とは汝よな。龍顏を寫し奉らんとの願ひ、叶ふは汝が身の大慶、有り難く存じ奉れ。

ト天蘭敬「ハッ」と思ひ入れ。この時奥にて

呼び　出御。

〽警蹕の聲諸ともに、高々と御簾卷上ぐる其うちには、弟宮齊世の君、金巾子の冠を正し、御衣爽かに見え給ふ、實に王孫の印とて、唐僧始め列座の宮人、アッと平伏し敬へり、天蘭敬よく／＼拜し奉り。

ト此うち正面の御簾卷上がる。內に齊世の君、金冠白衣にて笏を持ち、二疊臺に直る。

天蘭　ハヽア、天晴れ聖主候ふや。我が國の徽宗皇帝、慕はるゝも理りなり。三十二相備はつて、云はん方なき御形。勿體なくも僕が、筆に寫し奉らん。

〽用意の繪絹硯箱、檜の木の蠟筆サラ／＼と、眉のかゝり額際、見ては寫し書いては拜し、御笏の持たせやう、御衣の召振り違ひたく、卽席畫の速かさ、顏輝が子孫が凡ならぬ、畫筆の妙を顯はせり。判官代は差心得、捧げ物取納むれば。

ト此の文句のうち仕丁、唐机に筆墨硯を揃へ、天蘭敬の前へ置く、天蘭敬は筆を取つて淨瑠璃一杯に繪姿を認める。

丞相　重ねて俸祿賜てんぞ。一先づ退去あつて然るべし。

〽道眞の、下知を請繼ぐ春藤玄蕃、お暇申させ、唐僧を伴ひてこそ。

ト天蘭敬思ひ入れあつて、姿繪を寫し、持ち、向うへ入る。

〽退出す。歸るを待つて時平大臣、齊世の君の肩先摑んで引摺出し、御衣も冠もかなぐり／＼。

ト時平、齊世の君を二疊臺より引降ろし、笏にて冠を打ち落し、裝束を引取り。

時平　唐人が歸つたれば、暫らくも着せては置かれぬ。九位でもない無位無官に着せた裝束、この冠、穢れた同然內裏に置かず我れが預かる。今日の次第は右大臣奏聞せられよ。身は退出罷り歸る。

〽罷り歸ると御衣冠、奪ひ取つて行かんとす、道眞立つて引取り給ひ。

時平　聊爾なり時平、勅もなき御衣冠、私しに持ち歸り、過つて謀叛の名を取り給ふや。

〽何心なく身の爲を、云はるゝ身には胸に釘、頭ゆがめて閉口す、齊世の君菅丞相に向はせ給ひ。

齊世　次いでの勅諚には、老幼不定極まりなし、何時知らぬ世の中に、名ばかり殘すはその身の爲、道を殘すは末世の爲、妙を得たる筆の道、傳ふべき總領は、女子なれば是非に及ばず、幼ければ弟の、菅秀才にも傳ふまじ。弟子數多ある菅丞相、器量を擇みて筆道の奧義を授け長き世の寶とせよ。

〽仰せの中に左中辨、宮の前へズッと出で。

希世　菅丞相の弟子の中、位といひ器用といひ、希世に

上越す手書きはなし。幸ひこれにて傳授あれと、御申し附け下さるべし。

〽云はせも敢ず、菅丞相につこと打笑み。

丞相　内裏に在る時は我が朋輩、筆法は我が弟子なれば、この道に於て師匠を差措き、我まゝの願ひ致された。

〽誡めの詞、嚴々と襟を繕ろひ、勅答には、有り難き君の惠み、我が筆法の大事には、神代の文字を傳ふるゆゑ、七日の齋戒、七座の幣、神道加持に唐倭、文字は何萬何千にも、我が筆道に漏れはなし。それとも知らず爰かしこに、手習ふ子供も我が弟子、今日より私宅に閉ぢ籠り、擇み出して器量の弟子に、筆道傳授申すべし。

〽宣ふ詞は今の世に、傳へて殘る筆道の、道の御名に顯はれて、眞なるかな誠なる、君が御代こそ。

トこの文句のうちより下がり羽になり、時平、階下へ下りて來る。玄蕃、沓を參らする。丞相同じく階下へ下りる、照國、沓を直す。齊世の君、清行、希世、何れも立ち身。時平、丞相、式禮あつて左右へ別れ、淨瑠璃送りにて兩方へ行きかゝり、時平、振り返り、ツカ〳〵と丞相の方へ來る、照國、この中を隔てゝキツとなる。三重、早下がり羽にて、よろしく、　幕

二幕目　加茂堤の場

役名——齊世の君、舍人、櫻丸、三善清行。仕丁四郎又、仕丁九郎又、苅屋姫、櫻丸女房、八重。

本舞臺三間の間、一面の松並木、一體加茂堤の景色、爰に御所車を直しあり、後の方に片蓋の御所車二挺引据ゑて、仕丁四郎又、九郎又、壺升樽にて、茶碗酒を飲み居る見得、宮神樂にて、幕明く。

四郎　サア〳〵九郎又、われから始めろ〳〵。

九郎　イヤ〳〵、てまへから、始めろ〳〵。

四郎　イヤ〳〵、われから。

ト一杯飲んで

九郎　なんと、斯う茶碗で引ッかけて、加茂堤から野天を見廻した景色といふものは、喜見城であらうがな。

四郎　併し、お供待の間を見ての茶碗酒、舍人が身には喜

見栽とは云ふものゝ、主がなければよからうて。時に四郎次、われが主の時平公、短氣者でも根が大鵬。名代に見えた清行どのは、氣の短かい癖に根が根性が悪い。こんな所を見付けられなよ。

九郎　コリヤ、さう云やるな。菅丞相さまの名代に來た齊世どのこそ、大職人といふ者だ。蓼喰ふ虫も好き〳〵と、あのやうな人を弟子にしたり、代参に寄越さつしやる、菅丞相さまの、お心が知りたいわえ。

四郎　イヤ、そりやアわいらが、小さい料簡とは違ふぞえ。

九郎　マア、その割にして、もう一つ飲め〳〵。

ト また酒を飲みながら。

それはさうと、齊世の宮さまも、お参りなされたが、手休めに、この櫻丸は來さうなものだ。

ト 神樂になり、下手より櫻丸、白張烏帽子にて出て來り

櫻丸　オヽ、二人ながら、爰にか。

兩人　櫻丸か。今も今とて、おぬしが事を云つてゐた。

櫻丸　見れば、ゆつくり酒盛で樂しむな。併し、御神事も早半過ぎ、呼び立てられぬうち、行つたらよからうぞよ。

九郎　櫻丸、妙な事を云ふな。御神事が濟んだら、宮樣からお立ちであらう。それに又てまへ、爰へ何しに來た。

櫻丸　イヤサ、それは。オヽ、それ〳〵、こちの宮樣は神司の方で御休息あるゆゑ、お立ちの程が知れぬ。こなた衆の乘せて來た御名代衆は、禁庭の御用があるとて、立騷いでござつたが、油斷して又叱られうぞえ。

四郎　成る程、役なしの宮樣と、時平公のお目鑑で、御用の多い清行さまとは違ふ。いつお立ちになるか知れない。

櫻丸　さうとも〳〵。

兩人　そんなら早く行かずばなるまい。

櫻丸　早く行きやれ〳〵。

ト 神樂により、四郎次、九郎次、下手へ入る。櫻丸後見送り

一杯参つて、行たワ〳〵。

〽獨り言して合ひ圖の手拍子、招けば招かれ戀草の、露踏み分けて十五六、被衣の風の優しきは、菅丞相の御娘、苅屋姫とて色も香も、文は父御のお家柄、口說き落して宮樣に、逢はせませんと跡につく、供は八重とて花めきし、櫻丸が自慢の女房、先へ廻りて。

ト 向うより、苅屋姫、振り袖の形、被衣を着て、後より八重附いて出で來り、舞臺へ來て

八重　こちの人、首尾はどうでござんすえ。

櫻丸　よいとも／＼大極上。お姫様、ようお越し遊ばしました。何もお恥かしい事はござりませぬ。見返り本尊より尊い御面相、さらばお逢はせ申しませう。

〽車の御簾を引上ぐれば、齋世の宮は面嬾げに、姫は猶しも顔見合せ、ニツと笑うて袖覆ふ。

ト櫻丸寄つて、車の御簾を上げる。内に齋世の君、壺折り衣裳、中啓を持つてゐる。齋世の君、顔見合せ思ひ入れある。

なんと女房ども、爰らが下々と違うて、轅はずみな事もさせられまいし、エヽコレ、ならう事なら、ちつとの間、眞暗闇にして上げましたいなア。

八重　なんのいなア。晝でもお二人のお首尾、調へるは、あの。

ト思ひ入れにて車を指さす。櫻丸、それと呑み込み

櫻丸　ハテ、素早い奴ではあるぞ。そんなら、あの御車の内で。

ト云はうとするを、八重「コレ」と押へ、彼方へ行けといふこなし。櫻丸、呑み込み

そんなら、我れらは暫しのうち、ドリヤ、休息いたさうか。

〽木蔭へ入れば。

ト櫻丸、下手へ入る。

八重　それ／＼、こんな時には男は邪魔。サア／＼、姫君様、もう誰れにも御遠慮はござりませぬ。何なりと仰しやりたい事がござりますなら、サア、早う仰しやれや仰しやれや。

〽突きやられても今更に、嬉し恥かし初戀の、いろはにほさへ口籠る。

ト苅屋姫、恥かしきこなし、八重、思ひ入れあつて

エヽ、埒のあかぬ。其やうに恥かしがつてお出でなされては、春の日もツイ暮れますぞえ。誰れしも初めは覺たのある事、櫻丸は彼方へ参りました。私しはこの通り、此方向いて、斯う耳を塞いで居りまする。サア、早う何なりと、仰しやれ／＼。

〽人目よけても雛鳥の、初音恥らふ風情なり。

苅屋　千束の文の御返事に、首尾あらばとのおんすさみ、有り難いやら嬉しいやら、今日の首尾を待ち兼ねて、お叱り受けに参りましたわいなう。

齋世　櫻丸がいかい世話。文見る度にいやまさり、逢ひた

かつたに、ようこそ〳〵。爰は所も糺す川、さぞ春風で寒うござらう。

〽仰せは姫の身にこたへ、春風よりも戀風の、ゾツと身に沁むばかりなり。車の蔭より櫻丸、スツと首出し。

ト櫻丸、後へ出て來り

櫻丸　コリヤ、女房、何をうつかり。我が身を抓つて、人の痛さといふ事を知らぬか。おりや先刻にから齒痒うて齒痒うて。コレ、早う配劑しをらぬかい。

八重　ほんになア。オヽ、寒うなつた。オヽ、寒い〳〵。姫君樣もさぞ川風でお寒うござりませう。その風防ぎはオヽ、幸ひ〳〵、あの御車の內。憚りながら、ちつとの間、お貸しなされて下さりませ。

苅屋　それぢやと云うて、どうやら勿體ない。

八重　ハテ、御遠慮遊ばすも事によります。サア、早う早う。

ト苅屋姫を車の內へ入れる。

〽是非に〳〵と無理やりに、いろを咲かせる車の室、八重が機轉と知られけり。

櫻丸　さらば閉帳仕らう。

ト御所車の簾を下ろす。三味線入りの宮神樂になり、八重、あたりを窺ひ、櫻丸は車の前に坐り、番をしてゐる。車の內にて

齊世　苅屋姫どの、苦しうない。もそつと此方へ。

苅屋　神詣での御車で、罰は當りは致しませぬかいなア。

トこれを聞き、御簾の內より內を覗いて見るをかしみ、八重は矢張りあたりへ心を附けてゐる。櫻丸、八重に寄りつき

櫻丸　もう堪らぬ。

ト八重、恂りして

八重　エヽ、モウ、お前も嗜なんだがよいわいなア。

櫻丸　これがどう嗜なまるゝものぢや。隣きびしうて、ひよんな寶を儲けたわい。

八重　エヽ、モウ、大きな聲で、聞えるわいなア。

櫻丸　聞えても大事ない。

八重　それぢやと云うて、人が見るわいなア。

櫻丸　人が見ても大事ない。

八重　それぢやと云うて、人が來れば惡いわいなア。

ト云ひつゝ寄り添ひ、櫻丸が襟へ手をかける。櫻丸よろしくこなし。八重、袖を覆うて口を吸ふ。この時、車の牛モウと鳴く。兩人、これに恂り飛び退き

岩井粂三郎の八重　坂東彦三郎の櫻丸

櫻丸　ハヽヽヽ、牛どのも羨ましいと見えるわい。さりながら其方の働らき。出かしやつた／＼。

八重　サイナア、お前の教へさしやんした通り、内裏上﨟の形にやつして行て、櫻丸が女房八重でござりますと申し上げたれば、あなたも待遠でお出でなされたやら、八重か、ようおぢやつた、もう行かうと仰しやつて、腰元衆を待たして置いて、裏道から忍んでお出で。

櫻丸　さうであらう／＼。この中から手繰して、菅丞相さまが筆法傳授に、取籠つてござるを幸ひ、御臺様へは神參りと願はせ、お供の衆へは口薬、水撒くやうに飲まして置いた。ほんに、その水で思ひ出した。お手水の水が要らうぞよ。

八重　何云はんすやら、初心のお二人様。

櫻丸　ハテ、甘いやつではある。お手水所か、悪うしたらお行水が要らうも知れぬぞよ。

八重　そんなら幸ひ、あの川水を汲んで來うわいな。

ト行かうとする。

櫻丸　ア、コリヤ／＼、この頃　雨上りで堤が辷る。大事の其方に怪我をさせては、晩からおれが不自由なわい。

八重　又てんがうばつかり。といふて外に水はなし。

櫻丸　幸ひ／＼、あの神前の水汲んでおぢや。

八重　成る程／＼、あの神前の水……お前もマア嗜なましやんせ。勿體ないぢやないかいなア。

櫻丸　イヤモウ、ちつとも大事ない。ハテ、王は十善、神は九善。その王様の弟御なりや、九善かたしぢや。汲んでおぢや。

ト八重呑み込んで

八重　アイ／＼、そんならわたしや汲んでかう。こちの人。

櫻丸　巧者、大儀。

八重　なんのいなア。

〽せり立てられて女房は、神前さして汲みに行く。

ト八重は向うへ入る。

〽跡は氣休め一休みと、思ふ所へ三善の淸行、官人仕丁に十手持たせ、裝束卷上げ駈け來り。

ト向うより淸行、指貫、裝束の形。後より仕丁四人、附いて出で來り、舞臺へ來て

淸行　ヤア、それに居るは櫻丸。おのれ最前齊世の君を、奉幣も濟まぬうち、連れ退いたとの風聞、何所へ供した。サア、有やうに吐かし居らう。

〽せちがひかゝれば。

櫻丸　イヽヤ、存ぜぬ。下々として上の事、其方をとつくとお尋ねなされい。

清行　ヤア、吐かすまい。兼ねておのれが取持にて、物臭い事聞いてゐる。取分け今日は、御惱平癒の神いさめ、その場所へ來て不淨があると、齊世の君さまでも罪になる。有やうに吐かさずば、引ッ捕へて拷問する。ソレ、者ども、繩打て。

仕丁　やらぬワ。

〽下知の下、おッ取卷くを身構へし。

櫻丸　ムヽ、ハヽ、ハヽ、。知らぬと云うたら金輪際、奈落の底から天まで知らぬ。聊爾召さると片ッ端、下手のお鞠の蹴て／＼蹴踏む、足の鹽梅見せようか。

〽グッと蹈み出す兩足は、顏に似合はぬ古木なり。

清行　こりや下郎めが味ィやる。最前から見るところ、車の内に人こそあれ、御簾引斷つて改めよ。

仕丁　心得ました。

〽立寄る所を首筋掴み、投げ退け／＼。

ト皆々かゝる。櫻丸、立廻りあつて皆々を投げ退け、車を圍ひ、キッとなつて

櫻丸　車は舍人が預かり物。命があらば寄つて見よ。

清行　小癪な。ソリヤ。

ト四人、櫻丸にかゝるを立廻り。

〽かゝるを蹴飛ばし反ね飛ばし、十手捥取り片ッ端、蹴立て／＼追うて行く。

トよろしく立廻り。トヾ清行始め皆々逃げて入る。櫻丸も跡を追うて向うへ入る。

〽その間に宮と姫君は、人に見られて叶はじと、車の内より飛び降り／＼、流石若氣の一筋に、遁がれて旅のかり衣、何所ともなく落ち給ふ。

ト車の内より齊世の君、苅屋姫が手を取り出で、思ひ入れあつて東の口へかゝり入る。清行出で來り、車を見て

清行　南無三方見違へたか。舍人めが戻つたら、大事ではあるまい。それ／＼。

ト向うへ行かうとして、思ひ入れあつた下手へ入る。

〽下道さして逃ぐる跡、間もなく駈け來る櫻丸、御二方見えぬに恟り、車を見れば宮の書置。

ト櫻丸、足早に戻つて來り、車を見て恟り、いろ／＼あつて、車の中の扇を取上げ見て

櫻丸　ナニ／＼、見付けられて、辱めを受けうより立退く

とある文體。すりや、お二方には。ホ、ホイ。
〽ハッと驚ろき、胸は板。
イデ追ひ付いてお供せん。ソレ。
〽駈け行く向うへ、女房八重。
ト逸散に櫻丸、花道へかゝる。向うより八重、手桶を
提げ出で來り
八重　サアモシ、お手水汲んで來ましたわいなア。
櫻丸　ヤア、お手水どころか。淸行めが車の內、詮議せん
と來りしゆゑ、見付けられじとお二方は、何所へかお立
退きなされたワ。
〽悔りぐわつたり水桶落し。
ト八重、驚ろいて手桶を取落す。
八重　そりやマアほんまか。してマア、こなさん、何所へ
ござんす。
櫻丸　何所へどころか、もと姬君は菅家の御養子、實母は
河內土師の里、菅丞相の伯母君、先づ此方へ落し、跡
を慕ひ奉る。汝はこの御車を、宮の御所へ引いて行け。
捨て置いては後日の咎め。
八重　それ〳〵、お前の姿にこの身をやつし。
〽ドレ白張と受取つて。

ト八重、櫻丸が白帳を受取つて肩に引ッかけ
跡案じずとも、ちつとも早う。
櫻丸　合點だ。
〽白砂蹴立て、飛ぶが如くに駈けり行く。
ト櫻丸、逸散に向うへ入る。
〽八重はやがて夫の姿、白張肩に引ッ掛けて、車の牛を
引き直し、させいほうせい精一杯、引けども遲き牛の足、
八重　エヽ、どんくさい。
〽後から、押せば車もクル〳〵と。
廻る月日。不成就日か、あ二人樣の凶會日か、夫の爲に
は十方暮れ。
〽鬼宿車を押しかけて、天赦天一天上の、お首尾もよ
かれ神よしと、祈る心は八專の、黑日に間日の斑牛、追
ひ立てゝこそ。
ト八重、牛を引きかけ、よろしく三重にて

幕

三幕目　筆法傳授の場

役名──菅丞相。同一子、菅秀才。武部源藏。舍

人、梅王丸。左中辨希世。三善淸行。荒島主稅。
御臺。園生の前。局。越路。腰元。勝野。

本舞臺、一面の平舞臺。向う一面金襖、上下とも杉戸の出入り。揚げ幕の所、杉戸の出入り。舞臺花道とも一面、高麗緣を敷き詰め、すべて菅原館の體。爰に希世、冠装束にて、机にかゝり、手習ひをしてゐる見得、幕明く

〽上根と、稽古と、好きと三つの中、好きこそ物の上手とは、藝道修業敎への金言、公務の暇明暮れに、好ませ給へる道眞公、堂上堂下は云ふに及ばず、武家町人に至るまで、風儀を慕ふ御門人、數も限りもなき中に、左中辨の希世、手習ひ稽古ふる兄弟子、今度筆法御傳授は、差詰め我れらに極まりしと、勝手覺えし御殿の眞中、朝の宵から机を直し、煙草よ茶よと呼び立つる、聲も屆かぬ奥勤め、女中頭は聞き咎め、

ト希世、退屈のこなしにて頻りに手を打つ。下手より越路、黃絹、襠裲衣裳にて出で來り、後より勝野附いて出る。

越路　コレ、お次に誰れも居やらぬかいなう。希世さまが御用があると、お呼びなさるゝぞえ。

希世　これは〳〵、お局の越路女﨟か。手の皮のひりつく程、叩くをも知らぬ顏であるは、ムウ、聞えた。毎日來るを面倒がり、云ひ合せてこの希世さまに鼻明かすのぢやな。今日で七日この手習ひ、おれが爲ばかりぢやない、御子息の菅秀才は年齒七つ、傳授所へ行かぬによつて、この希世が傳授して、菅秀才の成人以後、身共から又傳授する。さすれば主の奉公も同じ事、ハイ〳〵と云うて廻る筈ぢや。總じてこなたの云ひつけが、生温いからぢやぞや。

越路　コレ勝野、よう心得や。其方衆の不調法は局が迷惑何事を仰しやらうとも、アイ〳〵と、ソレ、合點か。シ、希世さま、ほんに、さうぢやござりませぬかいなア。

ト越路よろしく思ひ入れにて云ふ。

希世　成る程、さうとも〳〵、よい料簡ぢや。毎日々々氣を詰めるも菅原家の爲。今日も又、淸書お目に掛けてたもれ。局、頼むぞや〳〵。

越路　イエ〳〵、今日はお宥されて下さりませ。

希世　宥せとは、そりや、なぜ〳〵。

越路　サア、幾度お目に掛けましても、我が君丞相さま

のお氣に入りませぬは、お前の業ではござりませぬ。わたしがお取次の仕様の悪さでござりませう。手代りに今日は勝野、其方が御前へ。

希世　ア丶イヤ〳〵、さうはならぬわいなう。筆法傳授も神道の祕密事。アレ、學問所の注連が目に見えぬか。油濃い女子を、なんとしてやらるゝものでない。コレサ、昨日までは氣に入らずとも、この清書は又格別、筆先に肉を持たせ、天晴れ骨髓を書き得たれば、傳授はズルズル。コレ、伸し切つて行てたもいなう。

〽賴むに是非なく立つて行く。

ト希世頻りに賴むゆゑ、越路よんどころなく清書を持つて、上手杉戸の內へ入る。希世、跡見送り

コレ勝野。いま局の云はれた、アイ〳〵を合點か。

勝野　アイ。心得て居りますわいなア。

希世　エ丶忝ない。あたりに人目もなし、福德の三年目、屛風の蔭でツイちよこ〳〵、賴む〳〵。

ト希世、勝野に抱きつくを突き退け

勝野　エ丶、アタ嫌らしい。無體な事なさると、聲を立てますするが合點かえ。

希世　オ丶、合點ぢや。聲を立てるが怖いとて、仕掛けた戀人、コレ、叶へてくれいやい。

ト無理に勝野を追ひ廻す

勝野　アレ〳〵、申し〳〵。

希世　コリヤ、申しとは誰れに申すのぢや。

勝野　アイ、御臺樣や、若君樣へ。

〽申し〳〵と云ふ聲の、洩れ聞えてや、菅丞相の御臺所、若君の御手を引き、立ち出で給へば、希世は仰天

ト奥より園生の前、襠裲衣裳、菅秀才の手を引いて出で來る。希世、悄りして

希世　これは〳〵、惡い所へようこそお出でござる。何かハヤ、勝野の積の療治を賴まれ、取りにかゝつてこの仕合せ。御臺にも御存じの如く、萬能に達せし某、世に稀れな器用者とあつて、希世と付けたは親どもが自慢の名、その例はこの若君、年よりは御發明、菅秀才と呼び給ふも、秀はひいづる。才は才智の才を取つて、菅家の公達菅秀才、あら〳〵いはれ斯くの如し。我れは餘り器用過ぎ、取損なうて按摩の體裁、御臺所の思し召しが。

園生　ア丶、もう〳〵その云ひ譯には及びませぬわいなア日頃の行儀知つて居ります。そんな疑ひ、なんのいな。

〽物に障らぬ御挨拶。

希世　ヤレ〳〵、それ聞いて落ちついてござる。今の體裁の次手ながら、お尋ね申す事がござる。御息女の苅屋姫齊世の君と、にやほやした世間の取沙汰。今日で七日相詰め居るに、御所には何の沙汰もなく、虚說かと存ずれば、苅屋姫の御殿は明家、御詮議もなされぬは、こりや親御達も御合點の上の、駈落ちでござりますかな。

〽問はるゝ辛さ、御臺所も、暫し返事もなかりしが。

園生　隱しても隱されぬ、さがなき人の口の端に、かゝるも是非なき苅屋姫、齊世の君は猶以て、大切なお身の上、互ひに忍ぶ戀路の車、廻り逢瀬もそこ〳〵に、事顯はれしを恥かしく思し召され、御所へお歸りなされぬもの、とあつて常の御方ならねば、宮樣附き〳〵の人々が、それなりけりにして置くまい。また此方の娘の事は、希世さまも知つての通り、ほんの母樣は河內の國、土師村の覺壽さまとて、連合ひの爲には伯母御樣。菅秀才を儲けぬ先、乞ひ請けて養子娘。この御所へは戾られず、伯母御樣方と心付き、自らが內證で、尋ねに人を遣はしましたわいの。この一落は今日が日まで、わざと父御に知らせませぬ。それも何ゆゑ、勅諚にて、筆法傳授七日のうち、參內止めて取籠らせ給へば、世の取沙汰は何にも知らず、傳授も過ぎて聞き給はゞ、さぞや悔りし給はん彼方此方を思ひやる、心を推量して下され。

〽心を推量してたべと、案じ給ふぞ理りなる、內玄關の奏者番、一間此方に畏まり。

侍ひ　申し上げまする。

ト この時下手より侍ひ一人出で來り

園生　何事ぢや。

侍ひ　先年お館に相勤めし、武部源藏定胤、尋ね參れとの仰せに依り、この間より所々方々を吟味いたして、やう〳〵只今夫婦一緒に、參上いたしてござりまする。これへ通しませうや、如何計らひませう。

園生　オヽ、待ち兼ねし源藏夫婦、早々これへ參れと云や。

侍ひ　畏まつてござりまする。

ト侍ひ向うへ入る。

園生　コレ、菅秀才、源藏に逢ふ間、爰に居ては氣が詰まらう。勝野を連れて奥へ行て、機嫌よう遊ばつしやれ。希世さまにも暫しが間。

希世　成る程、爰にゐてお邪魔なら、所替へを仕るでござらう。

〽所替へ、仕らんと、續いて

ト迄りにて菅秀才、勝野を連れ、希世も附いて奥へ入る。

〽奥に入りにけり。人知れず思ひ初めしが主親の不興を受ける種となり、夫婦は二世の契りより、三世の御恩辨まへぬ、不義より御所を追ひ出され、さむい暮しを素浪人、尾羽打枯らし武部源藏、今日のお召しは心の優曇華開く襖の内外まで、勝手は今に忘れねど、身の誤まりに氣後れし、膝もワナ〳〵伺ひ足、御臺の御座を見るよりも、ハッと畏れて飛びしさり、蹲まりたるばかりなり。

トこの文句にて、揚げ幕杉戸をあけ、源藏、木綿布子の上へ麻上下の形、後より戸浪、細やつし、抱へ帶にて出て來り、花道よき所に平伏する。

園生　ヤア、珍らしい源藏夫婦、連合ひの氣に背き、この御所を出やつたを、數ふればもう四年。日頃人を捨て給はず、慈悲深い程強さも強い。思ひ切つてはいかな事、見返らぬ夫のお心叶はぬ事と思ひの外、源藏に參れとある御用の樣子、何かは知らぬが、氣遣ひな事ではあるまい、定めて吉左右。

源藏。ハッ、ハアヽ。

園生　ほんに自らが云ふ事ばかり、さぞ待ち兼ねてお出でなさらう。源藏夫婦が參りしと、誰ぞ奥へ知らせ申しや。サア〳〵、二人ともに顏を上げ、近う寄りや。コレイナウ。遠慮には及ばぬ。近う〳〵。年月の浪人住居、浮世が苦になつてか、昔の面影どこへやら、源藏が着てゐるは、荒々しい下々の着物、戸浪はそれに引替へて、小袖の縫箔、流石に女子の嗜なみか。二人の仲に子も出來たか。どうぢやぞいなう。

〽問はれて戸浪は有り難涙。

戸浪　冥加至極もないお詞、主人のお目をくらませし、罰が當つて苦勞の世渡り、夫婦の着替へも一つ賣り、二つも三つも朝夕の、煙の代になり果てゝ、やう〳〵殘せしこの小袖は、御臺樣の下されし、御恩を忘れぬ賣り殘り、髪の飾りの鼈甲も、いつかは柞の引櫛と、變り果てたる共稼ぎ、連合ひは布子の上、糊立たぬ麻上下も、今日一日の損料借り。ア、おはもじ。お上に御存じない事まで。

〽身の耻隱はす錆び刀、今日まで人手に渡さぬ武士の冥加。

源藏　ハッ、女房が申し上げまする通り、この態になりたれば、一しほ昔の不義放埒、思ひ廻せば御主人の罰、悔

むに詮なき仕合せでござりまする。
〽夫婦諸ともおろ／＼涙、折柄局は奥より立出で。
トこの時、越路奥より出て来り
越路　御學問所へ召しまするは、源藏どの只一人、御用濟んでお手鳴るまで、御臺様にもお出ではならぬと、仰しやられてござりまする。
園生　成る程／＼、心得た。源藏は局と同道、戸浪に自らと一緒に、奥へおぢや。
〽戸浪は此方へと入り給ふ。
ト園生の前に戸浪附いて入る。
越路　サア、源藏どの、斯うお出でなされませ。
〽只今御前へ召出さるゝ、源藏が身の嬉しさ怖さ、歩む疊の長廊下、しづ／＼。
ト送りにて、越路先に源藏立つて、道具替りの知らせ木なしにて道具逆に廻す。上手の襖、すべて杉戸、廊下の心にて、源藏は廻るに從ひ上手へ歩む。
本舞臺、上の方、白木造り九尺高足の學問所、注連張り廻し、三方へ白へりに木瓜形を畫きし御簾を掛け、これより下の方、一面に襖、開け閉てあり、右の屋體よき所まで押し出す。道具とまる。
ト此うち兩人、靜かに本舞臺へ来る。
〽筆法傳授は忌みの御座の間に、神道潔齋の淸淨の。
ト源藏、下の方に蹲まり居る。越路、上の方、御簾の前へ行き、思ひ入れあつてよき所へ扣へる。
〽恭しく注連引き延え、常に變りし白木の机、悠然として座し給ふ。
トよき所より靜かなる下がり羽になり、キッカケにて御簾を卷き上げる。菅丞相、壺折り衣裳にて、中啓を持ち、褥の上に床几にかゝり居る、この前の白木の机に、手本、硯、墨、筆立、料紙、載せてあり、源藏「ハッ」と平伏する。
〽凡人ならざる御有り樣、恐れ敬ふ源藏が、五體の汗は布子を通し、肩衣絞るばかりなり。やゝあつて仰せには。
菅丞　さり難き仔細あつて、汝が行くへを尋ねしに、住み所定かならず、やう／＼昨日在所を求め、今の對面滿足せり。其方儀は幼少より、我が膝元に奉公し、天性好いたる筆の道、好きに上がり、習ふに覺え、古き弟子ども追ひ抜き、天晴れ手書になるべしと、思ひの外に主從の、縁まで切れてその風體、筆取る事も忘れつらん。

〽仰せに猶も恐れ入り。

源藏　御返答申すは憚りながら、前髪立ちの時分より、お側近う召使はれ、手を書く事は藝の司、書けよ習へと御意なされ、御奉公の隙々、書き覺えたと申すも慮外、蚯蚓のたくつたやうに書く手でも、藝は身の助けとやら、浪人の身過ぎ、鳴瀧村にて子供を集め、手習ひ指南仕り、今日まで夫婦が命も、筆先に助けられ、淸書の直し字・毎日書けども上がらぬ手跡・お尋ねにあづかる程に、身の不器用と御勘當、悔むに詮方なき仕合せ、恐れ入りましてござりまする。

〽歎くをつら／＼聞し召し。

菅丞　子供に指南いたすとは、賤しからざる世の營み。筆の冥加、藝の徳、申す所に僞はりなくば、手跡も變らじ改むるに及ばねども、爰にて書かせ道眞が、所存は後にて云ひ聞かさん。認め置いたる眞字と假名、詩歌を手本に寫し見よと。

〽白木の机御手づから、差寄せ給へばハアハツと、先へは出でず後すさり、心根惡の左中辨、物蔭よりズツと出で。

ト奥の襖より希世出て來り

希世　オヽ、こりや源藏、久しいな。今あれから樣子殘らず立聞いた。師匠の指圖は兎も角も、辭退申して出る筈を、兩手をついて目をましくし、蟇蛙の所作からするは、書いても見ようと思ふ氣か。そりや野太い、叶はぬ事だぞ。

源藏　ハツ、お馴染とあつて忝ない。希世さまのお詞に、一つも違はぬ役に立たず。併し、身の分際を顧みぬ、源藏めでもござりませぬ。只今これにて書けとある御手本、書いてよいやら惡いやら、後先の樣子も存ぜず、四年以來在所住居、くさ墨に三文筆、書出しや反古の裏に、書けならば場うてもせまい。この結構な机に墨、筆、大高檀紙の位に負け、一字一點、如何な／＼。

希世　オヽ、そりやよい料簡だ。いかぬと知つて、なぜ立たぬ。

源藏　サア、そこでござりまする。御勘當の私し、御意に甘えた身の願ひ、お執成し頼み上げまする。

希世　ムウ、それで聞えた。詫び言はしてやらうが、今はならぬ、と云ふ仔細、引つまんで話して聞かさう。この度、帝の仰せには、存命不定の世の中、生死の道には老若差別はなけれども、マア年寄りから死ぬるが順道。菅

丞相に當年五十二、天命を知ると云ふ齢も過ぎ、寄る年を惜しませ給ひ、唐土まで譽める菅原一流、これまで傳授の弟子もなし、一代限りで絶すは殘念、手を選んで傳授せいと、勅諚で七日の物忌み。殊の外お取込み。事済んでから願うてやらうワ。

源藏　ハッ、樣子段々承はれば、御大慶な勅諚。

希世　サア、その勅諚も大慶も、云はずとも知れた事。サアく早く、歸れく。

ト源藏、モヂくく立たうとする。

菅丞　イヤ、立つな源藏。云ひ付けた手本、只今書け。

源藏　ハッハッ。

〽仰せは武部が身の大慶。希世は偏執むしやくしや腹、立寄り源藏睨み付け。

希世　ヤイ、わりや兄弟子に遠慮もせず、書かうと思つて出しや張るか。

源藏　ハヽア、お笑ひあつても恥かしからず。

希世　見事おのれが

源藏　御諚でござれば。

希世　書いて見る氣か。

源藏　如何にも。

希世　さてく圖太い。

源藏　御免なされて下さりませ。

〽御免なれと机にかゝり、手本を取つて押頂き、心穏せず磨る墨の、色も匂ひも芳ばしき、筆の冥加ぞ有り難き、希世側へ摺り寄つて。

ト此うち源藏、机にかゝり、墨を磨り、筆をしめし、清書と認めにかゝる。

希世　コリヤ、われがやうな横着者は、手本の上を透き寫し、その手目に身がさせぬ。恥と頭はかき次第。身の態の恥面、わりや何とも思はぬか。襤袍の上に汚れ袴、机に直つて居る態は、貧乏寺の講中、奉加場の帳附け其まま。無緣法界と書くなよ。

〽惡口たらく云ひ散らし、怪我の振りにて机を動かし肘に觸つて邪魔するも、構はず咎めず手本の詩歌、心よく書き負ふせ、机も共に御前に直し、退つて頭を下げ居たる。

ト此うち希世、いろく邪魔をする事よろしく、トヾ源藏、清書を書きしまひ、机のまゝ上の方へ直し、下の方へ來り、平伏する。

〽丞相清書取上げ給ひ。

文政八年八月　河原崎座上演

三世尾上菊五郎の源藏　　關人早替りの菅丞相

丞相「鐵沙草只三分計、跨樹霞纔半段餘」これは我が作れる詩「昨日こそ年は暮れしが春霞春日の山にはや立ちにけり」これは又、人丸の詠歌、いづれも早春の心を詠み叶へり。假名と云ひ、眞字と云ひ、これに勝れし手跡やあらん。惣じて筆の傳授といつぱ、永字八法、筆格の十六點、名をそれ〴〵に云ふに及ばず、人々の知るところ。菅原の一流は、心を傳へる神道口傳、七日も滿る今日只今、神慮にも叶ひし源藏。ホ、ウ、見事々々。

〽御喜びは限りなし。

源藏　ハア、有り難や、忝なや、筆法御傳授あるからは、御勘當も免され、以前に變らぬ御主人樣。

丞相　ヤア、主人とは離れを主人。傳授は傳授、勘當は勘當、格別の沙汰なれば、不埒きなる汝なれども、能書なれば捨て置かず、私しの意趣は意趣、筆の道を立てる道眞が心の潔白、叡聞に達しても、依怙とに思し召されまい。希世にも疑はれな。勘當は前の如く、主でなし家來でなし。この以後、對面叶はぬぞ。

〽尖き御諚源藏が、膽に焼鐵刺さるゝ心地。

源藏　道理を分けての御意なれども、傳授は外へ遊ばされ何卒御勘當御免の程。

希世　こりや、源藏の嘆くが道理。勘當を免されねば、傳授しても規模がない。彼れが願ひも、希世が望みも立てやうの料簡は、傳授と勘當替へ〴〵にして遣はされたら、よさゝうなものゝやうに存じまする。

〽存じますると云ふ折から、當番の諸太夫罷り出で。

侍ひ　我が君へ申し上げまする。

希世　何事でござる。

侍ひ　俄の御用これある間、只今參內遊ばされよと、瀧口の官人、參られましてござりまする。

希世　お聞きあられましたか。

丞相　ムウ、七日の齋戒過ぎざるうち、御用とは何事、隨身仕丁の用意せよ。

侍ひ　ハア、。

〽裝束の間に入り給ふ。

ト屋體の御簾を下ろす。侍ひ、奥へ入る。希世源藏殘る。

〽參內と聞し召し、立出で給ふ御臺所、襠裲の下に戸浪を押隠し、人目包みも餘所ながら、お顏をせめて拜ませんと、心遣ひは希世が手前。

ト奥より園生の前、襠裲の下に戸浪を隱し、出で來り

御臺　御傳授の樣子承はれば、希世さま、お前にはさぞ嬉しこり多う、思し召しませう。仕合せは源藏、さりながら、御勘當は免りぬげな。館の出入りも今日限り。御參內を見送りがてら、それで、ナ、合點か。

〽それで〱と襠裲の下へ、知らする御目遣ひ、夫婦は重重お情の、身に沁み渡る忝涙。

ト奧にて

侍ひ　參內。

トこれにて下がり羽になり、掛け烏帽子の露を取りたる半素袍、股立ちの侍ひ二人、一人は沓の臺に沓を載せ、粕烏帽子、白張の仕丁六人付添ひ、奧より出で來て、下の方に佇ふ。拵らへの支度、よきキッカケあつり、下がり羽打あげる。

〽束帶氣高き菅丞相、一間の內より立出で給ひ

ト奧より菅丞相。冠裝束、笏を持ち出て來り

丞相　源藏、近う。

源藏　ハツ。

ト前へ出る。菅丞相、袱紗包みの一卷を差出す。源藏、座手水を使ひ、一卷を受取り押頂き

當座の面目。御流儀を末世に傳ふる、源藏が身の冥加、如何ばかりか、有り難く存じ奉りまする、

〽末世に傳へる寺子屋の、敬ひ申し奉る、因緣斯くとぞ知られける。

丞相　サア、傳授濟む上からは、對面はこれ限り。罷り歸れ。

希世　コリヤ源藏、映え面かいても、もう叶はぬ。腰が拔けて得立たずば、引摺り出してくれう。

ト立ちかゝる。園生、留めて

園生　ア、コレ、希世さま、荒氣なうし給ふな。二世の緣の切れ目ぢやもの、立たぬも理り、嘆くも道理。涙ながらて御暇乞ひ。

〽見奉れど襠裲の、褄より覗かす戶浪が顏、それぞと推し給へども、知らぬ顏にて立ち給ふ、何として召されたる、御冠の自ら、落つるを御手に請け留め給ひ。

丞相　物には障らず、脫げたるは。ムヽ。

〽ハツとばかりに御氣がゝり。

園生　イヤ、それは源藏が願ひ叶はず、落涙いたす。落は落つると讀むなれば、そのしるしでがなござりませう。

丞相　イヤ〱、さにてはよもあらじ。參內の後知らるゝ事。源藏、早く歸されよ。

希世　参内。

皆々　ハ、ア。

ト下がり羽になり、菅丞相先に、半素袍の侍ひ、仕丁六人、後に付き、希世嘲笑ひながら附いて行き、この人数鷹揚に向うへかゝる。

〽冠正して参内ある、夫婦は怖はく〱御見送り、御勘當の身の悲しさは、跡に行かれず、伸び上がり、見やり見送る御後影、御簾にさへられ、衝立の、邪魔になるのも天罰と、左遷を投げ伏し男泣き、戸浪が悔みは夫の百倍。

ト此うち皆々向うへ入る。

戸浪　お前は御前のお詞かゝり、直にお顔を見やしやんしたが、わたしや御臺様の御後に隠れて、沁み〱お顔も拜まぬ。わたしが心、思ひやつても下されぬ。まんがちな一人泣き。同じ科でもお前は仕合せ。女子は罪が深い。鈍な女子に生れたいわいなア。

〽御臺のお側を憚りなく、果し涙ぞいぢらしき、希世ノサ〱立戻り。

ト向うより希世、出て来り

希世　ヤア、源藏を歸されぬは、御臺所、御油斷々々々々。一刻も早くぼいまくれと、重ねての御諚。サア、源藏、キリ〱御門外へ出居らう……と云ふ所だが、それを云はぬは希世が料簡。いま申し受けた傳授の一巻、讀んで見る望みはない、筆の冥加にあやかる爲、ちやつと拜みたい。なんと拜ませてはくれまいか。

源藏　すりや、何と仰しやる。大切なるこの一巻を。

希世　冥加の爲、拜ませてくれ。コレ、頼む〱。

源藏　左様ならば、大切なる一巻なれど、お望みに任せ、あなた様へ。

ト一巻を出す。希世受取り。

希世　これは忝ない。よい折から居り合せて、有り難い物を拜む事ぢや。ドリヤ〱。

トいろ〱あつて、一巻を持ち、一散に向ふへ駈け出す。源藏、引ッ捕へて立廻り。

〽油斷を見濟まし逃げ出すを、引摺り戻すかづき投げ、傳授の一巻取返し。

ト立廻りにて、希世を取つて投げ足下に踏まへ、一巻を懐中して

源藏　ヤア、大切なこの一巻、これをおのれが引浚はうと、直垂の羽繕ろひ、晝鳶の兀頂め、動き廻ると、ぶち放す

ぞ。

園生　コレ、源藏、聊爾しやんな。戸浪、源藏を留めやいの。

戸浪　コレ、こちの人、御臺樣のお詞、滅多な事さしやんすな。

源藏　エヽコレ、おのれ、ぶち放す奴なれど、命は助けるその代り、只助けるも殘念な。寺子屋が折檻の、机は此奴が責め道具。女房、爰へ持つて來い。

〽取るより早く、脊中に机、大けなし、兩手を引ッ張る机の足、裝束の紐引しごき、がんじがらみに縛りつけ、硯の墨で面眞黑。

ト源藏、戸浪、二人して希世に机を脊負はせ、注連繩引ッ切り縛りつけ、硯の墨を面へ塗る。

〽盗みひろいだ師匠の躾、竹篦の代り扇の親骨、打ち立て／＼突きよばせば。

ト扇にて、さん／＼に面をぶち、花道の方へ抛り出す希世、顏をしかめて起きあがり

希世　エヽ、いま／＼しい。悉皆公卿の湯屋泥坊を見るやうだ。うぬ、源藏め、覺えて居ろよ。

源藏　なにを。

ト立ちかゝる。

希世　アレ、なにサお前。

〽痛さも無念も命の代り、恥を脊負うて歸りける。

ト希世、向うへ入る。

〽源藏夫婦手をつかへ

源藏　禁庭の樣子、承りたう存ずれども、長居は恐れ。

戸浪　この上ながら女夫が事、お見捨てなう勘氣のお詫び。

園生　オヽ、それは氣遣ひしやんな。いま行くと云ふ聞捨てに、せめて一夜と云はれもせぬ、命が物種、縁も盡さずば、又重ねて。

源藏　隨分御無事で、御臺樣。

戸浪　もうお暇申しまする。

園生　夫婦の者。

兩人　御機嫌よろしう。

〽戸浪が泪長汐に、乾く間もなき袖の海、見る目いぢらし夫婦が姿、泣く／＼御門を。

トこの三重にて源藏、戸浪、小腰を屈め、花道へかゝる。御臺、思ひ入れ。兩方とも振り返り／＼、名殘惜しげに揚げ幕と奧へ別れて入る。時の太鼓にてこの道具ぶん廻す。

天保十一年九月　中村座上演

三世嵐吉三郎の梅王　澤村訥升の源藏

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて大門、左右とも一面築地の高塀、すべて菅原館門外の體よろしく道具とまる。

〽出でゝ行く、源藏と引違へ、立歸る梅王丸、靑息吐息門の並木に足躓き、かつぱと轉げて起きる間も。

ト梅王丸、向うより駈け來り

梅王　待たれぬ〳〵。侍ひ衆、御大事が起つて來た。咎めの樣子は何かは知らず、使ひの廳の官人ども、丞相さまを取圍し、鐵棒割り竹。アレ〳〵爰へ。御臺樣へこの樣子を申し上げて、おくりやれ〳〵。

〽館の騷動、門外には、鐵棒打振り警固の役人、輿にも召させ奉らず、菅丞相の前後を圍み、先へ進むは時平の荷擔人、三善の淸行、門外に立ちはだかり。

ト花道より淸行出て來る。後より菅丞相、指貫ばかりにて出て來り、これに主稅、大小上下の形。高股立ちにて附き、その外、掛け烏帽子、半素袍の侍ひ大勢付いて出て來る。

淸行　齊世の君苅屋姫、加茂堤より行くへ知れず、仔細詮議なされしところ、親王を位につけ、娘を后に立てんとする、菅丞相が兼ねての企み。その罪遠島と相極まり流罪の場所は追つての沙汰。それまでは押籠め置く。出口出口の大貫錠、門の警護は身が家來、荒島主稅に申し付けるぞ。

主稅　畏まつてござりまする。

〽呼はる聲を聞く辛さ、御臺は警固の人目を耻ぢず、走り寄つて。

ト門の内より園生の前走り出で、菅丞相に取付く。

園生　こりやマア、どうした事でござりまするぞいなう。齋戒の間の事、姫が身の上御存じない、云ひ譯はなぜなされぬ。科もない身を左遷との、仰せは聞えぬ、恨めしう存じまするわいなア。

〽歎き給へば。

丞相　ヤア、愚か〳〵、道眞虛名蒙むれども、君を恨み奉らず、漸く齡傾きし、臣が拙なき筆跡まで、惜しませ給ふ傳授の勅諚。昨日までは叡慮に叶ひ、今日は逆鱗蒙るとも、皆天命のなすところ。先程冠の落ちたるは、殿上の札を削られ、無位無官の身となる知らせ。今更悔む道眞ならず。そこ退き召され。

〽御臺を遠ざけ給ひける。希世は道より取つて返し。

希世　ト向うより希世出て來て
清行どの御苦勞千萬、この和郎の樣子承り、弟子の方から師匠をあげ、向後賴むは時平公、菅丞相と一つでない執成し、よろしく賴み入りまする。

清行　氣遣ひあられな、呑み込んだ。作法の通り菅丞相、内へ追ひ込み門を打て。

主稅　畏まつてござりまする。立たつせい。

ト割竹を持つて立ちかゝる。

希世　コレ／＼待つた。その役目、希世が代つて仕る。

ト割り竹を取つて

コレ、謀叛人どの、今までとは當りが違ふ。時平公へ宗旨を替へた手見世の働らき、割り竹一つ喰はつしやい。

ト立ちかゝる。

梅王　イヽヤ、さうはさせまい。

ト希世を捕へ突き飛ばす。

希世　ヤア、下主の慮外者、自滅したうて出しや張つたな。

梅王　ハレヤレ、知れてある下主呼はり。こなたの口から慮外とは、腸がよれ返る。その割り竹を振り上げて、誰れを打つたのだ。

希世　知れた事、謀叛人のこの和郎を。

梅王　ヤア、謀叛とは誰れが謀叛、御恩を忘れし人非人。菅丞相にはお構ひなくとも、おのれに罰を梅王丸が當てゝやらう。

丞相　梅王待て。

梅王　ムウ。

〽飛びかゝる梅王丸、御手をさしのべ引寄せ給ひ。

丞相　ヤア、こざかしき汝が振舞ひ。勅諚に依つて斯くなる道眞、希世はさて置き、その外へも手向ひするは上への恐れ。汝は勿論、館の者ども、我が詞を用ひずば、七生までの勘當せうか。

梅王　ぢやと申して。

丞相　扣へて居らぬか。

梅王　ヘイ、いま／＼しいなア。

〽聞いて希世が怖氣も拔け。

希世　コリヤ、梅王、して見ぬかいやい。頰桁ばかりの腕なしめ。茲な業晒しめが。

梅王　なにを。

〽のさばる無念堪える梅王、是非も情も荒島主稅、官人ばらに追ひ立てられ、すご／＼館に入り給ふ、御有樣こそ悼はしき、サア／＼用意の大貫鎹、表と裏へ手分け

の人數、築地の穴門、樋の口まで、暫時の間に打つけしは、物忌はしく見えにける。

ト主稅と侍ひ立ちかゝり、青竹にて門を閉ぢ、方々を打ち付ける。

清行　ハレ、よい氣味な。出口々々の締りもよいか。築地の屋根を越さうも知れぬ。主稅、萬端油斷をするな。暮れに及べば、希世どの、歸宅いたさうではござらぬか。

希世　イカサマ、御同道仕らう。

〽築地の蔭に待ち居たる、武部源藏ヌッと出で、希世を一當て悶絶させ、慌てる清行相伴投げ。

ト下の方より源藏戸浪出で來り、希世を當て、清行を投げる。

主稅　狼藉者だ。引ッ括れ。

〽殺せ縛れと犇めいたり、武部は戸浪に差添渡し、寄らば切らんづ勢ひなり、希世はやう／＼人心地、立ちあがつて、

希世　ヤア、うぬは源藏め。一度ならず二度ならず、酷い目に會はしたな。うぬがする狼藉は、菅丞相がさせたになつて、流罪の仕置が、死罪にならうも知れぬぞ。

源藏　ハヽヽヽ、女房、あれ聞け。物覺えのない拔け作め。

傳授は受けても、勘當は赦りぬこの源藏、さすれば身共に主人はない。梅王丸は主持ちで、おのれめを苛なまず、堪えてゐるが可哀さに、名代に投げてやつた。名代次手に片ッ端から、何奴も此奴も撫切りだ。うぬら一々・覺悟なせ。

希世　小積な事を。ソレ、打ち殺せ。

侍皆　動くな。

源藏　なにを。

〽女房諸とも拔き放し、滅多なぐりの太刀風に、小穢侍ひ鋸公家、吹き立てられて散り失せけり。

トこの文句にて侍ひ大勢・源藏戸浪にかゝる。立廻りあつて源藏、皆々を追ひ廻し・下手へ入る。希世、築地の蔭より出で、戸浪を捕へ、をかしみの立廻りよろしく

〽敵なければ立歸る、時節も幸ひ黃昏時、門の扉をトン／＼と、叩けば内より咎むる聲。

ト源藏、引返して希世を追ひ込み、門の扉を叩く。

梅王　誰れだ／＼。

源藏　その聲は、聞き覺えた梅王丸か。

梅王　さいふは武部源藏どのか。

天保十一年九月中村座上演　尾上菊次郎の戸浪

源藏　殿どころかい、若い者、油斷して居る所でない。扉の釘付け踏み破り、御主人方の御供し、この場を退くは易けれど、おことが今も聞く通り、仁義を守る道眞公、とあつて讒者の計らひにて、お家の斷絶覺束なし。御幼少の御若君を、コツソリ夫婦が預かり奉らん。所存を立てるはコレ梅王、若君を築地の上から。

梅王　出來た〳〵、源藏どの、お上へ云つては得心あるまい、盜み出すがお家の爲。

源藏　さうぢや〳〵、よい料簡、一刻一歩も早退きたし。賴む〳〵。

〽賴む〳〵と云ふ間もなく、築地の上から心の早咲き、勝色見せたる花の顏。

ト梅王丸、菅秀才を抱いて築地の上へ出す。

梅王　大事の若君、お怪我のないやう。

源藏　オヽ、心得た。

〽心得高き築地の屋根、軒に手屆く心も屆く、若君受取り抱き下ろし、外と內とに忠臣二人、胸は開けど開かぬ御門、荒島主稅目早く見付け。

ト下手の方より主稅出で來り

主稅　ヤア、盜人の隙はあれど、守り手の隙はない。宵覗きを手引する、內と外との相摺りめら。菅秀才を盜んだこの旨注進する。待つて居れ。

源藏　ヤア、どこへ〳〵。おのれをやつてよいものか。荒島主稅、覺悟なせ。

〽討つてかゝれば拔き合せ、切り結び切りほどき、追ひつ返しつ二人が勝負、屋根の上から見てゐる梅王、棧敷正面眞向二つ、破れて命は荒島主稅。

梅王　止めに及ばぬ。切捨て〳〵。

〽危ない場所を盜人夫婦、行く末榮ゆる菅秀才。若君賴む、夫婦の衆。

戸浪　館の父君母君を。

源藏　賴むぞ梅王。

梅王　ハヽア、心得た。

〽互ひに賴み賴まるゝ、忠義々々を書き傳ふる、筆の傳授は寺子屋が、一藝一能名も高き、人の手本となりにけり。

ト戸浪、菅秀才を脊負ひ、源藏附いて向うへ入る。梅王丸、築地の上に引ッ張りの見得よろしく、段切れにて

幕

四　幕　目

河内國道明寺の場

役名ト　菅丞相。判官代照國。土師の兵衞。宿禰太郎。似せ迎ひ、彌藤次。奴、宅内。老母覺壽。立田の前。苅屋姫。

本舞臺、三間の間、高足の二重舞臺、見附け襖。上の方、折り廻し引拔き障子屋體。舞臺上の方、植込み泉水。いつもの所に枝折り戸、萩垣、すべて河内の郡領館の體。爰に腰元三人、松の島臺を拵らへ居る見得。琴唄にて幕明く。

ト三人よろしくあつて

腰元　サア／＼、これで出來上がりぢやあるまいかえ。

同　成る程、お前は立花の心があるゆゑ、この松の木振りが、一しほぢやわいなア。

同　それはなア、日頃からのその嗜み、それゆゑ後室樣のお見立、こりやきついものぢやわいなア。

同　これはしたり、大概になぶらしやんせいなア。それはさうと、あの御逗留のお客樣も、明日はいよ／＼お立ち遊ばすさうぢやわいなア。

同　ほんに、それなれば、あの美しいお姫樣も、あなたと一緒にお立ちなさるゝのかいなア

同　なんのいなア、あなたは苅屋姫さまと云うて、道眞さまの姫君樣ではあれど、なんぢやゝらお目通りへは叶はぬとやら云ふ事。

同　それ／＼、一體親御樣は流罪とやらで、遠い島へお出でなさるゝを、あの後室樣のお願ひで、この程の逗留ぢやわいの。

同　それはマアお氣の毒な事、それにまた何で、この島臺は入る事ぢやぞいなア。

同　ハテ、それも後室樣の、深い思し召しのあつての事でござんせう。

同　それはさうとその島臺、早うお上へ、ナア小菊どの。

同　ほんにそれ／＼、ちつとも早う差上げさしやんせ。

同　そんなら一緒に、サアござんせ。

〽云ひつゝ奥へ入りにける。

ト腰元、島臺を持ち奧へ入る。

〽立田の前は船場にて、思はず逢うたる苅屋姫、密かに

伴ひ歸れども、家來も多くは知らぬがち、隱し置きたる小座敷の、襖をソツと押開き。

ト二重舞臺の襖を開け、立田の前、苅屋姫を伴ひ出で來り

立田　さぞ淋しからう、精も盡きやう、寛見に來たいは山山なれど、さりとては何やかや用事の多さ。母様のお側離されねば得參らぬ。今が好い隙、誰れも來ぬ。氣晴らしに、サア爰へ。

ヽ心遣ひも同胞の、姉の情を苅屋姫、一間を出づる目は淚。

ト兩人好き得へ直り

苅屋　齊世さまに別れてより、段々お世話にあづかる上、父上様にお目にかゝり、せめて不孝の申し譯。それも叶はぬものならばと、我が身の覺悟極めても、產の母様覺壽さま、今の母様都の弟、齊世さまの御事は、猶ほしも忘れぬ得忘れぬ。心を推量して下さりませ。

ヽ咲けば共に淚ぐみ。

立田　悲しいは道理々々。丞相さまに逢はぬとて、短氣な事などかんまへて、思ひ出しても下さんすな。母様のお願ひ立つて、この屋敷に御逗留。どうぞ首尾を見繕ろひ、母様のお耳へ入れ、お指圖受けて餘所ながらと、口むしりかけて見たればナ　こちの思うた坪へは行かず、母様の堅苦しさ。お果てなされた郡領さまに、少しも變らぬ行儀作法。我が產んだ子でも人に遣れば、先こそ親なれ此方は他人、それを親ぢやの娘ぢやと、思ふは町人百姓の、譯をば知らぬ子に甘さと、幸先惡い訴訟もならず、外の事に云ひ紛らし、その場は濟んでも始終が濟まぬ。お宿申すも今日で三日、しけ空も吹き晴れて、下り日和に直つたと、船場からの注進ゆゑ、今宵八ツがお立ちとて、輝國どのゝ旅宿より、知らせに依つてお立ちの用意。今やなんどと思ひの外、手詰めになつたが、どうしてよからう、膝とも談合、コレ、泣かずと、好い智慧出して下さんせ。

ヽとつおいつの胸算用、後にスツクと宿禰太郎。

ト奥より宿禰太郎、着流し大小にて出て來り

宿禰　よい分別者これにあり。

立田　ヤア、太郎さま、いつの間に。

宿禰　ムウ、いつの間とは、コレ立田、連れ添ふ男の目を拔いて、こつそりと取込んで、大それた身の上話し、苅屋姫は其方が妹、藁の上から養子の仔細、知つては居れど京

と河内、武家と公卿とは位も格別、菅丞相の伯母風吹かし、華めかしても、いつかなめかれぬ位負け、名ばかり聞いて逢うたは今。てんと御器量、齊世とやら樣とやらが、うつゝ樣にならしやつたも、道理ぢや〳〵。姫の顔見ぬ先は、おれは楊貴妃ぢやと思うたが、比べて見れば無楊貴妃、其方の名も替へねばならぬ。

立田　そりや又何とえ。

宿禰　ハテ知れた事、お次の前。

立田　ホヽ、ずば〳〵と出放題、母樣へも隱してゐる、この譯、何とも云はしやんすなえ。

宿禰　それは氣遣ひし給ふべからず。明日のお立ち知らされし、輝國の旅宿へ參り、この間御逗留中、心遣ひの禮云つて、いよ〳〵刻限相違なく、一番鷄の鳴くのが合ひ圖、申し合せに行て來いと、覺壽の云ひつけ。只今參る道で、よい思案が出たら、戻つて云はう、お次の前。

立田　アレ、まだじやら〳〵てんがう口。

宿禰　オツト閉口、ドレ、行てかうか。

〽表の方へ出でて行く。

ト宿禰太郎向うへ入る。

〽跡を見やりて苅屋姫。

苅屋　あなたがお前のお連合ひ、身の事に取紛れ、御挨拶も申しませぬ。

立田　アヽコレ、挨拶はいつでもなる事、此方の願ひは延されぬ。……オヽ、それ〳〵、所詮母樣に云うたとて、埒があかぬは知れてある。連合ひも留守、母樣もお傍にござらぬ折柄なれば、お前をわたしが連れて行て、叱られうがどうならうが、跡は儘いな。マア此方へ。

〽姫の手を取る後から。

ト後の襖を明け、覺壽、杖を持つて出で來り

覺壽　不孝者、どつちへ行く。

〽襖ガラリと母の覺壽、杖振り上げて飛びかゝるを、立田はハツと抱き止め。

ト覺壽、杖振上げて立ちかゝる。立田の前止めて

立田　マア待つて下さりませ。お前に明けて云はなんだ、隱したお腹が立つならば、この立田を打ちも叩きもなされませ。この中も宣はぬか。人に遣れば我が子でない、と仰しやつての折檻は、母樣とも覺えませぬ。丞相さまの御祕藏姫、杖棒當てゝよいものか。サア、自らを自らを。

〽姫に代つて身をいとはず。

苅屋　イヤ、お前に科はない、不孝な自ら打ち給へ。
〽立田を押しやる杖の下。
立田　イヤ／＼、お前は打たされぬ。
苅屋　イヽヤ自らを。
立田　イヤわたしを。
苅屋　お打ちなされて
兩人　下さりませ。
〽折檻の杖を爭ふ姉妹思ひ、老母は猶も怒りの顔色。
覺壽　コリヤ、立田、おりや他人には折檻せぬ。養子にやつた丞相どのは、おれが爲には甥の殿、子に遣つた姫は甥孫、親も許さぬ淫らして、大事の／＼甥の殿、流され給ふは誰れが業。憎うて／＼、コレ、この杖折るゝ程擲かねば、丞相どのへ云ひ譯立たぬ。六十に餘つて白髪頭、連合ひに別れた時、剃るを剃らさぬ立田の前、尼になつては便りがない。力がないと留められて、法名ばかり、覺壽と呼ばれ、邪魔に思うたこの白髪、今日といふ今日役に立つ。頭を剃つて衣を着れば、打擲の杖は持たれぬわい。側杖望む立田から。
〽走り寄つて丁々、打たるゝ姉妹、打つ母も、共に涙の荒折檻。

ト覺壽、兩人を杖にて打擲する。上の障子屋體の内にて
丞相　コレ／＼伯母御前、卒爾の折檻し給ふな。齊世の君の御不便ある、娘に疵ばしつけ給ふな、父を床しと慕ひ來る、苅屋姫に對面せん。
〽障子の内より丞相の、御聲高く聞ゆるにぞ、老母は杖をカラリと打捨て、ワツと叫んで伏し轉び、暫し答へもなかりしが。
覺壽　産の親の打擲は、養ひ親へ立つる義理。養ひ親の慈悲心は、産の親へ立つる義理。甘き詞も打擲も、子に迷うたる親心。逢うてやろとは、姫よりも、母が喜び詞には盡されぬ。苅屋姫は結構な親、持つた事ぢやいなう。
〽持つた／＼と目に持つた、涙の限り、聲限り、二人の娘は何事も、お慈悲／＼とばかりにて、泣くより外の事ぞなき。
これなう、爰から禮を云はうより、來いとあらば、イザ側へ。
〽隔ての襖押明くれば、菅丞相は見え給はず、逗留の中作られし、主の姿の木像ばかり。

ト上の障子を開ける。内に木像据ゑてあり。三人恟り思ひ入れ。

〽こはそも如何にと苅屋姫。

苅屋　逢うてやらうと宣ひしは、母様の折檻を止めん爲。兎角に不孝な自らゆゑ、お逢ひなされて下されぬか。いま物を仰しやつたは、父上に逢ひはないに、木で作りし父上様が、但しは物を宣ひしか。又はどこぞへ隱れてか。

〽立つて見、居て見、うろ／＼／＼。

覺壽　騷しや苅屋姫、丞相の逗留中、御馳走は奧座敷、爰へは餘程間數も隔り。先程聲のかゝつた時、爰へはどうしてござつたと、思ひながら嬉しさに辨まへなく、見ればこの木像ばかり。次手ながら苅屋姫、話して聞かさう。逗留の中主の形、描いてなりとも作つてなりとも、伯母が筐に下されと、願うた日から取かゝり、初手に出來たは打割り捨て、二度目に作り立てられしを、同じくこれも打ち砕き、三度目にこの木像、作り上げて仰しやるには、前の二つは形ばかり、精魂もなき木偶人、これは又丞相が、魂ひ殘す筐とて、下されし主の姿。物を云ふまいとも云はれず、帝への恐れあれば、逢ひたうても逢はれぬ親子、木とな思ひそ。

〽苅屋姫。

もの仰しやつた父上に、逢やつて、さぞ嬉しかろ。母も本望遂げましたわいの。

〽親子三人喜びの、中へノサ／＼立歸る、太郎が父親土師の兵衛。

ト向うより土師の兵衛、上下衣裳大小にて、後より宿禰太郎、附添ひ出で來り、舞臺へ來て

兵衛　覺壽これにおはするか。お客人のお立ちも明朝、出立の拵らへ、さぞ取込み。役に立たずとお見舞ひ申し、手傳ひでも仕らうと、參りかけに、照國どのゝ、旅宿へもちよつと付け屆け、悴が幸ひ居り合せ、用意も大方出來たと聞き、先づは大慶。兎角するうちもう暮れ相。一先づ歸つてお立ちの時分、また參るのも老足なれば、お邪魔ながらこれに居らう。心遣ひなし下されな。

覺壽　兵衛どのゝ義理々々しい、嫁子の所は内同然、斷わりに及ぶ事か。用事があらば遠慮なく、仰しやつたがよいわいの。刻限まではコレ立田、其方の部屋にお寢間を取りや。兵衛どの、後程お目にかゝりませう。

〽嫁を連立ち入り給へば、娘は親子が小聲になり。

ト覺壽、苅屋姫を伴ひ、立田附いて奧へ入る。跡に兵

衛、太郎、兩人殘り

兵衛　コリヤ、道々謀し合した通り　太郎、ぬかるな。

宿禰　氣遣ひなさるな。親人ござりませ。

〽奥と部屋とへ別れ行く。

ト兩人矢張り奥へ入る。

〽座敷々々は燭臺ともらし、今宵限りの御奔走、とり〴〵騷ぐばかりなり、土師の兵衛は一間よりソツと抜け出で前栽の、勝手覺えし切り戸口、錠捻切つて押開けば、外から合、圖の挾み箱、差出す中間、從士、若黨。

ト腰元、舞臺へ燭臺を出して入る。奥より兵衛、窺ひ窺ひ出で來り、枝折り戸を開けて合ひ圖すると、下の方より侍ひ二人、中間二人、挾み箱を持つて出で來り兵衛に渡す。

兵衛　コリヤ、イ、云ひ付けた人數の裝束、丞相を迎ひの張り輿、スワと云ふ時刻に合せよ。

侍ひ　心得ました。

兵衛　行け〳〵。

侍ひ　ハツ。

〽家來共先へ歸し、挾み箱ヒツ抱へ、月影洩るゝ木の間木の間、ウロ〳〵窺ふ同腹中。

ト侍ひ中間、ツカ〳〵と入る。奥より宿禰太郎出で來り

宿禰　親人、お首尾は。件の物は參りしか。

兵衛　悴、氣遣ひするな。コリヤ、この中に計略の彼の一物大事の談合、爰へ〳〵。

ト兩人、舞臺の上の方へ行く。兵衛、太郎に囁く。

〽爰へ〳〵と大庭の、池のほとりで囁く親子、宵から素振りに氣を付けて、宿禰太郎に目放しせず、立田の前が物蔭より、聞くとも知らず、宿禰太郎。

ト此うち奥より立田の前出かゝり、二重舞臺に窺ひ居る。

宿禰　先程お聞きなさるゝ通り、判官代輝國、迎ひに參るは八ツの上刻、時平公よりお頼みの、菅丞相を殺す工面。似せ物仕立て迎ひと僞はり、受取つて途中でグツ。とは云ふものゝ、一番鷄の唱はねば、姑の片意地、名殘惜しんで渡すまい。八ツ鷄の鳴かぬ先に、宵啼きする鷄。これにござるか。

〽挾み箱より鷄出し。

オヽ、皮膚のよい白相國、とかうするうち、もう夜半、一調子張上げ、存分に唱うてくれ。一聲聞かねば落ちつ

かぬ。親人、なぜ啼きませぬ。

兵衞　イヤ、その分では啼かぬ筈、宵啼きは天然自然、極めては啼かぬもの。それを啼かすが祕密事。大竹の中へ熱湯を入れ、その上に留らすれば、陽氣廻るを時節と心得、塒をつくる。留り竹も挾み箱に入れて來た。童子の湯もたぎつてあらう。釜口ソツと取つて來い。

宿禰　オヽ、取つて來るは易い事。併し、湯を仕掛けても啼かぬ時は。

兵衞　ハテ、疾い。啼かぬ時は又分別。

〽親子が企み、南無三寶一大事、先へ廻つて母樣へ、お知らせ申して、イヤさうしてはイヤ云はいでは、また此方が云うては、彼方が此方がと迷ひし胸を撫で降ろし。

トこの文句のうち立田の前思ひ入れ。

立田　宿禰さま、太郎さまは何所に。

〽尋ぬる聲にハツと二人が狼忙仰天、鷄隱す挾み箱、アタフタ締めてさあらぬ風情。

ト兩人、恟りして、鷄を挾み箱に入れ、さあらぬ體にて

宿禰　イヤ、事々しう呼び立つるは、何ぞ急な用でもあるか。さもない事なら無遠慮千萬、親人もこの宿禰も、膽に應へて恟りしたわい。

〽云ふ顏つくづく打眺め。

立田　お前方の恟りより、わしに恟りさゝしやんした。聞えませぬ、連合ひ舅君、似せ迎ひを拵らへて、菅丞相さまを殺さうとは、あなたに何ぞ恨みがあるか。

〽但しは時平に頼まれしか、慾には馴染の女房も捨て。母樣の義理も思はずか。お前は捨つる心でも、わしや得捨てぬ太郎さま　これ申し、叔父樣、思ひ留つて下さりませ。

〽舅を拜み夫を拜み、聲も得立てぬ貞女の思ひ、涙挾を現はせり。兵衞は宿禰に眼くばせし。

兵衞　イヤハヤ、眞身の意見に會うて、聟も悴も面目ない。向後心を改むれば、嫁女、この事は聞き流しに。

立田　アヽ、勿體ない。聞き流さいでよいものか。御得心とあるからは、この世ばかりか未來まで、變らぬ夫婦舅君、まだ如月の餘寒も烈し、炬燵に膚を温め、酒一つ上げたい。サア、お出でなされませ。

ト奧の方へ行きかける。

〽先に立田が。

兵衞　ソレ、そこを。

〽ト兵衛、太郎に切れと知らせる。
〽心得太郎が後袈裟、肩先四五寸切られながら、振返つて摑み付き。
ト太郎、後より拔打ちに立田の前を切り下げる。立田思ひ入れ。
立田　エヽコレ、人非人、卑怯者、一人の手にも足らぬもの、騙し殺すが本望か。女の義理を立て過し、エヽ口惜しや、無念やなア。
〽罵る聲。
宿禰　おとぼね立てな。
〽と宿禰が下着、褄先口へ押込み捻伏せ、肝先グッと一抉り、兵衛は前後に心を配り。
ト太郎、立田の口へ褄先を押込み、捻ぢ伏せて止めをさす。此うち兵衛、あたりへ氣を付ける思ひ入れ。
兵衛　悴、息は絶えたか〳〵。
宿禰　氣遣ひめさるな。只今止め。
ト血刀を拭ひ、鞘に納め
さてこの死骸は。
兵衛　問ふに及ばぬこの大池。骸を浮さぬ手ごろの石、袂や帶に括り添へ、深みへやれ。

宿禰　合點だ。
〽二人して、投げ込む死骸は紅の、血汐に染まる池までも、立田が名をや流すらん。
ト兩人、庭の石を拾ひ、立田の前の懷、袂へ押込み、池の中へ投げ込む。
宿禰　コレ親人、これはこれでよいが、濟まぬは鷄、臺子の湯を取つて參らう。
兵衛　太郎、もうそれには及ばぬ。啼かす仕樣は身共に任せ。
〽武士の嗜なお懷中松明、手ばしかく點し立て、池の中へ明りを見せ、挾み箱の蓋仰向け、鷄を上に乘せ、浮める池の水の面、刀の鐺差延す、腕一杯に押遣れば、動かぬ水も夜嵐に、立つや小浪のうねりにつれ、半段ばかり流れ行く。
ト兵衛、懷中より松明を出し、燭臺の灯にて火を移し、松明を差出し、挾み箱の蓋に鷄を乘せたるを刀の鞘にて突出す。太郎、思ひ入れ。
宿禰　親人、何をなさるゝ。挾み箱の蓋を船にして、子供のする業、大人氣ない。あれが何の役に立ちます。ハヽハヽ。

兵衛　ムウ、譯を知らずば云うて聞かさう。惣別淵川へ沈んで知れぬ死骸は、鷄を船に乘せて尋ぬれば、その死骸の在る所で塒を作る。鷄の一德思ひ出し、池へ沈めた立田が死骸、今一役に立てゝ見る、うまい手番ひ。拍子までが直つて來た。アレ〱太郞、羽叩きするは死骸の上か。

ト　これにて鷄、塒を作る模樣。

ソリヤこそ啼いたは、東天紅。

宿禰　ソリヤ、また唱ふは東天紅。

ト所々にて鷄啼く。

〽八ツにもならぬ宵啼きの、聲冴え返る春の夜や、庭木の塒に羽叩きして、一鷄啼けば萬鷄うたふ、函谷關の關の戸も、開く心地に親子の喜び。

兵衛　これから急ぐは菅丞相、迎ひの拵らへ。心が急く。ちつとも早く。

〽兵衛は出て行く切り戸口、宿禰太郞は巧みの仕殘し、駄目をきかして入りにけり。

ト兵衛先に、宿禰太郞、思ひ入れあつて向うへ入る。

〽はや刻限ぞと御膳の拵らへ、銚子、土器、熨斗、昆布、腰元に島臺持たせ、伯母御座敷へ出で給ひ。

ト奥より腰元三人、長柄の銚子、三方、土器、熨斗昆布、松の島臺を持ち出で來る。後より覺壽出で來り

覺壽　百日千夜留めたりとも、別るゝ時は變らぬ幸さ。この上頼むは御免の勅諚。歸洛を松のこの島臺、行く末祝ふ熨斗昆布。

〽菅丞相もこの間、心遣ひの御一禮、互ひに盡きぬ御名殘り、宿禰太郞罷り出で。

ト菅丞相、靜かに出る。太郞出で來る。後より官人四人、白木の張り輿を持ち、彌藤次、龍神卷、侍ひ烏帽子、中啓を持ち出で來り、門口に扣へる。太郞、內へ入つて

宿禰　お立ちの刻限。はや門前まで迎ひの官人、判官代輝國は、路次の用心辻固め、只今旅宿を立ち申され、輿舁きの官人に、譜代の家來を相添へられ、只今これへ參上仕る　張り輿これへ。

皆々　ハア。

〽怪しの張り輿舁き入れて、時刻移るとせり立つる、菅丞相は悠々と、大廣間より出させ給ひ、輿に召すまで見送る老母、人前作つてにこ〱と、泣かぬ別れぞ哀れなる。

ト輿を舞臺へ舁き入れる。菅丞相はこれに乘り、太郎附いて向うへ入る。

〽宿禰太郎も御見立、門送りして立歸り。

ト太郎は直ぐに立戻り來る事よろしく

ヤレ〳〵、嬉しや〳〵、仕舞ひが付いた。覺壽さまもお氣安め、寢間へござつて。

覺壽　イヤ、寢たうても寢られぬわいの。

宿禰　ハア、寢られぬとはお氣色でも。

覺壽　アレ、まだいの。客立てゝ嬉しいと、一道な聟どのゝ喜び、一つ屋敷に居ながらの、暇乞ひも得せいで、苅屋姫が悲しからう。人の逢ふもけなりかろと、かけ構はぬ立田さへ、それでわざと呼び出さなんだが、機嫌よう立たしやつたを、喜びにはなぜ來ぬぞ。誰れぞ行つて見ておぢや。

腰元　畏まりました。

ト奥へ入る。

〽云ふにキヨロつく宿禰太郎、腰元どもは立戻り。

ト奥より腰元、直ぐに出で來り

同　立田さまのお部屋から、奥のお座敷をお尋ね申しましたれど。

同　奥にお出で遊ばすは、苅屋姫さま只お一人。

同　立田さまは、お出でなされませぬ。

覺壽　なんぢや居ぬ。内を離れて、どこへ行きやらう。今一度見ておぢや。

腰元　畏まりました。

トまた奥へ入る。太郎、思ひ入れあつて

宿禰　ソレ、中間ども、立田の在所、詮議〳〵。

トこの時下手にて

中間　ハア、。

〽座敷の隅々かくれ〳〵、尋ね〳〵と吟味の嚴しさ、提灯てんでに若黨中間、幾人あつても行屆かぬ、花壇築山手分けして、尋ぬる奥の池の端、芝に溜つた生血を見付け。

ト下手の方より中間宅内、箱提灯を持ち、後より同じく中間、皆々箱提灯を持ち出で來り、そこらを尋ねる事よろしくあつて、宅内、池の側の生血を見附け

宅内　待て〳〵〳〵〳〵、一番待つてもらはうかい。

ト乘りになり

一つ灯影ですかして見れば、二つ不思議、三つ見付けた、四つ夜更けて。

〽鮭の騒動、五つ一揆合戦がゆかぬ、六つ胸騒ぎ、七つ何であろ、八つ奴が、九つこの池へ、十で飛び込まうか。

皆々　飛び込め／＼。

〽池を探せと聲々に、水心得た奴ども、飛び込み／＼水底より、擔ぎ上げたる立田が死骸。

トみな／＼捨ぜりふにて、宅内、池へ飛び込み、立田の死體を引上げる。皆々驚ろく。太郎、思ひ入れ。

〽驚ろき騒ぐその中に、太郎は鼻も動かさず。

宿禰　殺した奴は内にあらう。詮議濟むまで門打つて、家來ども動かすな。

〽わめき散らせば母覺壽、姫も彼所へ轉び出で。

ト奥より苅屋姫出で來り、其まゝ立田の前に取付き

苅屋　コレ、誰れ人の仕業ぞや。先からお顏を見なんだは伯母樣のお側にと、思ひ設けぬこの死骸、父上には生別れ、お前には死別れ、時も變らず、悲しさ辛さ一時に、かゝる例もある事かいの。

〽老母に取付き悔み泣き。

覺壽　オヽ、道理々々。其方はわしが側にと思ひ、わしは其方の側に居ると、思ひ違ひが娘の不運、母が因果でおやるわいの。

〽かつぱと伏して正體なし、太郎は側へ立寄つて。

宿禰　渠は死人の爲にはならぬ。女房どもへの追善には、殺した奴を引ッ張り切り、これにて詮議仕らん。

〽縁端に大胡坐、

男女に限らず家來の奴ばら、片ッ端から詮議する。サア、とつ付に居る宅内め、身が前へ、ズッと出をらう。

宅内　ネイ／＼。

〽ないと御前へかつゝくばひ。

人は知らず、拙者めに、お疑ひはござない筈。お死骸を取上げた、御褒美を下されうで、一番にお呼出し。忝ない儀でござりまするでござります。

宿禰　ヤア、まが／＼しい。褒美とは横着者め。立田が死骸池に在るを、おのれはどうして知りをつた。サア、それ吐かせ。

宅内　イヤ、尻も頭も見やう筈はござりませぬ。池の淀みへ芝から傳うた血を證據に。

宿禰　ヤア、吐かすな。堤灯の灯明りで、それがそれと、知るものか。うぬが殺して沈めた池、外の者がどうして知らう。血の分では云ひ譯立たぬ。

宅內　これはお旦那、無理仰しやる、云ひ譯立たうが立つまいか、池が血へ流れ込んだ、その外は存じませぬ。

宿禰　ヤア、池が血へ流れたとは、血迷うて何ほざく。彼奴、詮議場で水喰はせ、白狀さする。ソレ、引ッ立てろ。

〽宿禰も續いて立つところを、老母押止め。

覺壽　イヤ、責めるには及ばぬ。詞のてん〳〵。嬉しや娘の敵が知れた。

宿禰　ハア、責めなとは天晴れお日高。科極まつた罪人、女房ども〳〵手向ける成敗、太袈裟に打ち放す。腕を左右へ引張ッて居れ。

覺壽　イヤコレ、成敗は常の科人。袈裟に切つては只一思ひ、苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵、初太刀はこの母、後は舞殿、刀を借りる。

〽甲斐々々しくも裾引上げ、向ふ日當は奴にあらず、油斷太郎が弓手の肋、突込む刀に宅內は、命拾うて逃げて行く。

ト覺壽身拵らへして、太郎の刀を取つて油斷を見濟まし、太郎の脇腹へ突ッ込む。宅內と中間は、仰天して逃げて入る。

〽宿禰太郎に急所を刺され、跪き苦しむ息の下。

宿禰　身共に何の科あつて、アノ茲な老ぼれめが。

覺壽　ヤア、覺えないとは云はさぬ〳〵。我が科を人に塗り、成敗をして見せ立て、裾はせ折つた下着の褄先、切れてある、その切れは、こりや立田が口に囓へ、立てさせぬ無理殺し、歯を噛み締め放さぬ褄先、切つた事を打忘れ、おのれが科をおのれが顯はす極重惡人、死骸の前で敵を取る。母が娘へ手向けの刀、肝先に應へたか。

〽大の男を仕留める老母、流石に河內郡領の、武藝の筐殘されし、後室とこそ知られけれ。

トこの時、向うより菖蒲革の侍ひ走り出で來り

侍ひ　申し上げまする。判官代輝國、只今これへお出でござりまする。

〽家來が申すに、老母は驚ろき。

覺壽　丞相は先程お立ち。誰れを迎ひに。心得ぬ事ながら、此方へ通しませい。

侍ひ　ハツ。

ト引返して入る。

覺壽　苅屋姫は奧へ行きや。此奴はまたつと苦痛をさせる。

〽刀を其まゝ、體押退け、出迎へば、判官代輝國

ト覺壽出迎ふ。向うより輝國、龍神卷・侍ひ烏帽子・中啓を持ち出で來り

輝國　お迎ひの刻限、御用意よくば、早お立ちあられませう。

〽申す詞の先折つて、

覺壽　イヤコレ、輝國どの、何仰しやる。丞相の迎ひに、足下の家來が先程見え、受取つて歸られたは、もう一時も先の事。

輝國　ヤア、コレ〳〵伯母御。身が家來に渡したとは、旁以て心得ず。鷄の聲に刻限計り、只今啼いた旅宿の鷄、八ツに參る迎ひの約束。家來と云はうが、直に身共が參つたとて、刻限も來らず、鷄も啼かぬ先、渡したと云うては濟むまい。船がゝりのその間、伯母御に逢はずはこの輝國が情の容赦。今日の今になつて、名殘は一倍、島へはやらぬ、渡したと云へばそれで濟むと、鼻の先の女子の料簡。菅丞相の仇にこそなれ、爲にならぬ。僞はりな申されそ。

覺壽　イヤ、僞はりは申さぬ。庭で啼いた鷄の聲。そこへござつた迎ひの衆、渡したに違ひはないか、受取らぬと仰しやるので、娘が最期、聟があの態。思ひ合せば先刻に來たは、似せ迎ひではあるまいか。

輝國　コレ伯母御、内の騷動、死人のある上、似せ迎ひ、噓ではあるまい。讒者どもの所爲であらう。一時違へば三里の後れ、追ひ付いて取戾さん。

〽急きに急いて駈け出す輝國。

トつか〳〵と花道の方へ行きかける。上の障子屋體の内にて

丞相　ヤア〳〵判官、先づ待たれよ。道眞はこれにあり。

〽一間より出で給ふ、覺壽は恟り。

ト障子引取る。内に菅丞相、床几にかゝりゐる。覺壽、恟りして

覺壽　先刻に別れた菅丞相、そこにはどうして。

〽どうしてと、不審の立つも道理なり、判官輝國打笑ひ。

輝國　ぬけ〳〵とした伯母御の僞はり、暫時の仰天。丞相これに在しませば、輝國が安堵〳〵。見え渡つたこの御難儀、譯も聞きたし、力になつて進ぜたけれど、私しならぬ警護の役目。はや刻限も移りぬれば、イザ、お立ちあつて然るべう存じまする。

トこの時向うより、また侍ひ一人走り出で來り

侍ひ　ハツ、先程の警固の役人、又ぞろ只今御門前まで、

參られましてござりまする。

覺壽　何ぢや輝國が。ハテ、よい所へ戻られた。嘘つかぬ覺壽が證據。これへ通し、輝國どのへ見せませう。

ト侍ひ入る。

輝國　イヤ、身が名を僞つた似せ役人、直に逢うては惡かるべし。忍んで様子を窺はん。丞相には先づ。

〽丞相諸とも一間の障子、引立て内に隱れ居る。

ト上の障子をさす。輝國奥へ入る、向うより彌藤次先に以前の張り輿を舁ぎ、警護の人數出で來り、舞臺へ來て下の方へ輿を据ゑる。

〽輿に先立つ警固の大將。

彌藤　コレ老母、輝國の名代とけ謀すり、とでもない物身に渡し、よくぬつぺりとさゝれたの。

覺壽　これは迷惑、丞相を受取りながら、とでもないとは、なに仰しやる。

彌藤　アレ、まだぬつぺり。丞相は丞相でも、木で造つたは此方にや要らぬ、天にあれば天丞相、地にあれば、地丞相、さんげ〳〵六根清淨、どうせう〳〵、かうせう〳〵、肉付きの菅丞相、替へる氣で持つて來た。木造は、コレ爰に。

〽云ふに覺壽は心付き、さては魂ひを籠められし、木像であつたかと、悟れど證據を見屆けんと、心の喜び押隱し。

覺壽　こりや、こなたが云ひ分、合點がゆかぬ。その木像、見せさつしやれ。

彌藤　オヽ、しやちこばつた荒木作り、サア、今見せう。

〽明くる戸の、輿に召したは、木像ならぬ優美の姿、菅丞相、につこと笑うて立出で給へば、警護はギヨツと呆れ顏、覺壽も逢ひし心當、障子の内と今見る姿、心どぎまぎ疑ひながら。

ト彌藤次、輿の戸を明ける。内より菅丞相スツと立出る。皆々恟り思ひ入れ。

覺壽　オヽ、よう戻して下さつた。慥かに伯母が受取りました。

ト立寄るを、彌藤次支へて

彌藤　ヤア、どこへ〳〵。そりやならぬ。ならぬとは云ふものゝ、連れて歸つて見たのは木像、摺りかへられたと氣が付いて、替へに戻つた、爰ではほんの菅丞相、おれが目の惡いのか。但し見所によつて變るのか。ハテ面妖な。

天保十一年九月中村座上演　七世市川海老蔵の覺壽

覺壽　變らうが變るまいが、戻された菅丞相、イザ、此方へ。

〽立寄る覺壽

彌藤　ヤア、野太い事を。

〽突き飛ばし、丞相を又輿に乘せ、戸を引立て家來に向ひ。

ト覺壽を突き廻し、菅丞相を輿に乘せ

コリヤ、わいらも樣子を見る通り、如何にしても怪しい事ども。この分では歸られず、念の爲家搜しする。者ども、踏ん込め。

ト彌藤次立ちかゝり、皆々「ハッ」と詰め寄る。

〽踏ん込む先に宿禰太郎、半死半生のたうつ苦しみ。

ト彌藤次、太郎を見附け

南無三寶、太郎さまが切られてござる。

ト思はず後の兵衞の仕丁へ向ひ

モシ〳〵お旦那、太郎さまだ〳〵。

〽呼ぶ聲に、警固の中から親兵衞、前後も更に辨へず走り寄つて引起し。

ト警護の中より、兵衞、白張烏帽子、官人の形にて出で來り

兵衞　コリヤ倅、この深手は何奴が仕業。相手を知らせい知らせい。

〽相手を知らせと、氣を急いたり。

覺壽　コレ、兵衞どの、相手は姑。オヽ、わしが手にかけた。

兵衞　ヤア、婿を手にかけ、落着き自慢。何科あつて、身が倅を。

覺壽　ヤア、とぼけさしやんな婭どの、其奴が立田を殺した時、其方も手傳ひしやらうがの。娘の敵、切つたがなんと。似せ迎ひの棟梁どの、何もかも顯はれ時。さつぱりと、云うた〳〵。

兵衞　エヽ、殘念な。倅めが出世を思ひ、時平公に一味して菅丞相を殺さん爲、鷄に宵啼させ、十を九つ仕負ふせた兵衞が手段、腐れ婆に嗅ぎ出されたか。倅が敵、覺悟ひろげ。

〽飛びかゝるを、させじと、判官輝國、小蔭より顯はれ出で、覺壽を圍うて突ッ立つたり。

ト兵衞、覺壽にかゝる。この時、輝國、奧より出で來て支える。

ヤア、どなたが出てもビクともせぬ。兵衞が企みの破れ

かぶれ、死物狂ひの働らき見よ。
〽切つて掛ればかい潜り、持つたる刀踏み落し、利腕摑
んで引繰り返し、足下に踏み付け大音あげ。
輝國　ヤア、輝國が家來ども、似せ役人を引ッ縛れ。
彌藤　ヤア、輝國が家來ども、似せ役人を引ッ縛れ。
仕丁　モシ／＼、似せ役人は、あなたでござります。
彌藤　ヤア、これは。
〽縛れ／＼と云ふ聲に、始めの擬勢ぬけ／＼と、一人も
殘らず逃げ失せたり。
ト彌藤次始め、警固の輿舁き、皆々逃げて入る。
〽覺壽はとつかは輿の戸を、明くる間さぞやお氣詰まり
と、內を見ればこは如何に、筐の木像また恟り、これは
如何にと立歸り、こなたの障子押明くれば、
ト覺壽、奧の戸をあける。內に木像入れてある。これ
を見て思ひ入れ。また上の障子を明ける。內に菅丞
相、坐つてゐる。
丞相　ヤア、伯母御、必らず騷がせ給ふな。
ト出で來り、よき所へ住ふ。
〽爰でも恟り、彼所でも、恟りびくりに、心の迷ひ。
覺壽　どちらがどうぢや輝國どの、目利なされて下されい
なう。
〽問はるゝ人も問ふ人も、呆れ果てたるばかりなり、丞
相重ねて。
丞相　輝國の迎ひ遲參ゆゑ、まどろむともなく暫時の間、
物騷がしく聞えしゆゑ、窺ひ見れば兵衞が企み、太郎が
所爲、立田の前が果敢なき最期、是非もなし。伯母御の
心底、さこそ／＼。道眞これへ來らずば、かゝる歎きも
あるまじきに。
〽今さら悔みの御淚。
覺壽　イヤ、娘が命百人にも、換へ難き大事の御身、怪我
過ちのなかつたを、喜びこそすれ、なんの泣かう、なん
のなんの。
〽と云ふ目に淚。
ト覺壽思ひ入れあつて
ナウ、輝國どの、惡事の元はその兵衞。この世の暇を早
う／＼。太郎も共に。
〽立寄つて髻引上げ。
丞相の堅固の有樣、おのれ親子に見せたが本望。娘
が恨みも晴れつらん。
〽刀を拔けば息絶えたり。

ト宿禰太郎に突き立てし刀を引拔く。これにて太郎、
落入る。
〽、憎いながらも不便な死態。有爲轉變の世の習ひ。
娘が最期もこの刀、母が罪業消滅の、白髪も同じくこの
刀。
〽取直す手に髻拂ひ。
ト覺壽は持つたる刀にて、髮を切る。
親孫を見るまでと、貯へ過した雖白髮、孫は得見いで憂
目を見る。娘が菩提逆緣ながら、弔ふこの尼、種々因緣
南無佛道、南無阿彌陀佛。
〽唱ふれば、菅丞相も唱名の、聲も涙に回向ある、
判官輝國大いに感じ。
輝國　伯母御前に先取られ、後に下がつたおのれが成敗。
强慾非道の皺頭。
ト輝國、兵衞の首を打ち落す。
〽水も溜らず打ち落す、覺壽は木像抱きかゝへ、菅丞
相の右手の方、御座を並べて直し置き。
ト覺壽、木像を丞相の右の方へ直し
覺壽　兵衞親子が企みも顯はれ、何もかも納まりしは、こ
の木像の不思議の働らき。かゝる例も
〽ある事か。
丞相　いやとよ、最前も云ふ如く、匹夫々々が企みも顯は
れ、我が身難を遁がれしも、暫時のまどろみ前後は知ら
ず。木に彫み、筆に畫く、例は本朝名高き繪師、巨勢の
金岡が畫いたる馬は、夜な〳〵出でて、萩の戸の萩を喰
ふ。
〽唐土にも名畫の譽れ。
吳道子が畫繪の雲龍、
〽雨を降らせし例もあり。
また神の尊像木佛などの、人の命に代らせ給ふ、例は數
〽盡されず。道眞が三度まで、作り直せし物なれば、木
にも魂ひ備はつて、我れを助けしものならん。讒者の爲
に罪せられ、身に荒磯の
〽島守と、朽果つる後の世まで、筐と思し召されよと、
仰せは外に荒木の天神、河内の土師村道明寺に、殘る威
德ぞ有り難き。輝國あたりを打眺め。
輝國　思はざる儀に隙取り、夜も明け離れ候へば、お立ち
あつて然るべし。
〽また改まる暇乞ひ。
覺壽　伯母が寸志の餞けせん。用意の物を、こなたへ持ち

文化八年七月中村座　三世坂東彦三郎の菅丞相

や。
〽苅屋姫の上着の小袖、掛けたる伏籠諸ともに、御側近く取直させ。
ト奥より腰元三人、苅屋姫の小袖かけたる伏籠を持ち出て、よき所へ直す。
波風荒き楫枕、餘寒を凌がせ申さん爲、伯母が心を焚きしめた、小袖を島まで召るゝやうに、輝國どの、お世話ながら。
〽頼みまするとありければ。
輝國　これはよろしき進せ物。笘の香防ぐ留め木の小袖、家來に持たせ參らせん。
〽立寄り伏籠に手をかくる、丞相暫しと止め給ひ。
丞相　アヽイヤ、御恩を厚く籠め給ふ、伏籠にかけしこの小袖、中なる香はきかねども、銘は大方、伏屋か苅屋。伯母御前より道眞が、申し請くる女子の小袖、我が身には合はぬ筈。身幅も狭き罪人が、只このまゝにお預け申す。我が子袖と思し召し、立田の前が追善の、佛事も共に。
〽伯母御前の、心を悟る御詞、骨身に堪え忍び兼ね、思はずワッと聲立てゝ、歎くにさてはと輝國が、心を感じ萎れ入る。
覺壽　泣いたは結句あの子の爲、別れにちよつと只一目。伯母が願ひを叶へてたべ。
〽立寄る袖を引きとゞめ。
丞相　お年ゆゑの空耳か、いま啼いたは慥かに鷄。あの聲は子鳥の音、子鳥が鳴けば親鳥も。
〽啼くは生ある習ひぞと、心の歎き隱し歌。
啼けばこそ別れを急げ、鷄の音の、聞えぬ里の曉もがな。
〽と詠じ捨て、名殘は盡きず、お暇と、立出で給ふ御詠歌より、今この里に鷄なく、羽叩きもせぬ世の中や、伏籠の内を洩れ出づる、姫の思ひは羽拔け鳥、前後左右を圍まれて、父は元より籠の鳥、雲井の昔忍ばるゝ、左遷の身の御歎き、夜は明けぬれど心の闇路、照すは法の御誓ひ、道明らけき寺の名も、道明寺とて今も猶、榮えまします御神の、生けるが如き御姿、爰に殘れる物語、盡きぬ思ひにせきかぬる、涙の玉の木槵樹、珠數の數々くりかへし、歎きの聲に只一目、見返り給ふ御顏せ、これぞこの世の別れとは、知らで別るゝ別れなり。
ト此うち丞相、立ちあがり、行かうとする。苅屋姫、

おづ〳〵出で、丞相の袂を扣へる。振り拂つて二重より下へ下りる。また苅屋姫、前へ出る事よろしく双方愛ひの思ひ入れ。苅屋姫、泣き落す。丞相、花道へかゝる。皆々・相見合せよろしく、丞相・天神の見得あつて、向うへ入る。段切れにて

ト幕外、鳴り物になり、輝國、悠々と向うへ入る。あと、シヤギリ。　幕

五幕目　吉田社車曳の場

役名‖左大臣藤原時平。舍人・松王丸。同、杉王丸。同、梅王丸。同、櫻丸。鐵棒引。

本舞臺三間の間、向う壹面の淺黄幕、朱の玉垣、上の方、吉田社と書いたる額を掛けたる大鳥居、左右松の大樹、日覆より同じく吊り枝、玉垣の向う所々に石燈籠・宮神樂にて幕明く。

〽鳥の鑵の巣に放れ、魚陸に上がるとは、浪人の身の譬へ草、菅丞相の舍人梅王丸、主君流罪なされてより、都の事ども取賄ひ、御臺のお行くへ尋ねんと、笠ふかぶかと深綠、土手の並木にさしかゝれば、向うからも深編笠・我れに違はぬその出立ち、互ひにそれぞと近く寄り。

ト此うち東の歩みより、梅王、浪人者の拵らへ、大小、深編笠にて出で來り、花道より櫻丸、同じ拵らへにて出で來り、直ぐに舞臺へ來り、互ひに入れ替り、

櫻丸　梅王か。

梅王　櫻丸か。

櫻丸　話す事あり。

梅王　聞く事あり。

〽兄弟木蔭に笠傾むけ。

ト神樂になり。

まづ差當つて問ひたいは、其方はいつぞや加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ・尋ね行きしと、內儀八重の噂語り、なんとお二方に尋ね逢うたか。

櫻丸　如何にも、道にて追ひつき奉り、菅丞相御流罪と聞くより、御對面なさしめ奉らんと、安居の岸まで御供せしが、御對面は叶はず、輝國どのゝ計らひにて、御歸洛

明和五年九月中村座上演

三世松本幸四郎の松王丸

二世市川八百藏の梅王丸

戀ひの妨げと、お二方の御縁も切れ、姫君には土師村なる、伯母君の方へお出あり、また齊世の君さまは、法皇の御所へ供奉し奉り、事納まりしと云ひながら、納まらぬは我が身の上。冥加に叶ひ御車を引く、その有り難い事打忘れ、賤しい身にて戀の取持ち、遂には御身の仇となり、宮御謀叛と讒言の種を拵らへ、御恩を請けたる菅丞相さま、流罪にならせ給ひしも、皆櫻丸がなす業と、思へば胸も張裂く如く、今日や切腹、明日や命を捨てうか、と思ひ詰めは詰めたれど、佐太におはする一人の親人。今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、並べて見ると當春から、喜び勇みおはするに、我れ一人缺けるなら不孝の上に不孝の罪。せめて御祝儀祝うた上と、詮なき命今日までも、永らへる面目なさ、推量あれや、梅王丸。

〽拳を握り歯を喰ひしばり、先非を悔いたるその有様、梅王も理りと、暫し詞もなかりしが。

梅王　オヽ、道理々々、我れとても主君流罪に會ひ給ふ上は、都に留まる筈なけれど、御館沒落以後、御臺様のお行くへ知れず。先づ此方を尋ねうか、筑紫の配所へ行かうかと、右つ左つ心は迷れど、今も其方が云ふ如く、年寄つた親人の、七十の賀の祝ひもこの月、これも心にかかるゆゑ、思はず延引。互ひに思ひは須彌大海、是非もなき世の有様ぢやなア。

〽兄弟顔を見合して、涙催ふす折柄に。

雜式　先退いて、片寄れ／＼。

ト雜式、鐵棒を引き出で來る。これにて兩人、思ひ入れあつて

梅王　アイヤ、どなたのお通りでござります。

雜式　ヤア、此奴が／＼。本院の左大臣藤原の時平公、吉田へ御參籠、出しやばつて鐵棒喰ふな。

〽云ひ捨てゝこそ急ぎ行く。

トよろしく鐵棒を引いて向うへ入る。梅王、思ひ入れあつて

梅王　なんと聞いたか、櫻丸。

ト兩人よろしく編笠を取つてノリになり

齊世の君さま、菅丞相、憂目にあはした時平の大臣、存分云はうぢやあるまいか。

櫻丸　成る程／＼、よい所へ出ツくはした。梅王ぬかるな。

〽兄弟道の左右に別れ、尻引ッ紮げ身構へし、今や來ると待ち居たる。

トこの時、上手にて

大勢　ハイホウ。
〽程なく轟く車の音、商人旅人も道をよぎる、時平の大臣が路次の行粧、隨身青侍前後に列し、大路狹しと轢らせたり、兩人木蔭を飛んで出で。
ト好き時分より、中通り殘らず、仕丁の形、ハイホウと聲して、上手より御所車を牛に引かせ出る。後より杉王、白張、烏帽子にて附添ひ出で來る。兩人思ひ入れあつて
兩人　車やらぬ。
〽と立ちふさがる。
トこれにて杉王、兩人を見て
杉王　ヤア、何者かと思へば、松王が兄弟の、梅王丸と櫻丸。ア、聞えた。主に放れ、扶持に放れ、氣が違つての狼藉か、但し又、時平公の御車と、知つてとめたか、知らいでとめたか。返答次第で容赦はせぬぞ。
〽白張の袖捲り上げ、摑みひしがんその勢ひ、梅王丸えせ笑ひ。
梅王　ヘエ、、云ふな／＼、氣も違はねばこの車、見違へもせぬ時平の大臣。
櫻丸　齊世の君さま菅丞相、讒言によつて御沈落、その無念骨髓に徹し忘られず、出逢ふ所が百年目と、思ひ設けし今日只今、櫻丸と。
梅王　この梅王が牛に手馴れし牛追ひ竹、位自慢で喰ひ肥つた時平公の尻こぶら、一つ二つ、五六百、喰はさねば、堪忍ならぬ。
櫻丸　云はれぬ主の肩持ち顔。
梅王　出しや張つて、怪我まくるな。
杉王　ヤア、法に過ぎた慮外者、ソレ、引ツ縛れ。
〽供の侍ひ聲々に、前後左右に追取り卷く、兄弟は事ともせず、取つては投げ、摑んでは投げ、踏みつけ／＼投げ付くれば、あたりに近付く者もなし、松王黙つて、
トこれにて松王、白張、柏烏帽子、長柄を持ち、大勢を分け出で來る。この間、兩人へ仕丁二人づゝよろしくかゝるを投げ退け、この時三人一時の見得。松王、思ひ入れあつて
松王　ヤア、命知らずの暴れ者。何れもにはお構ひあるな。御主人のお目通り、御奉公は今この時、兄弟一つでないといふ、忠義の働らき、お目にかけう。コリヤ、ヤイ、松王が引掛けたこの車、止めらるゝものならば、止めて見ろ。エエ。

〽鼻づら取つて、引出す車。
櫻丸　櫻丸と
梅王　梅王丸、爰になくばいざ知らず
櫻丸　一寸なりと
梅王　五分なりと
兩人　やつて見ろエヽ。
〽兩人轅に手をかけて、エイ〳〵〳〵と押戻せば、牛も四足を立て兼ねて、後へ〳〵と退り行く、松王車の後へ廻り、兩手をかけて力足、やらんやらじの爭ひは、世にもまれなる三つ子の舍人、互ひに劣らぬ主思ひ、命限り、根限り、やつゝ戻しつ、引合ふ車、大地は藥研と掘穿ち、土ににえ込む車の轍。
トこの間、三人、車へ手をかけ、引合ふ事。アリヤアリヤの聲よろしくあつて
ヤア、面倒な畜生め。
〽轅を放せば、逸散に、牛は離れて駈り行く。
ト車の牛を兩人して放す。これにて牛は下手に入る。
〽車の内ゆるぐと見えしが、御簾も飾も踏み折り〳〵踏み破り、顯はれ出でたる時平の大臣。
トどろ〳〵になり、車の御簾を四方へ踏み破り、時平、金冠白衣、裝束、笏を持ち、車の上に立ち身、キッと見得。
〽金巾子の冠を着し、赫々たる面色にて。
時平　ヤア、牛扶持喰ふ青蠅めら、轅にとまつて邪魔ひろがば、轍にかけて轢き殺せエヽ。
梅王　ヤア、さいふ大臣を
兩人　轢き殺さん。
〽二人が力に車を宙だめ、引くりかへすを返されじと、捻合ふ松王、右へ押せば左へ押し、上げつおろしつ二三度四五度、茲を先途と揉み合ひしは、祭の神輿に異ならず、時平は上より金剛力、撑と踏んだるその響き、車も心木も粉微塵、碎けし轅を銘々引ッ提げ、大臣を打たんと振り上ぐる。
時平　ヤア、時平に向ひ、推參なり。
〽赫と睨みし眼の光、三千世界の千日月、一度に照らすが如くなり、流石の梅王櫻丸、思はず後へたぢ〳〵〳〵。五體すくんで働らかず、無念々々とばかりなり。
ト此うち兩人、轅を取り上げ、時平に向つてかゝる。大ドロ〳〵になり、兩人五體の竦みしこなし、持つたる轅を舞臺へ打ちつけ、無念の思ひ入れ。松王、思ひ

明和五年九月、中村座上演

市川辨藏の櫻丸

入れあつて

松王　なんと、我が君の御威勢見たか。この上に手向ひすれば、お目通りで一打ちやぞ。

トきつとなる。時平こなしあつて

時平　ヤレ待て、松王。金巾子の冠を着し、太政大臣となつて、天下の政事を執り行ふ時平が眼前、血をあやすは社参の穢れ。助け憎い奴なれども、下郎に似合はぬ松王が働らき、忠義に免じて助けてくれる。命冥加な蛆虫めら。

〽あたりを睨んで立つたりけり。

松王　わいらはよい兄弟を持つて、二人共に仕合せ者、命拾うて有り難い、忝ないと三拜ひろげ。

〽云はれて兩人クワッとせきあげ。

櫻丸　ヤア、おのれにも云ひ分あれど、親人の七十の賀、祝儀濟むまで、ナウ梅王。

梅王　オヽ、その上では、松の枝々へし折つて、敵の根を斷ち、葉を枯らすわエヽ。

松王　そりやこそ、松王とても同じ事、親仁の賀を祝うた跡で、梅も、櫻も、落花微塵。足元の明いうち、早く歸れ。

兩人　ヤア、歸るを、おのれに習はうか。

松王　なにを。

〽詰め寄り〳〵兄弟三人、互ひに殘す意趣遺恨。

時平　早く車を轟かせよエヽ。

トさらしになり、三人、立廻り、車の心木へ手をかける。これをキッカケに時平を乘せたるまゝよき所まで突きあげる。アリヤ〳〵の聲、眞中に松王、左右に梅王櫻丸、三人よろしく引ッ張りの見得、下がり羽になり、よろしく。

幕

六幕目　　賀の祝の場

役名＝佐太村の白太夫、舍人、梅王丸。同、松王丸。同、櫻丸。堤畑の十作。梅王女房、春。松王女房、千代。櫻丸女房、八重。

本舞臺、三間の間、中足の二重、藁葺き屋體、竹の本緣付き。上の方、一間の障子屋體。この前、上寄より四ッ目垣結ひ廻したる松梅櫻の立ち木。この側

文政二年四月中村座上演　中村芝翫の時平

に米三俵積みあり、正面上手へ寄せて佛壇、地袋、戸棚。眞中、暖簾口。下手、鼠壁、いつもの所に竹簀戸・この外・後へ下がつて草井戸、藪疊すべて佐太村白太夫内の體。爰に白太夫、白髪親仁の拵らへ、竹箒熊手を持ち、庭を掃除してゐる見得、在郷唄にて幕明く

ト直ぐに淨瑠璃になり

〽春先は、在々の鋤鍬までも樂々と、遊びがちなる一農一番村で年古き、人に知れし四郎九郎、律義一遍取得にて、菅丞相の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承り、松・梅・櫻、御愛樹に、培へ水の養ひも、根が、農の鍬仕事・我が身の老木いとひなく、幹を肥しの百姓業、畑の世話より氣樂なり、堤畑の十作が、鍬打ちかたげ門口から。

十作　四郎九郎どの、内にかな。

ト ずつと入る。白太夫、見付けて

白太　こりや十作、畑へか。

十作　イヤ、今しまうて戻つたりや、嚊が云ふには、何やらめでたい祝ひぢやてゝ、大きな重箱に眼へ入るやうな餅七つ。朝茶の鹽にも喰ひ足らねど、貰はぬよりも忝ない。禮も云ひたし、祝ひとは、マア、なんでござる。

白太　サイノ、菅丞相さまの降つて湧いた御難儀、お下に住むおらゝが、身祝ひどころぢやなけれど、せにやならぬさかいで、するはするが、世間へも遠慮があつて、彼岸團子程な餅七つ宛配つたは、この四郎九郎丁度七十、この春年頭のお禮に上つた時、おらが年をお尋ねなされたゆゑ、七十と申し上げたりや、古來稀れな長生、その上珍らしい三つ子の父親、禁裏から御扶持下され、伜どもは御所の奉公、めでたい〱。生れ日、生れ月、生れ出た刻限違へず、七十の賀を祝へ、その日から名も變へよと、コレ、聞かしやれ、伊勢の御師か何ぞのやうに、白太夫とお付けなされた。即ち今日が誕生日、白黒まんだらかいは掃溜へ拋つて退け、今日から白太夫といふ程に、さう心得て下され。

十作　それはめでたい。次手ながら問ひませう。三つ子を産むと御扶持を下さる、其いはれも聞かしやつたか。

白太　サイノ、死んだ女房が産んだ時は、あたり隣の外聞、ひよんな事ぢやと思うたが、勿怪の幸ひ、三つ子の父親一代は、作取りの田地三反、日本ばかりぢやないげな、唐までさうぢやてゝ、男の子なりや御所の牛飼ひ、

女郎なれば東童とやら、これも御所で使はるゝ、法式は忝ないもの。旦那様は流罪なれど、おらは所も追ひ立てられず、下された田地は其まゝ。其方の嬶も若い程に産ますなら、おらにあやかりや／＼。

〽話の中道たどり來る、櫻丸が女房八重、今日は舅の祝ひ日とて、風呂敷包み片手に提げ。

ト此うち向うより、八重、風呂敷包みと菅笠を持ち出て來る、門へ來て

八重　嬉しや／＼、爰ぢやわいなう。

〽嬉しや爰ぢやと笠脱れば。

白太　オヽ、櫻丸が女房八重か。早かつた／＼。外の嫁御も揃うて來るか。マア／＼、上がつて抱へも解きや。

八重　アイ／＼、まだ皆様はお出でなされぬかいなア。わしや又、遲からうと氣が急いて、淀堤から三十石に飛び乘り、船の足の早いので草臥れもせず、早う來たが仕合せでござんすわいなア。

十作　コレ、四郎九郎どのや、お客さうな。もう行きませうかい。

白太　エヽ、四郎九郎とは物覺えがない十作、白太夫といふを、早忘りやつたかいの。

十作　イヤ、忘れはせぬわいの。餅の祝ひとは格別、名酒飲まさねは、いつまでも四郎九郎ぢや。

白太　ハテサテ、盛つた酒を飲まぬとは、但しは飲み足らぬかい。

十作　コレ、其やうに、ぬけ／＼と嘘云はしやるな。おらに酒をいつ飲ましやつた。

白太　オヽ、先刻に盛つた。樽や德利は目に立つゆゑ、餅の上へ茶筅の先で、酒鹽打つてやつたので、一度の祝ひは濟んだのぢや。

十作　エヽ、それで聞えた。嬶が酒くさい餅ぢやと云うた。外へは遠慮でさうせうと、おらは懇ろだけ、晩に來て寢酒に一杯よばれますぞや。

ト云ひながら、門口へ出て。

そんなら四郎九郎どの、お客人、ゆるりとさんせや

〽お客これにと、出でて行く。

ト十作は向うへ入る。白太夫は跡見送り

白太　ハヽヽ、コレ嫁女、あれ聞きやつたか。今の世の人はきめこまかで、おらが始末の手目見付けて、晩に來て寢酒飲まうとは、せち賢い懇ろ振りぢやなう。ハヽヽヽ

八重　又お前も大概な。ついに聞かぬ茶筅酒とは、あんま

りでござんすわいなア。ホヽヽ。
ヘ嫁と舅の睦まじさ、梅王、松王兄弟の、女房が來る道草も、女子の手業笠に摘み込み、蒲公英、嫁菜、枸杞の垣根を目印に、
ト唄になり、向うより千代、春の兩人、何れも好みの拵らへ、小風呂敷を持ち、菅笠に嫁菜の入れたるを持ち、摘み草をしながら出て來り
千代　摘草にかゝつて、ウカ〳〵と來ましたわいな。春さん、マアお先へ。
はる　イエ、お千代さん、マアお前から。
ヘ相嫁同志が門での辭儀合ひ、白太夫をかしがり。
白太　一時に生れた三つ子の嫁ども、先の後のどころかい。八重が疾から待つてゐやる。どちこちなしに入れ入れ。
ト白太夫こなしあつて云ふ。千代、春、内へ入り、春こなしあつて
はる　ほんに八重さん、早うござんしたな。どうでござんす道なれば、春が所へ誘うて下さんしよかと、待つた程に遲うなつて、心急きな道すがら、千代さんに行き逢うて、連立つて來る道てんがう、今日の祝ひの浸しにと、嫁菜、蒲公英、二人の仕業。

八重　それはよう氣が付いた。春さん誘ふ約束も、日脚の長けたに氣急きして、寄る事も忘れたに、お千代さんとは、よいお出合ひでござんしたなア。
千代　サイナア、お春さんに逢うたは、わしが仕合せ、賑やかな道連れ。それはそれぢやが御仁様、料理の拵らへ出來てござんすかえ。
白太　イヤ、出來てない。我御寮達にさす合點。コテ〳〵とむづかしい事にはいらぬ。今朝搗いた餅で雜煮しや。上置は知れた昆布。隙の入らぬやうに茹でゝ置いた。大根も芋もそこにある。勝手は知るまい。ヤア、えい〳〵。
ト立ち上がる。
千代　アヽ、イヤ申し、今日の祝ひは、お前が目當、料理方の出來るまで、何も構はず、一寢入りなされませいなア。
はる　それ〳〵、勝手は知れねど、三人寄つて、何もかも出しませうわいなア。
白太　さうぢやてゝ、立つた次手ぢや、棚のもの下ろしてやろ。
ト二重舞臺より膳椀を持つて來り
コレ〳〵、これを見や。祖父の代から傳はつた根來椀ぢ

文政八年七月中村座上演　三世坂東彦三郎の白太夫

や。折敷も十枚、おらが息災なもこの椀、折敷、堅地なとて、かんまへて手荒う當るな。嫁女達、コレマア、悴どもはなぜ遲いやら。來るまでに一軒やらかさうかい。

〽體を横にさし枕、堅地作りの親仁なり。

ト白太夫、二重へ寢る。

はる　コレ、皆さん、何ぼうあのやうに仰しやつても、雜煮ばかりでも置かれまい。飯も炊かざなるまいし、何はせいでも鰹膾、道草の嫁菜、お汁にしようぢやござんせぬか。

八重　ほんにそれがようござんす。そんならわたしは味噌摺り役。

はる　この春は飯しかけする程に、千代さん、八重さん、頼みます。

千代　ドレ／＼、飯仕かけの、始まり／＼。

〽手々に俎板、摺粉鉢、米炊桶にはかり込み、水いらずの姉嫁同志、菜刀取つて切り刻み、ちやき／＼／＼と手品能く、味噌摺る音も賑はしゝ。

ト ちり／＼の合ひ方に、三人、俎板、庖丁、摺粉木、摺鉢、米炊桶、大根、人參など取出し、料理にかゝる。この事よろしくあつて

〽白太夫眼を覺まし。

ト白太夫、起きあがり

白太　コリヤ、悴どもはまだ來ぬか。正月から知れてあるおらが祝ひ日、油斷せう筈はないが、ア丶、この中誰れやら。オ丶、それ／＼、いま去んだ十作が話しに、時平どのの車先で、三人の子供が大喧嘩、嫁達は知つてゐるであらう。車先の喧嘩とあらば、時平どのに奉公する、コリヤ、松王の女房、爰へ來て樣子話して聞かしや。

〽名ざしに逢うたは、千代が迷惑。

ト三人顏見合せ思ひ入れ。千代、餘儀なく前へ出で

千代　父さんのお祝ひ事、めでたく濟むまでは、お前の耳へ入れぬがよいと、三人ながらその心。いらぬ事しやべられて、隱されねば申します。梅王さん、櫻丸さん、お二人の相手にこちの人、日頃の短氣、云ひ上がつて兄弟喧嘩したが、申し、氣遣ひなされますな。三人ながら怪我もなく、その場はそれで濟んだれども、もちやくちや云うて居られます。春さん、八重さん、お前方もさうであろ。氣の毒な男の不機嫌。

はる　ほんに、さうでござんす。千代さんの云はんす通り

今日の祝ひを幸ひに、兄弟御の仲直しも、親御のお詞かからいでは、矢張り不機嫌でござんせう。

八重　めでたい祝ひを云立てに、どうぞ仲の直るやうに、したいものでござんすなア。

〽男思ひの壁訴訟

ト三人こなし、白太夫、思ひ入れあつて

白太　大方それと察しては居れど、和御寮達に問うたれば知れやうと思つた喧嘩の樣子。知つて居ても云はぬか。同じ胤腹、一時に生れた忰でも、心は別々。よう似た顔を双子と云へど、それもさうとは極つてゐぬ。女夫子もあり、また顔の似ぬ子もある。マア、大概顔が似れば心もよう似て、兄弟の仲もよいものおやが、おらが忰ども誰れが見ても一作りとは思はぬ。生ぬるい櫻丸が顔付き理窟めいた梅王が人相。見るからどうやら根性の悪さうな松王の面構へ。ハヽヽヽ、千代の側で麁相云うた。氣にかけてたもんな。ヤア、怪我がなうて嬉しうおりやる。兎から云ふうち、もう七つ。おれの生れたは申の刻限、料理も大方出來たであろ。嫁女達、膳を早く出さぬかい。

はる　アイ／＼、このマア刻限の過ぎるまで、連合ひはなぜ見えぬか。千代さん、八重さん、ちよつと道まで行つて、見て來ようではござりませぬか。

千代　オヽ、それ／＼、爰で待たうより、三人ながら、サア、ござんせいなア。

ト三人立ちかゝるを止めて

白太　アヽ、コレ／＼、娘達、何云ふぞえ。子供どもは、疾うに來てゐるわいの。

三人　主達が來てとは、どこに／＼。

白太　エヽ、鈍な嫁女達、そこに居るを知らぬかい。コレ、こゝな、三本のあの木が子供等。梅王、松王、櫻丸、顔は殘らず揃うてある。勿體ない菅丞相さま、くゝめるやうに云はしやれました、生れ日の刻限が違やア悪い。祝儀には蔭の膳も据ゑる習ひ。サア／＼、早う。

〽サア／＼早うと白太夫が、云ふに猶豫もなり難く、俄かに盛るやら箸打つやら、椀の向うの小皿に鱠

ト此うち三人、膳拵らへなして、八重、白太夫の前へ膳を持つて行く。

八重　先づ一番に親仁樣、これでお坐りなされませ。

〽給仕は元より習はねど、見馴れ、聞馴れ、立振舞ひ、八重が配膳御所めけり。

白太　イヤ／＼、おれもあそこへ行つて、膳に着かうかい。
八重　イエ、土間では冷があがります。矢ツ張り爰でおあがりなされませ。
千代　サア、これからは、めい／＼夫の給仕。
　ト春、膳を持ちて下り
はる　この梅の木が梅王どの。
〽枝振りずんと日頃の氣質、八重が連添ふ男振り。
　ト梅の木の前へ直す。
八重　木振りも吉野の櫻丸どの。
〽これは千代まで添ひ遂げる、夫婦の中の若みどり。
千代　色もつや／＼、勢ひよい、松王どので子達も揃ふ。
　トめい／＼よろしく膳を直す事あつて
親仁様、めでたうお箸。
三人　なされませ。
白太　オヽ、なされうとも／＼。親中妻に座が高い。子供どもへドレ挨拶。
はる　もうそれには及びませぬ。お加減の覺めぬうち。
白太　イヤ／＼、お春、さうではない。親でも子でも極つた辭儀作法ぢや。
〽庭に下りるもまめやかに、樹の前に畏まり。

　ト白太夫、庭へ下り、此方へ來て
サア、子供衆、何もござらずとも、よう參つて下されい。親が折角下りての辭儀、辭儀返しがしたうても、動かれぬは知れてある。其まゝ／＼。娘達、子供達に餅かへてやらんかいの。
〽と尻餅ついて喜び笑ひ、我が膳に押直り、箸を取るより。
アヽ、旨い／＼。さて結構な鹽梅ぢや。こりや誰れが加減ぢや、三人の嫁女達、給仕も片いきせぬやうに、三杯は喰はざなるまい。アヽ、めでたい／＼。ところで一首浮かんだ。千代かけて春めいて來たよめな八重、うまい事うまい事。
　ト無性に喰ふ事。これにて胸につかへ、ウンといふ。三人の嫁は皆々恟りして、介抱して湯を呑ませる。これにて心付き
ヤレ／＼、すんでの事に餅と心中ぢや。ハヽヽヽ。
　ト側の三方土器を見て
こりや新らしい三方土器、誰れが持つて來ましたぞ。
はる　アイ、それは八重さんのお祝ひ物でござんす。
白太　ハテ、よう氣が付いて、忝ない。春、われも何ぞく

文政八年七月中村座上演　二世澤村田之助の八重

れぬかい。
はる　ほんに忘れて居りました。
　ト風呂敷包みから三本の扇を出して
中の繪は梅、松、櫻、お子達の數を祝うて、三本ながら
末廣がり、めでたう祝うて上げまする。
白太　こりやアめでたい。忝ない。中の繪も話しで知れた。
開けて見るにも及ばぬ。此まゝ〳〵。コレ千代、われも
何ぞ祝うてくれぬか。
〽機嫌に千代は袂から。
千代　これは褻れの有合ひで、わたしが縫うたこの頭巾、
頭に合はずば縫ひ直しませう。お召しなされて下さりま
せ。
白太　イヤ、どれも不足のない心付けた贈り物、戴きます
戴きます。サア、杯も濟んだれば、おれが膳から上げて
たも。子供等が膳は盛つたまゝ冷えたであらう。盛り直
してコレ娘達、二人前づゝ喰うてたもや。
千代　イエ〳〵わたし等は、まそつと待つて、主達が見え
てから
はる　打並んで祝ひまする。
白太　そんならそれよ。おれは村の氏神樣へ、今のうち參
つて來ませう。
はる　そんならお參りなされませ。
白太　アヽコレ、拵らへて置いた十二銅。そこにあろ、取
つてたも。
　ト春、お捻りを取つて渡す。此うち白太夫、扇を取り
上げ
三本のこの扇、末廣な子供の生先、氏神樣へ頼んだり見
せたりせうわえ。オヽ八重、其方は氏神樣へ參るまい。
次手ながら連立つて行かうか。
千代　オヽ、丁度よい折でござんす。八重さん、父さんと
參つて來やしやんせ。
八重　アイ〳〵、左樣なら御一緒に。お二人さん、跡をお
頼み申しますぞえ。
はる　モシ、父さん、ゆるりと參つてござんせ。
白太　ドレ、行て來ようか。
〽表をさして出でて行く。
ト白太夫、駒下駄を穿き、杖を突き、八重を連れて向
うへ入る。二人、思ひ入れあつて
はる　モシ、お千代さん、年寄らしやつても、物覺えのよ
い事。お前やわたしは氏神樣知つてゐる、八重さんは今

文政六年五月中村座上演　中山亀三郎のはる

が始め。云はしやんすりやその通り、物覺えのよい親御と運ひ、物忘れする子供達、梅王どのはなぜ遲い事ぢややら、もう見えさうなものでござんすなア。

千代　こちの人も、なぜ遲い事ぢやゝら。但しは來ぬ氣か。父さんの祝ひ日に、今日見えいでよいものかいなア。

　ト云ひながら門口より外を見て

噂をすれば影とやら、松王どのが、アレ／＼向うへ。

　ト唄になり、向うより松王、好みの拵らへにて出で來り、直ぐに門口へ來る。

モシ、こちの人、何をして居やしやんした。刻限過ぎたを知らずかいなア。

松王　ヤア、べり／＼とかしましい。時平さまの御用あつて、それしまはねば動かれぬ。先へ參つてその譯云へと云ひつけたを忘れたか。梅王も櫻丸もまだ來ぬか。親仁どのも內にござらぬか。

　ト云ひながら內に入り、上手へ住ふ。

千代　サア、その親仁樣は、八重さんと同道で、もちつと先に氏神詣で。兄弟衆は見えぬわいなア。

松王　ソレ見やれ。遲いと云ふおれは主持ち。梅王も櫻丸も、主なしの扶持放され。用もない和郎達が遲いのが、ほんの遲いの。お春どの、さうぢやないか。

〽詞の端にも殘る意趣。梅王も日足は長ける、急いで來かゝり突ツかゝり。

　ト矢張り在鄕唄にて、向うより梅王丸、着流し大小、好みの拵らへにて出で來り、直ぐに內へ入る。

〽松王には顔振りそむけ。

梅王　お千代どの、今日は大儀でござつた。親人、櫻丸、八重も爰にはなぜ居やらぬ。

はる　アイ、今も松王さんのお尋ね。櫻丸さんはまだ見えられぬが、お二人は今宮詣り。

梅王　ムウ、櫻丸はまだ來ぬか。待ち兼ねる者は來いで、胸の惡い見ともない面構へ。

〽と梅王に當こすられ、松王丸逸徹短慮。

松王　アタぶの惡いねすり言。云ひ分あらば直ぐに云やれサ。

梅王　なんの、われに遠慮がいらう。われの面構へを見る度に、ゲイ／＼と虫唾が走るワ。

松王　ハ、、、、吐かしたり腹の皮。この松王は生れ付いて涙脆い。櫻丸や其方がやうに、扶持放されの痩おとがひ、ひだるからうと思うてやるが、兄弟のよしみだけ。

梅王　ホヽ、扶持放されと笑ふ奴が、喰ふ扶持がろくな扶持か。鐵丸を食すといへども、心穢れたる人の物を請けずとは、八幡大菩薩の御託宣、心穢れた時平が扶持、有り難う思ふかナ、人でなしの猫畜生。

松王　ヤア、畜生とは、舌長な梅王、今一言云うて見よ。

梅王　オヽ、望みなら易い事、畜生々々、どう畜生。

松王　もうこの上は免されぬ。

〽と松王丸、刀の柄に手をかければ、梅王も反打ちかへし、詰め寄り詰め寄る。二人の女房、

ト兩人、柄へ手をかけ、双方キッと思ひ入れ。千代、春、これをとめて

千代　マア〳〵待つた。氣が狂うたか、松王どの。

〽千代が夫を抱き止むれば、春も夫に縋り付き。

はる　お前も待つて下さんせ。父さんの七十の賀を祝ひに來て、親仁樣に逢ひもせず、反り打つてどうさつしやる。祝ひ日に刀を拔いてよいものか。こちの人、梅王どの。

〽刀の柄にしがみつく。女房春をとつてのけ。

梅王　七十の賀でも祝ひ日でも、堪え袋の破れかぶれ、留立てして怪我するな。コリヤ、松王、後れたか。女房が止めるを幸ひに、頬げたに似ぬ腕なしめ。

松王　オヽ、止められるを幸ひとは、我が心に引較べて、松王には慮外の雑言。身が女房が止めたより、其方が女房が親にもまだとの一言、肝先へキッと當り、堪え〳〵たがもう堪らぬ。眞劍勝負は親人に逢うての後。それまでの腹癒せに、砂かぶらせねば堪忍ならぬ。コリヤ、女房、それまではこれを預ける。

〽兩腰拔いで抛り出し、裾引ッからげて身拵らへ。

梅王　畜生めが、こりやよい料簡。櫻丸が來るまでは、松王が命、松王に預ける。

〽同じく兩腰抛り捨て。

ト大小を春に渡して

刃物渡せば、血はあやさぬ。女房ども、邪魔ひろぐな。

〽つッと寄つて、縁より下へ踏み落せば、早速の松王落ざまに、諸足かけば梅王丸、眞逆さまに落ち重なり、摑み合ひ、擲き合ひ、組んでは放れ、離れてはまた組み合ひ、捻ぢ付け、引伏せ、蹴つ、踏んづ、双方力も同い年、血氣ざかりの根競べ、千代と春とは二人の兩腰、取られもせぬかと氣遣ひ半分、側へも寄れずハア〳〵と、心をあせり氣を揉み上げ。

はる　どちらが勝ちも負けもせず、擲き合うたが二人の存

分、梅王どの、もうよいわいなア。

千代　こちの人、もう措かしやんせ。やめて下さんせいなア。

松王　勝負つかいでは無駄働らき。投げてくれん

〽松王丸、嵩にかゝつて押す力、ひるまぬ梅王突ッかくる。肩先捻つてかつくりさせ、横に抱へる松の木腕、劣らぬ肘骨、梅の木腕、絡みもぢつて押合ふ力、双方一度にこけかゝり、もたるゝ拍子櫻の立ち木、土際四五寸殘る木の、上はほつきりぐわつさりと、折れたに驚ろく相嫁同士、二人が勝負も破れ角力、共に呆れて手を打拂ひうろつく中へ早下向。

ト此うち有り合ふ米俵を、松王取つて梅王に投げ付ける。これを梅王キッと受け、兩人とも米俵を持つてキツと見得。これより大小入りの合ひ方になり、立廻り充分あつて、トヾ米俵を落す。誤まつて櫻の木へ當るこれにて櫻の枝折れる事。皆々驚ろくこなし。お春、表を見て

はる　モシ〳〵、待ちなさんせ。父さんが戻らしやんしたわいなア。

松王　ナニ親仁様が

梅王　戻らしやつたか。

千代　モシ、見やしやんせ。父さんが祕藏なさる、櫻の枝が折れたぞえ。

梅王　おれではないぞ。

松王　イヤ、おれも知らぬぞ。

千春　ひよんな事しなさんしたなア。

〽二人の肩入れ、裾下ろし、腰刀差す間もあらず戻られし、年はよつても怖いは親、上へも上がらず大つくばひ。

ト此うち松王、悔りして、肌を入れたり裾おろしなどする事よろしく、在郷唄になり、向うより以前の白太夫、八重出で來り、直ぐに内へ入る。兩人を見て、白太夫こなしあつて、二重へ上がり櫻の折れしを見て思ひ入れ。梅王松王の兩人、薄氣味惡きこなしにて、手をつき辭儀をする。八重こなしあつて住ふ。

松王　親人の七十の賀

兩人　めでたう、御祝儀申しまする。

〽祝儀は述べても赤面なし、塵をひねらぬばかりなり、親はホヤ〳〵機嫌顏。

ト此うち松王梅王の兩人、ヂッとこなし。白太夫、思ひ入れあつて

天保三年五月中村座上演　二世中村芝翫の松王

白太　嫁達が先へ來て、七十の賀を祝うてくれたで、今日の祝ひはサラリとしまうた。知れてある今日の祝ひ日、遅いは何ぞ障りあつて來ぬに極まつた。梅王・松王、ようこそ〳〵來てくれた。コレ、二人の嫁女、煮くちたであらうが、雜煮祝はしてたもつたか。

〽折れた櫻を見ながらも、誰が仕業ぞと咎めもせず、叱る所を叱らぬ親、一物ありと知られたり、梅王丸懷中より、立て文の願書を出し。

梅王　祝儀濟んで候へば、私しの所存の願ひ、お許しなされて下さりませ。

〽親の前に差出せば。

ト白太夫の前へ出す。松王もこなしあつて願書を出し

松王　松王も又一通、身の上の願ひ、これにあり。

〽同じ所へ直せしは、云ひ合せたる如くなり、白太夫打笑ひ。

白太　心安いは親子、兄弟、夫婦、斯う並んだ仲、願ひあらば口で云はいで、キッとしたこの書付け、願ひは何やら聞えねど、春と千代とは、夫の心を知つてゐる筈。さらばおれもキッとした、代官所の格で、捌くとしよう。

〽願書手に取り白太夫、つぶ〳〵讀むも口の中、跡先知らねば案じる八重。

八重　三人の兄弟いさかひ、親仁樣へお願ひ申し、今日仲直しと云ひ合したも水の泡、千代さん春さん、こりやどうした譯でござんす。何を云うてもこちの人・櫻丸どのがござらぬゆゑ、心當りが皆違うた。道で眩暈が發つたか。

〽見えぬ夫を案じるやら、二人の顏も氣にかゝり、小首傾むけ案じ居る。親仁は二通讀みしまひ。

白太　コリヤ梅王、其方が願ひに、旅へ立つ暇くれとは、ムウ、推量するに外でもあるまい。菅丞相さまがござる島へ行く心ぢやな。

梅王　親仁樣、御推量の通り、結構な御殿に引替へ、埴生の小屋の御住居。御用聞く人なければ、梅王下つて御奉公仕らん。身のお暇下されたし。

白太　ムウ、恩を知らねば人面獸心と云うてナ、顏は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨まへぬ、畜生氣は離れた心。コリヤヤイ、御臺樣、若君樣お變りも遊ばされず、ござる所も知れた上、旅立ちの願ひぢやな。

梅王　イヤ、御臺樣はその以來お目にかゝらず、御座所も

存じませぬ。併し女儀の御事なれば、若君様とは又格別菅秀才の御事は慥かに。

ヘ云はんとせしが、松王を尻目にかけ。

慥かに御座所は存ぜねども、息災に御座ある噂。

白太 ヤイ、馬鹿者、大切な菅秀才さま息災と聞いたばかりで、お目にかゝらず在所も知らず、それでおのれ忠義が濟むか、女儀の身と吐かし居る、御臺樣はお主ぢやないか。コリヤヤイ、不自由な配所のお住居、お側へ參つて御用聞く、躄り役の奉公は、この白太夫がよい役ぢやわい。血氣盛り奉公盛り、菅丞相のゆかりであれば、根掘り葉掘り絶さんとて、鵜の目鷹の目、油斷のならぬ讒者の仕業。スワと云ふ時身を惜しまず、御用に立つ所存はなうて、躄り役を願ふは、命が惜しいか、敵が怖いか。旅立ちの願ひは叶はぬ。いつかな願ひは取上げぬぞ。

ヘ願書頭へ打ち付けて、はつたと睨む老の腹立ち、道理至極に梅王夫婦、誤まり入つたる風情なり。

ト白太夫、思ひ入れあつて云ふ。梅王よろしくある。

コリヤ松王、其方がこの願ひを見れば、勘當を受けたいといふ。神武天皇さま以來珍らしい願ひぢやな。エヽ、不孝と云はゞ譬へのない奴、餘り珍らしい願ひなれば、こ聞屆けてくれるぞ。

ト松王よろしく思ひ入れあつて

松王 すりや、この松王の願ひ、お聞屆け下さるとな。有り難うござりまする。

ヘ忝なしと喜ぶ松王、勇み立ち。

親子兄弟の縁を切る所存も問はず、許されしはこの松王が主人へ忠義、推量あつての事なるべし。

白太 ハヽヽヽ、イカサマ、口は調法なものぢや。主人への道立て、臍がくねるわい。道も道によつて尊し。横に取つて行く道を、僞忠義と云ふわいやい。甲に似せて穴を掘ると、勘當請ければ兄弟の縁も切れ、時平どのへ敵たはゞ、切つても捨てん所存よな。尤も善惡差別なく、主人義は立つにもせよ、親の心に背くをナ、天道に背くと云ふわい。望み叶へて取らする上は、人外め、早く歸れ。暇取らば親子の別れ。竹箒喰はさう。サア〳〵、行け〳〵。

ト千代、中へ入つて

千代 モシ、父樣に向つて、其やうな事、云ふ事があるかいなア。どうぞ孫にお免じなされ

白太　エヽ、なんの孫も可愛くない。サア出て行け。また出て失せぬは、大方くれた頭巾が欲しいのか。キリ〳〵持つて行き居らう。

ト頭巾を投げ出す。

千代　モシ、頭巾までも、お戻しなされたわいなう。

松王　エヽ、戻したら取つて置け。親仁が着にやア、おれが着る。

白太　エヽ、うぬ。叩きのめして。

ト箒にて打つてかゝる。

松王　ナニ打つ。この松王は明日からは、前髪を剃り落し時平公の譜太夫、松王播磨守といふ侍ひだぞ。慮外があると免さぬぞ。女房来い。

〽引立て行く、千代は流石に親兄弟、名残も惜しき相嫁の、顔を見る目もあかれぬ涙、袂しぼつて出でて行く。

ト松王、千代をせき立てる。千代、皆々に名残り惜しきこなしにて下手へ入る。

白太　ヤレ〳〵、嬉しや〳〵。面倒な奴片付けたぞ。ヤイ、そこな馬鹿者。御臺樣、若君樣の御行くへ尋ねに行かぬか。失せそらぬか。

〽これも手強うきめつけられ。

梅王　そんなら島へは。

白太　サア、行つてよければ、おれが行くわい。サア、出て行かぬかい。

トきつと云ふ。

〽出て行け〳〵を、怖がるお春。はる　申し八重さん、お前が跡でよいやうに。

〽お詫び言を頼みます。

八重　氣遣ひさんすな。お氣を鎮めて、お詫び言をせうわいなア。

白太　エヽ、ウヂ〳〵とさらすかえ。エヽ、とつとゝ姿を出おらぬかい。

ト白太夫、捨ぜりふにて、梅王お春を表へ突き出す。

〽お詫び言をと云ひ捨てゝ、夫婦は門へ、白太夫は嚥呑み込んで奥へ行く。

ト梅王は外へ出て、お春へちよつと囁き、下手の藪へ小隠れする。白太夫、奥へ入る。八重殘り、思案のこなし。

〽兄弟夫婦に引別れ、取殘されし八重が身の、仕舞ひも付かぬ物思ひ、門へ立ちに待つ夫、思ひがけなき納戸口、刀片手にニツコと笑ひ。

天保三年五月中村座上演　四世坂東三津五郎の梅王

櫻丸　女房ども、さぞ待ちつらん。
卜八重この聲を聞き、振り返り櫻丸を見て
八重　ヤ、いつの間にやら來たとも云はず、案じる女房を思はぬ仕方、兄弟衆の事に就て、親仁樣の御立腹。その場へは出もせいで、なんでこなさんは納戸の内にござんした。譯を聞かして下さんせ。
〽譯を聞かして〳〵と、聞きたがるこそ道理なり、暫らくあつて白太夫、食み出し鍔の小脇差、三方に載せしをしをと、出づるも老の足弱車。舍人櫻が前に置き。
白太　サ、用意よくば、疾く〳〵。
〽と云ふに、女房が又恟り。
八重　こりや何ぢや、親仁樣、櫻丸どの、どうぞいなア。なんで死ぬのぢや、腹切るのぢや。切らねばならぬ譯ならば、未練な根生出しやしませぬ。こなさんが云はれずば、親仁樣の只一言。
〽案じる胸を休めてたべ、お慈悲〳〵と手を合はせ、泣くより外の事ぞなき。
卜八重よろしくこなし。櫻丸、思ひ入れあつて
櫻丸　ヤア、親人の何御苦勞。これまで馴染む夫婦の仲、所存殘さず云ひ聞かさん。

卜櫻丸、こなしあつて、床の合ひ方になり〳〵
某が主人と申すも、恐れ多き齊世の君さま、百姓の悴なれども、菅丞相の御不便を加へられ、親人へは御扶持方。御愛樹の松、梅、櫻、兄弟が名に象り、松王、梅王、櫻丸、憚りありや冥加なや、烏帽子子になし下され、御恩は上なき築地の勤め。三人のその中に、櫻丸が身の幸ひ。人間の胤ならぬ、竹の園生の御所奉公、下々の下々たる牛飼ひ舍人、勿體なくも身近く召され、菅丞相の姫君と、わりなき中の御文使ひ、仕負ふせたが仇となつて、讒者の舌に御身の浮名、遂には謀叛と云ひ立てられ、菅原のお家沒落、是非もなき次第なれば、宮・姫君の御安堵を見屆け、義心を顯はす我が生害、今朝早々爰まで來て、右の段々生きてゐられぬ最後の願ひ。お聞き屆けあつて腹切り刀を、親の手づから下さるゝ。女房ども、我れに代つてお禮も申し、死後の孝行頼むぞよ。
〽義を立て守る夫の詞、女房ワッと聲を上げ。
八重　仇な戀路のお取持ち、齊世さまの御惡名、丞相さまの流され給ふ、その云ひ譯に切る腹なら、この八重も生きてゐられぬ。わたしに殘つて孝行せいとは、胴慾にもよう云はれた。それよりはまだ酷い、腹切る禮を申せ

文化九年九月市村座　四世瀨川路考の櫻丸

とは、それが何の禮どころ。無理な事云ふその手間で。
〽一緒に死ねと、これ申し、女房の願ひ立てゝたべ。親仁樣、俯向いてばかりござらずとも、よい智慧出して下さりませ。夫の命の生死は、親仁樣のお詞次第。お前へは悲しうござりませぬか。
〽親の手づからこの三方、腹切り刀は何事ぞと、恨みつ賴みつ身を投げ伏し、聞えこがるゝ有樣は、物狂はしき風情なり、白太夫顏振上げ。
白太　子に死ねといふ腹切り刀、詰い親と思ふ、云ひ譯ではなけれどナ、この曉は我が身の喜び、いつもより早く起き、門の戸明ければ櫻丸、ヤレ早う來てくれた、徒歩ならば夜通し、但しは船か、サアマア此方へと呼び入れて、樣子を聞けば右の次第、白太夫づれの悴には、驚ろき入つた健氣者、止めても聞入れず、今日の祝儀しまふまでは、女房が來ても逢はせぬぞ。おれが出いと云ふまでは、納戸の内に隱れてゐいと、一寸延しに命をかばひ、助けてよいか悪いかは、おらが料簡に及ばず、神明の加護に任さんと、最前祝儀にくれた扇三本、幸ひ繪には梅、松、櫻、子供の行く末祈る顏で、氏神の祠に直し置き、信を取つて御鬮の立願、櫻丸が命乞ひ、中の繪は上から見えぬ三本のこの扇、初手に櫻を取らしてたべ、エ、ならせたまへと再拜祈念、取上げた扇開けば梅の花、南無三これは叶はぬ告げか。神の心を疑ふ、御鬮の取り直しせぬものなれども、助けたいが一杯で、取り直す次の扇、今度も違うて又松の繪。賴みも力も落ち果てゝ、下向すりや折れた櫻、定業と諦らめて、腹切り刀渡す親、思ひ切つておりや泣かぬぞ。われも泣くな、おれも泣かぬ。エ、泣くなと云ふに。
櫻丸　ア、コレ女房、あれを聞いたか。櫻丸が命惜しまれて、お年寄の心遣ひ。御恩も送らず先立つ不孝、お免されて下されい。下郎ながらも櫻丸、恥を知り、義の爲に相果つる。
〽三方取つて戴くにぞ、もうコレ今が別れかと、泣くも泣かれぬ夫の覺悟、白太夫目をしばたたき。
白太　潔い悴が切腹、介錯は親がする。その刀、これを見やれ。
〽懷より取出すは、願ひ籠めたる鉦撞木。
コレこの刀で介錯すれば、未來永劫迷はぬ功力。利劍即是彌陀號。
〽撞木を取つて打ち鳴らす、鉦もしどろに。

南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト白太夫、佛壇へ向ひ、撞木にて鉦を打ちながら念佛を唱へる。此うち櫻丸、肌を脱ぎ支度をする。八重が縋り泣くをよろしく拂つて

〽念佛の聲諸共に、襟押寛ろげ九寸五分、弓手の脇へ突き立てれば、八重が泣き聲、打つ鉦も、拍子亂れて。

ト櫻丸、九寸五分を脇腹へ突き立てる。八重「ハッ」と縋り泣く。白太夫は無性に鉦を叩き

南無阿彌陀佛々々々々々々。

〽右の脇へ引廻し。

櫻丸　親人、憚りながら御介錯。

白太　オヽ、介錯。

〽後へ廻り撞木振上げ、南無阿彌陀佛と打つやこの世の別れの念佛、九寸五分取り直し、喉のくさりを刎ね切つて、かつぱと伏して息絶えたり、八重が覺悟もこの場を去らず、夫の血刀取上ぐる。枳殼の蔭より、梅王夫婦走り寄つて。

ト白太夫、後へ立寄り、撞木を振り上げる。櫻丸よろしくあつて、九寸五分にて咽喉掻切つて落入る。八重櫻丸が刀に手をかけ、自害しようとする。白太夫止める。この時、以前の梅王夫婦窺ひ居て、走り寄つて止める。

梅王　樣子は聞いた、こりや何事。早まるまいぞ。

〽刀捥ぎ取り、親の前に畏まり。

先程歸れとありし時、表へは出たれども、櫻丸が來ぬ不思議と、丞相さまの御祕藏ありし、櫻の折れたを詮議もなされぬ。彼れこれ不審に存ずるから、裏から忍び立戻り、始終の樣子は承つてござりまする。エヽ、是非に及ばぬ、あの樹と共に。

〽枯れし命の櫻丸、兄弟の最期餘所に見て、親人の鉦鼓に合せ、女夫の者が忍びの念佛。

あつたら若者、殺しましてござりまする。

〽悔む夫婦も、聞く親も、八重も死なれぬ身の繰言、是非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打て納め、撞木と替る杖と笠。

白太　我れはこれより片時も早く、丞相さまの御跡慕ひ島へ赴むく現世の旅立ち。

梅王　櫻丸が魂魄は未來へ旅立ち。

白太　亡骸頼む、梅王夫婦。

〽八重が事まで、つど／＼と、賴む詞の置き土產。

白太　冥途の土產に只念佛。

天保二年九月河原崎座上演

澤村源之助の櫻丸　岩井粂三郎の八重

三人　南無阿彌陀佛。
白太　南無阿彌陀佛。
〽南無阿彌陀笠打かぶり、西へ行く足十萬億土。
梅王　亡骸送る。親送る。
はる　生きての忠義。
八重　死したる義臣。
白太　一樹は枯れし
皆々　無常の櫻。
〽殘る二樹は、松王、梅王、三つ子の親が住み所、末世にそれと白太夫、佐太の社の舊跡も、神の惠みと知られける。
ト段切れにて、白太夫、門口へ出る。八重、泣き伏す梅王夫婦、合掌する。よろしく

幕

七　幕　目

配所の場
天拜山の場

役名――菅丞相。白太夫。舍人、梅王丸。安樂寺住職。鷲塚平馬。漁師、灘八。同、沖藏。

本舞臺、三間の間一面の浪幕、上の方に苫船一艘乘捨てあり、爰に平馬、半合羽、股引、小の旅拵へ、黑羽織股引の侍ひ四人附添ひ居る。下手の方に灘八、布の筒袖、船頭の形にて擢を持ち扣へ、浪の音にて幕明く。

灘八　モシ、小船とは云ひながら、私しが精出したばつかりに、早く着いたではござりませぬか。
平馬　イカサマ、われが働らき、大儀々々。して、最前某密々の一大事を、申し付けた沖藏めは、もう歸りさうなものだなア。
灘八　お氣遣ひなされまするな。今に歸るでござりませう。
ト向うより沖藏、同じ船頭の拵らへ、擢を持ち出て來り
沖藏　平馬さま、これにござりましたか。お賴みに任せ、菅丞相の配所の樣子、窺ひましたるところ、彼の三つ子の親の白太夫めが、宮仕へ致して居る樣子、殊に今日は老ぼれめが供をして、濱邊傳ひに野がけに出る樣子。

その道筋に待受けて、殺らしてしまひますのが、手短かでようござりませう。

平馬　出かした。然らば身共は、丞相が跡追ひ駈け、途に於て失はん。わいら二人は乘合にて、出ツくはした大前髪を、人知れずぶち放せ、合點か。

灘八　イヤモシ、あの前髪には一大事を明かして、お頼みなされたではござりませぬか。

平馬　されバサ、此方の荷擔人に頼みしが、よく／＼思へば、菅丞相の身寄りの奴であるまいものでもない。さすれば身共の企みの破れ口。片時も早く殺らして來い。

三人　呑み込みました。

平馬　また家來共は、身共よりも先へ行き、彼の前髪が丞相へ、近付くまいものでもない。道にて彼れを支へ居れば、其うち身共は後より行く、合點か。

侍ひ　心得ました。

平馬　皆々ぬかるなっ

皆々　合點だ。

ト時の鐘になり、船頭は向うへ、平馬、家來を連れて下手へ入る。チョンと浪布切つて落す。

本舞臺、うしろ黒幕、正面誂らへの草土手、菜種一面の花盛り、花道の左右、舞臺ともに菜種の花をセリ上げ、これに蝶の狂ひ、よろしく、在郷唄にて納まる。

〽君を思へば、よやヨホイホ、結ぼれ糸の、ハリナ、とけぬ心が辛ござる、イヨつろござる、辛き筑紫へ立つ年月、御痛はしや菅丞相、讒者の業に罪せられ、埴生の小家の起臥しも、昨日と暮れて今日は早、延喜三年如月半、空も春めく野山の眺め、野飼ひに召させ奉り、我が樂しみは在郷唄。

トこの淨瑠璃のうち、向うより白太夫、牛の綱を曳いて出る　この牛の脊の上に、櫻、菜種の花を結び付け菅丞相、本を手にして讀みながら出る。花道よき所にとまり

白太　君を思へばヨヤヨホイホ。ハヽヽヽ、何をがなお氣晴らしと、皺枯れたどつてら聲。ハヽ、牛どのゝ手前も面目ない。モシ、我が君樣、今を盛りのこの眺め、好い景色ではござりませぬか。

丞相　寂光淨土のうらゝかさは、佛書にも見たれども、それにも劣らぬ今日の眺め、予も壽を養うたわやい。

白太　お勸め申してお供いたしましたが、御意に叶ひまして、この親仁めも、お嬉しう存じます。牛どのも御苦勞ながら。

〽たゞ一筋の畦道を、辿り〳〵て。

トこの淨瑠璃にて本舞臺へ來り

これからは道も平らか。ちとお慰みに、おひろひなされませ。

ト合ひ方になり、牛の鞍より更紗張りの沓を出して直す。丞相、牛より下りる。白太夫、牛の脊へ敷いた布團を取り、岩臺の上に敷く。

淸らかなるこの御座所、これから見渡す景色も、又一しほでござります。

丞相　イカサマ、健かながらも老人の、大儀にもありつらん。暫らく疲れを休め、牛にも疲れをいれてよからう。

白太　有り難うござりまする。いつもは野山へ追うて行くこの牛、今日は丞相さまを乘せまするは、わいらが仕合せ大きな果報、アヽ、見れば見る程見事な毛並、角の構へ、眼の備へ、頭持の樣子、骨組、肉合、惣毛一色、頁黑黑牛、澳り繻子も及ばぬ色艶、天角地眼、一黑、直頭、耳小、齒違、天晴れ御牛。

〽ちよ〳〵のちよせいと譽めにける、菅丞相はめづらかに、聞馴れ給はぬ褒め詞。

丞相　いやとよ、白太夫、春は耕し、秋は刈穗の稻を負はせ、耕作の助けとなる牛の善惡、よく知る筈、天角地眼と申せしは、角と眼の備への事、一石六斗二升とは、牛を買ひ取るその價、升目を積るものなるか、語れ

〽聞かんと仰せける。

白太　さつてもしたり、天下にありとあらゆる事ども、餘さず漏さず知つてござる丞相さま、牛の事は御存知なく、お尋ねにあづかるは百姓に生れた一德、御慮外ながら牛の講釋聞かしやりませ。先づ一黑と申しますのは、

〽俵物の升目でなく、毛色を吟味する時は、

黑いが極上、それで一黑。次に直頭とは、頭の見所、頭とは頭、どつちへも傾かず、まんろくなが好いさかいで直頭と申します。耳小の耳は耳、小は小さし、隨分耳は小さいを好みます、さて齒違ふとは、彼奴がおねおね呞を嚙む、上下の齒先揃ふは惡し、五一に生えたが齒違ふの齒の見所でござります。

〽次第を上から云ひ立つれば、一石六斗二升八合。

牛の講釋、もう仕舞ひ。

丞相　誠に性は道に依つて賢し。白太夫の話を聞き、一つの徳を得たわやい。

〽仰せにひよこ〳〵雀躍りして。

白太　こりやマア、あんたる仰せぞい。親の代から御領分の百姓、三つ子の事までお世話になされ、御恩に御恩有り難うて、寢た間も忘れぬ、この親と違うて、三人の悴ども、一人は死ぬる、あと二人は氣も揃はず、面倒な奴等打抛つて、この太宰府へ參つたは去年の三月。うら淋しい不自由なお住居、一年の日數は經てど、月見、花見にお出でもなされぬゆゑ、今日はこの親仁がお勸め申し、お供して來て見れば、殊の外御意に叶ひ、私しが皺も腰も、ア、、延びやかな春の野面でござりまするなア。

丞相　成る程、其方が勸めに任せ、爰まで來たが。これから安樂寺へ詣でたい。サ、、案内いたせ。

白太　ハ、ア、左樣なら安樂寺への御參詣は、御歸洛の御立願でがなござりませう。

丞相　いやとよ、道眞に犯せる科なければ、佛に苦勞かけ奉り、身の上祈る所存はなし。讒者の業としろし召さば、罪なき事も世に顯はれ、歸洛の勅諚下るべし。それまで月にも花には目は觸れず、私しなき臣が心、帝はしろし召されずとも、天の照覽明らかなり。安樂寺へ志すは、この曉不思議の靈夢。

〽菅丞相が愛樹の梅、いま如月の花盛り、都の住居思ひ寢の、枕の硯引寄せて、筆に任せて斯くばかり。

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ

と心を述べてまどろみしに、妙なる天童我が枕に立たせ給ひ、汝憐愍の心深く、仁義を守る忠臣の功、心なき草木まで、情を請けし主を慕ひ、花もの云はねとその驗、安樂寺へ詣で見よと、示現に依つて參るのぢやわやい。

〽示現に依つてと宣ふ所へ、安樂寺の住僧、杖を便りに老の足、それぞと見奉りしより、小腰をかゞめ立寄れば。

トこの文句のうち、下手より住僧、緋の衣、淺黃の帽子にて中啓を持ち、三方に梅の一枝を載せ、番僧の所化二人、菓子入りの提げ重を持ち、これに附添ひ出で來る。

丞相　住僧は何所へ行かるゝぞ。我れは貴院へ參る折柄、これにて對面、祝着々々。

安樂　ハア、愚僧も外ならず、公の御目にかゝりたく、參る仔細と申すは、別の儀でもござりませぬ。夜前不思議の夢の告げ、御慈愛の梅の一樹、配所の主に見せよとあ

文政三年八月玉川座上演

中村大吉の菅丞相　中島三甫右衛門の白太夫

るより、餘り不思議に存する所、示現に變らぬ觀音堂の左の方、一夜に生え出る不思議さに、その一枝、御覽に入れ奉らんと、これまで持參いたしてござる。

〽語るも聞くも正夢の、符を合せし如くなり。

白太　承れば不思議なお話し、御住職のお出でなれば、私しも牛を牽いて、お供いたすでござりませう。

安樂　これより安樂寺へは程近し。

丞相　然らば御僧、御同伴。

安樂　イザ、御案内仕りませう。

〽安樂寺へと出で給ふ。

トこの淨瑠璃に冠せ、三味線入り、靜かなる禪のツトメになる。この一件殘らず下手へ入る。知らせにつき道具廻る。

本舞臺、うしろ黑森、眞中に觀音堂、この側に白梅の立ち木、誂らへの通り、床几一脚直しある。この道具納まる。

〽急ぎ御寺へ入り給へば、それぞとしるき梅花の薰り、袖に留木の心地せり。

ト矢張り禪のツトメになり、右の人數殘らず出で來り

安樂　暫らくこれにて御詠めあるべし。ナニ同宿ども、それなる床几へ御褥を。

同宿　ハツ。

〽床几直させ、褥を設け、御菓子小竹筒と住持の饗應。

丞相　御僧の詞に違ひなく、都に殘せし我が愛樹、梅の一木に相違ござらぬ。

安樂　實にや、非情の草木だに、丞相の德を慕ひ、飛び來りしものやらん。同宿ども、なんと不思議な事を見るものではないか。

同宿　左樣にござりまする。

〽白太夫はこつそこそ、梅の土際覗き廻り。

白太　こりや、不思議、イヤ希代ぢや。申し、丞相さま、途すがらお住持の夢語り、へゝ、何をやらるゝやら、そんな事があらうと、疑うて居りましたが、來て見て恟り、この木の枝ぶり花の匂ひ、佐太のお下屋敷に預かつて居りました、それぢや／＼、その梅でござりまする。アヽ、神佛の告げは爭はれぬ。おらが爰へ來た跡では、水一杯飲まし手もあるまいに、ふさ／＼とした木の色艶、芽立の氣合つういつい、花はうるさい程ついたれば、梅漬の時分二三斗は確かにあらう。四五升は地を借りた年

貢代、お寺へも進ぜます。後は此方の、實入り〳〵。

安樂　イヤ、氣さくな老人。丞相さま、貧相なお饗應、持たせし竹筒。イザ、一獻きこし召されませう。

丞相　忝なし。予よりも爺よ。これは其方に遣はさん。

白太　ハイ〳〵、今は先腹の實入り、戴きます〳〵。

安樂　愚僧がお酌いたさう。

白太　アヽ、これは恐れ入りまする。イエ〳〵、白太夫が杯は、いつでもこの天目、それではこれへ御馳走酒下さりましよ。立酒は氣にかゝる。

〽床几の傍にちよつゝくばひ、口も心も有りの儘、見えた通りの律義者、花の眺めに一入の、興を催ふしおはする所に、そりや喧嘩よ。

ト禪のツトメになり

〽ありや抜いた、切り合うた、そりや來るワ、寺内へ入れな、門打てといふ間あらせず、踏ん込み〳〵

ト向うより梅王、幕明の平馬と立廻りながら出て來る

白太　アヽ、コレ〳〵、見れば双方旅裝束。爰は境內、口論ならば爰で仕舞ひは付けさせぬ。出やれ〳〵。

〽云ふをも聞かず、切り合ふ一人は我が子の梅王。

こりやマア　梅王ぢやないか。其方は何として、ハアハア、ひあいな、切られるな。

〽氣を揉みあせる親心、腰の助太刀、相手の刀、梅王に打ち落され、逃ぐるをすかさず飛びかゝり。

丞相　其方は梅王丸。

梅王　ヤア、我が君樣。

〽片手づかみにもんどり打たせ、膝に固めし健氣の振舞ひ。

安樂　オヽ、出來されたり〳〵。さては聞き及んだ梅王どのでありつるか。喧嘩の次第は、どうした譯で。

白太　また其方が下つた樣子、都の事を案じてござる。幸ひこれに丞相さま、樣子一々申し上げい。

梅王　ハアハア、恐れながら、梅王が念願達し、變らせ給はぬ御尊體、見奉るは生涯の本望。都に御座あるお二人樣、世を忍ぶお身なれば、一つ所に置き參らせ難く、若君樣は武部源藏に預け置き、御臺樣のお側には、私しが妻櫻丸が女房、八重と春とが御介抱。お身の上は差措かれ、配所の樣子見て參れと、仰せに幸ひ出船の手番ひ天運に叶ひ日和よく、千里一跳ね日數も込ます、夜前この地へ筑紫船、乘合ひの中に時平が家來鷲塚平馬、この梅王を見知らぬ馬鹿者。ぶつくりかけて樣子を問へば、丞

相さまを殺しに來たと、おのれが口から最期を急ぐうつけさ。寺にござるをよく知つて、直に仕掛けるこの平馬、即ち引括つて梅王が御土産。

ト此うち立廻りあつて、提げ緒にて平馬を縛り上げる。

〽心地よくこそ見えにける、丞相御悦喜淺からず。

丞相　戀しき都の樣子を知らず、忠義の花は有情の梅王、示現によつて飛び來る、花は非情のこの梅の木、有情無情の隔てなく、道眞を慕ひ來る

〽梅に褒美の御言の葉。

梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん、つれなかるらん松王は、時平の舍人、枯れし櫻は宮の舍人、梅王は我が舍人。

〽花の榮えは安樂寺、その名も高き飛び梅の、不思議は今に隱れなし。

白太　コリヤ梅王、有り難い今の御歌、この梅に准らへ、其方をお褒め遊ばし、櫻は枯るゝ世の中とは、死んだ忰を御憐み。つれなかるらんとある松王めは、時平に追從して居らうな。

梅王　ホヽ、親人の推量に違はず、兄弟といふも穢らはしい。畜生めはさて措いて、さす敵はこの鷲塚、サア、時平が企み、眞直に白狀ひろげ。否と吐かすと命がないぞ。

平馬　たとへ命があらうがあるまいが、身に覺えがなけりやア、そんな事云つた覺えは猶ないワ。

梅王　コリヤ、おのれ知らぬと申すか。

平馬　オヽ、知らぬ／＼、知らぬわいの。

梅王　しぶとい奴、一應や再應では吐かすまい。ムウ、よしよし、吐かさにやア、斯うして。

ト刀の鐺にて締め上げる。平馬こなし。

平馬　オヽ、痛え／＼。主從の義を立て拔き、命に替へて云はぬは古風、云はして置いて殺すも古風。新らしう助かるやうに殘らず申す。マア、丞相どのを殺しに來たその譯と云ふは、時平公には御謀叛の御企て。

梅王　我が君も、お聞き遊ばされましたか。

ト顏を見合せ思ひ入れ。

丞相　ハテ、いくりなき時平が工み、兼ねて腹黒なる行跡は憎みつれど、さまでの大望は企てまじと思ひしに、南面の德に代らんと、今ぞ天子の御大事となつたるか。ホ、ホイ。

〽怒りに変る御涙。

梅王　サア、今の後を吐かせ。

ト又こじ上げる。

平馬　やかましいワッエ、いま云つて聞かせる。何かにつけて兎角邪魔なは丞相どの、ある事ない事奏聞なし、たうとう罪に取つて落したその跡は、時平公の心の儘、五畿七道の領主郡主も、威勢に恐れ面出しならず、都の内は上見ぬ鷲。さりながら、兎角心にかゝるは菅丞相、島へ渡り首取つて立歸れ。軍神の血祭して、大望の旗を上げ、天下を一呑み。身共も公卿になる樂しみ、空喜びの裏が來て、耻を晒す縛り繩、早う解いて下さりませ。

〽時平が反逆、一々殘らず、聞し召されし菅丞相。

丞相　ムウ。

トこれより本釣り鐘、床二挺の凄き合ひ方になり、丞相思ひ入れあつて、住僧の持つて來りし梅に目を付け取上げて

草木心なしとは云へど、情を請けし我れを慕ひ、心筑紫のこの所へ、來れば來る有情の飛び梅、如何なれば道眞は、君の御大事目前に在りながら、奏聞なす事も叶はぬか。梅花に劣りしこの身の上、この所に朽ち果てゝ、末代不忠の名を穢し、萬民の歎きとなるかエヽ。

ト梅の枝を持ち、向うを見て無念の思ひ入れ。持つたる梅の枝で、思はず平馬の首を打つ。首、前へ落ちる。

皆々　ヤア。

ト恟り、思ひ入れ。浪の音打込み

〽柔和の形相忽ち變り、御眦に血をそゝぎ、眉毛逆立ち御憤り、都の方を睨み付け、物狂はしく立ち給へり。

安樂　知れてある時平が企み。今お聞きなされしかなんぞのやうに、ついぞ覺えぬ御顔色。

白太　例へ爰から睨ましやつたとて、都の方へは屆きませぬ。御持病の痞が發つたら、エヘン悲しうござります。

安白　丞相さま〳〵。

丞相　如何に梅王、白太夫、時平の大臣が謀叛の企て、聞捨てられぬ御大事、赦免なければ歸洛も叶はず、帝位を望む朝敵と、しろし召されぬ玉體危ふし、臣が忠義いたづらに爰に朽果て、骸は虚命蒙むるとも、死したる後は憚りなし、靈魂帝都に立歸り、帝を守護なし奉らん。ヤア、汝等、かゝる大事を聞くからは、片時も早く、時平が企みを奏聞せよ。

〽我れは見上ぐるこの高山、絶頂に三日三夜、立行荒行、根氣を碎き、魂魄雲井に鳴る雷。

トこれより、雷の音、稲妻の仕掛けになる。

十六萬八千の首領となつて、眷屬引連れ、都に登り、謀叛の奴原引裂き捨てん。現世の對面これまでなり。

梅王　御尤もなる御諚なれども、若君の事思し召され

丞相　ヤア、愚かな事を。

三人　モシ。

ト立寄る三人を突き退け／＼、梅の元へ寄る。ドロドロになる。白梅の枝覆ひかゝり、丞相の姿を包む。仕掛けにて、花バラ／＼と散る。これにて三人、あたりを見て

ヤヽ、この有様は。

ト寄らうとする、梅は元の如くになる。

丞相さま／＼。

ト呼びながら、白太夫住職、下手へ入る。梅王も續いて行かうとする。幕明きの船頭二人出て來て

二人　わつぱめ、動くな。

梅王　こりや最前の船頭めら、先刻の手並に懲りもせず、又うしやアがつたな。

沖藏　知れた事だ。菅丞相をぶツちめる。

灘八　邪魔ひろぐ、わつぱめ。觀念ひろげ。

梅王　なにを。

皆々　どつこい。

ト鳴り物變り、十分面白き大タテあつて、トド梅王、二人を追うて、下手へ入る。大ドロ／＼にて道具替る

本舞臺、正面の黒幕を切つて落す。後より高さ七尺程、横九尺の天拜山の道具よき所へ押出す。舞臺前へ霞に松の梢をせりあげる。日覆、後の方も一面の稲妻、この時本雨夥しく降る。雷の鳴り物にて、菅丞相、梅の枝を持ち、捕り手二人を追ひかけ、山の廻りを一遍廻る事あつて、三人山へ駈け上がる。上にて立廻りあり、見事に山より落ちる。一人の捕り手かゝるを立廻りありて投げ人形を差上げ、後の方へ見事に投げる。キツと思ひ入れ。

〽敬まつて申す。それ清く澄めるは天となり、梵天帝釋四大天王、梵樂梵雄大梵天。

丞相　照光清淨無量天。

〽御袖千切つて血汐の誓紙、神明和光正直の、人を照らすと聞くからは、天心疑ふ所なし。

三十三天見そなはし給へ。

文化九年九月市村座上演　二世市川團之助の菅丞相

〽天心諸願滿足と、誓紙の片袖白梅の、枝に結びて大空に、捧げ給へば、感應給受誤またず、とどろ〳〵と虛空より、白雲一むらかゝると見えしが、忽ちに、雲井遙かに上りしは、不思議なりける次第なり。

ト袖の誓紙を梅の枝に結び、天を祈り捧げ給へば、上より白雲下り、雲の內へ誓紙を仕掛けにて虛空へ引上げる。この時梅王、山の陰より出て來て、下の方へ行き、菅丞相の有樣を見上げて

梅王　ヤア、丞相さまの、この御有樣は。

丞相　鳴る雷の首領となつて、謀叛の奴輩引裂き捨てん。現世の對面これまでなり。

梅王　然らば此まゝ。

丞相　いそふれ、梅王。

梅王　ハ、ア。

船頭　梅王捕つた。

ト以前の船頭二人かゝるを拔打ちに切り倒し、花道の方へ來て刀を納める。

〽怪し恐ろし。

ト大雷、本雨。梅王、一散に向うへ入る。山の上にて菅丞相、立ち身の見得。左右の袖、差し金にて風の當る思ひ入れ。この仕組みよろしく、雷にてチョンチョン。

幕

八幕目　　寺子屋の場

役名——菅秀才。舍人、松王丸。同一子、小太郎。武部源藏。春藤玄蕃。よだれくり。御臺、園生の前。松王女房、千代。源藏女房、戶浪。

本舞臺三間の間、藁葺きの二重舞臺、見付け赤壁。納戶口、暖簾、上の方、反古張りの障子屋體、門口藪疊、寺子屋のかゝり、爰によだれくり、外子供大勢机を出し、手習ひをしてゐる。菅秀才、やつし形にて、この中に交り、二重、上の方に手習ひをしてゐる。子供皆々手本を讀み、大聲張上げなどしてゐる。在鄉唄にて幕明く。

〽一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、敎ふる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはり

傳き、我が子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所
替へ、子供集めて讀書の、器用、不器用清書を、顔に書
く子と手に書くと、人形書く子は頭かく、教ふる人は取
分けて、世話をかくとぞ見えにける、中に年かさ五作が
息子。
よだ　コレ、みんな、これ見や。お師匠樣の留守に、手習
ひするは大きな損、おりや坊主頭の淸書した。
ト草紙を出して見せる。
〽見せるは十五の涎くり、若君は温なしく。
菅秀　一日に一字學べば、三百六十字の教へ、そんな事書
かずとも、ほんの淸書したがよい。
〽八つになる子に叱られて。
よだ　ア、、ませよ〳〵。
〽ませよ〳〵と指さして、嘲戯かゝるを殘りの子供、
子供　兄弟子に口過す、涎くりを、いかめてこませ。
〽てんでにけさん振り廻す、自然天然肩持つも、傳ふる
筆の成徳かや、主の女房奥より立出で。
ト子供、ワヤ〳〵云うてゐるうち　奥より戸浪出で來
り
戸浪　又こりやいさかひか。ア、、おとましや〳〵。今日
に限つて連合ひの源藏どの、振舞ひに行てなれば、戻り
も知れぬ。ほんに〳〵こなた衆で、一時の間も待ち兼ね
る。今日は取分け寺入りもある筈。晝からは休ます程に
よだ　ソリヤ、また休みぢや、嬉しや〳〵。
戸浪　其方は、いつち大きな形をして、惡さが過ぎる。今
日は仕置をせねばなりませぬぞ。
よだ　ハア。
ト戸浪、よだれくりを机の上に立たせ、水の入りし茶
碗と線香を持たせる
戸浪　他の者は精出して、習うた〳〵。
よだ　ハア〳〵。
〽筆より先に、讀み聲高く。
子一　いろはにほへと。
子二　この間はお人下され。
子三　一筆啓上まゐらせ候ふ。
ト大勢ゴツチヤになり、手本の字を讀む事、大聲によ
ろしく
〽男が肩に堺重、文庫机を擔はせて、悧發らしき女房の
七つばかりの子を連れて。
ト向うより、千代、小太郎が手を引き出て來る。後よ

り三助、机文庫を擔ぎ、片手に風呂敷包みを提げ出で
來り、舞臺へ來る。千代こなしあつて
三助　ちとお賴み申しまする。竹べらの源藏さまのお内は
此方でござりまするかな。
千代　ア、コレ、お賴み申しまする、武部源藏さまのお内
は、此方でござりまするか。
戸浪　ハイ、どなたかは存じませぬが、此方へお入り下さ
れませ。
千代　左樣ならば、御免なされませ。
〽愛に愛持つ女子同士。
トこれにて、三人内へ入り、下手に住ふ。合ひ方にな
り
私し事は、この村はづれに、輕う暮らして居る者でござ
りまする。これなる悴をお世話なされて下さりよかと、
お尋ね申しにおこしましたれば、おこせ、世話してやら
うと仰しやりまするお詞に甘へ、早速連れて參じまして
ござりまする。
戸浪　ほんに左樣でござりますか。ようマアお出でなされ
ましたなア。そして、寺入りのお子は、このお子樣でご
ざりまするか。

千代　左樣でござりまする。
戸浪　氣高い、よいお子樣でござりまするなア。
千代　イエモウ、腕白者でござりまする。承りますれば、
お内方にも、御子息樣がござりますとの事。どのお子樣
でござりまする。
戸浪　あれに居りまする。爰へおぢや〳〵。即ちこれが源
藏どのゝ、跡取りでござりまする。
ト千代、小太郎と菅秀才を見比べる事あつて
千代　ても、よいお子樣でござりまする。
戸浪　さうして、そのお子のお名は、何と仰しやります。
千代　小太郎と申しまする。腕白者でござりまする。
戸浪　サア、もうよい。上へ行きや〳〵。
ト菅秀才立つ。千代、祝儀包みを出し
千代　これは餘りお麁末でござりますが、心ばかりの品、
お納めなされて下さりませ。
戸浪　これは〳〵、マア御叮嚀に、納めて置きまするでご
ざりまする。マ、折惡しう、今日は連合ひ源藏も、振
舞ひに參りまして、まだ歸られませぬわいなア。
千代　左樣ならば、お師匠樣は、お留守でござりますかい
なア。

戸浪　お待ち遠なら、私しが、ちよつと呼びに參じませう。

千代　イエ〳〵、それには及びませぬ。幸ひ私しも參つて來る所もあれば、其うちにはお歸りでござりませう。

戸浪　左樣なされませ。其うちには夫源藏も、歸られますでござりませう。

千代　コレ〳〵三助、その持つて來た物、爰へ出しや。これはお麁末ではござりまするが、この子が寺入りの印ばかりでござりまする。お取納め下さりませ。

戸浪　これはマア、何から何まで取揃へて、御念の入つた事、戻られたら見せませうわいなア。

千代　イエモウ、ほんの心ばかり、よろしうお頼み申しまする。

よだ　ハア、、、。

　ト泣き出す。

千代　悄り致しました。あのお子は、どうなされたのでござりまする。

戸浪　斯樣でござりまする。師匠が留守ぢやと思うて、手習ひはせずに、外の子供を泣かしたり、惡戲ばかり致しますゆゑ、仕置に立たせて置きまする。

千代　左樣でござりまするか。斯やう申さば、恐れ入りまするが、御堪忍なされて下さりませうならば、有り難う存じまする。

戸浪　イエ〳〵、捨て置いて下さりませ。いつも〳〵世話やかせてなりませぬ。もそつと仕置をせねば堪忍なりませぬ。

千代　左樣ではござりませうが、どうぞ今日ばかりは。サアサア、わたしが詫び言してあげます程に、これから温なしう習ひなさんせ。

　ト机の上より下ろし、鼻をかんでやる。

よだ　アイ〳〵。

　ト悄げてゐる。

千代　どうぞマア、御堪忍なされて遣はされませ。

戸浪　これは大きにお世話をかけまする。サア、ちやつとお禮を申さぬかいなア。

よだ　おばさん、有り難う。

　ト不器用に辭儀をする。

戸浪　あの通りでござりまするわいなア。

千代　ホ、、、。サ、、機嫌よう習ひなさんせ。

　トよだれくり、そこに置いてある重箱の蓋を開けて、菓子を摑み出す。

三助　ヤイ〳〵、わりやその菓子どうするのぢや。

よだ　オヽ、どうもせぬワ。お師匠様がお留守だから、これはおれが預かつて置くのだ。

三助　エヽ、馬鹿を吐かすな。今おらが見てゐれば、その重箱へ手を入れて、菓子を袂へ入れたぞよ。

よだ　イヽヤ、そんな覺えはないわい。

三助　ナニねえ事があんべい。そんなら袂を改めべいか。

よだ　サアそれは。

三助　サア

よだ　サア

兩人　サア〳〵〳〵

三助　キリ〳〵菓子を出してしまへ。

トきつといふ。

よだ　チエヽ殘念や口惜しや、計る〳〵と思ひの外、三助めに見顯はされたか、殘念やなア。

ト見得。

三助　ヤア、愚かや子僧。今この所にてその菓子を、取上ぐるは安けれど、今日寺入りの祝儀にめでゝ、この三助が見遁がしくれるワ。

よだ　また重ねての參會まで

三助　まづそれまでは

よだ　おしなの三助。

三助　寺子の大ぼや。

よだ　かた〳〵、

兩人　さらば。

ト兩人キッとなつて、肌を脫ぎ、不器用な見得をする。

三助　東西、これより、ぢばんめ始まり。

ト三助、切り溜を持ち出る。

よだ　きりだめ口上、茶湯ッ。

ト土瓶を出す。

三助　てゝんがてん〳〵。

ト手拭を出す。

よだ　くわし〳〵〳〵。

ト切り溜を出す。

戸浪　ホヽ、靜かにせぬかいなう。

ト涎くりを叱る。

千代　コレ小太郎、わしはちよつと、隣り村まで行て來る程に、溫和しう待つてゐや。惡あがきせまいぞ。左樣なら行て參じませう。

ト云ひ〳〵門口へ出かける。小太郎・千代の袂を扣へ

小太　母樣、わしも行きたいわいなう。
　ト取付くを振り拂ひ
千代　これはしたり、嗜なまぬか。大きな形して跡追ふのか。御覽じませ、まだ頑是がござりませぬわいなア。
戸浪　そりや道理ぢやわいなア。ドリヤ、わしが好い物を遣りませうぞや。モシ、ツイ戻つてやりなさんせいなア。
千代　ハイ〳〵、ツイちよつと一走り。ドリヤ、行て參じませう。
〽跡追ふ子にも引かさるゝ、振返り見返りて、下部引連れ急ぎ行く。
　ト千代、思ひ入れよろしく、三助を連れて向うへ入る。
　戸浪こなしあつて
戸浪　ドリヤ、こちのと近付きにさしませう。
　ト小太郎を連れて、二重上の方へ行き、こなしあつて
〽二人を伴ひ奧へ入る。
　トこれにて戸浪先に皆々奧へ入る。
〽若君の傍へ寄せ、機嫌紛らす折柄に、立歸る主の源藏常に變りて色青ざめ、内入り惡く子供を見廻し。
　ト向うより源藏來り、思ひ入れあつて舞臺へ來て、直ぐに門口を開ける。子供大勢出て迎へる。源藏見て
源藏　エヽ、氏よりも育ちといふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育ち、世話甲斐もなき役に立たず。
〽思ひありげに見えければ、心ならずも女房立寄り。
　ト奧より戸浪出で來り
戸浪　いつにない顏色も惡し、振舞ひの酒機嫌かは知らぬが、山家育ちは知れてある。子供の憎體口は聞えも惡い。殊に今日は約束の子が、寺入りして居まする。さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して、逢うてやつて下さんせいな。
〽小太郎連れて引合せど、差俯向いて思案の體、いたいけに手をつかへ。
小太　お師匠樣、今からお頼み申しまする。
　ト辭儀をする。
〽云ふに思はず振仰向き、きつと見るより暫らくは、打まもり居たりしが。
源藏　さて〳〵、器量優れて氣高い生れ。公卿高家の子息と云うても、恐らくは耻かしからず。ハテサテ、其方は好い子ぢやなア。
〽機嫌直れば、女房も。

戸浪　それ〳〵、なんと好い子、好い弟子でござんせうがな。
源藏　よいとも〳〵上々吉。して、その連れて來た阿母は、何方に。
戸浪　サア、お前が留守なら、隣り村まで行て來うと云うてなア。
源藏　オヽ、それもよし〳〵大極上。先づ子供を奧へやり機嫌よう遊ばしめされ。
戸浪　ソレ、皆、お隙が出た。小太郎も奧へ行きや。
子皆　サア〳〵、奧へ行て、遊ぶのぢや〳〵。
菅小　アイ〳〵。
〽若君諸とも誘はせ。
ト子供大勢奧へ入る。源藏戸浪殘り
〽跡先見廻し、夫に向ひ。
戸浪　最前の顏色は常ならぬ血相、合點のゆかぬと思うたに、今またあの子を見て、打つて替への機嫌顏、猶以て合點ゆかず。これには樣子がありさうな事。モシ、樣子聞かして下さんせ。
〽問へば源藏。
ト合ひ方になり

源藏　オヽ、氣遣ひな筈。今日村の饗應と僞はり、某を庄屋に呼び寄せ、時平が家來春藤玄蕃、今壹人は菅丞相の御恩を着ながら、時平に隨ふ松王丸、此奴、病みほうけながら、檢分の役と見え、數百人にて追取り卷き、汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我が子となして隱まふ由、訴人あつて明白、急ぎ首討つて出すや否や。但し踏ん込み受取らうや、返答いかにと退引ならぬ手詰め。是非に及ばず首討つて渡さうと、請合うた心は、數多ある寺子の中で、いづれなりとも身替りと、思うて歸る道すがらあれかこれかと指折つても、玉簾の中の誕生と、菰垂れの中で育つたとは、似ても似付かず、所詮御運の末なるか、痛はしや淺ましやと、屠所の歩みで歸りしが、天道のひかへ強きにや、あの寺入りの子を見れば、萬ざら烏を鷺とも云はれぬ器量、一旦身代りで欺むき、この場さへ遁がれたれば、直ぐに河内へ御供する思案。いま暫らくが大事の場所。
〽と語れば女房。
戸浪　モシ、待たしやんせ。その松王といふ奴は、三つ子の内のいつち惡者、若君のお顏は、よう知つてゐるぞえ、
源藏　サア、そこが一かばちか。生顏と死顏は相格の變る

もの。面ざし似たる小太郎が首、よもや似せとは思ふまじ、よし又それと顯はれたれば、松王めを眞ッ二つ、殘る奴ばら切つて捨て、叶はぬ時は若君諸とも、死出三途の御供、と胸を据ゑたが、爰に一つの難儀といふは、今にもあれ、小太郎が母親、迎ひに來らば何んとせん、この儀に當惑いたしたわえ。

戸浪　イヤ、その事は氣遣ひさしやんな。女子同士の口先で、ちよぼくさ騙して見ようわいなア。

源藏　イヤ、その手では行くまい。大事は小事より顯はるる。殊によつたら母諸とも。

戸浪　エ。

ト惝り思ひ入れ。

源藏　コリヤヤイ、若君には替へられぬ。お主の御爲を辨まへよ。

戸浪　さうでござんす。氣が弱うては仕損ぜん。こりやモウ鬼になつて。

〽鬼になつてと、夫婦は突ッ立ち、互ひに顏を見合せて。

源藏　弟子子と云へば、我が子も同然。

戸浪　今日に限つて寺入りした、あの子の業か、母御の因果か。

源藏　報ひは此方が火の車、

戸浪　追ッ付け廻つて來ませうわいなア。

源藏　これを思へば世の中に

戸浪　せまじきものは

兩人　宮仕へぢやなア。

ト兩人よろしく思ひ入れ。この時向うにて百姓大勢

百姓　お願ひでござります〳〵。

〽共に涙にくれゐたる、かゝる所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕籠乘り物、門口に舁き据ゆれば、後には大勢村の者、附き隨うて。

ト向うより、玄蕃、龍神卷、侍ひ烏帽子、首桶を抱へ、中啓を持ち、後より陸尺二人乘り物を擔ぎ出で來り、續いて村の者八人附添うて、直ぐに舞臺門口へ來て

百一　へイ〳〵、申し上げまする。皆これに居る者の子供が、手習ひに參つて居りまする。

百二　もし取違へて、首打たれては、取返しがなりませぬ。

百三　よく〳〵お改めなされた上

百四　どうぞお戻し下さりませうならば

皆々　へイ〳〵、有り難うござりまする。

〽願へば玄蕃、

玄蕃　ヤア、かしましい蠅虫めらっうぬらが餓鬼の事まで、身共が知つた事か。勝手次第に連れてうせう。
〽叱りつくれば松王丸。
　ト乗り物の内より
松王　ヤレお待ちなされ、玄蕃どの。
　ト駕籠の内より松王丸、好みの形にて出で
〽駕籠より出づるも刀を杖、偽りながら、彼れらとても油断はならぬ。病中ながら拙者めが、検分の役勤むるも、外に菅秀才の顔見知りし者なきゆゑ、今日の役目仕負ふすれば、病身の願ひ、お暇下さるべしと、有り難き御意の趣き、疎かには致されず。菅丞相の所縁の者を、この村に置くからは、百姓どももぐるになつて、めい〳〵が忰に仕立て、助けて歸る手もある事。コリヤヤイ、百姓めら、ザワ〳〵と吐かさずとも、一人づゝ呼び出せ。面改めて、戻してくれう。
〽退引させぬ詮議の鐘、打てば響けの内には夫婦、兼ねて覺悟も今更に、胸轟かすばかりなり、表はそれとも白髪の親仁、門口より聲高に。
百一　長まよ〳〵。
長松　アイ〳〵。

〽アッと答へて出で來るは、腕白顔に墨べつたり。
　ト奥より出で來るを、松王引ッ捕へ撿める事。
〽似ても似付かぬ雪と炭、これではないと免しやる。
百二　岩まはゐぬか。岩まよ〳〵。
岩松　祖父様、何ぢや。
〽祖父様何ぢやと、はしこくて、出來る子供の頑是なき、顔に丸顔きみしり茄子。
　トめい〳〵門口へ出る。
松王　詮議に及ばぬ、連れてうせう。
〽睨み付けられオヽ怖や。
百二　嫁にも喰さぬこの孫を、命の花落ち遁がれました。
〽祖父が抱へて走り行く。
　ト子供を連れて向うへ入る。
〽次は十五の涎くり。
百三　ぼんよ〳〵。
　ト手招きする。
よだ　父よ、おれはモウ爰から抱かれて去の。
〽甘へる顔は馬顔で、聲きり〳〵す。
百三　オヽ、泣くな〳〵、抱いてやらう。
〽乾鮭を猫撫で親が迎へ行く。

ト涎くりを負つて行く。
百四　わたしが悴は器量よし、お見違へ下さるな。
〽斷り云うて呼び出すは、色しろ／＼と瓜實顏、こいつ胡亂と引ッ捕へ、見れば首筋眞黑々、墨か痣かは知らねども、此奴でないと突き放す、その外山家奧在所の、子供残らず呼び出して、見せても／＼似ぬこそ道理、土が產ましたはかり芋、子ばかりよつて立歸る。
ト此うち松王、始終改める事よろしくあつて、皆々花道へ入る。
〽すは身の上と源藏も、妻の戶浪も胸を据ゑ、待つ間程なく入り來る兩人
ト此うち松王玄蕃入る　よき所へ住ひ、玄蕃思ひ入れあつて
玄蕃　ヤア、源藏。この玄蕃が目の前で、討つて渡さうと請合うた、菅秀才が首、サア、受取らう。
〽早く渡せと手詰めの催促、ちつとも臆せず。
源藏　假初めならぬ右大臣の若君、掻き首捻ぢ首にも致されず、暫しの間御容赦。
松王　ヤア、その手は喰はぬ。暫しの容赦と隙どらせ、逃げ支度いたしても、裏道へは數百人を付け置きたれば、蟻の這ひ出る所もない。生顏と死顏は相格の變るなぞと身代りの似せ首、それも喰はぬ。古手な事して後悔するな。
〽云はれてグッとせきあげ。
源藏　ヤア、いらざる馬鹿念、病みほうけた汝の目玉がでんぐり返り、逆さま眼で見やうは知れず、紛れもなき菅秀才の首、討つて見せう。
玄蕃　その舌の根の乾かぬうち
松王　早く討て。
玄蕃　疾く切れ。
〽玄蕃が權柄、ハッとばかりに源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。
ト源藏、首桶を抱へ、思ひ入れよろしく、奧へ入る。
〽側に聞きゐる女房は、爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼をくばる中にも松王、机文庫の數を見廻し。
松王　ヤア、合點のゆかぬ。先刻去んだ餓鬼等は以上八人、机の數が一脚多い。その悴は何所に居る。
戶浪　イヤ、こりや今日初めて寺、寺詣りした子がござんす。
松王　何を馬鹿な。

戸浪　オヽ、それ〳〵、これが卽ち菅秀才のお机文庫。

〽木地を隱した塗り机、ざつと裁いて云ひ拔ける。

松王　何にもせよ、隙どらすが油斷の元。

玄蕃　實に尤も。

〽玄蕃もろとも突ッ立ち上がる、此方は手詰め命の瀨戸、奥にはバッタリ首打つ音、ハッと女房胸を抱き、踏ん込む足もけしとむうち、武部源藏白臺に、首桶載せて靜々出で、目通りに差置き、

ト此うち奥にて太刀音して、上手の障子へ血煙立つ。皆々思ひ入れ、奥より源藏、首桶を抱へ出で來り、松王の前へ首桶を直し

源藏　是非に及ばず、菅秀才の御首討ち奉る。云はゞ大切な御首、性根を据ゑて、サア、松王、しつかりと檢分せよ。

〽忍びの鍔元くつろげて、虚と云はゞ切りつけん、實と云はゞ助けんと、片唾を呑んで扣へ居る。

松王　ハヽヽヽヽ、何これしきに性根どころか。いま淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境。家來衆、源藏夫婦を取卷き召されい。

捕手　ハツ。動くな。

ト よろしく取卷く。

〽捕り手の人數、十手を振つて立ちかゝる、女房戸浪も身を固め、夫は元より一生懸命。

源藏　サア、實檢せよ。

〽檢分と云ふ一言も命がけ、後は捕り手向うは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶體絶命と、思ふうち早首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、似せと云つたら一討ちと、はや拔きかける、戸浪は祈願、天道樣、佛神樣、憐れみ給へと女の念力、眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て。

ト源藏戸浪思ひ入れ。松王、首桶の蓋を取り、思ひ入れあつて、トックリ見て

松王　ムウ、こりや菅秀才の首打つたワ。紛ひない、相違ない。

〽云ふにも恟り源藏夫婦、あたりキョロ〳〵見合せり、檢使の玄蕃は檢分の詞證據に。

玄蕃　出來した〳〵、よく討つた。褒美には隱まうた科赦してくれる。イザ、松王丸、片時も早く、時平公にお目にかけん。

松王　イカサマ、隙取つてはお咎めも如何。拙者はこれよ

りお暇賜はり、病氣保養の兼ねての願ひ。

玄蕃　役目は濟んだ。勝手にせよ。

松王　然らば御免。

玄蕃　イヤナニ源藏、世の諺にも云ふ如く、脊に腹は代へられずと、三代相恩の主人の子悴、忠臣顏に隱まつても、うぬが體の鍔際にやア、主の首でも討つぢやまで。なまくら武士の分際で、隱し立てしたその報い、切端詰まつて、みじめな態だ。フ、ハ、、、。

〽玄蕃は館へ、松王は、駕籠にゆられて、立歸る。

ト玄蕃は首桶を抱へ、松王は乘り物にて向うへ入る。兩人跡見送り、思ひ入れあつて

〽夫婦は門の戸ピッシヤリ締め、物をも云はず青息吐息、五色の息を一時に、ホッと吹き出すばかりなり、胸撫で下ろし源藏は、天を拜し地を拜し。

源藏　ハア、、有り難や忝なや。凡人ならぬ若君の、御聖德が顯はれて、松王めが眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天性不思議のなす所、御壽命は萬々歲、喜べ女房。

戸浪　イヤモウ、大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王が眼の玉へ、菅丞相さまが入つてござつたか。但し首が黃金佛ではなかつたか。似たと云うても瓦と黃金、寶の花の御運開き。餘り嬉しうて淚がこぼれるわいなア。

兩人　エ、、有り難うござりまする。

〽有り難や辱やと、喜び勇む折柄に、小太郎が母息せきと、迎ひと見えて門の戸叩き。

ト向うより千代出で來り、門口へ來て

千代　寺入りの子の母でござりまする。只今歸りましてござりまする。

ト兩人、これを聞いて恟り思ひ入れ。

戸浪　サア／＼、こりやマアどうせう。何と云うたらよからうぞいなア。

源藏　コリヤ、最前云うたは爰の事。若君には替へられぬわえ。

ト思ひ入れあつて

うろたへ者めが。

〽門の戸引開け。

トこなしあつて、源藏、門口を明ける。千代、思ひ入れあつて內へ入る。

千代　これはマア／＼、お師匠樣でござりまするか。惡さをお賴み申しましてござりまする。どこに居りまするや

嘉永三年七月　中村座上演

市川小團次の源藏　坂東しうかの千代

ら、お邪魔でござりませう。

源藏　イヤ、奥に子供と遊んでゐます。連れて歸らつしやりませ。

千代　ハイ〳〵、左樣なら、連れて歸りませうわいなア。

〽ズツと通るを後より、只一討ちと切りつくる、女もしれ者引ツぱづし、逃げても逃がさぬ源藏が、刀するどに切り込むを、我が子の文庫でハツシと受止め。

トよろしく立廻つて、千代、以前の文庫にて受止め

コレ待つた、待たしやんせ。

〽刎ねる刀も容赦なく、また切りつくる文庫は二つ、中よりバラリと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯はれ出でしはこは如何にと、不思議の思ひに劍もなまり、進みかねてぞ見えにける、小太郎が母涙ながら。

ト此うちよろしく立廻りあつて、文庫の内より經帷子、六字の幡出る。源藏見て、不思議の思ひ入れ。

若君菅秀才さまのお身代り、お役に立てゝ下さんしたか但しはまだか、樣子が聞きたい。

源藏　ヤ、なんと。して〳〵それは得心か。

千代　得心なりやこそ。この經帷子、六字の幡。

源藏　ムウ。して其許は、何人の御内證。

〽尋ぬるうちに、門口より。

ト此うちよき時分、松王、いつもの拵らへにて、門口に窺ひ出で、松の枝へ短册を付けて持ちたるを内へ投げ込む。源藏取つて見て

源藏　梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に。

ト短册を讀んで、不思議の思ひ入れ。門口にて

松王　何とて松のつれなかるらん。女房喜べ、悴はお役に立つたわやい。

千代　エヽ。ハアヽヽ、

ト泣き落して思ひ入れ。

〽聞くよりワツとせき上げて

松王　ヤア、未練者めが。

〽前後不覺に取亂す。

ト思ひ入れあつて内へ入る。

〽ズツと通る松王丸。

源藏どの、御免下され。

〽見るに夫婦は二度恟り、夢か、現か、夫婦かと、呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し。

源藏　一禮は先づ後の事。これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存は如何に。

松王　ホウ、御不審尤も。御存じの通り、我れ〳〵兄弟三人は、めい〳〵別れての奉公。情なきはこの松王、時平公に從ひ、親兄弟とも肉緣切り、御恩を請けし丞相さまへ敵對。主命とは云ひながら、皆これ松王が因果。何卒主從の緣切らんと、作病構へ暇の願ひ。菅秀才の首見たらば暇やらんと、今日の役目。よもや貴殿は討ちはせまい、なれども御身替りに立つべき、一子なくば如何せん、爰ぞ御恩報ずる時と、女房千代と云ひ合せ、二人が仲の悴をば、先へ廻してこの身替り、机の數を改めしも我が子は來たかと心のめど。菅丞相には我が性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない〳〵と、世上の口に、かゝる口惜しさ、推量あれ、源藏どの。悴がなくばいつまでも、人でなしと云はれんに、持つべきものは子でござる。

ト云ふに女房猶せき上げ。

千代　持つべきものは子なりとは、あの子の爲によい手向け。思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを、叱つた時のその悲しさ。冥途の旅へ寺入りと、はや虫が知らせたか。隣り村へ行くと云うて、道まで去んで見たれども　子を殺させに寄越して置いて、どうマア內へ去なるものぞ。死顏なりとも今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな。

ト包みし祝儀はあの子の香奠、四十九日の蒸物まで、持つて寺入りさすといふ、悲しい事が世にあらうか。育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は器量よしと、美しう生れたが、可愛やその身の不仕合せ。なんの因果に疱瘡まで。

トしまうた事ぢやとせきあげて、かつぱと伏して泣きければ、共に悲しむ戸浪は立寄り。

戸浪　最前も連合ひが、身替りと思ひ付いた側へ行て、お師匠樣今からお賴み申しますと、云うた時の事思ひ出せば、他人のわたしさへ骨身が碎ける。親御の身では、お道理でござりまするわいなア。

松王　イヤ、こりや御內證。コリヤ、女房ども、なんでほえる。覺悟した御身替り、內で存分ほえたではないか。御夫婦の手前もあるわい。イヤナニ源藏どの、申し付けては寄越したれど、定めて最期の節、未練な死を致したでござらうな。

源藏　イヤモ、菅秀才の御身替りと云ひ聞かしたれば、潔う首差延べ。

松王　アノ、逃げ隱れも致さずにな。
源藏　ニツコリと笑うて。
松王　ふウ、出かしをりました。怜悧な奴、健氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つたは孝行者、手柄者と思ふにつけ。
〽思ひ出すは櫻丸。御恩も送らず先立ちし、さぞや草葉の蔭よりも、羨ましかろ、けなりかろ。倅が事を思ふにつけ、不便な事を致してござる。
〽流石同性同腹を、忘れ兼ねたる悲嘆の淚。
千代　モシ、その伯父御に、小太郎が。
〽逢ひますわいのと取付いて、ワッとばかりに泣き沈む、嘆きも洩れて菅秀才、一間の內より立出で給ひ。
菅秀　我れに代ると知るならば、この悲しみはさすまいに、可哀の者や。
〽御袖を、絞り給へば夫婦はハッと、共に淚する有り難淚。
ト松王千代、思ひ入れあつて
松王　次手ながら若君へ、松王めがお土產。
ト門口へ出て。
申し付けた用意の乘り物、これへ。
ト向うにて
家來　ハア、。
〽ハッと答へて家來ども、御目通りに舁き据ゆる、はや御出でと戶を開けば、菅丞相の御臺所。
ト文句のうち、向うより松王の家來、乘り物を舁き出で來り、舞臺へ据ゑる。松王立寄り、戶を開ける。內より園生の前出て、菅秀才を見て
園生　菅秀才か。
菅秀　ナウ母樣か。
〽御親子不思議の御對面、源藏夫婦橫手を打ち。
源藏　所々方々と御行くへを尋ねしに、何所に御座ありしぞ。
松王　されば〳〵、北嵯峨の御隱れ家、時平の家來が聞き出し、召捕りに向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い所奪ひ取つたり。急ぎ河內の國へ御供あつて、姬君にも御對面。コリヤ〳〵女房、小太郎が死骸、あの乘り物へ移し入れ、野邊の送りを營まん。
千代　アイ。
〽アイと返事のその中へ、戶浪は心得抱いて來る。

嘉永三年七月中村座上演　八世市川團十郎の松王

ト戸浪、上手の障子を開け、小太郎が死骸を抱いて來る。千代これを乘り物に乘せる。

〽死骸を網代の乘り物へ、乘せて夫婦が上着を取れば、憐れや內より覺悟の用意、下に白無垢麻上下、心を察して源藏夫婦。

ト松王、上着を脫ぐ。下に白無垢、水上下。千代も同じく白無垢の形になる。

源藏　野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし。我れ我れ夫婦が代り申さん。

松王　イヤ〱、これは我が子にあらず、菅秀才の亡骸にお供申す。何れもは、門火々々。

〽門火を賴み、賴まるゝ、御臺若君諸共に、しやくり上げたる御淚。

御臺　冥途の旅へ寺入りの

松王　師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛。

源藏　六道能化の弟子となり

戸浪　賽の河原で砂手本。

千代　いろは書く子はあへなくも、

松王　ちりぬる命。

皆々　是非もなや。

ト　これより門火を焚く事よろしくあつて

〽あすの夜誰れか添乳せん、らむ憂い目見る親心、劍と死出の山けこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故鄕と立別れ、鳥邊野さして。

さらば。

〽連れ歸る。

ト　よろしく段切れにて

幕

菅原傳授手習鑑（終り）

此花江南所無也　一枝折盜於輩者
天永任紅葉之例　伐一枝可剪一指

さゞ波や志賀の都はあれにしを
昔ながらの山櫻かな
讀人しらず

一谷嫩軍記

表のカタリはこの狂言を江戸で上演する時、いつも使つたものである。辨慶の制札と忠度の歌を出しただけで、何の變哲もないが、この二つが中心だけに、カタリとしての役目は果してゐる。

下圖はこの狂言を初めて歌舞伎で上演した寶暦二年五月中村座の櫓下番附である。

本文の錦繪は說明を見て戴きたい。

一谷嫩軍記

序　幕

須磨浦組討の場

役名‖熊谷次郎直實。無官太夫敦盛。平山の武者所季重。熊谷小次郎直家。玉織姫。

本舞臺、三間の間、上の方に陣門。正面、柵矢來。すべて須磨の浦陣所の體。ドンチャンにて幕明く。

〽酒極まる時は亂る、樂しみ極まる時は悲しむとかや、二十餘年の榮華の夢、跡なく覺めて都を開き、平家の一門立籠る、須磨の浦の内裏の要害、前には海、上には險しき鵯越、大手は生田搦め手は、一の谷の山手より、波打際まで柵結ひ廻し、赤旗風に吹き靡かせ、參議經盛の末子無官の大夫敦盛、父に代つて陣所を固め、事嚴重に見えにけり。

〽頃は彌生の始めつかた、月さへ入りて暗き夜に、熊谷が一子小次郎直家、魁して初陣の、功名を顯はさんと、出立つ姿は澤瀉を、一入摺つたる直垂に、小櫻縅の兒鎧、猪首に着なす星兜、星の光に只一騎、心は剛の武者草鞋、足に任せて逸り男の、山道岩角嫌ひなく、一の谷の西の木戸、陣門に走り着き、一息吐いて四方を詠め。

トこの文句のうち、掠めたる遠寄せにて、花道より小次郎、若衆鬘、鎧、誂らへの陣立の形にて走り出て、本舞臺へ來り、あたりを見廻し

小次　アヽ、嬉しや、我れより一番に魁する者もなし。後より人の續かぬ先、イデ切り入らん。オヽ、さうぢや。

〽驅け廻れど、亂杭逆茂木隙間なく、嚴しく閉す陣所の門、如何はせんと見廻すうち、遙かの奧に管絃の音。

ト小次郎、思ひ入れあつて、陣所の門へツカ〳〵と行きこなしあると、奧にて音樂聞える。

〽夜は深更に及んだり、折節山路に風もやみ、海上も浪靜まれば、伎樂の調べ哀れげに、さも面白く聞えけり、小次郎は思はずも、心耳を澄まし聞き惚れて。

ト小次郎、思ひ入れあつて

アヽ、實にも上﨟稚人は、情も深く心も優しと、父母の物語り、今こそ思ひ合せたり。アヽ、かゝる亂れの世

の中に、弓矢叫びの音はなく、糸竹の曲を調べ、詩歌管絃を催ふさる、ハヽア、床しさよ。如何なれば我れ〳〵は、邪慳の田舍に生れ出で、鎧兜弓矢を取り、斯くやんごとなき人々を、敵として立向ひ、修羅の劍を研ぐ事は、淺ましやなア。

〽淺ましさよとばかりにて、覺えず涙を流したる、まだうら若き小次郎が、身の程々を汲分けて、感ずる心ぞしをらしき、後の方に險しき足音、誰れなるやらんと窺ふうち、平山の武者所、鎧凛々しく駈け來り、小次郎が顏見るよりも、敵か味方か訝かしく。

ト此うち矢張りドンチヤンになり、花道より平山の武者所季重、鎧の拵らへにて槍を持ち、走り出て來り、花道にて小次郎を窺ひ見て

季重　ヤア、それに居るは敵か味方か、何者なるぞ。

〽聲掛くれば、小次郎も透し見て。

小次　ヤア、さいふ御身は季重どのか。

季重　ムウ、我れより先へ來る者は、よもあるまじと思ひしに、ホヽオヽ心掛け神妙々々。外の人なら平山が、先陣を爭うて、一番に乘入らんが、初陣の健氣さに、先陣を汝に讓る。氣遣ひなしに、切り入れ〳〵。

小次　イヤナウ、平山どの、あの管絃の音お聞きなされ。さても雲の上人は、また優しさが違ひまする。

季重　イヤサ、それを和殿はえゝ知るまい。昔、諸葛孔明が、司馬仲達に押寄せられ、詮方盡きて櫓に登り、香を焚いて悠々と、琴を彈じてゐるを見て、謀計もあらんかと、我が智慧に迷うて、仲達は逃げしと聞く。アレあの管絃もその通り。ナニ怪しむ事はござらぬ。早く駈入り功名せよ。但し和殿が恐ろしくば、某が先陣せうか。

小次　サア、それは。

季重　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

〽なんと〳〵と氣を持たされ、血氣に逸る小次郎直家、木戸口に走り寄り、門打ち叩き大音上げ。

ト これにて小次郎、ツカ〳〵と行き、門の扉を打ち叩き、大音にて

小次　敵の陣所へ物申さん。武藏の國の住人、士の黨の旗頭、熊谷の次郎直實が一子、同苗小次郎直家、先陣に向うたり。出合うて勝負々々。

〽高らかに呼ばはれば、門内も騷ぎ立ち、すはや敵の寄せたるぞ、出合うて討取らんと、木戸押開き押取り卷き。

トどん〳〵になり、陣門を明け、内より軍兵大勢、抜き連れ、バラ〳〵と出て

軍兵　ソレ、逃がすな。

〽それ逃がすなと軍兵ども、俄に騒ぐ鬨の聲、太刀音人聲かまびすし。

ト小次郎、軍兵を相手に立廻り、門の内へ追つて入る。

〽平山如何と躊躇ふうち、熊谷の次郎直實、我が子の先陣心に徹し、足を空に駈け來り。

トどんちやんにて、花道より直實、好みの鎧なりにて走り出て來り、季重を見て

直實　ヤア、平山どの候ふな。悴小次郎見給はずや。

季重　されば〳〵、最前これへ見えしゆゑ、小次郎にいろいろ段々、あの大勢の敵の中へ、一騎討は叶はぬぞ。平によしに召され、後詰めを待つての事がよからうと、いろ〳〵諫めても、逸り切つたる若武者、無二無三に切り入つてござるわえ。

〽聞くより直實髪逆立ち。

直實　ナニ、小次郎一騎にて切り込みしとな。南無三寶。ソレ。

〽子を失ひし獅子の勢ひ、敵の陣所へ駈け入つたり。

ト直實こなしあつて、陣門の内へ走り入る。

〽爰や彼所の鬨の聲。

トこの時、奥にて

軍兵　エイ〳〵オ、。

ト烈しくドンチヤン打ち立てる。

〽聞くに平山獨り笑み。

季重　へ、、ム、、へ、、ハ、、、、。思ふ壺〳〵。親子ともに袋の鼠。今の間に討たれ居らう。日頃からの熊谷めと、六彌太めが出頭を、クイ〳〵と思うてゐたに、エエ、時節もあればあるもの、手を濡らさず、風の神よりよい敵。その上親子も剛の者、死物狂ひと働らかば、餘程敵を惱まし居らう。荒ごなしさせ討死さし、その後へ仕掛くれば、功名手柄は思ひの儘。うまいぞ〳〵。

〽ぞく〳〵勇み喜ぶ所へ、木戸口に數多の人聲。

軍兵　エイ〳〵オ、。

ト聲する。季重こなし。

〽すはや敵ぞと身構へし、窺ひゐるも暗紛れ、熊谷次郎直實、我が子を小脇にひん抱へ、陣所をズッと駈け出で。

ト門の内より直實、小次郎の吹替を引立て、出て來り

直實　平山どの在するか。悴小次郎、傷を負うたれば、養

生加へに陣所へ送らん。貴殿は殘つて手柄を召されい。
〽云ひ捨てゝ、飛ぶが如くに急ぎ行く。
ト烈しきドンチヤンになり、直實、吹替を引立て、花道揚げ幕へ走り入る。
〽平山案に相違して、油斷ならずとためらふ所へ、數多の軍兵拔き連れて、我れ討取らんと駈出づれば、心得たりと拔き合はせ、受けつ流しつ多勢を相手、火花を散らして挑むうち、無官の大夫敦盛は六具を固め、駒を進めて乘り出し。
ト此うち軍兵大勢出て、季重にかゝる。早笛になり、立廻りよろしくあつて、軍兵、花道へ逃げて入る。この時門內より敦盛、鎧兜、好みの拵らへ、馬に乘り出て來り
〽平山を見るよりも、まつしぐらに打寄り給へば、さしつたりと渡り合ひ。暫しは支へ打合ひしが、先を取られて武者所、殊に大勢に取卷かれ、臆病神の誘ひてや、一足出して逃げ出せば、いづくまでもと煽り立て、後を慕うて追うて行く。
ト此うち太鼓入りの鳴り物になり、敦盛、季重へ切つてかゝる。槍と太刀にてよろしく立廻りあつて、トゞ季重花道へ逃げて行く。敦盛、後を追つて花道へ入る。
ト知らせにつき一面の浪幕を振り落し、上下より岩の張り物を出す。
〽敦盛卿の後を慕ひ、須磨の浦邊をうろ〳〵と、袖は涙の玉織姬、氣も春風や朧夜に、心細身の一腰差込み、彼方へ走り此方へ迷ひ。
玉織　敦盛樣いなう、太夫さまいなう。
ト波の音、谺になり、花道より玉織姬、緋の袴、好みの拵らへにて、長刀を持ち出て來り、花道をウロ〳〵と呼びながら舞臺へ來る。
〽其處よ此處よと尋ね彷徨ひ給ひけり、早東雲に人影も、ほのかに見えし山道より、平山の武者所、やう〳〵逃げのび須磨の浦、暫らく息を吐くうちに、玉織姬と見るよりも。
ト此うち上手より季重出て來り、玉織姬を見て
季重　ヤア、玉織ではないか。ても、よい所で出逢つたな。いつぞや京で見染めてから、目の先にちらつくやうで、起きても寢ても忘られず、思ひ餘つてそさまの親御、時忠どのへ云うたれば、遣らうとあるを幸ひ、迎ひにやつ

たその後で、ア、生娘なら術なかろ、マア寝てどうして斯うしてと、ほんに／＼首を長くして待つてゐたに、迎ひにやつた玄蕃を殺し、よう待ぼうけに召さつたなう。サア、これから連れて行て、女房にするわいやい。

〽引立つれば振り放し。

玉織　エヽ、アタ嫌らしい。親が許すがどうせうが、敦盛さまとは二世の約束。斯う云ふうちにも尋ね逢うて、死なば一緒、邪魔しやんな。

〽駈け行くをひん抱へ。

季重　ムウ、敦盛を尋ねるか。コレ、なんぼ尋ねても敦盛の行くへ、水の底まで尋ねても在所は知れまい。

玉織　そりや又なぜに。

季重　オヽ、敦盛はたつた今、我が手にかけて、討つてしまうた。

玉織　ヤア、なんと。敦盛さまを討つたとや。ハア。

〽はつとばかりに撞と伏し、人目も分かず聲を上げ、嘆き沈ませ給ひしが。

　ト玉織姫、泣き落し、思ひ入れあつて懐剣を抜き

夫の敵、平山覚悟。

〽夫の敵と切り付ける、腕首摑んで、

　ト玉織姫、季重へ突いてかゝる。ちよつと立廻りあつて、季重、玉織姫の腕を押へ

季重　ヤア、此奴手向ひか。もう料簡ならぬ、と云ふ所を云はぬわいやい、

　ト思ひ入れあつて

ても、この手の柔かさ尋常さ。どうも／＼。ア、武者震ひがする程どうもならぬ。コレ、悪い料簡ぢや、とんと心を入れ替へて、おれに随ふ氣になれば、女房に持つて可愛がる。サア、どうか／＼。

〽どうか／＼と猫撫で聲、姫は怒りの涙まじり。

玉織　エヽ、世が世なら其方がやうな、むくつけな侍ひは、あたりへも寄せつけぬに、隨への靡けのと穢らはしい。エヽ、腹の立つ。

〽また切り付ける腕首、捻上げ取つて押へ。

　ト季重を玉織姫また切り付ける。ちよつと立廻り、玉織姫を引敷き

季重　サア、女房になるかならぬか。否なら殺すが、なんと／＼。

〽太刀抜き持つて傍若無人。

　ト季重、太刀を抜き、玉織姫に差付ける。

玉織　オヽ、殺さば殺せ畜生め。エヽ、誰れぞ強い人が來て、此奴を切つてくれぬかいなア。

〽聞え給ふぞ痛はしゝ、豪氣の平山ムッとせき上げ。

季重　ヤア、憎くい女め。靡かぬ上に、いろ〳〵の雜言過言。恥面掻かされ堪忍ならぬ。生け置いては人の花と詠めさすもむやくしい。辛く當りし返報。思ひ知れ。

〽と持つたる刀、胸板グッと突き通せば、アッと一聲苦しむ折柄、後の方に鬨の聲。

トこの時奥にて、ドンチヤン、鬨の聲する。

南無三、追手の敵なるか。さうだ。

〽我れを追ひ來る敵なるやと、後をも見ずして落ち失せけれ。

ト季重うろたへ、玉織姫の死體を岩の張り物の内へ蹴込み、ウロ〳〵して上の方へ入る。知らせに付き、浪幕を切つて落す。

本舞臺、向う一面の須磨の浦の遠見。三段の波手摺り、上下岩の張り物よろしく、浪の音にて道具納まる。

謡〽さるほどに御船を始めて一家皆々、舟に浮めば乗り遲れじと汀に打寄れば、御座船も兵船も遙かに延び給ふ。

〽無官の大夫敦盛は、途にて敵を見失ひ、御座船に馳せ付けて、父經盛に身の上を、告げ知らす事ありと、須磨の浦邊に出でられしが、船一艘もあらばこそ、詮方浪間に駒を乘入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。

ト波手摺り高二重の上に、子役遠見の敦盛、後向きになり、海に乗り入れし思ひ入れ。

〽かゝりける所に後より、熊谷の次郎直實。

ト揚げ幕にて

直實　オヽイ〳〵。

〽オヽイ〳〵と聲を掛け、駒を早めて追つかけ來り。

トかけりになり、花道より直實、馬に乘り、日の丸の陣扇を持ち出て來り

それへ渡らせ給ふは、平家方の大將軍と見奉る。正なうも敵に後を見せ給ふか。弓返して勝負あれ。斯く申す某は、武藏の國の住人、熊谷の次郎直實。見参せん、返させ給へ。オヽイ〳〵。

〽扇を上げて差招き、暫し〳〵と呼はつたり、敵に聲をかけられて、何か猶豫のあるべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進んで寄り、互ひに打ち物差かざし、朝日に輝く

劒の稻妻、駈寄り駈寄せ、てう／＼／＼、蝶の羽返し諸あぶみ、駒の足並かつし／＼、彼所は須磨の浦風に、鎧の袖はヒラ／＼／＼、群れゐる千鳥村千鳥、むら／＼パツと引汐に、寄せては返り返りては、また打ちかゝる虚々實々、勝負も果しあらざれば。

ト鼓の合ひ方になり、直實、逸散に岩組の後へ入る。向う子役の敦盛、正面向きになる。此うち子役の直實、追ひ駈け出て、これより兩人、馬上の立廻りよろしくあつて、双方太刀を打捨て

直實　いでや組まん。

敦盛　實に尤も。

ト此うち始終誂らへ大小入り、笛になる。

〽馬上ながらにむんづと組み、えい／＼／＼の聲のうち、互ひに鐙を踏み外し、兩馬が間に摚と落つ。

ト兩人馬上にて組打ちよろしく見得。これをキッカケにチョン／＼と浪幕を振り落す。ト早笛になり、敦盛の馬、舞臺を蹴立てゝ花道へ走り入る。道具出來次第、浪幕を切つて落すと、向うに見えし波手摺り、直ぐによき所へ引附ける。誂らへの鳴り物になる。舞臺眞中へ直實敦盛、組打ちの見得にてせり上がる。

〽すはやと見る間に熊谷は、敦盛を取つて押へ、

直實　斯く御運の極まる上は、御名を名乘り直實が、高名譽れを顯はし給へ。今生に何事にても、思ひ殘す事あらば、必らず達し參らせん。

〽懇ろに申すにぞ、敦盛御聲爽かに。

敦盛　オヽ、優しき志し、敵ながらも天晴れ勇士。斯く情ある武士の手にかゝり、死せん事生前の面目。我れ戰場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、兼ねてなき身と知るゆゑに、思ひ置く事更になし。さりながら、忘れ難きは父母の御恩、我れ討死と聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰む爲、討たれし後にて我が死骸、必らず父へ送り給はれ。

〽と襟搔合せ座を占め給ひ。

我れこそ參議經盛の末子、無官の大夫敦盛なり。

〽名乘り給ひし痛はしさ、木石ならぬ熊谷も、見る目涙に暮れけ　が、何思ひけん引起し、鎧の塵を打拂ひ。

直實　さてこそ參議經盛公の、御公達にて在するよな。この君一人助けしとて、勝軍に負けもせまじ。折節外に人もなし。一先づ爰を落ち給へ。早う／＼。

〽早う／＼と云ひ捨てゝ、立別れんとする所へ、後の山

天保十二年四月河原崎座上演

岩井粂若の敦盛　澤村源之助の直實

より武者所、數多の軍兵聲々に。
ト此の時浪の音にて、向うの岩組みの間より季重、出かゝり、舞臺をキッと見下ろし
季重　ヤア〳〵熊谷、平家方の大將を組み敷きながら助けるは、二心に紛れなし。熊谷ぐるめ討つて捕れ。
軍兵　エイ〳〵オ、
〽聲々に罵るにぞ、熊谷はハッとばかりに、如何はせんと默然たり、敦盛卿しとやかに。
敦盛　とても遁がれぬ平家の運命、爰を助かり行く先にて、下司下郎の手にかゝり、死恥を曝さんより、早く御身が手にかけて、人の疑ひ晴らされよ。
〽西に向つて手を合せ、御目を閉ぢて待ち給へば、痛はしながら熊谷は、御後に立廻り、彌陀の利劍と心に唱名、振上げは上げながら、玉のやうなる御粧ひ、情なや無慘やなと、胸も張裂け氣も遲れ、太刀振上げし手も弱り、思ひに搔き暮れ討ちかねて、嘆きに時も移るにぞ。
ト直實、白刃を拔き、敦盛を切らうとして愁ひの思ひ入れ。
敦盛　ヤア、後れしか熊谷。早々首を刎ねられよ。
〽捻ぢ向きたまふ御顏を、見るに目も暮れ心消え。

直實　某にも悴小次郎と申す者、丁度君の年格好、今朝軍の魁して、薄傷少々負うたるゆゑ、陣屋に殘し置いたるさへ、心にかゝるは親子の仲、それを思へば今爰で、討ち奉らば、さぞや御父經盛卿の、嘆きを思ひ過されて。
〽さしもに猛き武士も、そゞろ涙に暮れゐたる。
敦盛　ヤア、愚かや直實、惡人の友を捨て、善人の敵を招けとはこの事。はや首討つて亡き跡の、回向を賴む。さもなくば生害せうか。
直實　早まり給ふな。
敦盛　卑怯の汚名を取らす心か。
直實　サア、それは。
敦盛　敦盛これにて生害せうや。
直實　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
直實　ムウ。
敦盛　早々首を刎ねられよ。
直實　ハ、ハッ。
〽諫められ。
順縁逆縁倶に菩提、未來は必らず一蓮托生、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

天保十二年四月河原崎座上演　中村大吉の玉織姫

〽首は前にぞ落ちにける。
ト直實思ひ切つて敦盛の首を討ち落す。板返しにて敦盛の首、前へ出る。直實、愁ひの思ひ入れにて首を取り上げ
〽人の見る目も恥かしと、御首を掻抱き、曇りし聲を張り上げて。
〽平家方に隱れなき、無官の大夫敦盛を、熊谷の次郎直實、討取つたり。勝鬨々々。
軍兵　エイ／＼オヽ。
トどんちやん打上げる。これにて季重、軍兵入る。
〽磯に臥したる玉織姫、絶え入りし氣も一筋に、夫を慕ふ念力の、耳に入りしか、ムクリと起き。
トこの時倒れし玉織姫、この聲にて起き上がり、這ひ寄つて前へ出て
玉織　ナウ、暫し待つてたべ。敦盛さまを討つたとは、如何なる人か恨めしや、せめて名殘に御顏を、一目なりとも見せてたべ。
〽云ふ聲も深傷に弱る息づかひ、見るより熊谷、御首携へ歩み寄り。
直實　敦盛卿を慕ひ給ふは、如何なる人にてわたらせ給ふや。
〽尋ぬれば、臨終の苦しき聲音にて。
玉織　我れこそは敦盛の、妻と定まる玉織姫。
直實　すりや、敦盛卿の御簾中、アノ玉織さまとや。
玉織　敦盛さまを討つたとある、して御首は。
直實　ヤ。
玉織　いづくにぞ。
直實　サア、その首は。
玉織　エヽ、もう目が見えぬ。
直實　ムウ、ナニお目が見えぬとや。
ト直實、玉織の側へ寄り、疵口をよく／＼見て
ア、お痛はしやなア。今は誰れ憚らず、敦盛卿の御首、卽ち爰に。
玉織　ハア。
〽手に渡せば、ワッと泣く／＼しがみ付き、膝に載せ抱きしめて、消え入り絶入り嘆きしが。
ト直實首を渡す、玉織姫、縋り付いて思ひ入れ。
ナウ、敦盛さまか。果敢ない姿になり給ふ。陣屋を出でさせ給ひしより、御後を慕ひ方々と、尋ぬる中に源氏の武士、平山の武者所、我れを捉へて無體の戀慕。騙し討

たんも女業。この如く手にかゝり、二人が二人、悲しい最期。

〽せめて別れに御顔を、見て死にたいと思へども。深傷に心が引入れて、目さへ見えぬか、悲しやなア。

〽また御首を撫でさすり、宵の管絃の笛の時、後にとゐりしお詞が、今生後生の筐かや。この世の縁は薄くとも、來世は必らず末永う。

〽添ひ遂げてたべ我が夫と、顔に當て身に添へて、思ひの限り聲限り、啼く音は須磨の浦千鳥、涙にひたす袖の海、引く汐時と引く息の、知死期と見えて絶え果てたり、熊谷は茫然と。

直實　アヽ、何れを見ても蕾の花、都の春より知らぬ身の、いま魂は天ざかる、鄙に下りて亡き跡を、問ふ人もなき須磨の浦。なみ/\ならぬ人々の、成り果つる身の痛はしやなア。

〽悲嘆の涙に暮れけるが、是非もなく/\玉織の、亡骸を取納め、母衣をほどいて敦盛の、御死骸を押包み、總角取つて引き結び、手綱を手繰り結ひつくる、鞍の鹽手やしを/\と、弓手に御首携へて、右に轡の哀れ氣に、檀特山の憂き別れ。

トこの文句のうち、敦盛の吹替の胴人形を、馬へ母衣の緒にて結び付け、よろしく思ひ入れあつて

悉陀太子を送りたる、車匿童子の悲しみも

〽同じ思ひの片手綱、涙ながらに。

流轉三界無爲眞實報謝。南無阿彌陀佛々々々々々々。

〽歸りけり。

トこの時、次第に遠見、東雲の模樣、日輪を引出し、東西の窓を明ける。直實、首級を見て愁ひに沈む。この時、上下にて

軍兵　エイ/\オヽ。

ト遠寄せを打込み、馬、東に立ち上がる。浪間より數多の千鳥を日覆へ引上げる。直實、首を掻込み、キツと見得。一セイ、カケリにて、

幕

二幕目　菟原の里の場

役名――薩摩守忠度。岡部六彌太忠澄。菟原の山五平。梶原平次景高。人足廻し、茂次兵衞。俊成

卿息女、菊の前。菟原の林。

本舞臺、三間の間、藁葺き常足の二重。上手、九尺の障子屋體。いつもの所、門口。この外に誂らへの生垣、林、世話なりの母にて、打盤の上に洗濯物を載せ、手槌にて打つてゐる。在郷唄にて幕明く。

トてんつゝにて、花道より百姓四人、鋤鍬など携へて出て來り、直ぐに本舞臺へ來り、門口を覗き、内へ入つて

百姓　コレ、婆様、いつも／＼よう精が出ますの。年に似合はぬ達者ゆゑ、毎日休みといふ事なく人仕事。なんぼ其やうに稼いでも春の日永、もう仕事もしまつて、氣保養もさつしやれや。

林　ハイ／＼、左様しませう。シタガ、今年の作は、どうでござりませうな。

百姓　さればいなう、婆様も知つての通り、一年の出來秋で、春の植付けも、一入元氣があつてようござるわいの。

同　コレ、婆様、一人で不自由でござらうが、毎日畑へ行くほどに、必らず遠慮なう、用があるなら云はつしやれや。

林　オヽ、其やうに親切に、忝なうござります。マア、一服のんで行かしやりませ。茶も温うなりましたが、一つ呑んで行かつしやりませ。

ト林、茶碗土瓶などを出す。皆々取つて呑む事。

百姓　構はつしやるな。兎やかう云ふうち日が闌けた。もう一稼ぎやらうぢやござるまいか。

同　それがようござらう。そんなら婆様、明日また逢ひませう。

林　オヽ、もう行かつしやるか。静かにござれや。

ト又テンツヽになり、百姓四人花道へ入る。林、後を見送り

ハテ、あの衆もよう親切に見舞うて下さる事ぢや……もう日が暮れるさうな。ドリヤ、灯を點さうか。

ト此うち林は打盤にて洗濯物を打ちしまひ、そこらを片附けなどしてゐる。

〽世の憂きに、いさゝめならぬ身の願ひ、忍びて人につげ櫛の、薩摩の守忠度は、俊成卿の館より、須磨の陣屋へ歸らんと、急ぎの道も行き暮れて、宿りもがなと爰かしこ、荒れし軒端も疎なる、伏屋の門に立寄り給ひ。

ト此うち時の鐘になり、花道より忠度、壺折り衣裳、下駄、肩蓑、笠をかざし出て來り、思ひ入れあつて門口へ來り

忠度　都方より西國へ、歌修行の旅の者、案内も知らぬ道に疲れ、日も暮れたれば迷惑いたす。卒爾ながら、お宿の御無心賴み入る。

〽賴み入るとぞありければ。

ト林これを聞き、こなしあつて

林　イヤ、爰は所の法度にて、人宿は致さねども、我れも人も行き暮れて、宿のないは難儀なもの。殊更優しき歌枕、御修行のお方と聞けば別條もあるまい。宿はせずとも、マア／＼入つて、煙草でも參らつしやりませ。

〽戸口を開けて。

ト林、二重より下り、門口を明けて見て

ヤア、あなたはどうやら見たやうな。

忠度　其方が面差も、どうやら覺えの、

林　オヽ、それよ。前方都でお目にかゝりし、忠度さまではござりませぬか。

忠度　ナニサマ、思ひ合すれば、そちや五條三位俊成卿の館にゐやつた、菊の前が乳母でないか。

林　あなたも御無事で。

忠度　其方も健固で重疊々々。

ト思ひ入れあつて

して、この家は、其方が住居か。

林　茅屋なれどこの婆が

忠度　住居とあらば、暫時許しやれ。

林　マア／＼此方へ。

〽先づ此方へと伴ひて、洗足盥手桶の水、浮世を忍ぶ簑笠の、塵打拂ひ入り給へば、ともに林が手ばしこく、洗うて拭ふ袱紗物、上座に直し手をつかへ。

ト誂らへの合ひ方。忠度、內へ入り、上座に住ふ。

林　マア、何は差置きお尋ね申しませうは、この度源氏の軍勢、平家を攻めんと都へ亂入につき、一門殘らず西國へ、落ちさせ給ふと承りましたが、あなたばかり何として、今まで都にはござりました。

忠度　ホヽウ、その仔細は兼ねて其方の知る通り、某は俊成卿の弟子といひ、分けて親しき仲なるが、この度師の撰まれし千載集に、我が詠歌の加はりなば、たとへ敵の手にかゝり、屍は野山に曝すとも、この世の本望、敷島の道を求めし甲斐あらんと、思ふ心の一筋に、狐川より

引返し、俊成卿の館に立越え願ひしが、かゝる時節に平家の詠歌、私しに入れられずと、未だその沙汰なきうちに、はや合戰最中と聞き、心急かれて立歸る、生田の陣所も程近しとは云ひながら、暮れに及ばゞ陣門も閉くまじと、この所へ立寄りしも、不思議の縁であつたよなア。

林　〽不思議の縁と宣ふに。

されば私しも、稚馴染の夫が不所存、置去りにして行くへ知れず。折柄縁を求めて俊成さまへ乳母奉公。養ひ若菊の前さま、御成人につきお暇申し、かゝるべき伜もあつたれど、氣性が悪さに勘當いたし、今獨り身の貧樂、應ぜぬ苦勞はござりませぬが、承はれば、あなたと菊の前さまは、どうやら譯の

ト思ひ入れあつて

ホ、、、イヤ、私しに御遠慮はいらぬ事。それについてお話し申す事もあれど、こりや追つての事。マアマア、遠路のお草臥れ、あれへござつて御休息遊ばしませ。

忠度　イカサマ、旅中の勞れを休めん。

ト忠度立ち上がり、あたりを見て

ハテ、閑靜なるこの住居、一樹の宿りも他生の縁。

林　今宵は夜とともに、お物語り致しませう。

忠度　旅寢の徒然、ハテ、何をがな。

〽云ひつゝ矢立取出し、心にうなづき傍なる、破れたる障子へサラ〳〵と、書きなし給ふ三十一文字、乳母は差寄り手をつかへ。

ト此うち忠度、誂らへの扇形の矢立を出し、障子へ歌を書く。林これを見る。

忠度　「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主なるらん。」

林　かゝる中にも一首のお歌。流石は都の忠度さま、見苦しけれど奥の間へ。

忠度　林、案內。

林　斯うお出で遊ばしませ。

〽云ふも優しきもてなしに、貧家の塵も繕はぬ、主が案內に打連れて、一間にこそは入り給ふ。

ト林先に、忠度、思ひ入れあつて上の屋體へ入る。

〽また宵ながらかき曇る、空も心も暗紛れ、ウソ〳〵窺ふ大男、枳殼の生垣押破り、ヌッと入つて上り口、納戸へ仕掛ける差足拔足、忍び込む間に主の林、物音聞付け立出でゝ、窺ひゐるゝともしすまし顏、袋に入りし一腰か

い込み、ソロリ／＼と表の方、出でんとするを。
ト此うち花道より、田五平、廣袖・褞袍の形、腰に酒の入りしすつぽんを提げ、ウソ／＼出て來り、下の垣根を押分け、二重の横へ出て、窺ひ／＼暖簾口へ入り、袋入りの刀を盗んで出る。此うち上の障子をあけ、林出て來り、田五平、表へ出ようとするを見て
林　コリヤ、盗人待て。
〽聲かけられて悔りし、逃げ行く所を飛びかゝり、武者振りついて引戻せば、遁がさじ遣らじと摑みつき、引張るはずみに頰冠り、脫げて落ちたる顔見付け。
ト此うち兩人やらじと爭ふうち、田五平の手拭とれる。林、顔を見て
林　ヤア、わりや田五平ぢやないか。エヽ、おのれはおのれは。
田五　エヽ、コレ／＼母者人、聲高く云はつしやるな。盗人を捕へて見れば我が子なりけりぢや。人が知つてはおれよりマア、お前の外聞が悪いわいの。
林　てもさても、憎やの／＼。おのれがやうな性の悪い奴が、又とあるかいやい。
田五　ハテ、あればこそ酒も飲みます。色事は此方任せ、三絃もちつくり嗜るてや。喧嘩も滅多に前先の見えぬ事はせぬ。又、これ／＼もたんまりにして、かすりは喰ひませぬわいの。へゝ、慮外ながら萬能に達した男ぢやわいの。
林　サア、その悪い事が積つて、親に様々難儀をかけ、姉娘を勤め奉公にやつたも、みんなおのれゆゑ。まだその上に上塗りかけ、盗みするやうになつたは、よくよく因果な產れ性。そしてマア、外でもあらう事か、親の家へ入るとは、エヽマア、おのれは／＼。
田五　ア、コレ／＼、お前もほんに年に似合はぬ、まだな事を云はつしやるわいの。コレ、他人の所へ入るとの、忽ちこの首がござらぬわいの。そこでもし見付けられても、命に氣遣ひのないやうに、高を括つて親の家へ入つたは、我が子ながらも天晴れな者ぢやと、褒めてくれいで何ぢやゝら、くど／＼くど／＼と、愚痴な事云はつしやるわいの。コレ、そんな事聞くと氣が詰まるわいの。
〽云ひつゝ腰のすつぽんより、有合ふ茶碗へどぶ／＼どぶ。
ト田五平、腰の吸筒より酒を出して飲む事。林これを見て思ひ入れ。

天保二年八月河原崎座上演

澤村源之助の忠度　七世市川團十郎の六彌太

林　それ〳〵その酒が止まぬから起つた事。横着な氣も出るわいなう。コリヤヤイ、見る影もないこの母が、人仕事してやう〳〵と、その日を送れば、いかな〳〵、一錢の貯へもないわいやい。

田五　サア、あつて堪るものか。そのない事は、おれがよう知つてゐる。ぢやによつて錢銀の望みはない。コレ、この一腰が欲しさぢやワ。

ト以前の袋入りの刀を出して見せる。

林　イヤ、そりやならぬ。親仁どのが殘して置いた、重代の寶物ぢやわやい。

田五　サア、それぢやによつて、よう切れうと思うて盜む心は、商ひせうにも元手はなし、仕馴れた職もなければ、人足廻しの茂次兵衛が所にかゝつてゐて、歩荷持ちしても、儲け惜いは錢ぢや。それに毎日飯代も拂はにやならず、三文でも餘つた時は、片かは酌んでやつてのける。これぢや濟まぬと思ふから、フッと氣の付いたは、いま源平軍の中、ウソ〳〵と見廻つて、拾ひ首でもしたら、知行になるまいものでもないと、思ひ付きは附いても、丸腰ではならぬ仕事。それでこの刃物を盜むとは云ふものの、親の物は子の物ぢや。こりやわしが貰ひますぞや。

林　アレ、まだ其やうな野太い事ばかり。子なれば遣れど、わりや勘當したりや他人ぢやわいやい。

田五　サア、そんなら借りませう。

林　イヽヤ、ならぬわやい。

田五　なんでもおれが借りにやならぬ。

〽せり合ふ中へによつと來る、人足廻しの茂次兵衛が。

ト兩人、爭ひゐる。テンツヽになり、花道より茂次兵衛、輕衫三尺大風呂敷へ誂らへの鎧、小手臑當などを包み、これを引ッかたげ出て來り、門口へ來り

茂次　コレ、田五平、爰にゐやるか。ヤア婆樣、何やらせり合ぢやな。ハヽヽヽ、さては勘當の詫びを聞くまいといふ事か。

林　イヤ〳〵、詫び所ぢやござらぬ。矢ッ張り性根が直らぬわいの。

茂次　アヽ、コレ〳〵、直らぬとは云はれまい。おれが世話にしてから、めつきりとようなりました。もう料簡してやらつしやれ。コリヤ〳〵、田五平、うつかりしてゐる所ぢやない。今度の軍について、弓持ちの槍持ちのと大分人夫が要るゆゑ、それ〳〵の人を穿鑿してやつたが、まだ旗持ちが足らぬゆゑ、其方を雇はうと思つて、一遍と

尋ねた。外の事より辛どうはせいで、マア、賃がよいか、行かぬか。

林　イエ〳〵、なんぼ賃がようても戰場命掛け。こりや止しにしたらよからうぞや。

茂次　ハテ、益體もない。氣遣ひあれば雇はれる者は一人もござらぬ。道具持ちは切合ひの勝負はせず、もし流れ矢でも來る時は。

〽楯の後へちやつと隱れ。

婆樣、えいか。

〽槍長刀がひらめけば、人の後へちやつと屈む。

兎角ちやほや、氣轉利かして立廻れば、怪我する事はござらぬ。ほんのこけ知らずといふものぢや。その段はこの茂次兵衞が請合ひ。これ即ち先樣から來た丈夫な裝束、見せませうか。

〽風呂敷ほどき取出すは、雜兵並の陣笠鎧、見る間に田五平ぞくつき出し。

田五　そりやおれが望む所ぢや。大勢に打交り、エイ〳〵オ、が云うて見たいわい。

茂次　そんなら直ぐに身拵らへするがえいわい。

田五　そんならちよつと、この鎧着て見ようか。

茂次　サア〳〵、それがよい〳〵。

〽てんでに帶解きどんざ脫ぐ、襦袢の上に黑革の、鎧上帶しつかと締め。

ト錣の合ひ方。

〽一腰さすが侍ひの、小手臑當も似合うたと、陣笠着けて。

ト此うち田五平、着物を脫ぎ、茂次兵衞、林、手傳うて鎧小手臑當を着せる。田五平、嬉しき思ひ入れ。

田五　先づこれで支度は出來たが、これからマア、どこへ行くのぢや。

茂次　成る程、其方は先樣を知るまいから、おらが家へ行て所を聞いたがよい。

田五　オツト合點。そんなら母者人、この刀貰ひました。

林　オヽ、とてもの序に折紙も添へてやりませう。待ちや待ちや。

ト林、奥より折紙を出し

これはその刀の折紙ぢやほどに、大事にしや。

田五　なんぢや。アヽ、折紙も添へて下さるか。エヽ、忝ない忝い。

林　コレ〳〵、必らず怪我してくれるなよ。

茂次　コレサ婆様、案じぬがよい。
田五　オヽよい。よい／＼よんやな。
ト田五平、力味返つて突ッ張るこなし。林、茂次兵衛、思ひ入れあつて、太鼓入りにてよろしく
よい／＼よいやな。
〽身振りは練物見る如く、勇み進んでこそは急ぎ行く。
ト此まゝ田五平は花道へ入る。林、跡を見送つてゐる。
〽林は後を打眺め。
林　片輪な子が可愛いと、有やうは不便にござる。兎にも角にもお前のお世話、忝なうござりまする。お禮がてらに酒一つ進せたいが、奥には仕事を取散らして置きました。納戸でなと參つて下され。
茂次　イヤ、そりや無用にさつしやれ。
林　ハテ、貰うては進せぬ。餘所から貰うた諸白に、鰯の肴でたつた一つ。
茂次　それほどに云はれる事。そんなら一つ御馳走になりませうか。
林　サア、マア、納戸で是非ともに。
〽是非に／＼と無理矢理に、納戸へ押遣り勝手から、銚子杯持ち行くも、子ゆゑの愛想と知られけり。

ト茂次兵衛を奥へやり、林、こなしあつて、銚子杯を持ち、思ひ入れあつて奥へ入る。
〽風さそふ、道の時雨も繁ゆゑに、身は濡鷺の菊の前、走り着いたる一つ家の、門の戸けはしく打ち叩き。
ト花道より菊の前、廣振り袖衣裳、市女笠、杖にて、足早に出て、門口へ來り
菊の　コレ、爰明けてたもひなう。
〽明けて／＼とのたまへば、林は聞付け。
ト奥より林、行燈を提げ出て來り
林　誰れぢや／＼。
菊の　イヤ、大事ない者ぢやわいの。
林　大事ない者とはどなたぢや、誰れぢや。
菊の　ハテ、わしぢや、菊の前ぢやわいの。
林　ヤア／＼心得ぬ。お姫様とは。
〽庭に駈け下り戸を明けて。
ト林は門口を明けて菊の前を見て
ほんにお姫様ぢや。マア／＼、此方へお入り遊ばしませ。
〽といふうちもどうやら氣遣ひ。
ト菊の前を内へ入れ、林、思ひ入れあつて
見れば附添ふ人もなし、何として夜に入つて、お一人お

出でなされたぞ。

菊の　さればいの。忠度さまの遊ばした、お歌の事に兎や角と、隙取るうちに待兼ねて、お立ちありしと聞くと早、お後を慕うて出たれども、心に任せぬ女の足。爰まで來ても追ひつかれず、道は知らず日は暮れる。其方の所は前方に、摩耶參りの時寄つたを便り、やう／＼尋ね當りしが、此やうに後れては、忠度さまに逢ふ事は

林　なるとも／＼、コレ、逢はれまするぞえ。

菊の　そりや又どうして。

林　コレ、忠度さまは先程お出でなされて、奥にござりますわいの。

菊の　ヤア、そりやほんの事かいなう。ヤレ／＼嬉しや。イヤ、そりや噓ぢや。どうしてあなたが、この家の內へお出でなされう筈がない。こりや自らを嬲るのかいなう。

林　ホヽヽヽ。こりやマア、ひよんなお疑ひ。我が子にかへても大事と思ふお前樣、殊に遙々ござつたもの、噓僞はりを申しませうか。その證據と申すは、アレ、あの障子へ忠度さまが、お書きなされたあの歌。あれを御覽遊ばして、お喜びなされませいなア。

菊の　なんと云やる。この障子が證據とは。

〽嬉しき事を菊の前、何か樣子も白紙の、障子に殘る夫の歌、見るより悄り。

ほんにこれこそ我が夫の御手蹟。どうして爰へ來給ひしぞ。アヽ、早う逢ひたい、逢はせて給ひなう。

林　成る程お逢ひなされまし。ぢやがコレ、旅疲れで休んでござる。消魂しう起さずと、ソツと入つて肌身をつけ、しつぽりと御寢なされませ。

〽粹な詞に面はゆく。

菊の　オヽ、乳母とした事が、じやら／＼と、なんぞいなう。譯もない事ばつかり。

〽云ひつゝ片頰に笑の眉、開く襖も待兼ねて、いそ／＼として。

乳母、其方向いてゐやいなう。

〽入り給ふ。

ト上の屋體へ菊の前を突き遣る。菊の前、こなしあつて屋體の內へ入る。

〽折節納戶の暖簾口、欠伸まじりで立出る茂次兵衞。

ト奥より茂次兵衞、酒に醉ひしこなしにて出て來り

茂次　コレ婆樣、いかい雜作になりましたぞや。

林　これはさて、わしとした事が不作法な。構ひもせぬ亭主振り、免して下さりませ。

茂次　イヤモ、手酌で差いつ押へつ、銚子ぎり引掛けたりや、グッタリと寢てのけた。內に大分用がある、いかい馳走になりました。また其うち來ませう。

林　そんなら、もうお歸りでござりまするか。

茂次　オヽサ、歸る事は歸るが、斯う醉つて見ると泊つて行きたい。

林　何を云はしやる。お內儀が待つてゐるぞや。

茂次　そんなら、また來ませう。

林　ようござりました。

〽林は納戸へ入りにけり。

ト林は納戸口へ入る。茂次兵衛外へ出て、窺ひゐて

〽茂次兵衛戸口に窺ひ〳〵。

茂次　いま奥で樣子を聞けば、平家の大將、薩摩守忠度とやらが、爰へ來てゐる樣子。いま見えたのは菊の前とやら。なんでもこの事、梶原さまへ注進して褒美の金。うまい〳〵。

ト時の鐘にて、逸散に花道へ入る。

〽時しも一間騷がしく、何の樣子か菊の前、襖を明けて裾蹴はらし、駈け出で給へば林は驚き。

ト障子の內バタ〳〵にて、菊の前、走り出る。暖簾口よりこの物音にて、林も出て來り押止めて

林　コレ申し、姬君樣、何事が起つたか。氣色を變へてとつかはと、あなたはどこへござります。樣子仰しやれ。

菊の　サア、どうでござりますぞいの。

菊の　サア、その樣子は、忠度さまが胴慾な、わしに暇をやるといの。

林　ムウ、そんならあなたのお腹立ちは尤もぢやが、高いも低いも、夫が女房に暇をやるとは、よく〳〵料簡ならぬ事。その譯を立てなさらにや、コレ、科ないあなたに疵がつくぞえ。マア、とつくりと氣を鎭め、思案して御覽じませ。

菊の　イヤ〳〵、思案までもない。その譯は立つてはあれど、互ひに思ひ初めしより、夫よ妻よと云ひ交して、一生添はうと思うたもの、緣切られては片時も、なんと長らへ居られようぞ。

〽恨みつらみも有礒海、一思ひに身を沈め、底の藻屑となる覺悟。

止めずと死なしてたもいなう。

〽死ぬる〳〵とばかりにて、後は詞も涙なる。

林　イヤ〳〵、なんぼ仰しやつても、乳母はどうも合點がゆかぬ。これには定めて深い樣子が。

トこの時上の障子屋體の內にて

忠度　ホヽウ、その仔細は忠度が、とくと申し聞かせん。

〽しづ〳〵と立出で給ひ。

ト上手より忠度出で、二重眞中へ住ふ。大小の合ひ方になり

天の憎むところ、天必らず誅罰すと、入道の不善、一門の積惡によつて、斯くまで傾く平家の運、この度の戰ひも、十が九つ味方の敗軍。某も討死と、覺悟極めし事なれば、いつを期してか添ひ遂げん、思ひ切つて歸られよ。

〽云へども更に聞き入れず。

陣所へ行かんとある時には、忠度女に迷ひ、陣中まで具したりと、世の人口にかゝるといひ、死後まで緣を切らざれば、俊成卿の御身の上。平家に親しき咎めを受け、遂には源氏の仇となつて、亡び給はん悲しさに、つれなく云ひ放し、暇を遣はせしは、忠度が師の高恩を報ぜん爲。もしも運に叶ひ、戰に勝たば長らへて、再び逢はんも計りがたし。それを賴みに行く末の、契りを樂しみ待ち給へや。

〽口にはいさめ心には、これ今生の別れぞと、思ひ廻せばいぢらしく、さしも武勇に張り詰めし、弓弦の切れし心にて、ゐるもゐられぬ座を背け、脇目に餘る御淚、包み兼ねさせ給ふにぞ、それと悟りて菊の前。

菊の　イヤ〳〵、なんぼ其やうに、再び逢はうの添はれるのと、潔う仰しやつても、誠しからぬ身の覺悟、討死と知りながら、なんと見捨てゝ去なれうぞ。いづこまでもお供して、生きるとも死ぬるとも、一緒でなけりや、わしや否々。

〽酷いつれないお心と縋りついて泣き給へば、林も心思ひやり、共に袂を絞りしが、わざと諫めの聲高まし。

林　今の程事を分け、利害を解いてお云ひなさるに、たつてお供と仰しやるは、親御樣へは御不孝といひ、殿御の爲には猶ならぬ。如何に姫御前なればとて、その辨へがないかいの。アヽ、疎ましいお子ではあるぞいなア。

〽詞を盡してとも〳〵に、諫めすかせど否應の、答へも淚なか〳〵に、離れがたなき風情なり、折節風に誘はれて、間近く聞ゆる鬨の聲、耳を貫く鉦太鼓、亂調に打ち立て〳〵、どつと駈け來る討手の大將、一文字の大音上

げ。

ト此うち皆々愁ひの思ひ入れ。遠寄せになり、三人こなし。花道より梶原、立烏帽子、鎧陣立の形、附け太刀にて、花四天大勢、突棒刺叉を持ち出て來り、花道にて

梶原　平家の落人薩摩守忠度、この家に忍び在する由、注進あつて慥かに聞き、召捕らん爲、梶原平次景高が向うたり。たとひ鬼神なればとて、八方を取圍めば、とても遁がれぬ。尋常に繩かゝれ。異議に及ばば踏込んで、搦め捕らうか。如何に〳〵。

〽如何に〳〵と呼はつたり、人々さては茂次兵衛が、注進せしかと驚ろけば、忠度少しも動じ給はず、二人を奧へ忍ばせて。

ト忠度、門口へこなしあつて兩人を奧へやり、門口を明け、キツとこなし。

〽太刀押取つて突立ち上がり。

忠度　ヤア、烏滸がましや平次景高・源平互ひに鎬を削り、刃を爭ふ戰場には向はず、我れ

〽一人に多勢を以つて取圍む。

拙な卑怯者、汝如きに易々と、繩かけらるゝ忠度ならず。いでや手並の程を見よ。

〽太刀拔き放し身繕ひ、景高いらつて。

梶原　ヤア、物を云はせず討つて捕れ。

捕手　やらぬワ。

ト大太鼓入りになり、捕り手打つてかゝり、皆々を相手に忠度立廻り、好みの通りあつて、トヾ寄せ太鼓になり、景高を先に捕り手、花道へ逃げて入る。

〽むら〳〵ぱつと逃げ失せたり、引違うて人足茂次兵衛、數多引連れ勇み立ち。

ト花道揚げ幕にて

茂次　ヤレ來いやい。

皆々　ハ、ア。

トどんちやんになり、茂次兵衛、双紙を鎧にして火吹竹を差し、采配を持つて先に立ち、後より大勢四天、突棒刺股を持ち出て來り

茂次　ヤア〳〵青海苔、ちやアない忠度、最前この家で窺ふところ、障子に殘る落書を、見出した歌の茂次兵衛が、梶原さまへ御注進、首打ち落すは易けれど、ならば手柄にからめ捕り、菊の前をおらが貰ひ、巣鴨の花と作り立て、細工は流々仕上げたら、褒美はドッサリ丸儲け、團子坂

からコロ〳〵と、首を打たうか生捕るか。二つに一つの返答は、サ、、、、なんと〳〵。

〽なんと〳〵と詰め寄れば、忠度動ずる氣色もなく。

忠度　ヤア、尾籠なる蛆蟲めら、汝等如きに刃物は要らぬ。

〽云ふより太刀を拔放し、軒口へ刺し貫き。

茂次　ソレ。

〽双方一度に打つてかゝれば、襟髮摑んでづでんどう、疊蹴上げて投げ付くれば、組子は慌て群がるを、右往左往と。

トこれより鳴り物。疊の立廻り十分あつて皆々を追ひ込む。忠度、キッと見得。

〽ばらり〳〵と駈け散らし、相手なければ忠度卿、息を休める其うちも、油斷ならざる埴生の宿り、如何はして防がんと、心を配る時しもあれ、又も寄せ來る閧の聲、貝鉦太鼓責め太鼓、手に取るやうに聞ゆれば、忠度ハッと心付き。

トこの時遠寄せ烈しく、竹法螺を吹き立てる。これにて忠度、キッとなつて

忠度　さてこそ景高、大軍を催はし、重ねて向ふと覺えたり。戰場ならば敵の勢ひ、何萬騎にて圍むとも、打破りかけ惱ませ、譽れを顯はし見せんずもの。陣中に引返し、願ふ詠歌も腰折れの、望みも叶はず剰へ、さしも名高き忠度が、斯く茅屋に身を忍び、敵に圍まれやみ〳〵と、生捕られては後代まで、屍の恥辱名の穢れ。チエ、、口惜しや淺ましやなア。

〽拳を握り齒噛をなし、怒りの淚照る月に、氷をふらすが如くにて、痛はしくも亦道理なり。隙もあらせず表の方、寄せ來る軍兵むら立つ提灯、天地を照らし亂れ入るよと、見る所にさはなくして、討手の大將掛け烏帽子に、花田の大紋さはやかに、長袴の括りを解き、悠々然と立向ひ。

ト此うち花道より軍兵二人、高張を持ち、後より六彌太、侍ひ烏帽子、誂らへの龍神卷、短册の附きし櫻の枝を襟に差し、軍兵大勢附添ひ出て、花道にて、

六彌　武藏の國の住人、岡部の六彌太忠澄、忠度卿へ見參。

〽しづ〳〵と打通り、

トこなしあつて六彌太、軍兵、舞臺へ來る。

忠度　ナ、、なんと。

六彌　この度源平兩家の戰ひは、私しならぬ院宣を蒙り、

範頼義經詰り向へば、兩陣互ひに晴れ勝負。潔ざ軍はせずして、拔駈けせし梶原景高、卑怯の振舞ひ聞くに忍びず、この六彌太が詰りしは、義經の嚴命。

ト大小入りの合ひ方になる。

その仔細は先達て俊成卿へ、お賴みありし御詠歌のうち、「さゞ波や志賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな」右の御歌千載集に入りしかど、勅勘ある御身なれば、名を憚りて讀人知らずとなりし趣き、卽ち集に入つたる印の、短冊を御覽下さるべし。

〽山櫻の流し枝に、結び付けたる以前の短冊、恭々しく差出せば、忠度につこと打笑み給ひ。

ト六彌太、櫻の枝を出す。忠度取つて

忠度　我が詠歌を我が筆の、隱ひも仇花ならざる印、御芳志の山櫻ハ、ア、忝なし〳〵。敵味方と隔つれば、打捨て置かるべかりしを、思ひ寄らざる義經の仁心にて、歌人の數に加はり、和歌の譽れを殘す生涯の本望、死んでも忘れぬ喜びぞや。とても遁がれぬ身の不運、死すべき時に死なざれば、死にまさる恥ありと、名もなき愚人の手にかゝり、見苦しき最期せんかと、後悔せし折に幸ひ、武勇の聞え隱れなき、六彌太に生捕らるれば、忠度に耻辱はあらじ。サア、寄つて繩かけられよ。

〽御手を廻し待ち給へば。

六彌　こは心得ぬ御仰せ、某君の討手には參らず、敵味方の勝負は戰場、その時は互ひに時の運、容赦はござらぬ。但し梶原如き奴身を見かけ、拔駈けして手柄にせんと思ふやうな、六彌太と思ひ召さるゝか。ハヽヽヽヽ

〽嘲笑へば、忠度卿は理に服し。

忠度　實に〳〵これは誤まつたり、盛んなる時は制し、衰ふる時は制せらるゝ理り。如何なれば義經といひ、汝まで誠ある一言、心魂に徹し、今更返す詞なし。惜しからぬ命なれども、明けなば陣所へ立歸り、華々しき勝負せん。

六彌　その時望みは御邊が首、忠度卿は我れ討取らん。

忠度　必らず討たれよ。

六彌　おんでもない事。

トこの時鷄、諸所にて鳴く。

アレ〳〵、八聲の鷄も鳴き、明くる間近しと申せども、路次の狼藉覺束なし。陣所へ御供仕らん。ヤア、六彌太が家來ども、用意の馬引け。

軍兵　ハ、ア。

〽飾り立てたる黒の駒、御前に差寄する、辭するに及はず忠度卿、鬣摑んでゆらりと召せば、一間の内より菊の前、これなう暫しと簾出で給ふを、林は押止め立身で隠せば、岡部の六彌太それと悟つて、忠度卿の脱ぎかけ給ひし上着の袖、刀を拔いてフッツと切る。

ト此うち下座より軍兵大勢、黒の馬を引出し、忠度の前へ据ゑる。忠度これに乘る。ト奥より菊の前、走り出るを林、これを止めて、六彌太に見せぬ思ひ入れあつて、六彌太、馬に乘り――忠度の右の袖を刀にて切り落し思ひ入れ。

六彌　コレノヽ乳母。

〽云ふに拘り。

ト林、思ひ入れある。

ハテサテ不思議な顏せまい。總じて老女は嫗といひ、また姥とも呼ぶ。今宵忠度卿のお宿を申せし、御褒美にこれを遣はす。それとも若々しき錦の片袖、年寄が貰うて益なしと思はゞ、外に欲しがる方もあるべし。これもその人の筐と思へども、猶懷かしき袖の移り香、といふ歌の心。其方が耳に、菊の前、よく心得てお受け申せ。

〽差出せば、

林　ト林は右の袖を取り

こは冥加ない仕合せ。

ト林、袖を菊の前に遣る。

〽頂く右の片袖は、右の腕を落かたの、戰に討死し給ひし、後の哀れと知られけり、思ひの種や涙の種、仁義の種の六彌太が。

六彌　東雲近し。

〽急かんと、先に進んでたつか弓、云はぬは云ふに彌増る、暇乞ひさゝ泣顏の、見送る姿振返る、心の種の詠み歌も。

忠度　昔ながらの山櫻。

菊の　散り行く身にもさしかざす

忠度　流れの枝の短册も

六彌　世々に譽れを殘す種。

林　嘆きの種の

皆々　放れ際。

〽諫めを種と隔つれど、果てし涙の悲しみを、共になづみて耳を垂れ、嘶く聲も哀れ添ふ、駒の足取り諸手綱、引別れゆく曉の、空も名殘や惜むらん。

ト此うち忠度、馬の上に櫻を持ち思ひ入れ。菊の前、

林、愁ひのこなし。六彌太、忠度、ホツト思ひ入れ、持ちし櫻を鞭にして行きかゝる。双方見得、段切れにてよろしく

幕

大詰　　生田森熊谷陣屋の場

役名――九郎判官義經。石屋、白毫の彌陀六實ハ彌平兵衞宗淸。熊谷次郎直實。梶原平次景高。堤の軍次。經盛御臺、藤の方。熊谷妻、相模。

本舞臺、三間の間、本緣附き高二重。正面子持ち筋の襖。上の方、塗り骨障子屋體、軒口、鳩八の紋附きの幕を張り、下の方、竹矢來。よき所に櫻の大樹。この側に誂らへの制札を建て、いつもの所へ陣門を据ゑ、すべて熊谷陣屋の體よろしく、時の太鼓にて幕明く。

〽行く空も、いつかは冴えん須磨の月、平家は八島の浪に漂ひ、源氏は花の盛りと見る、中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構へ、要害嚴しき逆茂木の、中に若木の花盛り、八重九重も及びなき、それかあらぬか人每に、熊谷櫻といふぞかし、花折らせじと制札を、讀んで行く人讀めぬ人、一つ所に立集まり。

ト此うち花道より百姓四人、鋤鍬などを持ち出て來り、下手へ立止まり

百一　なんと皆の衆、見やしやれ。さても見事に咲いたではないか。

百二　成る程須磨の浦では、二本とないこの櫻、花も見事ぢやが、この制札も見事ぢやな。

百三　それ〳〵、辨慶どのゝ筆ぢやげなが、何だか一つも讀めぬわい。こりやマア、何といふ事ぢやぞいの。

百四　オヽ、それは義經さまが、この花を惜しみ給ひ、一枝切らば指一本切るべしとの、法度書ぢやわいの。

百一　ヤア、何ぢやと、花の代りに指を切るとは、こりや首切る下地であらうわいの。オヽ、怖やの怖やの。

百二　それ〳〵、見てゐるうちも、虎の尾を踏む心地がするわい。

百三　兎角觸らぬ神に祟りなしの譬へぢや。皆の衆、行かうではないか。

百四　イカサマ、それがようござらう。サア、ござれ〳〵。

〽花に嵐の癘病風、散り〳〵にこそ別れ行く。

ト百姓皆々、下の方へ入る。

〽はる〴〵と尋ねて爰へ熊谷が、妻の相模は子を思ひ、夫思ひの旅姿、陣屋の軒を爰彼處尋ねしが、幕に覺えの家の紋。

ト此うち花道より相模、旅なり好みの拵らへ、菅笠と杖を持ち出て來る。後より若黨、半纏股引、大小草鞋の拵らへにて附添ひ、中間、旅なりにて後より雨掛けを擔ぎ出て來り、よろしく花道にて止り、こなし。

若　アイヤ奥様、あれなる幕にお家の定紋、必定御陣所と相見えまする。

ト相模、舞臺の幕を見て

相模　オヽ、さうぢや、違ひない夫の御紋。

若黨　お出での趣き達しませう。

相模　ア、コレ、必らず麁忽のないやうに、案内しや。

若黨　ハツ。

〽陣所の門へ立寄つて

ト皆々舞臺へ來り

誰そ、頼みませう〳〵。

〽おとなふ聲に家の子なる、堤の軍次立出でゝ。

ト奥より軍次、衣裳上下、大小にて出て來り、門口へ向ひ

軍次　イヤナニ、何方よりの御案内なるや。主人事は他出いたしてござる。

相模　イヤナウ、苦しうない者ぢや。爰開けてたもいなう。

軍次　ハテ、聞き慣れし女中の聲。樣子尋ねし上の事。

ト門口開き相模を見て

ヤ、あなたは奥様でござりますか。

相模　ヤア、其方は軍次か。

軍次　これは思ひ掛けないお目見得。先づは御健勝にて恐悦至極。

相模　其方も無事で、めでたうござるわいの。

軍次　何はしかれ、先づ〳〵これへ。

相模　其方達は、次へ立つて休息しや。

家來　ハツ。

〽ハツと答へて立つて行く。

ト若黨、中間下手へ入る。

軍次　イザ、お通り遊ばされませう。

〽しづ〳〵と打通り。

ト合ひ方になり、相模、上へ通り、よろしく住ふ。軍次思ひ入れ、

軍次　して、奥樣には火急の御用なるや。遥々との御上京、遠路の所さぞお疲れでござりませう。

相模　イヤモウ、女子の足の道捗らず、爰まで來る途々も樣子を聞けば、いま戰ひの最中との噂。お上にもお變りなきや。小次郎は息災でゐやるかいなう。

軍次　殿樣始め若殿小次郎さまにも、御健勝にござりまする。

相模　それ聞いて落ちつきました。妾が參りし樣子、我が夫へ申し上げてたも。

軍次　アイヤ、殿樣には今日、お志しの事ありとて御廟參。御歸陣の後、折を見合せ。

相模　軍次、其方よいやうに。

軍次　委細畏まつてござりまする。

〽挨拶とり〳〵する所へ、敦盛の母藤の局、虎口の難を遁がれ來て、こけつ轉びつ花の蔭、陣屋を目懸けて走りつく。

トバタ〳〵にて花道より藤の局、衣裳裲襠の上へ抱へを締め、懷劍を差し走り出て來り、門口へ來り、

藤の　イヤナウ、後より追手のかゝる者。影を隱して給はれや。

〽けはしき體に軍次は立つて。

軍次　尤もなる事ながら、御覽の通り陣屋の儀なれば、女儀は叶はぬ。外をお頼みなされませ。

相模　ア、コレ軍次、賤しからざる詞の端、見ますれば旅のお方さうな。誰れしも女子は相身互ひ。マア〳〵、お入りなされませ。

ト相模陣門を開き、藤の局を見て

あなたはどうやら。

トこれにて藤の局も相模を見て

藤の　そもじは慥か。

相模　藤の方さま。

ト兩人顏見合はせ、思ひ入れあつて

藤の　さう云ふ其方は、相模ぢやないか。

相模　どうしてこれへ。思ひ掛けない。

藤の　絶えて久しき

相模　この目見得。

藤の　其方も無事で

相模　あなたもお健で

藤の　廻り逢うたも
相模　盡きせぬ御緣で
兩人　あつたなア。
相模　先づ〳〵あれへ。
〽先づ〳〵あれへと云ひければ、陣屋の内へ打通る。
　トこれにて相模藤の方、手を取り上の方へ誘なふ。
相模　思ひも寄らぬあなたのお入り。コレ、軍次、其方は次へナ。
軍次　ハツ、然らば奥樣、また後程お目見得、仕るでござりませう。
〽軍次は立つて入りにけり、相模はやがて手をつかへ。
　ト軍次こなしあつて奥へ入る。相模、思ひ入れあつて
相模　誠に一昔は夢と申しまする。大内に御座遊ばす時、勤番の武士、佐竹次郎と馴染み、御所を拔け出て東へ下り、あなた樣のお身の上を承はれば、御懷胎のお身ながらも平家の御家門、參議經盛さま方へ御緣づき給ふとの噂。その折世盛りの平家、御威勢は益々、蔭ながら喜びましたに、この度の源平の戰ひ、御一門も散り〳〵と聞くにつけ、この藤の方さまは何と遊ばした、どう遊ばしたと、一人苦にして居りましたに、マア、御機嫌のよいお顔を見て、おめでたい。オヽ、嬉しい事でござります。
藤の　オヽ、其方も無事でめでたいわいの。さうして懷胎で出やつたが、その時の子は姫御前か男子か。息災で育てゝゐやるか。
〽ちよつと寄つても女子同志、積る言の葉繰返し、嬉し涙の種ぞかし、藤の方は涙ぐみ。
世の盛衰とは云ひながら、その時自らが孕み落したは、無官の太夫敦盛とて、器量發明揃うた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の浪に漂ひ、我れのみ殘る憂き難儀、淺ましの身の上ぢやわいなう。
〽かこち給へば。
相模　お道理でござりまする。以前の御恩の報じ時、連合ひに語り、御身の片付け後世の營み、お心任せに致しませう。以前は佐竹次郎と申し、北面同樣な武士、只今では武藏の國の住人、私の黨の旗頭、熊谷の次郎直實と、人も知つたる侍ひでござりまする。
〽と聞くより御臺は。
藤の　ヤア、そんなら其方の連合ひ佐竹次郎、今では熊谷の次郎と云やるか。
相模　ハイ、左樣でござりまする。

藤の　すりやアノ、熊谷次郎は其方の夫よな。
〽ハッと吐胸の氣を鎭め。
なんと相模、以前大内にて不義顯はれ、佐竹次郎と諸共に、禁獄させよとの院宣、自らが申し宥め、御所の御門を夜のうちに、落してやつたを覺えてか。
相模　成る程、その時の御恩、なんの忘れませうぞいな。
藤の　ムウ、その恩を忘れずば、助太刀して、討たしてたも。
相模　そりや又誰れを。
藤の　熊谷の次郎直實を。
相模　エ、、そりや又なんのお恨みで。
藤の　最前も話した通り、院の御所の御胤、無官の太夫敦盛を、其方が夫、熊谷が討つたわいなア。
相模　そりやマア眞實でござりますか。
藤の　そんなら其方は、何にも知らぬか。
相模　サア、遙々と東より、今來て今の物語り。
〽聞いて吐胸の誠しからず。
追つけ夫が歸り次第、様子を尋ねるその間、暫らくお扣へ下さりませ。
〽詞を盡し理を盡し、宥める折に表の方。
呼び　梶原樣のお入り。

　トこれにて兩人思ひ入れ。
藤の　ナニ、梶原が來りしとや。
　ト藤の方立ちかゝる。相模、止めて
相模　ア、モシ、邪智深き梶原平次、見咎められては御身の御難儀。暫らく奥にて御休息。
藤の　成る程、さりながら、今にも熊谷歸りなば
相模　とくと實否を糺した上
藤の　我が子の敵と極まらば
相模　夫ながら主人の仇。
藤の　必らず討つぞや。
相模　御念に及ばぬ。
藤の　そんなら相模。
相模　お局樣。
藤の　然らばキッと。
相模　ハテ、先づお入りあられませう。
〽御臺は心奥の間へ、伴ひてこそ入りにける。
　トこなしあつて相模先に、藤の方附いて障子屋體へ入る。
〽程なく入り來る梶原平次景高、さも横柄に座に着けば、堤の軍次立出でゝ。

ト時の太鼓になり、花道より景高、着込みの形、立烏帽子にて出て來り、二重の上の方に住ふ。此うち奥より軍次出て來り、下の方へ扣へろ。

景高　梶原平次景高、所用あつて推參。直實どのは居召さるか。

軍次　今日は主人直實、志しあつて廟參。御用あらば某へ、仰せ置かれ下さりませう。

景高　ナニ、熊谷どのは他行とな。ヤア／＼家來ども、石屋の親仁め、引立て參れ。

ト花道揚げ幕の内にて捕り手皆々

捕手　ハーア。

〽ハ、と答へて科もなき、白毫の彌陀六を、平次が前へ引据ゆれば。

ト時の太鼓になり、彌陀六、白髮鬘、好みの拵らへにて繩にかゝり、これを軍兵引立て出て、直ぐに舞臺へ來り

下に居らう。

ト彌陀六を眞中へ引据ゑる。こなしあつて

景高　ヤイ、なまくら親仁め。おのれ、何者に頼まれて、敦盛が石塔建てたぞ。平家は殘らず西海へぼッ下し、誅らふべき相手なければ、察するところ源氏方の二股武士が、頼みしに違ひはあるまい。サア、眞直に白状、僞はるに於ては、脊を斷割り鉛の熱湯、鎌倉どのの御威勢で、云はさにや置かぬ。

〽嚇しかけても正直一遍。

彌陀　でもさても御無理な御詮議。先程も申した通り、石塔の誂らへ手は敦盛の幽靈。五輪の事はさて置いて、一厘も手附けは取らず、其まゝ石塔の喰逃げ。せめて人魂でも手附けに取つたら、小提灯の代りに致しませうに、冥途へ書出しはやられず、ほんのこれがそんしやう菩提、有やうに申し上げ、願以此功德施一切、この通りでござります。

〽とりしめのなき返答に。

軍次　何仰しやつても糠に釘。梶原どのには、先づ御休息遊ばされませう。

〽軍次が詞に平次は惡智惠。

景高　大方石塔の誂らへ手も大概合點。熊谷歸らば三つ金輪にて詮議せん。ソレ、者ども、其奴を引立てい。

皆々　ハヽア。

景高　軍次案內。

皆々　立たう。

〽石屋の親仁を無理矢理に、引立て奥へ連れて行く。

ト時の太鼓になり、景高を先に軍次、奥へ入る。彌陀六は軍兵に引立てられ、上の方へ入る。

〽日もはや西に傾きしに、夫の歸りの遲さよと、待つ間程なく。

呼び　旦那のお歸り。

〽熊谷次郎直實、花の盛りの敦盛を、討つて無常を悟りしか、流石に猛き武士も、物の哀れを今ぞ知る、思ひを胸に立歸る。

ト此うち奥より相模出て來り、こなしあつて、花道より直實、衣裳上下、大小、好みの拵らへ、物思ひの體にて出て來り、ズツと内へ入る。相模を見てキツと思ひ入れ。此うち軍次出て來り

〽妻の相模を尻目にかけて座に直れば、軍次はやがて覆ひになり。

ト直實、二重よき所へゐる。軍次、相模は下の方へ扣へ

軍次　先達て平次景高どの、何か詮議の筋あるとて、御影の石屋を引連れお出であり、奥の一間に、お待ちなされてござります。

〽委細を述ぶれば。

直實　ムウ、詮議とは何事やらん。

ト思ひ入れあつて

イヤ、其方は一獻を催ほし、梶原どのをもてなし申せ。早く早く。

軍次　畏まつてござりまする。

ト軍次、立ちにかゝるを、相模、行くなと袖を引き、こなし、熊谷、思ひ入れ。

直實　ハテサテ、何を猶豫いたす。次へ立て。

軍次　ハツ。

〽主の詞に是非なくも、相模と顏を見合して、心を殘し入りにけり。

ト軍次、相模が留めるを振り切り、思ひ入れあつて奥へ入る。

〽後見送りて熊谷は。

ト合ひ方になり、相模、こなしあつて煙草盆を持ち、わざ／＼直實の前へ置く。直實相模を見て思ひ入れ。

直實　コリヤ女房、其方は爰へ何しに參つた。國許出立の節、陣中へは使りも無用と、堅く云ひつけ置いたるに、

詞を背くといひ、剰さへ女の身で陣中へ來る事、不屆き至極の女めが。

〽不興の體に相模はもぢ〳〵。

相模　其お叱りを存じながら、どうか斯うかと案じるは小次郎が初陣、一里行たら樣子が知れうか、五里來たら便りがあらうかと、七里歩み、十里歩み、百里餘りの道をツイ都まで、ホヽヽヽ、オヽ辛氣。

〽上つて聞けば一の谷とやらで、いま合戰の最中と、取り〴〵の噂ゆゑ。

子に惹かさるゝは親の因果、御料簡下さりませ。マア、さうして小次郎は、息災で居りますかえ。

〽問へば熊谷詞を荒らげ。

直實　戰場へ赴くからは命は無きもの。健固を尋ぬる未練な根性、もし討死したら何とする。

相模　イヽエイナア、小次郎が初陣に、よき大將と引組んで、討死でも致したら、大抵嬉しい事ではござりませぬ。

〽夫の心に隨ひし、健氣な詞に顏色直し。

直實　オヽ、小次郎が手柄といつぱ、平山の武者所と爭ひ、拔駈けの功名。軍門に入りての働らき。手疵少々負ひたれども、末代までの家の譽れ。

相模　エヽ、して、その手疵は、急所ではござりませぬか。

直實　ソレ、まだ手疵を悔む顏付き。もし急所ならば悲しいか。

相模　イヽエ、なんのいなア。かすり疵でも負ふ程の、働らきは出來したと、嬉しさの餘りお尋ね。その時お前も小次郎と、一緒にお出でなされましたか。

直實　オヽサ、危ふしと見るよりも、軍門に駈け入り、小次郎を無理に引立て、小脇にひん抱き、我が陣屋へ連れ歸り、また某はその日の軍に、搦め手の大將、無官の大夫敦盛の首討つて、比類なき功名せり。

相模　エヽ。

〽話にさてはと驚ろく相模、後に聞きゐる御臺所。

ト相模悔り思ひ入れ。此以前より藤の方後に窺ひゐてこの時懷劍を拔き、

藤の　我が子の敵、熊谷覺悟。

〽熊谷覺悟と突掛くるを、しつかと押へて、

ト藤の方、突いてかゝるを直實懷劍を扇にて打ち落し藤の方を引付けて

直實　ヤア、敵呼はり、何奴なるぞ。

文政十三年八月市村座上演

二世坂東簑助の直實　岩井粂三郎の相模

〽引寄するを女房取付き。
相模　アヽモシ、聊爾なされな。あなたは藤のお局さま。
〽聞くより直實びつくりし。
直實　ナニ、藤の局とや。
ト思ひ入れあつて、直實、藤の方を引起し、顔を見て
恂り思ひ入れ、
ヤア、誠に藤の御方、思ひがけなき御對面。
〽飛び退き敬ひ奉れば。
ト直實思ひ入れあつて、藤の方の手を持ち、上座へ直
し、直實下手へ來て、懐劍を袖にて拭ひ、持ちかへて
差出し、平伏する。
藤の　コリヤ熊谷、如何に軍の習ひぢやとて、年端も行か
ぬ若武者を、よう酷たらしう首討つたなア。サア、約束
ぢや、相模、助太刀して夫を討たしや。
相模　サア、その儀は。
藤の　最前云ひしは僞りか。
相模　さらではなけれど、
藤の　そんなら討たしや。
相模　サア。
藤の　サア。

兩人　サア／＼／＼。
藤の　ナ、なんと。
〽なんと／＼と刀押取り、せりつけ給へば。
相模　アイ。
〽あいと返事も胸に迫り。
コレ、直實どの、敦盛さまは院の御胤と知りながら、ど
う心得て討たしやんした。樣子があらう、その譯は。
〽云ふも切なきオロ／＼涙。
直實　ヤア、愚か／＼、この度の戰ひ、敵と目指すは安德
君、それに隨ふ平家の一門、敦盛はさて置き誰れ彼れと、
鎬を削るに容赦があらうか。
ト思ひ入れあつて
イヤナニ藤の御方、戰場の儀は是非なしと、御諦め下さ
るべし。その日の軍のあらましと、敦盛卿を討つたる次
第、お物語り仕らん。
〽物語らんと座を構へ。
さても去ぬる六日の夜、はや東雲と明くる頃、一二を爭
ひ拔駈けの、平山熊谷討取れと、切つて出でたる平家の
軍勢。
〽中に一際勝れし緋縅。

さしもの平山あしらひかね。
〽濱邊を指して逃げ出す。
ハテ、健氣なる若武者や、逃げる敵に目なかけそ。熊谷これに扣へたり。返せ戻せ、オヽイ〳〵。
〽扇をもつて打招けば、駒の頭を立て直し、浪の打ち物二打ち三打ち、いざや組まんと馬上ながらむんづと組み、兩馬が間に撞と落つ。
藤の　ヤヽ、なんと、その若武者を組み敷いてか。
直實　されば、御顏よく〳〵見奉れば、鐵漿黑々と細眉に、年はいざよふ我が子の年配、定めて兩親在まさん、その嘆きは如何ばかりと、子を持つたる身の思ひの餘り。
〽上帶取つて引起し、塵打拂ひ。
相模　勸めさしやんしたか。そんなら討ち奉る、お心ではなかつたの。
直實　サア、はや落ち給へと勸むれど、一旦敵に組み敷かれ、なに面目に長らへん。はや首取れよ熊谷と。
藤の　ナニ首取れと云うたかいの。健氣な事を云やつたなう。
直實　サア、その仰せにいとゞ猶、淚は胸にせきあへず、

まッこの通りに我が子の小次郎、敵に組まれて命や捨てん、淺ましきは武士の、習ひと太刀も拔き兼ねしに。
〽逃げ去つたる平山が、後の山より聲高く。
熊谷こそ敦盛を、組み敷きながら助くるは、二心に極まりしと。
〽呼はる聲々。
エヽ是非もなや、仰せ置かるゝ事あらば、傳へ參らせんと申し上ぐれば。
〽御淚を浮め給ひ。
父は波濤へ赴むき給ひ、心にかゝるは母人の事。昨日に變る雲井の空、定めなき世ノ中を、如何過ぎ行き給ふらん、未來の迷ひこれ一つ、熊谷賴むの御一言、是非に及ばず御首を、討ち奉つてござりまする。
〽話すうちより藤の局。
藤の　ナウ、さほど母をば思ふなら經盛どのゝ詞につき、なぜ都へは身を隱さず。
〽一の谷へは向ひしぞ。
健氣に云うたその時は、母もとも〳〵喜んで、勸めて遣りしが可哀やなア。
〽覺悟の上も今更に、胸も迫りて悲しやと、口說き嘆か

せ給ふにぞ、御尤もとは思へども、相模はわざと聲高まし。

相模　イヤ申しお局樣、御一門殘らず八島の浦へ、落ち給ふ中へ踏み止まり、討死なされた敦盛さま、數萬騎に勝れたる功名。但し逃げ延び身を隱し、人の笑ひを受け給ふが、あなたのお氣では嬉しいか。御未練な、御卑怯でござりませうが。

〽諫めに熊谷。

直實　オヽ、出來した〳〵。コリヤ女房、御臺所この所に御座あつてはお爲にならず、片時も早く何方へも御供せよ。サア、早く行け〳〵。我れも敦盛卿の首、實檢に供へん。軍次は居らぬか。早參れ。

〽呼はる聲と諸ともに、一間へこそは入相の。

ト直實思ひ入れあつて奧へ入る。

〽日も早西に暮合ひ頃、陣屋々々の灯火に、いとゞ悲しさ藤の方。

ト時の鐘。

藤の　アヽ、思ひ出せば不便やなア。臨終の際も肌身離さず、持つたるはこの青葉の笛。我れと我が身の石塔を、建てゝもらうた價にと、渡し置いたるこの笛の、我が手に入りしも親子の緣。

ト藤の方、懷より袱紗包みの誂らへの笛を出し、思ひ入れ。

〽魂魄この世にあるならば。

何ゆゑ母には見えぬぞ。

〽聞えぬ我が子や。

懷しのこの笛や。

〽肌に着け身に添へて、盡せぬ思ひ遣る瀨なや。

ト笛を持ち、いろ〳〵愁ひの思ひ入れ。

相模　コレ申し、その笛がよいお形見。經陀羅尼より笛の音を、お手向けなさるが直ぐに追善。敦盛さまのお聲をば、聞くと思うて遊ばしませ。

〽勸めに隨ひ藤の方、淚にしめす歌口も、親子の緣の纜にや、障子に映る陽炎の、姿は慥か敦盛卿、藤の方一目見るより。

ト藤の方、後向きになり、右の笛を吹く。寢鳥になる。上の方、障子屋體の內より敦盛の姿障子に映る。兩人見て

ヤヽ、障子に映るあの影は、

藤の　慥かに我が子、懷かしや敦盛。

〽駈け寄り給ふを相模は押留め。

ト藤の方を相模止めて、

相模　香の烟りに姿を顯はし、實方は死して再び都へ還りしも、一念のなす所、あるまい事にはあらねども、訝かしき障子の影。殊に親子は一世と申せば、御對面遊ばさば、お姿は消え失せん。

藤の　イヤ、四十九日がその間、魂ひ宙宇に迷ふと聞く。せめては逢うて只一言。

〽振り放し／＼、障子はらりと明け給へば、姿は見えず緋縅の、鎧ばかりぞ殘りける。

ト藤の方、相模の留めるを振り切り、上の屋體の障子を明ける。內には鎧櫃の上に緋縅の鎧兜飾りある。兩人見て恟り。

〽はつとばかりに藤の方、相模も共に取付いて。

藤の　さては鎧の影なりしか。

相模　戀しと思ふ心から、お姿と見えましたか。

藤の　相模。

相模　お局樣。

兩人　ハア。

〽共に焦れて正體も、なき口説くこそ哀れなれ、時刻移ると次郎直實、首桶携へ立出づれば、相模は夫の袂を扣へ。

ト藤の方、相模、泣き落し愁ひのこなし。此うち奧より直實好みの形にて首桶を抱へて出る。相模これを見てこなしあつて

相模　コレ申し熊谷どの、これが親子の御一生のお別れ、せめてお首になりともお暇乞ひを。

〽藤の局も淚ながら。

藤の　ナウ熊谷、其方も子のある身ではないか。野山に猛き獸さへ、子を悲しまぬはなきものを、親の思ひを辨まへて、情に一目見せてたも。

〽縋り嘆かせ給へども。

直實　イヤ、實檢に供へぬうち、內見は叶ひませぬぞ。

〽刎ねのけ突退け行く所に、後の方に聲あつて。

ト直實の袖を兩人見て縋るを、直實振り切り行かんとする。この時奧にて

義經　ヤア／＼熊谷、敦盛の首持參に及ばず、義經これにて實檢せん。

〽一間をさつと押開き、立出で給ふ御大將。

ト此うち上の屋體の障子引拔き、內に義經、誂らへの

緋縅の鎧、陣立て好みの拵へ、この上に狩衣を着て、太刀を佩き、金烏帽子を冠り、中啓を持ちゐる。左右に陣立ての拵らへの武者二人附添ひゐる。

直實　ハ、ハツ。

〽はつとばかりに次郎直實、思ひ寄らねば女房も、藤の局も諸共に、呆れながらに平伏す、義經席に着き給ひ。

ト　これにて直實二重下手に住ふ。相模は藤の局を連れ、平舞臺の上の方に扣へゐる。此うち武者、敷皮を敷き、床几を直す。これにて義經、上の方に住ふ。

義經　ヤア直實、首實檢延引といひ、軍中にて暇を願む汝が心底訝かしく、密かに來つて最前より、始終の樣子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首、實檢せん。

〽仰せを聞くより熊谷は、はつと答へて走り出で、若木の櫻に立てかけありし、制札引拔き恐れ氣なく、義經の御前に差置き。

ト　直實、下手の櫻の前に建てし制札を引拔き、義經の前へ首桶と一緒に差出し、思ひ入れあつて

直實　先つ頃堀川の御所にて、六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短册、この熊谷には敦盛が首取れよと、辨慶執筆のこの制札、即ち札の面の如く、御諚に任せ、敦盛の首打取つたり。御實檢下さるべし。

〽蓋押明くれば。

ト　直實、首桶の蓋を明ける。誂らへの首を相模見て

相模　ヤア、その首は。

〽駈け寄る女房を取つて引寄せ、御臺に我が子を心も空、立寄り給へば首を覆ひ。

ト　相模、首桶の側へ寄るを、直實矢庭に引付け押へる。藤の方、見ようとするを扇にて首を覆ひ

直實　イヤサ、實檢に供へし後は、お目にかけるこの首。お騷ぎあるな。

〽熊谷に諫められ、流石女のはしたなう、寄るも寄られず悲しさの、千々に碎くる物思ひ、次郎直實謹んで。

ト　此うち相模を突き放し、藤の方へ呑み込ませる思ひ入れ。

敦盛卿は院の御胤、此花江南の所無は即ち南面の嫩、一枝を切らば一指を切るべしと、花によそへし制札の面、察し申して討つたるこの首、御賢慮に叶ひしか。但し直實誤まりしか。御批判如何に。

〽と言上す、義經欣然と實檢在し。

ト　直實首を差出す。義經、思ひ入れあつて中啓を開き、

骨の間よりよく見てこなし。

義經　ホヽウ、花を惜しむ義經が心を察し、よくも討つたり直實。敦盛に紛れなきその首級。ソレ、由縁の人もあるべし。見せて名殘りを惜しませよ。

〽仰せに直實。

直實　コリヤ女房、敦盛の首、藤の方へお目にかけよ。

相模　アイ。

〽あいとばかりに女房は、敢へなき首を手に取上げ、見るも涙に塞がりて、替る我が子の死顔に、胸はせきあげ身も顫はれ、持つたる首の搖ぐのを、うなづくやうに思はれて。

門出の時に振り返り、につこと笑うた面差が、あると思へば可哀さ不便さ。

〽聲さへ咽喉に詰まらせて。

申し藤の方さま、お歎きあつた敦盛さまのこの首。

ト相模、首を藤の方に見せる。藤の方見て悄り。

藤の　ヤヽ、これは。

相模　サイナア、コレ申し、よう御覽遊ばして、お恨み晴らし、よい首ぢやと褒めておやりなされて下さりませ。この首はナ、わたしがお館で忍び逢ひ、懷胎ながら東へ下り、産み落せしはコレこの敦盛さま、その節あなたも御懷胎、誕生ありし其お子が、無官の太夫敦盛さま。兩方ながらお腹に持ち。

〽國を隔てゝ十六年、音信不通の主從が、お役に立つたも因果かいなア。

せめて最期は潔う。

〽死になされたかと恨めしげに、問へど夫は瞬きも、せん方涙御前を恐れ、餘所に云ひなす詞さへ、泣く音血を吐く思ひなり、藤の方は御涙曇り。

藤の　ナウ相模、今の今まで我が子ぞと、思ひの外な熊谷の情。其方はさぞや悲しからう。斯うした事とは露知らず、敵を取らうの切らうのと、云うた詞が耻かしい。我が子の爲には命の親。エヽ、忝ないぞや。これにつけても訝かしきはこの濱の石塔。敦盛の靈が建てさせたとの噂といひ、秘藏せし青葉の笛、石屋の娘が貰ひしとて我が手へ入り、最前その笛吹いた時、あの障子に映りし影は、慥かに我が子と思ひしが、詞も交さず消え失せしは。

義經　イヤ、その笛の音を聞いて驅け出せし敦盛の幽靈、人目ありと引止め、障子越しの面影は、この義經が志

し。
〽聞いて御臺は我が子の無事、悟りながらも箒木の、ありとは見えて隔てられ、又も涙に暮れ給ふ。折節風に誘はれて、耳を貫く法螺貝の、音かまびすしく聞ゆれば、義經は勇み立ち。

トこの時、遠寄せを打込み、義經立ち上がりキッとなつて

ヤア／＼熊谷、着到知らせの法螺の音。急ぎ出陣の用意用意。

直實　ハ、ハッ。

〽仰せに熊谷畏り、急ぎ一間へ入りにけり。

ト直實思ひ入れあつて奥へ入る。

〽最前より樣子聞きゐる梶原平次、一間の内より踊り出で。

ト此うち上の方より以前の景高出て來り

景高　聞いた／＼。斯くあらんと思ひしゆゑ、石屋めが詮議に事寄せ窺ふところ、義經熊谷心を合せ、敦盛を助けし段々、鎌倉へ注進する。待つて居れ。

〽云ひ捨て駈出す後より、發矢と打つたる手裏劍は、骨を貫く鋼鐵の石鑿。うんとばかりに息絶ゆる。

ト景高、花道へ走り行く。よき程に上の方にエイと聲する。これにて石鑿、景高に立つ。景高苦しみ倒れる。

相模　これは。

〽すは何者と云ふうちに立出づる。

ト上の方、柴垣を押分け、彌陀六、出て向うを見て思ひ入れ。

〽石屋の親仁。

ト彌陀六、氣を替へ、柴垣の影より腰を曲げ出て來り

彌陀　お前方の邪魔になる、石こつぱを捨てゝ上げました。

ト思ひ入れあつて

さて幽靈の御講釋、承はつて先づは安堵、御用もござりませねば、もうお暇申しませう。

〽もうお暇と立ち行くを。

ト彌陀六、花道中程まで行くと、義經見て

義經　親仁待て。

彌陀　へイ、御用でござりますか。

ト舞臺へ戻り、下の方へ扣へる。

義經　其方が名は。

彌陀　へイ。

侍ひ　申し上げい。

彌陀　御影の里に年久しう住む、白毫の彌陀六といふ、親仁めでござりまする。

義經　ウム。用事はない。立て〳〵。

彌陀　有り難う存じまする。

ト彌陀六、花道へ行く。義經こなしあつて

義經　彌平兵衞宗淸待て。

ト彌陀六これに構はず行きかける。義經、陣扇にて侍ひへ思ひ入れ。侍ひ兩人は呑み込み、ツカ〳〵と來り、彌陀六を中に挾み、キッとなつて

侍ひ　君の上意。

兩人　下に居らう。

ト兩人にて彌陀六の手を取り引据ゑる。

彌六　これは又とつけもない。この彌陀六を、なんとなされます。

ト義經、思ひ入れあつて

義經　ホヽウ、誠や諺にも、至つて憎いと悲しいと嬉しいのこの三つは、人間一生忘れずといふ。その昔母常磐の懐に抱かれ、伏見の里にて雪に凍へしを、汝が情を以て親子四人、助かりしその嬉しさ。その時は我れ三歲なれども、面影は目先に殘り、見覺えのある眉間の黒子、隱しても隱されまじ。重盛卒去のその後は、行く〳〵知れずと聞きつるが、ハテ、堅固でありしか。滿足々々。

〽星をさしたる一言に。

彌陀　ハテ、恐ろしい眼力ぢやなア。

〽支ゆる軍兵刎ね退け〳〵、ツカ〳〵と立寄り義經の顏、穴の明くほど打眺め。

ト彌陀六は軍兵を左右へ刎ね退け、ツカ〳〵と舞臺へ來り、階段へ足を踏み掛け、義經をキッと見て、其ままドッカと座し

老子は生れながらに敏く、莊子は三歲にしてよく人相を知ると聞きしが、斯く彌平兵衞宗淸と見られた上からは、エヽ、義經どの、その時こなたを見遁がさずば、いま平家の立籠る、鐵拐ケ峯鵯越を、攻め落す大將はあるまいあるまい。また池殿と云ひ合せ、賴朝を助けずば、平家は今に榮えんもの。エヽ、宗淸が一生の不覺。これにつけても小松どの、御臨終の折から、平家の運命末危ふし、汝武門を遁がれ、身を隱し、一門の跡弔へと、唐土育王山へ祠堂金と僞はり、三千兩の黄金と、忘れ形見の姫君一人預かり、御影の里へ身退き、平家の一門、先立ち給ふ御方々の石碑、播州一國那智高野、近國他國に建て置き

し、施主の知れざる石塔は、皆彌平兵衛宗清が、涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔誂らへに見えし時も、御幼少にてお別れ申せしゆゑ、お顔はしかと見覺えねども、心得ぬ風俗は、慥かに平家の御公達ならんと思ふより、快く請合ひしが、さては命に替りし小次郎が、菩提の爲にてありけるか。エヽ、如何に天命歸すればとて、我が助けし頼朝義經、この兩人が軍配にて、平家の一門御公達、一時に亡ぶるとは、ハア、。

〽是非もなき運命やな。

平家の爲には、獅子身中の蟲とは我が事。さぞや御一門陪臣の魂魄、我れを恨みん、淺ましやなア。

〽或ひは悔み或ひは怒り、涙は瀧を爭へり、元より敏き大將義經

義經　ヤア〱熊谷、申し付けた品、これへ持て。

直實　ハア、。

〽はつと答へて次郎直實、出陣の扮裝と、好む所の大あらめ、鍬形の兜を着し、家來に持たせし鎧櫃、御目通りに直し置き。

ト此うち直實、甲冑好みの拵らへにて出て來り、上の方より侍ひ二人、鎧櫃を持ち出て、眞中に置いて入る。

御諚の品、持參仕つてござりまする。

義經　コリヤ親仁、其方が大切に育てる娘へ、この鎧櫃を屆けてくれよ。コリヤ彌陀六。

彌六　ナニ、彌陀六とは。

義經　宗清なれば平家の餘類、源氏の大將が頼むべき謂れなし。

彌陀　面白い。彌陀六めが頼まれて進ぜませう。シタガ、娘へは不相應な下され物。マア、内は何でござりまする。改めて見ませう。

〽蓋押明くれば敦盛卿。

ト彌陀六、何心なく鎧櫃の蓋を明ける。中より敦盛の吹替出かける。藤の方、見て恟り。彌陀六も恟り。

藤の　ヤア、其方は敦盛。

〽駈寄り給へば蓋びつしやり。

ト寄らうとする。彌陀六、蓋を締め

彌陀　イヤ、この内には何にもない。オヽ、何もない〱。これでちつとは蟲が落ちついた。ムヽハヽヽヽヽ。

ト思ひ入れあつて

コレ、直實どの、貴殿へのお禮は、コレ〱この制札、一枝を切らば一指を切つて。エヽ、忝ない。

〽云ふに相模は夫に向ひ。

相模　ア丶コレ、我が子の死んだも忠義と聞けば、もう諦めてゐながらも、源平と別れし中、どうしてマア敦盛さまと、小次郎と取替やうが。

直實　ハテ、最前も話した通り、手負ひと僞はり、無理に小脇に引ッ挾み、連れ歸つたが敦盛卿、また平山を追ひ駈け出たを、呼び返して、首打つたが小次郎サ。知れた事を。

〽尖りなる、話に相模は咽び入り。

相模　エ丶、胴慾な熊谷どの、こなた一人の子かいなア。逢はう〳〵と樂しんで、百里二百里來たものを、とつくりと譯も云はず、首打つたが小次郎サ、知れた事と沒義道に、叱るばかりが手柄でも。

〽ござんすまいと聲を上げ、泣き口説くこそ道理なれ。心を汲んで御大將。

義經　ヤア熊谷、西國出陣の時移る。用意は如何に。

直實　ハッ、恐れながら先達て、願ひ上げし暇の一件、斯くの通りにござりまする。

〽兜を取れば、切り拂うたる有髮の僧、義經も感心し。

ト此うち熊谷、兜を脱ぎ、坊主鬘になる。義經見て

義經　ホ丶ウ、さもあらん。それ武士の功名譽を望むも、子孫に傳へん家の面目。その傳ふべき子を先立て、軍に立たん望みは。尤も〳〵。コリヤ熊谷、願ひに任せ、暇を得さするぞよ。汝堅固に出家を遂げ、父義朝や母常磐の、回向を頼む。

〽と親しき御諚。

直實　ハ丶ハッ。

〽有り難しと立ち上がり、上帶を引解き、鎧を脱げば袈裟白無垢、相模は見るより。

ト直實、上帶を解き鎧を脱ぐ。下に白無垢の着附け、墨の袈裟を掛けゐる。相模、思ひ入れあつて

相模　ヤア、これは。

直實　ヤア、何驚ろく女房。大將のお情にて、軍半ばに願ひの通り、御暇をば賜はりし我が本懷。熊谷が向ふは西方彌陀の國。倅小次郎が拔駈けしたる九品蓮臺。一つ蓮の縁を結び、今より我が名も、蓮生と改めん。一念彌陀佛即滅無量罪。十六年は一昔、ア丶、夢であつたなア。

〽ほろりとこぼす涙の露、柊に置く初雪の、日影に融ける風情なり。

相模　我が子の罪障消滅の、加勢は共に。

〽切つたる黒髪、詞はなくて御大將、藤の局も諸共に、御涙にぞ暮れ給ふ。

ト相模、懐劍にて髪を切りて出す。皆々愁ひの思ひ入れ。

〽長居は無益と彌陀六は、鎧櫃に連尺を、かけた思案の締め括り。

ト鎧櫃へ連尺をかけ、彌陀六これを背負ひ。思ひ入れあつて、

彌陀　コレ／＼＼／＼義經どの、もし又敦盛生きかへり、平家の殘黨かり集め、恩を仇にて返さば如何に。

義經　オヽ、それこそは義經や、兄頼朝が助かりて、仇を報いしその如く、天運次第に恨みを受けん。

直實　實にその時はこの熊谷、浮世を捨てゝ不隨者と、源平兩家に由縁はなし。

〽互ひに爭ふ修羅道の。

苦患を助ける

〽向向の役。

彌陀　この彌陀六は折を得て、また宗清と心の還俗。

直實　我れは心も墨染に、黒谷の法然を師と頼み、敎へを受けん、君には益々御安泰。

〽お暇申すと夫婦連れ、石屋は藤のお局を、伴ひ出づる陣屋の軒。

ト直實二重より下り、相模と共に下の方、彌陀六は藤の方を伴ひ上の方、義經二重眞中に立ち、皆々よろしく思ひ入れあつて

藤相　御縁があらば。

〽と女子同士。

直彌　命があらば。

〽と男同士。

義經　堅固で暮らせ。

〽御上意に、有り難涙名殘りの涙、また思ひ出す小次郎が、首を手づから御大將。

ト義經、小次郎が切り首を持ち思ひ入れ。

この須磨寺に取納め、末世末代敦盛と、その名は朽ちぬ黄金ざね。

彌陀　武藏坊が制札も

藤の　花を惜しめど花よりも

相模　惜しき子を捨て、武士を捨て

直實　住み所さへ定めなき

義經　有爲轉變の

皆々　世の中ぢやなア。

〽互ひに見合はす顔と顔、さらば〳〵とおさらばの、聲も涙にかき曇り、別れてこそは出でゝ行く。

ト彌陀六と藤の方は上の方、熊谷相模と入れかはり、皆々よろしく引ッ張りの見得、段切れにて、

幕

一谷嫩軍記（終り）

馬の足立つほどになりければ、弓矢をば投げ捨て、太刀を拔き、額にあて、喚いて上り給ひけるを、熊谷待受けて上りも立てず、水鞠と蹴させつゝ、馬と馬とを馳せ竝んで取組み、浪打際に撞と落ち、上になり下になり、二度三度は轉びたりけれども、太夫は幼若なり、熊谷は古兵なりければ、遂に上になり、左右の膝を以て胄の袖をむづと押したれば、太夫少しも働き給はず、熊谷は腰の刀を拔出し、既に頸を掻かんとて、内兜を見ければ、十五六ばかりの若上﨟、薄化粧に鐵漿黑なり、につこと笑ひて見え給ふ、熊谷はあな無慙や、弓矢取る身は何やらん。是ほど若く美しき上﨟に、何所に刀の立つべきぞと、心弱くぞ思ひける。（「源平盛衰記」より）

雪の中の筍は忠義と見ゆる朝顔の白小袖色香を殘す老女の軍配信濃の曲者

本朝廿四孝

夫は山喝
是は山本
敵も彈正
味方も彈正

氷の上の通路は白狐と見ゆる菊畑の大振袖戀に此世を捨子の人質甲斐の曲者

表のカタリは文政十一年六月河原崎座で、この狂言を演じた時のものである。義太夫では例によつて「武田信玄、長尾謙信」と割註をしたに過ぎない。このカタリの書き方は上方風で、江戸としては珍らしい。左の凸版も、この時の櫓下番附の一部である。この時は五代目菊之丞の八重垣姫、七代目團十郎の横藏で、大した評判だつた。

錦繪も重要な場面と役は洩らさずに各幕の中へ挾んである。

本朝廿四孝

序幕　諏訪明神の場

役名――百姓、簔作　實ハ武田四郎勝頼、板垣兵部。腰元、濡衣。車使ひ、勘八。同、九介。同、權六。板垣兵部。百姓、横藏。齋藤入道道三。

本舞臺、少し上手寄りに、本緣附きの神殿。扉を開き、この向う、戸帳を見せあり。扉の所、鈴の緒、後に引きちぎれる事あり。この前に、賽錢箱を据ゑ上手前へ寄せて、莫大なる石、この下より、人の出る事あり。下手に、石の手水鉢、奉納手拭を掛け、この下手に、因果車。ズッと下手、藪疊、うしろ山の遠見、日覆より、松の吊り枝。すべて、諏訪明神の體。爰に仕出し大勢、好みの拵らへにて、お百度を踏みゐる。この見得、大拍子にて幕明く。

ト仕出し、捨ぜりふよろしくあつて、向うより簔作、好みの拵らへにて、車を引き、出て來り

簔作　今日は、諏訪の明神樣の卯月の宵宮。ドレ、お參りして歸らうか。

ト云ひながら、舞臺へ來り、皆々を見て

オヽ、そこに居るは、みな近在の知つた者。太郎も、次郎も、よう參つたなア。

仕出　オヽ、簔作か、遲かつた。

同　今日は、明神樣の宵宮。

同　皆も斯うして參つて居るに

同　わりや、どこへ行つて居たのぢや。

四人　不信心な奴ぢやなア。

簔作　イヤ、さうぢやなけれど、おれも上諏訪まで、油粕を附けて行つて、いま歸りぢやが、ほつこりと草臥れ果てた。

仕出　草臥れたら、歸つてお神酒でも頂けやい。

同　おれも一緒に

四人　附合はう。

簔作　イヤ、おれはちつと休んで、後から去なう。皆よ、先へ遠慮なしに去んでくれ……ア、草臥れた、草臥れ

た。

ト上手の大石に腰をかける。皆々、見て

仕出　コレ／＼簑作、その石は明神樣の力石とて、その石に腰かくれば、そのどえらい石を、上げねばならぬと云ふ事は

同　われも、知らぬ事はあるまいがの。

簑作　オヽ、そりや知つてゐる。知つてはゐるが神は見通し、見て見ぬ振り。ちつとの間は、大事もあるまい。

仕出　そんならおれ達は、先へ去ぬるによつて

同　あんまり長休みして、見附けられぬやう

同　ちつと休んだら、戻つて來いよ。

同　跡で一杯、身祝ひしようぞ

簑作　直ぐに、後から去ぬる／＼。

四人　そんなら簑作。

簑作　皆の衆。

四人　サア、行かうかえ。

ト唄、神樂になり、四人、橋がゝりへ入る。上手より勘八、九介、權六、車遣ひ、惡者の拵らへにて、出て來り、簑作を見て、

勘八　ヤイ、そこにゐるのは

三人　簑作ぢやないか。

簑作　オヽ、誰れかと思へば、車遣ひの仲間の衆。

勘八　わりや、この神前の力石の事

三人　知つてゐやう。

簑作　ほんに、さうであつた。今も村の衆が云うたけれど、あんまり半度さに、忘れて、ひよつと。

權六　イヤ、忘れたとは云はれまい。昔から、當社の習はし、腰をかくれば、叶はぬ簑作。

簑作　叶はぬとは

勘八　オヽ、權六が云ふ通り、その石を上げい。

簑作　エヽ、どうしてこの大きな石が、わしが力で上げられうぞ。

九介　そんなら、宮へ斷わつて、明神樣のお神酒代を上げるか。

簑作　それはどうも。

權六　出來ねば、石を

三人　上げて見ろ。

ト簑作、思ひ入れあつて

簑作　ア、コレ、皆の衆、知つて居ながら腰かけたは、おれが鹿相。二人三人かゝつたとて、地ばなしもならぬ力

石。どうぞ皆、沙汰なしに。

權六　イヤ、濟まされぬ。われが石をよう上げねば、宮へ引摺つて行く。

勘八　さうぢや〳〵。日頃から女たらしで、生しらけたしやツ面。

九介　踏みにじつて、こませ〳〵。

簑作　そんな邪慳な事云はずと、堪忍してくれ、堪忍してくれ。

權六　エヽ、愚圖々々吐かさず

三人　早く、うせう。

ト三人して簑作を、引き立てようとするを、簑作、行くまいと爭ふうち、よき程に上手より、板垣兵部、羽織、袴の拵らへにて、家來を連れて出かゝり、樣子を聞き居て

板垣　ソレ、家來ども、引分けい。

家來　ハア、……爭ひ無用。靜まれ〳〵。

權六　それでも

三人　此奴を。

家來　ハテ、お旦那のお指圖ぢやぞ。

三人　ナニ、お旦那とは。

ト見て

へイ、眞平御免なされて下さりませ。

ト皆々、扣へる。

兵部　始終の樣子は聞きたるが、社法を背きし不屆き奴、併し、慈悲第一の御神なれば、法を行ふにも及ぶまじ。爰は身共が、簑作とやらに成り代つて、詫び致す。

簑作　段々とのお情の程、有り難う存じまする。

兵部　コリヤ、若い者ども、侍ひが詞を下げる。料簡の致して取らせい。

權六　サア、お侍ひの詫びなれば、料簡したいものなれど

三人　それではどうも、宮の掟が。

兵部　サア、そこがあるに依つての詫び。身は、武田信玄の家來なるが、畢竟わいらは、簑作が訴人なれば、我が領分へ連れ歸つて、訴人の科に行なふ。サア、なんと料簡するか。

三人　それでは酒手の三文には。

兵部　なんと申す。

三人　イエ、折角の事なれども

兵部　料簡はならぬと申すか。

三人　どうぞ、お構ひ下さりまするな。

兵部　ムウ、料簡ならずば、身共も武士。斯くなる上は、
云ひ分あるぞ。
トきつとなる。三人、悄りなし
権六　ア、、申し／＼、何もお顔を立てぬと申すのではご
ざりませぬ。
勘八　折角、お武家さまが口を利いておくれなさる事なり。
九介　それ程に仰しやる事ゆゑ、宮守りへは沙汰なしに致
しませうと
三人　ヘイ、申して居るのでござりまする。
兵部　然らば、云ひ分はないと申すな。
三人　ヘイ、左様でござりまする。
兵部　コリヤ、簑作とやら。聞く通りの仕儀なれば、最早
安心いたしてよからう。
簑作　ヘイ／＼、どなた様かは存じませぬが、お詫びなさ
れて下さりまして、有り難う存じまする。
兵部　イヤ、その禮には及ばぬ事。その代りには、其方へ
ちと頼みたい事がある。旅宿まで來てくれまいか。
簑作　これは／＼、ゆかりかゝりもないわたし、お詫びな
されて下さりまして、忝なうござりまする。たとへ、さ
うなくとも、お侍ひのお頼み、身に叶うた事ならば、何
なりとも御用の仔細、爰にて仰せ下さりませ。
兵部　オ、、それは過分。さりながら、爰は社内、參詣も
多ければ、身が旅宿へ同道して、密々に話したい。
簑作　仔細は何か存じませねど、さういふ事ならお供して。
兵部　殊に依らば、隙取らう。さう心得て、大儀ながら歩
んでくりやれ。
簑作　なにがさて、御恩の旦那樣の仰しやる事、どこまで
も
兵部　來てくれるか。重疊……家來ども、簑作を、同道せ
い。
家來　ハツ、畏まりました。
兵部　然らば、簑作。
簑作　旦那樣。
家來　サア、お出でなさりませ。
ト兵部先に、簑作、車を引き、家來附添ひ、向うへ入
る、三人は、跡を見送り、思ひ入れあつて
権六　エ、、いま／＼しい。あの簑作めを強請つて、酒買
はさうと思うたに。
勘八　それよ。いはれぬおさぶが挨拶で骨折り損。
九介　もうこの上は自棄の勘八、権六九介も、鳥居前で一

杯やりかけうぢやないか。

權六　オヽ、それがよい。

兩人　サア來い〳〵。

ト上手へ入る。向うより濡衣、腰元、好みの拵らへにて、出て來る。向う揚げ幕にて

横藏　オイ姐さん、待つた〳〵。

ト横藏、縞のどてらの拵らへにて、呼びながら出て來る。

濡衣　呼ばしやんすは、わたしの事でござんすかいなア。

横藏　さうぢや。先刻から呼んだは、姐さん、お前の事ぢや。お前も、諏訪の明神へ參る人と見たのぢやが、おれも、明神をせぶりに來た。お百度の連れになりやんしよ。

濡衣　これはマア〳〵、どなたか知らぬが、幸ひな道連れもう日が暮れかゝつて心細い。よい方にお目にかゝりましたわいなア。

横藏　さうであらう〳〵。サア、行きやんせう。

ト舞臺へ來り、よろしく祈念する事あつて、お百度を踏みにかゝる。

オイ〳〵、お前もマア、日暮れから來るとは、大膽な術妻さまぢやな。マア、しんどか、手を引かうかえ。

濡衣　ハテ、しんどいとて、大事のお願ひ、身を凝らさいでよいものかいなア。

横藏　ムウ、身を凝らすとは、戀であらうな。

濡衣　イエ〳〵、そんな事ぢやないわいなア。

横藏　それならば、よい着物が欲しいといふ、願ひでないかや。

濡衣　なんのマア、わつけもない。さう云はしやんすお前の願ひはえ。

横藏　おれが願ひは、商賣の四つぼ、この間、腐り續けしばかりになつたから、思ひ附きの百度參り、……イカサマ、姐さんの足の輕さは、よく〳〵の願ひと見えるが、マア、そろ〳〵歩いて、おれが云ふ事を聞かつしやれ。色事でなくば、おれとはどうぢやぞ。

濡衣　エ。

横藏　味い腰附きぢやなア。

ト濡衣の腰をちよいと叩く。

濡衣　ア、コレ、大事の〳〵お百度に、惡魔をさしてもらふまいわいなア……耳にもろ〳〵の不淨を聞いて、心にもろ〳〵の不淨を聞かず。拂ひ給へ、淸め給へ。

ト嗽手水を使ふ。

横藏　こりや、けうとい神道使ひ、堅いところが奥床しい。コレ、神様は粋ぢや。つい叶へ給へ、聞き給へ。

濡衣　アレ、てんがう云はずと、祈念しなさんせいなア。

横藏　ホヽ、しんどや／＼。佛の顔さへ三度と云ふに、神様のお百度は、足も腰も抜け果てた。ドレ、ちつと休まうか。

ト上手の大石に、腰を掛け、休息のこなし。濡衣一人、お百度を踏みしまひ、神前へ来て、よろしく拝む事あつて、

濡衣　大願成就なさしめたまへ、諏訪明神さま／＼。

ト鈴の緒を引く。これにて、鈴の緒切れて落ち来る。濡衣、思ひ入れあつて

濡衣　ヤヽ、こりや、鈴の綱の切れて落ちたは。

ト心がかりのこなし。横藏、側へ来て、

横藏　コレ、なんとさつしやつた。姐さん、どうさつしやつた。

濡衣　サイナア、わたしがお百度は、大事の／＼お主様の命乞ひ。それに鈴の綱の切れたのは、お命のないといふ明神さまの知らせではござんすまいかと思へば。

横藏　ハテ、氣の弱い。流石は女子。

ト鈴の綱を取上げ見て、

して、こなたの命乞ひするお主といふは、男か、女か。

濡衣　アイ、殿達でござんす。

横藏　それなら吉左右。この鈴の綱に書いてあるは、十七歳の男、息災延命とあるからは、神も納受に違ひないぞや。

濡衣　それは、マア／＼お嬉しい。お主のお年も丁度十七。

横藏　この鈴の綱を持つて去んで、戴かせてやらしやれ。

濡衣　アヽ、成る程、よいお方にお目にかゝつて、お命乞ひの願ひ成就。御縁もあらば、この禮に。

横藏　そんなら、もう去なしやるか。

濡衣　神に願ひの中要の間、お先へ歸りますわいなア。

トいそ／＼と勇み立ち、向うへ入る。横藏、後を見送り

横藏　他所はない命でさへ、神の納受で生きるのに、生きることはさて置き、胴取りや腐る、張ればかゝれる。もう今夜の元手がない……ムウ、これから明神をおれが仲間の胴元にして、この箱の賽錢を胴錢。マア、試みに神様を相手にして、三つぼの廻りして見よう。

ト賽錢箱を前へ持ち出し、賽錢を明け

オヽ、これ程あれば、今宵の元手は樂ぢや樂ぢや。

ト懷中より縞の財布を引出し、この中より骰子を取出し

サア／＼、神樣から授らつしやりませ。

ト捨ぜりふにて、自分一人で、骰子を抛る事あつて

サア、してやつた。

ト賽錢を我が前へ掻き寄せ

神樣ももう一文なし。これからは拜殿、燈籠、神樂太鼓、なんなりと形を見せねば錢貸さぬ。たとへ貸しても、正直を面にする神樣なれば、よもやぶさは打たしやるまい。負けたと思うて、神慮を立てさしやんな。全く我れら、賭賽は使やせぬ。イヤハヤ、どう云うたとて、あへんど一つ打たしやれぬ、結構な神樣ぢや。

ト賽錢を財布へ入れ

コレ、盗みやせぬ。相對づくで勝つた錢、勝つた次手に、何なりとせしめてくれうか。

ト見廻し、

オヽ、幸ひのあの太刀。

ト思ひ入れあつて、堂の上へ上がり、奉納の太刀を持ち來り

オヽ、これは幸ひ。一元手ぢや。

ト向うへ行かうとする。この以前、上手より藤馬、好みの拵らへにて、家來大勢、連れて出かゝり、樣子を窺ひ居て

藤馬　ソレ、家來ども

家來　ハア、

トばら／＼と横藏を取卷く。横藏、思ひ入れあつて

横藏　こりや、わしをなんとなさるゝ。

藤馬　すゝ、最前より窺ふところ、御神人の奉納の太刀、盗み取るには仔細ぞあらん。

横藏　見附けられたら百年目ぢや。

藤馬　白狀させん……ソレ。

家來　皆にかゝれ。

横藏　何を小癪な。

ト立廻りあつて、家來、敵はずなる。藤馬、刀を拔いて切つてかゝるを、ちよつと立廻り、横藏、奉納の太刀にて、拔打ちに、藤馬の首を打ち落す。

家來　いよ／＼狼藉。

ト又かゝる。よろしく立廻りあつて、横藏、皆々を、

景勝 橋がゝりへ追うて入る。上手より景勝、野袴、鞭先の
拵へにて、出て來り、
合點の行かぬ今の太刀音。ハテナア。
ト云ひながら切り首を見て、思ひ入れあつて取上げ
景勝 こりやコレ、家來落合藤馬が首……ム、ウ。
ト思ひ入れ。橋がかりより、横藏、血刀を持ち出て來
る。これにて景勝、後へ寄り、樣子を窺ひ居る。
横藏 心がゝりは以前の首、其まゝ置いては後日の邪魔。
ムウ、さうぢや。
トあたりを捜すことあつて
いま一刀に打ち落したる、首の爰にあらざるは、ハテ、
面妖な。
ト景勝、前へ出て
景勝 汝が尋ぬる心の一品、いま神前で某が、拾ひ取つて
爰にあり。
ト首を出す。
横藏 ヤ。
景勝 なんと其方に覺えがあらう。
横藏 ムウ。
ト橋がゝりより、以前の家來、バラ〳〵と出て

家來 奉納の御太刀を盜み、落合どのまで殺せし曲者、最
早遁がれぬ。
皆々 腕廻せ。
トかゝらうとする。横藏、刀を投げ出し、思ひ入れ。
景勝 コリヤ、者ども、待て〳〵。眼前の家來の敵、身が
手にかけん。
トきつと横藏を見て
落合藤馬が首打つたる手の內といひ、多勢を相手に薄手
も負はぬ、力量を持ちながら、盜賊と聲をかけられ、刀
を投げ出し、誤まり入りたる面付きは、まんざら理非の辨
まへない奴でもない。コリヤ、おのれ、出來心ぢやな。
武士の家來を手にかけし憎くい盜賊。只今これにて成敗
いたす……奴なれども、命は助けた。
横藏 エヽ。
景勝 長尾三郎景勝、身が手を下ろして打つべき首は、天
下に一つか二つ、おのれ如きに目は掛けぬ。
横藏 すりや、御赦免下さるとな。
景勝 この社に、一七日參籠の大願、未だ滿たざるうちな
れば、一命を差許す。
横藏 有り難うございまする。

景勝　餘人に斯樣の狼藉せば、忽ち絶命、面魂ひに見所ある奴。性根を改め、その首の胴に附いてあるやうに愼しみ居れ。

横藏　ヘエイ。

景勝　盜賊、さらば。

ト思ひ入れあつて、家來を連れ、向うへ入る。横藏、後を見送り、思ひ入れあつて

横藏　ア、、ひやいな事、命一つ拾うた。これから博奕場へ行つたとも、此ふまんでは埒が明くまい。一服のんで去んでこまそ。

ト大石に腰を掛け、燧石を取り出し、煙草をのみ居る。よき程に、以前の權六、勘八、九介、上手より出て來り、横藏を取卷き

權六　ヤイ、わりやアこの大石の法を

三人　知つて居るか。

横藏　オ、、知つて居る。

三人　なんと。

横藏　この石を上げる覺えがあつて、腰かけたが、なんとする。

權六　ハ、、、おのれに千手觀音の手があつても、ならぬならぬ。

勘八　この大石を上げる程の覺えがあれば

九介　おいらが相手になつて見ろ。

權六　爰で力を

三人　試してくれるワ。

ト兩方の手を捻ぢ上げる。

横藏　エ、甘い事をすなやい。

ト三人を一時に刎ね退ける。これよりよろしく立廻りあつて、三人、敵はず橋がかりへ逃げて入る。

横藏　エ、、弱い奴等が、力石々々と、仰山に吐かせども、手毬程なこの小石、まつと居つたら、上げるのを見せうに。

ト手をかけ、大石を上げる。この石の下、切り穴にて、これより道三、胡麻鹽の長髪、異形の拵らへ、鎌を斎、笠をかざし出て、スックと立つ。横藏、ギョッとして、石をソッと下に置き

ハテナア。石を退けると現はれ出たは、下界の人か、仙人か。

道三　オ、、我れも同じく人間なり。汝が力量見屆けた。サ、この一卷に血判せい。

ト一卷を出す。

横藏　ムウ、この地の底を棲家にして、人の心を試す心の底、問はねと知れた大望ある人、品に依つたら頼まれませうが、この横藏も、其許様の器量を見立て、頼みたい事がござります。

道三　ホヽウ、小賢しくも申したり。主從は一體、主は家來を頼み、家來は主を頼む習ひ。汝が頼みの仔細は如何に。

横藏　卽ちこれに。

ト懷中より一卷を取出し

老人、これに血判がしてもらひたい。

道三　ハテ、思ひ合うたこの頼み、汝も

横藏　御邊も

兩人　變らぬ大望。

ト兩人は思ひ入れあつて

道三　身は其方を家來にする氣。

横藏　身共は御邊を家來にする氣。どちらへどうとも決せぬうちは

道三　胸中を卷き込んだこの一卷、滅多には打明けられぬ。

横藏　この方とてもこの胸の中、聞かぬうちに返事が聞きたい。

道三　身が返答より、其方が住所は何國、それ聞きたい。

横藏　イヤ、たゞ野山を棲家とすれば、住所とては定まらず、留まる所は天ヶ下。

道三　ムウ、面白い。よし在所は聞かずとも、一旦、我が目にかゝつた上は、雲の裏でも尋ね搜し、味方に附けるは折があらう。

横藏　天ヶ下を志す汝が望みも、某と同腹同性。

道三　我れも定めぬ旅の空、志す方は六十餘州、雨舍りする天ヶ下、人目を凌ぐ雨具をくれん。

ト簑を脫ぎ

七重八重、花は咲けども山吹の、みの一つだになきぞ悲しき……重ねて逢はう。

ト簑を投げてやる。

横藏　ムウ天晴れ、餞別受けた。手前も寸志の置き土產。返辨申す。

ト力石をグッと引上げ、投げつける。道三、手際に受け留め

道三　慥かに落手。

ト大石を下に置く。

仕つる。

横藏　御邊の力量も試みて、先づは安堵。再會なすはこの簑を

道三　しるしに逢ふは七重八重

横藏　十府の菅簑うちかたげ

兩人　さらば、さらば

ト横藏、簑を着、双方、思ひ／＼の思ひ入れ、この模樣よろしく、誂らへの鳴り物にて、

ひやうし幕

二　幕　目

武田信玄館の場

役名＝＝武田信玄大僧正、武田四郎勝頼實ハ百姓簑作。百姓、簑作實ハ武田四郎勝頼。奥方、常磐井御前。板垣兵部。腰元、濡衣。村上左衛門義清。

本舞臺、三間の二重舞臺。見附け金襖。上手折り廻し、塗り骨障子屋體、下手屋敷、網代塀、琴唄にて幕明く。

へ死は武士の常ぞとは、常の詞と思ひ子に、今ぞかゝれる甲斐の國、武田入道信玄と、身は釋門に入りながら、武門花咲く庭の面、落葉角助、掃兵衛が、引摺る箒打つ水に、いとど館はしめやかなり。

ト あと白囃子になると、奴兩人、掃除して、竹箒、手桶など持つて、よろしく住ひ

掃兵　なんと角助、何かは知らず昨日から、一家中がひそひそと、夜の目も寢ずに走り廻るその譯を、何だと思へば京の大將、義晴さまとやらを、誰れとも知らず殺したげな。それで國々の大名衆が、イヤ／＼おりや殺さぬ、知らぬと云つて、潔白を立てられた。そこでおらが旦那もその潔白を立てると云うて、それで館が騒ぐとやら。

角助　その潔白と云ふものは、どんなものか、そちや知らぬか。

掃兵　なんだ、潔白を、わりや知らないか。イヤ、此奴文盲な奴ではある。潔白を立てるといふは、おらが小半酒を立てると同じ事で、潔白振舞ふと云うて、お大名には節々ある事。

角助　おらも、ちよこ／＼潔白喰つたが、なか／＼輕くて味いもの。シタガ、鰒汁と同じ事で、中てらるゝと命が

ない。わいらも命が惜しいなら、誰れが潔白を立てると
も、必らず喰ふなよ。
〽物識り自慢、とつても付かぬ下々の、話しも物の知らせかと、戻りかゝりし濡衣が、聞いて案じる胸撫で下ろし、
トこの時、濡衣、橋がゝりより戻り、奥へ行きかけ、こなしあつて、
濡衣　コレ〳〵、二人の衆、下としてお上の取り沙汰。わしが聞いては大事なけれど、もし侍ひ衆の耳へ入つたら、こなた衆の爲にならぬぞや。掃除が濟んだら勝手へござつて、休息さしやんせ。
〽聞いて悔り、頭角助、とちめんぼう。
掃兵　おらはなんにも白洲を掃兵衞。
ト箒をかたげて、入る。
〽箒をかたげて逃げて行く。
濡衣　よしなき事に隙取りて、さぞ、奥様のお待兼ね。濡衣、只いま歸りました。
〽一間に向ひ、おとなふ聲、
常磐　オヽ、濡衣か、さぞ苦勞であつたであらう。
ト奥より常磐井、裲襠なりにて出る。

〽障子開いて常磐井御前、思ひなき身の思ひ子を、思ひ佗びたる御氣色。濡衣こなたに手をつかへ。
濡衣　上々樣には苦はないものと、思ひの外、勝頼さまのお身の上、降つて涌いたる御災難。お案じは理りながら、達者なお身でもある事か、お目の悪い若殿樣、もしもの事があるならばと、思へば身も世もあられぬ悲しさ。悲しい時の神祈りと、諏訪明神へ參りしも、今度の御難儀遁がれさせたび給へと、重き願ひも叶はぬ告げか、切れて落ちたる鈴の綱、思はずハッと取上げて、よく〳〵見れば、勝頼さまの、お年に違はぬ命の釣り緒、十七歳の男、息災延命と、書いてありしも神のお告げと、嬉しさ餘る鈴の綱、これ御覽遊ばしませ。
〽これ見給へと取出し、見せるも見るも打につこり。
常磐　オヽ、それは嬉しや、喜ばしや。切れて落ちしも其方の眞實、神も納受まし〳〵て、勝頼が身にさゝはりない、諏訪明神の御神託、これにつけても京都の武將義晴公、何者とも知れず、飛び道具を以て害せしより、諸國の大名、心まち〳〵。我れ人、心疑ひ合ふ、中にも夫信玄に、疑ひかゝる身の云ひ譯、一子を切つて出すべしと、契約ありしは武士の意地。されども御前のお情にて

君、三回忌の其うちに、敵の在所知るゝならば、勝頼も助けよと、深き恵みのたつ月日、はや三回忌も事濟めど、今に於て敵も知れず、今日につゝまる我が子の命。なんと詮方なき中に、ナウ、持つべきものは忠義の家來。板垣兵部、我れを招き、お氣遣ひし給ふな、勝頼公に寸分違はぬ御身替り、兵部が存じて罷り在れば、今日中に連れ歸らんと、館を出でしが、妾が樂しみ。それゆゑ兵部の歸りを待てども、昨日にも昨夜にも、今に於ていなせのないが、心掛りにありつれど、神のお告げになに疑ひ。兵部の歸りもやがてゞあらう。其方も案じやんな。コレ、濡衣。

〽御喜びの折柄に、

ト向う揚げ幕にて。

呼び　御上使。

〽聞いて奥方涙ながら。

常磐　はや御上使のお入りとや。心當ての兵部も歸らず、イヤコレ濡衣、其方は次へ行つて休息しや。上使への返答は、自らが胸にある。サア、行きや。

濡衣　ハイ。

常磐　ヘテ、立ちやいなう。

常磐　ハイ。

〽仰せに否とも濡衣が、是非なく立つて行く跡へ、

ト濡衣、思ひ入れあつて、しいなりとして奥へ入る

〽のつさ／＼入り來る、上使は聞ゆる村上義淸、疊ざはりも荒くれ武士、いかつがましく出で來る。

ト序の舞にて、向うより義淸、ツカ／＼と出て來て、會釋する。

義淸　上使なれば罷り通る。

〽上座へこそは打通る。奥方、はるかに手をつかへ。

ト合ひ方になり

常磐　甲斐と信濃は國並び。その信濃にござつた村上どの今ははる／＼都より、御上使とは、御苦勞千萬に存じまする。

〽と云ふに村上打頷づき

義淸　成る程、以前は隣國のよしみ、心安く致せしが、それは内證、只今は上使の役目、仔細と云ふは餘の儀にあらず、信玄疾より合點の趣き。勝頼の首、お渡しあれ。受取つて歸り申さう。

〽事もなげなる上使の權柄、

常磐　成る程、その儀は夫信玄、妾に申し付け置きしゆゑ、

兼ねて覺悟は致しながら、今際の際にこれがマア、悲しうなうてなんと致しませう。親子、この世の一世の別れ。心用意も致させたい。何卒、暫時の御容赦を。

義清　首討つになんの用意。手間隙なしに、拙者がだつた一討ちに。

〽立ち上がるを押しとゞめ、

常磐　斯やう申さば武士の身に、あるまじき卑怯者、未練者とも思さうが、何を包まん勝頼は、諏訪明神の申し子にて、神に御苦勞かけ奉り、儲けし子なれば私しに、殺すも神へ恐れあり、勝頼が命、元へ戻し奉ると、諏訪明神へ代參を立てたれば、せめてそれが歸るまで、暫らくお待ち下さりませ。

義清　ヤア、あまちやゝな、その代參。便々だらりと待つ事ならぬ。

常磐　然らば、何卒未の上刻まで。

義清　それも叶はぬ。

常磐　左樣なれば、せめて二時の御容赦は、武士の情に。

義清　イヤ、ならぬ。

常磐　何卒一時の間を。

義清　エヽ、ならぬと申すに。

常磐　スリヤ、如何やうにお願ひ申しても。

義清　エヽ、くどいわい。

常磐　ホイ。

義清　ハテ、雜魚鰯を値切るやうに、なんのかのと、どひつこい。それほど延してほしくば、暫しの容赦いたしてくれん。

〽庭に飛び下り、垣根の朝顏、引きむしつて、床の間の、花活けへ捻ぢ込み押し込み。

コレ、この朝顏の萎むまで、宥免いたしてくれる。花が萎むと、それが寂滅。

〽否と云はさぬ制り符の一本。

先づそれまでは奥で休息、御馳走には信濃蕎麥、お手打は我が好物。花鰹より勝頼が首、早く賞翫いたしたい。奥方、後刻。

常磐　左樣ござれば、義清さま。

義清　御案内をお頼み申す。

常磐　イザ、斯うお出でなされませ。

〽云ふに否とも朝顏の、日影待つ間の命ぞと、思へば胸も板垣が、早う戻つてくれかしと、

義清　キリ〳〵案内。

常磐　ハア、。

〽それを心の力草、村上誘なひ常磐井は、一間へこそは

ト後を序の舞にて、義清、思ひ入れ。常磐井、愁ひのこなしにて、兩人よろしく奥へ入る。

〽入りにける、始終の樣子物蔭にて、聞いて袂も濡衣が今は恨みを朝顏に、云はん方なき憂き身やと、聲をも立てず忍ひ泣き、洩れ隔てたる唐紙を、明けても明かぬ目なし鳥、無慘なりける姿にも、武士の角立つ角前髮、袴の裾も長廊下、探る刀の手前さへ、面目もなきその風情。

ト勝賴、上下形にて、眼病のこなし、探りながら、刀を杖に、出て來る。濡衣、走り出て來り

勝賴　ナウ、勝賴さまか。おいとしやなア。

〽縋り付いてぞ泣き居たる。

勝賴　悲しいは道理々々。たゞ因果なる我が身の上。たまたま弓馬の家に生れ、弓矢打ち物取る事さへ、叶はぬ片輪と成り下がり、此まゝ無念の死をせんより、侍ひらしう腹切るが、弓矢神への身の云ひ譯。此ごろ母の物語り、その時覺悟は極めては居れど、片輪になつても子の命、助けたう思し召す、母上のお心使ひ、無下になすが勿體なさに、今まで命延せども、いま村上が使者の樣子、聞いてはどうも生きてはゐられぬ。目かいの見えぬ勝賴を、大事に思つて長々の世話。いかい苦勞をしてたもつた。嬉しいとも過分とも、禮は未來で、未來で。

〽跡は得云はず見えぬ目に、涙を隱すいぢらしさ、濡衣ワッと聲を揚げ、

濡衣　恨めしい勝賴さま、このお館へ御奉公に、來初めた日からお姿を、可愛らしいと思うたが、緣と因果の初めにて、お主樣とも、御主人とも、辨まへ知らぬ、拙ない筆に。

〽心のたけを岩本の、神の結ぶのお情に、嬉しい枕かはした時。

未來までもと仰しやつた、そのお詞が誓紙ぞと。

〽樂しんでゐるものを、

お前ばつかり死なうとは、酷いつれない胴慾な。エヽ、胴慾でござりまするわいなア。

〽我が身をとんと勝賴の、膝に打伏し泣き沈む。

勝賴　オヽ、その恨みは尤もなれど、親の許さぬいたづらなれば、どうで果敢ない花の緣。もう朝顏も萎む時分、隙取つては恥の恥、泣かすと、其方は次へ行きや。

〽はや切腹と見えければ

濡衣　ア、申し〳〵、朝顔は萎みは致しませぬわいな。ア、生き〳〵と今を盛りの御身の上、切腹とは情ない。どうぞ助かる仕様は、ござりませぬかいなア。

〽留めても留まらずせり合ふ中へ、母は駈け出で、

ト常磐井、出て、

常磐　オヽ、よう留めてたもつた。最前來りし使者の樣子聞いて覺悟は理りながら、其方を助けようばつかりに、心を砕いてゐるわいなう。母が心を無にするか。

勝頼　ハア、、勿體ないお詞。須彌大海に比べても、及びがたなき母の大恩、さら〳〵無下に致さねど、朝顔の限りの命、隙取つては使者への手前。

常磐　イヤ、苦しうない。大事ない。其方に寸分違はぬ身替り、慥かにありと板垣が、館を出でしは昨日の朝、もう戻るに間もあるまい。

濡衣　イヤ、申し奥樣、板垣どのがその身替り、連れて歸らしやれば、勝頼さまのお命に、さゝはりなけれども、もし又違うたその時は。

常磐　それも分別しで置いた。濡衣、そちや勝頼と、不義してゐやうがな。

濡衣　エヽ。

常磐　イヤ、叱るではない。この母が、いま改めて女夫にする。

濡衣　エヽ、すりやアノ、賤しい私しを。

常磐　オヽ、賤しうても貴うても、女は夫を大切に、思ふが直ちに氏系圖。目界の見えぬ勝頼を、身に替へて大事がる、如才ない氣を見込んだゆゑ、大事の子なれど其方に預ける。連れてこの家を、立退いてたも。

〽思ひがけなき詞に恟り。

濡衣　アノ、勝頼さまを。

常磐　合點がいたか。花が萎むと悲しい別れ、早う行きや。

〽云ふうちもしや朝顔の、萎れやせんと伸び上がり、見やる花より見る母の、姿萎るゝばかりなり。勝頼は氣色を正し。

勝頼　こは、怪しからぬ母人の御仰せ。死を恐れて館を出でなば、後の嘲り、家の恥辱。武士の命は、義に依つて輕しと申す。たゞ初めより亡き身ぞと、思し召し諦めて、命のお暇賜はらば、猶この上の母のお慈悲、お願ひ申し奉る。

〽命惜しまぬ健氣さに、いとゞせき來る涙を押へ。

常磐　すりや、この母がこれ程に、心を砕くに承引せず、腹切るか。もうこの上は留めはせぬ。其方より先に、この母が。
勝頼　マア／＼、お待ち下さりませ。
常磐　そんなら、落ちてたもるか。
勝頼　サア、それは。
常磐　自害をしようか。
勝頼　サア、それは。
常磐　落ちやるか。
勝頼　サア。
常磐　サア／＼／＼、これ程云うても落ちやらぬか、オヽ、さうおや。
〽差添を押取れば、慌てゝ留める濡衣に、また取縋る無慘の盲目。
勝頼　申し、母上、段々あやまり入りました。お詞に従ひ、この館を落ちませう。
常磐　すりや、聞分けて、落ちてたもるか。
勝頼　ハッ、落ちまするでござりまする。
常磐　濡衣も落ちてたもるか。
濡衣　アイ／＼、落ちまする。必らず聊爾遊ばして下さりまするな。
常磐　ホヽウ、聞分けてさへたもれば、母も嬉しいわいな。サア／＼／＼早う落ちてたも。
〽勧められ、是非なく／＼も立ち出れば、一間の内より村上義清。
ト義清出て
義清　ヤア、勝頼を落さんとは野太い巧み。村上が見附けたからは、一寸も動かさぬ。この所へ引出して、一討ちに致してくれん。
〽駈け寄る先に立ち塞がり、
常磐　コレ／＼、朝顔の萎まぬうちに討たうとは。
義清　ヤア、萎まうが萎むまいが、脈のあがつた死人花。
ト朝顔の花を取つて目先へ突きつけ
これでも生きるか、生きて見るか。
〽突きつけられて常磐井も、なんと詮方なき身ぞと、思ひ切つて突込む刀、なう悲しやと叫ぶ濡衣、驚ろく母。
濡衣　ヤア、御切腹遊ばしましたか。
常磐　ヤレ、早まつた事しやつたなう。
〽右と左に取りついて、前後正體泣き沈む、勝頼苦しき

息をつぎ。

勝頼　申し母人、お詞に背きし段、眞平御容赦下さるべし、これまでの御養育、御いつくしみ、深かりし身は盲目の淺ましや。軍慮に秀でし家に生れ、戰場の駈引き叶はず、遠矢は元より打ち物は、やう／＼刀を杖に突き、我が家の内を探り廻る。

〽甲斐源氏の嫡流たる。武田四郎勝頼と、云はるゝこれが武士か。

よく／＼武運に盡き果てし、我が身ながらも愛想がつき、今日や切腹、明日や自害と、毎日々々刀を手に、取上げは上げながら、思へば深き母の大恩、我れ先立ちなば、亡き跡にて、さぞ御歎き、お物思ひ。逆樣ながら追善供養。

〽受くる不孝の勿體なく、長らへありし今日只今、親子の縁も朝顏と、共に散り行く御名殘り。

コリヤ濡衣、我が最期を嘆かずとも、母に力を付け奉れ。さは云へ、目界の見えぬ身を、朝夕心の樂しみに、暮らした其方が胸の內。

〽不便や便りもあるまじと、涙呑み込む手負ひの苦しみ、見るに、悲しさ濡衣が

濡衣　つい假初めのお障りより、見えぬ御目を明け暮れに、苦に病み給ふがおいとしく、どうぞお目の明くやうと、御符お札もあらゆる神、跣足參りのお百度にも、叶はぬのみかお命まで、今が限りとなつたるは、神も佛もない事かいなア。

〽涙の限り口說き立て、口說き立つれば奧方も。

常磐　かゝる憂き目を見まい爲、心盡した甲斐もなう、今に歸らぬあの兵部、思ひに違ふ浮世ぢやなア。

〽手負ひにひしと抱き付き、流涕こがれ伏し沈む。

義淸　ヤア、聞きたくもない世まい言。早々首を刎ねてくれん。

〽刀すらりと拔き放せば、

勝頼　イザ、御上使。

義淸　云ふにや及ぶ。

濡衣　コレ、マア待つて下さりませ。

義淸　エヽ、面倒な。

常磐　ナウ、今が別れかいなう。

〽悶える奧方濡衣が、歎きとゞむを突き退け押し退け、村上が、振り上げる刀の下。

勝頼　イザ。

〽手負ひは合點。
義清　覺悟いたせ。
〽今ぞ生死の。
ト刀振り上げる。常磐井、濡衣、止める。勝頼、覺悟して首さし延べる。義清キッとなる。雙方、引ッ張りよろしく、三重にて、道具廻る。
本舞臺、三間の二重舞臺、上手、塗り骨障子屋體、下手、落間、よき所に枝折り門、網代塀。前側、障子、後に引き拔く事、よろしく誂りにて道具留る。
〽かゝる事とも白洲の内、怪しの辻駕籠えつさつさ。
駕舁　エッサッサ〳〵。
〽跡に續いて板垣兵部、老の心も急き立つ足元。
ト向うより駕籠舁き、駕籠舁いて出る。跡より兵部、附いて出る。
駕甲　ヤレ〳〵、滅相な旦那どの。
駕乙　マア、一里ぢや、マア、半里ぢや。
駕甲　急げ〳〵と息もさせず、上の諏訪から一目散、驅け通しの早追ひ。
駕乙　極めの駕籠賃、お心附けはお心次第、結構さうな旦那どの。
駕甲　酒手も定めし結構なお金。
二人　ズッシリと下さりませ。
〽汗拭ふ其うちに、兵部は切り戸のかき金しつかり。
兵部　駕籠代もくれう、酒手もくれう。爰へ來やれ。
〽やり過して大袈裟切り、なう悲しやと逃げ出す、相肩眞ッ二ツ、二人を仕留める刀の音に、悚り驚ろく駕籠の垂れ、明けて逃げ出る簑作が。
ト兵部、駕籠舁きを殺す。簑作、駕籠より出て
簑作　ア、申し〳〵、私しは御領分に住む百姓、博奕は打たず、喧嘩は嫌ひ、成敗にあふ科はない。お免しなされて下さりませ。
〽齒の根も合はず慄へゐる。
兵部　ア、音高し〳〵。御身の上に氣遣ひなし。必らず騷ぎ給ふな。
〽座敷へ伴ひ窺ふうち、奥方一間を轉び出で。
ト常磐井、出て
常磐　コレ兵部、遲かつたわいなう。
兵部　ホ、ウ、さぞお待兼ね。併し、御用の品も首尾よく調ひ、只今同道、お喜び下さるべし。奥様、申し、常磐

非さま。
〽云へどいらへも泣き入る母。
ハテ、心得ぬ御有樣、何にもせよ、委細の譯も仰しやらず、泣いてござつて事濟むか。勝頼さまは何所にござる。
義清　オヽ、その勝頼に、會はしてくれん。
〽首引ツ提げて立ち出る義清。
ト義清、勝頼の首を持つて出て、兵部に見せる。
兵部　ヤア、こりや若殿の御首。すりや、はや御最期遂げられしか。
〽ハツとばかりに腰も拔け、胸も張り裂くウロ〳〵眼。
拙者めが心當りの事あれば、たとへ如何やうの事あるとも、必らず聊爾の出來ぬやうと申し置いた兵部も待たず天にも地にも掛替へなき、大事の若殿殺してしまひ、泣いて濟むか、悔んで濟むか。エヽ、云ひ甲斐なしとも、胴慾とも、云うて返らぬこの有樣。エヽ、お痛はしや殘念や。
〽拳を握り齒を噛み締め、五臟を絞るばかりなり。
義清　ヤア、役にも立たぬ世迷ひ言。泣きたけりや、後でゆるりと泣け。
〽首引ツ提げて村上は、旅宿をさして立歸る。

ト義清、ツカ〳〵と立ち上がる。皆々、止めるを振り切り、キツとなつて向うへ入る。
〽後見送つてウロ〳〵と、身の納まりを簑作が。
簑作　申し、お侍ひ樣、私しはもうお暇申しまする。マア人になんの合點もさせず、何やらよい事がある、おれが云ひなり次第になつて居よと、無理やりに駕籠へ捻ぢ込み、連れてござつたこの屋敷、先刻にからの樣子を聞けば、わしを身替りにするのぢやげな。どこの國にか滅相な、人の首を斷わりなしに切らうとは、酷い氣なお侍ひ樣。畢竟、身替りが遲くなつて、間に合はなんだりやこそ、餘りの命。オヽ、どうやら思ひなしか、首筋元がひいやりする。ヤレ〳〵、怖やの〳〵。
〽そゝ髪立てゝ立ち出れば。
兵部　ヤア、一大事を知らせ、その分には歸されぬ。不便ながらも覺悟せよ。
〽切り込む刀をかいくゞり、鍔元しつかと片手に握り。
簑作　ハテ、身替りを使ふといふではなし、正眞の首渡したを、誰れが知つたとてなんの大事。さうしてマア、人の命をさう澤山に、瓜か茄子を切るやうに。お免しなされて下さりませ。

ト　よろしく思ひ入れして、突き放す。

兵部　ヤア、土ほぜりに似合はぬ不敵者。いよ〳〵助け歸されぬ。

〽又切り付くれば身をかはし、無刀のあしらひ手練の切尖、危く見ゆる後の障子、兵部が髻ぐつと引寄せ一刀。

兵部　ワア。

ト兵部、障子越しに突かれて苦しむ。常磐井、愕りして

常磐　これは。

ト常磐井よろしく思ひ入れある。

〽障子開いて信玄公、血刀提げて悠々と、立出で給へば、奥方も、簑作もろともへり下り、恐れ入つてぞ見えにける。

ト信玄、坊主かつら、好みの形にて、刀を提げ出る。

兩人、思ひ入れ。

信玄　勝頼が最期にも出合はず、今また兵部を手に掛けし某が所存、さぞ常磐井も不審ならん。ヤア〳〵、濡衣、云ひ附け置きし物、早く持て。

濡衣　ハア、。

〽ハッといらへも涙ながら、夫の血汐に染めなす片袖、泣く〳〵御前へ差出せば、信玄、御手に取上げ給ひ。

ト奥より濡衣、廣蓋の上へ勝頼の片袖を載せ、持つて出る。

信玄　十七年の春秋を、我が子と思ひ暮らされし、勝頼こそ、それなる兵部が實の倅。御身と我が血を分けし、倅といふは、あの簑作。改めて、親子の對面いたされよ。

〽思ひもよらぬ詞に愕り。

常磐　すりや、腹切つた勝頼は我が子でなくて、この簑作が眞實の。

信玄　オヽ、その證據は、これなる血汐。

〽御佩刀の血、片袖に、押當て〳〵押拭ひ。

信玄　これ見られよ。この血のりの外へも散らず、合體せしは、紛れもなき我が子の血汐。十七年前、勝頼誕生せし砌り、その板垣も一子を儲く。その子の面差し、我が倅と、似れば似るもの生寫し、見分け難きに彼奴が惡念、人知れずに摺りかへ置き、おのれが倅を主人と崇め、主人の胤を我が子となし、おのれの手にも育てずして、病死と僞はり、信濃の國の片ほとりへ、一生不通に遣はせし事、天眼通は得ざれども、即座に知つたるこの信玄。憎くき逆臣、一分だめしと思ひしが、いま戰國の時に到

つて、人の子を我が子となし、我が子を他家に育つる事、智謀の一つと奥にも語らず、不通に遣つたるその先へ、我が手を廻して育てし簑作。慮りの圖を外さず、主人となしたるおのれが子に、自然とかゝる今日の災ひ、因果のめぐり來るとも知らず、おのれが悴の身替りに、大恩受けし主人の子の行くへを探して連れ歸り、また殺さんと計る人外め。凶賊とや云はん、人面獸心。天の御罰、思ひ知つたか。

〽扇を取つて丁々々、はつたと蹴据ゑし信玄の　詞に知つたる我が子の身の上。

常磐　かゝる野心の者とも知らず、忠義一圖の侍ひと、思うたが面目ない。それにつけてもこの簑作、信玄さまの御子とは、知つてか、但しは知らずにか。

簑作　その儀は、我れを育てたる、乳母が疾より物語り。
また、父上にもこれまでに、忍び〳〵の御對面。

常磐　すりや、幼ない時より百姓の、家にありしも父上のお指圖とは云ひながら、系圖正しき武士の、弓矢の業は目にも見ず、身は鍬鋤の泥まぶれ、憂にやつれしその姿、いま改めて親子の對面、衣類、大小、早く持て。

簑作　アイヤ、先づ暫らく……京都の武將義晴公、果敢なく討たれ給ひしより、父を始め諸大名へ、疑ひかゝる今この時。それゆゑにこそ勝頼に、腹切らせしも父の云ひ譯。未だ立つとも立たぬとも、知れざるうちに某が、また勝頼と立歸らば、いよ〳〵疑ひ一身に、止まり難きはこの館。身を民間に育ちしを幸ひ、この身は、此まゝ簑作と。

〽白洲へ下りて簑と笠、世に降る雨は凌げども、我が身にかゝる横しぶき、洩れて姿も濡衣が、始終を聞いて覺悟の刀、すかさず止むる剛氣の手負ひ、刃物たくつて我が腹へ、グッと突き立て引き廻し。

ト濡衣、兵部の刀を取つて自害しようとするを、兵部止めて、刀を引取り、我が腹へ突ッ込み、引き廻し

兵部　ア、、恐ろしきは天の御罰。信玄公の仰せ、一々違はぬ我が惡心、悴を國の守と崇めんと、子ゆゑの闇に眼もくらみ、くらみ〳〵て悴が眼病、藥も祈念も叶はぬ筈、勿體なくも御主人を、害せんとせし大罪人、逆磔刑にも行はれず、大將の御手にかゝる有り難さ。コリヤ、濡衣、この館の御重寶、諏訪法性の御兜、いま謙信の手に入つたり。汝も信濃生れとあれば、今の命を長らへて、何卒國へ立歸り、手段を以て兜を奪ひ取り、勝頼公に奉らば

親と一つでない悴、死後の云ひ譯、この上やあらん。申し、奥様、お赦しあつてこの願ひ、お聞屆げ下さらば、生々世々の御厚恩。

〽伏し拜んだる四苦八苦、不便と奥方、濡衣引立て。

常磐　大惡人の兵部なれども、それには染まぬ勝頼が孝心。知らぬながらも、親子となりし緣あれば、濡衣を親里へ、返すがせめて手向け草。

簑作　ホヽウ、尤もなる母上のお計らひ。兜の事も捨て置かれず、いま、切腹して死んだる勝頼、親と一つでない云ひ譯、忠義の仕樣は濡衣が心次第。

〽心次第と、死を止める、詞に流石死なれもせず。

濡衣　御意に隨ひ、法性の御兜、命に替へて取返しませう。

簑作　ホヽウ、天晴れ出かした。この簑作、猶も姿を下賤にやつし、義晴公を討ちたる敵、草を分つて尋ね出し、その時こそは、勝頼と、立歸つて御對面。

〽はや立出づれば、信玄聲かけ。

信玄　義晴公を害せしは、四海を望む叛逆人、なか〳〵容易き敵にあらず、殊に手練の飛び道具、未だ日本へ渡らぬ兵器、例へて云はゞ、まッこの通り。

〽用意の鐵丸、車輪の如く、投げ付け給へば、すかさず笠にてヒラリと受けとめ。

簑作　火に德のあるものは、水に德なし。

〽諸葛臥龍が工夫の地雷、火玉飛び散る術あるとも、我が方寸にも大川あり、何かは以て恐るべき。

未だ日本へ渡らぬ鐵砲、それこそ屈竟、詮議の手がゝり。尋ね出すは瞬くうち。

〽追ッつけ歸り簑作が、身の納まりは。

信玄　その時〳〵。

〽その常磐井に濡衣が、暇申すも涙にて。

濡衣　物の黑白もなき夫に

常磐　似たる菖蒲や杜若。

簑作　花紫の明方は

濡衣　盛りと見えし朝顏の

常磐　花にもなせし惡業は

信玄　ありてその名も鬼薊。

兵部　因果はめぐる

皆々　日車に。

〽法のこの身と絶入る兵部、不便と見やる信玄は、仁あり智ある勝頼に、名殘り奥方女郎花、桔梗苅萱秋の野の、月に名をふる更科や、信濃路さして出て行く。

ト皆々引ッ張りよろしく、兵部落入る。三重にて、

幕

三　幕　目

桔梗ヶ原の場

役名――髙坂彈正時綱。同妻、唐織。越名彈正忠政。同妻、入江。百姓、慈悲藏。

本舞臺、平舞臺、向う打抜き、原の遠見板松、眞中に東甲州領、西越後領と書きし榜示杭。日覆より一面の松の吊り枝、在鄉唄にて幕明く。

ト幕の內より奴二人づゝ、東西に別れ、草苅り鎌を持ち、草苅つて居る。

〽名も山深き信濃路に、優しき花の名に呼びし、爰ぞ桔梗が原とかや、甲斐と越後の領分に、分けて建てたるさい目の場所、馬草を苅りに奴らさ、一本きめた刀より、研ぎ立つ鎌でくわつさくわさ、踏み荒したる銘々が、主の威光をかり場の領、これも同じき二人連れ、籠に枴をさし荷ひ、見て悔りのどつてう聲。

百藏　ヤイ、下郎め、うらが部屋では、ついに見たこともないしやッ面ども、誰れに斷わり、この馬草を苅り干した。

沓藏　惡く云ひ譯ひろいだら、二人ながら首が飛ぶ。盜人めら、覺悟さらせ。

宅内　ヤイ、下素の口から下素呼はり、しやらくさいわい。忝なくも甲州の主、信玄公のお馬の飼ひ料。

可内　うぬらが知つた事でない。すッ込んでけつかれ。

〽猶も引きぬく手先を捕へ。

百藏　この印が目に見えぬか。甲斐の領分はこれより東、西は越後と書いてある。

沓藏　うぬらが目には掛らぬか、盜人と云うたが誤まりか。

宅内　サアそれは。

沓百　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

沓百　なんと。

〽きめ付けられ、返答こつちり後から、握り拳を二つ三つ。

可内　ヤア、朋輩を打たれては、後日に主君へ云ひ譯立たぬ。もう破れかぶれぢや。

〽破れかぶれと二人の奴、いどみ爭ふ折こそあれ。

唐入　兩人とも、靜まり居らう。

〽襠襠襠の裾けはらし、高坂が妻の唐織、越名彈正が女房入江、それと指圖に腰元ども、用意の腰掛け奥家老の、女房と見るより下部ども、分つてこそはうづくまる、入江あたりに心を付け。

入江　誰そと思へば お厩の沓藏、百藏、何ゆゑの爭ひなるぞ。包まず語りや。

〽上手より入江、下手より唐織、着付け裲襠、上下の侍ひ付添ひ、兩方より一時に出て

百藏　ヘイ〳〵、喧嘩の元は馬の飼ひ料。信玄どのゝ家來めら、此方の領地へ踏み込み、苅り荒せし狼藉者、我れ我れに見附けられ、云ひ譯なしの、摑み合ひでござりまする。

入江　もうよい〳〵。それでさつぱり樣子が知れた。國が替れば心まで、替れば替る甲斐の國は、すべて盜賊流行りしと、人の噂も嘘でない。

〽當てこすられて唐織も、ムッとはせしが押しづめ。

唐織　互ひにお主の確執より、おのづと隔たる兩家の仲、家來の仕落ちは幾重にも、お詫び申す筈なれども、只今のお詞に、すべて甲州には盜賊ありと仰しやつた、その一言が承りたい。

入江　オヽ、唐織さまとしたことが、なんの根問ひに及ぶ事。元この信濃は村上左衞門、義淸どのゝ領地なりしが、謙信さまと信玄さま、兩人して切り取り給ひ、この所にさい目の印し。それを知りつゝ狼藉せしは、あなたの家來。ましてや町人百姓は、狼藉するは知れた事。

唐織　イヤ、仰しやんな。印ありとは云ひながら、一つに續きし原なれば、誤まつて踏み越えしも、云はゞ下郎の苅つたる草。

入江　イヤ、下郎にもせよ、誰れにもせよ、その過ちをさせまい爲、建てたる榜示は國家の禁制。花咲く木々の枝とても、折り取るまじと記せしを、手折るは即ち落花狼藉。この領分の印に限らず、たとへ白紙に書くとても、事を制する理は等しく、これみな國の敎へとして、掟を守るは貴人より、下々の掟とする。謙信さまの息のかゝつた領地へ踏み込み、草一筋でも苅り取つたは、國を盜むも同じ事。其まゝに差措いては、夫彈正が越度、女房の身として見て居られず、高坂どのはとまれ、わたしが夫彈正どの、つひに一度も名を穢せし事なければ、お前の

殿御と一口には、ほんに云うても下さんすな。
唐織　こりや面白い、聞き所。お前の殿御が執權なら、わたしが夫も執權職。
入江　イエ／＼、そりやお前の胸一つ。深い樣子は知らねども、侍ひ衆の口癖にも、高坂どのは逃げ彈正、わたしの夫は鎗彈正、人にすぐれた鎗の上手と、逃げ足早いお侍ひとは、異名さへ違ふもの、まして心の內外も、違はいでなんとせう。
〽違ひやんすとほのめかす。
唐織　コレ、入江どの。武士の身は、情に依つて、引くも逃ぐるも軍の習ひ。
入江　よい口な事仰しやるな。情でそんな異名を取る、武士の法がござんすかえ。
唐織　サア、それは。
入江　サア。
唐織　サア。
兩人　サア／＼／＼。
入江　なんとでござんす、唐織どの。
〽云はれて唐織當惑の、なんと詮方この場の無念、廣言悔しと思へども、入込んだ越度と云ひ、夫をさみする詞の端、聞くに辛さもいやまさる、涙隱して。
唐織　入江さま、花に准へ、名に顯はし、非を攻むるお前の存分、返す詞も家來の仕落ち、今は此まゝ歸るとも、滿つれば缺くる道理にて、今日のお禮は重ねてキッと。
入江　オヽ、そりや仰しやるまでもない。わたしが方に非太刀は受けぬ。この以後主人の領分へ、露ほどもお觸りあらば、二度と免しは致しませぬぞ。
〽殘す詞も針の尖、眞綿に包む唐織が、立ち寄る所を止むる下部、是非も涙に道筋を、左右へこそは別れ行く。
ト兩人、思ひ入れあつて、双方へ侍ひ奴附き、別れ別に皆入る。
〽爰に信州筑摩郡のほとりに住む、慈悲藏といふ者あり。生得親に孝心の、道は昔の郭巨にも、替らで積る年の數三十路の上はやう／＼と、二つか三つかの幼な子を、抱き入れたる懷の、內曇りなる冬の空、寒さを凌ぐ種ならで、歎きの種となり振りも、茫然として彳めり。
ト向うより、慈悲藏、子を懷に入れ出で來り
慈悲　ハア、誠や、人間の吉凶は生るゝ時の運に任すといふ。母の胎內を出でしより、誕生の祝儀とて、さゝんざ謳ふ喜びは、貴人高位は云ふに及ばず、下萬民の我れ我

れまでも、喜びに喜びを重ぬるが親子の緣、それに引替へ其方は、僅か慈悲藏が悴と、生れ來るも其方が因果。親の心子知らずと。

〽我が肌付ければうつゝなく、結ぶ榮華も夢の夢。

頑是なけれど聞いてくれ。親として子まで捨つるは、人間ならぬ境界と、笑ひしこの身に廻り來て、今といふ今、其方を、爰に捨て置くこの親は、一人の母へ孝の爲捨てれば拾ふ神佛の、力をかつて成人せよ。親と思ふな、子でないぞ。

〽思ひ切つても切りかぬる、產みの母の嘆きといひ、我れも不便さ身に迫れど。

其方を庇へば不孝となり、孝を立てれば其方が難儀。理に迫りたる思ひ子を、捨つるこの身の孝行より、捨てらるゝおことが孝行。むごいとばし思ふなよ。

〽云ひわけ涙目も明かねば、ソッとかたへに置く土の、上に臥したる幼な子が、ワッと泣き出す聲に恟り抱き上げ、泣くを道理と爰かしこ、山を越えて里へ行た、里の土產の見納めと、抱きしむればすや〳〵顏、流石童の氣さんじと、打守り〳〵。

名は慈悲藏の慈悲もなく、いま目前に捨て置いて、歸ると知らぬ心根を、思ひ出せば、不便やなア。

〽いとゞ涙のやるせなく。

ア、我れながら誤まつたり。心弱くては叶ふまい〳〵

〽包み廻せし綿の香の、思ひは二重胸の闇、元の所へ押直せど、知らぬ子供の寐入り端、一世の別れと繰り言を、跡に殘して雪國の、積る嘆きと知られたり。

ト慈悲藏、赤子を畚の中へ入れ、心殘して向うへ入る。

〽かゝる折から甲斐の國の執權、高坂彈正時綱、供人數多引具して、當所筑摩の御社へ、詣での道も榜木の傍ら、件の捨て子にキッと目を付け。

ト高坂彈正、上下大小。供侍ひ大勢附き出て來り

高坂　人音稀れなる街道に、捨てられし幼な子は、犬狼の餌食は必定。

〽家來を止め步みより、

ムウ、最早水子といふでもなく、男子と見えて氣高き寐顏、賤しからざる者の悴、何ゆゑ爰に捨て置きし。仔細は如何に。

〽見廻す小袖の括け紐に、付けたる下げ札、手に取上げ。

ナニ〳〵ー甲州の住人山本勘助ー ムウ、この山本勘助といふは、生國は三河の者、山賤と見えて魂ひは、異國

の韓信孔明にも劣らぬ軍者。主人兼ねて御懇望。かゝる亂世のその中でも、諸方に招く今日只今。この幼な子に名を記し、捨てたる主こそ芳ばしき、勘助を味方に入るる信玄公へよき土産。ヤア／＼者ども、身が屋敷へ連れ歸れ。

越名　ヤレお待ちなされ、彈正どの。

ト詞にハッと若黨中間、抱き取らんとする所へ。

〽聲をかけたる立派の侍ひ、越名彈正忠政、我が領分に打通れば、高坂は甲斐の領、榜木を中に挾み箱、不和なる中の兩執權、すは事こそと下部まで、片唾を呑んで聞きゐたる。

ト上手より、越名彈正、上下、鎗持ち、挾み箱持ち連れて出て、兩人とも挾み箱に腰掛ける。

越名　イヤナニ高坂どの、只今物蔭より承れば、それなる捨て子が下げ札に、山本勘助と書き付けしゆゑ、お拾ひなさるゝ御所存、尤もとは存ずれども、見まする所、双方の領分へかゝり合せし上からは、貴殿の儘にもなりますまい。手前の主人長尾謙信、日頃望みし折に幸ひ、その姓名を書き現はし、爰に捨てしは、某が、願うてもなき忠義の一品。貴殿に遣つては武士が立たぬ。是非連れて歸りたくば、彈正が首諸とも。さもないうちは、いつかな叶はぬ。

高坂　ホヽウ、さい目の論なら金輪際、拾はにやならぬ幼な子が、踏みたる足は手前の領分。

越名　イヽヤ、さにあらず。物の始めを頭と云へば、此方の領分を、枕としたる山本勘助、越後の國の旗大將、見ごと貴殿が拾ひ召さるゝか。

高坂　オヽ、云ふにや及ぶ。我が方へ踏み延ばしたる足元が、肝心かなめの甲斐の國、高坂彈正、拾うて見せう。

越名　イヽヤ、越名彈正が連れ歸る。

高坂　見事貴殿が。

越名　おんでもない事。拾うて見せう。

高坂　サア。

越名　サア。

二人　サア／＼／＼。なにを。

〽刀の柄、理を非にさせぬ詞詰め、爭ひ爰に二人の女房、疾より立ち聞き、この場の仕儀、見やる眼も角菱の、銘銘夫を押し隔て、高坂が妻、威儀つくろひ。

ト入江、唐織出て

唐織　及ばぬわたしが一思案、女の差出がましけれど、彈

正どの、聞かしやんせ。甲斐と越後の領分へ、捨て置きし幼な子は、兩家に望む山本勘助。これを手筋に召抱へる、お前方の胸の內。一方へ拾はれては、是非一方は國の耻。その爭ひの基となる、肝心のこの子に乳も呑まさず、もしもの事があつたならば、お望みも水の泡、何にもせよ兩方より、乳房を含めしその時に、いづれなりとも呑み附く方、それを印しにお拾ひあらば、どちらに引けも劣りもないと、わしや思へども、跡や先、思案してたべ我が夫樣。

〽流石女の智惠の海、實に高坂が妻なりし。

高坂　女房、出かした。爭ひ止むる乳房の鬮取り、幸ひ其方が持ち合せし、乳を與へて試みん。彈正どのも相應の、乳母でもあらば、お出しなされ。

〽入江に當てたる詞の端、聞くよりカツとせき立つ入江

入江　おかもじまさの御思案に、鼻毛延した今のお詞。越名彈正忠政が女房、乳母奉公は致さぬぞ。ハイ、乳母奉公は致しませぬぞ。いま一言仰しやつたら、二度と許しは致しませぬぞ。

越名　ヤイ〳〵、馬鹿者め。大事を前に置きながら、無益の舌の根動かすな。イヤナニ、高坂どの、負うた子に教へられるとやらで、內室の詞に伏し、女房々々が乳を勸め、どちらへなりと片を附け、この場の別れは如何でござらう。

高坂　ホヽウ、そりや此方も望む所、呑むか。

越名　呑まぬは

高坂　互ひに運づく。唐織、早く〳〵。

〽早う〳〵と勸められ、だくつく胸を押し靜め、抱き上げれば、目をぱつちり、明けて三つの幼な子が、わつと泣き出す口のうち、乳房含めてすかしても、呑む體さらにあらざれば、見合す夫婦が顏と顏。

入江　コレ、申し、唐織さま、なんぼ勸めさしやんしても、子供はどうでも正直な。ドレ、わたしが代りませう。

〽わしが代ろと抱き取る入江、心に拜む神よりも、賴みに思ふこの乳房、たつた一口呑んでたもと、ゆぶり步けど怪我な事、猶も正體泣き叫ぶ、聲を止めんと手に汗を握り詰めたるいたいけも、憎やとすねて置く露の、賴みの綱も切れ果てし、入江が思ひ唐織も、殘り多さに、又立ち寄り、すかしなだめて抱き上げれば、泣きやむ不思議、女房より、高坂彈正大きに喜び。

高坂　軍師山本勘助、信玄公の御味方。

〽と云はせも果てず。

越名　ヤア／＼、嗜い／＼。兩方ともに呑み付かねば、未だ善惡知れざるうち、其方へ連れ歸る、その云ひ譯承らう。

〽と詰めかくる。

高坂　ホヽウ、合點ゆかずばよく聞かれよ。入江どのが抱き上ぐれば、泣くは治定、あの如く、身が女房が手に有るうち、泣かぬが緣ある、これ證據。また二つには、甲州の住人山本勘助とあるからは、紛ふ方なき手前の領分最前ちらと承れば、越後領へ指さゝば、この後は免さぬとやら。その御內室の詞もあれば、これとても又その如く、幼なけれども甲州の町人、其許がお構ひあらば、却つて狼藉國賊の、名を取らるゝか、彈正どの。

〽先にかけたる詞の裏釘、折返されてさしもの彈正、返答せき切る女房入江、思へば無念と唐織が、抱きし幼な子無理やりに、引取ればワッと泣く、

唐織　これは無禮な入江さま、先刻の喧嘩に負けたる代り、この子ばかりは叶ひませぬ。

〽あなたこなたといどみ合ふ、裳ほら／＼妻と妻、顏はほのめく薄櫻、亂れ散つてぞ爭ふ風情、一度に分くる夫と夫、中にも高坂聲はげまし。

高坂　實にや至つて正直は、頭に宿る神の慈悲、一陽の春を待ち、雪中の梅にも增る主君の喜び、この身の忠義。

唐織　さればいなア。お慈悲深い信玄さまの、御威勢が顯はれて、わたしが無念もたつた今。ナア申し、入江さま最前のお詞に、お前の殿御を何とやら。いま一言御所望でござりまする。

〽嘲る女房。

越名　ホヽウ、聞きたくば名乘つて聞けん、よつく聞け。

〽長尾入道謙信が郎黨。

越名　越名彈正鎗彈正。

〽突き出す鎗先。

ト家來の鎗を引取り、高坂に突いてかゝる、品よく留めて

高坂　ムヽ、ハヽヽヽ。天晴れ手練のこの鎗先、受けてはたまらぬ。大事の幼な子、連れて手前は逃げ彈正、唐織來れ。

〽立ち別るゝ、胸に一物、二人の彈正、爰に捨て子の隨一と、その名も高き山本氏、伴ひ歸るぞ、ゆゝしけれ。

トいづれもよろしく見得、三重にて　　幕

四幕目

山本勘助住家の場

役名＝百姓、慈悲藏、實ハ直江山城守種綱。母、越路。長尾三郎景勝。慈悲藏女房、お種。高坂妻、唐織。百姓、正五郎。同、戸助。百姓、横藏、後ニ山本勘助晴義。

本舞臺、三間の二重舞臺。上手、折り廻し障子屋體。下手、藪疊、入り口、例の所。藁屋根にて雪持ち。舞臺雪布を敷きつめ、在鄕唄、雪颪しにて幕明く。

〽秋の末より信濃路は、野山も家も降り埋む、雪の中なる白髮の雪。女ながらも故あつて、男のすなる名を名乘る、山本勘助と人每に、岩間の水の音絶えて、木の葉の衍二つ三つ、年もいたいけ幼な子を、すかすお種が手枕に、ねんねが守りはどこへいた、山の薪をゑいさつさ、さらば爰らで一休み。

ト後、在鄕唄になると、向うより、戸助、正五郎、いづれも鋤鍬かたげて、出て、內へ入る。

正五　お種女郎、居やつしやるか、冷えますなう。

たれ　アイ〳〵、どなたでござんすえ。

ト　お種、世話女房の形にて赤子を抱き、奥より出て

オヽ、正五郎さま、戸助さま、吹雪で外は歩かれまい。お茶も沸いてござんすわいなア。

戸助　イヤ〳〵、構ふまい。子持ちは手が放されぬ。慈悲藏どのは留守かの。今日も今日とて、寄り合ふと、あの人の噂、阿母への孝行は申すも愚か、兄への深切。

正五　ほんの子は次にして、兄貴の子の次郎吉を、大切にしらるゝ女夫の衆の心意氣。名も慈悲藏と云ふが尤も。

戸助　されぱいなう。それに又、兄横藏どの、兄弟とてあのやうにも違ふものか。親への不孝さ、弟への酷さ。

正五　親兄弟にさへあれぢやもの、村中で持てあますが尤も。外を內と出歩いて、隣りあたりへたゞれ込み

戸助　人の娘、下女婢、當り次第に孕まし、其おどもりのあの子悴も、親に似た子の鬼子であらう。

兩人　ハヽヽヽヽ。

〽口はさがなき山道を、歪まぬ武士の梓弓、胸の袋に押し包み、孝を外さぬ慈悲藏が、獵漁りも母の爲、流れに沿うて立歸る。

ト在鄕唄になり、向うより慈悲藏、石持の着附け、お

しよぼからげにて、笹の葉に鮮の差したのを持ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來て内へ入る。

慈悲　いま戻りました。

正五　孝行者、お歸りか。佛性の慈悲藏どの、殺生に出られたも、阿母への養ひか。それ程にさつしやつても、氣に入らぬあの婆樣。さりとは、固意地者。

慈悲　ア、コレ、勿體ない事云うて下さんな。たとへ身を碎いても、胎内にあるから今日までの親の苦勞、較べて見れば百分一。あの鳩部屋の鳥でさへ、鳩に三枝の禮ありと、諸鳥に勝れて孝行な鳥。どこからともなうこの家の、軒へ集まつて來るも、慈悲藏が心少しは通じ、類を以て集まつたりと、思うて嬉しうござります。

戸助　成る程、それはこちとらも、さる書物で見て置いた。鳥は親の養ひを、哺み反すといふ本文。おれが毎晩女房に、孝行する心が通じて、鳥がカア／＼喚の說、去んで見ようか。

正五　そんならば夫婦の衆。

慈悲　お二人樣。

正戸　おさらばでござる。

慈悲　ようお出でなさりました。

ト在郷唄にて、兩人、下手へ入る。

慈悲　母者人は最前から、お休みなされてか。お目が覺めぬ其うちに、お肴料理して上げん。次郎吉も寐入つたか。

たれ　ハイ、この子が機嫌よう育つにつけても、氣に掛るは峯松が事。ほんに兄御の横藏さま、如何に我が子ぢやないとて、捨てゝしまへと無理ばかり。お前が外へ出やしやんすと、わたしを女房にしようのなんのと、辛い悲しい事を聞くも、お前の孝行立てる爲と、辛抱するにもしられぬは、眞實な子を胴慾な、餘所へ遣つたと云はしやんすが、その先は、何國の誰れでござんすぞいなア。

慈悲　ハテ、それを問ふが、もう未練。氣遣ひしやんな。この貧家に置くより、乳母に乳母を付ける結構な内へ、養子にやつた。彼奴はきつい果報者、もう思ひ出さずともとんと捨てたと思つてゐや。病み煩らひといふ事もある、萬一、先で死んだら、ない昔ぢやと諦らめて、おりや、ゐる氣ぢやわい。

ヘ云ひながら、犬狼の餌食とも、なりはせぬかと子を思ふ、心は一つ一間の内、ソツと窺ひ。

慈悲　これはさて、寐入つてござるかと思へば、裏へ出て、御氣丈千萬。炬燵に火もあるか、追ッ付けお膳の用意し

や。
たれ　アイ／＼。
〽片時忘れぬ孝行は、又と類も嵐吹く、影も吹雪に高足駄。
ト これにてお種、次郎吉を抱き、奥へ入る。慈悲藏、上手へ入る。
〽踏み分け尋ね來る人は、長尾三郎景勝、萬卒は求め易く、一將は得難しと、この隱れ家の弓取りを、慕うて來る道すがら。
ト 向うより景勝、好みの拵らへ、足駄穿。家來を連れて出で來り
景勝　ハテ、降つたりな。昔、唐土蜀の劉備、諸葛孔明を召されんと、臥龍公を尋ねし時は、野道山路も銀世界。いま又爰に我が望み、雲に隱れし山家の景色、ハテ、類ひなき眺めぢやなア。
臣一　實に我が君の仰せの如く
臣二　この大雪を踏み分けて
臣三　尋ね來りし片田舍
臣四　藁家の軒に立つ煙
臣一　心の目當ては
皆々　慥かにあの家。
景勝　皆の者。
四人　我が君樣。
景勝　イデ、立寄りて窺ひ見ん。
〽三度びおとなふ古事の、雪もいとはぬ門の口。
ト 始終雪颪し、雪の合ひ方にて、景勝、本舞臺へ來る。後より右の人數、皆々附き添ひ來て、門口へ扣へる。景勝は高合ひ引にかゝる。皆々、下手に扣へる。
〽二重の腰の白妙に、枝も撓の雪折れ竹、杖と我が子に助けられ、庭に佇む老母の風情。
ト 始終雪颪し、合ひ方。上手より、慈悲藏、越路の手を引き出る。
慈悲　申し／＼、この雪に、さりとは冷えまする。蒲團の上にござつてさへ、御老體のお身、平にあれへ。
〽と取る手を拂ひ。
越路　七十に餘つて、愚鈍にはなつたれども、子供に物は教へられぬ。すべて親に仕へるに、起臥しの介抱は誰れもする。何事に寄らず、親に背かぬやうにするのが、誠の孝行。寐てばかりゐるも氣詰まりさに、雪の景色を見ようと思ふ、母が心を妨ぐるは、なんと不孝であるまい

か。

慈悲　ハヽア、一々誤まり奉る。その段には心付かず、お年寄られて、一日々々、御氣力の落ちるが悲しく、今日も漁に出で、元氣を養ふ谷川の。

〽ます〳〵お達者なるやうと、志しの捧げ物。賞翫なされて下さりませ。

ト魚を出す。越路思ひ入れあつて

越路　イヤ〳〵、物の命を取り、それがなんの養ひ。眞實親の養ひならば、山川の珍物より、つい裏にある藪の中、筍を掘つて來い。

慈悲　ハア、それは御意ではござれども、この寒中に筍が

越路　サア、ある物を取つてくるは、子供のする事。無い物を取つてくるが、ほんの孝行。斯う云はゞ母が難題、云ひ付けると思はうが、この位の難題に困るやうな器量では、智者と呼ばれて人に知らるゝ、弓取りにはなられぬぞよ。妾が夫は天が下に聞えし軍師、一生主人を取らず過された、忘れ筐の兄弟の子か、器量を見定めるまでは女子ながらも夫の名を繼ぎ、山本と名乘る母。二人のうちに、勘助といふ名を讓り、父の軍法奧儀の秘書の卷、傳へうとは思へども、それでは中々勘助にはなられぬ。

慈悲　サア、その名跡を受けたさに、心を盡すこの慈悲藏。

越路　それ〳〵、その名がほしさに、孝行盡すは、眞實の孝ではない。上皮ばかりの僞はり表裏。

慈悲　これは〳〵お情ない。苗字を望むも出世して、母人の喜び顏拜みたいばつかり。兄者人の心入れと、一つに思し下さるは、餘りにつれないお心。お胴慾でござりまする。

〽雪に食ひ付き落涙に、老母は猶も腹立て聲。

越路　コリヤ、なんぼ悧巧に云ひ廻しても、この年月膝を離れ、他國してゐて今日この頃、俄かに深切、これが僞はりといふ證據。おのれが心に引比べ、兄を不孝と云ひなす惡心。思へば見るもいまはしい。

〽杖振り上げて打たんとす、老の力身に踏みくじく、駒下駄飛んでよろめく足、こは危なやと抱き止むれば。

イヤ〳〵、おのれが世話は受けぬ。そこ退きをれ。

〽親と子の、心合はざる片しの下駄、景勝透かさず拾ひ取り

ト駒下駄、門の外へ飛ぶ。景勝、直ぐに拾ひ、袱紗を出し載せ

景勝　お召し物、これに候ふ。

〽老母が前へに押直し、退つて頭を下げらるゝ。母はつく／＼打まもり。

越路　人品骨柄、只人とも見えぬ御方が、賤しい婆に履物を直されしは、黄石公に沓を與へし、張良が俤。ハテ、〽奥床しい御方や。お近附きにもなつて、とくとお禮も申したい。コリヤ、慈悲藏、其方に用はない、立つて行け。

慈悲　ハツ。

トうぢ／＼する。

越路　早う行きや。

慈悲　ハツ。

越路　行けと云ふに。

慈悲　ハ、ア。

〽何か子細は有磯海、母の心を計り兼ね、是非なく奥へ入りにける。

ト慈悲藏、奥へ入る。

越路　いざ先づ、此方へ。

〽請ずれば。

景勝　然らば御免。

〽然らば御免と景勝は、辭する色なく座に直り。

越路　見る影もなきあばら屋へ、高位のお越しは、これには何ぞ仔細の有らん。

景勝　御推量少しも違はず。黄石公に名は劣らぬ、軍者山本氏の御子息を、召抱へて一方の、大將に頼まん爲。身不肖なれども越後の城主、長尾謙信が嫡子三郎景勝、これまで參上仕る。

〽禮儀正しく述べらるれば、

越路　さてこそ／＼、初めより、自然と備はる御眼差。してお望みなさるゝは、兄弟のうち、兄か弟か。

景勝　イヤ、景勝が望むところは、惣領の横藏どの。

越路　ハテナア。最前より御覽の通り、孝行な慈悲藏を差措き、不孝な兄の横藏を、御家來になされうと仰しやる、あなたのお心は。

景勝　イヤ、そりや其方に覺えある事。いつぞや諏訪明神の社内にて、面體恰好とつくり、見屆け置いた横藏どの、是非とも所望いたしたい。

越路　ムウ、さう仰しやれば思ひ當る。よく／＼に思し召せばこそ、大名のお手づから、否と云はさぬこの婆に、下駄を授け給ひしは、天晴れ敏き〽殿ぞかし。

兄は只今他行なれど、この母が成り代つて、御家來に差上げませう。

景勝　過分々々……その箱、これへ。

家來　ハア。

ト家臣、白木の箱を越路の前に置く。

景勝　如何に老女、主從となるからは、一命を捨つるとも、忠義を勵むは武士の習ひ、志しのこの品、是非に受納いたしてくりやれ。

越路　ハテ、心ありげなこの賜物。中をちよつと。

ト進物箱へ手をかけるを

景勝　アイヤ、浦島が甲斐もあるかや玉手箱。明けて云はれぬこの箱を

越路　是非とも所望、身共が手土産

景勝　主と祟むか。

越路　家來と呼ぶか。

景勝　その御念には及ばぬ事。

越路　もし違變に及ぶその時は

景勝　母が皺首、差上げませう。

越路　天晴れ、老女。

景勝　景勝さま。

景勝　キッと詞を、番へ申した。

〽詞詰め、威勢鋭き北國武士、越後縮の物馴れて、引かぬその場の信濃路や。

トこれにて景勝、門口へ出て、ちよつと思ひ入れあつて

老母、近う。

越路　ハア、。

ト門口へ來り、辭儀する。

景勝　五月雨や、池の眞菰に水まして、いづれ菖蒲と、引きぞわづらふ。

越路　五月雨や、池の眞菰に水まして

トちよつと思ひ入れある。

景勝　いづれ菖蒲と、引きぞわづらふ。

ト母と顏見合せ

老女、さらば。

〽別れてこそは、歸らるゝ。

トこれにて越路、箱を抱へて奥へ、景勝、思ひ入れあつて、供を連れ、向うへ入る。

〽木曾山木立ち荒くれて、無法無徹をしにせにて、名も横藏の筋違道、草鞋の日も降り埋む、餌竿擔げて門口よ

り。
ト雪颪し、出の唄になり、向うより横藏、好みの形。蓑笠草鞋にて、餌竿を擔げ、捨ぜりふにて出て、直ぐ門口へ來り

横藏　母者人、いま戻つたぞや。

〽聲に老母がほや／＼顔。

ト奥より母、慈悲藏、お種も出て來り

越路　オヽ兄、待ち兼ねました。この間はマア、どこへ行つてゐやつた。

横藏　ハテ、この和郎は、おれが足でおれが歩くに、どこへなと飛び次第。飛びついでに戻りがけ、小鳥十羽ほど取らうと思うて、顔も足も切れるやうなわいの。

越路　道理ぢや／＼。サヽ、ちやつと上がりや／＼。

横藏　アイ／＼。

〽草鞋の紐、手づから母の慈悲藏も、足の湯を取り機嫌取る。

慈悲　兄者人、お足洗ひませう。

越路　イヤ、コリヤ／＼、孝行な兄が體に、不孝な弟の手をさへるは穢らはしい。母が洗うてやりませう。

〽一人に辛く一人には、甘い女子の鼻の先、泥膩突き付け。

横藏　エヽ、若い女の手の觸るはよいものぢやが、干物のやうな母者人の手で、情の罪科ぢや。イヤサマ、おれは孝行者。この小鳥も晩の夜食に、こなたさんに喰はすのぢやない、燒いてもらうておれが喰ふ氣。兎角おれが口さへ養へば、こなさんの氣も休まる。ナウ、母者人。

越路　オヽ、さうとも／＼。アノマア孝行な事わいなう。サア／＼、炬燵に火もしてある。サア／＼、あたりやあたりや。

横藏　ムウ、こなさんが今まであたつてゐて、なんの恩に着せる事。

ト炬燵に足を入れて

エヽ、こりやマアぬるい、水炬燵ぢや。

越路　イヤ／＼、あんまりきついは、のぼせて悪い。

横藏　それがたわけといふもの。もうこなさんも、追ッ付け火屋へ行く體、稽古の爲、きつい火にもあたつて置かしやれ。サア、足揉んで下され。

〽踏み出す兩足、慈悲藏見兼ね。

慈悲　ドレ、わたしがちつと。

〽と立ち寄れば。

越路　また差出るか、小癪者。兄や、斯うかや／＼。

〽撫でさする、ほんそ息子のくわひら足。

横藏　ア、、とてもなら美しい、お種が揉んでくれりやよいに。ハア、、貴樣は子守りか。峰松はどうした。

たね　ハイ、お指圖の通り、思ひ切つて一昨日、主がどこへやら。

横藏　ムウ、捨てゝしまうたか。よい事／＼。一體、おりや貴樣に惚れてゐる。時に幸ひと、嚊のそげめはてこねてしまうて、跡に殘つた子悴のその次郎吉、邪魔な餓鬼め、締め殺さうか、とは思うたれど、味なもので、子と云ふものは、親よりちつと可愛い者ぢや。又、大きくなつたらおれに似て、孝行にしをろかと思うて、貴樣に育てさすからは、ナウ慈悲藏、畢竟わが身と相合ひの子とても事に女房も、相合ひにする合點。お種、顏振らずと、ウンと云やいの。それを否と云ふと、慈悲藏が大事にかける、この母者にあたるぞよ。コレ、しつか／＼と揉ましやれいなう。エ、、また火がぬるいわい。

ト跳ね廻り、思ひ入れある。

〽戀の意趣を炬燵に當る非道者、持て餘してぞ見えにける。折から表へ先走り。

トばた／＼にて向うより、侍ひ一人、走り出て、門口にて

侍ひ　山本勘助どのに用事あつて、大僧正武田信玄、只今これへ。

ト引返し入る。

〽思ひがけなき夫婦が不審、仔細あらんと横藏が、起きも直らず空寐入り。

越路　ハテサテ、思ひ寄らぬ大身のお入り。卒爾には母も逢はれまい。慈悲藏、もてなしや。横藏、これはしたり。何やら云ひ／＼寐入つたさうな。風引きやんなや。

ト越路、屏風にて横藏を圍ひ、思ひ入れあつて奥へ入る。

〽一間の障子、引立て窺ふ、表より、匂ふ留木の高坂が妻と知らせて堆き、雪の懐幼な子を、抱て幾重の柴の庵。

ト唐織、子を抱き、家來引連れ、向うより出て

唐織　其方達は、村はづれにて供待ちしや。

〽家來は先へと追ひ返し、行儀正しく打通る、訝かしながら手を突いて。

慈悲　信玄公と思ひの外、女中のお名は。

唐織　ムウ、成る程、御不審は尤も。僞はりならぬ信玄公の、コレこの寐顔に對面なされ。

〽云ふに女房立寄つて。

たれ　ヤア、峰松か、戻りやつたか。

〽飛び立つばかりの胸、押し鎭め。

これは〳〵、御苦勞さまや。そんなら峰松を貰うて下さりましたは、お前樣かえ。いかいお世話さまでござります。

唐織　コレ〳〵、麁相云ふまい。甲斐の國へ養ふからは、最早一國の世繼ぎ、卽ち今日の信玄公。孝心深き慈悲藏どの、誠に軍術の達人と聞き及ぶ。師範ともお賴みなされん爲、わざ〳〵見やしやんせ、コレこの愛らしいこの信玄が抱へに來た。お請け申されてよからう。

〽恩をかけたる名將の、情は肝にこたゆれど、とぼけた顏で。

慈悲　これはしたり、私しはこの在所の山賤、鋤鍬の外、何も存じませぬ者を、軍術の師範なぞとは、勿體ない事仰しやるまいぞ。

たれ　コレ〳〵、こちの人、お前の器量を、聞き及んでとあるからは、きつい譽れなことぢやぞえ。卑下するも事による。ハテ、軍法奧儀は母樣の傳授を讓り受けて。

慈悲　さればいやい。それを貰うて山本勘助になつたれば、抱へられまいものでもなけれど、未だ姓も變へぬうち、軍術の大將のと、そりや山の芋を蒲燒にするやうなもの。名さへ慈悲藏とて、蟲さへ踏み殺さぬ者が、軍に出て人の首が、なんとして〳〵。

〽とつても付かぬ顏付きに、唐織ハツと胸せまり。

唐織　不調法な女の使ひ、お氣に入らいで仰しやるのか。どうでも味方に付いてもらはねば、ならぬと云ふその譯は、桔梗ヶ原にこの捨て子、

たれ　エ、。

唐織　山本氏とある書附けを、印しに拾ひ取りは取つたれど、サア、どうも力に及ばぬは、肝心の乳に吞み付かず、なんぼ抱いて突き付けても、あつち〳〵と指さして、泣いてばかつり。この大將に、兵糧が無ければ命も危ふし、その兵糧を續ける計謀に慈悲藏との、お前の心にありさうな事。甲斐の國へ味方に附いて、夫婦して守立てようと、思ふ心はござんせぬか。このマア、ちつとの間に、コレ、どこもかも細つた事、見やしやんせ。道理でもある。眞實の、母御の懷を離れて、他人の手になん

の育たう。夜はよう寐ず、晝はウツ／＼泣き寐入りに。
＼寐た顔のいぢらしさ、ほんに見る目が悲しいと、語るうちより女房が。

たれ　オヽ、可哀や、さうでござんせう。

＼わつと泣き出す母親の、聲に目覺ましゝがみ付き、縋る乳房は一人にて、兒の手柏の二面、儘ならぬこそ恨みなれ、一間に母の聲高く。

越路　コリヤ／＼、慈悲藏、子供を餌に恩かけて、味方にせんと後穢ない信玄に、奉公しては武士が立つまい。さりながら、軍法奧儀も傳はらず、家の苗字も繼ぐ氣が無くば、勝手次第。

＼と沒義道に、云ひ捨て障子ハタと閉す。

慈悲　ハツ。

＼ハツとばかりに立ち上がり、我が子を取つて引き放し須彌蒼海の大恩を受くればとて、母の恩には、いつかないつかな、信玄に仕ふる事、存じもよらず、變替へ申す。コリヤ、女房、一旦捨てたこの伜に、見苦しいなに吠える。緣に曳かれて知行取つては、末代までも我が名折れ。親子の緣をサツパリと、切つてしまへば信玄に、恩もなく、また義理もなし……コレこの竹も、元は竹に雀と離れぬ仲、いま餌差し竿となる時は、鳥の爲には仇敵、殊によつたら親子兄弟、敵味方となるも武士の道。御返事はこの通り、幼な子連れて、はや歸られよ。

トせりふのうちに餌差し竿を取つて、思ひ入れあつて二つに折り

＼詞鋭どに云ひ放す。

唐織　ハア、この上は力なし、とは云へ歸つて御主人や、夫になんと詞さへ。

＼泣く／＼抱き立ち上がる。これなう峰松一世の別れ、せめてマアこの乳が、一口吞ましたいと、慕ふ女房を引退けて、枝折り戸ピツシヤリ表には。

ト唐織に赤子を渡し、唐織、不承々々に取ると、お種、行かうとするを慈悲藏、お種を突き廻して、唐織を門へ突き出し、門口締めて貫入れを栓に差し置く。

＼心は殘る雪中へ、頑是涙の子を抱き下ろし、裲襠の下くゝり、括り添へたる後紐、垣に結ぶは義理の綱、神や捨て置く竹の子笠、いたいけ頭に打着せて。

ト唐織、笠の中へ抱子を入れ、裲襠をかけ、花道へ行きかけ、思ひ入れあつて、

唐織　山本の氏を繼ぐ慈悲藏どのを、軍術の師と頼まんと、

これまで來給ふ信玄公、どうも此まゝでは歸られず、是非とも味方に付くといふ、一言を聞くまでは、この信玄は其許の、門口を立ち去らず、雪に凍えて死すまでも、爰に座を占め返事を待つ。大將の命、助けうと殺さうと、御思案次第、よい返事を賴み入る。

〽しづを掛けたる雪の笠、思ひを殘し捨てゝ行く。

ト思ひ入れあつて下手へ入る。

たれ　ヤア、そんなら坊は、まだ外にゐやるのか。

ト門口へ行きかゝるを、慈悲藏止めて

慈悲　コリヤ〳〵、門には誰れもゐぬ。よしゐてからが赤の他人、いま側へ寄るとナ、信玄の恩を受けたになつて、母の一言反古になる。この簀戸の外へちよつとでも、出るが否や、夫婦の緣もこれ限り。

〽腰提げの紐かきかねを、括る酷さは我れながら、如何なる惡魔、鬼か蛇か。

六韜三略の望みあるこの慈悲藏、慈悲も情も知つては居れど。

〽母の詞は背かれぬ。

どうで乳房に離れたもの、とてもない命、凍えて死なば死次第。ソレ、その子を袖にしては、兄貴への義理が立たぬぞ。ハア、何かに紛れて、大事の孝行怠つたり。ドレ、裏へ行て雪の中の、筍を掘つて進ぜう。

ト身拵らへして、簑着て、草鞋穿き、鍬を持ち、笠を持つて

〽簑笠取つて打ちかつぎ、あつき親子の緣を絕つ、鍬振りかたげ。

この寒氣に、荒男でさへ堪らぬもの、ましてやよたけもない體に。ア、子を捨つる藪はあれど。

〽親の詞は捨て難き、裏の藪へと踏み分ける、雪より先にいとし子の、埋もれ死なん不便やと、見合す顏に降る淚、零れ爭ふ濡れ翅、しをるゝ夫のうしろ影。

ト兩人、よろしく振りあつて、慈悲藏、愁ひながら上手へ入る。お種、見送つて、思ひ入れあつて

〽如何に望みがあればとて。

たれ　天にも地にも一人子を、よう酷たらしう捨てられた。今の女中も氣の强い。置いて去ぬ程ならば、お家に殘して去んだがよい。可哀や〳〵、ひもじからうのに、ちつとの間なと、抱きたいわいなア。

〽任せぬ辛さ、次郎吉を、やう〳〵そつと下に置き、差足ながら庭に下り、覗けば門にしよんぼりと。

坊よ、それがマア、なんと命があるものぞいなア。

〽明けんとすれどかき金に、錠の代りの貞結びは、酷やつれなとあせる程、雪に濕つて明かぬ戸に、乳たい〳〵も絶え〴〵の、風にうたてや次郎吉が、ワッと泣く聲、ハア悲しやと、また駈け戻り抱き上げて、雪やころゝん、霰やころゝん、こはそもなんたる因果ぞや。

この子、憎くいぢやなけれども、我が子に乳が呑ませたい。コレ、ちつとの間、寐入つてたも。

〽心も空にかきくらし、また降りしきる白雪に、外に泣き聲八寒地獄、劍を呑むより身に堪へ、思はず知らず轉び下り、碎けよ割れよの念力に、外るゝ戸より身は先へ。

ト門口の戸外れ、外へ轉け出て

可哀や、可哀やなア。

〽我が子を肌に抱き締め、流涕こがれ泣き聲に、唐織小蔭をつッと出で。

ト お種、子を抱いて憂ひのこなし。唐織出て

唐織 信玄公を抱き上げ、乳房をふくめ參らすからは、慈悲藏どのは最早此方の味方、夫に知らせて喜ばせん。オオ、さうぢや。

〽勇んで舘へ立歸る。ハッとお種も心付き、うろつく隙に。

トうろ〳〵する。唐織、向うへ入る。お種悔り

慈悲 エイ。

〽いづくより、懷劍てうと峰松が、肝先貫き息絶えたり。こは何事と驚ろくうち、次郎吉引立て横藏が、一間をさして駈け入れば。

ト横藏、屏風より出で、赤子を抱き、奥へ入る。手裏劍飛んでお種の抱いたる子死ぬ事。お種、悔り思ひ入れ。

ムウ、さては我が子の害になると、横藏の仕業ぢやの。義理も情ももうこれまで。敵を取らいで置かうかいなア。

〽死骸を小脇にかい込んで、常には弱き女氣も、恨みに強き力帶、奥の間さして。

ト お種、いろ〳〵思ひ入れあつて、子を抱いたまゝ、上手へキッと思ひ入れ。此もやうよろしく、道具廻る。

本舞臺、一面の藪疊、眞中切り破り、舞臺前に、雪畦、切り穴あり、一面に雪布、所々に雪の松。正面に、慈悲藏、鍬を持つてキッと見得にて、よろしく道具納まる。

〽はや日も暮れに近づきて、鐘孝行の道ぞとて、古き例の跡を追ふ子ゆゑの闇に白妙の、道も涙に見え分かず。

慈悲　なんぼ掘つても、筍が、あらうやうはなけれども、親を思ふ一心を憐れみ、天より授かる事もやあらん。

ト慈悲藏、だん／＼掘ることあつて、鳩一羽飛んで來る。

〽心を込めて一尺二尺、底は白羽の鳩一羽、飛んで下りしも飼ひなれし、鳥も心のあるやらんと、また掘りかへせばまた一羽、友呼び誘ふ生類の、有樣つく／＼打守り

トだん／＼掘ると鳩二羽飛び下り、いろ／＼あつて思ひ入れ。慈悲藏こなし。

最早入相。諸鳥塒に歸る頃、一羽ならず二羽三羽、集まり來るは、ハテ心得ぬ。誠や兵器地にある時は、鳥群をなすと云へり。我が父は日本の軍師、この所にて世を去り給ふ。一生諳んじ置かれたる、六韜三略の秘密の卷、この下に埋み置かれしやらん。さては我が孝心天に通じ、鳥類これを知らせしか。ハア、。

〽有り難し忝なしと、心勇んで掘り穿つ、雪も散亂村雀ぱツと立ちたる藪の中、窺ふ兄が面魂ひ。

ト後より雀數多飛び出でゝ、横藏、鋤を持つて下駄にて出て、キッと見得になる。

ムウ、野に伏兵ある時は、飛雁行を亂る、油斷の塒を窺ふ惡鳥、殺さうと生かさうと、手の内の雀、慥かに手ごたへ、この下を。

トまた掘りにかゝる。

横藏　コリヤ、慈悲藏、埋んである傳授の一卷、われには遣らぬ。兄が出世の種にするわい。

慈悲　兄者人、そりやお前、無理ぢや／＼。

横藏　サイヤイ、無理云ふが兄の威光。阿房烏の孝行ごかし、邪魔ならぬから、しまうて取る。

慈悲　ドッコイ、さうは成りますまい。苗字を繼ぐはこの慈悲藏。

横藏　見事、われが。

慈悲　おんでもない事、繼いで見せう。

横藏　小穢な。そこ退け。

〽小穢な退けと鋤と鍬、落花微塵の雪飛んで、掘り出す箱の二人の爭ひ、道と非道の二筋を、すべりつ轉けつ掴みあふ。

ト雪颪し、大小入り、合ひ方になり、二人、立廻りよろしくあつて、雪の中より箱を出して取り合ひ、下駄

文化十二年七月中村座上演

三世中村歌右衛門の横蔵　尾上梅幸の慈悲蔵

天になり、花道へ行く。また立廻りあつて後へ戻りかけて、箱を取合ひながら、木なしにこの道具廻る。

本舞臺、元の道具へ戻る　前側、障子はめある。内に、越路、白木の三方に九寸五分、白木臺に白無垢上下を載せ、側に置き、着附け、裲襠にて坐り居る。兩人、その爭ひの儘にて舞臺へ來ると、よき程に前後障子を引拔く事、兩人見て悔りして

へはずみにがばと取り落し、池にざんぶと水煙り、騷ぐ群鳥兄弟も、不思議と見とるゝ後より、障子ぐわらりと母の聲。

越路　兩人、待ちや。兄弟ともに武士となり、主人を取るべき時節到來。雪の中の筍を、掘り出したる慈悲藏、今こそ母が心に叶うた。天晴れ孝行、出かした〳〵。其方は最前云ひ付けた通り、裏口四方に氣を付けよ。合點か。

慈悲　ハア、委細承知思る。

へ驅け入る弟。

ト慈悲藏、納戸の内へ入る。

へ横藏は、池中の箱を取上げて、母の御前に差出せば。

ト横藏、以前の箱を取上げて、越路の前へ置き、平伏する。母こなしあつて

越路　サア〳〵、其方には、わけて好い主を取らする。即ち、主人より下されし、裝束も改めさせん。

へしづ〳〵奥の白臺に、無紋の上下白小袖、傍に三方、九寸五分、我が子の前に直し置く。

ト以前の白臺を持ち、横藏の前へ据ゑる。横藏見て

横藏　母者人、こりや何ぢや。イヤサ、コレこの白裝束は何の爲。

越路　オヽ、それこそは冥途の晴れ着。只今其方が首討つて、身替りに立てるのぢやわやい。

横藏　エヽ、滅相な事ばかり。この首を身替りとは、そりやマア誰れが。

越路　オヽ、今日其方が主人と頼みし、長尾三郎景勝公の御身替り。聞き及ぶ武田信玄、越後の謙信、室町の御所に於て、互ひに我が子の首討つて、心底を顯はさんと契約ある由、最前其方を召抱へんとて、來られし景勝の面體、其方が顏にさも似たり。さては母が推量違はず、箱の中に殘されし、この一通に委細の樣子、詳らかに記されたり。主從となるからは、命は君に捧げしもの、武士の因果と諦らめて、潔よう死んでくれ。

横藏　コレ〳〵、何を云ふのぢや。よう思うて見やしやれ。如何に主ぢやとて、まだ知行もくれぬうちに、殺さうと云ふやうな、胴慾な主があるものか。イヤ〳〵〳〵、もうこの主從、とんと變替へぢや〳〵。

越路　イヽヤ、さうはなるまい。いつぞや諏訪の森に於て、殺さるゝ其方が命、助け置かれし景勝公の恩。

横藏　ムウ。

越路　よもや忘れは致すまい。その時の情は、いま身替りに立てん爲。智謀の罠にかゝりしとは知らざるか。恩を知らねば人ではないぞよ。何國へ逃げても、この家のぐるりは、景勝の家來が取卷いて、ちよつとも遁がれぬ。切腹するか。

横藏　サア、それは。

越路　但し、母が手にかけうか。

横藏　サア、それは。

越路　サア。

横藏　サア。

越路　サア〳〵〳〵、返答は、なんと〳〵。

横藏　ムウ。

〽詰めかけられ、籠中の鳥の目はウロ〳〵、透を見て逃げ出す。

トうろ〳〵して、上手へ逃げ行くと、内より

慈悲　エイ。

ト手裏劍打つ。横藏の足に中り、撞となる。

〽膝口發矢と手裏劍に、尻居にどつさり詮方なく。

横藏　是非に及ばぬ。もうこれまで。

〽腹切り刀取るより早く、右の眼に突き込んだり、流石の老母も不審顏、流るゝ血汐を押し拭ひ〳〵。

ト横藏、七寸五分取つて、右の目を抉り、足に立てたる小柄を拔いて、足を括り、手水鉢の側へ行つて、氷を割つて氷にて、よく〳〵我が顏を見て、また手にて眼を押へ、洗ひ、思ひ入れあつて、母の側へ來て

母者人、景勝に似たによつて、身替りに立てたがる、小面倒なこの面に、斯う疵付けて相好變へれば、もう身替りの役には立つまい。

越路　なんと。

横藏　今日只今、父が苗字を繼いで山本勘助晴義。軍法奥儀を胸に蓄へ、三略の巻より大切な我が命、ヤア〳〵、謙信の家來、直江山城守種綱、云ひ聞かす仔細あり。これへ出よ。

〽呼ばはる聲に、一間の內。

ト横藏、キッと見得になると、上手障子屋體の內より慈悲藏、着付け、上下大小にて出て、後より お種、衣裳、補襠の形で出で、上手に、下にて高相引にかゝる。

慈悲 直江山城守種綱、それへ參つて兄者人に對面せん。

〽對面せんと慈悲藏が優美の骨柄、長上下、爽やかに立出づれば。

某、長尾の家臣たる事、深く包んで故郷へ歸りしその仔細、母人には密かに語り、兼ねて申し受けたる兄者人の一命、現在の子を捨てたも、否應云はさぬ命の無心。さりながら、眼をくつて身を全うする大丈夫の魂ひ、あつたら、勇士を殺すは殘念。長く謙信に仕へ、忠勤を盡されよ。

〽云はせもあへず、あざ笑ひ、

横藏 愚か〱。謙信づれが家來には、汝等が分相應、身が主には釣合はぬ。誠山本勘助が崇がむる主人は、忝なくも足利十三代の公達松壽君、これへ誘ひ申されよ。

〽詞の下に高阪が、妻の唐織次郎吉を、傅き申せば山城親子、ハッとばかりに飛びしさり、恐れ入つたるばかりなり、勘助、眞中にどつかと坐し。

ト一間を明けると、內に唐織、子を抱き、立ち身。勘助眞中の炬燵へ居直り

ヤイ山城、只今打つたるこの手裏劍は、先年室町の舘にて、この公達の御母君、賤の方を奪ひ取り、立退く折柄景勝目當に打ちかけたる我が小柄、只今我が手へ慥かに落手。山本の苗字引起さんと、軍學に心を委ぬるところ、武田信玄大僧正、姿をやつし只一人、密かに庵へ來らせ給ひ、足利の行く末覺束なし、汝我が力と成つて事を計れと、名將の一言心魂に徹し、ハア、、畏まり奉ると、即座の領承、

〽弓矢の誓ひ。

越路 オヽ、その時、この母も、只人ならずと思うたが、さては武田信玄公と、主從の契約しやつたのか。

横藏 オヽサ、大魚は小池に住まず、鶴は枯れ木に巣をくまず。智勇兼備の大將に、賴まれ申せし身の面目。

〽直さま都に駈け上り、窺ふ時しも舘の騒動。

義晴公は敢へなき御最後。ハヽア詮方なし。

〽懷胎の賤の方、人手には渡さじと、忍び入つて御家の。

白旗もろとも守り奉り。

〽立退く舘は八方に、提灯松明散る花の、都を後に遠近

嘉永三年三月中村座上演

坂東しうかのお種　　市川男女蔵の母

の、雪の信濃路爰かしこ、月の更科、片山里に。
人知らす匿まふとは、さしもの母も御存じあるまい。

越路　オヽ、知らなんだ〳〵。コレ〳〵、さうして御母堂
の方の、御在所は何國。サヽ、どうぢや〳〵。

横藏　ハヽア、申すも便なき事ながら、憂き事積る產後の
惱み、果敢なくこの世を
〽去り給ふ、跡に殘りしあの公達
勿體なくも我が子と僞り、次郎吉よ〳〵。
〽と呼ぶ度々の空恐しさ。
弟嫁が乳を幸ひ、我が子を捨てさせ、他家のあの子を養
育さする我が心底、我儘無法は一物ありと悟りし老母、
雪の中の筍を、掘つて見よとは天晴れ明察。實に勘助が
〽母人ぞや。
穢れをいとひ今日まで、埋め置きたる雪中の筍、これに
在り。
〽箱を押取つて差上げたる、源家正統武將の白旗。
神明を頭に頂く義兵の旗揚げ、謙信親子只今より、この
勘助が幕下に付けと、立歸つて云ひ聞かせよ。
〽一つの眼に天が下、見下ろす富士の山本勘助、三國無
双の弓取りなり、母は一間の一卷携へ。

越路　不孝と見えし勘助は、却つて父の名を揚げる、廿四
孝に優りし孝。器量も揃ふ二人の子供、軍法傳授のこの
一卷、頂戴しや。

ト一卷を横藏へ渡す。

〽差置けば、勘助取つて押頂き。

ト勘助、一卷取つて押頂き、思ひ入れあつて

横藏　父の苗字を賜はれば、勘助が身の規模は立つ。母方
の氏を繼ぐ、弟直江が母への孝行、その德に任せ、この
一卷は、其方に下さるゝ。御恩を忘れず、猶この上にも、
孝行怠ること勿れ。

慈悲　ハヽア。

ト慈悲藏受取り、扣へる。

横藏　景勝の忠心は、我が胸中に徹したれども、心得難きは
親謙信、君に弓引く逆心ならば、汝も從ふ心や如何に。

慈悲　云ふにや及ぶ。我が子を殺して、二君に仕へぬこの
山城、兄とは云はさぬ敵味方、この三略の恩を仇、一合
戰仕らん。

横藏　オヽ、さもあらん。出かす〳〵。我れまた主君と仕
ふる甲斐の
〽天目山に立籠り。

出合ふ所は川中島、運に乘じて越後の出城、諏訪の城まで押し寄せ

〽押し寄せ

さも目覺ましき、勝負を遂げん。

慈悲　ホウ、潔しさりながら、假にも一旦景勝に、受けたる恩は、如何に〳〵。

横藏　オヽ、日月に譬へたる、右の眼は越後へ進上。二心なき勇士のかため、母に與へしかたしの下駄、景勝の志し、捨つるは武士の道ならず。

〽左の足にしつかと穿き、下り立つ庭の高低も、道は歪まぬ弓取りの、直ぐなる竹の根元より、はつしと切つたる旗竿は。

ト横藏、下駄片足はき、下へ下りて、上手の藪の竹を切り折つて、旗の竿として、キッと見得。

横藏　聖運めでたき大將の

越路　誘ふは賢き御笑顏。

たれ　眠れる花の死顏も

唐織　抱いてゆぶつてすかしても、

慈悲　返らぬ昔、唐土の

横藏　廿四孝は目のあたり。

越路　孟宗竹の、筍は

たれ　雪と消え行く胸の中。

慈悲　水の上の魚を取る

唐織　それは王祥。

横藏　これは他生の

皆々　緣と緣。

〽黄金の釜より逢ひ難き、その子寶を去り離す、弟が慈悲藏、胴慾と、兄が不孝の孝行は、我が日の本に一人の勇士、今に名高き山本氏、武田の家の礎と、事蹟を世々に殘しける。

ト横藏、旗を持ち、六法踏んで、皆々、入れ替つて、横藏二重の眞中にて、キッと見得。皆々引張りよろしく。段切れにて。

幕

大詰

長尾謙信館の場

奥庭狐火の場

役名――長尾入道謙信、花作り、簑作實ハ武田四郎

勝頼、長尾三郎景勝。白須賀六郎。原小文次。腰元、濡衣。謙信息女、八重垣姫、花作り、関兵衞實ハ斎藤入道道三。

本舞臺、一面の高二重。眞中、御簾、下ろし、見附け、金襖。上下、塗り骨障子屋體。右二重に、濡衣、腰元の拵らへにて、外に腰元六人、居並び、琴唄にて、幕明く。

腰一　なんと皆の衆、去年からの御普請で、結構に建つた奥御殿は、武将様とやらの、後室さまのお成りぢやといなア。

腰二　さうかいなア。わたしや又、そんな事とは知らず、このお館のお姫様、八重垣さまに聟様が来るので、御祝言の支度をするのぢやと、思うて居たわいなア。

腰三　花野どのゝ云はしやんす事わいの。お姫様にお云ひ號けのあつた勝頼さまは、去年の秋、御切腹なさつたとの事ぢやわいなア。

腰四　それで、その勝頼さまのお姿を繪に寫し、明けても暮れても、泣いてばかりお出で遊ばすのが、其方の目には掛からぬのかいのう。

腰一　今日のお拵らへは、いま日本の大将軍のお子様なりその後室さま、世の常のお客とは違ふわいの。

腰二　それゆゑ、この間より、國々の名物をお求めなさるれど、今この諏訪の湖に氷が張り詰め、船の往來も叶はぬゆゑ、何かときつい手支へと、役人衆の心遣ひ。

腰三　それゆゑ、曠れなお客さま、念に念を入れて、無調法のないやうにとの云ひ付け。新參とは云ひながら、物馴れた濡衣どの、何かの事を頼むぞえ。

濡衣　これは又、人を術ながらすやうに、物馴れたやら、馴れぬやら、今參りの私し、お前さん方に、引廻してもらはにやなりませぬ。

腰一　濡衣どのゝ、あのマア云はんす事わいの。ホヽヽヽ。

〽傍輩中のおれそれも、仲よく見ゆる中庭より、息せき出づる簑作が、縁先に小腰を屈め。

簑作　ハイ、仰せ付けられました奥庭の花壇の菊、屈むを延ばし、延びるを縮め、枯れ葉一枚ないやうに、殘らず手入れ仕りましてござりまする。

〽云ふ顔うつとり腰元中。

腰一　皆さん、御覧なされたか。ても見事な好い男。こんな男に手入れしらるゝ、菊の花はあやかりもの。わたし

も、お前に手入れしてもらうて、小菊が咲かして見たいわいの。

腰二　これはしたり、はしたない。そんな事云うて居る間に、御用が遅れる。

腰三　兎かう云ふうち、後室様のお成りであらう。

腰四　サア、皆さん、ござんせいなア。

〽何かな悪口云ひすてに、奥へ行く跡幸ひと、濡衣あたり見廻して。

濡衣　勝頼さま。

簑作　コレ。

ト押へる。管絃になり、濡衣、こなしあつて下へ下り、簑作と入れ替り、両人あたりを見廻し、簑作、上手に相引にかゝり、濡衣下座に手をつかへ

濡衣　あなたにお別れ申してより、この館に入込み、程經る日數の明け暮れも、どうお暮らし遊ばすかと、お案じ申して居りますうち、思ひも寄らず菊作りとなつて、この館へお出で遊ばされし勝頼さま、御思案でもあつての事でござりまするか。

簑作　ホヽ、不審尤も。この家の主長尾謙信、一子景勝を討つて出さず、剰さへ、義晴公の忘れがたみ松壽君、御母君もろとも、今日この館へ招く段、心得難く思ひしゆゑ、菊作りとなつて入込む果、汝が役目は法性の兜、未だ取り得る便りなきや。濡衣、如何に。

〽とありければ。

濡衣　その兜の事ゆゑに、御奉公に參つた私し、微塵も油斷は致さねども、何を云うても用心嚴しく、それゆゑ心に任せねど、お喜び遊ばしませ、今日のもてなしとあつて、その兜を上段に、飾らしてござりますれば、今日を過さず、お手に入れて差上げ申しませう。

簑作　すりや、その兜か奥の間に。

濡衣　アヽ、モシ。

〽差寄つて、囁きうなづく折柄に。

ト奥にて

關兵　娘よ〳〵、娘はどこに居る。

ト云ひながら關兵衞、白髪の親仁にて出て

娘々、ヤイ娘。

ト大きく云ふ。兩人、恟りして飛び退き、これにて簑作、下手へ行き、モヂ〳〵して居る。

濡衣　父さんとしたことが、あの人に花壇の事を、云ひ付けて居るところ。斷わりなしに呼ぶと云ふやうな、アタ

不躾な、不遠慮な事があるものかいなア。

關兵　なんぢや、斷わりなしに呼んだが不躾ぢや。ハ、、ハ、こりやおれが惡かつたわい。今度から用があつて呼ぶ時は、サア、娘、いま呼ぶぞと、先へ斷わつて呼ぶわい。ハ、、、、……コリヤ、前髮よ。わりや花作る事が上手ぢやと云うて、昨日から雇はれて來て居るが、この花はおれが預かり、今日のお成りのおもてなしになる花ゆゑ、取分けて大事と思ひ、助に雇うた花作り。もうお成りに間はないが、野良ばかりかはいて居つて、それで仕事が出來るかよ。

簑作　イヤモ、外の花作ると違うて、不斷手入れのしてある花壇ゆゑ、何も仕事はござりませぬ。やう／＼と枯れ葉を取つたり、花形の振りを直すが精々。それゆゑ仕事も思はぬ捗行き、落ち葉一枚ないやうに、掃除までしまひましてござりまする。

關兵　それはえらう精が出た。花壇が濟んだら、外に用のない前髮、次へ行て休息せい。

簑作　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。ドレ、次へ參りませうか。

〽勝手へこそは、立つて行く。

ト簑作、思ひ入れあつて入る。

關兵　ハテサテ、見掛けに似合はぬ精出す奴。兎角、蔭日向が大事の物。コリヤ娘、われも隨分精出して、御奉公せいよ。

濡衣　父さんの有り難いお詞、幼ない時より武田の家に宮仕へ、不慮の事より親里へ、戻つて見れば父さんも、今では長尾のお家へ、御奉公を幸ひに、親子一所に宮仕へ。新參者でも侮られず、傍輩衆にも憎まれぬは、お主の御恩、父さんのお庇、仇疎かには思ひませぬわいなア。

關兵　ア、、さう思へば冥加がよい。この親も御領分で、狩人を商賣に、かつ／＼に暮らした身分、謙信公のお見出しにあづかり、お館に置かるゝは、このお屋敷にある諏訪法性の兜とやらは、諏訪明神より賜はつて、卽ち神の使はしめ、狐が寄つて番をする、不思議な兜。そこで又、野狐どもが、その兜を戴けば、官上がりをするとやらで、折々館を徘徊する。見附け次第、打ち殺せと、アレ、座敷先に小家をしつらへ、狐の番が役すれども、勇氣盛んな謙信公、なんの狐が來よう筈もなし、安閑としてゐる隙に、仕覺えた花畑、時ならぬ菊を作るがお氣に入つて、狐の事は餘所になり、今ぢや菊の花守り親仁、

樂々と暮らせるも、御主人のお庇といふものぢやわい。
〽互ひの身の上しみ〴〵と、親子話しの折柄に。
呼び　お成り。
ト向うにて呼ぶ。
關兵　ホイ、もうお成りぢやさうな。爰にゐてはお目ざはり。
濡衣　そんなら父さん。
關兵　娘、後に逢はうぞよ。
〽心殘兵衞濡衣も、奥と口とへ別れゆく。
ト濡衣は奥へ、關兵衞は下手へ入る。
〽館の主長尾謙信、衣冠正しき儲けの式禮、角立つ中にさと薫る、音もしと〳〵女中の手舁き、あたり輝やく鋲乘り物。
ト向うより鋲打ちの女乘り物を擔ぎ、近臣四人附いて舞臺へ來る。奥より謙信、坊主かつら、好みの拵へにて、出て手を仕へ
謙信　優曇華とや云はん、稀代の御入來。冥加にあまる身の面目、直ぐに其まゝ奥殿へ。
近臣　ハ、ア。
〽指圖に隨ひ乘り物は、奥へ行く後謙信も、續いて入らんとする所へ。
呼び　御上使のお入り。
謙信　思ひがけなき御上使とは……ムウ。
ト不審の思ひ入れ。
呼び　お入り。
ト中の舞になり、向うより景勝、長上下、好みの拵らへにて出て、直ぐに本舞臺へ通り、上座に住ふ。
景勝　長尾入道謙信へ、手弱女御前よりの御上意。
謙信　ナニ、手弱女御前よりの御上使とは。遠路のところ御苦勞千萬。して御上意の趣きは。
景勝　上意。
謙信　ハアツ。
ト管絃になり
景勝　先づ以て今日は、御幼君松壽君、御母公ともに入來の面目、恐悦に思はるべし。さるによつて母君より、貴殿への御上意、餘の儀にあらず、先達て申し渡せし子息景勝の首、今に於て討つても出さず、事延引せらるゝ段、必定野心に極まれば、御前に於て切腹召さるゝか。但し景勝の首、いま討つて出さるゝか。返答次第で計らふ旨あり。如何に〳〵。

〽と上使の權柄。
謙信　こは思ひよらざる御上意の趣き。
〽と顏振り上げ。
ヤア、汝は倅景勝。
景勝　ア、イヤ、景勝にもせよ誰れにもせよ、一旦倅を討つべしと、契約ありしは諸大名の眞中。今に於てその沙汰なく、剩へ、本國に引籠り、底の知れざる親人の所爲、イヤサ謙信の心底と、人の疑ひ立ち申す。なぜさつぱりと拙者の首、イヤサ、倅景勝の首討つて、心底は見せられぬ。サア、首討つて渡さるゝや。
謙信　サア、その儀は、
景勝　御前に於て切腹するか。
謙信　サア。
景勝　サア。
兩人　サア／＼／＼。
景勝　返答が承りたい。
〽と詰め寄れば、流石名を得し謙信も、倅を倅が討手の上使。口をつぐんで見えにけり。
ヤア、未練の心底。この上は某、爰にて切腹いたさん。
〽と差添に手を懸ければ、

ト下手の内にて
關兵　ヤレ、暫らく／＼、必らずともに早まらつしやるな。
〽聲をかけて花守り關兵衞、何かは知らず白菊の、花携へて立ち出れば。
ト關兵衞、出で來る。景勝、見て。
景勝　ヤア、汝等如きの知る事ならず。すさり居らう。
〽怒りにちつとも臆せぬ關兵衞。
關兵　イヤ、下として上の事、差出るではござりませねど、最前よりあれにて樣子承れば、どうやら斯う木乃伊取りが、木乃伊になりさうな御上使。あつたらしき侍ひの首、切つて仕舞へば再び活きぬ。又この花は、なんぼ切つても生きらるゝ。ナ、切つて生きると云ふ傳授、お望みならば、ハイ／＼、差上げたう存じまする。
〽どこやら詞の一理窟、聞いて謙信眉をしはめ。
謙信　ムウ、切つて生きるといふ白菊、面白し／＼。關兵衞、その花所望せん。
關兵　成る程、花は上げませうが、花ばかりでは自由に生きられぬ。それを生かすは花作り、幸ひ、お次に居りますれば、これへ呼び寄せ、とも／＼生きる傳授を、御覽に入れませう。

天保九年四月市村座上演　市村羽左衛門の簑作

ト下座へ向ひ

コレ、花作りの簑作、御用がある。ちやつと來い〳〵。

トこの時下座にて

簑作　ハイ〳〵、只今それへ參りまする。

〽この場の樣子白洲のうち、息せき出づる顏形。

ト簑作出て

簑作　けたゝましい、なんの御用でござりまする。

關兵　なんの御用とは、爰の大將さまが、貴樣に頼みたい用事がある……ハイ〳〵、即ち、これがお話し申した、花作りでござりまする。

謙信　ムウ、すりや、其方が。

ト簑作を見て

ヤア、汝は武田勝頼。

關兵　ア、申し、それ仰しやつては物がない。何も知らぬ白菊の花、その活けやうを覺えたこの花作り、人の振り見て我が振りを、直すが第一の傳授事。ナ、これさへ御所望なさるれば、何もかもさつぱりと、申し譯の立ちさうなものと、憚りながら親仁めは存じまする。

謙信　ホヽウ、天晴れの花作り。今より館に召抱へんが、そちや謙信に奉公し、花の活けやう、傳授いたしてくれるちやまで。

簑作　ハイ、外の事は存じませねど、花一まきの事なれば、生かさうと殺さうと、私しが得物。それを取得にお抱へなされて下されうなれば、有り難う存じまする。

謙信　早速の承知、先づは滿足、御上使への御返答、申し上ぐるはあの簑作、先づそれまでは暫時の御猶豫、偏へに願ひ奉る。

〽餘儀なき頼みに打頷づき。

景勝　火急の御上意、容赦はならねど、鹽尻峠に扣へ居る、諸大名へ申し渡す仔細もあれば、我れは彼所へ立越えん。有無の返事は鹽尻峠まで。隙取らば、直ぐにこの城取圍まん。

謙信　追ツ付け有無の御返答、認むるうち、簑作、次へ參つて衣服大小。

簑作　ハイ、有り難うござりまする。

謙信　然らば、御上使樣。

景勝　返答を相待ち申す。

〽勇む簑作、景勝は、苦り切つたる鹽尻へ、別れてこそは出て行く、後見送つて關兵衞は。

ト景勝は向うへ、簑作は下手へ入る。合ひ方になり

關兵　花作りの簔作、合點のゆかぬと存ぜしが、そんなら
あれが

謙信　疑ひもなき武田勝頼。それと見出せし花守り關兵衛
下郎に似合はぬ、なか〳〵器量のある親仁、その性根を
見込み、改めて謙信が、頼み入れたき仔細あり。

關兵　これは又、改まつたお詞、もと狩人の私し、お見出
しにあづかつた君の大恩、たとへ命の御用でも、否と申
さぬ我れらが魂ひ。

謙信　ホヽ、頼もしゝ〳〵。その詞を聞く上は、何をか包
まん。汝に見する品こそあれ。

〽靜々立つて一間の襖、開けば、内に怪しき牢輿、關兵
衛不思議と差覗き。

關兵　牢の内には、科人らしき者も見えず、何やら見馴れ
ぬ變つた物。ありや、マア、なんでござりまする。

謙信　未だ日本へ渡らざれば、汝等が知らぬも理り。これ
こそ鐵炮と名けし飛び道具。

關兵　ムウ、その鐵炮とやらが、盗みでも致しましたか。
何の科で、あの牢へは。

謙信　その仔細、語つて聞けん。

卜合ひ方になり

先つ頃武將の御前へ、薩州種ヶ島の浪人、井上新左衛門と
名乘り、この鐵炮を獻上し、類なき重寶、遣ひや
うの傳授せんと、騙し寄つて義晴公を、一討ちに跡を晦
まし、その場を逐電、草を分つて尋ね搜せど、今に於て
行くへ知れず、詮議の手筋はこの鐵炮。その所に殘りあ
りしが、即ち科人同然なれば、斯くの如く禁牢させ、日
毎の拷問手を盡せど、義晴公を討つたる敵、今日まで白
狀せざる不敵の鐵炮。只今よりこの詮議、汝に申し付く
る間、水火を以て責め苛なみ、敵の在所を白狀させよ。
ソレ。

〽鐵炮がらりと投げ出せば、手に取上げて呆れ顔。

卜謙信、牢輿の中より鐵砲を取つて關兵衛の前へ投げ
る。

關兵　すりや私しにお頼みあるは、この鐵炮を責めいでご
ざりまするか。これは又、思ひも寄らぬ。拷問も問ひ狀
も、なみの人間なら、及ばずながら責めも致さう。煙管屋
の看板か、唐の火吹き竹見るような物、責めいとは御難
題、あなた方の手にさへ合はぬもの。その上、何を證據
何を手がゝりに。

謙信　オヽ、手がゝり證據は、その鐵炮の遣ひやう。普ね

明治三年十一月守田座上演

三世澤村田之助の八重垣姫　澤村訥升の勝頼

〽世上に知る者なし。その傳授を覺えし者が。
關兵　ムウ、すりやなんと、御意なされます。この鐵炮の遣ひやうを覺えた者が
謙信　即ち、武將を討つたる敵。
關兵　すりや、どうでも詮議を私しに。
謙信　仕損じまじき汝が魂ひ。
關兵　アノ、親仁が性根玉を
謙信　見込んで頼む。違背はあるまい。油斷いなすな、花守り關兵衛。
關兵　エヽ。
謙信　キッと申し渡したぞよ。
〽詞も重き大將の、心殘して、
ト管絃になり、謙信奥へ入る。
關兵　アヽ、モシ〳〵、我れら風情にこんな役目、難題も事に寄る。外へ仰せ付けられて下さりませ。申し〳〵。
〽跡を眺めて。
未だ日本へ渡らぬ鐵炮、遣ひやう覺えし者が、義晴公を討つたる敵。この關兵衛に詮議せよとは、ムウ、合點のゆかぬ。
〽諸手を組んで工風の顏色。

關兵　アヽ、イヤ〳〵、どう思案して見ても、我れらには似合はぬ役目。矢ッ張り似合うた花の番、鳥嚇しの弓矢より、外に何も白髮の親仁。ドレ、小家へ行て、一休みしようかい。
〽振りかたげたる鐵炮も、胸に一物有明の、月も洩る臥所へ。
トこの淨瑠璃にて鐵炮を持ち、こなしあつて、下手へ入る。直ぐに出語りになり
〽行く水の、流れと人の簑作が、姿見かはす長上下、悠悠として一間を立出で。
ト奥より簑作、長上下に着替へ、立出で、思ひ入れあつて
簑作　我れ民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作りとなつて入込みしは、幼君の御身の上に、もし過ちやあらんかと、餘所ながら守護する某。それと悟つて抱へしや。ハテ
〽合點のゆかぬと差俯むき、思案に塞がる一間には、館の娘八重垣姫、云ひ號けある勝頼の、切腹ありしその日より、一間所に引籠り、床に繪姿掛けまくも、御經讀誦鈴の音。

ト上手障子を明ける。内に八重垣姫、床の間に掛け地を掛け、經机を置き、讀誦して居る。

〽こなたも同じ松蟲の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日を弔らひの、位牌に向ひ手を合せ。

ト下手障子を明ける。内に濡衣、經机に位牌を置き、鉦を叩いて居る。

濡衣　廣い世界に誰れあつて、お前の忌日命日を、弔らふ人も情なや、父御の悪事も露知らず、お果てなされたお心を、思ひ出す程おいとしい。さぞや未來は迷うでござらう。女房の濡衣が、心ばかりのこの手向け。千部萬部のお經ぞと、思うて成佛して下さんせ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

簑作　誠に今日は霜月廿日、我が身替りに相果てし、勝頼が命日、暮れ行く月日も一年餘り、南無幽靈出離生死、頓生菩提。

八重　申し、勝頼さま、親と親との云ひ號け、ありし樣子を聞くよりも、輿入れするを待ち兼ねて、お前の姿を繪に畫かせ、見れば見る程美しい、こんな殿御と添ひ臥しの。

〽身は姫御前の果報ぞと、月にも花にも樂しみは、繪像の側で十種香の、煙りも香花となつたるか、回向せうとてお姿を、繪には畫かせはせぬものを、魂ひ返へす反魂香、名畫の力もあるならば、可愛とたつた一言の、お聲が聞きたい〳〵と、繪像の側に身を打伏し、流涕こがれ見え給ふ。

簑作　あの泣き聲は八重垣姫よな。我が名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、弔らふ姫と、弔らふ濡衣。

〽不便ともいぢらしとも、云はん方なき二人が心と、そぞろ涙にくれけるが。

〽我れながら不覺の涙。

〽衿かき合せ、立ち上がる、後にしよんぼり濡衣が。

濡衣　申し、簑作さま、合點のゆかぬあなたのお姿。どうした事で此やうに。

簑作　ホヽウ、不審尤も。計らずも謙信に、抱へられたる衣服大小。

濡衣　ても、さても、衣紋付きなら、上下の召しやうまで似たとは愚か、矢ツ張り其まゝ。筐こそ、今は仇なれ、これなくば。

〽忘るゝ事もありなんと、詠みし別れを悲しむ歎き、筐さへぢやに我が夫に、微塵變らぬこのお姿、見るに付け

ても忘られぬ。
濡衣　わたしや輪廻に、迷うたさうな。
〽お免されてと伏し沈む、泣き聲洩れて一間には、不審立ち聞く八重垣姫、ソツと襖の透き間洩る、姿見紛ふ方もなく。
八重　ヤア、我が夫か、勝頼さまか。
〽飛び立つ心押靜め、正しうお果てなされしもの、似たと思ふは心の迷ひ、繪像の手前も耻かしと、立戻つて手を合せ、御經讀誦の鈴の音、勝頼公は濡衣が、心を察し聲曇らせ。
簑作　果敢なき女の心から、嘆くは理り、さりながら、定めなき世と諦らめよ。
〽諫むる詞、此方には、心空なるその人の、もしや長らへおはすかと、思へば戀しく懷かしく、また覗いては繪姿に、見比べる程生寫し、似はせで矢ツ張りほん〲の、勝頼さまぢやないかいのと、思はず一間を走り出で、縋り付いて泣き給へば。
　ト八重垣姫、簑作に縋りついて思ひ入れ。
〽ハツと思へどさあらぬ風情。
簑作　こは思ひ寄らざる御仰せ。我れら簑作と申す花作りやう〲只今召抱へられ、衣服大小改めし新參者。勝頼とは覺えなし、御麁相あるな。
〽と突き放せば。
八重　なんと云やる。いま父上に抱へられし新參者、花作りの簑作とや、自らとしたことが、餘りよう似た面差しゆゑ、もしやそれかと心の煩惱、二人の手前。
〽耻かしながら。
　コレ濡衣、この簑作とやらいふ人、其方は疾から近付きか。
濡衣　エヽ。
八重　イヽヤイナウ、知る人であらうがの。
濡衣　アノお姫様としたことが。たつた今見えたお人。なんのマア私しが。
八重　イヤ、隱しやんな。今の素振り。忍ぶ戀路といふやうな。
〽可愛らしい仲かいのと、思ひも寄らぬ詞に恟り。
濡衣　オヽ、お姫様の仰しやる事わいの。人にこそ寄れ、なんのあなたに勿體ない。
八重　ムウ、勿體ないと云やるからは、どうでも其方の知るべの人か。

明治三年十一月守田座上演　岩井紫若の濡衣

濡衣　イヤ、さうでなけれど、大事のお主の目を掠め、忍び男を拵らへるは、勿體ないと申す事でござりまする。

八重　フム、すりや知るべの人でなく、殿御でもない人なら、どうぞ、今から自らを、可愛がつてたもるやうに、押附けながら、仲立を。

〽頼むは濡衣さまさまと、夕日まばゆく顔に袖、あてやかなりしその風情。

濡衣　オヽ、お姫様としたことが、まだお子達と思ひの外、人それた、あの簑作どのを。

八重　サア、見初めたが戀路の始め。後とも云はず、いま爰で。

濡衣　仲立せいと仰しやるのか。我折れ、ほんにお大名のお娘御とて、油斷はならぬ戀の道、品に依つたら、お取持ち致しませうか。

簑作　アイヤ、コレ、濡衣、必らず麁相を云ふまいぞ。

濡衣　サア、何もかもわたしが呑み込んで、ナ、呑み込んで、お取持ち致すまいものでもないが、眞實、底から簑作どのに、御執心でござりまするかえ。

〽問はれて猶も赤らむ顔、勤めする身はいざ知らず、姫御前のあられもない、殿御に惚れたといふ事が、嘘僞はりに云はれうか。

そのお詞に違ひなくば、なんぞ慥かな誓紙の證據、それ見た上でお仲立ち。

八重　オヽ、それこそ心易い事。その誓紙さへ書いたならば。

濡衣　イエ〳〵、それも此方に望みがある。わたしの望む誓紙といふは、諏訪法性の御兜、それが盗んでもらひたい。

八重　ヤア、なんと云やる。諏訪法性の御兜を、盗み出せと云やるからは、さてはあなたが勝頼さま。

〽云ふ口押へて。

簑作　ハテ、滅相な勝頼呼はり。微塵覺えのない簑作、粗忽ばしのたまふな。

〽云ふ顔つく〴〵打守り、云ひ號けばかりにて、枕交さぬ妹脊仲、お包みは無理ならねど、同じ羽色の鳥翅、人目にそれと分らねど、親と呼び、また夫鳥と呼ぶは生ある習ひぞや、如何にお顔が似たればとて、戀しと思ふ勝頼さま、そも見紛うてあられうか、世にも人にも忍ぶなる御身の上といひながら、連れ添ふわたしになに遠慮、つい斯う〳〵とお身の上、明かして得心さしてたべ、それ

も叶はぬ事ならば、いつそ殺して〳〵と、縋り付いたる恨み泣き、勝頼わざと聲荒らげ。

ヤア、聞分けなき戯れ言。如何ほどにのたまふとも、覺えなき身は下主下郎、餘所の見る目も憚りあり、そこ退き給へ。

〽と突き放せば。

八重　すりや、此のやうに申しても、勝勝さまではおはさぬか。ハア。

〽ハツとばかりに簑作が、差添逆手に取り給へば、こは御短慮と止むる濡衣。

濡衣　マア〳〵、お待ちなさりませ。

八重　イヤ、放して、殺してたも。勝頼さまでもない人に、戯むれ言の耻かしや。心の穢れ、繪像に云ひ譯、どうも生きては居られぬわいなう。

〽また取り直すを押し止め。

濡衣　マア〳〵、お待ち遊ばしませ。流石は武家のお姫樣、天晴れのお志し。其お心を見るからは、頼勝さまにお逢はせ申しませう。ソレ、そこにござる簑作さまが、御推量に違はぬ、誠の勝頼さま。ちやつとお逢ひなされませ。

〽突きやられては流石にも、初めの恨み百分一、聞えませぬが精一ぱい、後は互ひに抱きつき、つい濡れそめに濡衣も、心ときつく折柄に、父謙信の聲として。

謙信　簑作はいづれにある。鹽尻への返事、時刻が移る。早う參れ。

ト文箱を持つて出る。これにて兩人、後へ扣へる。

〽立ち出れば、ハツと簑作飛びしさり。

簑作　お支度よくば、直さま參上。

謙信　委細の事はこの文箱に。片時も早く罷り越せ。

簑作　ハア、畏まつてござりまする。

〽ハツと領掌文箱携へ、鹽尻さして急ぎ行く。

ト勝頼、文箱を受取り、こなしあつて向うへ入る。

〽謙信あとを見送つて。

謙信　ヤア〳〵者ども、用意よくば、はや參れ。

六小　ハア、。

〽ハツと答へて白須賀六郎、原小文次、譜代の郎黨、御前に進めば、謙信勇んで御聲高く。

ト六郎、小文次、凛々しき形にて出る。

謙信　今この諏訪の湖に、氷閉れば渡海叶はず、鹽尻までは陸路の切所。油斷して、不覺を取るな。

六郎　ハア、仰せにや及ぶべき。

〽兼ねて内意を受けたる我れ〳〵、直さまこれより馳せ
向ひ、地の理を計つて討取る手段。
小文　たとへ、勝頼勇あるとも、前後を包んで袋の鼠。
六郎　變に應じ機に臨み、討取らん事。
〽手裏にあり。
小文　追ッ付け吉左右、お知らせ申さん。
六郎　お心安かれ
二人　我が君樣。
〽さも勇ましく言上す。
謙信　オヽ、出かした。急げ。
二人　ハア、おさらば。
〽勇み勇んで馳り行く。
ト兩人、こなしあつて、逸散に向うへ走り入る。
〽跡に不審は八重垣姫。
八重　申し、父上、事々しい今の有樣。何事でございます
る。
謙信　ホヽウ、あれこそは、武田勝頼討手の人數。
八重　ナニ、勝頼さまを討手とな。
濡衣　そりやマア、何ゆゑでござりまする。
謙信　諏訪法性の兜を盗み出さんうぬらが工み、物蔭にて
聞きたるゆゑ、勝頼に使者を云ひ付け、歸りを待つて討
取らさんと、しめし合せし討手の手配り。
八重　エヽ、そんなら今の討手の者は
濡衣　勝頼さまを殺さん爲か。お姫樣。
八重　ハア。
〽ハッとばかりに撞と伏し。
今日は如何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我が夫に、再
び出逢ふは優曇華と、喜んで居たものを、又も別れにな
る事は、なんの因果か、情なや。
〽父のお慈悲にお命を、どうぞ助けて給はれと、口說き
嘆きに目もやらず。
謙信　ヤア、武田方の廻し者、憎くき女め。うぬにはまだ
尋ぬる仔細あり、奥へうせう。
〽小腕取り、情容赦も荒氣の大將、帳臺深く入り給ふ。
トこの件よろしく、早舞ひにて返し。

本舞臺、奥庭の遠見、上手に誂らへの池、この上手
に、二重屋體、拜殿に兜を飾りあり。舞臺、眞中に、
柴垣、音樂にて幕明く。
〽思ひにや、焦れて燃ゆる、野邊の狐火、小夜更けて、

狐火や、狐火野邊の、野邊の狐火、小夜更けて、幾重洩れ來る爪音は、君を設けの奥御殿、こなたは正體、涙ながら。

ト此うち八重垣姫、雪洞を持ち、出で來り

八重　アレあの奥の間で、檢校が謳ふ唱歌も、今身の上。おいとしいは勝頼さま、かゝる工みのあるぞとも、知らず計らぬお身の上、別れとなるもつれない父上、諫めても、嘆いても、聞入れもなき胴慾心、娘、不便と思すなら。

〽お命助けて、添はせてたべと、身を打伏して嘆きしが。

イヤ／＼、泣いては居られぬ所。追手の者より先へ廻り、勝頼さまにこの事を、お知らせ申すが近道の、諏訪の湖、舟人に、渡り頼まん。

〽急がんと小褄とる手も甲斐々々しく、駈け出せしが。

イヤ／＼、いま湖に氷張り詰め、舟の往來も叶はぬ由、歩路を行つては女の足、なんと追手に追ひ付かれう。知らすにも知らされず、見す／＼夫を見殺しに、するは如何なる身の因果。アヽ、翅が欲しい、羽が欲しい。

〽飛んで行きたい、知らせたい、逢ひたい見たい夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思ひ、千年百年泣き明かし、涙に命絶えればとて、夫の爲にはよもなるまじ、この上頼むは神佛と、床に祀りし法性の、兜の前に手を支へ

この兜は諏訪明神より、武田家へ授け賜はる御寶なれば、取りも直さず諏訪の御神。勝頼さまの今の御難儀、助け給へ、救ひ給へ。

〽兜を取つて押戴き、押戴きし俤の、もしやは人の咎めんと、窺ひ下りる飛び石傳ひ。

トこの淨瑠璃にて姫、兜を取つて戴き、ソツと、平舞臺へ下りる。

〽庭の溜りの泉水に、映る月影怪しき姿、ハツと驚ろき飛び退きしが。

今のは慥かに狐の姿、この泉水にうつりしは、ハテ、面妖な。

〽どきつく胸を撫で下ろし、怖々ながら、そろ／＼と、差覗く池水に、映るはおのが影ばかり。

たつた今この水に映つた影は狐の姿、今また見れば我が俤、幻といふものか。但しは迷ひの空目とやらか。

〽ハテ怪しやと、とつおいつ、兜をソツと手に捧げ、覗けば又も白狐の形、水にあり／＼有明月、不思議に胸も濁り江の、池の汀にすつくりと、詠め入つて居たりしが。

ト兜を捧げて池を見る。ドロ／＼。
誠や當國諏訪明神は、狐を以て使はしめと聞きつるが、明神の神體に等しき兜なれば、八百八狐附添うて、守護する奇瑞に疑ひなし。オヽ、それよ、思ひ出したり、湖に氷張り詰めれば、渡り初めする神の狐、その足跡を知るべにて、心安う行きかふ人馬、狐渡らぬその先に、渡れば水に溺るゝとは、人も知つたる諏訪の湖。
〽たとへ狐は渡らずとも、夫を思ふ念力に、神の力の加はる兜、勝頼さまに返せとある、諏訪明神の御教へ。

八重　ハアヽ、忝なや有り難や。

〽兜を取つて頭にかつげば、忽ち姿狐火の、爰に燃え立ち、かしこにも、亂るゝ姿は法性の、兜を守護する不思議の有様。

トこれより狐火数多現はれる。八重垣姫、狐のクルヒよろしくあつて

〽飛ぶが如くに。

ト八重垣姫、向うへ走り入る。あと本鐵炮の音。これをキッカケに誂らへの合ひ方になり、下手より關兵衞、以前の鐵炮を持ち、窺ひながら出て來り、思ひ入れあつて

關兵　覘ひの的は手弱女御前、正しく手ごたへ。アラ、心地よなア。

ト思ひ入れ。この時、捕り手四人、窺ひ出て

捕手　關兵衞、捕つた。

トかゝる。これより鳴り物變つて立廻りになり、トヾ捕り手を向うへ追ひ込み、花道にてキッと見得。この時、上手と向う揚げ幕にて

景勝　ヤア／＼、美濃の國の住人、齋藤入道道三へ、長尾三郎景勝。

勝頼　武田信玄が一子、四郎勝頼。

六郎　長尾の郎黨、白須賀六郎。

小文　原小文次これにあり。

景勝　いま改めて見參。

皆々　見參。

關兵　何が、なんと。

トツヽかけになり、向うより勝頼、後に小文次附き出で來り、關兵衞を舞臺へ押し戻す。上手より景勝、後に六郎附き、出て來る。軍兵大勢、凜々しく後に並ぶ。皆々キッと見得。

ヤア、花作りの關兵衞を、齋藤道三たんぞとは、何を以

て、何を證據に。

景勝　愚かや道三。

ト肥前節になり

最前打つたる鐵炮の、術覺えしは汝一人、我れと我が身の罪状明白。

勝頼　匹夫下郎の分として、天下に仇する汝が本名、知つたる仔細は先つ頃、諏訪明神の神前にて、家臣山本勘助へ、贈りし簑に一首の歌。

景勝　七重八重、花は咲けども山吹の、みの一つだに無きぞ悲しきと、この歌は汝が先祖、太田道灌がつらねし一首。みの一つだに無きぞ悲しきとは、足利どのに攻め落され、美濃の國を切り取られし、その鬱憤にて義晴公を、打ち奉る叛逆人。

勝頼　まつた長尾武田兩家の確執も、天下の仇たる北條氏時、村上左衛門義清を、討ち亡ぼさん爲の謀計。諏訪法性の御兜も、故なく武田へ戻りし上は、今ぞ御敵齋藤道三。

六郎　敵はぬ所と觀念なし

小文　本名名乘つて、降參。

皆々　降參。

關兵　流石の兩人よくも覺つた。如何にも、先祖道灌が、恨みの元の足利將軍、使つて殺さん其ために、北條氏を味方となし、やす／＼義晴を打ち殺した、齋藤入道道三とは我が事。口近く寄つて、三拜なせ。

ト引拔いてキッと見得。

皆々　さてこそなア。

關兵　義晴が忘れがたみ、松壽丸を虜となし、謙信信玄時をも、皆殺しにして一天四海を、掌握なすこの道三。義晴を殺した鐵炮で、手弱女御前もぶち殺した上からは、松壽丸をこれへ出し、この道三に隨ふまいか。

六郎　ホヽウ、根強く仕込みし謀叛人、かゝる危ふき敵の中、足利の公達が、ウカ／＼來り給はんや。

小文　手弱女御前の姿と見せ、鐵炮にて打ち殺せしは、現在汝が娘たる、濡衣なりと知らざるや。

關兵　ヤヽヽ、すりや手弱女御前と見えたるは、我が娘にてあつたるか。ムウ。

ト思ひ入れあつて

チエ、口惜しや奇怪や。數十年の鬱憤を、一時に散ぜんと思ひしに、却つて敵に討られしか。この上は破れかぶれ、道三の刃が續くだけ、切つて切つて切りまくり、死

人の山だ。觀念せよ。
六郎　ヤア、返らぬ繰り言、いはれぬ廣言。
小文　最早籠中の鳥同然、尋常に
兩人　繩にかゝれ。
關兵　なにを。
景勝　ヤレ待て兩人、早まるな。いま討取るは易けれど、
手弱女御前のお命に、替りし娘へ供養追善、
勝頼　天下の敵は氏時義淸、道三如きは物數ならず、日本
國を放し囚人。
景勝　この場は此まゝ
勝頼　見遁がし得させん。
關兵　流石の兩人よく申した。一旦この場は別るゝとも。
勝頼　また再會は戰場にて
關兵　景勝、勝頼。
景勝　齋藤道三。
關兵　方々
皆々　さらば。
ト和歌になり、眞中に關兵衞、左右に皆々、引ッ張り
の見得よろしく。

幕

本朝廿四孝（終）

文法正
小田の幼君
大江維時自唐朝傳
武禁護
北畠の名君

花嫁は　烈女雛衣貞操筑紫琴
聟君は　主計之助君壽五言詩
媒酌は　冠者義弘祝言延年舞

八陣守護城

客人は　佐藤正清引受大土盞
亭主は　三左衛門盛掛長柄銚
取持は　後藤政次太平船祝唄

あら面白の
雪の夜に
つもる思ひの
はれ間なく
甲冑出立に
三々九度

ヤラ／＼めでたいのエ
四海浪風
治まりて
常磐も茂る
萬民の榮

表のカタリは明治三年十一月守田座で先代芝翫が正淸を演じた時の番附から取つたのである。

下の銅版は、文政三年九月、大坂角座で上演した時の繪番附の表紙である。大阪の繪番附は表紙に斯うした繪が畫いてある。文政時代にはモウこの畫もまるで拙くなつてゐるが、大阪式の標本として御覽に入れて置く。

本文の錦繪はカタリと同じ明治三年のものである。

八陣守護城

序幕

北畠春雄館の場

役名──勅使、山蔭中納言元良。北畠春雄。森三左衛門義成。同妻、樹。同娘、雛衣。佐藤主計之助清郷。鞠川玄蕃。轟軍次。佐藤肥田守正清。

本舞臺、三間の間、常足の二重、蹴込み塗り框、向う金襖、瓦燈口。襷欄間、御簾を巻上げ、東西杉戸、花の丸の欄間。すべて、春雄館の體。爰に、腰元四人、銘々花拵らへをして居る見得。琴唄にて、幕明く。

腰一　それ〳〵、その亂菊は、大輪でござんすゆゑ、折らぬやうに、これで枝振りを矯め直したら、ようござんせうわいな。

ト菊ためを腰元二へ渡す。

腰二　ほんにさうでござんす。どうでも楓どのゝ巧者な事、誠に感心いたしましたわいな。

腰三　その感心で思ひ出しまする。あの義成さまの御息女雛衣さまも、琴三味線は申すに及ばず、立花のお手際。あの御傳授が受けたいものぢやわいなア。

腰四　あなたの御器用はお生れ付き。諸藝に元より御器量の美しさ。都女郎もなか〳〵に、耻ぢるであらうと殿御の噂。

腰一　それ〳〵、噂と申せば、今日のお勅使様は、山蔭中納言さま、はる〴〵御下向。その饗應に、思ひ〳〵の花拵らへ、仰せを受けしは身の冥加。

腰二　黄菊白菊取分けて、しをらしい清郷さま、今日の指圖も斯う〳〵と、詞の花も芳ばしく、花は櫻木人は武士。

腰三　根締めもしやんと武夫の、お家柄なり御器量よし。

腰四　それに引替へ鞠川さん、見るからぎごはな仰しやりやう。

腰一　憎まれ者の世に出ると、要らぬ世話まで目に角を、立居も荒い玄蕃さま。

腰二　なんぞと云ふと呵るので、ホッと云ふ程嫌になる。

腰三　同じ御馳走役人でも、主計之助さまはお優しい。あ

んな殿御を持つ人は
三人　果報者ぢやと云はれたい。
腰一　エ、、まんがちな。男選りをする者は、選りに選つて鞠川の、水に流れて手に取れば、脹れ返つた
四人　履り者ぢやわいなア。
ト花を拵らへながら、思ひ入れ。床の浄瑠璃になり
〽つい寄合ふと人事を、誹る下部の賢なさぞ、お次に洩れて聞えけん、三左衛門が娘雛衣、まだうら若き初戀の、容儀勝れし振り袖に、出る姿の優しくも。
ト此うち、雛衣、振り袖、裲襠、衣裳にて、奥より出る。
雛衣　ナウ、腰元ども。あれにて聞けば、御家中の殿御沙汰、侍ひ衆のお耳に入らば、さぞお叱り。用事しまはゞお次へ行て、休息したがよいわいなう。
〽叱るも流石義成が、祕藏娘と見えにけり。
腰一　いつの間にやら、あなたのお出で。
腰二　寄ると觸ると仇口も
腰三　そのお叱りをうけんとは
腰四　存じがけない不調法。
雛衣　もう〱、何事も、云はぬが花のおもてなし。

ト前にある花を見て
どれも〱見事な活け花。さぞ御賞美であらうわいなう。
〽斯くと見るより鞠川が。
トこの以前より、玄蕃、衣裳上下、大小にて、出かゝり居て
玄蕃　誰れかと思へば雛衣どの。それにござつたか。
〽云ひつゝ出るを聞かぬ振り。
見れば腰元衆、最前から御用があるに、何しに爰に。
腰一　お勅使樣への饗應に、未熟ながらも立花の献上。
玄蕃　高が女の手際と云ひ、珍らしからぬその立花。早く持つて立たつしやれ。
腰一　左樣なら、此まゝ持つて參りましても
四人　苦しうはござりませぬか
雛衣　そんなら皆さん、直さま御前へ。
〽立ち行く袖を引とゞめ。
玄蕃　イ、ヤ、雛衣どのには、君の御内意ござれば、いま暫らく……コレサ、腰元、何を愚圖々々。早く行かぬか。
四人　ハイ〱、參る所でござりまする。
ト調べになり、腰元四人、花筒を持ち、奥へ入る。

雛衣　して、玄蕃さまには、御内意と仰せありしは。

玄蕃　サア、その内意と申すは鞠川玄蕃……マア、お下にござれ……ハテサテ、爰へござれと云ふに。

ト合ひ方になり、雛衣を引付け、こなしあつて

コレサ、雛衣どの、知らぬ振りとは曲がない。そもじをフツと見初めてより、寐ても覺めても幻しにも、この目の先にチラ〳〵と、忘るゝ暇は

〽ないわいの。

コレ、男の心は川の瀨と、云へども深い鞠川が、替らぬ證據は誓紙でも、指でも切つてやる程に、まさか否とは申されまい。どうぢやな〳〵。

〽叶へてたべとべた口說き、裾にしつかと獅嚙み付き、優しく活けし姫百合を、蟹どめしたる如くなり、遠目にそれと栅が、立出でて引分くる、顏打ながめ悔りし。

ト雛衣、逃げんとするを、玄蕃、逃がすまいと追ひ廻す。この時、上の方より、栅、裲襠、衣裳、片外しにて出て、この體を見て支へ

栅　玄蕃さま、娘を捕へて、こりや何事でござりまするな。

玄蕃　ヤア、こなたは栅どの。

栅　御仁體にもない、ちとお嗜なみなされませ。

玄蕃　イヤ、これは、なんでござる……オヽ、もう斯うなつたら、いつその事、云うてしまひませう。それなる雛衣どのを、兼ねて拙者大執心でござれば、何卒拙者の妻に下さるまいか。森氏は北畠の執權、この鞠川は執頭なれば、丁度組合せの好い緣組み。其許さへ得心ならば、ツイ相談も出來さうな事、

〽どうでござると突出した、藪から棒の無理所望。

栅　これはしたり、玄蕃さま。アノ不束な娘を、お望みにあづかり、この身に取りましては、家の大慶、娘が仕合せ、大抵嬉しい事ではござりませぬ。なれども、今日は大切なお勅使のお入り。マア、我が君へお目見得いたしませう。雛衣、おぢや。

ト手を取り、行きかゝる。

玄蕃　ア、コレ〳〵、栅どの、ちよつと今の御返事を。

栅　ハテ、性急な仰しやりやう。緣談ばかりは、親の儘にもならぬ事。

玄蕃　すりや、雛衣どのには、アノ拙者めを

雛衣　後に殘して母樣と

栅　一緒に參るが娘の常。押付けがましい緣談は。

玄蕃　なんと。
桐　その御所望は叶ひますまい。
玄蕃　すりや、どうあつても。
桐　とくと御思案、なされませいなア。
〽詞清しく云ひ放し、娘へそれと目配せし、連れて一間へ入りにける。
ト桐、雛衣を引連れ奥へ入る。
〽後につゝくり鞠川が。
ト玄蕃、こなしあつて
玄蕃　親子一緒に桐が、悪い所へうせたゆゑ、折角お娘を口説けども、只ぴんしやんと三味線の、調子の狂つた今の挨拶。木折りで行かねば手を替へて、母親ぐるめに手馴づけて、身共か思ひを晴らさねば……こりや武士道が立たぬわえ。
トこの時、揚げ幕にて
呼び　お勅使の御入り。
玄蕃　エ、、折り悪い勅使のお入り。アタ面倒な。
〽あたり眼に睨め廻し、次の間へこそ入りにける。
ト玄蕃、下の杉戸へ入る。
〽既に日脚も闌に、やがて勅使の御入りと、主計之助清郷は、粗略なきやと見廻る間、形も立派な前髪立ち、名におふ佐藤が嫡男と、云はねどしるき優姿、それと見るより雛衣が。
ト下の杉戸の間より、主計之助、若衆鬘、衣裳、上下、大小にて出て来る。向う揚げ幕へ思ひ入れ。上の方より、雛衣、出て、主計之助を見て
雛衣　あなたは清郷さま。よう爰にお出で遊ばしましたなア。
主計　オ、、誰れかと思へば雛衣どの。今日の大禮、こなたも御前へ、お目見得でござつたか。
雛衣　ハイ、母様と諸ともに、このお館へ参りましたも、どうぞあなたにお目もじを。
主計　これはしたり、雛衣どの。如何に人目がなければとて、滅多な事を云はぬもの。殊にお勅使お入りと云ひ、春雄さまへの聞えも恐れ、嗜なされよ。
〽と振り切る袖、ヂッと扣へて彭打ながめ。
雛衣　エ、、聞えませぬ、清郷さま。お前をフッと見初めても、云ひ寄るよすが中々に。
〽戀の願ひに神かけて。
深く祈りし御利生に、稀れに逢瀬の程もなく、引分れて

は又いつか、焦れて寄する玉の緒の、結ぼれ解けぬ我が思ひ。堅いあなたのお心に、染まぬ事なら手にかけて、いつそ殺して下さりませ。
〽娘心のしどもなく、膝にもたれて恨み泣き。
主計　サヽ、その恨みはさりながら、親の許さぬ忍び合ひ。人に悟られ給ふまじ。
〽引寄せられて雛衣が、身を添ひ竹と打もたれ、莟みの花に白露の、置き亂れたる風情なり。
トよろしくこなしあつて、互ひに抱き合ふ。この時、玄蕃、窺ひ居て、むつくしきこなし、中通りの諸士二人、この體を見て、囁き、思ひ入れ。
玄蕃　ヤア、不義者見付けた。そこ動くな。
〽聲をかけて鞠川玄蕃、一間の内より立出づれば、ハツと二人は赤面し、差俯向いて詞なし、玄蕃は雛衣尻目にかけ、清鄕を睨み付け。
コリヤ、主計之助。不義は一統武家の御法度。殊に勅使のお入りといひ、不淨を拂ふこの御殿。
諸士　不義密通に穢した科、申し譯には切腹するか。
同　但し、身共が手にかけうか。
主計　サア、それは。

玄蕃　先ツこの通り言上なさうや。
兩人　サア、
諸士　不義の成敗いたさうか。
兩人　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
玄蕃　返答おしやれ、ナヽ、なんと。
〽なんと〳〵と詰めかくる、折柄向うに聲あつて。
ト東の揚げ幕の内にて
義成　ヤア〳〵暫らく。
ト西の揚げ幕にて
正清　玄蕃待ちやれ。
玄蕃　ヤ、あの聲は。
正清　幼君の傅き、佐藤肥田守正清。
義成　春雄の老臣、森三左衞門義成。
正清　それへ參つて兩人が、不義の決斷
兩人　仕らう。
〽聲かけて肥田の守、三左衞門も諸ともに、素袍大紋立烏帽子、武勇輝く白書院、威權正しく立出づる。
ト序の舞になり、向うより、正清、素袍大紋立烏帽子。東の口より、義成、同じ拵らへにて、出て、兩人、花

道にとまり
玄蕃　掲てゝ加へて、入來なされし正清どの。
諸士　義成どのにも
玄蕃　只今御出府
三人　召されたか。
義成　來かゝる所へ娘が汚名、仔細具さに承らん。
玄蕃　仔細と申すは大それた、不義の相手は主計之助、雛衣と兩人が、戀慕れゝつのほてくるしさ。
諸士　我れ〳〵どもが見るとも知らず、館を穢す不屆き者。
同　殊にお勅使のお入りの前方、差かゝつたる御兩所の
玄蕃　御身にかゝはる二人の罪科。この證人は
諸士　我れ〳〵ども。
玄蕃　こりや、此まゝでは濟まされまい。如何なさるゝ
三人　御所存でござるな。
正清　お聞きありしか三左衞門どの、悴主計之助が不義の大罪。
義成　成る程、鞠川が確かに見屆けし上からは、とても遁がれぬ彼れらが一命。
玄蕃　定めし不便と思はつしやらうが、斯く成行くも自業自得。

正清　三左衞門どの。
義成　正清どの。
正清　あれへ參つて
義成　不義の成敗
兩人　仕らう。
ト兩人、本舞臺へ來り、正清、思ひ入れあつて
正清　時に三左衞門どの、彼れらが詞を證據として、取裁くは何とやら大人氣なけれど、とても遁がれぬ不義の汚名。一人の悴なれども、ぶッ放す所存でござるが、其許へ對しては、近頃以て氣の毒千萬。
義成　アイヤ、御挨拶は却つて迷惑。女なれども武家に生るゝ娘雛衣、命は塵芥より輕く、義は盤石より重しと云ふ事、辨まへぬ娘にもあらざれども、如何なる天魔が魅入りしか、女心の一圖に迫り、おのればかりか愛し可愛の者までも、不幸にこの世を塵芥、若木を散らすも、思へば〳〵汝が不所存、今こそ思ひ當りしか。
正清　ア、イヤ〳〵、お叱りなさるな。手前が悴がなくば、御息女の誤まりも出來ますまい。これ善惡邪正は、たゞ一如か。ハヽヽヽヽ。何事も夢でござるて。
義成　親子一世の別れとなるも、今々思ひ知つたるか。遲

れ走せなる義成が、修羅の巷を生き延びて、却つて恥辱を受くるも因緣……娘を打捨て、不義の成敗仕らん。

正淸　然らば一時に

兩人　計らひませう。

玄蕃　すりや、御兩所ともこの座を去らず、不義の成敗。

諸士　こりや、斯うなうては

兩人　叶はぬ所だ。

玄蕃　鞠川玄蕃も檢分いたさう。

　ト三人、思ひ入れ、正淸、主計之助へ思ひ入れあつて

正淸　忰、今日は大切なる勅使の御入來。それになんぞや、武士の性根を取亂し、不所存なる不義密通。春雄さまへの申し譯、いま爰で首打ち落す。覺悟せよ。

〽立派に云へど親心、一滴浮む涙の色、雛衣は顏を上げ

雛衣　幼ない時から垂乳根に、育てられたるその御恩、百分が一も送らずに、身のいたづらに朽ち果つる、不孝の罪の勿體なや。許して給はれ父上樣。とても添はれぬ仲なれば、早う殺して下さりませ。お名殘惜しいは淸鄕さま……どうぞ未來は女夫になり、草葉の蔭で二人して、せめて親への孝行を、この身の詫びに致しまする。

〽見交すばかり親々の、手前を恥ぢて詞數、云はぬ妹脊の暇乞ひ、餘所の見る目もいぢらしき、當が違うて鞠川が。

玄蕃　ア、コレ〳〵、雛衣は女の事、首討つには及びますまい。

義成　ヤア、馬鹿盡すな玄蕃。不義は同罪、其方が指圖は請け申さぬ……サア、正淸どの。

正淸　如何にも、期を延すは上への恐れ……イザ御一緒に

義成　正淸どの。

正淸　義成どの。

兩人　イザ、お互ひに。

〽イザお互ひにと突ッ立ち上がり、既に斯うよと見えける所へ。

　ト兩人、刀を拔き、別れ〳〵に主計之助雛衣の首を討たんと、キッとなる、この時、後の御簾の内にて

春雄　ヤレ待て、兩人、早まるな。

正義　ハア。

〽御簾を上ぐれば北畠春雄卿、悠然と出で給へば、兩人ハッとためらひて、威儀を繕ろひ扣へ居る、春雄莞爾と打見やり。

　ト管絃になり、御簾を卷き上げる。春雄、好みの拵ら

へにて、褥に搆へ、後に近習二人、小姓一人、刀を持ち扣へて居る。皆々平伏する。

春雄　春若が傅き佐藤肥田守正淸、今日の役目、大儀にこそあれ。

正淸　春雄卿にもお早き御入來。恐れながら正淸、感心仕つてござりまする。

義成　我が君樣には今日のお役目、御苦勞千萬。君の御前を憚りなく、只今の高聲、恐れ入つてござりまする。

春雄　ホヽヽ、仔細知らねば憤りは尤も。森、佐藤は小田に累代、舊功に免じて一家の因みを結ばせん爲、内意を申し付けたれば、强ひて不義とは云はれまい。いま改めて某が、仲立ちなして雛衣主計之助、夫婦になして得さ
せん。兩人とも、その旨心得てよからう。

正義　ハア。

〽情を掛けし仁心に、難を遁がれし淸鄕が、有り難涙雛衣は、嬉しき振りの右左、袖に餘りて見えにけり、義成は頭を下げ。

義成　こは有り難き君の御諚。正淸どのは、如何思さるゝな。

正淸　何がさて、四海の御後見たる、春雄卿の御仲立、違背申さんやうはなし。上意、有り難く存じ奉る。併し、お請け申すは今日、取結びは曆日を選み、また重ねて。

義成　イカサマ、良辰を撰び、婚姻の杯。互ひに一つ家となつたるも、偏へに君の御仁惠と申すもの。

正淸　然らば雛衣とやらは、この方の娘。

義成　主計之助は身が聟がね。

正淸　以後は互ひに

義成　猶も入魂に

兩人　致すでござらう。

〽謡ふ兩家の緣定め。

ト兩人、よろしく辭儀する。春雄、こなしあつて

春雄　双方心得ある上は、某も安堵せり……イヤナニ正淸、未だ幼君春若丸には、お入りなき體。仔細は如何に、どうぢやどうぢや。

正淸　さん候ふ、その儀に付き、委しく言上仕るべきは、今日某、幼君を傅き奉り、上洛いたすところ、計らず途中に於て御病氣差起り、據ろなく安土の本城へ歸し奉る。差添へたる拙者が心配、恐れながら御賢察下し置かれませう。

春雄　すりや、春若君は、俄かの病氣とあつて、安土の城

に養生いたすとな……ムウ、心痛さこそと思ふぞよ。
正清　ハッ。
春雄　して又、今日勅使への返答は。
正清　アイヤ、その儀に於ましては、佐藤肥田守、名代と
なり、勅答よきに申し上げ奉るでござりませう。
〽人を恐れぬ大丈夫、春雄はわざと詞を和らげ。
春雄　如何にしても、幼君の病氣心元なし……コリヤ、主
計之助、其方今より祇園の社頭へ參籠なし、若君の平癒
祈念なすべし。さすれば全快目のあたり、早々參詣いた
されよ。
主計　ハッ、すりや某へこのお役目。委細、畏まつてござ
りまする。
〽仰せにハッと清郷は、父の心を計れども、威權の詞是
非なくも。
いづれも、御免。
〽祇園をさして出で行く。
ト主計之助、思ひ入れあつて、向うへ入る。
〽何とかしけん春雄卿、病苦に惱める御有樣、三左衞門
打驚ろき。
ト此うち、春雄、俄かに腹痛のこなし。皆々驚ろき

義成　こは何ゆゑの御惱み。如何遊ばされました。
玄蕃　捨て置かれぬ御大切。何れも御介抱々々。
諸士　心得ました。
義成　何は兎もあれ、典藥寮へこの由を、早く〳〵。
近習　心得ました。
ト近習、奥へ入る。玄蕃　諸士は、側近く寄つて介抱
する。春雄、思ひ入れ。
春雄　ア、イヤ〳〵、某の病根は、この程よりの心遣ひ、
持病の積。暫らく次にて休息せん。さりながら、勅使の
入來に間もあるまじ。方々、用意。
皆々　ハア。
〽云ひ捨て御座を立たせ給へば、鞠川、諸侯も介抱し。
トこれにて、正面の御簾下がる。義成、正清、思ひ入
れ。
呼び　お勅使お入り。
〽御簾下がれば肥田守。
正清　三左衞門どの、お聞なされたか。早お勅使の御入來
とござる。
義成　搗て加へて春雄卿の、持病の惱みとあつて、即時
に届けもなるまじ……幼君の御名代は貴殿と申し……な

りや某、主人に成り代り、この旨勅使へ奏聞なし、叡慮
よしなに願はん存念。
正清　眼前の御病氣、是非がござらぬ。雛衣、其方は次へ
立つて、櫛どのへこの場の一件、物語つてよからう。
雛衣　左樣なれば仰せに從ひ、母上にも申し聞けるでござ
りませう……モシ、父上樣、後はよしなに、自らは、お
次へ參つて母樣へ。
義成　オ、サノ〳〵、今にもお勅使お入りあらば恐れあり。
此まゝ直ぐに、早參れ。
雛衣　心得ました。
〽結ぶ親子の緣傳ひ、次の間へこそ入りにける。
ト雛衣、下手の杉戸の內へ入る。向うにて
呼び　お勅使のお入り。
正清　最早お入りとござる。
義成　然らば此まゝ、正清どの。
正清　お互ひに、イザ
兩人　お出迎ひ申さう。
呼び　お入り。
〽程なく勅使の御入りと、知らせに出迎ふ近習の武士、
案內に連れて山蔭中納言、勅使の衣冠正しくも。

ト下がり羽になり、向うより、山蔭中納言、冠り裝束、
笏を正し、後より、侍ひ二人、烏帽子、半素袍にて付
添ひ、この次へ仕丁、沓の臺を持ち出て、好き所へ來
る。上手より、近習大勢、付添ひ出て、よろしく出迎
ひ
義成　お勅使とあつて、山蔭中納言元良卿、遠路の所、遙々
の御下向。
正清　恐れながら、我れ〳〵お出迎ひ
皆々　仕つてござりまする。
山蔭　方々出迎ひ、大儀にこそあれ。
義成　恐れながら、設けの席へ。
正清　お勅使樣には、イザ先づこれへ。
皆々　お通りなされませう。
〽設けの席へ着き給ふ、武家の權威も嚴重に、席を下が
つて尊敬し。
ト本舞臺へ來り、二重にて、床几にかける。附き人は
下手に扣へる。義成、正清、よろしく居住ひ
正清　お勅使樣には御苦勞のお成り。今日大切なる宣旨、
承るべき春若こと、半途にて思はぬ不快。幼少の身の
據ろなく、卽ち春若が傳き佐藤肥田守正清、身不肖な

から小田春若丸の名代。恐れながら勅命の趣き、拜聽奉らんが爲の此お目見得。

〽と相述ぶれば三左衞門。

義成　拙者儀は、北畠の老臣森三左衞門義成。主人春雄、今朝よりお勅使を相待つところ、俄かに病氣差起り、御對顏も叶ひ難く、名代たる某へ、勅諚仰せ聞けられなば

兩人　有り難く存じ奉る。

〽低頭平身恐れ入る、勅使逐一聞し召し。

山蔭　双方とも病氣とあれば、是非に及ばぬ、宣旨の趣き、承れ。

兩人　ハッハッ。

ト管絃になり

山蔭　小田春若、前の武將春永が嫡孫なれば、四海の大將と任じ置かるゝなり。未だ幼少なれば、北畠春雄を後見として、兩人付添ひ、政道執り行ふべきとの勅諚なり。

義成　ハヽア、有り難き御勅命。

正清　委細承知仕つてござりまする。

〽申し上ぐれば中納言。

山蔭　ホ、オ、兩人違背なき上は、天杯頂戴いたすべし。

兩人　ハヽア。

山蔭　ソレ、官人ども、用意の天杯、早々これへ。

兩人　ハア、。

〽ハッと答へて官人ども、長柄土器恭々しく、二人の前へ直し置く、三左衞門ッッと差寄り。

トこれにて、官人の中より、長柄の銚子、土器を杉戸の内より、三方に乘せしを持ち來り、義成の前へ差置く。

義成　主人春雄が名代義成、これにて頂戴仕る。

トこなしあつて、土器を取上げる。

〽威儀を正して三左衞門、土器取れば官人心得、なみなみ注ぐを、グッと乾し。

ト官人、長柄の酌をする。義成、よろしく呑み終つて

サア、佐藤どの、頂戴あれ。

〽と差置けば、正清取つて押戴き。

正清　春雄の名代三左衞門、頂戴の上は正清、如何で辭退仕りませう……叔父春雄と申し合せ、四海の安危を正し、宸襟を安んじ奉らん、勅答の天杯。佐藤正清、春若丸の名代、只今頂戴仕る。イザ。

〽イザと引受け肥田守、グッと呑み乾し勅使に向ひ。

天杯頂戴仕る上からは、武將嗣目の御綸旨、某へ下し賜はるやう、願ひ奉りまする。

山蔭　いやとよ。綸旨の儀は、春若病氣平癒の後、參内あつて頂戴せよ。天杯濟めば早退出。いづれも、さらば。

皆々　ハア。

ト平伏する。

山蔭　方々來れ。

ト笏を持ち、立ち上がる。

〽還御を告ぐる警蹕に、付添ふ官人、見送る武士、勅使は御座へ歸らるゝ、正清森に打向ひ。

ト下がり葉になり、山蔭、靜々と二重を下りる。官人、皆々付添つて、向うへ入る。正清、思ひ入れあつて

正清　勅使の趣き、演舌のみにて、綸旨だに頂戴いたさざる今日の入來。殊に春雄卿、當屋敷へ御入來ありながら、御對面もなく、ムゥ……何は兎もあれ、勅使の御前、滯りなく相濟み、お立ありしを春雄卿へ……御近習衆、言上召れよ。

諸士　ハッ、首尾よく天杯納まる上からは

同　勅使の還御諸共に、我が君へ言上せん。

義成　早く〳〵。

諸士　畏まつてござりまする。

ト、近習皆々奥へ入る。

正清　なんと三左衛門どの、大切なる武將嗣目の席に至り、四海の權威を司る、春雄卿の御病氣。

義成　時と云ひ、所と云ひ、互ひの病氣に、互ひの名代。

正清　綸旨は追つてと勅使の還御。

義成　實に綸言は汗の如し、出でて再び返らぬ言の葉。それと云はねど

正清　聞かねど

義成　互ひの

正清　名代。

兩人　ハテナア。

〽兩雄並び立つか弓、引くや互ひに心と心、未然を察して肥田守。

ト正清、思ひ入れあつて

正清　この正清、幼君の御病氣、中途より御歸館の進め奉れば、何とやら心がかり。某はこれより安土へ立歸らん。春雄卿の御前、よきに言上下されい。まつた倅主計之助は、當地に殘し置けば、萬端貴殿にお頼み申す。

義成　その儀は拙者にお任せあつて、心置きなく幼君の、

御身を守護なし召され……我れも改め貴殿へ頼みあり……
……ヤア〳〵雛衣、早參れ。

雛衣　ハア。

〽ハツと雛衣立出でゝ。

ト雛衣、出て手を仕へ

父上樣、なんぞ御用でござりますかえ。

義成　用と申すは別儀でない。いま正清どの、歸國を幸ひ、其方が身の上頼まん爲。なんと肥田どの、未熟なれども我が娘を、本國へ連れ歸られなば、義成が安堵、この上やござらうか。

正清　如何にも同道仕らう。雛衣、用意いたせ。

雛衣　すりや、私しを、お連れなされて下さりますか……エヽ、お嬉しう存じまする。

義成　イザ、雛衣、お供の用意。

雛衣　父上樣にも、隨分ともに御機嫌よろしう。

義成　其方も堅固で孝行せよ。

雛衣　アイ。

〽父母に名殘は惜しめども、やがて夫に本國で、近江と聞くも嬉しさに。

トよろしくあつて

正清　然らば森氏。

義成　佐藤氏。

正清　お別れ申す。

ト雛衣の手を持ち

雛衣、來い。

〽伴ふ舅は假の親、いそ〳〵打連れ立歸る。

ト此うち、正清、雛衣、花道よき所に來り、上手の松へこなし。この時、松の幹へ、忍びの侍ひ、鐵砲を持ち窺ひ居て、打たんとする。正清、これを見て、キツと睨む。これにて、忍び、慄ひ、松より落ち、立ちすくみ居る。正清、ムウと思ひ入れ。これをキツカケに鳴り物になり、正清、悠々と向うへ入る。

〽跡打見やる三左衞門、次第に顏色紫に、血走る眼はさながらも、必死の體と見えにける。

ト義成、次第に毒氣の廻りし體にて、アツと苦しみ血を吐く。

〽それと見るより、柵が走り寄り。

ト此うち、柵、出て、義成が態を見て

柵　コレ、我が夫、義成どの、持病にあらぬこの容體。お心持ちは如何でござりまする。

〽介抱するに目もかけず。

義成　ヤア〱、御主人、御計略の通り、鬼神と呼ばれたる佐藤正清を討り負ふせ、さぞ御本懐にござらうな。

〽底意を探る一言に、春雄一間を立出でゝ。

ト　この時、瓦燈口より、春雄、出て

春雄　ホヽオ、天晴れなる三左衛門、我が胸中を悟り知りよくも一命捨てたるよな。

柵　〽賞美の詞に驚ろく柵。
心得難き君の御諚、もしやあなたは。

義成　オヽ、鴆毒を以て五臓に注げば、最早落命。

柵　エヽ、そりや何ゆゑに、譯を聞かして下さりませ。
〽譯を聞かして〱と、おろ〱涙に尋ぬれば、春雄騒がぬ顔色にて。

春雄　その譯、某、語り聞かせん。

ト　笙の入りたる誂らへの合ひ方になり

この春雄、元來四海を望むと雖も、父春永が嫡孫たる、春若を大將となさんと、小田の舊臣心を傾むけ、中にも取分け佐藤正清、忠義は金鐵の如く、彼奴堅固にあるうちは、大望なか〱思ひも依らず、さるに依つて今日、勅使に内意を通じ、天杯に毒を仕込み、正清めを失へば、日頃の大望、時到れり。ハア、嬉しや、喜ばしやなア。
〽天にも上る勢ひに、初めて明かす叛逆の、底意の程ぞ恐ろしき、義成苦しき息を吐き。

ト　義成、思ひ入れあつて

義成　某、小田家の譜代ながら、君を補佐して臣となり、いづれに愚かはなけれども、先君の嫡孫たる、春若君を武將となすは、これ順道。忠臣の鏡たる佐藤を誑かり、某までを失ひて、甥の四海を奪はんとは、天理に背く諸人の嘲り。毒酒にこの身を捨て置いて、諫言申すは義成が、命を惜しまぬ心の潔白。補佐の兩人相果てなば、四海の政道御手に入り、誰れか面を上げ申さん。かゝる御身で邪の、御企ての淺ましや。お心を改められ、春若君を守り奉り、小田のお家を立て給はゞ、並ぶ方なき北畠、共に榮えを見すべきに、エヽ、お情ない御所存ぢやなア。

柵　〽諫めるその身は四苦八苦、見るに悲しく柵は。
コレナウ我が夫、愛しや家來は、主に忠義を盡し、主は家來を惠むこそ、武士の道とも云ふべきに、誠を立つる武士を、むざ〱と見殺しにして、その身の榮華をなさんとは、エヽ、胴慾な我が君さま。現在甥子の世を

奪ひ、四海の主になつたとて、お家の恥辱を思さぬか。夫の忠義の志し、思ひ遣りがあるならば、今際の際の諫め聞入れて、思ひ止まつて下さりませ。お主の爲に死ぬる身も、御馬前で討死せば、武士の本意と云ふべきに、毒に中つて無慘の御最期遊ばすとは、それが、それが

〽それが〳〵と云ひさして、主と夫の二道に、立つる操の柵は、名のみとこそはなりにけり、春雄は諫めを耳にもかけず。

春雄　ヤア〳〵、轟軍次、申し付くる仔細あり。早く〳〵。

〽早く〳〵と呼はれば、ハッと答へて馳せ來る軍次。

ト軍次、衣裳、上下、脱ぎかけにて、奥より出で來り

軍次　火急のお召しは、何事でござりまする……ヤ、この體は。

ト悄り、思ひ入れ。

春雄　如何に軍次、三左衛門がこの體なれば、正淸めも定めし落命、湖水に至り早船にて、彼奴が様子を見て參れ。

軍次　すりや、正淸どのゝ出船を、今より追ひ付き、生死存亡糺し申さん。

春雄　急げ〳〵。

軍次　畏まつてござりまする。

〽畏まつたと轟は、近江路さして馳り行く。

ト早舞になり、一散に、向うへ入る。

〽義成苦痛の聲振り立て。

義成　サア、我が君様、臣が諫めを御承引遊ばさぬか。

春雄　如何程云ふとも、返らぬ事だ。

義成　すりや、斯程まで申しても。

春雄　くどい。

義成　ムウ……此まゝ毒に死なんより、腹かッさばき相果てなば、君の惡名散ずる道理。諫の忠節。

〽右手へかばと突き立つれば。

ト刀を拔き、腹へ突き立てる。

柵　我が夫、待つて。

義成　コレ。

トこなしあつて、義成、キリ〳〵と引廻す。春雄、ヂッと見やり

春雄　ア、忠臣爰に

ト思ひ入れ。義成、引廻して中腰に立つ。柵、よろしく介抱する。春雄、見やる。この仕組みよろしく、木の頭。

止めしよなア。

〽惜しや果敢なき。
トこれへ三重をかぶせ、
浪の音にてツナギ、　よろしく幕

二　幕　目　　湖水御座船の場

役名――三左衛門娘、雛衣。轟軍次。鞠川玄蕃。
佐藤肥田守正清。

本舞臺、上の方、石山の景色、正面より下へ一杯に湖水を描きし道具幕。日覆より、松の吊り枝、爰に柿色の筒袖、漁師の拵らへの四人、艪櫂を持つて立ち、浪の音にて、引返し幕明く。

ト漁師、向うを見て

漁一　コレ〳〵、今のお侍ひの頼みを、安請合ひに請合つたが、僅かばかりの呑み代ぢやア、氣がねえの。

漁二　さうよ。殊にその若い侍ひと云ふのは、この湖水に風待ちをしてござる、正清さまといふ強い人の息子ぢやとよ。

漁三　その人が今日、祇園の社へ代參に行く途中で、今の侍ひが喧嘩をしかけたら、おいら達が出て、ぶち殺してくれと云ふのだが。

漁四　イヤ、さう巧くゆけばよいが、板子一枚下は地獄の稼業をして居ても、まだ〳〵それより危ねえ仕事。

漁一　いつその事、骨折り代の貰ひ德として、角の酒屋で一杯やつて

漁二　風待ちの御座船を見物しよう。

皆々　それがいゝ〳〵。

ト波の音になり、皆々、ワヤ〳〵云ひながら上手へ入る。ト道具幕を切つて落す。

本舞臺、向う鏡板へ打抜き、湖水の遠見、眞中に、舞臺一杯の御座船。朱塗り。所々に極彩色、鍍金の金物。下の方に舳を向け、屋根の軒へ紫にて、白抜き蛇の目の紋の幕を張り、上の方、胴の間、好み誂らへの通り、一面に塗り骨に緞張りの障子を立て、舞臺一面、浪布、波手摺りともよろしく飾り付け、一セイ、浪の音にて、幕明く。

ト直ぐに竹生島の謠になり
謠〽緑樹蔭沈んでは、魚木に昇る景色あり、月海上に
浮んでは、兎も浪を走るか、面白の島の景色や。
〽歸國を祝ふ棹の歌、聲賑はしく召しの船、忠と戀とを
一葉の、風に任する浪の上。
ト浪の音になり、橋がゝりより、小船一艘、以前の轟
軍次、軍兵、勢子、兩人にて、舞臺へ漕ぎ寄せ
軍次　さては御乘船も風待ちと見ゆる……憚りながらお取
次下されい。某儀は、北畠の使者、轟軍次と申す者。
佐藤氏お見送りとして參上せり。何卒御對顏下さるべ
し。
〽舳先に手を突き述べければ、正淸快然と障子を開かせ。
ト浪の音に鼓をあしらひ、緣張りの障子を引抜く。爰
に、正淸、見事なる衣裳、上下、褥に座し、この側に
刀掛け、その外手道具、莨盆なぞ置き並べ、長煙管を
持ち、雛衣、振り袖、裲襠衣裳にて、琴を調べ終りし
心。
〽來りし使者に詞を下し。
ト正淸、思ひ入れあつて
正淸　先例に違はず、厚志の使者、正淸異儀なく歸國仕
ると、よきに言上いたしてくりやれ。使者大儀。
〽大儀〻〻といふ顏色。
軍次　ハテ面妖な。正淸さまには、別して御氣分悪しうは
ござらぬか。
正淸　イヤ〳〵、打晴れたる湖水の面、心も一入長閑な船
中。
軍次　ハテ面妖な。實正お氣持は好くござるか。
正淸　ハテ、異な事に念を入れる。堅固と云ふが不思議な
か。
軍次　ア、イヤ〳〵、御機嫌ようて主人も滿足。最早お暇
仕らん……ソレ。
〽船子に目配せそこ〳〵に。
ハテ、面妖な。
〽船を廻して漕ぎ戻す。
ト船は其まゝ、橋がゝりへ入る。
〽雛衣をかしさ押包み。
雛衣　申し父上、折角來ながら御口上も申し上げず、麁相
な使者ではござりませぬか。
正淸　なにサ〳〵、内意を受けて某を、窺はん手段の使者。
ハ、、、、捨て置け〳〵……雛衣、いま一曲、所望ち

明治二年十一月守田座上演

中村芝翫の正清　三世澤村田之助の雛衣

や所望ぢや。

雛衣　ハイ、

〽所望々々と打寛ろぎ、四方に嘯く逍遥の、詠めを琴の緒に寄せて。

ト これより、下座の獨吟になり、雛衣、琴を調べる。

唄〽常磐なる、松に巣籠る雛鶴の、千歳を祝ふ聲すなる、園生の竹も世々こめて、茂りにけりな深みどり、替らぬ契り萬世の、龜も豐に棲める池水。

ト 此うち、よろしく琴の件あつて、好き程に、トヒョ掠めて、浪の音になり、日覆より、雁を引出し、向う正面へ引く。正清、これを見やり、思ひ入れあつて

正清　萬里の人南に去る、三春の雁北に飛ぶ、いづれの年月を知らずに汝と同じ歸る事を得ん……とは白居易が歸雁の詩、それにこれなる娘が爪音、雁も歸つて飛び來るべき、浦々の景色といひ、面白い〳〵。

〽見やる浪間をエイサッサ〳〵、サッと漣矢を射る如く押切り〳〵追ひ來る早船。

ト 前幕の玄蕃、以前の形、肩衣を脱ぎかけ、船に乗り、これに誂らへの鎧櫃を据ゑ、船頭二人、艪二挺にて、御座船へ乗り付ける。

〽春雄の近臣鞠川玄蕃、常に替つて禮儀厚く。

ト 玄蕃、思ひ入れあつて

玄蕃　正清どの御出帆の、名殘を惜む再度の使者、この一箱に餞別の、お心を籠められたり。歸着の砌り開封あつて、然るべう存じ奉ります。

〽詞の裏ぞ浦嶋が、並々ならぬ玉手箱。

誰ぞお取次下されい。

ト これにて、御座船に扣へし近習二人、件の鎧櫃を手傳ひ受取り、好き所へ据ゑる。

〽佐藤が舟へ舁き乘せれば。

ト 正清、これを見て

正清　御懇志のお使者、殊に心を籠められし餞別の一品、慥かに受納仕る……時に玄蕃、朋友の別れ、珍味佳肴はあらねども、一獻酌まん。

ト 三方に乘せし大杯を出し

サ、これへ〳〵。

〽何氣なき體、つく〴〵見て。

玄蕃　ハテ、面妖な。同じ銚子の大杯、三左衛門が有樣とは。

正清　ナニ、三左衛門には、どう致したな。

玄蕃　アノ、ものでござる。森氏には下戸と見えます。先刻の酒に餘程の酩酊。それに引替へ正清どの、また一獻とは大丈夫。併し、追ッ付け……イヤサ、めでたう御歸國。君にもさぞかしお待兼ね。拙者は直さまお暇申さう。さらばでござる。

〽さらば〳〵と夕浪路、漕ぎ來し船を漕ぎ戻す。

ト玄蕃、船頭へこなしあつて、船を漕ぎ戻しながら、合點のゆかぬこなしあつて、橋がゝりへ入る。

〽雛衣は不審晴れず。

雛衣　最前のお使者と云ひ、今のお使者、氣遣ひな事はござりませぬか。

正清　ハテ、何も構ふ事はない。今の後を、早く〳〵。

雛衣　アイ。

ト琴唄の上げになり

〽手に葉合はねば肥田守、不審晴れずと見送る船。

正清　始めの使者は先格の通り、再び來る鞠川玄蕃が、前後揃はぬ詞の端々。先例になき餞別の一品……ムウ。

ト鎧櫃へ思ひ入れあつて

すりや、三左衛門には。

雛衣　エヽ、父上の御身の上に。

正清　アコレ。

ト鎧櫃へ思ひ入れあつて、雛衣に脇へ寄れと云ふこなしあつて、櫃へ立寄り、刀の鐺にて、エイと突き破る。

〽打ち破る中よりも、忍びが持つたる鐵砲の、火蓋切る間も水底へ、ざんぶと切り込む佐藤が手の内。

ト櫃の内より、忍び、黒四天、見事の拵らへにて、小筒を構へる。本鐵砲の音。玉は外れて、たぢろぐ所を、正清、大刀引拔き、ポンと浪間へ切り込む。浪煙りパッと立つ。

雛衣　あれえ。

ト云ふを、正清、顔にて制して

正清　船子ども、清めの船唄、謳へ〳〵。

ト浪の音になり、下座にて

〽やら〳〵めでたいな、四海波風治まりて、常磐の枝ものほんえ。

ト此うち、好き所に、正清、血刀を差出す。雛衣、塗り湯桶・同じく盥を出し、湯桶の水を刀へかける事よろしくあつて、紙の臺の紙を取り、刀を拭ふ。これにて、舟廻る。段々と上の方へ廻して、船の舳・舞臺前より、土間の方へ出す事。此うち、正清、鞘を取上げ、

太刀を納めろうちに、また元の如く戻し、またよく廻す事。

〽葉も茂る、エイサラ〳〵。

ト正清、此うち、舳の端へ行き、水底を見込み思ひ入れ、雛衣、怖々正清の顔を見て

雛衣　兩御様のお顔の色が。

トこれにて、正清、氣を變へ

正清　ハて、麗かな。

トひよろ〳〵として、刀を突くと木の頭。

景色ぢやよなア。

トきざみに付きカケリにて　ひやうし幕

大詰

正清本城の場

役名――大内千島守義弘。船頭、灘右衛門實ハ後藤元兵衛政次。加藤主計之助清鄕。三左衛門娘、雛衣。轟軍次。加藤肥田守正清。

本舞臺、三間の間、中足の御殿。上下塗り骨の障子屋體。見附け金襖、すべて正清本城、本丸奥殿の模様よろしく、日覆より、紅葉の吊り枝。下手、柴垣、この前に誂らへの菊の花壇、花に誂らへあり、管絃にて幕明く。

ト爰に腰元三人よろしく居並び、今一人の腰元、長柄の銚子を前へ置き、蝶花形を折つて居る。

腰一　なんとマア照葉どの、お客様のお出でがあると、四五日あとにお先觸れがあつたとて

腰二　奥様の仰せ付けで、お茶やお菓子を毎日の用意。

三人　どうした譯でござんせう。

腰三　サア、そのお客様と云ふは、千嶋の冠者義弘さまが、御領國のお次手に、殿様をお見舞ひがてらのお立寄り。

腰一　シタガ、殿様はむづかしく、智惠が要るとやらで、お表の與惟閣へ引籠り

腰二　お宮仕へは森さまのお娘御、雛衣さま只お一人。

腰三　奥様にさへお逢ひなされぬは、ありやマア

三人　どうした事でござんせうなア。

ト此うち腰元の四、銚子へ蝶花形を結び付け

腰四　どうしたの斯うしたのと、あの譯をこなた衆は、知

らぬのかいなア。

三人　どう云ふ事やら、知らぬわいなア。

腰四　オヽ笑止……知らぬとあれば、話して聞かせませう。ありや斯う云ふ譯ぢやわいなア。都から森の御息女、雛衣さまを連れて戻り、若殿主計之助さまの嫁にするはずる氣なれど、若殿より大殿が先へ試みを……ソレ、する事ぢやわいなう。

腰一　コレ〳〵、深雪どの、又そのやうな戯れ事ばかり、嗜なましやんせいなア。

腰四　云うては悪いかえ。

腰二　ハテ、其やうな事が、大殿のお耳へ入つたら、唐まで聞えた怖い殿様。

腰三　睨み殺されうも

三人　知れぬぞえ。

腰四　それでも、百日が間只お二人、する氣がなうて、なんとせうぞいの。

腰一　アレ、又しても其やうな事を、高聲に云はしやんすな。もし奥様へなと聞えなば、どのやうなお叱り受けうも知れぬぞえ。

腰四　でも、わたしやてつきり其やうな事と、とつくに察して居るわいな。

腰一　ほんに、深雪どのゝ白々しい。あのやうな物堅い大殿様が

腰二　なんで其やうな思し召しがあるものぞ。

腰三　ほんにをかしい、深雪どのおやわいの。

三人　ホヽヽヽヽ。

腰四　わたしもをかしい。アハヽヽヽ。

〽なんの遠慮も高話し、後は笑ひの折柄に、一間を出づる葉末の前。

ト琴唄の合ひ方になり、葉末、裲襠衣裳にて、出て來り

葉末　これはしたり、どうしたものぢやぞいの。殿様御歸國遊ばすと、その日より御心願の筋ありとて、百日の物忌みは、別して今日は満願の、大事の日。黒書院の本丸と間は隔てど、高聲のおどけ話し、ちと嗜なんだがよいわいなう。

三人　ソレ見やしやんせ。深雪どの

腰四　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

葉末　して・お客人御入來の節の、用意の品々、調うたかや。

皆々　ハイ、調ひましでござりまする。
葉末　オ、、大儀々々。奥の廣間へ運んで置きや。
皆々　畏まりました。
〽打連れ立つて入りにける。
ト腰元四人、品々を持ち、奥へ入る。葉末こなしあつて
葉末　それにつけても我が夫の御身の上、先君御他界のその後は、幼な春若君を守り立てんと、永らく都の御逗留も、俄かに御歸國ましまして、百日の今日が日まで、妾を始め家臣の者へ、お目通りも許さず、物忌みなりと引籠り、お出で遊ばすお心は、都にまします其うちに、不慮の事ばしあつての事か。ても氣がゝりな事ぢやなア。
〽打案じつゝ立つて行く。
ト葉末、こなしあつて、上手へ入る。向う上げ幕にて、中間
中間　下がれ〳〵、下がり居ろう。
〽口々に囀づる奴ども、行たけ合はぬ大男、脊負ひし樽の菰包み、耳にもかけず。
トこれを下田節やうなる唄へ太皷をあしらひ、向うより、灘右衛門、好みの鬘、大縞・厚綿の一つ着、脚絆がけにて、胴金の一本差し、神明と記せし菰樽を四つ結び合せしを、とんぼうに脊負ひ、豆絞りの手拭を襟に巻き出る。後より中間二人、看板角字の印しつき、だんだら襟、木刀を差し、六尺棒を持ち、灘右衛門を支へながら出て、
下がれ〳〵。
灘右　エ、、やかましいわえ。通してくれ〳〵。
中一　イ、ヤ、通す事はならねえワ。千島守義弘さまが、御歸國次手のお立寄り。
中二　いつお出でがあらうも知れぬ、庭の打ち水盛り砂に、張り番をして居るおら達二人。
中一　殊に殿樣は御在國。
兩人　下がれ〳〵。
灘右　エ、、聞分けのねえ和郎達ぢやわい。その殿樣と云ふは、旦那どのゝ近付きだから、おらが土産を持つて逢ひに來たのだ。
中一　ヤア、此奴が〳〵。身の程知らぬ、野方途もないその頸。
中二　さう吐かせばおら達が
兩人　ちよつと斯うして。

〽支ゆる奴が首筋元、両手に引提げ、ノッサノ〳〵
ト両人、六尺棒にて、打つてかゝるを、灘右衛門、ちよつとあしらひ、両人の襟髪を取つて、宙に引ッ提げるやうに引立てる。
オヽ、痛え〳〵。
〽宙にぶらりと角平丸助、いびつになりてそりたつたり。
ト灘右衛門、こなしあつて
灘右　ハヽヽヽ。登り日和の追手を捨て、爰の旦那を見舞はうと、わざ〳〵廻つた、灘右衛門と云ふ船頭だワ。野暮を云はずと通して下さい。
中一　ハヽア、ナニサマ、さう事を分けて云ふを聞けば
中二　オヽ、それ〳〵、船頭に違ひない證據は
両人　灘右衛門が荒かつた。緩めてくれ〳〵。
トこれにて、両人、苦しむ思ひ入れにて、手を合せ拝む。
灘右　サア、船頭に相違ないから、通してくれるか。
中一　オヽ、通すとも〳〵、通すから
両人　爰を放してくれ〳〵。
灘右　そりや、放したワ。
ト突き放す。両人、こなしあつて

中一　イヤ、恐ろしい力だ。
中二　痛い目に合はしたなア。
灘右　どうしたと。
中一　コレ〳〵、でつかい暴風に逢はぬうち
中二　サア〳〵、来やれ〳〵。
〽尻に帆かけて逃げて行く。
ト両人、逃げて揚幕へ入る。灘右衛門、見送り
灘右　エヽ、態を見をれ。弱虫めが。ヘヽヽ、ハヽヽヽ。
ト云ひながら舞臺へ来る。この時、奥より、以前の腰元出る。後より、葉末、出て、様子を窺ふ。腰元、灘右衛門を見て
腰一　奥様のお居間近う
腰二　賤しき身形で
両人　下がりや〳〵。
ト灘右衛門、動かぬゆゑ、葉末、思ひ入れあつて
葉末　アヽ、コレ待ちや……つひに見馴れぬ其方は。
灘右　ヘエヽ、アノわしは……ムウ、さてはお前が、この内のお家さんぢやな。先達て旦那どんが、国へ戻らんすと、それからの御病氣で、さぞお心遣ひでござりませうな。

葉末　アヽ、これはしたり、殿様が御病氣なぞとは思ひも依らぬ……さうしてマア、そぐわぬ身形で、馴れ〳〵しい、一體其方は何者ぢや。

灘右　成る程、お家さんは、わしを知るまいが、わしは姿の内の殿様が、唐へござつた時、雇はれた船頭の、灘右衛門と云ふ者でごんすわいなう……マア、何にしろ、この土産を。

〽あたり見廻し縁端へ、脊負ひし酒樽摺り下ろし。

ト此うち、灘右衛門、樽を好き所へ下ろし、腰元に向ひ

コレ〳〵、姐さん達、茶を一杯振舞はんせ。

腰一　アレ、お茶をくれいと云ふわいなア。

ト腰元にこなしあつて

腰四　サア〳〵、茶々上げるぞえ。

ト揃目して、高足の茶臺にて、茶を持つて來る。灘右衛門、呑みながら

灘右　コレ、煙草の火を貸さんせ。

皆々　アイ〳〵。

ト煙草盆を持つて好き所へ置く。灘右衛門、引寄せ、叺煙草入れを出し

〽どつさりそこへ大胡坐、始終の様子打見やり。

ト灘右衛門、よろしく、葉末、思ひ入れあつて

葉末　さては過ぎし頃、殿様が四方山のお話しの折、船頭の灘右衛門と云うて、力量勝れし者ありと御意ありしは、アノ其方かいなう。

灘右　アイ、わしでごんすわいの。旦那どのとは、ぞくこん近付き。その病氣の見舞ひに、積み込んで來た土産は、この通り、鮮氣がなうてはと、鮭の素引きのこの藁苞。船頭の土産だけ、送り状を添へて來たわい。

ト藁苞の鮭の素引きと樽の傍に結び付けしを出して見せ、懐中より、上包みせし書き物を出し見せ

この書附けは、旦那どのへ、直々手渡しする積り。

ト件の書き物を見せ、懐中して

何にしろ、この酒肴を、早く旦那に届けたいが……シタが、女中の手から旦那どのゝ所へ、持つて行くのも重たい物。おれが引提げて行かう程に、その病床へ案内してもらはうかい。

〽と立ちかゝるを押しとゞめ。

葉末　アヽ、コレ〳〵、待ちや〳〵……夫正清には、御歸國のその日より、御心願あつて、百日の間の御獻物忌み。

他人は元より、一家中の者も、堅くお居間へ通路を止め、人には曾てお逢ひなされぬわいなう。

灘右　そりやこそな／＼。その人に逢はぬが病氣の印し。それゆゑに、わしが見舞ひに來たのぢや。

葉末　エヽ、又してもお病氣々々々々と、さがない事を云ふまいぞ。お物忌みのその間は、妾とても御對面は遂げねども、障子隔てゝ夜毎の伺ひ。常に變らぬお詞つき。堅固にお出で遊ばすわいなう。

灘右　ムウ。

〽手をこまねき。

ト灘右衛門、思ひ入れあつて

國の主に譬へし星に、存命叶はぬ印があつても。

葉末　ヤア、そんなら其方は、アノ天文を見やるのか。

灘右　されば、天文を見るのが船乘りの持ち前サ。和波な日和に疾風が起り、日本晴れの青空が、車軸を流す大雨と、變るも常に天地の變……それゆゑ旦那の身の上も。

葉末　エヽ。

〽こなたは立つて花壇の菊、其まゝ手折つて差出し。

ト灘右衛門、星へ思ひ入れあつて、下手へ行き、花壇の菊を折り、持つて來り、葉末の前へ差出し

灘右　お家さん……イヤサ、奥様、この二本の花の枝、なんと見さつしやります。

トこれより、謎らへの合ひ方になり

葉末　今が盛りの闇の菊、二本手折り差付けて、なんと見るとは興かる事。新らしい謎ねやう。

灘右　サア、お殿様の御身の上、善悪二つの占方を、時に取つての花の謎々……判斷なされて御覧じませ。

ト葉末、件の枝を取上げ、こなしあつて

葉末　ハテナア、菊は隱逸の翫び、その下露を汲みそめて、齡を延せしは賴範が試し。

灘右　長き壽命の翁草、高麗菊の果までも、輝やく武功は金目貫。

葉末　その我が夫の勳しに、色増り草星見草。

灘右　サア、星の光りの大變も

葉末　替らぬ匂ひ紅菊の、優しい花を石割とは。

ト此うち、灘右衛門、受持つて

灘右　その異名こそ鬼上官、鐵石城も打ち破る、盛りの花の大將も。

ト持つて居る仕掛け物の紅菊、萎みたるへこなしあつて

コレ、この通り時ならぬ

ト思ひ入れあつて、葉末へ差出す。葉末、見て

葉末　身に知る秋の霜を受け、萎める花となるならば

灘右　夜半の嵐に

葉末　ヤ。

灘右　落花狼藉。

ト花の枝を打つ。一輪、花バラ／＼と散る。

葉末　なんと、

トきつと思ひ入れ。

灘右　サア、もし其やうな事があらば、落花再び枝に返らず、園の手入れが肝心と、わしが掛けたる花の謎……解けたら旦那に逢はして下さい。

葉末　心あり氣な始終の様子。殊に持参の菰樽の、酒は愁ひの玉箒、記した銘の淵明は、延る命に五音も叶ふ。

灘右　めでたう祝うたわしが手土産。

葉末　お物忌みも今宵が満願、明けなば直ぐに妾が執成し、お目見得さするであらうわいなう。

灘右　有り難い。そのお目見得をするまでは、お邪魔であらうが、どこかそこらへ。

葉末　オヽ、心置きなう。

灘右　打寛いで

葉末　ソレ、腰元ども、客間へ伴なひ、休息させや。

腰元　畏まりました。

灘右　女中達、案内を頼みますよ。

ト立ちかける。この時、以前の送り状と云ひし書き物を落す。葉末、取上げ

葉末　ヤ……こりやコレ土産の送り状。

ト懐へ入れようとするを、灘右衛門、手早く取つて

灘右　イヤ、旦那に逢うて自身に手渡し。マア、それまでは、お家さん／＼。

葉末　船頭の灘右衛門。

灘右　ドレ、錨を卸ろして待たうかい。

〽藁苞携へ灘右衛門、何か一癖胸の内、引別れてぞ。

ト灘右衛門、腰元、皆々付添ひ上手へ入る。

〽入る後に、殘る葉末は氣も濟まず。

ト葉末、思ひ入れあつて

葉末　我が夫の御身の上に、御病體はなけれども、この程來りし千嶋守、義弘どのゝ先觸れにも、主が所勞を尋ねる口上。今また來りし灘右衛門が、詞の端々、只者ならず……心の底意は。

〽善か悪かと案じらるゝ時しもあれ。
ト向うバタ〳〵になり、袴、股立ちの侍ひ、走り出て、
花道にて
侍ひ　ハッ、申し上げます。
葉末　慌だしい。何事ぢや。
侍ひ　ハッ、只今若旦那樣、俄かに御歸國の先觸れあつて、
早駕籠一挺、大手先へ到着の體にござりまする。
ト云ひ捨て、引返して入る。
葉末　ムウ、すりや主計之助が歸國とあれば、いよ〳〵以
て心ならず。
〽云ふも終らぬ彼所より。
ト向う揚げ幕にて、人足大勢。
大勢　エイサッサ〳〵〳〵。
〽エイサッサと早駕籠を、引ッ張る白布白砂洲を蹴立て、
庭縁先に舁き据ゑたり、見れば我が子の主計之助、火急
の體に息切れを、潤ほす母が氣付けの水。
ト此うち、人足大勢、桐棒の駕籠へ、主計之助、白布
の鉢巻にて、好みの拵らへ、皆々舞臺好き所へ舁き据
ゑる。葉末、主計之助に藥を服ませ、よろしく介抱す
る。

葉末　コレ〳〵主計之助、母ぢやわいなう……コレ、心を
確かに、主計之助いなう。
〽呼び活けられ、始めて正氣付いたる主計。
ト これにて、主計之助、氣の付きしこなしあつて
主計　ヤ、母樣か……オヽ、爰は本城。ハヽア嬉しや。
〽忝なや。
父上樣の御病體、御大切に及ぶと聞く。最早御逝去なさ
れたか。早う聞かせて下さりませ。
〽云ふ聲も急き切りて、涙と共に尋ぬれば、母は興ざめ。
葉末　そりや何事ぞ。其方までが同じやうに、我が夫を御
病氣とは。
主計　イヤ〳〵〳〵、お隱しあるな。いつぞや父上歸國の
砌り、森氏の縁邊、和談の取結び。天杯の神酒の中へ、
毒を仕込みし春雄の奸計。これに中つて三左衞門どのは、
その日に落命ありしゆゑ、正淸とても、例へ勇將なれば
とて。
〽本國までは叶ふまじと、聞いて苦しむ六日以來、
後室柵どのと、斯く云ふ我れら兩人を、春雄が館へ招
き寄せ、正淸病氣の聞えあり、汝見舞ひとして本國に馳
せ下り、存命なれば使者は私し、死後の使ひは柵どの

と

〽生死二つの御教書を、二人へ分けて賜はりしは、父の安危を採らん計略。

チエ、憎しと思へども、胸を摩つて取納め、後室を出し抜いて、我れらはその夜に出船なし

〽駈け来りしも父上に、父の様子を聞きたいばつかり。縦の大事を思し召し、お隠しあるは理りながら、心に覚悟も致したし。コレ〳〵、母上、包まず明かして下さりませ。

〽包まず明かして給はれと、思ひ込んだる物語り、始終を聞いて又悔り。

ト両人よろしくこなしあつて

葉末　オヽ、思ひ合せば最前も、合點のゆかぬ灘右衛門が詞の端々、割ツ符を合すこの場の仕儀。心元ない夫の安否……糺すは主計……コレ。

ト思ひ入れあつて、主計に囁く。

〽これ斯う〳〵と耳に口。

主計　そんなら、父に附添ひ居る、雛衣どのに。

葉末　用ある時は合ひ圖の驛鈴、これを其方に渡す程に。

主計　すりや、この驛鈴にて別間の内の

葉末　凶事か吉事か。

主計　[illegible]子が安危。

葉末　そんなら直ぐに

主計　母上様。

葉末　サア、早う〳〵。

主計　ハツ。

〽謀し合せて。

葉末　コレ。

ト主計、驛鈴を持ち、花道へかゝる。鈴、カラ〳〵とするゆゑ

シイ。

ト留めるを木の頭。主計之助、驛鈴を袖に隠す。

密かに〳〵。

ト双方よろしく思ひ入れ。調べになり、

ト つなぎにて、直ぐ道具出来次第引返す。

幕

本舞臺、正面、石垣の上へ一重の堤、逆茂木を植ゑ、この上へ、城の塞の外堺の道具幕を下ろし、日覆より松の吊り枝。上下、葭の茂み、同じく藪疊。すべ

て、熊本本丸の模様、山颪し、時の鐘にて、引返し
て、薄明く、
ト静かなる禪のツトメになり、向うより、忍びの着付
け、脚絆、手甲の上へ三度合羽を引かけ、好みの鬘に
て、藁苞に入りし大小を背負ひ、轟軍次にて、三度笠
を翳し、出て來り、花道にて
軍次　昨夜當地へ着船いたし、船上がりせし湊より、姿をやつ
し、今日一日、市中の風聞、城下の取沙汰聞き濟まして、
やう／＼と時刻も宵闇、最屈竟……ムウ、さうだ／＼。
ト右の鳴り物にて、あたりへこなしあつて
爰は確かに本城の、山續きの裏手道……ソレ。
ト思ひ入れあつて、本舞臺へ來り、笠を側に置いて、
懐中より、呼子を出し、上下へこなしあつて吹く。こ
の時、上手より、玄内、彌忠太、野伏りの拵らへにて、
竹の仕込みを持ち、好みの鬘の上へ頬冠りをして、出
て來る。兩人、思ひ入れあつて
玄内　合ひ圖の呼子には
彌忠　軍次どのか。
ト思ひ入れ。木魚入りの合ひ方になり
軍次　コリヤ、其方等は玄内彌忠太、砦の案内、如何であ
つた。
玄内　されば貴殿のお頼みゆゑ、七日以前に當地へ參り、
彌忠　或ひは商人職人體、禰宜山伏と姿を替へ、城内の
樣子を窺ふところ、大手の門より仕掛けても
玄内　正清歸國のその後は、出入り嚴しく改めて、紛れ込
む事思ひも依らず……それゆゑ是非なく、この通り、野伏
りと身をやつし、この本城の搦手より、忍び込まんと思へ
ども
彌忠　アレあの通り二重の高塀、逆茂木ひつしと植ゑ並べ、
要害堅固の城中ゆゑ、我れ／＼どもの力に及ばず。
玄内　そこで貴公がござつたら、相談遂げんと
兩人　相待ち居つた。
軍次　イカサマ、兩人が申す通り、聞きしに優りしこの要
害、堅固の崖へ其まゝに、疊み上げたる二重の石垣、たと
へ鐵壁鐵の、筋塀繼戸を立て置くとも、斯く申す轟
軍次が、日頃得意の忍術の、奇特を以て姿を隠し、番卒
どもの目を晦まし、忍び入るのは手間隙要らず。コレ。
ト兩人に囁く。
玄内　すりや、我れ／＼も共々に。
彌忠　奇特に姿は

兩人　鼠と變じて館の內へ。

軍次　コリヤ、兼ねて我が君春雄卿が、天杯に准らへ、忠臣の森三左衞門が、命を捨て、盛りかけし毒酒を、なみなみ喰つても、生き永らへ居る正淸が、寐間へ忍んで只一討ち。

ト思ひ入れ。兩人も仕込みの杖へこなしあつて

玄內　刄を以ての働らきなら

彌忠　佐藤が一命。

軍次　首尾よくやれば、春雄公より褒美は莫大。

兩人　立身出世。

軍次　必らず拔かるな。

兩人　心得ました。

軍次　來やれ。

ト山颪しになり、軍次先に兩人付いて、上手へ入る、鳴り物、打上げ、知らせに付き、蘆垣藪疊を引いて取り、幕を切つて落す。

本舞臺、四間の高足、切り石疊の上へ、檜木造り、地覆ひの書割り、左右石にて、石疊の上がり段、上下、襴間の所、白漆塗り、家造りにして、砦の本丸。

正面、三間の間へ、誂らへの御簾を下ろし、此うち向う見付け金襖、蛇の目桔梗の紋散らし。上の方、天守へ登り口の段階子、上下白塗り、城の窓、石垣の見切り、襴間の所、瓦葺き、この家上下三方へ折廻し、これより上がる、白漆塗り家、窓、すべて思惟閣天守の道具、後にこの家せり下ろしの誂らへあり、この閣の正面へ、茜へ金蛇の目の紋散らしの色彩、青海波の切拔きの御簾を下ろし、下手誂らへの柴垣、この前に切り戸口、すべてよろしく飾りつけ、床の送りにて、道具納まる。

〽行く先は二重に建てし思惟の閣、人の出入りは止むれど、秋を告げ來る風の聲、庭の草木に訪れて、すだく蟲さへ物淒き。

ト此うち、掠めて風の音、蟲笛にて、主計之助、以前の形にて、揚げ幕より出て來り

〽我が本城へ我れながら、心置く露踏み分けて、窺ひ來る主計之助、隔ての垣に身を寄せて、母の敎への驛路の鈴、振ればこなたはそれぞとも。

ト主計之助、切り戸の傍にて、以前の鈴を振る。

〽兼ねて松虫雛衣が、手燭携へ庭に下り。

ト此うち、雛衣、振り袖衣裳、庭下駄、手燭を携へ、
こなしあつて
雛衣　母上様、イザ。
〽サア此方へ、とゆうしでの、神の結ぶの縁ぞとは。
ヤ、主計さまか。
主計　そちや雛衣。
〽切り戸押明け走り寄り、夢ではないかと嬉しさの、後は詞も泣くばかり。
ト雛衣、ハア、と縋りてこなし。
ヤレ、聲高し、密かに〳〵……先づ何よりは父の身の上、餘人を遠ざけ御身一人、お側に仕へあると聞く。物忌みなりとは心得ず、何か深い譯あつてか。其方定めし存じつらん……コレ、様子を聞かして下されい。
〽透かし宥めて尋ねれど、こなたは猶も縋り寄り。
雛衣　ア、コレ申し、久し振りで逢うたわたし、無事にあつたか變らぬかと、たつた一言仰しやつても、不孝の科にはよもなるまい。
〽そのお心とは露知らず、都でお別れ申してより、勿體ない事ながら。
父様や母様を、思ふ案じはどこへやら。
〽あなたの事が苦になつて、ほんに寐た間も忘れかね、
逢ひたい見たいと明暮れに。
焦れ慕うて居るものを。
〽聞えませぬとの恨み言。
主計　ホヽオ、その恨みさりながら、それは内證、今日國へ歸りしは、某が所存のみならず、其方の母御、栅どのの進めに任せ、父の安否を尋ねん爲……コレ、父上には御病氣に、相違あるまいがの。
雛衣　アイ、別間の様子は母様始め、誰れにも云ふたと口留めなれど、さう仰しやればお食も進まず、折々手箱の草の根を、出しておあがりなさるゝばかり、夜の頃よりは高樓にて、御祈念あるも只お一人。
主計　ムウ、それにこそ仔細ぞあらん。母上、お聞きなされましたか。
ト上手へ思ひ入れ。この時、上手にて
葉末　オヽ、仔細はこれにて聞きました。
〽思ひがけなき切り戸の蔭、出づる葉末を見て恟り。
ト葉末、手燭を携へ出る。
雛衣　ヤア、あなたは母様。
葉末　ア、コレ、雛衣、氣遣ひしやんな。父上への申し譯

は、この母がすなわいなう。
〽母は娘を押静め、別間に向ひ、手を仕へ。
貴方へ申し上げまする。都の御前より上使として、悴
主計之助、只今参着いたしてござりまする。
〽取次ぐ母の詞より、外に答へもなき折柄。
ト風の音、薄ドロ〳〵、やうの音にて
〽怪しや庭の草隠れ、顕はれ出づる丈なる鼠。
ト上下より、差し金にて、鼠三疋、顕はれ、三人へ飛
びかゝらんとする。
葉末 ヤ、形も勝れし怪しき鼠。
トよろしく追ふ。
雛衣 追へば其まゝ、別間の方へ。
三人 アレ〳〵〳〵。
主計 ハテ
三人 心得ぬ。
トどろ〳〵にて、件の鼠、上下、横手、障子の元にて、
ホッと掛け煙硝にて消える。
〽鼠は其まゝ楼閣へ、入るよと見えしが一間の物音。
トどろ〳〵、障子の内にて音する。三人、よろしくこ
なし。
葉末 鼠は御座所へ入ると其まゝ
主計 俄かに烈しきあの物音。
雛衣 父上様の御身の上に
主計 何にもせよ、ソレ。
〽すは一大事と駈け寄る障子、蹴放す別間に燈火も、消
えて判らぬ真暗がり。
ト三人立寄る。主計之助、御簾へ手をかける。これに
て、正面の御簾巻き上がる。爰に、正清、やつれし拵
らへ、月代の延びたる鬘、白綸子重ねの上へ、見事な
る縫ひ模様、廣袖衣裳、前帯、小さ刀、側に大刀を引
つかけ立ち身。以前の玄内、彌忠太、鼠拵らへの忍び頭
巾、鼠の頭にして、両人、抜刀にて、正清に引付けら
れし見得。後に軍次、これも同じ忍び形、四天脱ぎか
け、凛々しき拵らへ、抜刀を構へ、窺ひ居る。
〽忍びを相手に正清が、足下に踏み付け、襟髪取り、当
るを幸ひ人礫。
トちよつと立廻つて、両人を二重下へ投げ落す。主計
之助、両人を突き廻し、見事に斬り倒す。
〽投出す庭先主計之助、得たりと仕留める早速の働らき

軍次　後に抑へし轟軍次。
〽切り込む刀打ち落し、グッと引付け大音上げ。
正清　ヤア、鼠と變じ我が居間へ、間者に入りしは春雄の家來、忍びに名を得し轟軍次。
〽むんづと掴んで膝に引敷き。
首引抜くは易けれど、命を助け遣はす程に、正清が身に恙なく、堅固に居ると都へ歸り、春雄にこの事申し聞けよ……命冥加な、うづ虫めが。
〽宙に握つてエイヤッと、投げ越す身體は庭の面、鼠となつて逃げ去つたり、主計之助は父の顔、見る嬉しさに。
ト此うち、正清、軍次とちよつと立廻つて、トヾ軍次を柴垣の蔭へ投げ込む。切り穴より、縫ひぐるみの鼠、ドロ〳〵にて顯はれ出て、向うへ走り入る。主計之助思ひ入れあつて
主計　ハツ、父上樣。
葉末　御健勝にましますか。
兩人　チエヽ、有難や。
〽葉末も共に喜ぶ體、正清はヂロリと見やり。
正清　ヤア悴、おのれ大切なる幼君の、守護に殘せし身をもちながら、何用あつて歸國いたした……ムウ、何か、女に心引かされてか。アノ茲な未練者めが。
〽睨み付けるを葉末が差寄り。
葉末　アイヤ、我が夫、主計之助が參りしは、春雄卿より父への使ひ。
〽燈火取つて燈臺へ、移す此方に主計之助、持參の御書を取出し。
ト葉末、雛衣、手燭の灯を菊燈臺へ移す。主計之助、二重にある瓶子を取退け、件の白木の三方へ立て文を乘せて
主計　春雄卿より下されしこの御教書。イザ、御披見下さりませう。
〽縁側に直し置く、開きもやらず。
正清　ヤイ、丁稚め。おのれ生年十七才、日本無双の我が悴と生れながら、忠孝信義の是非をも分たず、春雄の甘き口に蕩され、御教書なぞとは慮外千萬。
〽其まゝ足下に蹈み碎き。
ト件の御教書を三方の儘蹈み碎く。
〽ハッタと庭に蹴落せば、主計はハッと赤面の、詞なければ母が引取り。

葉末　そりや餘りお氣強い。なんぼうお氣に叶はいでも、助けられたる恩は恩。あの子の難儀になる事を、思ひ返して下さりませ。

〽母の願ひも慈悲なりし、思案を極め主計之助。

主計　實に誠、親子兄弟矛盾になるも戰國の常。武士の慣ひ……母上、御無事で。

〽と駈け出すを。

葉末　ア、コレ〳〵、その一言が敵味方。侍ひの義と云ひながら、母が悲しさ……この子が思ひ、後の嘆きを推量して、マア〳〵待つてたもいなう。

〽母の諫めに雛衣も。

雛衣　たとへお返事遲くとも、父上都にましませば、お首尾惡うはなされまい……申し、舅御樣、親子夫婦の生別れ、不便と思したつた一言、お留めなされて下さりませ。

〽お慈悲〳〵と手を合せ、拜むうちにも戀人に、離れ難なき女氣は、哀れにも又いぢらしさ。

　ト雛衣、よろしくこなし。正清、思ひ入れあつて

正清　ホ、オ、娘が願ひ、さる事ながら、執成し致すべき三左衞門は、先達て我が歸國の後にて、その場を去らず疾に落命召されしならん。それに相違はあるまいがな。

主計　ハア、。

　ト主計、思ひ入れ。雛衣、驚ろき

雛衣　すりや、父樣は……エ、、。

〽ハッとばかりに驚ろく雛衣、正清は詞を正し。

正清　サア、女の緣にて主計之助、その身を立つる心なるや。

主計　アイヤ、父上の御意とも存ぜず。三左衞門どの死去せし事、御存じあれば猶以て、御身の上氣遣はしく、立歸りしは、この本城を守らん爲。

〽云はせも立てず高笑ひ。

正清　へ、、、ハ、、、、。例へ如何なる變あつても、おのれ如きに力を借りんや。六十餘州と釣替への正清が本城、いつかな人手に渡さうや……ヤア〳〵悴、我れに構はず幼君へ、忠義の功を輝かせよ。もし未練の働らきある時は、億萬劫親でない、子でないぞ。

　ト思ひ入れあつて、主計を見ろ。主計も正清の顏を見上げ、兩人、よろしく思ひ入れあつて

心を定めて早歸れ。親子の對面、これ限り。

〽烈しき詞諸ともに、親子の中を隔つる御簾。

　ト御簾を下ろす。主計、思ひ入れあつて

〽思案を定め主計之助、
主計　ハツ、その御賢慮を聞く上は、主計之助淸鄕が、所存を立てゝお目にかけん。
〽懷中より一書取出し。
ト封じたる書き物を出し
この一封は雛衣どのへ……後にて披見いたされよ……母樣、お暇申す。
雛衣　ア、モシ、そりやお胴慾ぢや……コレ申し、主計さまいなう。
〽なうこれ待つてと雛衣が、夫を慕ふ娘氣に、呼べど詮方なき倒れ、伏し沈みたるばかりなり。
ト主計之助、よろしくあつて向うへ入る。
葉末　コレ雛衣、爰へ〳〵、ハテマア、爰へおぢや。
ト雛衣、泣き伏す。此うち、葉末、件の書き物の封を切り、見て
葉末　コレナウ雛衣、なんぼう焦れ慕うても、主計之助には添はれぬわいなう。
雛衣　エ、……母樣、そりや又なぜでござりまする。
葉末　オヽ、驚ろくは尤もぢやが、コレ、其方の父御の義成どのが、不慮の最期もお主の業、恨むに甲斐なき其方樂親子。また主計之助も雛衣と、飽かぬ妹背の縁切られば、春雄卿に助けられし、恩に命を捨てねばならぬ……コレ、引別るゝも操ぢやと諦めや。ヤ、……證據はこの文、
〽手燭の灯火差寄せれば、涙ながらに押開き。
ト件の文を出す。雛衣、開き見て
雛衣　ナニ〳〵「父の仇たる春雄の忠臣、森氏の娘なれば、所詮添はれぬ敵同士、縁切る上は一旦の、恩も情もこれ限り」ハア、。
〽ハツとばかりに讀みさして、正體涙に暮れけるが、覺悟極めて懷刀、咽喉にガバと突き立つれば。
ト此うち、思ひ入れあつて、懷劍を出し、咽喉へ突き立てる。葉末、驚ろき
葉末　コレ雛衣、何ゆゑに死ぬるのぢや。早まつた事しやつたなう。
〽抱き起して介抱に、娘は苦しき顏を上げ。
雛衣　早まつたとは愚かな仰せ。主計さまに添はれずば、斯く成り行くは身の覺悟。
〽思へば果敢ないわたしが身の上、父の最期といふ事も、今までは夢にも知らず。

御無事でお出でと思ひ詰め、仇に暮らした不孝者。〽その罪科が報い來て、二世と誓ひし戀仲も、今日を限りとなり果てしか。どうぞ女夫になられるゝやう。〽執成し頼み上げますると、今死ぬる身の際までも、輪廻に迷ふ心根を、思ひやつたる姑が。

葉末　オヽ、尤もぢや。道理ぢやわいなう。思ひ思うた二人が仲、やう／＼の思ひで、世間晴れて女夫となれど、其まゝ國と都へ別れ、戀ひ慕りたる今日が日まで、最前爰で逢ひたるばかり、しげ／＼物も云ひ交さず、飽かぬ妹脊も忠義の爲に、夫の手より離別の狀。その悲しさにこの如く

〽死なうと思ひ詰めしも道理。

命を捨てしは女子の操……オヽ、出かしやつたと云ふものゝ、それを見て居るこの母が

〽いぢらしいやら可哀いやら、胸一杯にせき上げて、兎角の詞泣き倒れ、心も亂るゝばかりなり。

ト葉末、よろしく悲しみのこなしある。

〽折しも此方の柴垣を、押分け出でし灘右衛門。

ト風の音あしらひ、バッタリ音して、下手の柴垣より灘右衛門、以前の拵らへ、手拭を被り、藁苞を抱へ、押分け出る。

〽かしこの空をキッと見やり。

ト空へ目を付け、思ひ入れあつて

灘右　晴れ行く分野は寅の一天、衆星正に照り輝やき、國の主に司どる、的星おのづとたんだくして、北斗の光に映ずるは……ハテナア。

〽未前にさてはと心の推察。

ト懷中より纒めたる書き物を出し

併し、最前脊負つて來た。土產の酒の送り狀……おれが手づから旦那どのへ屆けて行かうか……エイ……。

〽障子の透間へ投げ入れたり。

ト屋臺の方へ投げ入れ

さらばでごんす。

〽のさ／＼と立出づる、此方の一間に聲あつて。

ト灘右衛門、花道へ行きかける。この時、奧にて

正淸　ヤア／＼、船頭灘右衛門とは僞はり、誠は備前の國の住人、後藤元兵衛政次待て。

灘右　ナニ、待てとは。

正淸　日頃待ち得し軍將に、當城の主、佐藤肥田守正淸、

今改めて對面せん。

灘右　何がなんと。

〽對面せんと呼はつて、開く一間に主の正清、以前に替る六具の出立ち、妙法蓮華の七字の籏を、弓手に押立て座したる姿、武威三軍に鳴り響く、唐國までも今の世に、怖ぢ恐るゝも理りなり、灘右衛門は進み寄り。

ト此うち、障子を開く。内に正清、甲冑に身を堅め、床几にかゝり、左の方に七字題目の赤旗、誂らへの劍烏帽子形の兜なぞ、左右へ飾り、よろしく住ひ居る。灘右衛門、思ひ入れあつて

過ぎし頃御身に隨ひ、朝鮮渡海の折柄に、安片府の船軍に、賜はつたる感狀を、送り狀と名付けて、亡父政清が讓りの小柄を、重りとして投げ入れし一間の内、いしくも悟りし御身が眼力……如何にも船頭灘右衛門とは僞はり、誠は後藤元兵衛政次なるワ。

〽上張り脱げば腹巻着込み、自然に備はる勇士の粧ひ、實に英傑の武者振りなり。

ト灘右衛門、四天、凛々しき形に引抜く。正清、思ひ入れあつて

正清　ホヽオ、潔し〱、後藤政次、いま其方が申す如く

ト以前灘右衛門が投げ入れし書き物と誂らへの小柄を持つて

過ぎし頃朝鮮にて、只者ならずと與へし感狀。それに添へたるこの小柄……さてはいよ〱我が先見、的中せりと思ひしゆゑ、呼び戻せし今月今宵、本姓を聞く上は、一個の英雄、幼君の御味方。日頃の念願、嬉しやなア。

〽正清が悦氣の眉、妻は始終を打見やり。

葉末　ヤア〱、妙法七字のその籏へ、我が子の佛果菩提の爲と、書き添へられしは死ぬるのを、御存知あつてか、何ゆゑに。

〽問ふもうろ〱雛衣が、今際の苦痛を氣遣へり、肥田守、詞を改め。

ト葉末、こなし。正清、思ひ入れあつて

正清　オヽ、女子には合點ゆくまじ。雛衣とても苦痛を堪へ、よつく聞け。

ト床のメリヤスをあしらひし合ひ方になり

春雄が恩を受けまじ、と我強く云ひしは都にて、命を捨てよと教ふる謎。親が胸中よく知つて、歸國以前に雛衣へ、離緣の狀を認めしは、女に心引かされず、忠義に死する忰が潔白、ハ、ア。

〽健氣にも出かしたり。それに連れ添ふ身程あつて、娘が貞女も育て柄、我が子へ立つる心の操、ホヽオ天晴れなり、雛衣。敵となり、味方となるも宿世の業、せめて未來は佛果の緣、結んでくれんとこの簾に、二人が俗名書き付けしは、親が許せし夫婦の固め。コリヤ、寂光淨土に生を更け、妻よ夫と睦しう、誰れ憚らず添ひ遂げよ。南無妙法蓮華經。

〽南無妙法と閉づる目に、不便の淚ハラ〳〵〳〵、唱ふる經も口の內、手負ひの耳に通じけん。

ト正淸、よろしく思ひ入れ。雛衣、これにて顏を上げ

雛衣　エヽ、有り難うござりまする。そのお許しを聞きまして、嬉しく成佛いたしまする。主計さまにも覺期とあれば、悲しい中に、わたしが樂しみ。

〽彼の世の道で待ち合せ。

一つ所に參ります。母樣、舅御樣……御息もじで。

〽御息もじでとばかりにて、娑婆の名殘はにつこりと、笑うて息は絕えにけり、ハア悲しやと其まゝに、葉末は死骸を抱き締め、思ひやつたる悔み言。

ト雛衣、こなしあつて、ト、落入る。葉末、縋り泣く。

葉末　生れてこの方實親の、手元離れぬこの雛衣、主計之助を慕へばこそ、百里二百里この國へ、來た心根がいぢらしさ。死ぬる今まで一夜さの、添臥しせぬ薄い緣、結んだ神も恨めしい。都にござる舅どのも、この事を聞かれたら、夫に別れ娘に別れ、生きて甲斐なきその嘆き、側に見て居るこのわしより、どのやうにあらうぞいなう。

〽數へ立て〳〵、淚漲り滿ち汐の、浪打寄する如くなり

ト葉末、愁ひの思ひ入れ。雛衣の體を吹替へる。この以前より、軍次、好みの形にて、窺ひ居て

〽始終を窺ふ轟軍次。

軍次　春雄卿へ敵たふ密談……都へ注進。オヽ、さうだ。

ト下手へ行きかける。この時、

義弘　エイ。

ト向う揚げ幕にて弦音。

〽馳せ出る間もなく飛び來る一矢、血煙り立つて死んでけり。

ト軍次の肩先へ差し金の矢、立つ。これにて、アッと苦しみ、見事にかへる。

灘右　春雄が入れ置くあの間者を、

〽と見返れば。

義弘　大内千島守義弘、疾よりこれに承知せり。

灘右　ヤ、なんと。

義弘　正清どのへ對面せん。

〽對面せんと呼はつて、明智の大將物蔭より、郎等引連れ立出づれば。

ト義弘、衣裳、上下、着付け、下へ腹卷、手甲、五分立ちの大將鬘。陣立て拵らへの四天王、弓矢を携へ、後より軍卒、床几を持ち、高張り提灯を持ち出て、よろしく居並ぶ。葉末、見て

葉末　御歸國のその次手に、夫が安否を尋ねる爲、來臨ありとの先觸ればかり、お出であらざる義弘卿。

灘右　いつの程にか砦の内へ、入來召されし仔細は如何に。

〽と裏問へば、義弘は形を正し。

義弘　當家の主正清どの、先達て歸國の後、三左衞門は歿かる亂鬪、心ならねばこの度の、歸國を幸ひ訪れんと、腹心の者を先觸れに遣はし置き、時日を遂つてこの義弘、砦の水門口より忍び入り、正清どのが物忌みの、思惟閣の小蔭にあつて、佐藤親子が忠義の心底、まつた後藤政次が、春若君へお味方の、一部始終を聞取る折柄、北畠の間者を矢先にかけたるは、この義弘が今宵の寸志。必らず心置かるゝな。

〽仁義も厚き一言に。

正清　ホヽオ、千嶋氏の芳志の段々、その一言を聞くからは、この正清も安堵の思ひ。

〽傍に飾りし一振りの、劔と名鎗両手に捧げ。

ト錦の袋入りの太刀と、長押に掛けし蜻蛉切りの鎗を持つて

今日只今より、春若君を頼み置く、印しの賜物。

ト劔を持ち、義弘へこなしあつて

この劔こそ北辰尊星より、授かる所の七星丸。

ト後藤へこなしあつて

まつた、この鎗こそは、某若年の砌りより、戰場に於て一度も後れを取らざる名鎗、破軍の勢ひあるを以て、揮光と呼び、蜻蛉切りと名付けし鎗ぞ。御兩所、御落手下されい。

〽差出せは立寄つて。

義弘　春若どのゝ、御身の生先、頼みの印のこの一振り。

灘右　味方に屬する引出の賜物。

兩人　確かに受納仕る。

ト兩人、よろしく、受取る。

〽請け納むれば千嶋守。
義弘　かゝる賜物譲り受け、幼君補佐の計議は如何に。
〽聞くより政次鎗押ッ取り。
灘右　仰せにや及ぶべき……某味方に屬する上は、先君恩顧の諸侯を語らひ。
〽すは合戰の時來らば、近江路に根城を構へ、美濃信濃路へ陣所を固め。
千篶闌原伏屋の伏勢。
〽縦横無盡鎗先の、千變萬化に火花を散らし。
春雄が多勢を絶所に支へ。
〽追ひ詰め〳〵泡吹かせ。
狸親仁が白髪首、引提げんは腕のうち。我が方寸の胸にあり。
〽勇み立つたる勢ひは、末世に數度の戰場に、後藤が高名類ひなき、義弘につこと打笑ひ。
ト灘右衛門、よろしくあつて納まる。義弘、こなしあつて
義弘　ホヽヽ、ムヽヽ、ヘヽヽヽヽ。これは潔き後藤が一言、なれども國賊北畠を、この義弘が諸共に。
〽駒の轡を立て並べ、弓引合はんな諸將の嘲り。
なれども小田家によしみもあれば、その戰場を餘所に見て
〽金囊備の計策に、自づと靡く四海の安泰。
春若どのは天下の主、安堵召されよ正清どの。
〽始終を聞る名將の、詞は鐵石後楯、實に大國の主なり。
トこれにて、薄ドロ〳〵になり、日覆より、七曜星を繰り下ろす。正清、目を付け
〽正清キッと空打詠め。
正清　アレ〳〵〳〵、光を失ふ將星の、今まで地下に落ちざるは、北辰尊星の感應あつて、百日の滿願に、後藤と云へる一勇士を得しのみならず、千嶋氏へ幼君の、始終を頼む上からは、日頃の存意滿足せり。アラ喜ばしや、嬉しやなア。
ト此うち、薄ドロ〳〵生け殺し、せりふの切れに舞臺へ星一つ落ちる、パッと掛け煙硝立つ。
〽一星地上に落つると其まゝ、息ざし亂れ、正清が、忽ち替るその面色。
ト正清、ヂッと思ひ入れ。鬘の髻を引抜く。髪を捌く。
葉末、驚ろき

文久元年九月中村座上演　八世片岡仁左衞門の正清

〽見るに葉末が又恟り。
葉末　ヤヽ、俄かに替る我が夫の、お顔の血色息遣ひ。
義弘　自づと亂れし
三人　この體は。
正清　春雄が手段の毒酒の苦痛。
葉末　さては噂に相違なく、御身の惱みか。こりや何とせう、どうせうぞいなア、
〽縋り嘆けば。
正清　ヤア、愚か〳〵。コリヤ、百日の今に至つて、ナニ驚ろく事がある。
葉末　それぢやと申して。
正清　正清が妻に似合はぬ、愚昧の女め。
〽正清が、一身變ぜぬ勇美の顏色、取付く隙も泣くばかり、猶も詞を改めて。
ア、、怒れば怒るものゝ、我れも四天を保ちし人倫、今際の思ひ物語らん。
〽物語らんと、ドッカと座し。
ト正清、段々苦痛の思ひ入れにて、床几を放し、石階へ座を占め、思ひ入れあつて
さいつ頃北畠が、石山の境地に新館を築き、幼君春若君へ、三代將軍の任官、御勅使お入りと披露して、幼君を呼び寄せ、お附添ひは佐藤正清と春雄の指圖。もし麁相の事あらば、科にや落す底企みと、察せしゆゑに春若君には、俄かの御不例と申し立て、名代に立ちし勅使の御前。天杯の神酒に怪しき殺氣。さてこそ毒とは知りながら、否まば違勅の科に落さん。元より命は天の賜物、殊に忠臣三左衞門が、受けたる天杯、事あらば是非もなしと、悟道を極めて受けたる土器、呑み乾す腹中只ならず、その座は首尾よく退座なし、直さま宇治に立越えて、勅使の荒まし言上なし、これ今生のお暇乞ひと、心の內に觀念の、それとも知らずお通の方、幼君を我れに抱かせ、力と賴むは肥田守ばかり……ソレ、賴めよとのお詞に、爺よ賴むの御一言。上意は胸にひつしと當り、勿體なしとも痛はしとも、骨も碎くる我が思ひ、百千萬の强敵も
〽摑み拉ぎし正清が、五體を貫き肉を裂き、心魂五臟に沁み入りて、臉刺さるゝ思ひぞや。
ア、、お氣遣ひ遊ばすな。追ッ付け天下の御主、君の御代になし奉らんと、苦痛を凌ぎ、本城には立歸れど、堪え難きは毒酒の利き目。百日の今日まで、靈芝仙の藥根を舐め、北辰尊星妙見を、祈り祈りし甲斐あつて、念願

屆きし今月今日、我が身體は、この高殿に。
〽留むべし。
ヤイ、葉末、其方が嘆きもさる事ながら、尼法師とも姿を替へ、都へ上り、悴が先途を見屆けよ……さるにても不便なは娘灘衣、さぞや悴を待ち侘びて、草葉の蔭を行き惱み、迷うて居るであらうと思へば、不便なわやい。
〽百連の名鏡を、照らすが如き兩眼に、血汐を注ぐばかりなり、葉末は涙の顏を上げ。
葉末　如何なればとてこの身程、因果な者が世にあらうか。夫も娘も一時に、果敢ない別れのその上に、生死も分かぬ悴が身の上、何樂みに永らへん。味氣なき世の成行きぢやなア。
〽後は涙に暮れにけり、後藤は心思ひやり。
灘右　ア、コレ、葉末どの、最早嘆いて詮ない事。この上は政次が付添ひて、子息の安否を尋ねし上、謀し合せて治國の計策。日本は愚か唐高麗
〽刃向ふ奴ばら皆殺し。
幼君四海太平を、その高殿に安座して、見物あられよ、正清どの。
〽突ッ立ち上がれば千嶋の冠者。

義弘　ホヽオ、勇ましき後藤政次。併し天運至らずば、幼君のお供して、我が本國へ來られよ。
正清　ハッ、その一言聞く上は、最早この世に疑念はなし。
灘右　サア、とく／＼爰を、葉末どの。
葉末　とに云へ此まゝ。
正清　ヤア、未練の繰り言。我れもこれより高殿にて、都を守護の我が心魂。
灘右　電光朝露の世の中に
葉末　身はよる邊なき捨て小舟。
義弘　やがてぞ巡る愛別離苦。
正清　會者定離とは
三人　聞きながら。
〽返らぬ繰り言繰り返し、後に名殘りは桝形を。
ト皆々、よろしくあつて、知らせにつき、雨落ちより舞臺一面の塀をせり上げる。下手へ城門を押出し、誂らへ通り納まる。
本舞臺、正面の城閣を鳴り物にてセリ上げ、右の舞臺前の外塀より、天守の上の窓を見越し、道具よろしく納まる。

ト下手の門より高張り提灯を持ちし軍兵二人、この次へ義弘、後より陣立ての侍ひ、件の劍を持ち、次に手鎗を持ちし陣立て、次に軍兵四人、この間へ、葉末、後より灘右衛門、件の鎗を持ち出る。

〽出づる本城外廓は、端座合掌古今の英雄。

トこれにて、天守の御簾を巻き上げる、爰に、正清、立烏帽子形の兜、甲冑にて、七字の旗を立て、清正公の見得にて、床几に掛け、鐵扇を突き居る。花道にて皆々これを見返り、思ひ入れあつて

〽見返る空に星象光、照らす威徳ぞ。

正清　南無妙法蓮華經。

皆々　おさらば。

正清　さらば。

〽有り難き。

ト拜禮の模樣、段切れにて　よろしく幕

ト幕外を、義弘、葉末、皆々引連れ入る。灘右衛門、後に殘り、キツと見得。これへ床の合ひ方、ドンチヤンを合せ、振つて入る。後シヤギリ。

八陣守護城（終り）

時に幸ひ歸り花咲く小春の空の麗かに春の世界の清水詣人目忍ぶの判じ物も解けて嬉しき薄雪左衞門二世を誓ひの妻平と籬が戀の執持ちも身に銹かゝる影の太刀拔差しならぬ調伏の證據は正しく大膳が巧みと民部が詮議の糸口もつれし緣も切りかれて使者を立てたも幸崎の刃に悟る園部が合腹舅同士の身替りに便りを松ヶ枝梅の方共に音をなく經讀鳥その鶯の京育ちおれんが因みに國俊へ讓る傳授を團九郎が心に覺えし腕の湯加減天晴れなるかな正宗が名譽は殘る古刀銘鑑

新薄雪物語

表のカタリは明治二十一年十一月新富座で珍らしくこの狂言を演じた時のものあるが至極巧いので取入れた。

下の銅版は「花雪歌清水」といふ名題で、天保の頃、大阪大西座で上演した時の絵本の表紙である。

新薄雪物語

序幕

新清水花見の場

役名＝＝園部左衛門。同奴、妻平。來國行。同一子、國俊。秋月大膳。澁川藤馬。幸崎息女、薄雪姫。同腰元、籬。刀鍛冶、團九郎。

本舞臺、三間の間、一面の大高二重、高欄付き。見附け、朱の廻廊、狐格子などの書き割り、繪馬を澤山かけ、正面、少し上手寄りに石段。平舞臺、上手へ出入り。この前、臆病口の方、音羽の瀧の飾り付け。諸所に櫻の立ち樹、日覆より同じく吊り枝、八重に吊り下げ、但し右大高の舞臺、眞中に出入りあり、すべて清水寺の見得、よろしく双盤にて、幕明く。

ト仕出し大勢、捨ぜりふにて入ると、直ぐに花やかな出の唄へ双盤をかぶせたる鳴り物になり、向うより薄雪姫、腰元十人、日傘をさし、女小姓二人、附いて出て花道にて

薄雪　春來れば、また逢ふ事や櫻花、霞に紛ふ八重九重、咲きも殘らず散りもせず、吉野初瀨も及びなき。

腰一　まだ蕾やらほころびぬ、花に譬へて御器量を、小町櫻と宮戸川。

腰二　誰が楊貴妃と夕櫻、かざす扇の緋櫻と、皆一やうの花の下。

腰三　思ひ合せの糸櫻、結ぶ妹脊の神かけて、仲吉原の里の花。

腰四　匂ひ櫻の長命寺、三めぐり飽かぬ花の雲。

腰五　歌の手爾波も鹽竈の、八重九重の隅田川。

腰六　なに白髭のわたし等は、花より團子が弘福寺。

腰七　金龍山の餅かけて、ほんのり酒の色好み。

腰八　見る花よりも團子より、また好物の殿御の顏。

腰九　見たり見せたり東雲の、夜明けぬうちから樂しみに。

腰十　待ち焦れたる千本の櫻、詠めに飽かぬぢや

腰皆　ござんせぬかいなア。

薄雪　皆の者の云やる通り、柳櫻をこき交ぜて、都ぞ春の

錦なる、世に類ひなきこの詠め。

腰一　何は兎もあれ姫君には、先づお越し

腰皆　遊ばされませう。

ト また唄、行列三重にて、皆々本舞臺へ來て、姫、眞中の床几へ、腰元皆々よろしく住ふ。

腰一　それはさうと、籬さんは、一足遲れて出やしやんしたが、もう來さうなものでござんすなア。

腰二　ほんに遲い事でござんすなア。

腰三　噂をすれば影とやら、向うから籬さんが。

腰四　オヽイノヽ。

ト 鳴り物キッパリとなり、向うより籬、腰元の形、日傘をさし、足早に出て、直ぐに本舞臺へ來る。

腰一　オヽ、籬どの、いま來なさんしたか。

腰二　姫君樣が、お待兼ねぢやわいなア。

籬　ほんに遲うなりました。……これは／＼姫君樣、觀世音へのお供物やら、何やかやで遲參の段、眞平御免下さりませう。

薄雪　待兼ねてゐたわいなう。

籬　ほんに、今日は日和も長閑にて、お部屋の櫻は咲いたれど、庭木はどうやら堅づまつて氣が晴れぬ。花の名所は多けれど、取分け地主の花盛り、云はれぬ詠めではござりませぬかいなア。

薄雪　オヽ、其方の云やる通り、庭の花とは事變り、一しは色も美しう、大內人も見給はん、世に類ひなきこの詠め……腰元ども、料紙持ちや。

腰二　畏まりました。

ト 合ひ方になり、腰元、料紙硯箱を持つて來る。薄雪姫、短册を出し、歌を書く事。籬、取つて

籬　「春每は見る花なれど今年より、咲き初めたる心地こそすれ、」ても、天晴れのお歌。面白い事でござりまする。

腰八　ほんに、モウ／＼お歌といひ、御器量といひ、今の世の小町さま。

腰九　せう／＼の殿御の、お氣に入らぬも、お道理でござりまする。

腰十　何を云はしやんすぞいなア。申し、姫君樣、この短册を、どこぞの枝へ附けましては、どうでござりませうなア。

薄雪　どうなと、好いやうにしてたも。

籬　左樣なら、どこぞの枝へ。

ト籬、腰元一へ短册を渡さうとするを、腰元八出て

腰八　申し浮舟さん、わたしに附けさして下さんせ。

腰九　これはしたり、附けるとは戀の禁句。どこぞそこらの枝へ、結んで置かしやんせ。

腰八　オツト、それなら呑み込んだわいの。

ト腰元八、捨ぜりふを云ひながら、誂らへの臺幹に短册を結び付ける。

籬　サア、これからは姫君樣、お氣晴らしに舞臺へお上りなされて、景色を御覽なされませ。

薄雪　そんなら皆も、とも〳〵に。

ト聖天になり、この人數、舞臺へ上り、皆々向うを見て思ひ入れ。

腰三　サア申し、お姫樣、この舞臺から方々に、見ゆる山山を御覽なされませ。それは〳〵好い風景でござりまする。

腰十　シタガ、道芝どの、向うに見ゆる山は、どこぢやぞいの。

腰三　あれは大方、稻荷山であらうぞいの。

腰十　ナニ稻荷山だえ。そんならアノ松茸のたんと出る山だね。

薄雪　コレ、籬、向うに見ゆる、あの美しい山は、ありやどこぢやぞいの。

籬　お待ち遊ばせ。爰でこそ用意して來た遠目鏡。サアサア早う。ソレ、腰元衆。

皆々　畏まりました。

ト腰元六、目鏡を出し、捨ぜりふにて籬見て

籬　アレ、向うに見ゆるは愛宕山、手に取るやうに見えまするわいな。

腰一　ドレ、わたしにもちよつとお見せなされませ。

ト遠目鏡を見て

オヽ、咲いた〳〵、眞ッ盛り、八坂は右、東寺は左。

腰五　アレ、籬さま御覽じませ、あれが大阪京橋とかいふ所。かすかに見えまするわいなア。

ト此うち薄雪姫こなしあつて、腰元八に向ひ

薄雪　コレ、この遠目鏡を其方に貸す程に、四方の景色を見やいなう。

腰八　なんと仰しやります、この遠目鏡をお貸しなされますか。ハイ〳〵、有り難う存じまする。サア〳〵、これからは、下を通る男の見飽き。

ト目鏡を取つて

目の正月を致しませう。

ト腰元八、いろ〳〵下を見ろこなし。鳴り物になり、仕出し、思ひ〳〵の拵らへにて、上下へ入る。腰元八見て、捨ぜりふあつて、腰元九前へ出て

腰九　これはしたり、まんがちな。わたしにもちよつと見せて下さんせ。

ト腰元九、捨ぜりふにて、目鏡を見る。矢張り仕出し出る事。

腰十　申し〳〵末廣さん、わたしにもちつと見せて下さんせ。

ト無理に取つて見る事。また仕出し出て上手へ入る。腰元七も見て

腰七　ほんにマア、先刻から、どうぞよい男の見飽きをせうと思うたに

腰八　目の痛む程見詰めても、醫者に法印俳諧師。

腰九　或ひは順禮古手買。

腰十　節季候にまで身をやつし。

腰七　エヽ、何を云はしやんすぞいなア。好い男が見たいなア。

トこの時篠、思ひ入れあつて

篠　オヽ、其よい男で思ひ出した。申し、姫君樣、先日のお能の時、花子をなされた園部の左衛門さま、よい殿御と云はうか。母御樣が御覧なされて、姫に聟を取るならば、この人ならではと御意遊ばした。アヽ、お目にかかりたいものぢや。オヽ、幸ひ今日はこの清水へ、大切のお刀を奉納にお出での筈、三ッ傘の眞中に、山といふ字の紋所、脊高からず低からず、お腰の物は坂田風に差しこなし。

腰八　色白にしてくつきりと、三分も透かぬ當世男。

腰九　おッつけお出でのその時に、よく氣を附けて御覧じませ。

腰十　ほんにモウ、堪つたものぢや

四人　ござりませぬ。

ト皆々伸び上がり、腰元八、目鏡にて向うを見て

腰八　ヤア〳〵、向うへ評判の左衛門さまが。

腰九　ドレ〳〵。

ト同じく目鏡を見て

ほんに、爰へ來られまする〳〵。

皆々　モシ〳〵、お出でなされますといな〳〵。

ト皆々立騷ぐ。矢張り鳴り物になり、花道より浪人の

仕出し、編笠を冠り出て來り、舞臺へ來る。
腰十　それ／＼、そこへ來るが左衛門さま。
腰二　アレ／＼、姫若様、ちやつと御覽遊ばしませ。
ト薄雪姫、下を見る事。
腰八　アレ／＼御覽なされませ、姿形もよしや風。
腰九　腰卷に羽織長刀、女子の思ひも深編笠。
腰十　内ぞ床しき殿御の顏。
腰七　早う見たいぢや
四人　ないかいなア。
ト此うち仕出しの浪人、編笠を取り、舞臺を見上げて上手へ入る。
腰八　末廣さん、見やしやんせ、今のは、ありや物貰ひぢやわいなア。
皆々　ホヽヽヽヽ。
腰一　左衛門さまとは、きつい違ひで
皆々　ござんすわいなア。
籬　エヽそ、お前方では埒が明かぬ。ドレ／＼、わたしが代つて見ようわいの。
ト遠目鏡を出し、向うを見て
アレ／＼、向うへ見ゆる三人連れ、目水晶、あれが誠の左衛門さま。姫若様、これで御覽遊ばしませ。シタガ、櫻の枝でお顏が見えぬがお氣の毒。お顏をお見せ申したいが、ハテ、困つたものぢやなア。
皆々　どうぞ仕様はござんせぬかいなア。
ト聖天、誂らへの合ひ方にて、花道より左衛門、羽織衣裳、大小、深編笠、來國行、老けたる拵らへ。後より妻平、繻子奴にて、誂らへの刀箱を持ち、出て來り、花道へとまり
左衛　歌のてにはに櫻をば、雪か雲かと疑ひも、晴れてのどけき彌生の空。
國行　咲き揃ふ花に觀音へ、歩みを運ぶ諸人の、歸りも知らぬ法の庭。
妻平　今日のお供に下郎めが、氣も伸び／＼と春の日の、こがれ／＼て清水に、憂を忘るゝ花見時。
左衛　一目千本吉野路の
國行　花も及ばぬ御寺の景色。
左衛　ハテ、風情ある
三人　眺めぢやなア。
ト三人舞臺へ來る。上手より轟坊、緋の衣にて、同宿附いて出る。

轟坊　これ〳〵、左衞門さまには、只今お越し、先づ以て今日の御參詣、私しならぬ公用。近頃御苦勞に存じまする。
左衞　仰せの如くこの度の御劍、これなる來國行に仰せ付けられ、即ち影の刀を差上げよとの御諚、大切なる御劍の、手本と定めしこの刀、疎かに成り難ければ、淸水の觀音に、奉納せよとの仰せに依つて、いよ〳〵御劍成就の御祈念願ひ奉ると、先達て申し通ぜしゆゑ、推參と存せしに、これまでのお出迎ひ、恐れ入つてござりまする。國行には、未だ御對面申すまじ。
轟坊　ア、、成る程〳〵、拙僧は當淸水寺の住職。して御家名はな。
國行　ハッ、私し儀は粟田口の住人、來國行と申す者。園部の家には御家來同然、以後はお見知り下さりませう。
ト此うち始終遠目鏡にて、薄雪姫、左衞門を見る事あつて
薄雪　ナウ、籬、笠の内とに云ふなれど、殿達にはまた格別、笠脱ぎ給ふお顏つき、情らしうて位高うて、どこに一つ云ひ分ない、元服した業平さまとは、あのお方の事かいなう。

籬　なんとお姫樣、お氣に入つたでござりませうがな。
左衞　然らば、この御劍を寶前へ獻上は、國行と貴僧に頼み奉る。ソレ、妻平、それなる劍を住僧へ。
妻平　ネイ〳〵、畏まつてござりまする。
ト妻平、刀の箱を同宿に渡す。
左衞　只今も申し入るゝ通り、餘り見事な櫻の詠め、花曇りとは申しながら、今にも降りなん雲の景色、雨なきうちに暫しが程。佛の庭とは申しながら、大慈大悲の花なれば、一枝折りて家土産に。
轟坊　一向苦しからず、如何ほどなりとも。おッつけお出でを待ち申す。イデ、この上は國行さまには。
國行　これなる御劍寶前へ、獻上申しに御同道。
轟坊　新念は後方仕らん。
左衞　然らば住職。
轟坊　左衞門さま、後程お目にかゝりませう。
ト鳴り物になり、住職先に國行、同宿附いて、段を上り入る。これと一緒に薄雪姫、籬、腰元皆々平舞臺へ下りて來る。左衞門、妻平、入れ替つて顏を見る事。
籬、妻平を見て
籬　モシ。

妻平　ヤ、爰へはどうして。

　ト左衞門を見て、思ひ入れあつて

　エヘン／＼。

　ト眞向日になる。此うち薄雪姬、上の方の床几にかゝる

左衞　なんと妻平、取分けてこれなる櫻は、見事ではないか。

妻平　御意の通り、いつ／＼よりも、盛りが見事でござりまする。

左衞　成る程／＼、最前住持に所望いたして置いたれば、一枝手折つて歸ると致さう。

妻平　ハテ、どの枝に致しませうな。

　ト此うち左衞門、櫻に附けし以前の短冊を見て

左衞　一春每に來る花なれど今年より、咲き初めたる心地こそすれ」ハテ、面白きこの歌、主は誰れとも知らねども、結び留めたるこの一枝。妻平、手折れ。

妻平　ネイ／＼／＼。

　ト妻平、短冊の附きしまゝ、櫻の枝を折り取つて來る。薄雪姬、嬉しき思ひ入れ。

薄雪　コレ。

籬　オツト、皆まで仰しやりますな。私し次第になされませ。

　ト思ひ入れあつて妻平の側へ來り

　物もう

妻平　ドウレ

　ト眞中へ出る。

籬　申し、奴さん。

妻平　コレ女中、何ぞ御用でもござるかな。

籬　アイ、ちと申さねばならぬ事。

妻平　アノ、身共にかな。

籬　イヽエ、あなたに。

　ト左衞門にこなし。

妻平　ナニ、あなたに。イヤ、あなたと云へば、矢ツ張りおれぢや。

籬　イエ／＼、あなたぢやわいなア。

妻平　アヽ、あなたとは、ハヽア、御主人樣か。

籬　アイナア。

妻平　そんなら早くお側へ行つて、云うたり／＼。

籬　左樣なら、眞平御免なされませ。

　ト左衞門の側へ來り、間の惡き思ひ入れにて、

ホヽヽ。

左衛　ハヽヽ

篠　ホヽヽ

両人　ホヽヽヽハヽヽヽヽ。

篠　もう此やうに申しましたれば、物咎めする女中ぢやた、お叱りもあらうが、その一枝は主ある花、折つてお歸り遊ばすは落花狼藉、元のやうに接いでお返しなされませ。

ト左衛門、思ひ入れあつて

左衛　イヤ、これは當寺の住僧に、一枝は折つて歸れと許されしを、花もの云はぬ色なれば、御存知なきは御尤も。

篠　イヤ申し、お詞の先折るは、花を折るより不躾ながら、マア枝にこそ依つたもの。私しが御主人、幸崎の姫君、薄雪さま、あまり色こきこの花を、人に折らせじ觸はらせじと、封の言葉の短冊ぐるめ、あなたが折れたと仰しやるとて、心なき奴どの。サア、元のやうにして姫君の、御機嫌の直るやうにして下さりませ。

ト左衛門、氣の毒な思ひ入れ。

左衛　その儀なれば拙者が誤まり。餘り面白き歌といひ、手跡といひ、屋敷へ歸らば母にも見せ、お慰みの爲と存じ思はぬ不作法、眞平御免下さりませう。

篠　アイ、それならば薄雪さまの、御堪能遊ばすやうに、直々に仰しやつても、御恥辱にもならぬ事。御苦勞ながら、ナア、申し、奴さん。

妻平　オヽ、さうとも〳〵。申し旦那様、こりやアござらずばなりますまい。

左衛　アヽ、イヤ〳〵、最前から見受けるに、男とては一人もなく、女中ばかりの眞中へ、若輩者の參るべきやうはなし。親どもより物堅き格式なれば、參るまじではなけれども、誰れが見まいものでもない。人の口には戸が立てられぬ。覺えなき身に浮名を立てられ、互ひの難儀になるまいとは云はれぬわいの。

妻平　おやと申しまして。

ト此うち篠、薄雪姫の方へ來て思ひ入れ。腰元一こなしあつて

腰一　さつても堅い、總知らず。

腰二　廣い世界も狭い氣な

腰三　姫君様のお心にて

腰四　戀ひ慕ふのも無理ならねど

腰一　云ひ譯せずと色も香も

腰二　深き心をツイ斯うと
皆々　仰しやつたがよいわいなア。
　ト此うち薄雪姫、思ひ入れあつて、硯引寄せ、短冊に
　サラ／＼と書く事
籬　申し、姫君樣、何とぞ遊ばしましたかえ。
薄雪　コレ、この歌にやう／＼と詠みかけしが、肝心の下
の七文字が、なるかならぬか知れぬゆゑ、いつそ苦勞に
なるわいなう。
　ト薄雪姫思ひ入れあつて籬へこなし。腰元五、思ひ入
れあつて、
腰五　千歳どの、姫君樣が下の七文字がならぬと云うて、
あのやうに御苦勞なされておいで遊ばす。お前方、そこ
へよいやうに、賴むわいなア。
腰一　アイ／＼、合點でござんす。申しお姫樣、その下へ、
斯うおつけ遊ばしては、如何でござりませう。枝高き花
の梢も折れば折る、及ばぬ鯉の瀧登りかな。」
皆々　エ、そ、何を云はしやんすぞいなア。
　ト籬、思ひ入れあつて
籬　オ、お姫樣、よい事がござります。其やうにキナキ
ナ思召されずと、マア、私し次第にしてお置きなされま
せ。モシ、皆さん、私しは爰にお附き申して居る程に、
あたりの花が盛りであらう、早う行つてナ、見やしやん
せいなア。
　ト思ひ入れあつて妻平の側へ行き
物もう。
妻平　ドウレ。
籬　また參りました。
妻平　何ぞ御用かな。
籬　サア用と申しますは、只今の通り姫君へ、申したれど、
なか／＼そんな事では、堪忍が仕憎い。爰へ來るが否な
らば、この歌の下の七文字、よからうやうにお附けなさ
れて下さりませとの事ぢやわいなア。
妻平　そりや左衞門さまに申し上ぐるまでもない。その歌
の下の七文字は、おれが附けてやらう。
籬　ナニ、お前が附けて下さんすかえ。
妻平　この妻平が附けてやらう。
籬　アノ、お前が。
妻平　オイヤイ。その歌は何といふ。
籬　早う附けて下さんせいなア。
妻平　コレ、急いては事を仕損じる。とくと斯う膝を組ん

て。カツツト、何でも早いが勝ちぢや。おぬしもそこで考へてくれ。
籬　アイ／＼、わたしも爰で考へるわいなア。
妻平　何であらうか。オヽ、出た。
ト大きく云ふ。
籬　エヽ、恟りするわいなア。
妻平　ホイ、引込んでしまうた。
籬　エヽ、何のこつちやぞいな。
妻平　イヤ、おぬしが余り大きな聲ゆゑ、ツイ引込んでしまうた。静かにせい／＼……出たぞ。
籬　出たかいなア。
妻平　ドツコイ／＼、待つたり／＼。静かにせぬと又引込むワ。
籬　さうして、何とぢやぞえ。
妻平　オヽ、襟の下は何とか云うたな。
籬　「叶はぬ戀も」ぢやわいなア。
妻平　ナニ、戀もぢや。オヽ、それ／＼こいつも長いもさつまいもはどうぢや。
籬　エヽ、何を云ふのぢやぞいの。
妻平　ハヽヽヽ。

籬　こりやお前ぢや埒が明かぬ。矢ツ張り左衛門さまへお願ひ申しませう。ハイ／＼、只今お聞きの通り、この歌の下の七文字を、よろしいやうにお附けなされて下さりませ。
ト左衛門、短冊を取上げ。
左衛　ムヽ、一枝高き花の梢も折れば折る、及ばぬ戀」と書かれしは、深き思ひのあるやらん。
ト思ひ入れあつて腰の矢立を取出し、短冊に認めて
サ、憚りながら。
ト出す。籬、短冊を見て
籬　一枝高き花の梢も折れば折る、及ばぬ戀も成るとこそきけ。ニヽ、嬉しや／＼。
ト薄雪姫の側へ來り
サア／＼、この上は直々に、「なるとこそきけ」の一口のお禮を、コレ申し、何も恥かしい事はござりませぬ。善は急げぢや。サア／＼、ちやつと。
ト此うち籬、無理に薄雪姫を左衛門の側へ附きやる。薄雪姫、モヂ／＼して居る。籬こなしあつて
オヽ、辛氣な事ぢやの。其やうに恥かしうて、これがマア濟むかいな。とはいへ恥かしいも道理。先づ序の始まり

は籬が役、肝心の三段目は姫君樣。とツ附き引附き、仰しやりませ〳〵。早う〳〵。

薄雪　それぢやと云うて。

籬　エヽ、もどかしい。

ト思ひ入れあつて

物もう。

妻平　ドウレ。また御用かな。

籬　また參りました。左衞門さまに、ちとお願ひがござりまする。

妻平　願ひとあらば、直々に、ズツと云つたり〳〵。

籬　左樣なら、御免なされて下さりませ。申し、左衞門さま、お前樣をフト見上げまして、姫君樣のお願ひ、お聞きなされて下さりませう。

左衞　何がさて、武士と見込んで願ひとは、身に叶ひし筋なれば。

籬　左樣なら、とてもの事に御誓言を、承りたう存じます。

左衞　ハテ、淸水の觀世音、地主權現の御照覽、僞はりは申さぬ。

籬　それ聞いて落ちつきました。アノ、姫君樣のお願ひは、お氣に合ふか合ふまいか、お前と女夫になりたいと並々ならぬお賴みでござりまする

左衞　コレ〳〵女中、何と仰しやる。薄雪姫は誰れあらう、幸崎の御息女ではござらぬか。それに何ぞや女夫などゝ、如何いたした儀でござる。

籬　イヤ申し、幸崎の御息女ならば、あなたに惚れないといふお觸れがござりましたか。地主權現の御照覽と、お侍ひが噓仰しやつても、大事ござりませぬか。

左衞　サア、それはナ。

籬　ツイ應と。エヽ、辛氣な。申し、爰なお子も、何仰しやりませいなア。

トよろしく、あせるこなしあつて

コレ、奴どの、これほど此方がいふ事を、取持たうとしはせいで、何を詠めてウツカリと。コレイナア、お前も共々、そこはよいやうに賴むわいなア。

妻平　これは又、迷惑な事を云ふ。まゝよ、でんぼの皮だ取持つて進ぜう。然しながら、旦那が何と仰しやるか知れぬが、マア、おれ次第に任して置きやれ

ト左衞門の側へ來て

ヘイ〳〵、旦那樣へ申し上げますやうにござりまする。最

前から委細あれにて、承つて居りましたが、それではあなた様、あまり石部金吉と申しますもの。先づ第一手入らずのお姫様が、殊に女の方からあのやうに持ちかけるものを、否だなんぞと仰しやるは、女冥利が悪うござります。下世話にも七十五日生き延びると申す初物を、召上らぬなぞとは、イヤハヤ、お堅いも程のあつたもの。とつくりと御思案の廻らされ、是非とも其お姫様の願ひを、お叶へなされておやり遊ばしたが

左衛　默れ。

妻平　よからうやうに存ぜられまする。

左衛　默れ。其方までが同じやうに、後先の考へもなう、如何いたしたものぢや。キツと嗜なみやれ。

妻平　ネイ／＼、恐れ入りましてござりまする。

ト此方へ来る。

籬　首尾にどうぢやえ。

妻平　まんまと首尾よう、やり損なつた。

籬　なんぢやぞいたア。

妻平　もうこの上は、所詮埒が明かぬ。モウ／＼、旦那の事はフツツリと。

籬　エ。

妻平　サア、フツツリと、ソレ、思ひ切らせましたがよからうぞよ。

ト仕方にて教へる。

籬　そんならどうでも叶はぬか。籬、薄雪姫に呑み込ませる。モシ、姫君様、何とせう此まゝでは、一分が立ちますまい。サア、お覚悟遊ばしませ。

ト薄雪姫、こなしあつて

薄雪　さうぢや。

ト薄雪姫、左衛門の差添を抜き、自害をしようとする。

左衛　これはしたり、短氣千萬、危なうござるわいなう。

ト左衛門、刀をもぎ取る。薄雪姫その手に縋り、

薄雪　及ばぬ戀と生中に、死なうと思ひ定めしを、斯うお留め遊ばすは、お叶へなされて下さるといふ、お心でござりまするか。

左衛　サア、それは。

籬　叶はぬ事なら、矢ツ張り放して、お姫様。

薄雪　覚悟極めて居るわいなう。

ト また死なうとする。

左衛　コレ、危ないわいなう。

籬　そんなら叶へて、おあげなされまするか。

左衛　サア、それは。
薄雪　お返事無いは、死ねとの事か。
左衛　サア、それは。
籬　お叶へなされて下さりまするか。
左衛　サア
兩人　サア
三人　サア〳〵〳〵。お叶へなされて下さりませいなア。
　ト左衛門、是非なきこなし。
左衛　如何にも、願ひを叶へました。
薄雪　エヽ、お嬉しうござりまする。
　ト薄雪姫、其まゝ左衛門の側へ寄る。妻平、思ひ入れあつて
妻平　アヽ、若旦那、益體々々、親旦那より物堅い、お家の格式はどこへやら、女中を捕へてじやらくらと、ちとお嗜なみなされませ。
　トこれにて兩人ほぐれる。
と申すは先刻の鸚鵡返し。薄雪さまと二人のお仲、千秋萬歳、おめでたうござりまする。サア、これで相談が極つたといふもの。サア、この上はお姫様、又もや御意の變らぬうち、日頃の思ひの有丈を、あなたの口から左衛門様へ、直々に仰しやつたがよろしうござりまする。
薄雪　それおやといふて、恥かしうて。
妻平　ハテ、其やうな弱い御料簡では、なか〳〵生物が召上がられるものではござりませぬ。サア、ちやつとお云ひなされませ〳〵。
　ト薄雪姫を突きやれども恥かしきこなし。
籬　アヽこりや、困つたものでござんすわいな。
左衛　コリヤ〳〵、妻平々々。
妻平　ネイ〳〵、御用でござりまするか。
左衛　サア、打解けは解けたれど、どうしてよいやら戀路には、一向暗き某ゆゑ、なんと其方、教へてはくれまいか。
妻平　これは又、迷惑な事でござりまする。
籬　ハテ、何をするのも忠義の爲。なんと爰で、御傳授申したがよいわいな。
妻平　成る程、それもそんなものかえ。そんなら二人が手本になつて
籬　戀のいろはのお師匠番。
妻平　さらばお教へ申さうか。
　ト誂らへの合ひ方になり、妻平籬、捨ぜりふにて、左

衛門・薄雪姫に呑みこませる。

籬　モシ・こちの人・と仰しやるのでござりまする。

薄雪　モシ、こちの人と仰しやるのでござりまする。

籬　ア、モシ、その仰しやるのでござりまするは入りませぬわいな。サア、今度はよろしうござりまするか。モシ、こちの人え。

ト妻平に寄り添ふ。

薄雪　モシ・こちの人え。

ト左衛門の側へ行く。

妻平　ヤア/\/\。

左衛　ヤア/\/\。

籬　わたしやお前に、話があるわいなア。

薄雪　わたしやお前に、話があるわいなア。

妻平　話があるなら、もつと此方へ、寄つたり/\。

左衛　話があるなら、もつと此方へ、寄つたり/\。

籬　アノ、斯うかえ。

ト寄り添ふ。

薄雪　アノ、斯うかえ。

ト寄り添ふ。

妻平　サア、何なりと、云つたり/\。

左衛　サア、何なりと、云つたり/\。

籬　アノナ、今日のやうな嬉しい事は、ないわいなア。

薄雪　アノナ、今日のやうな嬉しい事は、ないわいなア。

妻平　嬉しくば、爰へ来て

左衛　嬉しくば、爰へ来て

妻平　手を取れ/\。

左衛　手を取れ/\。

籬　アノ、斯うかえ。

薄雪　アノ、斯うかえ。

妻平　もつとグツと/\。

左衛　もつとグツと/\。

籬　アノ、斯うかいなア。

薄雪　アノ、斯うかいなア。

妻平　ア、、可愛い奴の。

左衛　ア、、可愛い奴の。

トこの模様よろしくあつて、四人、抱き合ふこと。この以前より所化・上手へ出てこれを見て、石段より落ちる。これにて四人ほぐれて

妻平　エ、、恟りするわえ。コリヤ、どこやらから、小坊主が降つて参りました。

所化　ハッ、左衛門さまへ申し上げます。園部さまにもお待兼ね、只今お出でなされませと、お師匠様の云ひ附けでござりまする。

左衛　御念の入つたそのお使ひ。只今参ると申してくりやれ。

所化　畏まりました。

ト石段の途中まで行き

薄雪さまと左衛門さまと、ほうやらほやら〱。

ト囃しながら上手へ入る。

妻平　エヽ、子供といふものは、仕方のねえものだ。

薄雪　そんならあなたは、もうお出でなされますか。大事なくば爰にいつまでも

ト籬に思ひ入れある。

籬　イヤ申し姫君様、たとへ爰にござつても、肝心の所お、とんと埒が明きませぬ。コレ。

ト籬、薄雪姫に囁く。

薄雪　どうしてマア、恥かしうてそんな事が。

籬　でも仰しやらねば、済まぬ事。ちやつといなう。

トこれにて薄雪姫思ひ入れあつて、懐中の延紙へ、有り合ふ硯引寄せて、よろしく書いて籬に渡す。直ぐに櫻の枝へ結び付け

サア、これが姫君より、あなたへの、口で云はれぬ心の約束。

左衛　刃を書きしその下に、心といふ字。下の三日に園部の左衛門さま参る、介彩の袂の薄雪。ムウ、すりや忍べといふ判じ物。

薄雪　その時こそは、人知れず打解けて

左衛　仰せは石より忝ない。

薄雪　必らず待つぞえ。

左衛　忍ぶぞや。

薄雪　マア、それまでは。

左衛　薄雪どの。

薄雪　左衛門どの。

左衛　おさらばでござりまする。

ト鳴り物になり、左衛門こなしあつて、石段を登り入る。

籬　コレ、妻平どの、わたしも下の三日の夜、必らずさうぢやぞえ。

妻平　オヽ、サ、呑み込んだ〱、おらも旦那の夜食のお相伴。

籬　何ぢやぞいなア。
妻平　イヤ、ドリヤ花を見捨てゝ。イヤ、花見て來よりかえ。
ト妻平、思ひ入れあつて左衛門の跡を追うて入る。薄雪姫。別れを惜しむ思ひ入れ。
薄雪　申し、左衛門さま、マア〳〵お待ちなされませ。
籬　コレ申しお姫樣、下の三日のその夜さりは
腰一　必らず忍ぶと、あれ程に
腰二　仰しやつてゞございますぞえ。
腰三　もうお願ひが叶うたも同じ事。
腰四　お姫樣がお惚れ遊ばすも無理ではない。
籬　申し〳〵、千歳どの〳〵。
ト腰元の一に囁く。
腰一　アイ〳〵、合點おやわいなア。
籬　左衛門さまが方丈に、お出でなされた事なれば
腰一　妻平どのを、呼び出して
腰二　首尾を見合せ
皆々　どうなりと、
籬　必らずともに、頼んだぞえ。ほんに、觀世音への御參詣が遲うなりました。

薄雪　そんなら籬。
籬　姫君樣。
腰一　先づ御參詣
皆々　遊ばしませう。
ト腰元皆々よろしく薄雪姫に附添ひ、こなしあつて石段の上へ入る。始終花やかな鳴り物。籬殘る。
ほんにマア、お年のゆかぬ事ぢやゆゑ、もどかしいは無理ならねど、さりとはおぼこな姫君樣。ヤレ〳〵、ホツとしたわいなア。それはさうと、妻平さんに、ちよつと爰へ、來てと、千歳さんに頼んだが、早う爰へ來はせいで、さりとは辛氣な事ぢやなア。
ト此うち藤馬、上下衣裳・股立ちにて、下手より出て來り、籬を見附け
藤馬　ドツコイしめたぞ。
ト抱きつく。
籬　アレ、誰れぢやえ〳〵。
藤馬　オヽ、おれぢや〳〵。
籬　さう云はしやんすは、
藤馬　オヽ、藤馬ぢや〳〵。
籬　エヽモ、藤馬さまとした事が、いつとても惡いてん

ごうはかりさんして、聲を立てますするぞえ。

藤馬　イヤ〱、聲を立てうが聲を立てようが構はぬ。コレ籬、イヤ、籬どの、なごいぞよ〱。妻平ぢやとて藤馬ぢやとて、そんなに男に變りはない。又おれが方が妻平よりは、どこぞよい所があらう。マア、たつた一切れ喰つて見やれ。コレサ〱。

ト藤馬、籬にしなだれるを、籬その手を押へ

籬　サア〱、よいわいな〱。

藤馬　イヤ、まだよくはあるまいか。

籬　イヽエイナア、マア爰を放して下さんせ。

藤馬　ムウ、放せと云やれば隨分放すが、放せば其方が逃げるゆゑ、放されぬ。

籬　わたしがやうな者へ、其やうに惚れたと云うて下さんすは、誓文嬉しうござんすが

藤馬　妻平があると云ふのか。

籬　なんのいなア、マア、一體常から、どうぞしてと思つてはゐるし。

藤馬　おれとか〱。こりや堪らぬ。

ト　しがみ付き、頰摺りをしようとする。

籬　エヽ、汚な。

藤馬　汚ないとは、どうぢや。

籬　イヽエイナア、汚ないわたしがやうなものを

藤馬　勿體ない事を云ふものだ。

籬　兎や斯う云うて下さんす、お前の事。男振りなら氣立なら、嫌味がなうて、しやんとして、外の殿御と比べたら

藤馬　ムウ、比べたら

籬　譬への通り

藤馬　泥鼈と

籬　お月樣ほど、違ふわいなア。

藤馬　そんなら身共は、お月樣だな。

籬　なんの、妻平どのおぢやわいなア。

藤馬　エ、さう聞いては。

籬　アタしつこい、放しなさんせ。

トこれにて兩人、立廻つて床几にかゝり、籬、有り合ふ日傘にて支へる。これへしがみ付くと手を放す。藤馬日傘に抱きつき、ルル〱廻つてゐる。籬、よろしく逃げて入る。藤馬、トヾ倒れ、顏をしかめて

藤馬　アイタヽヽヽヽ……ニヽ、いま〱しいトチあまめ。よし〱、この上は彼れと妻平が乳くり合ひ、その

上園部の左衛門と、僅かに薄雪姫と譯あるに違ひない。それをおとりに左衛門をば、亡き者にする時は、大膳さまの戀も叶ひ、妻平は扶持の喰ひ上げ。さすれば雛は、此方の物。何は格別大膳さまが、兼ねての企て。密事の儀も團九郎へ、頼み置けば手番ひよし。最早主人のお入りに間もあるまい。何かの様子を。さうだ〳〵。

ト思ひ入れあつて下手へ入ると、鳴り物打上げ、地藏和讃になり、よき程に花道より國俊、白の着附け、行衣の體、樒の入りし花手桶を提け出て來り

國俊　祇園清水智音院、音羽の瀧に地主の櫻、放下僧の謡にも、世に時めける花春の群集、それに引替へ我が身の上、親の勘氣の赦免をば、願ひの爲の日毎の祈念。瀧の下にて心を清め、薩埵の功力を。さうぢや〳〵。

ト同じく和讃にて、舞臺へ來り、瀧の水にて手水を使ひ、よろしく拜禮なする。ト此うち、國行、以前の形にて出て、坂を下り來て、瀧の下に行かうとして兩人顔見合せ

國俊　ヤ、あなたは。

國行　其方は。

ト思ひ入れあつて

ハ、ア、南無三、この瀧は穢れた。

ト行きかゝるを國俊、引留めて袖に縋り

國俊　親仁様、先づ暫らく〳〵。

國行　ヤア、親仁様とは誰が事、この國行子は持たぬ。たとへ子があつてから、面押出して親と呼ぶ覺えはない。若い人ぢやに、麁相はあり勝。そこ放されよ。

ト振り放す。國俊、思ひ入れ。

國俊　ハ、ア、有り難き親の慈悲、巣父といふ唐人の、穢らはしき事聞いたりとて、耳を洗ひし潁川の、瀧の流れを穢れしと見し、許由が例しを目のあたり、お教へ下さる御高恩。若氣の至りといひながら、色に迷うて親を忘れ、御勘當うけてより、語らひし女も相果て、天罰日に日に身に迫り、お詫び申さん便りもなく、觀世音に立願なし、七日に滿つる今日只今、父の御目にかゝる事、有り難し忝なし。この上のお慈悲には、御勘氣御赦免、願ひあげまする。

ト思ひ入れあつて手を突く。國行、こなし。

國行　ムウ、さうなうては叶はぬ筈、コリヤヤイ、掛替へもなき一人の子を、勘當する親の心、子知らずといふ世の諺、合點がゆかうがな。勘當してはや六年、朝夕の看

經にも、其方が身の上安穩にと、祈らぬ日もなく、云ひ出さぬ日とてもなく、案じ煩らひ、母は一昨年死んだわやい。

國俊　エヽ。

國行　今際の際にも何卒して、根性が直りなば、許してやつて下されと、母が末期の頼みゆゑ、本心を見上ぐる上は、勘當赦すと云ひたいが、儘ならぬ義理世界。先つ頃六波羅へ、召出されしその砌り、汝が噂、不器用らしき馬鹿者ゆゑ、勘當して寄せ付けずと、云ひ放したは武士の眞中。いま云ふ通り赦さぬは、われが可愛さ。役に立たずと指さゝすまい爲ばかり。國々に鍛冶も多けれども、取分け我が家。その家の子が刀一口得打たいで、どうも勘當赦されぬ。何れの鍛冶へも立入つて、なまくら物でも打ち覺え、國俊と銘を切つて見せたらば、喜ぶまいか、嬉しうなうてか。世間晴れての親子も親子、我が子よと云はれてくれ。コリヤ、この親が頼むぞよ。

ト兩人よろしく愁ひの思ひ入れ。風の音、時の鐘になり

國俊　そのお嘆きも、この身の錆より起る事。本心のぬり砥にかけ、血を分け給ふ鍛へ直燒刃、現はすは今の事。現在親の側に居て、親と得云へぬ子の心。御推量下さるべし。

國行　オヽ、我れとても、我が子を我が子と得云はぬ辛さ。其方が思ひの十倍ぞや。必らず無事で。

國俊　親仁樣、御無事でござつて下さりませ。

ト兩人よろしく思ひ入れ。

國行　人目に立たぬ其うちに、エヽ、歸れ。

ト金包みを投げてやる。

國俊　ちやと申して、此まゝには。

國行　エヽ、未練な事を。サ、歸れ〳〵。

國俊　すりや、此まゝに。

國行　身共は坊へ。

國俊　おさらば。

トまた和讃になり、こなしあつて國俊、早足に花道へ入る。國行もこなしあつて、石坂を上り、上手へ入る。時の鐘、風の音なり、堂の内より團九郎、好みの形にて出て、あたりへこなしあつて、刀を取出し、鑢目を入れる思ひ入れあつて、白鞘の柄を嵌め、箱の内へ納める事よろしくある。よき時分より國行出て、見てゐて、この時

國行　コリヤ、團九郎、何を召さるゝ。
團九　サア、これは。
國行　これはとは。
團九　銘作の御劒なれば、後學の爲、ちと拜見と存じて、
いま明けようとした所。
國行　イヤ、その儀ならば苦しからず、貴殿の父正宗は、
拙者が父國茂が弟子なれば、元は同じ家筋。執心あらば
尋ねられよ。サア、刀を出して、とくと見られよ。
團九　イヤモウ、それには及ばぬ事。
國行　及ばぬ事とは不躾。イデ、取出して見せ申さん。
ト箱の紐を解きにかゝる。團九郎、思ひ入れあつて刀
を拔き
團九　こりやモウ、いつそ。
ト團九郎、切りかけるを、突き廻し、ちよつと立廻つて
拔き合せる。
國行　仔細は問はぬが、汝の惡心。
團九　なにを。
ト團九郎、叶はぬこなしにて高欄より飛び下りようと
する。國行引留めて
國行　ヤア、逃げるとて逃がさうや。

ト國行團九郎と立廻り、見得になる。この時、手裏劍
飛んで來て國行に中り、倒れる。
團九　ヤ、、これは。
トこの時、堂の上より大膳、好みの形にて出て來る。
團九郎見て
團九　ヤア、あなたは秋月大膳さま。
大膳　コリヤ。
ト音樂になり、大膳笠を取り
して〳〵首尾は、どうぢや〳〵。
團九　お氣遣ひなされますな。思ふやうに調伏の鑢目、元
のやうにして置く所を、この老ぼれが出さうとして、危
ない所でござりました。
大膳　出來した〳〵。併しこの死骸、後日に知れなば大望
の妨げ。ソレ、ちつとも早く、舞臺の下の塵落しへ。
團九　心得ました。
ト團九郎、國行の死骸を舞臺の下へ入れる。大膳、後
よりだしぬけに切り付ける。ちよつと立廻つて
ヤア、聊爾なさるな大膳さま。お望みの通り調伏の鑢目
入れ、御用にこそ立て仕落ちはない。こりや何となされ
まするな。

大膳　サア、鑢目入れたる事を、他言されては大望の妨げ。われを殺せば誰れあつて、この事外に知る者なし。
團九　それでわしを切らしやるか。
大膳　非道と知つても一大事。
團九　すりや、どうあつても。
大膳　くどいわえ。
團九　ムウ。

ト本釣り鐘を打込み、風の音にて花ちる。

ハテ、是非に及ばぬ。人間僅か五十年。サア、お手討になされませ。
大膳　すりや、身が手にかゝるを得心して。
團九　御念に及ばぬ。スツパリとやらつしやい。
大膳　オヽ、よい覺悟だ。今が最期だ。
團九　念佛なしに切らつしやい。
大膳　オヽ。云ふにや及ぶ。

ト大膳、いろ／＼試しみる事あつて

心底見えた。
團九　エヽ。
大膳　命を助ける。
團九　すりや、大事を知つた私しを、お助けなされて此まゝに。
大膳　他言いたさぬ心底は、この大膳が見屆けた。當座の褒美は汝が命。
團九　そんなら此まゝ。
大膳　この場を早く。
團九　忝ない。
大膳　行け。
團九　ハツ。

ト團九郎こなしあつて花道へ入る。ト石坂より以前の藤馬出て來り

藤馬　お旦那、首尾は。
大膳　コリヤ。咲いたワ／＼。

ト兩人こなし。管絃の頭を打込む。

さて／＼櫻が、咲いた／＼。

トこなしあつて、以前の判じ物を見附け

藤馬　何やらこれに。
大膳　ドレ「下の三日に園部左衛門さま參る、谷影の春の薄雪より。」刃に心と書いたるは、ムウ、さては彼奴等がくさり合ひ、忍び合ふ合ひ圖の艶書。斯うあらうと思うたわえ。

ト大膳思ひ入れ。藤馬もこなしあつて
藤馬　これはしたりお旦那、お心が小さい〳〵。今日これへ園部を初め、姫も參り居るこそ幸ひ、園部めを打ち殺して。
大膳　ヤア、默れ。藤馬、何事も某が胸にある。コリヤ。
ト藤馬に囁き、以前の判じ物を懷中して、ニッタリ思ひ入れ。
藤馬　すりや、あなた樣には、此まゝに。
大膳　立歸つた上手筈を定める。汝はこれに殘り居て
藤馬　園部、薄雪兩人が、逐一樣子を見屆けませう。
大膳　見事ぬかりのなきやうに、
藤馬　大膳さま。
大膳　キッと申し渡したぞ。
ト大膳こなしあつて花道へ行き、キッと思ひ入れあつて、向うへ入る。藤馬殘り思ひ入れ。
藤馬　お旦那の云ひ附けで、後へ殘つて兩人が、樣子を見屆け立歸るとは、誠に此方の願つたり、叶つたり。どうぞ今日こそ離めを。併し、あの權幕では、なか〳〵手强いあの女。なんであらうと別當へ罷り越し、姫と二人が樣子をば。さうだ〳〵。

トこなしあつて、藤馬向うへ行かうとする。この時以前の腰元の一、二出て來り
腰一　どなたかと思うたら、
腰二　あなたは澁川藤馬さま。
藤馬　オヽ、こなた方は幸崎の奧女中。ハヽア、さては薄雪どのゝお供をして。さうしてマア姫は、どれにお渡りなされる。殊に今日は園部の左衛門、これも參り合せし筈だが、方丈に居らるゝか。但し本堂の東なるか、客殿にお渡りか。どうぢや〳〵。
腰一　ナニ、どん〳〵橋を狐が渡るえ。エヽ、モウ、あなた何を御意遊ばす。
藤馬　エヽ、其方こそ何を申すのだ。本坊か客殿かと申すのだ。
腰二　金龍山の客殿とは、助六のせりふでござりまする。
藤馬　さて〳〵情ない。冗談ではござらぬわえ。
腰一　瓢箪から駒が出るかえ。
腰二　白山から駒込とは、惡い口合ひでござりまするなア。
藤馬　これはしたり、身共心が急くわえ。其方が主人の姫の薄雪どの、園部の左衛門兩人ともに、方丈の座敷にお

いであるなら、ちつと身共が用事があるゆゑ承はるのだ。
腰一　成る程、姫君樣はおいでなされまするが、
腰二　園部さまはとつくにお屋敷へ、お歸りなされましたわいなア。
藤馬　ナニ、左衛門は歸つたか。エヽ、さて／＼殘り多い。して／＼、腰元の籬は居るか。
腰一　あなたが、籬どのを付けつ廻しつなさるゆゑ、
腰二　お心を察して、それでわたし等二人が
兩人　連れ立つて來たのぢやわいなア。
藤馬　さては、取持つてくれる心ぢやな。
腰一　實は疾から思うて居れど
腰二　女子の常の恥かしさ。
藤馬　ムウ、すりや、籬が身共をば。
腰一　イヽエイナア、わたし等二人。
兩人　藤馬さん。
　ト寄り添ひ、嫌らしき思ひ入れ。
藤馬　エヽ、情ない。
腰一　籬さんの替へ玉に
腰二　わたし等二人を
兩人　マア、一口喰べてごらん。

藤馬　これは堪らぬ。
兩人　イエ／＼、逃がしはせぬわいなア／＼。
藤馬　アヽ、免せ／＼。
腰一　なんであらうと
兩人　放しはせぬぞえ。
　トよろしく附きまとひ、藤馬へしなだれる事あつて
藤馬　籬に比べて見る時は、お月樣と
腰二　泥鼈の味は
兩人　違ふぞえ。
　ト三人こなしあつて、藤馬が行かうとするを、兩人引きとめ嫌らしきこなし。爰へ籬出て
籬　申し／＼千歲さん、末廣さん、お姫樣のお立ちぢやぞえ。
兩人　ハイ／＼。
籬　藤馬さん、まだ爰にござんすか。サア、お二人さん、早うござんせ。
兩人　參りませう／＼。
腰一　それに付けても、胴慾な藤馬さん。
腰二　戀知らず情無し男。
兩人　覺えてござんせ。

ト思ひ入れあって奥へ入る。

藤馬　戀知らずと、籬が事、よく最前も身共を。また行きあつたは觀世音の、導きたまふものならん。

籬　それどころぢやござんせぬ。

藤馬　何と云はうと、もう堪らぬ。

ト駒鳥の合ひ方になり、籬を追ひ廻し、捨ゼリフにて無理に押へつけようとする。バタ〳〵になり、妻平走り出てこの中へ入り、藤馬を見て

妻平　ヤア、あなたは藤馬さま。

藤馬　ムウ、妻平めだな。

籬　よい所へござんした。

藤馬　エヽ、悪い所へうせ居つたな。

妻平　お前様も、わたしなりやこそよけれど、餘人の目に掛つては、御人體のすたる事。ちとお嗜なみなされませ。ムウ、さうして最前から、爰におゐでなされたからは、國行さまにお逢ひなされは致しませぬか。

藤馬　ナニ、國行に。

ト思ひ入れ。

籬　御存じでござりまするか。

藤馬　イヤ、知らぬ〳〵。國行は慥か、歌の中山清閑寺の方へ參るのであらう。鳥羽か伏見か淀竹田の邊で逢うたと、人の噂で聞いたばかり、知らぬ〳〵。

妻平　エヽ、何を仰しやりまする。サア籬どの、早うそこをござりませ。

ト籬、行かうとする。

藤馬　オツト、やらぬワ。

妻平　エヽ、これはしたり。

ト隔てる事あつて、籬、上手へ入る。藤馬、ムツとして

藤馬　飽くまで身共の邪魔ひろぐ下素奴め。われが爰に居るからは、園部の左衛門薄雪姫、兩人ともに隱れ居て、不義ひろいだに違ひない。サア、いづくに居るか、有體に吐かせ。

妻平　エヽ、お前様は、途方とてつもない事を仰しやります。

藤馬　なんと陳じ爭ふとも、疾よりも隱し目附けを入れ置いて、見屆け置いたのだワ。

妻平　二人は不義でござりますかな。

藤馬　コリヤ待て、妻平。

妻平　まだ何ぞ御用がござりまするか。

藤馬　ある段か／＼。澤山ある。此方が首ッたけのあの籬、持ち居つたな／＼。女房に。

妻平　其方が平たく云ひ出すからは、有やうに云つてしまはう。如何にも籬はわしが女房。女房に持ちやア、どうしようと思ふのだ。

藤馬　此奴が／＼。腮のえらい奴めだな。なんぼ強い顔をしても、籬はあなたに上げますと、取持て／＼。

妻平　マア、さうはなるまいわえ。

藤馬　さう吐かしやア仕方がねえ。これまでのよしみだけに

妻平　どうせうと思ふのだ。

藤馬　女房もつた花聟へ、若水祝つてやるべいか。

妻平　どうしたと。

藤馬　奴ども、花聟さんを祝はつしやれ。

ト揚げ幕にて

大勢　女房呼んだら、川へぶちこめ。

ト云ひながら立廻りの人數、好みの一樣の形にて、手桶を持ち出て來り、花道附け際に並ぶ。妻平よろしくキツと見得。

妻平　ムウ、さてはわいらは秋月の家來だな。仲間づくだと義理張つて、めい／＼持參の水手桶。

奴一　如何にも並んだ一やうは

奴二　玄關前の打水に

奴三　時雨櫻も花曇り。

奴四　晴れて駿河の三國一。

奴五　この嫁入りの行列は、勇んで狐の日照り雨。

奴六　ふるとは奴のお定まり。

奴七　臺傘投げて鳥毛の槍。

奴八　一番立引き立て笠と

奴九　わざ／＼爰へ來たからは

奴十　すつぼり濡れた花の雨。

奴十一　蛙の面へ水手桶。

奴十二　よい女房を持ち前の

奴十三　腕もすぐつた一やうは

奴十四　二字の段々段かづら。

奴十五　戀の石段白糸の

奴十六　瀧の若水わつさりと

奴十七　妻平、われに

皆々　祝つてやるのだ。

ト妻平を中へ挾み、よろしく居並ぶ。

妻平　ム、、ハ、、、、。そりや近頃忝ない。所も爰は清水の、觀音堂で女房に、持たれぬ事と暑くなり、關の清水のせき込んで、のぼせた面のあかの水。柳の水に流すのが、其方の爲にも吉水だが、たつて吐かしやア臑骨に、かけて蹴上げの水なぶり。末期の水を呑ませてくれうワ。

ト妻平、身づくろひをしてキツと見得。

藤馬　奴めに水くらはせ、吠え面をかゝせろエ、。

皆々　合點だ。

ト誂らへの賑やかなる鳴り物になり、妻平、皆々を相手に手桶の立廻り、いろ／＼あつて

藤馬　もうこの上は。

トよろしく切つてかゝるを止めて

妻平　まツかせ手桶のそこらには、なか／＼ぬからぬこの男、片手桶にも足らぬ奴、金輪五厘五體の桶皮。

トよろしく立廻つて、また大勢掛る事、此うち藤馬の刀打ち落され、上手の石段へ投げ付ける。これを又鳴り物になり、大まくしの立廻りよろしくあつて、皆々敵はず逃げて入る。

イデこの上は、國行どのを。

藤馬　われをやつては。

トちよつと兩人立廻つて、この時以前の立廻りに出し奴出て

奴皆　どつこい。

ト眞中に妻平、藤馬を止め、奴皆々取卷く。サラシにて

幕

二幕目　幸崎邸の場

役名――幸崎伊賀守。園部の兵衛。園部左衛門。葛城民部。秋月大膳。澁川藤馬。茶道、珍才。薄雪姫。幸崎の奥方、萩の方。腰元、籬。

本舞臺、正面三間の間、高足の二重、舞臺向う銀襖。上の方、九尺の塗り骨障子屋體。上下柴垣、いつもの所枝折り戸、此うちよき所、櫻の臺みき、すべて幸崎伊賀守館の體。二重の下に前幕の腰元の三、歌がるたの箱を持ち、左右に腰元六、七、八扣へ、茶

道珍才十德を着て、いづれも毛氈の上へ歌がるたを並べ、これを取つて居る。この見得琴唄にて幕明く。

腰三　逢ひ見ての後の心にくらぶれば

腰六　昔は物を思はざりけり。

ト取つて前へ置く。

腰七　ちと私しが替りまして、讀みませうわいなア。

腰三　イエ／＼、それはなりませぬ。この頃では二字や車附けで、皆さんに揉まれました所爲か、どのやうなむづかしい字でも讀めまする。

珍才　お前の事を、お茶の間で皆さんが

腰三　祐筆だと申しまするか。

珍才　なにサ、無筆だと申しまする。

腰三　何をお云ひなさる。

腰八　サア／＼、後をお讀みなされませいなア。

腰六　來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに

腰七　燒くや藻汐の身を焦れつゝ。

珍才　サア、その焦るゝはお姬樣、左衞門さまの男ぶり、くつきりとして色白で、どこに一つ云ひ分ない殿振りなれど、どこから見てもコリ／＼と、堅い所に惚れ込んだ姬君樣。やがて女夫に末長う、二人が仲もわびぬれば、今はた同じ難波なる。爰にござりまする。身をつくしても逢はんとぞ思ふ。

腰八　姬君樣が、お聞き遊ばしたら

腰六　さぞお喜びでござりませう。

腰七　ほんに、よい辻占で

皆々　ござりますわいなア。

腰六　その辻占で思ひ出す、姬君樣がお焦れ遊ばす左衞門さま、籬どのの仲立にて、今宵逢ふとのお文の知らせ。

珍才　そんなら、いよ／＼お二人は、變らぬ戀路となりましたか。羨しい。

腰七　アヽ、コレ、殿樣へ其やうな事が聞えたら、わたし等までが濟まぬぞえ。

腰三　モシ／＼、其やうな事は取措いて、わたしが讀むから、早う歌がるたを取らしやんせ。コレ、珍才どの、今度取らぬと約束通り、お前の顏へ墨を塗るぞえ。

珍才　そりや、お前方もその通りぢやぞえ。

皆々　ようござんすわいなア。サア／＼、早う讀みなさんせ。

腰三　逢ふ事のたえてしなくばなか／＼に

珍才　アヽ、お姬樣には惡い辻占だ。

腰六　人をも身をも恨みざらまし。爰にあつたわいなア。
腰三　ソレまた鼻毛だ。髭塗りぢや〳〵。
ト有り合ふ硯箱の筆を取つて、皆々珍才を捕へ、墨を塗らうと爭ひ
珍才　こりやモウ、堪らぬ〳〵。
ト逃げようとするを
皆々　イエ〳〵、逃がさぬ〳〵。
ト皆々珍才を追ひ廻す。調べになり、奥より薄雪姫、籬、後より女小姓兩人附き、二重の眞中へ褥を敷く。この上に薄雪姫住ひ、脇息にかゝる。竹本になり
〽爭ひなかば一間より、薄雪は何氣なく、籬見るより聲をかけ。
籬　お前方とした事が、別間へ洩るゝ諍ひとは、あまり不行儀でござんせう。お嗜なみなさんせいなア。それは格別姫君樣には、日毎夜毎のお物案じ。其お心を晴らさんと、種々お慰め申せども、只前後忘れぬお氣の結ぼれ。それに付きまして私しから、妻平まで人を遣はしましてござりまする。
薄雪　そりや、そもじから何かの事を。どうぞよいやうに賴むぞや。

籬　やがて御返事がござりませう。
ト此うち腰元三人、珍才の顔へ墨を塗るゆゑ、籬こなしあつて
コレコレ珍才、其方の顔はどうしたのぢや。
珍才　イエ〳〵、これは皆さんがお姫樣のお相手に、歌がるたをお取りなされましたところが、わたしの鼻毛をお抜きなされましたゆゑ。
腰三　お約束で、墨を塗つたのでござりまする。
皆々　ほんに、をかしい顔ぢやわいなア。
腰三　皆さん見やしやんせ。猫叉のお化ぢやわいなア。
珍才　ナニ猫叉だ。お前の顔は鰒の横飛びと來てゐる。
腰三　ナニ、わたしが鰒ぢやとえ。
ト立ちかゝるゆゑ
珍才　イエ〳〵、鰒ではない。蛸々。
腰三　ナニ、蛸とはえ。
珍才　ソレ、凧が、アレ〳〵〳〵。
ト上手の霞の方へ指ざす。
皆々　なんの事ぢやぞいなア。
籬　〽おどけまじりと打見やる、初東風空に奴凧。
ほんに珍才どのが云はるゝ通り、町々でのぼすいか

のぼり、姫君、御覽遊ばしませ。
薄雪　されば いなう、夕日に連れて人影も、朧染めなる品かたち、綺麗な事ではないかいなう。雲井はるかに飛ぶ鳥の、中を爭ふ奴凧。
腰六　左樣でござりまする。
腰七　ほんに、妻平どのによう似た面ざし。
腰八　風になびいて面白う
皆々　ようマア上がつた事ぢやぞいなア。
腰三　オヤ〳〵、アレマアお姫樣御覽遊ばせ。籬さんも皆さんも御覽じませ。ヤア、よう書きました凧男。衣紋付きはどちから見ても妻平どの、籬さんのその中を、結ぶは針の糸目口、コレ、籬さん、早う爰へ來て呼ばしやんせ。オ、イ〳〵、妻平どの〳〵。
〽呼べど招けど雲霞
ト手招きして腰元の三、凧を見る思ひ入れ。
〽うはの空吹く風につれ、ふつと切れたる糸鬢頭の奴凧、風に任せてふわ〳〵と、落つれば駈寄る腰元はした。
トこの文句のうちよき程に、風の音烈しく、件の奴凧、切れたる心にて下手の櫻の臺幹にかゝる。皆々駈けよる。薄雪姫見て思ひ入れ。籬心嬉しきこなし。また調べになり
珍才　アレ〳〵、凧が落ちました〳〵。
腰六　所にこそよれ、御寢所のお庭先。
腰七　爰へ落ちたは、よい辻占。
腰八　今宵の御首尾も、定めてよい事でござりませう。
腰三　左やう〳〵、妻平どのによう似た奴凧。籬どの、皺にせぬやうに、大事に抱いて寢やしやんせ。
籬　これはしたり、又しても、其やうな事ばツかり。お前方も嗜なましやんせ。其やうな事が、ひよつとお上へ聞えたら、姫君樣もこの籬も、大抵の事ではござんせぬ。モウ〳〵其やうな話しは、決してして下さんすな。ハテ、合點のゆかぬは、あの切れ凧。
皆々　ほんに何やら、糸口に。
腰三　ドレ〳〵、私しが取つて參りませう。
ト忍ぶ摺りの封じ文付いたる件の凧を持ち來り
モシ、お喜びなされませ。文がござりまするぞえ。
ト籬取つて開封して
籬　申し姫君樣、思ふお願ひが屆きましたやら、あなたの戀人左衞門さまより、いよ〳〵今宵忍ぶと、歌に通はす合ひ圖のお文。

ト件の文を薄雪姫に渡す。薄雪姫、嬉しき思ひ入れ。

薄雪　そんならあなたは、逢ひなう。

ト文を見て

いよ／＼變らぬお心か。

籬　なんと御覽じませ。御器量よければ、何から何まで、お氣の通つた左衛門さま。

腰三　あの奴凧に文附けて、姫君樣のお側まで通ひ路さすとは、矢文は愚か雁金の、文に勝つた御發明、誠に感心。

籬　御念が屆いたあなたへ玉章、さぞお嬉しう

皆々　ござりませう。

〽云へば姫君嬉しげに、肌身に添へて現なく。

薄雪　思ひ思うた左衛門さま、今宵逢ふとの約束は、結ぶの神の引合せ。暮れるというても今暫し、幸ひ月の朧影。

籬　何かの事も打解けて、寢物語りの板びさし、忍び逢ふ身の戀の隙。

腰六　人目ふせぐはいつもの爪琴。

腰七　爪音高く紛らして

腰八　外へ洩らさぬ

腰三　工風が肝心。

籬　先づそれまでは姫君樣。

薄雪　そんなら籬、皆の者。

籬　先づ

皆々　入らせられませう。

ト唄になり、薄雪姫先に籬、皆々附いて奥へ入る。腰元の三殘り

腰三　サア／＼、これからはお姫樣の、戀人を待つばかり成る程譬へに云ふ通り、男やもめに蛆とやら、女やもめに花が咲くとは、よう云うたものぢやなア。お姫樣には左衛門さま、籬どのにはあの妻平。

ト以前の凧を取り

ほんに斯ういふ男なら、籬どのが惚れるも尤も。繪で見てさへも悪うないなア。

ト見惚れる。此うち珍才出て、後より腰元の三に抱きつく。

誰れぢや／＼。

珍才　おれぢや／＼。ちんだ／＼。

ト顔を出す。腰元の三見て

腰三　誰れかと思へば珍才どの。ちんだ／＼もないものだ。

猫の化けたのめ。
ト振り放し、珍才の頭をピッシャリ打つ。唄になり、
腰元の三、ツイと奥へ入る。珍才後に殘り
珍才 アイタヽヽヽ、うつかり冗談も云へねえ。コレサ
コレサ、おれも行かう／＼。
ト後を追つて入る。
〽入相も、夜明の鐘と驚ろかれ、園部左衞門は契約の、
時違へじと只一人。
ト本釣り鐘、琴唄になり
唄〽長閑なる春の心に誘はれて、花の下行く薄氷、解く
るや昨日今日は又、人待つ宵の鐘の聲。
トこの唄の終り、花道より左衞門、好みの拵らへにて
出て來り、あたりを見廻し、よき程に舞臺へ來て、枝
折り戸の外に佇む、
〽籬はそれとさし心得、緣を放れて飛石傳ひ。
ト奥より籬出て、あたりを見廻し、左衞門を見て
籬 左衞門さまか。
左衞 ア、コレ。
ト押へ、左衞門あたりへ思ひ入れ。
密かに／＼。

ト籬、枝折り戸を明け、左衞門を內へ入れる。
籬 幸ひあたりに人目もなければ、今宵の御首尾も上々
吉。さてマア今日のお文の御趣向。お姬樣にも殊ないお
喜び、皆も我を折りました。
左衞 さればサ、唐土の韓信は、紙鳶で城內の道のりを計
りしが、この左衞門は紙鳶にて、薄雪どのの閨の內、踏
み分け來たれど、館の樣子は。
籬 ハテ、お心遣ひ遊ばしまするな。何事も私しにお任
せあつて、姬君のお側へ、早うお越しなされませ。
左衞 萬事物馴れた其方、よいやうに賴みます。
籬 サ、斯樣申すうちも心が急く。少しも早う左衞門さ
ま。
左衞 籬どの。
籬 サア、お出でなされませ。
〽心利かしていそ／＼と、立てきる障子密々に、忍び逢
ふこそわりなけれ。
ト籬こなしあつて、左衞門を連れ上手へ入る。
〽折も折とて入り來る、秋月が家來瀧川藤馬。
ト花道より藤馬、衣裳上下、大小、顏へ膏藥を貼り、
出で來り

〽この頃の生疵にて、顔はまだらに膏薬だらけ、ちがちがと一間に通り。

ト舞臺へ来り

藤馬　もし折入つて奥方に、密々お話し申したい儀がござつて参つた。誰ぞ取次いでくりやれ。

ト奥にて

腰元　ハイ〳〵、畏まりました。

ト出て来る。藤馬よろしく住ふ。

どなた様でござりまする。ヤ、あなたは澁川藤馬さま。

藤馬　ア、イヤ、其方では用向が解らぬ。籬どのを呼ばつしやい

腰元　ハイ〳〵、籬どの〳〵。お取次がござんすぞえ。

籬　只今それへ参りまする。

ト調べになり、出て来る。

藤馬　イヤ、籬どの、奥方に内々御談じ申したい儀がござるゆゑ、夜中ながら参上いたしてござると、お傳へ下されい。

ト此うち腰元皆々、燭臺煙草盆など持ち来り

〽思ひがけなき澁川に、籬もハッと胸にこたへ、ひよんな所に藤馬面と、思へどわざと外らさぬ顔。

籬　ホヽ、どなた様かと思うたれば藤馬さま、お顔の疵でさつぱりと見違ひました。あなた、そりやマア、なんとなされました。

藤馬　されば聞きやれ。園部左衛門が奴めを、六波羅の御所で、手ひどい目に逢はしたれば、その意趣返しを清水で出ツくはし、彼方は大勢、此方は某只一人、日頃手練なしたる柔術で、半死半生にさせたが、卑怯未練な奴め、組み敷かれながらおれが顔を、熊鷹爪で掻いて〳〵掻きむしつたその疵跡。なんぼ兵法の達人でも、あゝ掻かれては堪らぬわい。

〽口から出次第まつかいな、面を抱へて間に合ひに、籬もをかしさ堪えかね。

籬　ほんにあなたも、日頃の御氣質にもお似合ひなされぬ、彼方からあなたへ疵を付けるなら、あなたも先を打据ゑておやり遊ばせばよいになア。

藤馬　サア、そこが下世話に申す、上手の手から水が漏るの譬へでござる。イヤナニ、籬どの、それにつけても先達ては、清水にて出逢うたゆゑ、よい折からと我れらが心のたけ申し入れしに、さりとては情ない、胴慾な、返す返すも恨みでござるぞ。イヤ併し、それは私し事。拙

者が使者に參りし趣き、奥方へ申し入れて下され。籬どの、頼み申すぞ。

籬　畏まりました。只今お逢ひ遊ばされませう。その間あなたはこれにてお煙草なと御ゆるりと召上がりませ。ドレ、私しは申し上げて參りませう。

〽籬は奥へ立つて行く。

ト籬、腰元皆々附いて入る、

〽藤馬は座敷にとほんとして。

ト煙草をのみ、灰吹をはたき、

藤馬　さて〳〵、返事の長い事。待たせるぞ〳〵。イヤ、何方でも女中と申すものは、埒の明かぬものぢやて。

〽見やる障子に、影法師。

ト上手の障子に灯寫り、腰元皆々小聲にて

腰皆　サア〳〵、左衞門さま姫君さま、しつぽりとおしけり遊ばしませいなア。

〽女中の聲々聞ゆるにぞ、さてこそ噂に違はずと、聞耳立つる後より、幸崎の奥方、籬伴ひ立出づる。

ト藤馬上手の障子へ目を附け、聞耳を立てゐる。この時奥より萩の方、打かけ衣裳、片はづしにて籬附添ひ出て

萩方　オヽ、珍らしや藤馬どの、夜中といひ、流しき儀かの御入來。なんの御用で只今頃。

藤馬　アイヤ、其やうにお氣遣ひな事ではござらぬ。早速申し上げたき仔細と申すは、外でもござらぬ。御息女薄雪さまの御身の上。かね〳〵主人申し受けたき望みなれば、身不肖なれどもこの藤馬が仲人にて、御婚禮の取結びたい。御存じの通り、武藝に於ては肩を並ぶる者のなき大膳どの。聟に取つても不足はあらじ。拙者がこの事申さん爲め、夜中ながらわざ〳〵參つた。何卒お請けのお詞を賜はらば、澁川も大慶。この段只管お頼み申す。

〽慇懃に相述ぶれば。

萩方　これは〳〵、何事かと存じましたれば、先づは承つて母の安堵、人並ならぬ娘を御懇望下さるは、親々の喜び如何ばかり、さりながら、夫伊賀守は佛參、歸り次第娘にも、とくと云ひ聞かせ、成る成らざるは此方から、あなたまで御返事を致しませう。

〽寄らず障らぬ挨拶に、藤馬は傍にゝじり寄り。

藤馬　憚りながら、そりや惡い御合點。父御のお耳に入れてはもう表向き。娘は母に附くと下世話にも申せば、御母公の呑込みで、何卒只今よろしき返事、承はりたい。

籬　でも殿様のお留守、その御返事は御即答には。
藤馬　イヤサ、急に御返事承はりたいと申すも、藤馬がお爲を存ずるから。
萩方　此方の爲とは、何が此方の爲でござりまする。
藤馬　さればサ、大名でも町人でも、脊丈延びた娘には、得て虫が附きたがり、忍び男を拵らへ、親々の顏を汚すは世間にまゝある習ひ。そこを拙者がお察し申して、急に御相談を申すは、なんとお爲であるまいか。
萩方　ヤア、默り居らぬか。さては娘薄雪に忍び男があると、當附けて云はるゝか。幸崎伊賀守の娘、粗相云うたら、この母が免さぬぞ。
藤馬　イヤ、お免しなされうがなさるまいが、まんざら無い事は申さぬ。お望みならば、お目にかけうか。
萩方　ヤア、推參なる娘の詮議。夜中といひ夫の留守、來るさへあるに屋敷の内を、家探しする氣か。
藤馬　サア、さうではなけれど
萩方　見事して見よ。女ながらも手は見せぬぞ。
〽長押に掛けたる長刀押ッ取りかけ向へば、さしもの藤馬も奥方の、氣色に恐れ敗亡し、
ト萩の方ムッとしたる思ひ入れ。後の長押の長刀を持ち、キッとなる。これにて藤馬、二重より下りて慄へる。
藤馬　ア、コレサ奥方、何も敢へて詮議を致すとは申さぬ。腹立ち召さるな。もし左樣な不義が、ひよつと出來た時には、親御の難儀になるゆゑ、縁附かるゝがよろしからうと申したぢや。ナニサ、無理にと申した譯ぢやござらぬ。左樣ござらば、拙者はこれよりお暇申す。
ト枝折り戸の外へ出て
〽一散に後を見ずして立歸る。
ト藤馬、足早に花道へ入る。
〽母上長刀がらりと捨て、ツカ／＼と駈け寄つて、障子さらりと引明け給へば、籬はハット氣も消え／＼、
ト萩の方、長刀を捨て、上手の障子を引明けると、左衞門薄雪姫、結構なる蒲團の上にて、ハッと思ひ入れ。
萩方　ア、コレ、左衞門どの、隱るゝ事はちつともない。娘も爰へちやつとおぢや。叱りはせぬ、ハテ、よい事を云うて聞かしませう。
〽常に變らぬ母上の、詞にいとゞ薄雪も、左衞門ともに氣味惡く、顏も得上げず平れ伏せば。
オヽ、二人ともに親も許さぬ忍び合ひを、この母に見咎

あられ、當惑は尤もぢやが、今の藤馬が云ひ分、一々聞いてか知らぬけれど、娘を侍つた親々のよい覺悟。この事世上へ聞えては、園部幸崎の家の疵。そこを思うてこの母が、いま二人を夫婦にする。

兩人　エヽ。

ト兩人恟りする。

萩方　オヽ、嬉しからう。母も嬉しいわいなう。

〽思ひがけなき一言に、娘も恟り左衞門も、夢に夢見し如くなり。

左衞　御兩親のお許し受けては格別、お許しなきに忍び逢ひしは我が誤り、眞平御免下さるべし。

〽恐れ入つてぞ詫びければ。

萩方　さればいの。娘がいとしがる左衞門どの、誤まりにせまい爲、今宵俄かの取結び。

籬　モシ、お喜びなされませ。奥樣よりお許し受ければ、世間晴れての御夫婦でござりまする。

薄雪　サア、母樣は其お心なれ、父上が何と仰しやらうやら、わたしやそれが氣遣ひにござりまする。

萩方　アヽ、云やる事わいの。そこにぬかりあつてよいものか。もし又、父御が如何やうに仰しやらうが、思ひ合うた仲、夫婦にするを何と仰しやらうぞ。表向きの祝言は追つて。今宵はザッと内々の祝言を取結ばん。籬、何はなくとも、銚子土器のし昆布。

籬　畏まりました。善は急げと申しますれば、ドレ、お杯の用意を致しませうか。

ト調べになり、籬、奥へ入ると、引違へて腰元の六、蝶花形の銚子を持ち、腰元の七、同じく銚子持ち、腰元の八、熨斗昆布を載せ、持ち出て來り、眞中へ直す。

〽詞に飾る大島臺、聲高砂や住吉の、濱松の聲も共々に。

萩方　何はなくとも内祝言のまなび、娘が始めて盃どのへさしてたも。

籬　奥樣の御前で御祝言のお杯、

皆々　此やうな、おめでたい事はござりませぬわいなア。

萩方　めでたい。

ト薄雪姫、杯を取上げ、飲んで左衞門にさす。兩方より腰元ついで

〽うたひさゞめく折からに。

ト杉戸の内より腰元の六、雪洞を點して出て

腰六　奥方樣へ申し上げまする。殿樣には御歸館遊ばしてござりまする。

ト左衛門これにて思ひ入れ。

左衛　ナニ、主にはお歸りとな。

萩方　ハテ、何事も内々。殿のお歸りとあるからは、ソレ、銚子土器を。

〽取片付くる折からに、主人幸崎伊賀守、佛參戻りの禮服調へ、靜々と座に直り。

トこの文句のうち、下手の杉戸より、伊賀守、衣裳上下、大小にて出て來り

籬　殿樣には暮合ひまでには、お戻りあらうと存じの外只今御歸館

皆々　遊ばしましたか。

伊賀　されば聞きやれ。今日は取分け天氣も麗か、菩提所の境内の櫻を詠めるうち、老僧の招きにより、方丈方で茶のもてなし、それゆゑに殊の外遲刻に及んだ。

ト左衛門を見て

これは〳〵左衛門どの、今日はようこそ入來。親御兵衛どのにもこの兩三日、面會も致さぬが、お變りもなされぬか。

〽詞に左衛門取あへず。

左衛　ハッ、其許樣にも御壯健にて。

伊賀　何は然れ、ようこそお出で。サ、これへ〳〵。イヤナニ左衛門どの、いつぞは其許へ申し出さんと存ぜしところ、幸ひよき折からなれば、早速ながら申し入れる。兼ねて奧とも相談いたし、娘薄雪、同じ嫁入りさせるなら、園部氏へ遣はしたく、この儀兵衛どのへ仲立を以て申入れうやと存ぜしに、公用に取紛れ、未だ御親父へも申し入れぬが、もし御緣もござつたなら、不束な娘なれど、この儀御得心下されうや。

左衛　これは〳〵、數なりませぬ拙者めに、御愛女を下されんとの御厚志のお詞、忝なうはござれども、父母許さねば嫁取らずと、父兵衛が詞次第、何しに違背いたしませう。

萩方　娘聞きやつたか。今日から其方の望み通り

籬　ほんに粹な大殿樣。お姫樣、ちやつとお禮を仰しやりませ。

〽突きやられても赤らむ顏、嬉しさ餘り詞も出ず、手を合すのが精一杯、喜び給ふ折からに。

呼び　上使。

萩方　ナニ、御上使のお入りとな。ソレ、お出迎ひの用意いたせ。

萩方　ソレ、式臺より御上使の御案内。

腰元　畏まりました。

ト調べにて花道へ入る。

萩方　籬を始め腰元、御馳走の用意をしや。

籬　畏まりました。

〽皆々奥へ入りにける。

トこれにて籬と腰元、奥へ入る。

呼び　上使。

〽上使ざうと入り來るは、六波羅の執權葛城民部之丞、後に續いて秋月大膳、園部兵衞、それと見るより伊賀守。

ト序の舞になり、花道より葛城民部、衣裳上下にて刀箱を携へ、後より大膳、燕手、衣裳。續いて兵衞、衣裳上下にて出て、花道に居並ぶ。

伊賀　俄かの御入來と承り、お出迎ひ仕る。御上使樣には先づ／＼これへ。

萩方　お通り下されませう。

大膳　役目なれば罷り通る。イザ、御兩所、

兵衞　先づ／＼。

民部　許しめされい。

〽靜々と打通れば、奥方始め不審顔、思ひがけなき園部左衞門、俄かに隱るる方もなく、御臺親子の人々も、景色に驚くばかりなり、民部之丞席を改め、今日六波羅より仰せを蒙り、斯く云ふ葛城民部之丞、罷り越したるその仔細は、當家の娘薄雪姫、園部左衞門兩人に、御詮議の筋あつて、園部の兵衞は館へ召寄せられ、お糺しありしその條々、謹んで承れ。

〽さも嚴重に云ひ渡せば。

伊賀　園部の左衞門、並びに娘薄雪が儀に付き、六波羅どのより御詮議とは、輕からざる御仰せ。その仔細具さに、仰せ聞けられ下さりませう。

民部　イヤナニ兵衞どの、六波羅よりお咎めの段々、子息左衞門に御自分が云ひ聞かさるゝか。但し民部が申し渡さうか。

〽聞きもあへず秋月大膳。

大膳　イヤ／＼、それは入らぬ遠慮。殊に兵衞どのも、我が子の詮議は仕憎いもの。併し、悪い所に左衞門が居合されて、云ひ譯が立つまい。近頃笑止千萬な。

〽お爲め顔にて焚付くるを、耳にも入れず席を改め、左衞門に打向ひ。

民部　左衞門どの、サヽ、これへ／＼。ハテサテ、これへ

といふに。

左衛　ハヽヽツ。

ト本調子の合ひ方になり、左衛門、眞中におづ〳〵と出る。民部思ひ入れあつて

民部　如何に左衛門どの、承れば其方、これたる薄雪と心を合せ、天下を調伏せらるゝ由。何ゆゑかゝる事ども計らはれしや。サア、眞直に白狀めされ。

左衛　こは何ゆゑに左樣な事が、上聞に達せしにや。左衛門身に取り、毛頭覺えござりませぬ。

民部　サア、その儀と申すは、この度六波羅の御用につき、來國行に打たせたる影の太刀、其方が調伏の鑢目に、違ひなしと事極まる。何所の誰れが謀叛に與みして、鎌倉を恨み奉るぞ。有やうに白狀せよ。云ひ譯あらば我れ我れが聞き屆け、その趣き言上なさん。

ト持ち來りし箱の劍を出し

これこそは其方が奉納したる影の太刀。サ、立寄つてとくと見られよ。

〽差出せば手に取上げ、よく〳〵見ればこは如何に、以前見しとは違ひし鑢目、はつとばかりに氣も顚倒、初めて聞きし幸崎も、暫し呆れて詞なし。

ト民部、左衛門の前へ差出す。左衛門取上げ、よくよく見て思ひ入れ。伊賀守こなし。

大膳　コレサ、左衛門、何をウヂ〳〵、よも知らぬとは云はれまい。

民部　コリヤ、左衛門、よつく承れ。鎌倉どのを調伏の鑢目、入れさせしは大罪とは云はん、言語に絕えし不屆き者めが。併し未だ若年の其方、殊に薄雪姫を賴み、かかる企み致すべきやうなし。ナ、うろたへる所でないぞ。申し開きの筋あらば、性根を据ゑて申し開きせよ。ド、、どうぢや。

左衛　御上使樣の御意、一々御尤もにはござれども、斯く納まりし世に、何恨みあつて調伏仕り奉らんや。弓矢神も照覽あれ、この左衛門が身に取つて、微塵毛頭覺えなし。察するところ某に、意趣ある者の仕業よな。

〽云はせもあへず父の兵衛、ツカ〳〵と差寄つて、我が子のたぶさ引ツ摑み、ぐつと捻ぢあげ、

ト兵衛堪えかね、ツカ〳〵と左衛門の側へ寄りて引寄せ

兵衛　おのれ憎い奴。これ程の事を仕出しながら、この期に及んで意趣ある者の仕業と、武士の口から未練な事、

よう吐かした。云ひ譯なくば、なぜ潔く切腹せぬ。アノ妄な、不所存者めが。

〽立派に云へど子を思ふ、心は同じ伊賀守、

伊賀　さた云はれそ兵衛どの、思ひも寄らぬ御子息の災難察するところ讒者の企み。また娘まで御詮議の越度と申すは、證據ばしあつての事か。

大膳　遁がれぬ證據、これにあり。

〽懷中より姫の手蹟を取出し。

ト前幕の文を出し

これ見られよ。刃の下に心といふ字を書き、左衛門さま參る、谷蔭の薄雪より。これが左衛門と一緒と云ふ、慥かな證據、息女の手蹟、見知りがあらうが。

〽差出だせば、姫は覺えの判じ物、云ひ譯あれど、この中で、明らさまに云はれもせず、どうか、斯うかとためらへば。

萩方　これはしたり、姫、大事な場合ぢや程に、覺えがあらば、サア、ちやつと云ひ譯してたもいなう。

〽早う／＼と心をあせり、突き出せば、やう／＼に顏を上げ。

薄雪　皆樣の手前も恥かしい事ながら、左衛門さまにフト馴れ染め、書いて送りし合ひ圖の文。人の見る目をいとひ、刃を描き、その下に心と云ふ字を書きたるは、忍ぶと云ふ字、谷蔭の春の薄雪とは、打解けて忍び逢はんと、心を知らす判じ物。愚かな女の筆すさみ、お目に留まつて、お咎めに合はうとは、夢々知らぬ。母樣、どうぞお詫びなされて下さりませ。

大膳　アイヤ、その云ひ譯、暗い／＼。斯う申せば大膳が、さゝへこさへ致すやうなが、御意なれば宥免ならず……コレ、この刃の下に、心と云ふ字を書きたるが、お咎めの第一。心は卽ち、なかごと讀ましむ。刃のなかごに調伏の鑢目を入れさする、互ひの合ひ圖に違ふまじ。また、左衛門さま參る、谷蔭の春の薄雪より。今こそは雪や氷と、谷蔭に身を潜むるとも、後には雨霰となつて、行を萬天に上げんと、左衛門を祝せし判じ物。と、サア、六波羅どのゝ御眼力にて、見顯はされた上からは、グツとも、スツとも云ひ譯あるまい。

〽理を非に枉ぐる大膳が、口先に云ひ廻され、流石の母もハア、ハツと、姫に取りつき、縋り付き。

萩方　コレ娘、なんと思うてあのやうな、大それた事してたもつたぞいなう。もう外に云ひ譯はないか。云ひ譯な

くば、科は遁れぬ。團一、其方の身の上に、もしもの事があつたなら、この母は、どうせうぞいなう。

〽膝に引寄せ抱きしめ、人目もいとはず泣き給ふ、父も萎るゝ瞼を見開き。

伊賀　エヽ、未練な女房。不所存な娘に、ナニ繰り言。見苦しい、嗜なみ居らうぞ。

左衛　アイヤ、御息女の知られし事でなし。云ひ譯立たねば、科はこの左衛門。さりながら、その影の太刀を奉納の砌り、來國行も同道、拙者が仕業でない事は、國行こそよき證據なれども、この者も清水より行き方知れず、彼れが在所を搜すまで、御前は上使のお執成し、偏へに願ひ奉る。

〽詞も未だ終らぬうち、案内に連れて清水の轟坊の使僧、國行が死骸、戸板に乗せ取持たせ、上使の前へ罷り出で。

ト下手より腰衣坊主、後より同宿二人、國行が死骸を戸板に乗せ、出で來り

使僧　ハア、申し上げまする。國行どのゝ死骸、本堂の塵落しに捨てありしゆゑ、夜中なれど、六波羅どのへ訴へ申し上げしところ、この儀に付き各々方、これへお出での由、持ち參れとのお指圖に任せ、伺候仕つてござりまする。

左衛　ナニ、國行が。

ト死骸をよく〳〵見て

ヤア、こりや國行か、相果てました……モシ、國行は相果てました……コレ國行、いま其方が死にやつたら、誰れが云ひ譯してくれるぞ……たつた一言、云ひ譯してたも。こりやマア、どうせうぞいなう。

〽死骸に取りつき、泣き伏せば。

ト泣き落す。

民部　何は格別、國行が死骸、檢め見ん……ソレ、誰ぞ、灯持て。

侍ひ　ハア、。

ト近習、手燭を持ち出る。

民部　御兩所、お立會ひ下され。

兵伊　ハア、。

ト兩人、手燭を取り、死骸の側へ行き、灯を見せる。民部、下りて、死骸をよく〳〵見て

民部　フウ、見れば、外に刀疵もなく、鳩尾先に只一ヶ所の手疵。さては、小柄を以て仕留めしか。こりや、なか

なか只者の手の內とは覺えず。當時、六波羅どのゝ身內にて、斯程の手練を得たる者は、誰れか……彼れか……ムウ、正しく大膳。

大膳　ヤア。

民部　イヤサア、大膽不敵の曲者ぢやなア。早速の注進、出かされた。大義ながら、死骸、取片付けい。

使僧　ハイ、。

〽民部が詞に隨うて、使僧に寺に立歸る。

ト僧、死骸を持つて下手へ入る。侍ひも入る。民部、元へ居直る。

〽大膳片頰に笑を含み。

大膳　斯様な事は例しあり。佐々木盛綱、藤戸の先陣を望み、浦の男に淺瀨を習ひ、又もや人に語らんかと、浦人を手に掛けしとは、誰れ知らぬ者もない。察するところ、國行とても、調伏、鑢目を入れさせ、密事を人に語らんかと、切り殺せしに相違あるまい……と、サア、六波羅どのゝお疑ひ立つは定のもの。一災起れば二災起ると、笑止な事は云ひ譯の、筋もサラリと切れ果てたわい。

〽聞くに左衞門、胸轟き、頼みの力も落ち果てゝ、途方に暮るゝばかりなり。

ト左衞門、思ひ入れあつて

左衞　さうぢや。

ト腹を切らうとするを

民部　左衞門、待つた。無實の罪に腹切つて、謀叛人の惡名殘すか。

左衞　それぢやと申して。

民部　云ひ譯の種を失ひ、血迷うての切腹か。

左衞　全く以て。

民部　ハテ、色の道には賢しくとも、世上の道には疎い疎い。ハテ、急く所ではあるまいがな。

大膳　イヤ／＼、民部どの、調伏の鑢目、云ひ譯なさに切腹する園部左衞門、なぜ貴殿には止めさつしやる。

民部　成る程、お詞一理ありとは申しながら、國行を手に掛けしは、あながち左衞門が仕業とは申されまい。

大膳　とは又、なぜな。

民部　只今、國行が死骸、検め見るに、鳩尾に小柄の手裏劍疵、なみ／＼ならぬ手の內は、若輩者の左衞門如きが、仕業とも覺えず。その上、後日の證據を恐れ、小柄を拔きあれば、何者の仕業とも知れざるに、遮つて左衞門が

所詮なりと、大膳どのゝお詞。餘り詮議に念が入り過ぎて、ハテ、馬鹿。

大膳　ヤア。

民部　イヤ、馬鹿……馬鹿々々しう存ずるて。ハヽヽ、

大膳　でも、國行が相果てし上からは。

民部　ハテ、罪の疑はしきは、輕く計らふが政道の第一。

大膳　それおやと申して。

民部　鎌倉どのゝお眼鏡を以て、六波羅の決斷所を預かる葛城民部、外より指圖は受け申さぬ。

大膳　ムウ。

ト理の當然にさしもの大膳、無念ながらも扣へ居る、民部、重ねて。

民部　さりながら、國行が死骸は、左衞門が仕業ならずとたとへ云ひ譯立つにもせよ、天下調伏の申し譯立たざる上は、兩人ともに科は遁がれず……ムウ。

雪と詞の内、二人の父も默然と、物をも云はず居たりしが。

伊賀　イヤナニ、兵衞どの、ちと御内談申したき儀もござれば、御兩所へ御免を蒙り、御苦勞ながら、ちよつとあれまで。

兵衞　アノ、拙者めに。

伊賀　御大儀ながら。

兵衞　然らば。

ト二重の二人へ目禮して、花道、よき所へ行きして、御内談とは。

伊賀　イヤサ、存じも寄らぬ儀が、出來仕つたではござらぬか。若氣の至りとは申しながら、親々までに心勞かける兩人が不義。これと申すも薄雪姫が不埒から。近頃、何とも申しやうがござらぬ。

兵衞　イヤ〳〵、薄雪どのは女儀の事。未だ若年ゆゑ、何の後先の辨まへがござらうぞ。たゞ憎くきは悴左衞門。たとへ、御息女が如何やうに申さるゝとも、不義はお家の御法度と云ひ、最早、役附きも致し居れば、キッと相辨まへべきのところ、さはなくして、御息女を唆かし、云ひ譯立たぬ今日の仕儀。いづれとも手前、面目次第もござらぬ。

伊賀　イヤ〳〵、あながち左衞門どのが不埒と申すのではござらぬ。附添ひの者どもが楫の取りやう、殊更、此方の娘などは、兩親ども傍らに居ながら、不義いたし居るを存ぜぬかと、思し召しもござらうが、親はいつまで

も子供だ〳〵と存ずるうち、ツイ斯様な儀を仕出し申したも、何分、此方が娘のいたづらから起りし事。

兵衛　イヤ〳〵、伜左衛門めが不所存からなりや、御息女に科はござらぬ

伊賀　イヤ〳〵、手前の娘めが不埒。

兵衛　ナニ〳〵、此方の伜めが越度。

伊賀　イヤ〳〵、此方の。

二人　イヤ〳〵〳〵……ハヽヽヽ。

ト苦笑ひのこなし。

伊賀　不義の一條は、また兎も角も申し譯もござらうが、申し譯の成り難きは、天下を調伏の鑢目。其許には如何思し召すな。

兵衛　その儀には、拙者とても、甚だ心勞いたし居るが、貴殿は御老體と申し、萬事、物馴れてござれば、どうか御料簡もござらう。御遠慮なく仰せ聞かせ下され。

伊賀　これは近頃、痛み入つたるお詞。左やう仰せらるゝ上は、物は相談と下世話の譬へ。手前が申し出ださう。先づ、只今の所では、なか〳〵申し譯はござるまい。いつそ、御上使さまへお願ひ申し、兩人の子供を親々が預かり、悪事に一味の者ども、糺明なして一々に、白狀いたさせやうではござるまいか。

兵衛　流石は御老體程あつて、驚き入つたる御料簡。シタガ、貴殿にも御存じの通り、民部どのは格別、思し召しもござらうが、あの秋月どのゝ御氣性、こりや一應ではお聞濟みはござるまい。

伊賀　成る程、尤もの御一言。さりながら、兩人が斯様に心勞いたし居つても濟まぬ事。先づ願ひを上げて見たその上で、お聞濟み無き時は、又その上で、思案を致さうではござらぬか。

兵衛　イカサマ、そこもござる。然らば一度は、先づ申し出さうか……サ、。

伊賀　左様なれば、お越し下され。

ト本舞臺へ戻り、元の所へ坐し、手を突き

ハア、御兩所へ、親々が一つの願ひ。不所存な伜ども、何卒、御上使の思し召しを以て……ナウ、兵衛どの。

兵衛　ハア、兩人の子供を、親々へお預け下さらば、悪事に荷擔の徒黨の奴原、一々白狀いたさせれば、親々が面晴れにも相成りませう。

兵衛　何卒、この儀、お聞濟み下されうならば、千萬

二人　有り難う存じまする。

大膳　アイヤ、そりや成り申さぬ。すべて、科人の同類は元より、親類縁者に至るまで、一つに置かぬが天下の掟。

伊賀　イヤ、その儀は、よつく存じ罷りありつゝさりながら、たとへ我が子、親兄弟たりとも、詮議に容赦の致さぬは武士の習ひ。殊に血筋の者どもゆゑ、猶以て、ナウ、兵衞どの。

兵衞　如何にも、法を亂さぬ武士の役目。六波羅どのへ申し譯。キツと糺明いたして見せませう。

大膳　されば、如何やうに容赦なく糺明いたさるゝとも、萬一白狀せぬ時は、詮議が緩さと、お疑ひが立ち申さう……サア、そこを存じて身共が所存、この大膳が預かり、隨分いたはり……ナア。

ト薄雪にこなし。

サア、白狀を致させ申さう。

民部　イヤ、さうはなりますまい。

大膳　とはまた、なぜな。

民部　されはサ、左衞門は詮議も召されうが、薄雪姫は心のまゝ。

大膳　ヤア。

民部　サア、間は幾間隔つとも、忍び逢ふまいものでもない。某が存ずるには、左衞門は幸崎、また姫は園部と、兩人の子を兩家へ取替へ、詮議いたさせなば、双方の願ひも立つと申すもの。

大膳　すりや、兩家へ取替へ、詮議とな。

民部　さすれば、容赦の疑ひもなく、白狀さすれば面晴れの申し譯。なんと大膳どの、左樣ではござらぬか。

大膳　イカサマ、こりや尤もな事でござるわい。

民部　すりや、御批判はござらぬか。

大膳　如何にも。

民部　左衞門、薄雪、ちよつとそれへ。

ト床のメリヤスになり、民部、平舞臺の眞中、左右に薄雪、左衞門、側に寄る。

某が計らひを以て、兩人ともに、双方の親々へ、互ひに取替へ預くるも、私しならぬ上使の情。一木の連枝は、その木の切り口に形代を殘す。元へ返れば元の一木、その身の明りもとんと立つ……忘るゝな、程は雲井に隔つとも、空行く月の巡り逢ふまで……サア、必らずともに忘るゝな。

ト よろしく心入れあつて、また氣を替へ

御兩所、しかとお預け申した。

ト双方へ取替へ、引渡す事あつて、二重へ上がる。

〽情籠りし民部が計らひ、二人の父も心に感じ、忝け涙にくれければ、母上、姫に打向ひ

萩方　ヤア、そんなら、其方は園部どのゝ方へ行きやるかいなう……産まれ落つるよりこの方、片時母の手を離れぬ者、可哀や一人やる事ぞ。随分ともに云ひ譯して、めでたう、母に喜び顔を見せてたもひなう。

〽涙の限り、聲限り、嘆けば共に薄雪も、母に取りつき縋りつき、撞と伏してぞ泣き居たる、籬も一間をまろび出で、涙の隙より手を仕へ。

籬　兵衛さまへ一つのお願ひ。何卒なあたのお情にて、姫君の御介抱に、私しも共々、お連れなされて下さりませ。お慈悲、お情でござります。

〽手を合すれば。

兵衛　オヽ、それ程の事は苦しかるまじ。願ひに任せ、召し連れ参らう。

籬　エヽ、有り難うござりまする。

伊賀　イヤナニ兵衛どの、いま民部どのゝ御料簡にて、互ひの子供を取替へ、お預かり申したが、見事、こなた、姫の詮議をしめさるか。

兵衛　オヽ、サ、六波羅どのへの申し譯、キッと糺明いたさうか、御自分は又、手前が倅を。

伊賀　如何にも、詮議仕る。

兵衛　もし又、白状せぬ時は。

伊賀　その時こそは、水火の拷問。

兵衛　ヤア

伊賀　なか／＼容赦は致さぬが、また御自分には。

兵衛　ハテ、手前とても、姫を拷問。

伊賀　ヤア。

兵衛　其許にも。

伊賀　云ふにや及ぶ。

兵衛　すりや、お互ひに

伊賀　オヽ、云はして見せう。

兵衛　見事、こなたが。

伊賀　其許が

二人　おんでもない事。

〽表は色立つ兼々も、萎るゝ心を取り直し。

お役目、御苦勞。

民部　イザ、大膳どの。

〽云へど大膳、空嘯き、挨拶もなく目禮ばかり、引別れ

行く親子の嘆き、姫も園部も顏と顏、ヂツと見るのが暇
乞ひ、泣く／＼
ト皆々、よろしく氣味合ひあつて
〽館を出でゝ行く。
トこの見得よろしく、三重にて

幕

三幕目　園部屋敷三人笑ひの場

役名――園部兵衞、奥方、梅の方。園部左衞門。奴、妻平。腰元、籬。薄雪姫。刎川兵藏。幸崎奥方、萩の方。幸崎伊賀守。

本舞臺、三間の間、正面、金襖、いつもの通り、東西とも、大襖。上手の方、斜めに、漏斗飾りの障子屋體、この前に松の樹、これに注連繩を飾り、花道、よき所に枝折り門。すべて園部兵衞の屋敷、裏門の體。幕の內より、吳竹、楓、初霜、三人とも腰元の形にて、件の松の木に百度參りをして居る見得。

琴唄にて、よろしく幕開く
ト合ひ方になり、皆々、百度を打ちしまひ。

吳竹　ア、、嬉しや／＼、もうこれで、お百度の數も揃うた程に、ちつと休まうではないかいなう。

楓　ほんに、それがよからうわいなう。掛りや繋がるお主さまの御難儀、一日も早うお二人ともに、明りの立つやうに、そればつかりをお願ひ申して、このお百度。

初霜　さうとも／＼。シタガ、斯う云ふ願ひ立ては、妙見さまか、金比羅さまへ步みを運んで、とてもの次手に、よい殿御とお百度を打たうなら、その精力で、御願がきくであらうぞや。

吳竹　何をわつけもない。又そんな事があつたら、お二人のやうになるわいなア。

楓　シタガ、若殿左衞門さまと、奥に來てござる薄雪さまと、今度の御難儀、元はと云へば御存じない事。これがほんの災難とやら云ふもの。

初霜　サア、その災難も、早う申し譯の立つやうに、この松を天神さまと念じ、お百度打てよと奥樣のお指圖。

吳竹　今に、わたし等が一心で、世間ひろ／＼、お咎めのゆりるのは知れた事。

楓　そりや、さうありさうな事ぢやわいなう。

ト合ひ方になり、上手、障子屋臺より、籬、薄雪を伴ひ出て來る。これにて皆々、下へ下りる。

薄雪　オヽ、其方衆の心遣ひ、しをらしい願籠めのお百度。たとへこの身は死するとも、忘れは置かぬ、嬉しいぞや。

籬　お姬樣と云ひ、わたしまで、日毎のお世話。それさへあるに、お二人樣のお身の上まで、お案じなされてこのお百度、有り難う存じまする。

吳竹　これは又、籬どのゝお詞とも覺えぬ。あなたはお姬樣のお側勤め、どちらこちらの隔てはござりませぬ。

楓　お姬樣のお身を祈るも、矢ッ張り此方の若殿のお爲。

初霜　お禮は却つて迷惑に

三人　存じまする。

籬　ほんにマア、お主樣がお主樣なら、お前方まで深切なお心添へ。かね／＼承はれば、この松は天神さまへ御奉納なさらんと、左衞門さまがお手づから、注連をお張りなされたとの事。たゞ何事も、めでたう納まりませう程に、必らずキナ／＼思し召さぬがよろしうござりまする。

〽明日知らぬ、今日の命ぞ賴みなき、取分け園部兵衞の籬中、梅の方の物思ひ。

トこの時、奥より梅の方、裲襠衣裳にて出て來り

梅の　オヽ、姬、爰に居やつたかいなア。ほんに、氣の付かぬ、花結びか、續松でも勸めて、なぜ心を慰めてはたもらぬぞ。

籬　アレ、お聞き遊ばしましたか。奥樣のお呵り、間がな隙がな、お心添へ遊ばしまするに、なぜ冴え／＼とお心をお持ち遊ばしませぬぞ。折り／＼は又、お話しでもなさりまするが、却つて奥樣のお氣休めでござりますぞえ。

梅の　オヽ、それ／＼、其やうに案じてばかり居やる事はない。シタガ、事にこそよれ品もこそあれ、調伏の、謀叛のと、恐ろしい巧み事。なんの誓文、其方が知りやらうぞ。と、サア斯う云へば、どうやら我が子贔屓するやうなが、左衞門に限つて、そんな道ならぬ惡事を企みさうな心はあるまい。必らず苦にしやんな。

薄雪　もう何事も仰しやつて下さりまするな。お館へ參つて、日毎夜毎のお心遣ひ、餘りの事で、冥加の程が恐ろしい。道を申さば、自分こそお宮仕へも申す筈……それに却つて逆さまの世の中。萬に一つも云ひ譯立たぬに極

まつて、如何なる罪にあはうとても、この身一つに引受けて、左衛門さまのお名は出すまい。未練な最期はせまいぞと、心に覺悟を極めたれば、苦に持つ事はなけれども、どうぞ、たつた一目逢うて死にたい、お顔が見たうござりまするわいなア。

〽胸より涙、先立てば。

梅の　これに付けても、聞えぬは淸水の觀音さま、お目の先で起つた大難、左衛門夫婦の者は知らぬ事。そんじよ何所の者ぢやと、つい一口に仰しやつたら、この憂き目はあるまいもの。

〽恨むは佛、袂にも、かゝる涙の折柄に、園部兵衛、靜靜と立ち出で

ト兵衛、着附け羽織にて出で來り

兵衛　姫に密々の話しもあれば、腰元どもは、次へ立て。

三人　畏まりました。

ト合ひ方になり、三人、奧へ入る。

兵衛　オヽ、姫、昨夜より逢ひ申さぬが、何事もなくて、重疊々々。

薄雪　これはマア、母様と申し、あなた様までが、冥加に餘るお尋ね、有り難う存じまする。

兵衛　ナニサ／＼、嫁は子と云へば、親たる身で案じはまた百倍。併し、氣遣ひしやるな。この度のお咎めも、お身や伜でない事は、天道が明らか。それに付き、姫に一言尋ねたい。その仔細は、伜左衛門と夫婦になれば、兵衛とには嫁舅、その舅は即ち親も同然なりや、何事に依らず、身が云ふ事、よもや背きはせぬであらうなア。

薄雪　これは又、變つた事のお尋ね。我が子のやうに思し召し、これまでのおいたはり。たとへマア、逆さまな仰せでも、なんの背きはいたしませぬ。

兵衛　ムウ、その詞に相違ないか。さて、餘の儀でない。この程より、お身が落着きを、つく／＼案ずるに、お身や伜が仕業ではなく、斯やう／＼と訴へし、大膳が物臭しとは察すれども、これぞと申す證據なければ、手出しもならず。ウカ／＼日數を經るうち、調伏の御詮議嚴しく、六波羅どのゝ手に渡りては、如何なる責苦を受け、覺えなき身もやみ／＼と、責め殺されんも計られず。この頃、心にこの事ばかり、奧ともとつおいつ分別して、密かに爰を落す所存と一決した。

薄雪　エヽ。

ト薄雪、驚き、悧りの思ひ入れある。

兵衞　ハテサテ、何を驚ろく事が。コリヤ、籬、其方も、姫もろとも、早く用意を致してよからう。旅の調度も、兼ねて申し付け置いた……ヤア〳〵、妻平、はや參れ。

妻平　ハア、。

〽ハッと答へて杖草鞋、旅の調度を取り認め、はや支度して畏まる。

妻平　仰せ付けられましたる通り、旅の用意調ひましてござりまする。

梅の　姫、聞きやつたか。預ける方は一家一門多けれども、知行頂戴の家へはやられぬ。姿はさもしい奴なれど、心を見込んだ左衞門が、草履取らせたこの妻平、在所は大和當麻寺の近所ぢやげな。心安う、あれが在所にいつまでも。とは云ふものゝ近いうち、よい便り聞かせませう。早う爰を退いてたも　サ、妻平、籬、諸とも用意しや。

〽氣はせけど、しとやかに手を仕へ。

薄雪　末の末まで思し召して、落ちよとある有り難いそのお詞、仇疎かには存じませねど、左衞門さまに憂き目を見せ、私し一人助かつて、なんと長らへ居られませう。ならう事なら、わたしが父樣と談合なされ、左衞門さまも一緒に落しまして下さんせ。

ト縋るこなし。

梅の　これはしたり、如何に年端がゆかぬとて、愚かな事を云やるぞいなう。そもじを大切に世話やくも、可愛い左衞門が、いとしがる人ぢやによつての事。あれを殘して、なんの憂き目を見しよぞいなう。その案じは氣遣はずと用意しや。コレ、籬、何を其やうに思案顏、早う勸めて支度させぬか。

ト籬、妻平に急いで云ふ。籬、思ひ入れあつて

籬　イ、エ、さうは。

ト立ちかゝる。

梅の　さうとは、姫を連れて落ちぬ氣か。なぜ云付けを背くのぢや。

籬　ハッ、お氣を背くではなけれども、姫君のお心になつて御覽遊ばせ。お預かりの姫が逃げ隱れ致したら、お上の祟り、殿樣の下手人は知れた事。よしまた駈落ち致しましたと申して、お云ひ譯が立つからが、取逃がした越度にて、末程のお咎めは、あなた樣のお身にかゝるは必定。その辨まへのない殿樣ではなけれども、嫁は娘ぢやと思し召し、跡の難儀をおいとひなされぬお慈悲心、親御樣の道は立つとも、嫁と云はれて一日の御孝行、お

宮仕へも申さず、大それたお世話のその上に、又ぞろや、跡の御難儀になる事を、知つてなんと落ちられませう。お供せいと仰しやつても、もしこの事が御主人のお耳に入つて、よう落ちた、よう供したとは申されませぬ。矢ツ張り此まゝ差置かれ、姫がかねぐヽ所存の通り、生きるも死ぬるも左衞門さまと、御一緒の願ひを叶へて、お上げなされて下さりませ。

薄雪　オヽ、籬、よう云うてたもつた。お志しをもどくではなけれども、これはつかりは、お免されて下さりませ。

〽落つる氣色もなかくヽに、云ひ出しては奥方も、重ねて詞なかりけり、兵衞は聲を上げ。

兵衞　ヤア、女の際にツベコベと、理屈ばかり申すが、入らざる氣遣ひ。コリヤ、嫁を娘と思へども、舅を親と思はずして、申す詞を聞かぬからは、最早親子の縁を切り、七生までの勘當ぢやぞ。

梅の　ア、モシ、そのお腹立ちは御尤もながら、マアくヽ、お待ちなされて下さりませ。コレ、薄雪どの。

ト立ちかゝるを、兵衞思ひ入れあつて梅の方に呑み込ませる。

娘と思うて仰しやるを、否ぢやのなんのと云ふと、ソレまた父樣のお腹立ち。アレくヽ、あのお目を見や。あのやうに父樣が怖い顏して、おいで遊ばす程に、よう聞き分けて落ちてたも。それともたつて聞き分けなければ、わしもともぐヽ、他人にならうか。

ト薄雪姫思ひ入れあつて

薄雪　ハア、。

ト泣き落す。

兵衞　ほえる程悲しくば、分別して落ちる氣か。

薄雪　サア。

兵衞　籬、其方も勸めぬか。

籬　サア。

兵衞　サアとは、親子の縁切らするか。

梅の　そんなら落ちるか。

兩人　サアくヽくヽ。

兵衞　返答いたせ。ド、どうぢや。

〽おどしかくれば。

籬　成る程、お供いたしませう。

薄雪　ハイ、落ちまする程に、御機嫌直して、矢ツ張り元の娘ぢやと、仰しやつて下さりませ。

〽撞と伏して泣き居たる。

梅の　すりや、得心して落ちてたもるか。
薄雪　アイ。
兵衛　得心とあれば、早く支度させい。
梅の　サヽ、早う支度しや、支度しや。
〽とりどりに心付け、やうやう庭に下り立つて、歩むも足のうらわかき。
大事の姫を頼むは妻平、かねて籬と二人が仲、知らぬではなけれども、若い者のある習ひと、許し置いたも今日の幸ひ、夫婦の者、しつかりと預くるぞ。
ト妻平籬、嬉しき思ひ入れあつて
妻平　こは冥加ない奥樣のお詞。若旦那樣の奥樣をお預けなされ、籬どのと不義御赦免、女夫の者とはあんたる事。首と胴とは離れ離れになるとても、姫君樣に指もさゝせることつちやアござりませぬ。憚りながら大船に乘つたと思うてござりませ。
梅の　オヽ、落着きやつたら取りあへず、其まゝ無事の便りをしや。
薄雪　そんなら父上、母上樣。
籬　必らずともに、御機嫌よろしう。
ト籬、薄雪姫の身拵らへをして、妻平付いて門口へ出て
左樣なれば、これより直ぐに。
兵衛　コリヤ、娘、無事で居やれよ。
三人　おさらばでござりまする。
〽影見ゆるまで伸び上がり、見送る名殘り行く名殘り、心細さは撚り糸の、別れ別れと出でて行く。
ト時の鐘、送りになり、兵衛、梅の方、跡を見送り、思ひ付いて花道へ入る、兵衛、籬、薄雪姫の手を引き、妻平入れあつて梅の方、兵衛に向ひ
梅の　ナウ我が夫、お詞に隨ひ、姫は首尾よく落せしが、明日にもお上より御沙汰あらば、一人殘つた左衛門は、なんと致しませう。逃がさうにも落さうにも、人手にあれば、腕いてもあせつても思うたばかり、もし悲しい目を見ようかと、案じ過しがせらるゝわいなア。
〽云ふも涙に曇り聲、兵衛指折りて日を數へ、
兵衛　明日は辰の日、禁中のお德日、明後日は先君智覺院殿の御命日、この兩日は裁斷の氣遣ひなし。この間に伊賀守に出會ひ、姫が逃げたやら、此方から逃がしたやら、如何やうにも手段をめぐらし、對談の所いか程もあるべし。案じまい、歎くまい。

ト梅の方、愁ひのこなし。
〽と制する折から、當番の取次罷り出で。
ト花道よりバタ〳〵にて、袴侍ひ一人出て來り、花道にて
侍ひ　ハツ、申し上げます、幸崎伊賀守さまよりお使者參つて、お次に扣へ居りまする。如何計らひませうや。
兵衛　ムウ、それ氣遣はしい。これへと申せ。
侍ひ　ハツ。
ト引返して入る。
兵衛　さて〳〵、思ひ寄らざるお使者。コリヤ〳〵、其方も隱れて居て、口上の趣き、立聞きせられよ。茶の間の者どもへ、茶煙草盆の用意。早く〳〵。
梅の　ハ、アイ。
ト梅の方、合點の行かぬこなしあつて、奥へ入る。
〽待つ間程なく伊賀の守が使者、刎川兵藏、刀箱携へ出で來り。
ト鼓の調べになり、花道より兵藏、衣裳上下、大小にて、刀箱を抱へ出て來り、直ぐに本舞臺へ來て上手に住ひ
〽兵衛が前に手を仕へ。

刎川　主人申し越し候ふは、お預かりの左衛門どの御事、何とぞ申し譯も立ち、お命に別條なきやうと、明暮れ願ひしところ、今朝思ひ寄らず、影の御太刀に天下調伏の鑓を入れしは我が業なりと、明白の白状に依つて、即ち調伏の太刀を以て、只今首を打つ、その太刀の血の付きたるまゝ、持たせ上げし上は、急ぎ其方の姫も同罪遁がれず、この太刀を以て首をめさるべし。追ッつけ御貴宅へ左衛門どのゝ首を持參し、姫の首諸とも六波羅へ差上ぐべしとの、御事でござります。
〽聞いて大きに仰天し。
ト兵衛、愕りこなし。
〽しなしたりとばつかりに、泣くも泣かれずたゞおろおろ、如何にと見ゆる奥方も、保ちかねてぞ轉び出で、前後を分かず泣きたまふ。
ト奥より梅の方出て來り、兵衛と顏見合せ、泣き落す。
〽兵衛は心をしつかと定め。
兵衛　お使者立歸つて申されうは、御口上の趣き承り、遣はされし太刀、慥かに落手仕る。追ッつけ御出でと候へば、御返答は仕らず、姫が首打つて待ち申すと傳へられよ。

刎川　委細承知仕つてござる。最早お暇仕る。
兵衞　お使者大儀、
〽とありければ、使者もなく／＼歸りける。
　ト兵衞、こなしあつて、花道へ入る。
〽奥方涙をしやくり上げ。
梅の　さても／＼情なや、定まる過去の因果ぢやと、悲しい中に諦めて、料簡して見ても、恨めしいは姫の父御伊賀どの。罪も同じ罪、預かるも同じ親と親。此方は嫁を娘と思うて、影隱させ、命助けんと世話をやく。その日も變へず彼方では、首を切るとは、とり／＼の人心、よしや白狀したりとも、なぜ打消して聞捨てにはして下さらぬ。コレ、聟は子ぢやないかいの。エヽ、無得心な、むごたらしい。コレこの太刀のこれが、アヽ、左衞門が血かいなう。
　ト件の刀を引寄せ、血糊を見る事
アヽ、可哀や／＼なう。
〽あゝ可哀やとばかりにて、二目とも見もやらず、前後不覺に見えけるが、南無阿彌陀佛の聲もろとも。
　ト件の刀にて自害しようとする。
さうぢや。

〽既に自害と見えければ、兵衞驚ろき刀もぎとり。
兵衞　ヤア、死なうとはうろたへ者、子を殺された悲しみは其方ばつかりか。兵衞は嬉しからうかやい。現在伊賀守は子の敵、その上に又、姫の首打つて待てといふ憎い奴。よし／＼、面當てに追手をかけて、薄雪を目の前で搔き首。彼奴も一緒に、コレ、この太刀で。
〽相伴させんと刀を見。
　ト兵衞、刀をキッと見て
ムウ、これは左衞門が血、左衞門を切つた刀で薄雪も一緒に切る。科は同罪とは、よく云つた。
〽立派に云へどまたゝきの、間いやまさるばかりなり、折から知らす表の方、
　トこの時花道の揚げ幕にて
呼び　伊賀守さまお入り。
梅の　ナニ、伊賀守とや。
　ト立つを止め、これにて兵衞キッとなり
兵衞　ムウ、すりや幸崎の入來とな。コリヤ奥、御身これにて挨拶いたせ。恨みがましい卑怯な詞。必らずお云やるな。追手をかけて歸り次第、首討つて對面せん。
　ト立ち上がり

安政五年二月中村座上演　市川團之助の梅の方

六世市川團藏の伊賀守　澤村訥升の左衛門

泣き顔なぞして、夫に耻辱を取らすなよ。キッと申し渡したぞ。
〽叱りつけ、太刀引提げて入りにけり。
ト兵衛奥へ入る。
呼び　お入り。
〽案内につれて伊賀守、實に武士の奥深く、焼野の雉子、夜の鶴、屠所の羊の歩み兼ね、首桶抱へ座敷に通り。
ト伊賀守向うより出て内へ入り、梅の方と顔見合せ、上手へ通る。
伊賀　さて奥方、この程はお目にかゝらず、最前使者を以て申せし通り、致へなき次第、さぞお嘆き。兵衛どのには姫が首、打ち召されしか、それ聞きたし。
ト梅の方、黙つて居るゆゑ
コレサ、とかうのいらへもなく、奥方どうでござる。我れも姫が最期の體、未練にはなかりしか。承つて安堵いたしたい。なんとでござる。
〽氣をせく程、面憎さと悲しさと、不承々々にうなづくばかり、如何な返事もせざりけり。
ト梅の方、黙つて居るゆゑ、伊賀守、思ひ入れあつてムウ聞えた。左衛門を某が手にかけし欝憤、もの云ふもむやくしと思し召すか。尤も／＼。物申すまい。何もお尋ね申さぬ。
〽と手をこまぬいて脇目もふらず、グッとも云はねばすつとも云はず、膝を並べて座したるは、たゞ木像の如くなり。
ト兩人よろしく思ひ入れ。
〽折もこそあれ園部の左衛門、我が家の内も我れながら、我が身を忍ぶ頬冠り。
ト時の鐘、花道より左衛門、着流し大小頬冠りにて出て來り、
〽門の外面に彳みて、聲を細めて。
左衛　誰そ居らぬか。左衛門が密かに參りしと、母人に申してくれ。誰れも居らぬか。
ト枝折り門を伸び上がり、覗くこなし。
〽端々を、風が取次ぐ親子の縁、母は耳に聞きとつて。
ト梅の方、合點のゆかぬこなし。
梅の　ナニ、左衛門とや。
〽と立寄るを。
伊賀　コレ／＼奥方、お待ちなされ。左衛門は某が手にかけ、首はこの首桶に。なんの／＼、立歸り來るものぞ。

萬一見えたらば、それは狐狸、必らず寄せまい。それぞれ、參るまいとの契約を背きしは、人間ではあるまい。幽靈か。ヤア、左衞門の馬鹿幽靈、最期に伊賀が勸めし一句忘れしか。何に迷うて爰へ來た。成佛の道を忘れしか。娑婆に名殘が惜しいか。うろたへ幽靈、なくなれ、歸れ。

〽大音上げ、餘所に知らせば、打うなづき、折角來ながらすご〳〵と、詞も交さず顏も見ず、親にも永離三惡道、行くへも知らず出でて行く。

ト左衞門、これにて引返し、花道へ入る。

〽園部の兵衞、首桶ひんだかへ立出でて。

ト兵衞、奧より、首桶携さへ、靜々と出て來り、伊賀守を見て

兵衞　ヤア、伊賀どの、最前よりさぞお待兼ね。先刻の口上に仰せ越されし通り、やう〳〵只今支度いたした。

伊賀　ナニ、支度なされたとは、姫が首お打ちなされしか。

兵衞　お指圖でござるもの、打たいでか。

伊賀　ド、ドレ、その首お見せなされ。

兵衞　イヤ、先づ其許の御手にかけられし、悴左衞門が首から見たい。

伊賀　ハテ、異な事を辭讓する人。平に先づお見せなされ。

兵衞　イヽヤ、其許から。

ト双方より眞中へ首桶を出して

伊賀　イヤ、貴殿から。

兵衞　イザ。

伊賀　イザ。

兵衞　然らば、一緒に。

伊賀　見つ。

兵衞　見せう。

伊賀　オヽ、兎も角も仕らん。

〽二人の中に首桶ならべ、蓋引明くればこは如何に、互ひに一通入れたるばかり、兩方首はなかりけり、伊賀守につこと笑ひ。

ト双方呆れし思ひ入れ。

ヤレ、暫し、もしやと心苦しめしが、さては使ひの口上を覺り、娘を何方へか

ト云ふを押へ

兵衞　ア、コレ、この後は申さぬ事。其許の御心底の通り、現在たつた今、裏門まで。

伊賀　ア、コレ〳〵、その儀も云はぬ事、子を思ふ親心、

これ程割符が合ふものか。御恩は忘れぬ兵衞どの。
兵衞　伊賀どの、御禮申し上げる。
伊賀　イヤ、此方より。
兵衞　此方より。
〽イヤ、これは〳〵。
兩人　痛み入る。
伊賀　その首桶に入れられしは、預かり者を取逃がせし替り、親が一命召されよとの、願ひ書でござらうがの。
兵衞　如何にも、我が首を入れる爲のこの首桶、貴殿もさこそ。
伊賀　おんでもない事。斯くの通り。して〳〵出仕のお支度は。
兵衞　オヽ、これ御覽ぜよ。只今支度仕る。
〽片肌くつろげ胸押明け、兩肌ぐつと脱ぎければ、腹かき切つて底の口、しつかと卷いて引ツくゝり、肌着も朱に染みなせり。
ト兵衞肌を脱ぐと、下に腹帶入れてあり、好みの通りになる。
〽奥方驚ろき縋りつき。
梅の　ナウ、情ない、支度々々と、お上下でも召す事かと思へば、そりや支度ぢやない、死ぬのぢや。預かり人を取逃がして腹切らば、伊賀さまも又同じ腹。あなた一人が早まつて、逃げたらよいでツイ濟んだら、それこそお腹の切り損、死に損。
〽半分云はさず。
兵衞　ヤイ〳〵〳〵、默れ。假初めにも天下調伏といふ罪科、逃げたらよいで濟まうと思ふか。姫を逃がさんと思ふ抑々より、腹切らんとは覺悟の前。兵衞一人腹切つたりと思ふか。ヤイ、最前伊賀どのより送られし、影の太刀、左衞門が首を打ち、血の付いたるまゝ持たせやるとの口上。首討つたる太刀ならば、物打より鍔元までも、血が付くべきに、切尖に僅かの血。さては首討つたりとは僞はり、命を助け、代りに伊賀どのお腹を召されしとは、一目見てはや知つたり。お身もその太刀手に取りながら、その氣も付かで世迷ひ事。それ程理に暗うて、兵衞が女房と云はれうか。たはけ者め。
〽目に角立つれば。
伊賀　イヤ、さうでない、奥方の不審尤も。伊賀が支度も見せ申さん。
〽肩衣引のけ兩肌脫けば、同じくくる〳〵引卷いたり。

ト伊賀守、肌を脱ぐと、同じく腹の切り口を布にて巻いたる形よろしく
〽奥方いとゞ目もあかれず。
ト梅の方悔りして泣き沈む。
梅の　両方お心の合つた事、竹を割つて合せたやうなと申さうか。子ゆゑに命をお捨てなさるお前方は、恩愛もあり、慈悲もあり。
〽この母には何がある。
親といふ名はありながら、これ程も子に愛想なく、側に居ながら我が夫の、お腹召したも夢うつゝ、子には慈悲なく、夫婦の情は皆缺ける。後に殘つて子に逢うて、云ひ譯は何とせん。
〽夫子を思ひ身をかこち、心の限り口說き立て、取りつき縋り泣きければ、兵衞は淚押拭ひ。
ト梅の方、縋り泣き落す。兵衞、思ひ入れあつて
兵衞　さて〳〵二人を取替へ、預かつたその夜より、今日までの心苦さ。笑ひと云ふものと忘れた。伊賀どのもさこそあらん。
伊賀　心がゝりの子供は落す。斯樣に覺悟極めたる、只今の心安さ。

兵衞　六波羅どのへの出仕は、直ぐに六道の門出。
伊賀　イザ、喜びに一笑ひ、笑ふまいか。
ト梅の方、泣き伏して居る。
兵衞　それよからう。奥も笑やれ。イヤ、推參者、なに吠える事がある。夫の詞背くのか。
〽睨み付けられ叱られて、淚一緖に。
ト三人一緖に顏見合せ
ハヽヽヽヽ。
梅の　ホヽヽヽヽ。
伊賀　ハヽ。
三人　ウフハヽヽヽ。
ト三人淚を隱して笑ふ。
〽虎溪の三笑と名も高き、唐土の大笑ひ。
兵衞　それも三人。
伊賀　これも三人。
〽劣りはせぬと打笑ふ、兵衞心づき。
兵衞　幸崎どの、時刻が移る。
伊賀　イザ、御同道仕らうか。
〽と立上がれば、これなう暫しと引きとむるを。
兵衞　エヽ、未練者め。

〽叱りつけるを。

伊賀　ア、コレ、兵衛どの、さな荒けなくしたまふな。館を出づる折節は、身が女房もその通り。

トなだめろこなし。

〽共にしをるゝ袖の露、萩叢の影よりも、伊賀守の奥方まろび出で。

トこの時下手柴垣の影より萩の方、襠裲形にて走り出で

萩の　お跡を慕ひ先刻にから、垣越しに皆聞きました。兵衛さま、奥方樣、娘をお助け、忝ない。

梅の　サア、そのお禮は此方からも同じ事。奥様、何と思し召す。この味氣ないお姿を、知らぬ互ひの子が可愛さ。

萩の　せめて子供が世に出るまで

梅の　生きてござつて

兩人　下さりませ。

〽互ひに取り付き付かるゝも、詮方なく〳〵、時鳥。

トこれにて萩の方は伊賀守、お梅の方は兵衛に縋る。

〽共に血を吐く憂き思ひ、涙にむせんで立ちけるが、きつと目と目を見合せて、疵の痛みによろめく足も、弱る心も取り直し。

兵伊　イザ。

〽聲かけ突き放し、見返りもせぬ弓取りの、死ぬるを的に出でゝ行く、矢竹心ぞ。

ト兵衛伊賀守、梅の方、萩の方を突き放し、双方へ立別れる。梅の方、萩の方、これにて眞中に、兩人顔を見合せ泣き落す。兵衛、伊賀守は顔を見合せ、ホロリとこなし、突き袖をする。この仕組みよろしく、三重にて

幕

大詰　刀鍛冶正宗内の場

役名――刀鍛冶團九郎。下男吉介實ハ來太郎國俊。澁川藤馬。刀鍛冶五郎正宗。正宗娘、おれん。薄雪姫。腰元、籬。下女、お杉。

本舞臺三間の間、常足の二重、正面、のれん口、誂らへの神棚、押入れ。上の方、一間の障子屋體。いつもの所、門口。爰に職人三人、刀の新身を鑢にて

おろしてゐる。すべて大和の國、刀鍛冶正宗內の體。

職人三人立ちかゝり、テンツヽにて幕明く。

職一　コレ權七、われが親方の團九どのは、先刻にから見えぬが、何をして居るな。

職二　先刻ちつと細工場に見えたが、大方晝寢でもしてござるであらうわい。

職三　自分の怠けは取措いて、親仁さまを勘當するとは、あんまりな人ぢやないか。

職一　それよなう、子が親を勘當するとは、珍らしい事ぢや。

職三　イヤ、珍らしいといや、爰の內のお娘、鍛冶屋の娘には惜しいものだ。

職一　さうよ。あのお娘にならう事なら、目針を一本打込みたいなア。

職二　何を馬鹿な、お庭の櫻だ。

三人　ハヽヽヽヽ。

ト合ひ方になり、奧より下女お杉、丸盆に茶碗を載せ、持ち出て來り

すぎ　サア、皆さん、お茶をおあがり。

ト出す。

職一　アイ、お杉どん、構ひなさんな。

すぎ　サア、わたしも面倒だから、構ひたくないが、お前へ達も職人の端、手間取りだと思ひなさるかして、おれんさんが大事になさんすゆゑ、奉公人の悲しさ、仕方なしに茶でも汲んで來るのサ。

職一　おいてくれ。御親切は有難いな。併し、あゝ美しいお娘に大事にされるとは、嬉しいぢやないか。

職二　さうだ〳〵、なんでもお娘が、おいら達に氣があると見えて、大分氣が附くの。

すぎ　なんの氣があるの無いのと厚かましい。ちつと鏡でも見な。なんでお前方に氣があるものか。

職三　コレ、いくら氣をもんでも無駄だ。もう蟲が付いてゐるワ。

職二　オヽ、それ〳〵、アレ、內の吉介よ。

すぎ　コレサ、お前方はマア、きいた風な事をお云ひでない。吉介だの下男だのと、そんなに大風な事を云ふと、罰が當るよ。

職一　こりやアをかしい。吉介と云やア、なんで罰が當るのだ。

三人　それが聞きたい〳〵。

すぎ　知れた事サ。わたしといふおッこちがあるよ。
職三　なんだ、おッこちだ。その形でおッこちたら、直ぐによい〳〵だ。
すぎ　ナニ、よい〳〵だ。このガリ〳〵野郎め。
ト　お杉、職人三にしがみつく。
三人　このお多福め、飛んだ事をしやアがる。
ト　角兵衛獅子の鳴り物になり、四人ゴッチャに叩き合ふ。この時、組頭、羽織着流しにて出て來り、この中へ入り、よろしく制して
組頭　これはしたり、お前方もどうしたものだ。團九郎どのも留守といひ、殊に今日は親仁どのゝ詫び事ぢや。今にも組合の衆が打揃うて來たら、何とせうと思はつしやる。
すぎ　それでもわたしの事を、よい〳〵ぢやのなんのと、あの野郎どもが。
組頭　これはしたり、それが悪うござるわいの。職人衆を捕へて、野郎ぢやのなんのと、どうしたものぢや。イヤナニ、皆の衆も腹立つたでござらうが、わしが挨拶、マア〳〵、料簡して下され。
職三　イヤモ、お前さんの御挨拶、面目次第もござりませぬ。
職一　ほんの心安立のこの間違ひ、必らず悪く思つて下さりますなえ。
組頭　なんの悪く思ひませう。イヤ併し、そつちこつちするうち、團九郎どのも歸るであらう。
職三　成る程、團九郎どのゝ歸らぬうち、爰らを片附けて置きませう。
組頭　オヽ、さうぢや〳〵。親仁どのも留守なれば、よう氣を附けさつしやれ。
ト　捨ぜりふにて門口へ出て
イヤ、噂をすれば影とやら、團九郎どのが向うへ見えるワ。ドリヤ、親仁どのゝ迎ひに行かう。
ト　下手へ入る。
すぎ　ナニ、團九郎さんがお歸りぢやえ。
ト　向うを見て
ほんにお歸りぢや。こりや大變、あの大きなお目玉をくはぬうち、わたしが役目の茶釜の下でも焚きつけませうか。
ト　奥へ入る。
職一　ドリヤ、そんなら、わしらも奥へ行て

皆々　一服やらうか。
〽打連れ奥へ入りにけり、折からこの家の團九郎、しぶしぶ顔にて立歸る、續いて年寄五人組、打連れてこそ來りける。
ト皆々奥へ入る。花道より團九郎、五人組三人、附添ひ出て來り、花道にて
組一　コレ、團九郎どの、今日は是非とも親仁どのゝ詫。び
皆々　聞入れてもらひませう〳〵。
團九　アヽ、往來でやかましいわいの。用があらば内へござれ。
〽口々に、詫びるも耳に聞入れず、づッと通つて。
ト皆々舞臺へ來て、團九郎先に皆々内へ入る。
妹、いま歸つたぞよ。そして、見りやアおれが居ぬと、何奴も此奴も、のらばかりかわきやアがるな。
〽わめき散らして大あぐら。
コレ、吉介はどこへ行た、おれん〳〵。
ト呼ぶ。奥にて
れん　アイ〳〵、今それへ行くわいなア。
ト合ひ方になり、おれん出て來り
オヽ、兄さん、いま戻つてゞござんすか。皆さんも打揃うて、この間から父さんの事に就いて、いかいお世話でございまする。
組一　オヽ、サ、今日はなんでもわしらが寄つて、おッつけるつもりぢや。
皆々　マア〳〵、さう思うてゐやしやれや。
トこの時、下手より組頭出て、門口へ來て
組頭　オヽ、皆の衆も揃うてか。最前からこちの親仁どのも、わしらが内に待つてぢや。ちよつと爰へ呼んで來ませう。オイ、五郎兵衞どの〳〵。
ト呼ぶ、下手にて
正宗　ハイ〳〵、只今それへ參りまする。
ト門口へ來る。皆々見て
皆々　サア〳〵、此方へ入らつしやれ〳〵。
〽見るより娘は駈け寄つて。
れん　オヽ、父さん、ようマア戻つて下さんした。御無事な顔見て落着いた。どうぞ皆さん、よいやうに、詫び事なされて下さりませ。
〽取付き縋り泣き居たる。
組頭　オヽ、サ〳〵、斯うわしらが掛るからは、必らず氣遣ひさつしやるな。

組一　コレ、團九郎どの、道々も云ふ通り、子が親を勘當するは、どうか勝手が違うて仕憎うござるて。

組頭　なれども、餘り見る目が氣の毒ゆゑ、此やうに云ひ合せて、押掛つての詫び事でござるわいの。

組二　それ〳〵、親仁どのも、だん〳〵しをれたからは、子の慈悲を思ひ知られたでござらうわいの。

組三　何事もこれまでの事は、料簡さつしやれて

組一　マア、今度は我れ〳〵に免じて、勘當免して

皆々　やらつしやりませいなう。

團九　捨て置いて下され。大抵や大方で、根性の直る親仁ではござらぬ。マア、たはけのせいらつ、聞いて下され。

ト合ひ方になり

マア、知つての通り正宗といつては、隱れもない刀鍛冶、一腰打つてしたゝかな金になる、結構な手を持ちながら細工嫌ひ、これがたはけの第一番。たま〳〵刀を打ては、内證で金をくすね、六十の蓆破りから傾城狂ひ。さういふ悪い親を持つた、子の身にもなつて見さつしやれ。その上にまだ、十筋の白髪を床で日髪ぢや。おれが常々白い齒を見せいでさへ、齒磨きのなんの彼のと、洒落くさい。どうでまだ、二三十年橙の數を重ねずば、あの根性は直るまい。さて〳〵、子に世話を燒かす不孝親仁ぢやわえ。

〽數へ立つる憎て口、正宗たまらず。

ト これにて正宗前へ出て

正宗　ヤイ、悴め、親のせりふをかい取つて、あんまり物云ふな。自體、おのれを勘當せうと思うたに、へゝそが強さに勘當されて無念なわい。皆の衆も聞いて下され。おれが體でおれが刀鍛へて、おれが金取つて、おれが遣はうが、傾城買はうが、なんの構ふ事があらう。勘當免されいでも大事ないわい。

〽拳を握り腹立ち涙。

團九　アレ、見さつしやれ、皆の衆が世話燒いて詫び事なかばに、もうこの通りのやんちやん。なか〳〵あれでは直らぬわいの。

組一　成る程これでは團九どのが、腹立てしやるも、皆尤もでござるわいの。

組頭　コレ、親仁どの、嗜なまつしやれ。マア、親の身として子に口答へするといふは、惡うござるわいの。

組二　畢竟、こりや親子の仲の心安立てが、餘つての出損なひでござらうわいの。

組三　さうぢや〳〵。この通り皆、打揃つての詫び事ぢや
によつて、マア今度の所は
皆々　料簡さつしやれや。
團九　サア、指が汚ないとて、切つても捨てられず、性根
を直して細工を精出す所存ならば、何れもの詞は背かぬ。
組一　でござるかな。そりや忝ない。コレ、五郎兵衛どの、
息子どのゝ云ふこと背いては、詫びしたこちとらが濟ま
ぬぞや、隨分ともに梶を取らつしやれ。
組頭　先づは團九郎どの、早速得心して下されて、詫びに
掛つたこちとらまでも、一分が立つといふものでござる
わいの。
組一　コレ、親仁どの、必らず夜歩きせまいぞや。そして、
持薬を呑むといふて、鰻や玉子はよさつしやれ。
組二　兎角息子どのゝいかい世話。アヽ、これを思へば世
の中に、親は三界の首枷ぢやなア。
皆々　アハヽヽヽ。
組頭　時に、詫び事も早速濟んだれば
皆々　オヽ、さうぢや、わしらもお暇申しませう。
れん　これは何かと皆さん、御苦勞さま、有り難う存じま
する。

皆々　なんのお禮に及びませう。
組一　そんなら其うち
皆々　逢ひませう。
れん　ようお出でなされました。
皆々　サア、行きませう。
〽互ひにおいそれそこ〳〵に、打連れてこそ歸りける。
　トてんつゝになり、皆々花道へ入る。
〽團九郎納戸より、刀箱ひんだかへ立出でて、
　ト團九郎立上がり、押入れの内より刀箱を出し來て
團九　コレ、親仁どの、こなたは仕合せ者ぢやぞえ。今ち
よつと勘當ゆるす筈はなけれども、鍛冶の秘密口傳刀の
湯加減まで、我が子に教へぬ死太い根性から、死ぬるま
で教へはせまいと、おれも分別して置いた。その教へぬ
が、わごりよの果報、急に打たす刀があつて、手詰めに
なつて免した勘當。その刀とて外ではない。先達て秋月
大膳どのゝ、取次ぎせられし六波羅どのゝ御用の刀、こ
れが即ち園部の左衛門が、國行に鑢目を入れさせ、清水
へ奉納したる、調伏の影の太刀。この刀を形にして、急
に打たせいと、六波羅どのより直々の仰せ。これ見られ
よ。

〽差出せば蓋押開き、刀を取出し、はじき元よりずつと鐔目とくと見て。

　トこの文句のうち、正宗、箱の内より刀を出し、よくよく見て

正宗　フウ、成る程、來國行が打ちたる影の太刀、燒刃鐵色、天晴れ見事。この正宗もこれ程には及ばぬ及ばぬ。及ばぬながら刀鍛冶は、勵みある職なれば、隨分違はずこの通りに鍛へ打たん。

團九　オヽ、それならば、隨分云はいでも六波羅どのより、將軍家に獻上の刀なれば、疎かにはなるまい。ヤイ〳〵吉介、云ひ付けた細工所の掃除はよいか。傾城狂ひに身の穢れた親仁、風呂が涌いたら、さつぱりと淸めさせい。ア、結構な親仁に掛つて、どつかりと氣草臥れ。ドレ、トロ〳〵とやらかさうか。

〽あたり蹴ちらし入りにける。

　ト團九郎こなしあつて奥へ入る。

〽妹は父に取つき、縋りつき。

れん　先刻にから、さぞ腹が立つたであらう。今度に限らず常々から、知れてある惡黨な兄さん、お前も因果な子を持つたと思ひ諦らめ、どんな憎て口云はれうとも、堪忍して内より外、どつこへも行て下さりますなえ。

〽手を合すれば。

正宗　オヽ、殊勝な、よう云うた。シタガ、必らず氣遣ひすな。其方が孝行にしてくれるのより、アヽ、惡者めが可愛いわい。

〽淚ぐめば。

れん　アヽ、嬉しや、其お心も聞いたれば、何も案じる事はない。風呂の涌くにも間があらう。その間に奥でお腰など撫つて上げうわいなア。

正宗　オヽ、そんなら娘、久しぶりで打ちくつろぎ、話しせうかい。

れん　サア、ござんせいなア。

〽連れて奥にぞ入りにける。

　トおれん正宗、思ひ入れあつて、奥へ入る。

〽折ふし表に人聲して、當所の代官澁川藤馬、案内もなく入り來り。

　ト時の太鼓になり、花道より藤馬、中間附添ひて直ぐに門口へ來て

藤馬　團九郎は宿に居るか。團九郎〳〵。

　ト呼ぶ、奥にて

團九　ハイ〳〵、どなたでござります。
　ト云ひながら出て、藤馬を見て
これは〳〵、藤馬さま、御用あらばお召寄せなされいで、御自身のお出で、恐れ入り奉りまする。
藤馬　イヤナニ團九郎、今日わざ〳〵參りしは別儀でない。園部薄雪この邊に隱れ居る由、大膳どのお聞きなされ、それゆゑ毎日詮議に廻る。其方には刀の儀に就いて用事あり、少しく早く邸へ來れ。
團九　左樣なら、刀の御用につきまして、お邸のお召し。畏まつてござりまする。
藤馬　身共は詮議の筋もあれば、暫時休息いたし、後より參る程に、其方は家來と同道しやれ。コリヤ〳〵宅介、團九郎を邸へ案内しやれ。
家來　畏まりました。
團九　左樣ござらば、藤馬さま。
藤馬　片時も早く。
團九　ドリヤ、行て參りませう。
〽羽織引きかけ出て行く。
　ト中間先に團九郎、花道へ入る。藤馬思ひ入れあつて
藤馬　コリヤ、誰れか茶を一つくれぬか。
　ト手を打つ。奥にて
すぎ　ハイ〳〵。
　ト茶を汲んで持ち出て來り
これは、どなたかと存じましたら、藤馬さま、よう入らつしやりました。
　ト茶を出す、藤馬受取る。
藤馬　イヤ、お杉か。いつも〳〵美しい事ぢやなア。ア、、氣の惡い事だ。
すぎ　また藤馬さまの御冗談ばッかり。
藤馬　冗談ばつかり毛十六、ハ、、、、。イヤ、その十六七が可愛らしい。ア、、お娘のおれんは内かな。
すぎ　ハイ、誰か奥でござりました。
藤馬　それは丁度
すぎ　エ。
藤馬　サア、じやう〳〵參つて世話になるゆゑ、奥へ行てお娘に禮を申さう。お杉、案内しやれ。
すぎ　それは御丁寧な。サア、斯うお出でなされませ。
〽下女が案内に澁川は、衣紋つくろひに入りにける。
　トこなしあつて奥へ入る。知らせにて道具廻る。

本舞臺、正面、二間中足の二重。庇、本緣付き。向う腰張りの茶壁、暖簾口。上手、建仁寺垣。下手・誂らへの風呂場。正面開き戸。好みの通りに飾り付け、この脇柴垣、いつもの所、枝折り戸よろしく道具納まる。

〽同じ下世話の奉公も、弟子と久三を掛持ちに、一荷に荷ふ吉介が、濡れより濡るゝ濡れ仕事。

ト此うち上手より、吉介、水の手桶を荷ひ出で、思ひ入れあつて

吉介　ヤレ〳〵、忙がしや〳〵。細工所の掃除せいと云ふかと思へば、ソレ、風呂へ水入れい、焚付けいと、相槌打つより水を汲んだり、これがほんの、火水の責であらうわいの。

〽呟やき下ろす荷ひたご、水も洩らさぬ親と子の、話ししまうて娘のおれん、心しよき〳〵いそ〳〵と、浴衣片手に。

ト此うち吉介、下手の風呂へ水を入れる事よろしく、奥よりおれん、浴衣を持ち出て來り

れん　そこに居やるは、吉介ぢやないか。

吉介　ほんに、あなたはおれんさま。

れん　其方は爰に何してぢやえ。

吉介　いま風呂へ水を入れるのでござりまする。

れん　アノ、用がある程に、ちよつと來てたも。

ト吉介の袖を引く。

吉介　アヽモシ、着物が濡れまする。

れん　濡れても大事ない。コレ吉介。

吉介　なんでもござりまする。

トなまめきたる合ひ方になり

れん　マア喜んでたも。兄さんの機嫌も直り、父さんもお歸りなされたからは、此やうなめでたい、嬉しい事はない。

吉介　イヤモ、わたしとても大旦那樣がお歸りなされ、此やうなめでたい、嬉しい事はござりませぬ。

れん　サア、めでたい嬉しい返事を、わしに聞かしてたもいなう。

吉介　ナニ、嬉しい返事とな。

トおれん思ひ入れあつて

れん　コレ、こちの吉介。

吉介　エヽ、なんでござります。

ト眞面目に云ふ。おれんこなしあつて

れん　なんでとは、そりや聞えぬ。わしが心を常々から知つて居ながら、其やうに隔てる心は、胴慾ぢやわいなう。

吉介　また其やうな事仰しやりまする。私しめは奉公の身の上、あなたはこの家のお娘御。其うち相應な御緣もあらば、嫁にお出でなさるであらうに。

れん　エヽ、また其やうな事を云うて、人をぢらすが殿御の癖かなア。

吉介　アヽ、勿體ない、親方の娘御、願うてもない仕合せ。お前樣がそれまでに思うて下さりますれば、ハテ、私しとても人の端、お前の詞は背きませぬ。

れん　そりや、眞實。

吉介　誓文、相槌打たぬ法もあれ。

れん　その誓文がほんなれば、早う女夫になつてたもいなう。

吉介　それは又あんまり早急過ぎる。マア、下地をとくと繕らうて。

れん　イヤ／＼、繕らふ事も何にもない。見やる通り兄樣のあの氣では、永う父さんも一つには置かれぬ。三人一緖に取つて退いて、一日なりとも早う樂しみがさしましたい。それぢやによつて、どうぞ女夫になる思案を

吉介　急にせいと仰しやるのか。そりや私しも合點なれども、内方へ弟子奉公に來て、半季そこらで、鎚の打ちやう、鑢の擂りやうは、大槪覺えましたれども、肝心の燒刃の湯加減、熱いか溫いか知る事ならす、それではどうも正宗さまを、養ひませう當がござりませぬ。というて父御樣に仕事させましては、女夫が養はるゝも同然、爰が相談、どうぞお前の云ひなしで、親旦那より大事の湯加減、お傳へなされて下さらば、誓文その時は、物の見事に養ひまする。この分別はどうでござりまする。

〽わりなく語るに打うなづき。

れん　さればいの、我が子でも心を見立てぬうちは、鍛冶の道は傳へぬと、兄樣にさへ敎へなされぬ事なれば、どうあらうやら。其方はわしの聟なら子も同然。ツイお敎へなされるであらう。いつぞは父さんの機嫌を見て云ふわいなう。

吉介　ハテ、それさへ叶ふ事なれば、なんの見捨てゝよいものでござりませう。

れん　その詞に違はずば、今日の御用が濟んだ上、いつぞ打明け、父樣に。

吉介　どうぞ首尾よう、この事を

れん　わしが心も打明けて。
吉介　必らずともに、この身の願ひを。
れん　氣遣ひしやんな。今に、其方と。
吉介　變らぬ夫婦の、おれんさま。
れん　アノ、こちの人。
吉介　女房ども。
れん　アイ……サア、飯あがらんかえ。
　ト屋體へ膳を出す。この上へ、胡椒の粉の竹の筒、載せあり、吉介、捨ぜりふにて屋體へ行て
吉介　ハテ、こりや尊奈。お前の心が、この尊奈で、分りましたわいの。
れん　そりや又、なんど。
吉介　あちらへぬらり、こちらへぬらり、とするゆゑに。
れん　エヽ、憎い口ぢやわいなア。
　ト捨ぜりふにて、吉介、飯を食ふ事よろしく、お杉出て來て
すぎ　おれんさん……オヽ、おれんさま、爰にお出でかいなア。旦那樣が、お風呂が沸いたら、あんたを入れませいと仰しやる。サア、早うお出でなさりませ。
れん　オヽ、おすぎ、よい所へ來てたもつた。マア、聞いてたも。あの吉介が、この身に覺えもない事云ふゆゑ、腹が立つてならぬわいなア。
すぎ　サア、なんぞ無理な事云うたら、お前も負けぬやう、云うておやりなさりませ。
れん　サア、云はうと思へど、ねッから云へぬゆゑ、これで、斯う叩いたわいなア。
　ト持つたる竹筒を、おすぎへ振り掛けると
すぎ　ハア、くつさめ……そりや、よう叩いて、おやりなさりましたな。ハア、くつさめ。
吉介　おすぎどん、ちよつと來ておくれ〳〵。
　ト下手へ引ッ張り
　お前も知つての通り、おれんさまとわしとは、並大抵の仲ぢやないぞえ。
すぎ　オヽ、その通り。
　トこれより捨ぜりふにて、兩方よりお杉を引ッ張り、
　トヾ
　アヽ、待つていなア〳〵……兩方から、其やうにしられると、このお杉が皺くちやになるわいなア。サア〳〵、おれんさま、旦那樣が呼んでぢや。奥へお出でなさりませ。

れん　それでも、わたしや。
すぎ　ハテマア、お出でなさりませいなア。
　ト唄になり、無理に引ッ張り、入る。
吉介　モシ、おれんさま、大事なくば、わたしもそこへ參りませうか……モシ、おれんさま……返答のないは、エエ腹の立つ。いつそ、あの美しい顏へ、この手拭をまろめて。
　ト手拭を持つて、振り上げる。
〽振り上げる一間の內、ヌツと出でたる親正宗。
　ト屋體より、正宗、浴衣の形にて出て來る。
ヤア、あなたは。
〽ハツと驚ろき敗亡し、振り上げし手拭も、手持ち無沙汰に見えにける。
正宗　オヽ吉介、風呂は沸いたか。
吉介　ハイ、最前から焚いて居りまする。もう、かれこれ沸きましたでござりませう。
〽詞の內より正宗は、湯殿の口に差寄つて。
正宗　ドレ。
　ト風呂へ手を入れて
これがなんの沸いてあるぞ。ぬるうて、入らるゝものか。もそつと焚け〳〵。
吉介　ハイ〳〵、畏まりましてござりまする。
〽ハツと心得差しくべる、節木作りの堅親仁、浴衣ひんまき、風呂の敷居に腰打掛け。
正宗　それではいかぬ。まだ〳〵焚け。サア、早う焚け早う焚け。
〽年寄りの氣のいらくらと。
オヽ寒。こりや風呂の戶が開けてある。締めて置かぬかい。
吉介　ハイ〳〵。
〽何心なく戶を締める、その手を取つて。
正宗　ても、其方が手は冷たい手ぢや。このマア冷めたい手で、背中を流されたら、ゾツとするであらう。あの風呂の焚き場で、あぶつて來い。
吉介　ハイ〳〵。
　トまた手をあぶりながら、風呂の下を焚き付けて居る。
正宗　ドレ〳〵、もう沸いたであらう。
〽沸きかへる湯に手を差込み。
おゝ、これでよい。コリヤ、吉介、其方がその手を、ち

吉介　つと貸せ。
吉介　ハイ〳〵。
ト側へ來るを、右の手を持ち、こなしあつて
正宗　オヽ、手もぬくもつた。これでよい〳〵……コリヤ、吉介、おのれも、重ねて風呂を焚くとも、この入り加減、よう覺えいよ。
〽吉介が腕首捕り、湯船へグツと突ッ込み。
なんと、正宗が秘密の湯加減、〳〵と覺えたか。
吉介　エヽ……なんと仰しやる。
正宗　イヤサア、この風呂の湯加減、手に覺えずと、とつくりと心に覺え、再び鍛冶の名を上げられよ、來太郎國俊。
〽突き放せば、仰天し。
吉介　ムウ、さては風呂の湯加減が、正宗どのゝ刀の湯加減とな。
正宗　オヽ。
吉介　フム、ドレ。
〽すんと立つて吉介は、弓手に探る湯の加減。
正宗　合點がいか。
吉介　ハヽア

ト　こなし。正宗、側にある手桶の水を、手早く風呂へ打明け、戸口をピッシャリ締めて、思ひ入れ。
〽ハッとばかりに呆れ果て、暫し詞もなかりしが、國俊、詞を改め、
ハアヽ、この上は、包み隱すに及ばず、如何にも御推量の通り、某ことは來國行が倅、國俊と申す者。若氣の至り家業に疎く、傾城狂ひに身を持ち崩し、勘當受けたる其うちに、何者の仕業にや、父を討たれしその悲しさ。先非を悔いても返らぬ身の上。何卒、刀鍛冶の祕密を知り、親の家名を立つるのが、せめて不孝の罪亡ぼしと、この家に便り、下男の奉公。計らず今日、大切なる家の祕密。傳へ下さる正宗どの、御所存と云ひ、我れを來太郎國俊と、御存じありし、その仔細は。
〽尋ねに、正宗、膝立て直し。
正宗　ハテ、愚かな事を云はつしやるわい。
ト床のメリヤスになり
性は道に依つて賢しとやら、こなたの身の上、また、國行が死にやつた事も、おりや、よう知つて居るわいなう。折節、こなたが刀鍛冶の奉公望むと云ひ、器量、骨柄、天晴れよい男ぢやに、なぜ職人に奉公する事ぞと、見れ

ば見る程、幼な顔に見覺えのある來太郎國俊。さては我が家に便つて、刀鍛冶の祕密を知り、絶えたる來の家を取立つる心よな。ア、、若いに似合はぬ奇特なと、我が子の悪黨者に引き比べ、有やうは志しを感ぜしが、心を感じたばかりでは、家業の大事は教へられねど、元この正宗は、其方の祖父、來國吉の弟子、幼少より舊功せしゆゑ、我が子の如く不便を掛けられ、一子相傳の祕密を、殘らず我れに教へられしが、子よりも外へ傳へまじと、神文まで書きたれども。

〽風呂の湯加減、教へまじと、誓紙も書かねば、誓ひも立てず、今日只今、不思議にも、師匠の孫に廻り合ひ、風呂の湯加減教ゆるも、師匠の恩を報ぜん爲。殊に、我が娘との樣子も聞けば、まんざら他人のやうにもなし。必らず、この事、兄の悪者に、悟られぬやう、合點か。

〽聞くに嬉しく、國俊は、飛び立つばかり、手を仕へ。

吉介　チエ、、忝ない正宗どの。この上は、再び來の家名を起し、冥途の父に御勘當、差赦さるゝも、偏へに正宗どのゝ御情……ハア、有り難う存じまする。

〽大地に頭を摺り付け／＼、忝涙の折柄に、一間の內より高呼ばゝり。

團九　親仁どの／＼、今日中に刀を打つて、六波羅どのへ差上げよと、代官所より嚴しい云ひ附け、片時も油斷はなるまいぞや。

〽急けども急かぬ名人氣質。

正宗　こんな事もあらんかと、かね／＼用意したる金床下ろし、燒刃を渡すまでの事。

吉介　教へを受けし上からは、心を籠めて、合ひ槌の

正宗　打つも鍛ふも、心一つ。

吉介　何から何まで、正宗どの……ではない、旦那樣。

正宗　オ、、おれも靜かに裝束せう。いつもの通り、用意せい。

〽打連つれてこそ。

ト兩人、よろしくこなし、これにて幕。ツナギ。

本舞臺、三間の間、平舞臺、一面の板羽目、左右とも板戶、眞中よき所に鞴を直し、鍛冶細工道具一式、正面に誂らへの注連を張り廻しあり、よろしく幕明く。

〽細工場に注進引き渡し、弟子と息子を右左、中央には

五郎兵衞正宗。

ト誂らへの鳴り物になり、眞中に正宗、侍ひ烏帽子、素袍の形、金床に刀を載せ、鑿を持ち、上手に團九郎、下の方に國俊、同じく、附け烏帽子、素袍の形、長き柄の槌を持ちて扣へ居る。この見得よろしく、眞中へセリ上がる。

〽素袍の袖も淸らかに、淨めの火打きりかけ〳〵、鞴に寄り金床に刀を据ゑ、天地四方に禮拜し。

ト三人よろしくこなし、ノットになり

正宗　仰ぎ願はくば鍛冶の氏神、天目一箇の神慮に叶ひ、我れ又今打つ刀にて、惡魔降伏なし給へ。

〽心中に祈念すれば、二人は槌をとり〳〵に、てう〳〵てん〳〵陰陽の、數に合はしててん〳〵からり、てんてん天下に稀代の名鍛冶、祕密を凝らし打ち納む。

トこの時鳴り物にて、刀を打つ事あつて

〽既に燒刃の湯加減と、刀を湯槽に差入るれば、夕紅の日を海に注ぐが如く、湯煙り四方に立ち登り、物の黑白も見えざれば。

ト正宗、件の刀を水槽の中へ入れる。これにてパッと湯煙り立つ。

團九　正宗が家に傳はる燒刃の湯加減、覺えるは今この時。〆めた。

〽槌投げ捨てゝ團九郎、燒刃の湯槽に手を差込み、湯加減探つて見る所を、鍛へ下ろし振りあげて、右手の小腕打落せば、うんとのツけに反り返り、苦しむ聲に妹が、驚ろき一間を走り出て。

ト此うち團九郎、槽へ手を差入れる。正宗、恟りなし、手早く鍛へ下ろしにて腕を切る。國俊、思ひ入れ。奧よりおれん走り出て

れん　ヤ、兄さまか、いとしや。如何に仕落があればとて、あんまりむごい。モシ、父樣。

〽見れば見かはす父の怒りの顏に、國俊も詞なく、手負ひをいたはるばかりなり、深手に屈せぬ我武者もの。

團九　コリヤ親仁、この團九郎に何科あつて、此やうに切りやつたのだ。コレ、世間の親はナ、子に家業を讓りたがるに、貴樣は我が子に刀の湯加減知らすまいとて、この腕を切りやつたか。おれが爲には地獄の獄卒、もうこの上は、子でも何でもないワ。

〽むしやぶり付くを引ツ外し、髻を摑んで摺り付け〳〵。

正宗　ヤイ悴め、何の科で切つたと、ようも〳〵吐かした

な。おのれは常々澁川藤馬と狀通なし、合點がゆかぬと思ひしが、大膳が惡事に與し、園部幸崎の兩家を潰し、國行が死骸も、おのれが業であらうがな。

團九　親仁、そりや何を云やる。園部左衛門が國行に調伏の鑢目を入れさせ、清水へ奉納したは、誰れ知らぬものはない。これ程に慥かな事を、おれが仕業とは、何を證據に。

正宗　イヤ〳〵、吐かし居るな。云ふに及ばぬ事なれども、來の家では四筋にて横鑢。最前國行が打つたる預かりの太刀を見れば、三筋にて正宗が流れの筋違鑢。右を上げ左を下げて、逆にするが調伏の鑢目。我が家の祕密、外に誰れ知るものがあらうか。大膳に頼まれて、汝が業に極まつた。なんとそれでもあらがふか。

ト思ひ入れあつて

その惡い事した其ほてぶしを、切つたは誤まりおやあるまいがな。惡い事は覺え易いもの、どうした事にか調伏の鑢目覺えて、大それた事仕出す奴に、祕密の湯加減教へなば、まだこの上に大きい惡事に與し、腕切るばかりか、コレ、その首が落ちやうも知れぬ。

〽親はそれが悲しさに、手を切つたは情ぞや。

平常おのれが根性の、直らぬを見拔いたゆゑ、六十に餘つて傾城買ひの眞似をして、金銀を貯へたも、この妹が可愛ゆさ。

〽子がなうて泣く者ないと、下世話に云ふも實に誠。屈竟な子があるゆゑに、後生一遍、願ひはせず、涙ばつかり溢すわやい。

〽嘆けば娘も共涙、覺えある罪科に、團九郎も身を悔み、誤まり入りたる風情なり、始終を聞くより國俊も感じ入り。

國俊　御親父の心底驚ろき入る。如何に我が子の爲なればとて、切りも切つたり鍛へたり、鍛へ下ろしでこれ程に、切られしは銘作、業といひ心といひ、また類なき正宗どの、只今の物語りにて、父が敵も、そんならいよ〳〵。

正宗　オヽ、大膳が所爲といひながら、其方が爲には忰めも親の敵同然、爰が一つの國俊どのへ頼み。親の氣といふものは、惡い子ほど猶不便な。子の手を切るは一命を取る程悲しい。その手を切つたは、親子の手を切つたも同然。親子の手を切るからは、この團九郎とその妹は赤の他人、敵の妹を女房に持つたと云はるゝ事もあるまい。子の手を切つた代りに、娘と仲よくいつまでも、夫婦の手

を、必らず〳〵切つて下さるな。兄めも疵本腹して、根性も直つたら、おれが目を塞ぐとも、其方がおれになり代り、庖丁でも打たして、てんぽう正宗となりとも、どうぞ云はして下され、國俊どの。

〽老の繰り言取交せて、義強き親仁も保ち兼ね、わつとばかりに泣く涙、落ちて流れて鞴場の、炭火も消ゆるかばりなり。

ト皆々よろしく愁ひの思ひ入れ。

〽かゝる折から表の方、姫を伴ひ腰元籬、息を切つてぞ走りつく。

トばた〳〵にて花道より、籬、薄雪姫の手を取り出て來り、直ぐに門口へ出て來て

籬　卒爾ながら、ちと御無心が申したい。御覽の通り女子連れの者。道にて惡者に出合ひ、甚だ難儀いたす者。暫らく預かつて隱して下さらば、有り難う存じまする。

トこれにて國俊こなしあつて

國俊　それは定めて御難澁。ドレ〳〵。

ト門口へ來て、籬と顏見合せ

慥か其方は、籬どの。

籬　オヽ、さういふお前は國俊さま。爰にはどうして。

國俊　さうして、それにござるは、姫君樣ではござりませぬか。

ト正宗見て

正宗　誠に御息女、薄雪さま。

國俊　何は兎もあれ、先づ〳〵これへ。

〽上座へこそは請じける。

ト籬、薄雪姫を上手へ通し、こなしあつて

申すも便なき事ながら、兩家のお館騷動より、かゝる御難儀。我が父までも討たれたる、お家へ仇なす大惡人、それと聞きしはたつた今、正宗どのに承はる。

團九　イヤ、その仔細は團九郎が、眞直に申し上げん。

〽疵痛みせぬ强氣者、流るゝ血汐おし拭ひ〳〵、

ト此うち團九郎の腕の疵を、おれん介抱して、手拭にてクル〳〵卷き、思ひ入れあつて前へ出て

團九　定めてお見知りもあらん、拙者は正宗が忰團九郎。當春六波羅へ召されし時、非道とは知りながら、慾に耽り、大膳が惡事に與し。

〽御兩所を科に取つて落さん爲、影の刀に調伏の鑢目を入れさせ。

その場にて人知れず、國行を討つたるも、大膳が仕業。

〽この事他言いたさじと。誓文を立つたれども、御覽の通り腕を切り、父の諫めは骨身に染み、本心に立返つたるこの身の懺悔。

正宗　すりや、本心に立返つたか。

團九　親仁さん、本心になつた〳〵。

籬　惡事に强き團九郎どの、善に戻りし上からは。

薄雪　左衛門さまや我が身の上、兎角よしなに賴むぞや。

國俊　お氣遣ひ遊ばすな。お隱まひ申しまするでござりませう。

〽聞くに籬も姬諸とも、喜び合ふぞ道理なり。時しも表へ澁川藤馬、大勢引連れドッと駈け付け。

トどん〳〵になり、藤馬、凛々しき形、捕り手四人付き出て來り、門口へ來て

藤馬　ヤア〳〵、者ども承はれ。園部左衛門薄雪姬、やうやう尋ね捕へんと、思ひの外に雲を闇、逃げうせて駈け込んだは、此方の味方の團九が家。袋の鼠の二人の奴等、物な云はせず搦め捕れ。

ト捕り手皆々、内へ入らうとする。國俊立ちかゝつて

國俊　ヤア、ならぬ〳〵。おのれが主の惡事、今日只今明白に現はれたり。此方よりおのれから、覺悟ひろげ。

〽覺悟ひろげと身構へたり。

藤馬　ヤア、小ざかしい覺悟呼はり、惡事とは、そりや何か。

團九　オヽ、その證據は爰に居る。大膳が片腕とも、賴まれたる團九郎なれど、肝心の片腕を切り落され、有りの儘に白狀した。主從ともに、首さし延べて觀念しろ。

〽觀念せよと呼はれば。

藤馬　さては團九郎めが二心。もうこの上は、彼奴めぐるめに討つてかゝれ。

捕手　合點だ。

〽兩人得たりと影の太刀、鍛へ下ろしを打ふり〳〵、親親の打ちし刀の切れ味試みよと、ひらめき渡る太刀風に、火花を散らして打ち合うたり。

トどん〳〵になり、捕り手皆々、國俊團九郎へ打つてかゝる。國俊は影の刀を持ち藤馬へかゝる。此うち正宗、籬、薄雪姬、おれんは奥へ入る。ト國俊、藤馬を奥へ追ひ込み、團九郎、四人を相手に立廻り、キッと見得。これより誂らへの鳴り物になり、立廻りよろしくあつて、團九郎、正面の注連を取り、立廻りの間に襷をかけ、鍛へ下ろしを左に持ち、皆々を切り倒し、

キッと見得。この時以前の藤馬、國俊、立廻りながら出て來り、跡より正宗、薄雪、籬出て來り、國俊、藤馬を切り倒し、止めを刺す。

正宗　出來した〳〵。

籬　イザ、この上は左衛門さまへ申し上げ、大膳が非義非道、六波羅へ訴へ、敵討を願ひ、亡き父君へお手向けあれ。

〽勇み立つれば國俊も。

國俊　左衛門さまもろとも、本意を遂げ、再び歸つて舅どの、始終の御禮申すべし。先づそれまでは正宗どの。

正宗　聟どの、もうお行きやるか。

團九　おッつけ、めでたう、吉左右を。

れん　必らず待つぞえ、こちの人。

國俊　オヽ、氣づかひせられな。各々方、大膳如何ほど逸るとも。

〽我れ又神力冥護を以て、不倶戴天の父の仇、習ひ覺えし直燒刃、鍛へに鍛ふ金味にて、敵の首を討ち落し、附添ふ奴ばら片端より、縱横無盡に切り燒刃。

籬　やがてぞ本望。
本領安堵は幸崎園部。

正團　急いで出立。

國俊　さらば。

皆々　さらば〳〵。

〽詞に折れなく疵もなく、姫を伴ひ國俊は、勇み進んで。

トこの時捕り手一人出てかゝるを、國俊見事に投げつける。舞臺の皆々、よろしく見得。三重にて

幕

新薄雪物語（終り）

我が子ゆゑ立てる母親の忠義は
　念佛のかねごと
あひ〳〵傘の散らし書きは
　色に心を寄せ太皷の駈引
池の蛙は雨夜の濡れ者
　侍ひの優そだちに
お公卿樣の力自慢は
　戀に誓ひの神樂大皷の撥音

小野道風青柳硯

二幕

表のカタリは嘉永三年三月の市村座で上演した時のもの。不得要領な書き方だが、この狂言は餘り歌舞伎で出ないので、カタリも少なく、やつとこれだけを發見したのである。

下の凸版は、天保三年正月の河原崎座で澤村訥升が久しぶりに上演した時の番附である。

本文には三葉の錦繪を入れて置いた。

その二

小野道風青柳硯

上の巻

東寺裏の場
蛙飛びの場

役名――小野之助頼風。關白基經息女、女郎花姫。腰元、若菜。同、關屋。同、浦葉。力士、鐵壁大藏。同、荒熊團八。同、漣軍太。獨鈷の駄六。杢頭、小野の道風。

本舞臺、平舞臺、向う通しの筋塀。上下、立ち樹、すべて東寺の體。雨車、禪のツトメにて幕明く。

ト直ぐに淨瑠璃になり

〽青柳に、五月の雨を織り交ぜて、流るゝ水の經緯や、影絹洗ふ川風に、裾吹きまくる女中連れ。

ト壬生の鳴り物になり、向うより、女郎花姫、振り袖、被衣、下駄穿きにて、關屋、傘をさしかけ出る。後より、若菜、浦葉、めい〳〵下駄穿き、傘をさし出て、花道にて

關屋　申し、お姫様、もう東寺へ參りましてござります。

浦葉　さぞマア、あなたは、御しんどうござりませう。

若菜　マア、あれへ行て、暫らくお休み遊ばされませう。

女郎　そんなら、さうしませうわいなう。

三人　サア〳〵、お越し遊ばされませう。

ト右の鳴り物にて、皆々本舞臺へ來て、床几にかける

若菜　コレ、關屋どの、浦葉どの、今日の趣向は、ついにない雨降りの神詣で、氣が變つて面白い。あれ見さんせ。柳の雨に揉まるゝ景色、花も紅葉も及ばぬ詠め。この上に、よい男が通つたら、堪つたものぢやあるまい。シタガ、お姫様はしんどからう。おひろひ馴れぬ高足駄、この雨降りに、お乘り物にも召しませず、どうした御趣向やら、こちや、すつきり合點がゆかぬわいなア。

關屋　オヽ、合點がゆくまい。大事の事ぢやけれど、云つて聞かさずばなるまい。今日のお出では、神詣でぢやないわいなう。あの餘所々々に、あなたの

若菜　オツト、皆まで云ふまい。雨降りに、しつぽりと濡

れ事のお忍び歩き、今までなんの只ござらう。誰れあらう、關白樣のお娘御・姫君の色樣なら、中將さまか、辨さまか、秋風に薄の宰相さまでもあらうか。大方そこらでござりませう。

女郎　あの若菜が云やる事わいなう。關白の娘なら、公卿にならで縁せぬものか。中將の少將のと、堅くろしい冠着た男は、珍らしうないわいなう。ほんの好い男といふは、月代剃つて、袴着て、大小しやんと小凛々しい、小野之助頼風さまといふ當世男が、こちやおいとしいわいなう。

若菜　さつても我折れ、その頼風さまは、御所一番の風男惚れぬ者とてなかりけり。有やうは、わたしも餘ツぽど身を入れて、外の手へ渡すまいと、折節御所へ見える時は、目顏仕形で心遣ひ。大抵の肝せいか。お姫樣は、よもやと油斷してゐたのに……ハア、悲しや、夜を寐ずに縫うてやつた前巾着と、楊枝差し、棒に振つてのけたわいなア。

浦葉　ホヽヽヽ、頼風さまに其方が戀とは、オヽいしこ。シタガ、姫君樣、あのやうに惚れ手の多い人、お前も御油斷なされたら、ちつとの間に蟲入り栗、澁皮さへ剝けてあれば、落して見る惡性男。

關屋　今日、東寺へ參詣とやら。追ツつけ見えたらば、何かなしに捕まへて、とつくりと御吟味遊ばせや。

ト浦葉、向うを見て

浦葉　アレ〳〵、向うへござるは、慥かにそれぢや。ちつとの間、あの木蔭に身を隱して、コレ

ト姫に囁き

御合點でござりますかえ。

女郎　そんなら、さうしようわいなう。

浦葉　コレ、必らず皆、出やるまいぞや。

〽打連れ、木蔭に、

ト皆々、下手へ小隱れする。

〽忍ぶとも、知らで出で來る頼風が、戀に心もときめきて、雨は漏らねど餘所に漏る、蛇の目の傘さしかゝる。

ト向うより、頼風、紅葉傘、下駄穿きにて來る。雨車

頼風　最早、東寺へ參つたが、又一しきり降りさうな。何は兎もあれ、さうぢや〳〵。

ト又壬生にて、本舞臺へ來る。下手より、女郎花、被衣にて出て來る。

〽川の水音瀨と變る、男の心引き見んと、薄衣被ぎ女郎

文久三年七月中村座上演

三世澤村田之助の女郎花姫　河原崎權十郎の頼風

花、作り靡して。

女郎　コレ、申し、傘の御無心、申したうござりまする。

〽つッと入りし優姿、二番煎じの濃茶とは、夢にも思ひ頼風が、はぜ釣針に三年物、戀一通りは此方の得手、靡けて見んと。

頼風　これは〳〵、お易い御用、君のやうな女中には、此方から願うても、お貸し申したい。傘の代りにいつそ、この身を引き付けて居たいお姿。この吹降りに、傘もさゝず、濡れ好きと見た目は違はぬ。深い色があつてゞあらう。かゝるぼつとり、すうわりとした女中樣、我が物にする色樣は、どんなお顏ぢや。見たいわいなう。

〽餘所から仕掛ける商ひ氣、さてはと憎さ女郎花、腹の立田の下紅葉、猶顏隱し、かぶり振る。

ハテ、仰しやんな。斯うしたお姿、忍び會ひとは、一目にそれと白躑躅、お隱しある程名が聞きたい。誰れぢや誰れぢや。

〽問ひ詰められて。

女郎　誰れと定まる殿御はなし、この傘は一樹の舍り、一河の流れ、自らは、たゞ小野さまに〳〵。

〽もたれかゝりし柳腰、柳の絲に頼風が、縺れしなだれ。

頼風　とは眞實か、小野さまとは忝ない。卽ち我れ等は小野之介、相合傘は結ぶの神、天の岩戸の御面像、ドレ、拜まうか。

〽引たぐる薄衣の下。

ヤア、姫君か。

〽ハッと驚ろき、逃げ行くと、お腰元衆ばら〳〵〳〵。

ト腰元出て

關屋　どこへ〳〵。手の惡い性惡どの。

浦葉　姫君樣、爰で存分に

二人　仰しやれ〳〵。

若菜　オヽ、さうぢや〳〵。姫君樣より、この若菜が、一番に云はねばならぬわいなア……コレ、申し、頼風さま

〽始めて三輪の過ぎし夜に、葉越しの月の俤は、お公卿樣やら、侍ひ樣やら、知れぬ形振りすつきりと、水際の立つ好い男、外の女は禁制と、しめて固めし肌と肌、主ある人をば大膽な、斷りなしに惚れるとは、どんな本にもありやませい、女庭訓躾方、よう見やしやんせ、嗜みなされ。

それになんぢやいなア。これまでわたしが口說く時は、口が廣いのなんのとて、よう巾着を騙りやつたなう。コ

レ、云ひ譯を、聞かう〳〵。

〽胸づくし取り、悋氣の名代、川浪騒ぎ、蛇籠にも、角の生ゆべき氣色なり、姫は流石に悋氣さへ、はしたなうもし給はず。

女郎　ほんに、そもじは氣の多い。今のが自らなりやこそよけれ、外の者で見たがよい。手離さるゝ事かいなう。大方、餘所でもあんな事、憎い男ではあるわいなア。

ト抓る。

頼風　アイタヽヽ、眞平御免。誓文くつされ、片時も忘れぬ姫君の、お聲物腰にも聞き違へやうか。我が心を引き見給ふと推したゆゑ、疑ひ深いがちと憎さ、今のやうに申したは、此方も持たせぶり。侍ひ風情の小野之介、關白様の聟になるこの仕合せ、なんと外へ氣が移ろうぞいなう。

女郎　イエ〳〵、さうばかりでは、疑ひが晴れぬわいなう。

頼風　然らば堅い武士の誓言。弓矢正八幡も御照覧、死したる父を地獄へ嵌め、運盡きて某、腹かツさばいて相果てる法もあれ。

女郎　アヽ、いまはしい。其方が死んでなんとせう。そんな誓言、こちや否々。

頼風　ハテ、むづかしい。然らば未來の父を佛に致し、我れ等は死なずに、千年も萬年も、お前と仲よう添ひ遂げる法もあれ。

女郎　それで落ちつきました。必らず今の通りでござんすぞえ。

頼風　なんの違へませうぞいなう。

女郎　エヽ、嬉しうござんすわいなア。

〽互ひにしめつしめやかに、降つて通りし五月雨も、根が仲のよき傘の、長き赤繩ぞわりなけれ。

關屋　サア〳〵、お仲が直つた。嬉しいぢやないかいなう。

若菜　わたしはあんまり嬉しうて、どこもかしこも、しよき〳〵とするわいなア。

浦葉　妾は、あんまり濡れ過ぎる。東寺までおひろひ遊ばし、茶屋の座敷で、こんもりと。ナア、關屋どの。

關屋　それ〳〵、此方も咽喉が渇いて來た。サア、姫君様。

女郎　そんなら、小野之介。

ト手を取る。

頼風　それでも、どうやら。

女郎　アレ、まだいなア。

腰皆　サア／＼、ござんせいなア。

〽戀に馴れたる御所女中、中に取卷き、さゞめきて、皆皆かしこへ。

ト三重にて、よろしく皆々、上手へ入る。知らせにつき返し。

〽本舞臺、平舞臺、上手に草の池、この側に誂らへの柳の立ち木、日覆より一面に柳の吊り枝。正面、黒幕、本釣り鐘にて道具とまる。

〽長樂の鐘の音は、花の外に盡き、龍池の柳の色は、雨の中に深し、雨の足音、高下駄の、杢の頭小野の道風、菱紋、狩衣、立烏帽子、片片に傘、指貫の、裾も露けき岸傳ひ、雨もおやめば、立ち休らひ。

ト向うより道風、傘、下駄穿きにて、本舞臺へ來て、思ひ入れ。

道風　さて、絶景かな／＼。民間にありし時は、簑笠に雨を悲しみ、斯様の景色も見捨てしまゝ、境界につる人心、一刻價千金ぢやなア。

〽暫し佇む柳影、澤の蛙の草を分け、妻呼び顏に這ひ出づる、柳の糸の枝垂れ葉に、滴たる雨のばら／＼／＼、井出の玉水、溜り水、葉に浮く露を蟲かとて。

ト此うちよき程に、蛙、仕掛けにて、柳の葉に飛ぶ事あり

一二寸飛んではははたと落ち、三寸四寸いつの間に、かばと飛び付く、蛙の振舞ひ、目放しもせず、見入りし道風一心不亂、思はずも、傘はたと取落し、横手を打つて。

ハヽア、奇妙々々。水面を離るゝ事三尺ばかり、程を隔てし柳の枝に、上らんとする、我が身を知らぬ、蟲けらの愚かさと見るうちに、初めは一寸、また二寸、五寸飛び、七寸飛び、遂に枝に取りつきたる、魂ひの凄まじさ。蟲と見て侮るべからず。これを以て試るに、天に梯橋、猿猴が月、及ばぬ藝も度重なる、念力に固まる時は、遂にならずといふ事なし。只今の振舞ひにて、心の悟り忽ち開く。橘の逸勢が、この程の結構、叛逆とは知つたれど、普天の下、卒土の中、何條彼れ等が力にて、天ケ下を覆さん事、思ひもよらずと、心の油斷、誤まつたり誤まつたり。逸勢が及ばぬ望み、今の蛙に等しく、始めは勢ひ微かなりとも、謀叛の徒黨、五人付き、十人付き、遂に日本を切り從へ、この青柳の天ケ下、掌に握る大毒

蟲。ハヽア、恐ろしい〳〵。

〽初めて驚ろく蛙の悟り、絵に描き寫す青柳硯、末世の鏡となりにける、逸か忍びの犬、鐵生大藏眞先に、荒熊團八、漣軍太、物蔭より飛んで出で。

ト此うち道風、よろしく思ひ入れ。バタ〳〵にて上手より大藏、團八、軍太出て

三人　道風、やらぬ。

〽道風やらぬと追取り卷く、ちつとも動ぜず、じろりと見やり。

道風　仰々しい、やらぬ呼はり。おのれら、なんぞ、聞いたか、見たか。

大藏　オヽ、聞いた〳〵。大きな事を皆聞いた。逸勢公の御謀叛を、悟つた道風。

團八　味方に付けばその通り、否と云へば生けては置かれぬ。蛙の悟りで、云はれぬ事を囀つて、正眞の蛙は口から。

軍太　今が汝の絶對絶命、相撲の勝負の意趣晴らし、跡から附けて來たところ、丁度幸ひ、よい壺〳〵。

大藏　サア、返答は、なんと〳〵。

〽返答なんとゝ罵つたり、道風カラ〳〵と打笑ひ

道風　以前の手並に懲りもせず、素人相撲の飛入り摘ゝ、首の落ちぬ用心せい。味方に付かうが付くまいか、道風が心にある。汝等に云ひ聞かすべきか。是非聞きたくば打ち殺し、死人にしてから、云うて聞かさう。

大藏　ヤア、ほざより口の達者な道風。息の根止めよ、漣、荒熊。

二人　オヽ、合點だや。

〽一度にしつかと組み付いたり、續いてかゝる鐵壁を、下駄の當手にたぢ〳〵〳〵、二人が首同士、くわつゝくわつし、左右へがばと突き倒す、前よりかゝるを撥石落し、後から出す二人が腕、かづいてどうと重ね投げ、叶はぬ赦せと、逃散り〳〵。

道風　ヤア、いづくまでも。

〽と追ひかくる後より。

駄六　道風待て。待ちやがれえゝ。

〽聲をかけ、のさばり來るは、獨鈷の駄六、鼻の先に懷手。

ト向うより駄六、廣袖、ばつちよ笠、くり下駄にて本舞臺へ來て

駄六　なんと道風、久しいなア。貴樣もおれも大工の時は、

文久三年七月中村座上演

坂東彦三郎の道風　　中村鶴藏の駄六

きつい馴染みであつたが、いつの間にやら、えらい形になつたなう。貴様の下げすみの通りに、過劣どのゝ巧みの謀、大方地は馴らしてあれど、自力で行かぬゆゑ、道風を柱に頼む算段。貴様かウンと云ふと、おれも出世。否と云や打殺して出世する。どちらでなりと、鋸商ひ。仕舞ひのつかぬ金槌論より、否か、應か、たつた一口。男と見込んで、男が頼む。たのまれて下されく。

〽臑であしらふ、のぶす者。

道風　オヽ、優しくも申したり。併し、汝等に云ひ聞かすは、牛に經文、歸れく。

ト行き過ぎる。

駄六　待ちやがれ。獨鈷の駄六が、斯う頼みかゝつてからは、一寸も傍へは寄らさぬ。是非否ならば、腕づくで。

道風　ムウ、腕づくとは、わりや、どうして。

駄六　オヽ、斯うして頼む。

〽と狩衣の、脇から差込む、胸づくし。

道風　エヽ、てんがうすな。

〽振り放し、互ひにえいゝと組む拍子、足踏み挫きどつこいと、下駄脱き捨てゝ力士立ち、双方互角の力強、駄六は出立ちの身輕だけ、烏帽子に手をかけ、引き倒さんと、するを轉けじとこたへる力、掛け緒ちぎれて、脱げ落つれば、双方ともに大童、胸板突かれてウンとばかり、撞と倒れる、その隙に。

ト兩人、角力の立廻りあつて駄六を當て

〽徒黨の奴ばら、遁がして置かうか。

〽駄六を見捨てゝ駈け行く道風。

トよろしく、こなしあつて、下手へ走り入る。駄六、心附いて

駄六　ドッコイく。どこまでも、直の返答聞き切らん。さうぢや。

〽猶その跡を、慕ひ行く。

ト駄六、いろくあつて下手へ追ひ駈け入る。

〽かゝる事とは露知らず、草踏み分けて女郎花、花の紐解く頼風に、飽かぬ別れを、くどくと、

ト土手より、頼風、女郎花、腰元附添ひ出て來て

頼風　もう仰しやるな。遲なはる。お館の首尾損ねぬやう、早う供して。腰元衆。

關屋　アイく、これには限らぬ事。

浦葉　次の御見を、お待ち遊ばしませ。

女郎　そんなら、爰から

頼風　サア〳〵、早う。
女郎　とはいへ、どうやら
三人　ハテマア、ござりませいなア。
〽又の逢瀬はいろ〳〵と、果し名殘りを引別れ、是非なく館へ、歸らるゝ。
ト よろしく思ひ入れあつて、女郎花、腰元、向うへ入る。頼風殘り思ひ入れ。
〽姿見送り、小野之介。
頼風　先刻より餘程の遲刻。ドレ、我れも宿所へ。
〽立ち歸る、向うへによき〳〵大男、道を塞いで。
ト 下手より、以前の力士三人出て來て
三人　見付けた〳〵。
大藏　道風が弟め、女郎花の君と密通の樣子、慥かに見屆けた。
三人　逃がさぬ〳〵。
頼風　サア、それは。
〽うろたへるを、寄つてかゝつて踏みのめし、小腕捻ぢ上げ。
團八　動くまい、地下人の分際で、關白樣の姫君に、瑕付けた泥坊め、引縛つて、此方が手柄。

軍太　兄めは公卿の力强、おのれは武家の弱味噌め、何よりの高名ぢや。厄病神で敵討。
三人　サア、キリ〳〵と、うせやがれ。
〽たつた一人を三人が、鼻高々と。
ト 三人して、頼風を手舁きにして下手へ連れて入る。
これにて返し。
〽本舞臺、向う遠見、畑の書割り。正面に西山を見せ、矢張り上手に池あり、一面に、二重舞臺。草土手の蹴込み、爰に道風、駄六、以前の形にて、兩人立廻り、止つて居る見得。
〽道風駄六は、組んづ轉んづ、放せ放さぬ、大汗太息、あなたが進めば、こなたが戻し、摑み合ひたる鬢の髮、引いつ引かれつつ。
道風　しや、面倒な、行きたい所へ行く道風、邪魔ひろぐな。
〽と突き退ける。
駄六　いつかやならぬ。止めにかゝつたら金輪際、駄六が齒ぶしの眞劍勝負、こたへて見よ。
〽肩口はつかり。

ト道風の肩先へ喰ひつく。

道風　オヽ、道風はこの間、鐵漿染めの齒形の極印、諸人の見せしめ、これを見よ。

〽駄六が肩先、喰ひ裂かれ、双方一度に血は瀧津瀬、顔も互ひに薄くれなゐ、投げつ投げられ、根くらべ、泥に辷つてたぢろく駄六、首筋摑んで、エイと差上げ、ざんぶと打込む川の中、水煙りして眞逆さま。

ト駄六を、上手の池へ打込むこなしあつて

ヤア、うぬが力で、手に入るやうな道風ならず、味方になるかならぬかは、運勢が直相對。これから直ぐに。

〽駄六を見捨てたゞ一人、敵の館へ急ぎ行く。

ト道風、思ひ入れあつて、向うへ駈けて入る。あと誂らへの合ひ方にて、池より駄六上がつて、いろ／＼水を吐く事あつて

駄六　うぬ、道風め。

トこれより好みの鳴り物にて、駄六、蛙の見得、よろしくキザミにて

幕

下の巻

小野道風館の場

役名――小野之介頼風。關白實、菊の前。同息女、女郎花姫。伴健宗。道風乳母、法輪尼。道風妻、置霜。杢頭、小野の道風。

本舞臺、三間の高二重。正面、金襖、瓦燈口、襷欄間、半簾、上手、塗り骨障子屋體、下手、網代塀。平舞臺に枝折り戸、爰に腰元四人、煙草盆茶臺などを持ち、掃除してゐる。琴唄にて幕明く。

初香　コレ、夕空、これで掃除も、大方片附いたでないかいなう。

夕空　お床の掛け物は、掛け替へて置きましたし

葉櫻　サア、これから、ちつと休まうではないかいなう。

〽一間の内より、道風の妻、置霜御前、町の風俗引きかへて、今は小野の北の方、自然と備はる裲襠姿、後に續いて道風のお乳の人、法輪尼、年は本卦を越えながら、目も足も不自由に、なき養ひ和子にかゝり乳母。

ト序の舞にて、奥より法輪尼と置霜出て

法輪　コレ、腰元衆、追ッつけ、道風さまがお歸りなされう。座敷廻りの掃除はよいか。日頃の短氣、呵られぬやうに立廻りや。

置霜　オヽ、さうおやとも。今はまた、長袖だけに、お心が和らいたれど、昔はこの置霜も、きつい目に會うたぞいの。そして力業、喧嘩、口論、ほんに寐た間より外、氣の休まつた事がない……オヽ、それよ、昔で思ひ出した。その臺の物、爰へ〳〵。

葉櫻　畏まりました。

ト上手の一間より、白臺に布子の載せたるを持つて出る。

〽一間より、白木の臺に見苦しき、どてら布子疊み載せ、腰元持ち出づれば。

置霜　法輪どのには、まだ話さぬが、今朝、道風さまの仰しやるには、兄弟が此やうに、公卿武家となつたるも、父の庇とは云ひながら、昔を忘れぬが、めい〳〵の身の冥加なれば、職人の時着た着物、常々居間に飾り置けとの、云ひつけでござりまする。

法輪　オヽ、それは尤も。シタガ、お公卿にならしやつても、案じるは兄御、父篁さまには似ず、讀書きが嫌ひで、弓矢兵法力逹を好み、今に於て文盲無筆、大内の附合ひでも、定めて恥かき飽き、和子の業とは云はず、乳母が育ての惡さと、人が云はうと思うて、それが悲しい。どうぞ、物を書かしやるやうに、意見して下されいなう。

〽齒ぐきを噛んで悔み言。玄關の侍ひ罷り出で。

ト侍ひ一人、着附け上下にて、向うより出て來り

侍ひ　逸勢公のお使者として、伴の健宗どの、賴風さまを同道にて、只今これへお越しでござりまする。

ト引返し入る。

置霜　お使者とあれば、法輪どのは先づ奥へ。

法輪　お客のあるに、年寄りはうるさいもの。ソレ、腰元どの、その布子。

夕空　畏まりました。

〽腰元どもに着物持たせ、一間へ入れば。

ト法輪、こなしあつて、奥へ入る。

〽伴の健宗、袴の股立ち稟々しげに、座敷を大地と踏み立て〳〵打通る、引き續いて逸勢が、手の者五六人、賴風が大小もぎ取り、追ッ取卷き、不時の難儀に小野之介、悄々として入り來れば。

ト向うより、健宗、龍神巻にて出で、後より頼風に縄かけて、捕り手、大小を持つて出て來る。

捕手　下に居らう。

置霜　ヤア、お前は頼風どの。

〽置霜驚ろき、襠裲ひらりと、長押に掛けたる長刀押取り、脇挾み。

ト長刀を取つて　キッと構へて

頼風どのには、如何やうの料あつて、かゝる手籠め。夫は參內の留守なれども、餘の長袖とは違うて、杢の頭、道風の妻、一人も免さぬぞや。

〽長刀構へ、突立てば。

健宗　ハ、、、この頃まで職人のお內儀、味やらるゝ。その長刀に目を立て、鋸にして使ふのが、道風には相應な道具。去年まで大內の普請に、穴をよつた大工どのゝ弟、守護の武士に取上げられ、大きな穴を頼風が、科の次第聞いたら膽が潰れう……この度、關白の姬君、女郎花の姬と密通せし事顯はれて、科重罪に極まつたわやい。

〽おのれが戀の意趣晴らし、聞くにハッと驚ろく兄嫁、面目なげに小野之介、顏も得上げず坐しゐたる。

置霜　これは〳〵、假初めならぬ御詮議。女の際に差出もならぬ。夫の歸るまでは、頼風どのをこの館に。

健宗　イヤ〳〵、大事の囚人、べん〳〵と、手延びにならぬ。道風の歸るを待つて、申し渡さん……コリヤ捕り手ども、小野之介は籠の鳥、一寸も動かさぬ。罷り歸つて逸勢公へ、この旨具さに言上せよ。早う〳〵。

捕手　ハッ、畏まつてござりまする。

〽早う〳〵と追ひ歸せば

ト捕り手皆々、向うへ入る。

置霜　夫が歸りも今暫し、それまで奧にて御休息。

健宗　成る程。コリヤ、小野之介、健宗が休息の間、どつちへも動きさらすな。

置霜　頼風さまは、この置霜が、キッと預かり

健宗　然らば奧方。

置霜　先づ、お入りなされませう。

〽目玉光らし入りにけり、お乳は一間をよろぼひ出で、頼風が側に摺り寄つて

ト法輪尼出て。

法輪　コレ、こなたは、徒らな。天魔が魅入られたか。わしや何十年かこの方の膽を、一時に潰したわいなう。あ

らう事か、誰れあらう、關白樣の姬君と、ようもようも、大それた事をしやつたこう。今さら改めて云ふではなけれど、道風さまの母御、お主の上で死なしやつて、その時この法輪は、お館へ乳母奉公、母御のない子を、可愛がつてもらはうとて、篁さまのお手が掛つて、この乳母が産み落したは賴風さま、腹は貸せども、お主の胤なれば、生れたこなたも矢ッ張りお主。ついにこれまで母顏せず、血を分けた子を主あしらひは、死なしやつた母御への云ひ譯、我が子でないと諦らめ、親しみを薄うする程、一倍道風さまがいとしうなつて、こなたの事を投げやり、剛意見する氣もなかつたれど、今日ばかりは云はねばならぬ。家の大事、心一つで、小野の苗字もこれ限り。ほんに、ヤレ〳〵、お家の敵に腹貸したと思へば、口惜しい、腹が立つわいなう。その身ばかりか、兄御まで、難儀をかける、こゝな徒ら者め、なんとして腹癒よう。

〽あたり見廻し、立ち上がり、よろめく老の足取りに、腹立ちには遠慮もなく、床の掛け物引外し、軸も折れよと、目鼻も分たず、なぐり立て、擲き立つれば。

置霜　マア〳〵待つて下さりませ。

〽取り付く置霜。

法輪　イヤ〳〵、愛放して、存分に擲かして下され。

〽ワッとばかりに泣きける。これ見さつしやれ、父御が隱岐へ流されて、[illegible]にせよとて、都の便りに上し給ふ御歌……和田の原、八十島かけて漕ぎ出ぬと、人には告げよ、天の釣り舟、參議篁と書き給ふこの掛け物なれば、父御の拳で打ち擲くも同じ事。體に骨があるならば、身にこたえいでなんとせう、存生の時、冥途へお通ひなされたと、噂したほど名の高さ、篁さまの、二人の子達でゐながら、あるが中にも兄御は無事、弟は徒ら者、これも前世の約束かいなう

〽ありし事ども數へ立て、口說き立て、かつぱと伏して歎くにぞ、道理々々と置霜も、背撫でさすれば小野之介差俯むいて一軸を、額にあてゝ。

賴風　母ならぬ、母の法輪、年寄つて、心遣ひ、過分々々。兩親の目の前で、不孝の天罰思ひ知らん。

〽長刀足にて踏み直し、身を打伏して、死なんとす。

ト長刀にて死なうとする、置霜とめる。

置霜　早まるまいぞ。

〽取り附く置霜。

法輪　オヽ、よう止めて下さんした。縛り首討たれうより、

長刀で死ぬる氣か……何程惜いと思うても、殺しては預かり人の兄御の難儀。兄様の指圖を待つての上、と云ふも憎さの、可愛い餘りでござるわいなう。

〽そゞろ涙のその折柄、表使ひ腰元、慌しく走り出で。

ト腰元出て

更科　只いま此お館へ、嫁君のお輿入れでござりまする。

〽申し上ぐれば置霜恟り。

置霜　ヤア／＼、お輿入れとは、誰れ人が迎へる嫁君。此方には覺えがない。てつきりと嫁入りの門違ひ。時も時、折も折、さま／＼の事云うて來る。

更科　イエ／＼／＼、門違ひでない證據は、關白基經さまの姫君を、頼風さまに御縁組みと、仰しやつてゞござりまする。

〽云ふに恟り、小野之助、三人目と目を見合して。

置霜　責めて、これには様子があらう、先づ／＼奥へ、

〽二人を立たせ、置霜は、裲襠改め、出で迎ふ。

ト法輪尼は頼風を連れて奥に入る。腰元、置霜に裲襠を着せる事よろしくあつて、出迎へる。下手より、女郎花、綿帽子、白の振り袖裲襠にて、菊の上、着付け、裲襠にて、兩人連れ立ち出て來る。

〽次の間よりも、さと薫り來る絹の香は、基經公の政所菊の上、續いて姫君女郎花、推して嫁入を連れて來る、裲襠姿綿帽子、しとやかに座し給へば、遥か下がつてあいしらう、菊の上仰せありけるは、

菊の　道風どの、北の方、置霜御前とはそもじよな、互ひに逢ふは今が始め。サア／＼近う。これなるは、自らが娘女郎花……コレ、あの奥もじは、其方と相嫁。挨拶をしやいなう。

女郎　アイ／＼。

〽返事の中も今日の首尾、戀人と我が身の上、どう治まる事やらと、千々に碎くる幾瀬の思ひ。

菊の　イヤナウ、置霜どの、今日來たは、娘女郎花を、小野之介の妻にせんと、推して嫁入りさした譯は、道風どのにお目にかゝつて云ひませう。今宵中に祝言を、是非ともさせてもらはにやならぬ。

〽此方に難儀のある事を、知つてか知らぬか返答も、兎やせん角やと思案を定め。

置霜　これは／＼、ようこそお出で、只今夫も參內の留守、下がられ次第、お成りの様子申し聞かせ、御返答は使者を以て申し上げませう。マア、只今は姫君様を。

菊の　ムヽ、連れて去ねとある事か。それは聞えぬ。そもじとても覺えがあらう。嫁入りは、姫御前の一生にたつた一度。連れて歸れば、去られた同然。姫は一生廢り者。爰をよう、汲み分けて下されいなう。

〽眞實見ゆれば、置霜も。

置霜　この上は、兎も角も、仰せに任せ奉りませう。暫しの間は奥の間へ。ソレ、腰元ども、案内申しや。

〽申し上ぐれば、菊の上。

菊の　左樣ならば、置霜どの。

置霜　見苦しくとも、あの一間へ。

菊の　サア、姫此方へ。

〽と連れて入る、嫁は祝儀の七五三、聟は縫目の知死期待つ、後にうつとり只一人、思案に心置霜は、途方に暮るゝばかりなり。

ト更科案内して、菊の上、女郎花姫、奥へ入る。置霜思ひ入れ。

觸込　御歸館〳〵

〽はや程もなく小野の道風、心ならずも逸勢が、非道に組みし、館へ歸るむら〳〵機嫌。

ト向うより、道風、裝束にて、思ひ入れあつて出て、直ぐに本舞臺へ來る。置霜出迎うて、よろしく住ふ。

置霜　ようお歸り遊ばした。何からかゝら話さうやら、マア、お聞かせ申したいは弟が事。

道風　みな聞いた。

置霜　イエ〳〵、そればかりぢやない、基經公の政所、姫君を連れまして、あらう事かあるまい事か、押付けに嫁入り、どうせうと思うてござりまする。

道風　ハテ、どう斯うと、兼ねて思案の仕置きはせぬ。先づ健宗に逢うて上の事。

〽云はせもあへず一間より。

健宗　道風どの、歸られたか。

〽のさ〳〵と立ち出でゝ。

ト健宗出る。序の舞〳〵

詳しい事は御內證に、先刻お話し申して置いた。

道風　成る程、承つて驚ろきしが、ア、、憎い弟め、誰れあらう、關白の姫君と、密通せしは輕からぬ科。さりながら、賴風が不義せしと云ふ

健宗　オ、、その證據握つてゐる

〽懷中より取出し。

ト文を出し

この文體のはてくろしさ、シタガ、無筆で讀めまい讀めまい……サア、讀むなら讀んで見よ。

〽差し附くれば、夫の恥、妻は齒がゆく、引取つて。

[illegible]　これ程の事、道風さまでも、讀めいでかいなう……「昨日は、御文繰り返し、詠めしも、いよ／＼御見のふし、申し交せし通り、明日は東寺詣で致したしとりし」と書いてある事は、これが讀めいでなんとせうぞいなう……「彼方にて、ゆる／＼お目もうじに、何事もそのふしと、殘しとりし、やら、頼風さままゐる。おみな

〽ハッと讀みさし、顏見合せ、夫の恥を包まんと、讀めば、却つて頼風の證據となるぞうたてけれ。

道風　ヤア、小ざかしい、女の差出。

〽女引ッたくれば、健宗、大口あけて、打笑ひ。

健宗　なんと、慥かな證據であらうが。それになんぞや、弟を庇うて、證據を見やうなんぞとは、しやらくさい。道風、其方の胸の中、合點がゆかぬ。先達て逸勢公の思し立ちに、再三お招きあつても、酢の蒟蒻のと云ひ延ばし、やう／＼この[illegible]みせしかど、上ずんべりの空一味。察するところ、關白方へ内通の手段に、女郎花姫と弟を、密通させしと逸勢公の御眼力に、違ひはせまい。返答によつて其方も、頼風と同罪だぞ。

道風　ホヽヽ、そりや健宗、詞が過ぎる。兼ねて逸勢どのに一味の道風、關白方に心を寄せず、弟の不義は猶知らねば、同罪に合ふ程の、疑ひ受ける覺えなし。

健宗　フウ、覺えなくば、ないといふ、潔白な神文見せよ。その上では、頼風が死罪も御赦免、弟を殺さうとも、助けうとも、其方の胸次第。

〽無筆と知つて困らす難題、突ッ立ち上がり。床脇の料紙硯、道風に突つ付けて。

サア、一字でも書いたらば、この健宗が首をやらう。

道風　サア。

健宗　サア、書け。

道風　サア、それに。

健障　サア、見ようか。

道風　サア

兩人　サア／＼／＼。

〽立ちはだかつて、往生づくめ、元より無筆の當惑道風、ハッとは云へど赤面齒嚙み、傍に冷汗と霜が、口惜しいやら無念なやら、縛られながら頼風も、出るに出られぬこの場の仕儀。

健宗　ヤア、隙入るは關白方、弟殺すか、誓紙を書くか。二つに一つの返答は、サア、どうぢや。

〽サア〳〵どうぢやと、せり詰められて、ハッハッ〳〵、弟が命助けんと、すれども是非なき無念の拳、四五十人にも敵する力、たゞ一點の筆畫にも、力及ばず後悔涙、見兼ねて一間の障子の中。

ト上手の障子明けて、法輪尼、筆を道風へ投げ付けて

法輪　エヽ、歯がゆい。コレ、この筆、これで〳〵。

ト思ひ入れあつて直ぐに障子しめる。

〽投げ付ける、乳母が詞に實にそれよ、紙眞黒に書きよごし、二言と云はゞ健宗を、直ぐに捻ぢ首せんものと、筆押取つて打立てる、筆の當途は思はずも、起證の文言さら〳〵〳〵、我れも驚ろく見る人も、これは〳〵と呆れるばかり、吐息墨つぎ滞らず、依つて神文件の如し。

ト道風、思ひ入れあつて、紙にサラ〳〵と書く。側より健宗、見て

健宗　橘の逸勢どのへ、杢の頭小野道風。

〽讀みも終らず。

こりやどうぢや。その筈ぢやあるまいが。わりや無筆ぢやなかつたか。無筆で物を書いたのは、紙に仕掛けはなかつたか。

トいろ〳〵不審の思ひ入れ。

〽工面の違ふいがみ面、道風すかさず健宗を、鎬返しに緣より下、眞逆さまに投げ落し。

道風　ヤア、おのれ憎くい奴。もの書けば首やらんと、約束のおのれの首、取らぬは誓紙の使ひだけ。キリ〳〵持つて、歸り居らう。

〽投げ付くれば、起き上がつてへらず口。

健宗　無筆というたが嘘なれば、首やらうと云つたも嘘だ。ヤイ道風、イヤサ豆腐。女郎花と頼風めが、手に手を取つて雁もどき、苞豆腐を見るやうに、ぐる〳〵巻かれてゐる事を、聞いて主人が燒豆腐、二人の覘つた油揚を、引ッ攫はれたその上に、吉原揚を見るやうに、よくも薄くしをつたな。今にとうふる、覺えてゐろ。

〽面をしかめ、足よろ〳〵、ほう〳〵逃げて立歸る、頼風一間を飛び出でゝ。

頼風　今までは、無筆と存ぜし兄者人、某を助けんとして、神文を書き給ひし謂れは如何に。

置霜　物書き給ふお手なれど、御願ばしあつての事か。ようマア、書いて下さりましたなア。

〽喜ぶ中にも不審顏。

道風　されば〱、無筆を知つて倂宗が難題、所詮紙を墨に塗り、その座を去らせす組み伏せて、搔き首せんと思ひの外、乳母がくれたるこの筆を、取れば自然と働ちく拳、書きたる不思議は汝等より、この道風が不審晴れず。

法輪　オヽ、不審も晴れぬ筈。ものも書かいでなんとせう。コレ、この障子、明けてたべ。

〽詞に從ひ押し開く、內に無殘や法輪尼、咽喉を貫く錐口より、血汐の滴る机の上、手習ひ草紙、手習ひ筆・墨硯紅に、その身も染めて息絶え〱。

ト上手障子の內にて、法輪尼、自害してゐる。

〽人々これはと立寄つて。

道風　こは何ゆゑのこの有樣。

豎霜　コレ〱、氣を慥かに持つていなう。

〽これなうこれと介抱に、先立つものは淚なり。

法輪　アヽ、コレ、泣いて下さるな。なぜ喜んで下されぬ。腹貸した賴風が、助けたいとて今の體裁。無筆の恥をいとはず、弟を助けうと、慈悲はわたしへ半分義理。嬉しいと云はうか、有り難いと云ひませうか・拜んでばつかり居ましたわいなう。平人にはある習ひ・公卿になつた今の身で、無筆と云はす口惜しさ。

〽乳母が耳には、此方から、彼方まで、突き拔けて。

ア、情なや・悲しや。せめておれが物書かば、朝晩側に引き付けて・敎へようものと。

〽思ひ初めたる草紙と机。

八十の手習ひと、人の笑ひがおとましさに、座禪すると取籠つて、篁さまの書き捨てさしやつた反古を集め、老の根氣を碎きしゆゑ、やう〱筆法書き覺え、習ふ氣にさへならしやつたら、人に隱して敎へようと。

〽思ふ下から今の難儀、聞いてゐた悲しさ、辛さ。

おのれやれ、この乳母が、習ひ込んだ筆の魂ひ、こなたの腕に分け入つて、何とぞ神文書かせてたべと、未來の爲に願うた後生、現世の願ひに打込んで、死んでは奈落に沈むとも、この場の難儀を救うてたべと、日本國中の神佛に、掛けぬ願も願ひもなく、書かせたい〱と、思ひ込んだ念力の、その筆咽喉へ突き込んで、命を捨てたばつかりに我が筆勢が乘り移り、さてこそ

〽物は書き給ふぞ。

これが嬉しうあるまいか。これといふも何ゆゑぞ、兄御は無筆で譏りを受け、弟はそれに引かへて、聰の文から

云ひ譯立たず。それもその身の徒らから、大事の兄御に恥辱を取らさうとしをつた奴。憎い〳〵が餘つた上、死ぬる母が心の内、推量して、可愛がつてやつて下さりませ。

〽云ふも涙にせき上げて、わつとばかりに泣き叫ぶ、老の氣丈の物云ひも、霜に枯れたる嵐の木の葉、脆くも息は絶え果つる。

ト法輪尼、よろしくあつて落入る。

頼風　母様といひ、兄上にまで、御苦勞かくるも、この身の徒ら。お免しなされて下さりませ。

〽わつと一度に取分けて、我が身の繼目も今は又、解けては母に泣く涙、お慈悲々々と繰り返す、弟が悔みに道風も。

道風　エヽ、いま暫し息あらば、堪能させて死なせんもの。エヽ、残念や〳〵。我が親小野の篁は、文筆に達せしゆゑ、嫉妬をうけて流罪の身、父の敵は筆なりと、取らぬを嫌ひと苦に病んで、八十の手習ひして、我れに敎へん志し、念願腕に分け入つて、今の神文書きたるを初めとし、心を筆の道に委ね、天晴れ能書の譽れを取り、靈佛靈社に額を書き、名を後代に止めん事、偏へに法輪尼が情の種、我が腕ながら我が腕ならず。エヽ、有り難し有り難し。

〽右の腕を押戴き〳〵、印は正しく老筆の、顫ひも移る顫ひ筆、額に止めてあり〳〵と。

ト これより、白地の衝立に向ひ、筆を取つて書く。

〽釋迦如來轉法輪、所當極樂土、東門中心と、書きたる文字は法輪尼が、菩提の跡は天王寺、石の鳥居の朽ちぬ世の、その理りも涙なる、置霜はくど〳〵と、返らぬ嘆きを道風制して。

菊の上の御入りあらば、亡者の穢れ、憚りあり、先づ先づ穏便々々。

〽夫婦兄弟打萎れ、一間の障子押し立てゝ、涙隠して待ち居たる、奥とその間を隔つれば、斯くとはいざや知り給はず、基經の北の方菊の上、女郎花を伴ひ出で。

ト奥より菊の上、女郎花を連れて出る。合ひ方。

菊の　道風どの、お歸りありしよな。

〽しとやかに座に着き給ひ。

最前、置霜どのに申せしかど、お聞きあつたか、ないかは知らず、短かう云へば、頼風と女郎花とを、娶合はせたさ。様子は互ひの心にある。お受けあらば父御の喜び、自らとても嬉しさは同然。是非承引の取結ひ、偏へに頼

みますわいなう。

〽とありければ。

道風　ア、、成る程、先達てお成りの樣子は、承つて驚ろきしが、云はゞ天地黒白の御緣組み。常體なれば御辭退申す筈なれども、弟は勿論、某とても、お咎めにあふべきを、却つて姫君を、荒くれ武士の女房に下さるゝは、基經公の深き御賢慮と存ずれば、御辭退申し上げず、姫君を頼風が妻に、申し受くるでござりませう。

菊の　オ、、それは過分々々。繊弱の小野之介、人品骨柄よい武士。この上はいつまでも、變らぬ妹脊の契りを結び、たとへ如何やうの身にならうとも、姫を可愛がつてたもいなう。

〽仰せに置霜。

置霜　コレ申し、御挨拶々々々々。

〽云へど頼風返答も、恐れ入りたるばかりなり。

菊の　ホ、、、。斯う云うて頼ますと、思ひ合ひたる緣なれば、睦まじうなうて叶はぬ筈。斯樣に親子兄弟、詞の固めが祝言の杯も同じ事。これでどこにも難曲なく、四海浪より治まる兩家。斯う治めて置いてから、道風どのゝ政道は、どうせうと思し召す。それ聞きたい。

道風　ア、、御尤も。及ばずながら某が政道、御覽に入れん。弟、來やれ。

〽と引立てゝ、一間の中に入りければ。

ト道風、頼風を連れ、奥へ入る。

〽どうなる事ぞと置霜も、一間を覗き、立ちつ居つ、心ならねば姫君も、兎や角案じ佗び給ふ、程なく道風、頼風に、どてら布子を着替へさせ、小腕取つて一間より、白洲へ撞と突き落し、

ト奥より道風、頼風に、やつし形に着替へさせ、繩帶させて連れて出で

今日より、勘當ぢや。

〽云ふ聲さへも荒氣なく、障子をハタと引立つれば、驚ろく置霜、女郎花、庭にしよんぼり頼風の、淺ましきその姿、二目とも見もやらず、かつぱと伏して泣き給ふ。

菊の　コレ、娘、なに泣きやる。めい〳〵の皆覺悟ぢやないか。未練な人ではあるわいなう。道風どのゝ政道を、見たからは、自らも。

〽姫の丸綿帶ぐる〳〵と引きほどき、裲襠上着取り給へば、下には賤が太布染、夫婦一緒と、緣より下へ突き落し。

互ひに不義の科は同罪、女郎花も勘當ぢやぞ。

女郎　ハア。
〽ハツとばかりに、伏し轉び、泣くより外の事ぞなき、
頼風は一間に向ひ。
頼風　これまでは兄者人、父に代つて御養育忝なし。生れてより、一日片時も、お側を離れず暮らせしに、我が誤まりより御勘當、この身ばかりか姫君までも御難儀、申し上げん詞もなし。今生の暇乞ひに、今一度兄弟の、詞を交して下さりませう。
〽嘆けば、共に女郎花、
女郎　自らも母上に、いま別れて、いつか又、お顔を見られる事ぞいなう。
〽二人は互ひに身の上を、悔み嘆くぞいぢらしき、いつの間にか兄道風、庭の切り戸を押し明けて、出づるその身も昔の布子、皆々これにと驚ろけば。
ト上手より、道風、石持の着附け、手拭をかぶり駒下駄穿き出て、枝折りの外より
道風　オヽ、勘當の弟に、詞交せば、官位の穢れ、昔の形で暇乞ひ。其方は只今云ひし通り、父篁、相果て給ひてより、兄弟一緒に渡世を營み、出るにも、入るにも兄弟連れ、樂しみは共に樂しみ、悲しみあらば共に悲しみ暮らせしに、乳母は死ぬる、弟には生別れ、たとへ貧苦に逼るとも、兄弟一緒に暮らしてこそ、浮世に住んだ甲斐もあれこれを思へば、矢ッ張り職人がましならめ。
〽あゝうるさの冠裝束や。
公卿にならずば頼風を、勘當もせまいもの。
〽弟を思ふ眞實心、小野之介も咽び入り。
頼風　有り難きお志、いつの世にかは忘れ申さん。兄者人、
道風　弟よ、
〽手に手を取つて諸袖の、布子を絞り泣きけるが、
いつまで云うても、盡きせぬ名殘り……コレ、この銀は、この形で、儲け溜めたと云うてやる。心遣ひは氣兼ねの黄金。隨分無事で、時節を待ちやれ。さらば。
ト行かうとするを、
頼風　アモシ。
ト止めるを振り切つて
〽云ひ捨てゝ、切り戸へ入れば。
ト上手へ、思ひ入れあつて入る。
〽置霜も、兄弟の氣を察しやり、共に嘆きを菊の上、胸までせきくる涙を隱し。
菊の　コレ、女郎花、いま道風どのゝ、姿を替へて兄弟の

暇乞ひ、よう見てか。自らは母の親、生別れする娘に、暇乞ひがしたけれども、憐れをかけなと、父上の嚴しい云ひつけ。とは云ふものゝ、これまでに、荒い風にも當てぬ身を

〽夜の臥床は野の末か、人の軒端に佇むとも。

必らず〳〵父の名ばし明かすなよ。たゞ賴風を兩親とも、同胞とも、思うて明暮れ大切に、女の道を背くなよ。返す返すも小野之介、不便をかけて下されいなう。

〽別れを惜しむ恩愛の、涙に咽び入り給ふ、一間の中より道風、裝束改め、靜々立出で

ト音樂になり、道風、裝束にて出で。

道風　ヤア〳〵、家來ども。中門を開き、見苦しき二人の者ども、叩き出せ、ほい出せ。

家來　ハア、。

〽下知に從ひばら〳〵と、てん手に割り竹、擲き立て擲き立て。

ト下手より家來大勢、出て、割り竹にて兩人を追ふ。

〽追ひまくられてしを〳〵と、立端に迷ふ濡れ鷺の、いづくをさして行くぞとも、問はれぬ義理は他人と他人、睨む道風、泣く母上、中に立ちたる置霜が。

置霜　お二人ともにお氣強う、旅は憂いもの辛いもの、落ち付く所を、知らせの文。

〽假名で云はれず眼で敎へ、仕形を覺る小野之介、一間の中に亡き母の、親見る事も泣き別れ、四鳥の別れ鳥の跡、手跡の繼道風が、末世に殘す筆法の、畫を離れて出て行く夫婦、いとし可愛も今の身に、思ひ知らるゝ旅の空。

菊の　知るべの方は定めなき。

賴風　有爲轉變もおのが罪。

道風　おのれを責むる。

皆々　小野の家。

〽伴ひ出づるぞ。

ト兩人、追ひ立てられ、花道へ行く、置霜、法輪尼の死骸を見せ、菊の上、思ひ入れあつて

置霜　コレ

トこれにて賴風、女郎花、バタ〳〵と本舞臺へ戻る

〽わりなけれ

トこれにて皆々よろしく、引ッ張り、三重にて、

幕

小野道風青柳硯（終り）

祖父は山へ柴刈に
祖母は川へ洗濯に

楠昔噺

二幕

この狂言は餘り歌伎舞でも多く上演されなかつたので、歌舞伎式のカタリを發見する事が出來ず、義太夫の割註だけで止めて置いた。

下掲の凸版は元治元年正月中村座上演の際の繪本の三の口である。

本文に挿入したのは、その當時發行された正本體草双紙の挿繪である。

楠三の口

楠昔噺

上の巻

河内生駒山の場

役名――百姓、德太夫。同女房、おくら。賤の女。おしづ。同、おしも。軍卒、團子平。百姓、畑作。同、又平。

本舞臺、一面の山幕。松栢の吊り枝。谺の合ひ方にて幕開く。

ト山賤四人、鉞を持つて出て

山一　なんと皆の衆、この生駒の奥へ切り出しに行くが、岩道ゆゑに氣を付けうぞや。

山二　そりや御苦勞でごんす。あの岨道を行く方が、登りようごんすわいなう。

山三　オヽ、それ／＼、此方へ行くと、根笹に茅原で、行き憎うごんすわいなう。

山四　どうで夜に入る仕事ゆゑ、灯は用意して置いたわい。

山一　そりや好い手廻しであつた。

山二　時に、そろ／＼行きやんせうか。

山三　サア、ごんせ／＼。

ト皆々上手へ入る。淨瑠璃になる。知らせにて山幕を切つて落す。德太夫は腰に鎌を差し、おくら、盥に洗濯物を入れて、兩人よろしく立ち身。舞臺は向う打拔き山の遠見、山坂登りあり、蔦葛の松の吊り枝。舞臺、流れの模樣、岩組み見事にあり、下手に山の打拔き、花道兩側、岩組み、谺、山颪しにて道具とまる。

〽昔々その昔、爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯にと、子供すかしを今爰に、思ひ合せし河内の國、松原村に年を經て、身の達者なる德太夫、七十越えし老の坂、柴刈りに行く道連れと、婆も六十路のみつはくむ、洗濯盥頂いて、鶴の比翼の友白髮、誘ひ合うたる一群れは、殊勝にも又しをらしゝ。

くら　サア、親仁どの、これから山へは二三町、怪我せぬやうに行てござれ。その間にわしは洗濯しまひ、連れ立つて去にませう。必らず／＼、重荷をおつまいぞや。

德太　重荷を持てと云やつても、膝節がかく付いて持たれ

ぬ。若い者どもが苅つて置いて、よい程に荷をしてくれ
ろ。これと云ふも、智の知惠を所の者が借りる追從。お
れ程仕合せな者はおぢやらぬ。畢竟、山は腹こなしの遊
び仕事、苦になる程なんの持たうぞ。つい一走り行て來
る程に、其方も、川で怪我せぬやう、洗濯仕舞うて待つ
て居や。
くら　オヽ、わしが事を苦にもせずとも、七曲りで辷らぬ
やうに。
德太　そりや氣遣ひしやんな。
〽云ひつゝ別れ生駒山、平岡山の九十九折、杖を力に老
の足、實に檀特の峯を分け、難行ありし身の上を、思へ
ば念佛噛みまぜて、辿り行くこそわりなけれ。
　トよろしくあつて上手へ登り入る。
〽影見ゆるまで婆は見送り。
くら　いとしや、去年まで、あのやうな足元でなかつた
に、一年々々弱りが見えるわいなう。
〽思ふも同じ老の身の。
ドレ、しまひ事して、戻りを待ちませう。
〽流れへ下りて洗ひ物、揉み洗ひより踏み洗ひと、川邊
の石を臺にして、かいげ柄杓のかけ水も、さつと打つて
はどん／＼／＼、サアとん／＼、サアとん／＼、磯拍子
や三ツ拍子、水さわやかにかけ流す。
　トこれより床の合ひ方にて、おくら、洗濯の仕草さまざ
　まにあつて、上手より柴苅り二人、柴を脊負うて出て
　來り
柴一　ハアヽ、こりや婆さま、精が出ますなう。
柴二　あれを見やれ、手利きでなうて、足利きぢやなう。
〽笑うて行くを。
くら　これは／＼皆の衆、明神坂は辷りはせぬか。親仁ど
のは後へ見えるかいなう。
〽と問へば口々に。
柴一　見える／＼。追ツつけ爰へ。
柴二　それ／＼、これへ戻らんすわいなう。
〽山路の友のしをらしく、指さし敎へ行き過ぎる、老木
の松の枯れ枝に、肩を借り脊を借りて、下りる坂道とぼ
とぼと、歸り來るを、婆は見るより。
　ト柴苅り、よろしくあつて入る。上手より德太夫、柴
　を脊負ひ、杖を突き出て來る。
くら　オヽ／＼、待つて居る／＼。思ひの外早かつたな
う。

元治元年正月中村座所演

草双紙所載坂東亀蔵の徳太夫　六世市川團蔵のおくら

〽と云ふを力に歩み寄り。
徳太　其方はまだしまはずか。そんなら一休みせう。
くら　わしも一服しませう。
徳太　おぬしも
くら　お仁どのも
二人　オヽ、話さうわい。
〽どつさり下ろす柴よりも、腰打つ音が響きける、二人はほつと吐息つき、煙草くゆらす折柄に。
〽小柴賣るてふ賤の女が、戀の山坂情で越して、越して木の根おや、そして石高おや、堅い同士に脊負うた籠の、竹の伏戸へ差込む月が、しかも十五夜十六七の、さゝげ島田かかつくりそくり、横に根締の花ならで、色の戀に出たます戀の薄、招く姿がしよんがえ。
ト　おしも、おしづ出て、よろしく振り事。
〽わしは獵人ぢやなんなけれども、宵に貰うた鐵砲汁で、笹が杉田の梅ならば、犬の足跡紅葉は鹿子、萩に伏猪の五匁玉で、當り外さぬ三ツ打ちやシヤン／＼、狐ぢや、そりやこそ獵人、ヨイ／＼庄屋さん、廻りの道そば道づたひ、浮れ狂うて來りける。
ト　よろしく舞臺へ來り

しづ　お前は松原村の徳太夫さん。
しも　婆さんと二人して
しづ　草臥れ休みの煙草ぢやの。
徳太　オヽ、日下村の姐御連。
くら　お前方も、大層精を
二人　出し居るの。
しづ　今日はおしもさんと二人して、向ひ山へ行つたわいな。
徳太　オヽ、さうか／＼。仕事しまうたら、この間生駒山の聖天樣のお祭りの時、練り物に出た舞ひ事を、わしにも見せてくれぬかい。
くら　こりや面白い事であらう、わしも見たうござるわいの。
しづ　それでもどうやら
しも　恥かしうて。
徳太　なんの恥かしい事があるものぢや。こなたも一緒にやつて見せいやい。
しづ　そんなら爰で。
二人　サア／＼、やつたり／＼。
ト　兩人は肌脫ぎになり、手拭を持ち前へ出て

〽逢うてサ、逢うて戻る夜は晝より増る、朧月夜の花の顔〽逢はで戻らば紅葉の色も、戀の闇路に見え分かぬ。〽そこで生駒の聖天様へ、無理な願ひの思ひをかけて、とても濡れたる袖ぢやもの、あれ浮名と云へば、エ、契りが淺いよな。〽深き戀路に沈みもやらず、浮いた同士がヤレ矢ッ張り深い、心中なんぞはエ、しともなや。

トよろしくある

徳太　ヤレ／＼、面白い事であつたわいなう。

しづ　手振りも合はぬ今の舞ひ事。

しも　必らず笑うて

二人　下さんすなえ。

しづ　サア／＼去なうぢやあるまいか。

しも　そんなら婆さん。

しづ　徳太夫さん

二人　もう去なしやるか。

しも　アイ、ゆるりと休んで

二人　ござりませ。

〽小褄からげて兩人は、麓をさして急ぎ行く。

ト兩人入る。

くら　あの子供連れの振り事で、うか／＼と隙どつた。ドリヤ、洗濯を仕舞ひませうか。

徳太　ア、、年は寄るまいもの。二三年前までは、二十貫目程背負ひ、人にも羨やまれたおれが、段々と十貫目も背負ひ憎い。若い者が苅つて置いてくれたのを、やうやう荷付け程持つて戻つた。婆、いかう加減が、違うた違うた。

くら　ハテ、そりやその筈。橙の數から見ては、未だ達者な者ぢや。これから洗濯仕舞うて、連れ立つて去にませふ。

徳太　ア、コレ、お婆、滅多に捲り上げたな。どこぞの仙人が見たら、昔を思ひ出して通を失ふぞや。

くら　何を云はしやるやら、よい機嫌ぢやなう。ほんに、その機嫌の時に云ふ事がある。コレ、親仁どの、こなたが勘當した竹五郎の方から、わしが所へ内證で、切々の詫び言状。腹も貸さず、顏も合はさぬ此わしを、母様参ると書いておこす志し、今は氣も直り、大きな出世。

徳太　コレ、婆様、また云やるかいの。聟どの丶正作にさへ、養はれぬおれが、出世したと聞いて、勘當赦しては、養うてもらひたさと云はれるが無念な。竹五郎めを勘當したは、其方と添はぬ先の事。十一や二で山へ遣れば、

兎や狸を殺して殺生をひろぐ。耕しにやれば、牛を馬にして乗打ちの稽古。云うた事はせねば、措かぬ片意地者。娘おとはが孝行、血を分けた其方を差措き、赤の他人のおれを、眞實の親と思うて、大切にしてくれる。また聟の深切、五ツや六つの孫までが、祖父さま／＼と廻す嬉しさ。おりや外に、可愛い者はおぢやらぬわいなう。

くら　ソレ、其やうにわしの連れ子のおとはが事を、云うて下さる程、こなたの子を勘當さして見ては居られぬ。殊に聟の正作は、牛博勞に行くと云うて、この春から内を出て、今に戻らぬ。娘一人では力ない。どうあつても勘當の詫び言。機嫌直してやつて下されいなう。

徳太　ハテサテ、くどい人ぢや。其やうに竹五郎が事ばかりを苦にしておゐやるゆゑ、肝心の聟の身の上が、耳へ入らぬ。あの正作はノ

くら　ア、イヤ、コレ、こなたが聟や娘の事を苦にしておやによつて、大事の息子の出世が耳へ入らぬ。あの竹五郎どのはノ。

徳太　また云やるわいの。おりや悴めが身の上は、聞きたうない。

くら　さう云はしやれば、わしも又、聟の事は聞かいでも大事ござらぬ。

徳太　そんなら互ひに

くら　云はざる

徳太　聞かざる

くら　オヽ、いつそそれもまし。

徳太　庚申待に。

くら　ゆるりと

兩人　話さうわいなう。

〽猿が守りたる洗ひ物。

くら　ドリヤ、ゆすいでしまはうか。

〽川へおりしも谷川の、水の面へ流れ來る、花の一枝取上げて。

ト橘の花の枝流れて來る。おくら、取上げて

これはマア、見事な花。ま一ツ來い。祖父におます。

〽祖父にやらうと呼び立つれば。

オヽ、來たぞ／＼。ま一つ來い。孫に遣らうぞ。

〽拾ひ取り上げ。

コレ／＼、親仁どの、見事な花が流れて來た。マア、なんと云ふ花ぞ。

徳太　オヽ／＼……そりや花橘と云うて、大きな實の生る、

めでたい物。土產にしたい。おれにくれ。

くら　オヽ、欲しくば進ぜう。大方孫に土產であらう。

徳太　イヤ、孫へは好い物がある。山で取つて來たこの土產、今日は何も土產がないと思うたれば、雀が一羽、袖口から飛び込んだ。懐へ入つた者は、獵人も取らぬと云ふに、おらは坊主めに遣らうと思うて、翅括つて持つて戻つた。コレ／＼、見や。

〽と出して見せれば。

くら　これは／＼、好い物取つてござつたの。なんと、わしにその雀、下さらぬか。

徳太　ハテ、望みなら、橘と替へ事せう。

くら　そりや嬉しうござる。そんなら親仁どの

徳太　サア、替へておまさう。

〽と取交し。

イヤ、お婆、なんぼうケン／＼云やつても、血筋は忝ないものぢや……おれが遣る雀を、こなたが遣らうで、取つたの／＼。

くら　イヤ／＼、孫にやるのぢやござらぬ。竹に雀と云へば、竹五郎が羽を伸す吉左右。糊を喰はして養ひまする。

徳太　エヽ、そんなら舌切つて去なさうであつたもの。

くら　こなたは又、その橘を、孫に土產であらうがの。

徳太　ハテ、聟の正作は橘氏と聞いた。五月祝ひに橘が手に入ると云ふのは、聟や娘に花實が咲く瑞相。持つて去んで女夫の者に喜ばす。

くら　エヽ、そんならおれも、引むしつて捨てうもの。

徳太　ソレ、それが惡い。

くら　イヤ、こなたが惡い。

〽互ひに實の子を捨てゝ、生さぬ仲をば思ひ合ふ、曇らぬ心日の本の、神も憐れみ給ふべし、さのみは如何と折れ端も早く。

くら　アヽ、もうようござる。わしの方から負けて出て、連れ立つて去にませう。

〽盥片け居る所へ、麥苅り男二人連れ。

ト上手より又平、畑作、百姓姿にて出て來り

又平　なんと畑作、いつぞやの天王寺の合戰見たか。楠と云ふ和郎は、强い和郎であつたなう。

〽云ひつゝ通るを、爺は呼び留め。

徳太　ハテ、こなた衆は、面白い話しして行くが、そのマア天王寺合戰といふは、どんな事であつたぞ。この邊から僅か二里餘りの所なれども、切ツつはツつの劍の中、

元治元年正月中村座所演　草双紙所載

中村鶴藏の百姓　中村鴈八の百姓

慥かに誰れと見た者もござらぬ。直に見た話しが聞きた
いなア。
〽問へば見自慢、一人の男。
畑作　おいらはノ、團子賣りに行てよう見ました。六波羅
から、隅田高橋とやら云ふ和郎が、五千餘の強者を連れ、
雁の渡るやうに。
〽押寄せられた所に、彼の楠どのゝ、三百餘騎の勢を隱
して置いて、やつとうとうが始まると、彼所からはぬつ
と出し、爰からはによつと出し。
又平　出す程に切る程に。
〽こりや堪らぬと六波羅勢、足を切られ腕切られ。
畑作　逃げた所が渡邊橋。
〽かぼそい橋を押す程に、橋桁折れてめき／＼／＼、五
千餘騎が頭顚倒。
又平　鎧武者が水にあうて、瓜茄子の流れるやうに、どん
ぶりこどんぶりこ、どんぶりこ／＼、赤恥かいて
畑作　隅田高橋、逃げて行くへはなかりける。爺樣さらば。
〽と走り行く、話しの中より爺はぞく／＼。
徳太　なんとお婆、聞いたか。楠どのが六波羅勢に勝つた
といなう。強い和郎ぢや。末代までの大手柄。これ程嬉
しい事はない。
〽と喜び勇めば。
くら　コレ、親仁どの、楠が負けうが勝たうが、此方の荷か
せにならぬ事。それをそれ程嬉しいは、こなた、楠と云
ふ和郎に、深い緣でもあるか。
徳太　イヤ、マア、さして緣があるでもないが、其方、楠
を知らずか。
くら　イヤ、わしや知らぬ。
徳太　そんなら、おれも知らぬ。
くら　其また知らぬ人の勝つたを、滅多無性に。ハテ、面
妖な喜びやうでござるわいの。
〽不思議立てられうぢ付く所へ、剃下げ奴の肌に鎧、軍
の供と見るよりも、やがて婆は引留めて。
ト上手より團子平、陣笠かむり出て來る。
くら　モシ／＼、奴さま、いつぞやあつた天王寺の軍、楠
とやらが勝つたと申すが、ほんの事でござりますかな。
〽問へば突退け。
團子　なに馬鹿つくす。その勝つたのは騙して勝つた。そ
の後、また宇都宮公綱に負けた。
くら　ヤア／＼アノ、宇都宮の公綱どのが、楠に勝つたか。

團子　オヽサ〳〵、その宇都宮どのは身が旦那。强い人强い人。隅田高橋が逃げた後へ、僅か身共ともに五百騎の勢で駈け向はれた所に、彼の楠の古狸、一戰にも及ばず、牛蒡程の尾を振つて、逃げた〳〵。
くら　ハテナ、それは手柄な事ぢや。さうして、その後はどうぢやの。
團子　ハテ、根問ひをする和郞ぢや。主人公綱は、楠を討ち洩らしたを無念に思ひ、五百騎の勢を、天王寺に留め置き、いま軍の評議最中。
くら　して〳〵、その後は
團子　ハテ、くどいわサ。その後は、もう無い。皆だ〳〵。溜つたら又話しに來べい。身共、用事あつて國へ歸る。必らず逃ぐると思ふなよ。
〽入らざる念で落武者と、看板打つて通りける。
　ト團子平、こなしあつて入る。
くら　ヤレ、嬉しや〳〵、宇都宮どのが勝つたといなう。親仁どの、聞いてか。楠に敵はぬ〳〵。日本一のお手柄ぢや。
〽ほた〳〵云へば、爺はむつとし。
德太　ヤイ、コリヤ婆、よい程に喜んだがよい。有やうは宇都宮と、緣があるか、近付きか。
くら　イヤサ、緣もなし、近付きでもござらぬわいなう。
德太　近付きでもない者が、なんでそれ程に嬉しいぞ。アタ面妖な和郞ではある。
くら　こなたも最前、楠が勝つたを聞いて、喜んだではないか。
德太　オヽ、おれが喜んだのには、ちと譯がある。
くら　わしも嬉しがるには譯がある。
德太　その譯、聞かう。
くら　マア、こなたのから聞かう。
德太　イヤ、云はぬ。
くら　おれも云はぬ。
德太　われが云はぬからは、宇都宮が勝つたのは噓ぢや。
くら　イヤ、楠の負けたのが定ぢや。
德太　イヤ、噓ぢや。
くら　定ぢや。
德太　イヤ、此奴は口が過ぎる。コリヤ、先刻に遣つた雀を返せ。
くら　わしが遣つた橘も戻し居れ。
德太　ソレ戻す。

くら　オヽ、返す。
〽互ひに違つたを取戻す、八十の三つ子と、譬へに變らぬ愚かさよ、橘取つて、
コレ、親仁どの、蛸の氏ぢやと云はしやつた、この橘を、コレ、この通り。
〽かなぐり捨つれば。
德太　われが竹に雀と祝うた雀を、舌切り雀にしてくれる。
〽嘴折つて追ひ放し。
アタどんくさい。去んでくりよ。
くら　おれも去ぬ。
德太　勝手にせい。
くら　オヽ、勝手にするわい。
〽負けず劣らず腹立ち紛れ、日の暮れ紛れ、爺は盥を頂けば、婆は柴を背に負ひ、むしやくしや腹の取違へ。
　トよろしくあつて
〽我が家へこそは。
ト双方、荷を違へ、氣が附いて投げつける。三重にて
よろしく

幕

下の巻

德太夫住家の場

役名――百姓、德太夫。同女房、おくら。正成妻、おとは。公綱妻、照葉。一子、千太郎。娘、みどり。百姓、畑作。注進、宇澤の八郎。宇都宮公綱。
楠多門兵衞正成。

本舞臺、三間の二重。上手、反古貼り障子屋臺、正面、納戸口、赤壁、押入れ、下手、牛部屋。前へ莚を下げあり、その下手、藪疊。いつもの所、藁屋根の門口、在鄕唄にて幕明く。
〽立並ぶ、軒の菖蒲に蓬草、端午の節句、門の口、立つる幟は鶴龜の、齢を我が子へ鎗長刀、母は粽の粉を挽けば、臼より延る幼な子の、千太は側に眞菰草、むしる悪さも時に連れ、葭芦の葉の片襷、手助けすると心では、褒めるも親の慾目かや。
ト門に節句の幟立てある。女房おとは、臼挽いて居る。千太郎、側で人形廻して居る。下手より、百姓三人、出て來り

草双紙所載　河原崎権十郎の公綱

百一　オヽ、おとはどの、よう精が出ますなア。
とは　オヽ、近所のお前達、畑から今お歸りでござります
かえ　マア、煙草でものんで、休んでござんせいなア。
百二　時に、親仁どのは、どうして居られるな。
百三　イヤ、爰の親仁どのは達者で、今に山へ柴苅りに行
きやんすが
百一　オヽ、それ〳〵、若い者と同じ事ぢや。
百三　また婆どのも、おまめでようごんす。千太がよう惡
さをしやるなう。
とは　なんぞ用なら父さんを。
百一　イヤ〳〵、仕事戻りに寄つたのでごんすわいなう。
百二　時に、そろ〳〵去なうではないか。
とは　マア、澁茶なりと進ぜうか。
皆々　イヤ、また明日尋ねませう。
百二　親仁どのに、よう云うて下んせや。
とは　よう尋ねて下さんした。
皆々　そんならお内儀。
とは　ようござりました。
〽挨拶そこ〳〵氣散じに、我が家〳〵へ立歸る。商賣は
箭の長刀箭の鎗、一荷にしやんと打かたげ。

ト向うより、公綱、商人の形にて、脚絆、草鞋にて、
長刀菖蒲刀を一荷に擔うて、出て來り
公綱　サア、買つたり〳〵、お子達の祝儀物、雲に羽を伸
す大鳥毛、赤熊に毛鎗大身鎗、素鎗、管鎗押込んで、代
物僅か十文字、安賣り召せや、召しませ〳〵。
〽口早にこそ賣りにける、近所の子供千太郎、共に立寄
り、あれこれと、見廻す顏をじろ〳〵見て。
ト子供大勢出て來る。千太郎も内より出て見て居る。
ハア、、子供衆は欲しさうな顏。エヽ、盗んで來たのな
ら只遣りたいなア。只遣つては此方の口が長刀反り、鎗
頤になるゆゑに、只と云うてはマアならぬ。取分け爰
なお子、可愛らしい利口さうな目元、折れたがあるが、
やらうかや。
〽口紅云へば千太郎。
千太　イヤ〳〵、おりや欲しけりや買ふわいなう。
〽一本差され。
公綱　ても器量な息子どの、親御か見たい。好い育ちぢや
なア。
〽褒めそやすのを母親が、聞く嬉しさに臼の手を留め。
とは　コレ、鎗長刀買ひませう。休んでござれ。

〽思はずも、子に絆されて見ず知らずの、人にも愛想こぼれける。

ト雨車になり

公綱　これは忝ない。雨もぼろつく、濡らしてならぬこの代物。ちつとの間雨宿り。

とは　オヽ、易い事〳〵、庭は狭うて置かれまい。そこな牛部屋へ。その間に雨も晴れませう。

公綱　なんとお家樣、とてもの事に五六本、賣り剩りを上げませうかえ。

とは　イヤ、表に立てゝあれども、祝うて一本買はうと云ふ事でござんす。マア、煙草でも參れいなう。

公綱　イヤ、茶が入つたらツイ茶漬。それまではお煙草申し受け、煙草を借りて火を貰ひ、一服いたさう。

とは　そんなら、あの内でゆつくりさんせ。

公綱　左様なら、暫らくあれを借りまする。

〽一服致そと讃やが上、云ふも厚皮牛部屋へ、荷をかたげてぞ入りにける。

とは　オヽ、おとましや、伯母の家へ來たやうに。ほんに氣さくな人ではあるわいなう。

ト下手より、百姓畑作、重箱を持ち、出て來り

畑作　おとはさま、内にごんすか。

とは　オヽ、畑作どの、ようござりましたなア。

畑作　今日は草の餅をしましたに依つて、これを徳太夫どのに上げて下んせ。

とは　それは毎度、お心を付けて下さんして、有り難うござりまする。

畑作　なんの禮云ふやうなものではごんせぬ。そんなら徳太夫どの夫婦の衆に、よう云うて下んせや。

とは　ようござんしたなア。

ト畑作、下手へ入る。

千太　コレ母樣、父樣は、いつ戻つてござんすぞいなう。

とは　オヽ、おとなしう遊んで居やつたら、もう戻つてゞござんす。サア〳〵、この玩具で、おとなしう遊びやいなう。

ト使ひ人形をやる。

千太　おれもこの人形のやうに、鎧を着て、切合ひがして見たいわいなう。

〽と云ふ顏つく〴〵打まもり。

とは　栴檀は二葉とやら、ほんに優しい事、よう云やる。やんがて父樣が戻つてゞあつたら、褒めさんすであらう

わいなう。

〽透かしそやされ幼な子は、人形廻しに餘念なき、隔ての一間に爺の聲、

德太　娘、娘、

〽腰の二重の破れ障子、押明けてそろ〳〵立出で。

　ト上手より德太夫出て

なんとおとは、連合ひの正作から、便りがあつたか。

とは　主はこの春から大和通ひ、牛博勞に行かれましたれば、まだつと逗留でござりませう。

德太　その牛博勞も、今は鎧の馬博勞、楠正成と名の變つた事も知つて居る。

とは　エヽ、そりやマアどうして。

德太　イヤ、隱しやんな。大切に思ふ聟の身の上、根掘り葉掘り聞かずに置かうか。元あの和郎は、楠正氏、親御の代には八尾の別當と云ふ者と、國郡を爭うた程の家筋。正作の幼ない時、果て召されて、それより乳育ち、此方へ貰うて其方と夫婦にしたも、おれも萬ざら山賤の筋でもない。先祖の事は聟も聞いて居られう。軍に立たうが合戰せうが、なんで未練に留めようぞ。殊に其方は婆の連れ子、義理あるおれに隱すのは、心が惡い、聞えぬぞや。

〽恨みかけられおとはヽ、氣の毒、顏赤らめて居たりしが

とは　この事お聞き遊ばしたら、お年寄りの苦になる事、必らず云ふな、話すも折あらんと、夫の口留め、隔て云はぬと思し召もお道理、當春野飼ひの牛を枕にし、轉び寢の枕元、その上人のお越しあつて、南へ繋りし木の元に、休らうて居る男の子、都のお頼みなりと有り難い仰せ、今では楠多門兵衛正成と申しますわいなア。

德太　オヽ、成る程、常の孝行な心から、苦にさすまいと、隱せと云うたも、尤も。それで何もかも、おれが思うた通り、聞いた通り胸が晴れた。さりながら、心得ぬ事あれば、祖母へはこの話し、必らず無用。して、天王寺の軍に、宇都宮と云ふ者に、楠が負けたといふ噂、なんとそれは誠か。

とは　アイ、マア、その時は引かれました。

〽聞いて祖父は齒嚙みをなし。

德太　エヽ、口惜しや、二十も若くば、役に立たずとおれも。

とは　それ、其やうに苦に遊ばすに依つて

德太　愛しいわれが添ふ聟の身の上、苦にせいでよいもの

かゝまた聞く事も、云ふ事もあれば、孫を連れて一間へ
おおや、粽も祝うて巻かうし、軍に菖蒲は祝ひ草、敵の
首の葉をむしり、珠数繋ぎにしてやらう、
〽延喜を胸に米の粉を、引まつべ／＼、親子の者を伴うて
一間へこそは入りにけり〽はや夕陽に傾むく頃、表に美
美しき女乗り物、家來數多徒士の者、先走りが門口より
ト三人入る。向うより、鋲打の乗り物、供廻り大勢出
で、侍ひ一人、門口に來て
侍ひ　誰そおまうこ、德太夫とのお宅は、これでござるか。
〽尋ねに折よく祖母は立出で。
ト奥より、おくら出て
くら　成る程、これでござるが、どなた樣でござります
る。
侍ひ　ハツ、卽ちこれでござりまする。
〽云ふ聲聞いて乗り物より、出づる女中の花やかさ、五
つばかりな娘連れ。
照葉　宿外れで、休息しぞ、
侍ひ　ハツ。
〽家來を後にと追ひ戻し、靜々入るを、祖母は不思議と
打詠め。

くら　この住み佗びた茅家へ、結構なお姿で、どれからお
出でござりまする。
〽もてなせば、
照葉　イヤ、其やうに恭々しう、御意遊ばす者ではござり
ませぬ。定めてお前が德太夫さまの、奥樣でござりませ
う。
くら　ハ、、、勿體ない。ツイ嚊と仰しやつて下さりま
せ。
〽揉み手をすれば、こなたも手を突き。
照葉　私し事は照葉と申まして、德太夫さまのお子、竹五
郎が女房でござりまする。
〽聞いて手を拍ち。
くら　これは／＼、サア／＼此方へ。マア、何から云はう
ぞ、話さうぞ。文來る度々
ト文を出して
懇ろな入れ筆、逢うたは初めて、心は互ひに嫁姑、竹五
郎どのも、變らず無事でござるかの。
照葉　成る程、息災で、常住お前のお文を見ては、眞實の
母樣でも、これ程にはあるまいと、押頂いて居られます、
この度天王寺の合戰、敵を一騎に追ひ退け、士卒も歸さ

ず、主も逗留、勝ち軍とは申しながら心元なく、これなる娘みどりを引き連れ、密かに見舞ひ、次手なれども立寄つて、勘當の詫び言。孫娘の顔も見せたら、爺御様のお心も和らがうし、又一つには、この度天王寺での高名、宇都宮公綱と武名を顯はし、楠を追ひ散らせしと申し上げなば、よもや勘當お赦しない事はあるまいと、勇みに勇んで參りましてござりまする。

〽語れば祖母はあたりを見廻し、

くら　コレ、嫁女、親仁どのに逢うたりとも、宇都宮と云ふ名は云ふまいぞ。まして楠に勝つたと云うたら、並大抵の事ぢやあるまい。その譯密かに話して聞かさう。みどりを連れて、マア奥へ。

〽心有り氣な指圖には、嫁とは云はれず、氣も濟まねど、

照葉　然らば左樣に致しませう

くら　そんなら嫁女。

照葉　サア、みどり、おぢや。

〽娘を連れて奥の間へ。

ト本釣り鐘にて、照葉、みどりを連れて奥へ入る。

〽はや入相の鐘の音も、胸に響きて老の身の、思案とりどりなる所へ、祖父は一間を立出で〻。

ト　おくら、いろ〳〵思ひ入れある。奥より、徳太夫出て

徳太く　ナウ、お婆、昨日川端で諍うてから、おぬしも物云はず、おれも云はぬが、いかう氣詰まり。ちと話す事もあり、なんと仲を直さうかい。

くら　オヽ、わしや疾からさう思うて居りました。シタガ、こなた、なんぞ聞きやせぬかや。

徳太　イヤ、何も聞かぬが、コリヤ、先刻にこなた、なんぞ聞いたか。

くら　イヤ、わしも、なんにも聞かぬ。

徳太　サア、さう云やるで話し悪い。いつそ二人が胸の内、一度に話さうぢやあるまいか。

くら　こりやよからう。マア、その胸の内は。

徳太　サア、互ひに胸を

くら　明し合ひ。

徳太　こりや

兩人　話せるわい。

くら　して、その話の發句は、どうでござるの。

徳太　サア、その發句と云ふは、ア、昔々さる所に、爺と婆があつたわいの。

くら　オヽ、こりや珍らしい話しぢやの。大方その爺の息子に、勘當したのがあつたであらう。

徳太　オヽ、あつた／＼。その忰が出世して、宇都宮公綱と云うたげな。

くら　ムウ、それこなた、知つて居るか。

徳太　知つて居るとも／＼。

くら　そんなら、わしも話さう。その又お婆の娘の聟に、楠正成と云ふのがあつたといなう。

徳太　ヤア、それをこなたも知つて居るか。

くら　知つて居るとも／＼。

徳太　サア、そこが話の肝心關門。その勘當した忰と、大切に思ふ娘の聟と、劍を摸り合ひ、切ツつはツつ、命を果さんとするげな。サア、その親の身になつての心、悲しいとも情ないとも、胸を刃で裂かるゝ思ひ。

〽聟を思ふ父親を、息子を庇ふ母親も。思ひは一つ斷末魔、共に悲しからうなう。

〽語れば祖母は泣き出し。

くら　ナウ、その事を思うての幾瀨の案じ、義理と義理とに隔たれば、夫婦親子も敵味方、別れ／＼にならうかと、それぱかりが悲しうござる。云はば互ひに意趣遺恨、あつての軍するでもなし、丸うするのが親の慈悲、思案して下されいなう。

〽縋り嘆けば。

徳太　オヽ、それを思はぬではない。たつた一つの料簡、云うて見よう、聞いてお見やれ。見れば最前、宇都宮が娘、みどりとやらを連れて來た。其みどりと、聟の正成の子の千太郎とを、夫婦の緣を組み置けば、子に絆される親心、おのれと和睦の筋にもならうか。これより外に思案はない。

〽云ふに涙の目を押拭ひ。

くら　面白い／＼。否と云はれぬ和睦のさせやう。オヽ、嬉しや、それで落ついた。

徳太　すりや、この思案がよからうか。

くら　よいとも／＼、上分別。善は急げぢや、今爰で、祝うてちよつと杯事。

徳太　オヽ、よからう。おりや千太を連れて來う。其方はみどりを。

くら　オヽ、合點でござる。

〽色も直つて氣も勇み、祖父は勝手へ行く後に、祖母は一間の方へ行き。

みどり、みどり
みど　アイ。
〽アイと答へて出て來るを、片へに連れて小聲になり。
くら　おれが云ふ事、よう聞きや。女子と云ふ者は、小さい時から云ひ號けの、殿御持たねば人が侮どる。祖母が好い殿御を持たさうぞや。
〽云ひ含める其うちに、祖父は千太に着初めの上下、吉野折敷に松と竹、德利の口の引裂き紙も、蝶花形の心にて、いそ〳〵連れ出て座に直し。
德太　なんと、めでたいでないか。孫と孫とが一世一度の祝言、祝うて立てた松と竹、鶴龜は巖にあり、尉と姥は其方とおれ。道具が揃うた。祝うて謠はう。
くら　オヽ、小聲でたつた一口。
〽オツと心得扇を開き。
德太　七つになる子が、いたいけな事云うた。
〽殿が欲しいと謠うた。
ハヽヽ、これで祝儀は納まつた。サア、杯を。
〽取上げ、さゝんとする後より、照葉見付けて走り出で土器取つて打ち割れば、おとはも駈け出で、我が子を取つて引退くる、祖父祖母はハツと氣の毒の、胸撫で下ろすばかりなり、照葉元より張り強く。
ト杯の所へ照葉おとは出て、文句の通りある。兩人、思ひ入れ。
照葉　コレ、申し、お二人樣、始終の樣子聞きましたが、よう思うても御覽じませ。夫公綱は六波羅方、楠どのは都方、敵と敵との子供等を、祝言さしてはお上へ立たず。申し憎いがこの照葉も、長崎四郎左衞門が娘、逃げ足早い楠の子と、緣組んだと云はれては、子孫までも家の名折れ。それとも親甲斐でなさる事なら、とてもの事に楠どのに降參させ、和睦あつた上の事。
〽と聞くよりおとは、
とは　コレ、照葉さまとやら。降參とはなんの事。引くも駈けるも軍の習ひ。天王寺の合戰に、連合ひ正成引いたるは、五千餘騎の軍勢を、追ひ散らしたるその後へ、小勢で向ふ宇都宮、天晴れの武士、一面目與へてやるが武士の情と、わざとその場を引かれました。逃げ足早いとは舌長な。
〽とせり込むれば。
照葉　イヤ、好い手な事仰しやんな。情で軍に負ける法があるか、聞かう。

とは　オヽ、云はう。
〽夫思ひの兩人が、肱張りかゝれば、祖父は手を上げ。
德太　ヤレ、その爭ひ、聞くにや及ばぬ。すりや、どうあつても孫どもに、祝言さす事ならぬぢやまで。
兩人　アイ、その儀は御免下されませう。
〽詞揃へば。
德太　もうよい／＼。ナウ、祖母、はや日も暮れた。看經しませう。佛壇へ御灯火上げてくれ。
くら　オヽ、無明を拂ふ大燈明。
德太　胸の曇りを、晴らさう、ござれ。
〽手を引合うて祖父祖母は、一間へこそは入りにける、後打眺め嫁娘、分けておとはは氣にかゝり。
とは　コレ、千太郎、其方は祖父樣のお側に付添ひて、なんぞ變つた事あらば、聲を揚げてわしを呼びや。サア、早う／＼。
〽と追ひやれば、照葉も娘引寄せて。
ト千太郎入る。
照葉　其方は祖母樣のお側へ行て、隨分御機嫌取りや。祝言の事御意あらうとも、必らず合點せまいぞ。ありや內證から手を廻し、頼んだお方があつての事ぢやわいなう。サア、早う行きや。
トみどりを奥へやる。
〽當こすつて、娘も奥へやる間も待たず。
とは　コレ、照葉さま、その頼み手とは誰れが事。
照葉　オヽ、外ならぬ、お前の事、お連合ひ楠との、負けに負けてお身の上が氣遣ひさに、子供同士縁組ませ、それを囮にこの軍、引いてもらふと云ふ企み。ならぬ事ならぬ事、天王寺に扣へた軍勢は、心一致に身を固め、楠討たぬ其うちは、たとへ唐天竺が一つになつても、攻めても動かぬ。逃げるやうな侍ひと、金鐵武士はそれ程に。
〽違ひやんすと仄めかす、聞くにおとはゝ猶無念、とは云へ引いたは逃げになり、生中夫が武の情、今身の仇となつたるかと、思へば悔しさ口惜しさ、齒の根を碎き身を慄ひ、悔み淚の折柄に、一間の內の小庭より、ぱつと燃え立つ火焰は如何に、蛇の卷く如く合ひ圖の狼煙、ひらりひら／＼上ると其まゝ、秋篠外山生駒山、火の手を合す遠篝、數千本の旗飜へり、関をどつとぞ上げにける、見るに愕り、中にも照葉。
トよろしく狼火あがる。兩人、思ひ入れ。
照葉　これぞ敵方の隱し勢、味方の樣子氣遣ひな。

草双紙所載　市川新車の照葉

昔葉若のおとは

〽駈け出すを、おとはゝ飛び付き引つ捕へ。

とは　唐天竺が攻めかけても、びくともせぬと仰しやつた、お口に似合はぬ、なんで氣遣ひ、楠が妻おとはが留めた。

お邪魔いたすが、合點か。

〽と彎腰しつかと取り付けば。

照葉　ホヽ、殊勝らしや、何遊ばす。野山に育つて耕しの、牛綱引くとはお當が進ぶ。宇都宮が女房照葉、ならば手柄に留めて御覽ぜ。

〽踏み出す足は柳の枝、柳の腰に雪折れは、ござんすまいと引いて行く

とは　どつこい〳〵お笑止や。殿御と合した御腹をば、瓢簞なりに締め切るか。御運がよくば唐織が、二重廻りを引切るか。二つに一つは定のもの。

〽引戻せばたぢ〳〵〳〵、龍田の紅葉顏に散り、裾にちら付くばかりなり、猶も押へてせり合ふうち、一間に切り合ふ劍の音、ぱつと立つたる血煙りに、二人はハッと胸騷ぎ、爭ひ捨てゝ走り寄り、障子ぐわらりと引明くれば、朱に染みたる祖父祖母の、今を限りの有樣に。

ト兩人立廻りよろしくあつて、一間を明けると德太夫おくら、白刃を持ち、双方手負ひのこなし。

照葉　こは何事を云ひ上り、斯く成り給ふぞ。

兩人　淺ましやなア。

〽縋り嘆けば母親は。

くら　恥かしや嫁女、娘、斯うなるまいと思ふから、孫と孫との取結び、和睦の罠をかけ損なひ、死ぬるわいなう。

〽一言が、照葉の身には猶應へ。

照葉　さほどに思し召すならば、連合ひにも云ひ聞かせ、仕樣もやうもあるべきに、お心早き御最期でござりまするなア。

〽悔み涙に祖父は起き立ち。

德太　イヤ、嘆きは追つての事。其方が夫宇都宮は、取分け我强、生れ付き。この度の天王寺合戰、我が武勇で勝つたと思ふは愚かな事、天性敏き聟の正成、宇都宮は勘當の、悴竹五郎と云ふ事よく知つて、一支へも支へず引退き、高名さしてくれたは、この親へ喜ばさんとの孝行と、思ひ當れば忝なや。おとは、よう禮云うてたも。さうとは知らず悴めは、五百騎の軍勢を、天王寺に留め、楠を討たんと計る。せめては返禮に追ひ退けんと思ふから、炭燒き山籠りの衆を頼み、兼ねては聟の力にもと、拵ら

へ置きたる遠籌、知らせを見せたら苅り置いた、柴薪に火をかけ、鯨波を上げてたべと云ひ合せたは、爰でと思ひ、幸ひ祖母が洗濯の、布に仕掛ける合ひ圖の狼煙、四方八方合はす篝火、蒸し立てられて六波羅勢、皆散り〴〵に逃げ失せたは、我が智惠のやうなれども、日頃話しに聞き置けば、矢ッ張り祖母の智惠なるぞや。

〽末代末世楠が、計略と云はれん嬉しさ。

これ程の事にさへ聞き怖ぢする宇都宮、正成を討たんとは思ひも依らず、叶はぬ事と思へども、勘當したれば意見もならず、後先思はぬ猪武者、向う度に恥辱を取り、犬死しをるを見るやうで、不便におぢやるわいなう。

〽不便でござるとしやくり上げ、嘆けば祖母も諸ともに

くら　隔てたわしが義理あれば、狼煙を上げて公綱に、恥辱を與へる事ならぬと、せり合ふ劍の手が廻り、死ぬる覺悟と云ひながら、悲しい事をしましたわいなう。

〽縋り嘆けば。

德太　なんのいなう、おりや其方の刃物でわざと、

くら　わしもこなたの劍を無理に。

德太　二人が刃爭つて

くら　死ぬる覺悟も

德太　此れも前世の

くら　約束事で

兩人　あらうぞいなう。

〽泣き悄るれば、おとはもせき上げ。

とは　武士と云ふ者は、親子兄弟引別れ、軍をするも世の習ひ、なぜ諦めては下さんせぬ。お前方あるうちは、公綱さまへ我が夫が、なんの敵對いたされませう。お嘆きは見せまいに。

〽悔めば苦しき手を合せ。

くら　こなたまでが忝ない。有やうは、その志しを受けまい爲、二人の者は死にまする。孝行深い楠との、宇都宮が向ふと聞けば、勝ち誇つた軍でも、引退くは定の事。さすれば一天の君へ不忠、その不忠はこの爺婆が、天照大神さまへ敵するも同然。これまでは難どのに、いかいお邪魔になりましたと、斷わり云うて下されいなう。

〽云ふも涙、聞くも涙。

とは　せめて末期に千太郎にも、お逢ひなされて下さりませ。

〽呼びに立つを引留め。

くら　イヤ、孫に逢ひますまい。馴染みのないみどりでさ

へ、孫と名が付きゃ心が殘る。まして千太郎は、手汐にかけて育て上げた子。顏を見る程迷ひの種。矢張り寢さして置いて下され。但し、親仁どのは逢ふ心か。

徳太　あのお婆の云やる事わいの。只さへ目先にちら付いて、おりや云ひ出すも胸が裂けるやうな。おとは、隨分大事にかけて育てゝたもれ。この秋は寺子屋へやつて、いろは書いたら淸書を、佛壇へ供へてたも。それが手向けの香花。死ぬる覺悟のその中でも、菖蒲刀も買つて置いた。目が覺めたらやつてたも。わし等二人を尋ねたなら、

くら　祖父は山へ柴苅りに祖母は川へ洗濯にと、云うてすかしてたもいなう。

〽わつと泣き出す心根を、思ひやりつゝ嫁娘、かつぱと伏して泣き居たる、早臨終も近付けば、照葉淚の手を仕へ。

照葉　夫の我慢高慢も、先祖の苗字を引起さんとの、心の勵み。今お果て遊ばして、誰れに勘當赦して貰ひませう。親御のお慈悲お情に、お赦しなされて下さりませ。

〽淚に沈むをつく〲見て、側に有り合ふ石臼を、爰へとおとはに引寄せさせ、我が血を以て石の面。

徳太　了雲信士、妙三信女。

〽と書き付けて。

コレ、これを見よ。すべてこの世にある人の、戒名は皆逆修。祖母もおれも生き長らへて居ると思ひ、いつでも心を改め、都方へ味方せば、その時この石塔に墨を入れよ。それが勘當赦した印。それまでは先ッこの如く、兩親は、切り合うて、修羅の巷に迷うて居ると、傳へてたも、嫁女。

〽云ふがこの世の暇乞ひ、互ひに祖父祖母手を取合ひ、思ひ合うたる印には、命も息も一時に、絕えて果敢なくなりにけり、二人は死骸に取付いて、前後に暮れし折柄に、公綱が郎黨宇澤の八郎、息を切つて駈け來り。

トどんちやんになり、向うより宇澤の八郎、鎧武者、拔刀にて走せ來り

八郎　奥方これに在するや。味方の凶變、御注進々々。

〽聞くより照葉は膝立て直し。

照葉　ヤア、汝は宇澤八郎ならずや。味方の凶變とは氣遣はしい。して〲樣子は、なんと〲。

〽尋ねに八郎、息をつき。

八郎　ハッ、さん候ふ。數度の戰ひ天王寺に、屯ろの折柄無二無三、押寄せたるは正成勢、恩地左近を、初めとし

て。

〽數多の軍勢、どつとおめいて攻めかくるを、味方かねて用意の防ぎ矢、弓勢烈しく雨霰、科翼鶴翼雁行の、備へを立てゝ戰ふたり。

ドッと響きの狼火の合ひ圖、一度にかゞやく遠寄に、恐れおのゝき五百騎あまり、右往左往にバラ〳〵バラ、一度にドッと逃げ失せたり。

〽大息ついて物語り。

さるによつて、主君の安否心許なし。某は立歸り、猶追ひ追ひの御注進。

照葉　天晴れ神妙。いそふれ八郎。

八郎　然らば奥方。

照葉　はや行け。

八郎　ハ、ツ。

〽ハッとばかりに引返す。

トどんちやんにて八郎、引返して入る。

〽様子を聞いて嫁同士、すはや夫の大事ぞと、心を苛つ折柄に、牛部屋より荷をかたげ、そろ〳〵出づる以前の商人。

ト公綱、牛部屋より出て思ひ入れ。

公綱　さて草臥れてグッタリと、一寢入りやつてのけた。目覺ましに何やらお笑止な事を聞きまして、ア、思へば貰ひ泣きを致しました。長うお邪魔なされませ。

〽悔みを云うて出る所に、一間の内より、高聲に。

正成　宇都宮公綱待て。

〽呼はる聲は耳に胴突き、愕りして立とまり。

公綱　なんぢや。なんの事。誰が事ぢや。

〽と行かんとす。

正成　ヤア、卑怯なり公綱、楠多門兵衛正成、對面せん。

〽と云ふ聲を、聞くより商人、荷を投げ捨て、上張り取れば肌には着込み、頭巾の下には鉢巻、荷籠に仕込みし弓矢携へ躍り出で。

ト此うち、おとは、二枚折屏風にて、祖父祖母を圍ふ事ある。

公綱　ヤア、いしくも留めたり出かしたり。我が眼前に親の最期、餘所に見るも汝をば、見出さん爲に堪えし不孝。只物臭きはこの内と、思ふに違はぬ我が眼力、名乘つて出でしは天晴れ健氣。見參の引手物、胴腹を射拔いてくれん。

〽弓絃を濕し待ちかけたり。

草双紙所載　坂東彦三郎の正成　市川新車の照葉

岩井紫若のおとは　河原崎權十郎の公綱

正成 ホヽウ、潔よし、面白し。

〽一間の障子サッと開けば、床几にかゝつて楠正成、黒皮縅の胴丸に、鍬形打つたる甲を着し、勢ひ込んだるその形相、威あつて猛きにびくともせず、三人張りに十三束、引堅め、指詰め引詰め射るこそあれ、鎧も甲もばら〳〵と、落ちて姿は頁孩草、藁人形とぞなりにけり。

公綱 南無三寶、欺むかれしか。

〽あせるこなたに。

正成 ヤア〳〵公綱、眼が見えぬかうろたへ者、楠正成これにあり。定めて矢種は盡きつらん。笑止々々。

〽嘲り出るを見るや否

公綱 ヤア、愚か〳〵。その手段もあらうかと、嗜なみ置きたる尖り矢一筋。受けて見よ。

〽云ふ儘に、切つて放せば誤またず、鎧兜も一時に、落ちて同じく草の葉の、藁束ねた人形に、二度悔りの無念の勢ひ、おとはをかしく。

とは コレ、お二人樣、今日の祝儀の幟に添へ、幾つ拵らへあらうも知れず。好い飾りの兜でござんせうかな。

〽嘲弄せられ、夫婦は地團太、死物狂ひと駈け行く向うに、すつくと立つたる楠正成、公綱透かさず弓取り延べて、發矢と打つを引外し、はつたと蹴落し、嚇と睨めたる眼の光、元より猛き宇都宮、只一摑みと駈け寄りしが、天性備はる正成が、勇氣に思はず進みかね、五臟六腑を揉み上げて、睨め返し睨め戻し、龍の髭根ある勢ひなせば、虎に角ある勇氣を顯はし、互ひにほつとつく息は、鯨の汐吹く如くなり、二人の妻はあぶ〳〵と、手に汗握るばかりにて、詮方もなく見えたる所に、正成賢美の聲を勵まし。

ト上手より、正成、烏帽子、陣立てにて、出て來る。

正成 我れ都より頼まれ奉り、命を戰場に擲つ事、心あつて舅に語らず、今宵密かに傳へんと、裏道より歸りしところ、思はず兩親のかゝる有樣、涙を止めて出でざりしも、汝この家に忍ぶ事を知つたるゆゑ、これまで扣へ罷り在るも、いま兩親の最期の際に、この場で勝負もなし難し。時節もあらん。

〽と云はせも立てず。

公綱 ヤア、生ぬるこい、一時を待たうか。女房照葉を入込ませ、我れは賤に身をやつすも、汝が首を見ようばかり。そこ引くな。

〽云ふこそあれ、仕込みの鎗を取るより早く、無二無三

に突きかゝるを、持つたる釆にて發矢と跳ね退け、また突きかゝるを身を躱し、程よく摑みし金剛力、こなたは我慢の高慢力、持つたる腕をも引抜かんと、揉合ふ所に怪しやな。

ト薄ドロ〳〵燒酎火。

〽鎗の柄は眞中より、自然と折れて、たぢ〳〵〳〵、こはそも如何にこは如何にと、四人一度に顏見合せ、不思議の思ひも魂魄の、この世を去らぬ子ゆゑの闇と、思ひ續けて人々は、わつとばかりに泣き沈む、二人の妻は淚と共に、夫々に取縋り。

とは　四十九日がその間は、魂ひその家を離れずと。

照葉　聞くに違はぬ今の有樣。御痛はしきは父御のお心、思ひ叶へてせめてマア、五十日の忌明けまで。

二人　勝負を待つて下さんせいなア。

〽嘆くも道理ことはりと、流石に猛き公綱も、元より仁義の楠も、睨み合うたる目に淚、互ひに待つとも待たぬとも、云はで別るゝ猛將勇將、妻は子供を呼ひ出して、死骸に逢はすも片葉の芦。

ト照葉おとは、千太郎みどりを連れ出て、死骸に會はす事。

公綱　頼り少なき眞菰草。

正成　菖蒲勝負は時の運。

とは　粽は軍の血祭りと。

照葉　思へば悲しき鎗長刀。

公綱　立てし幟は大旗小旗。

正成　冥途へ靡く

四人　白旗も

〽この世の名殘りと正成が、父の死骸をかき抱けば、公綱も母親の、死骸を抱へこれまでの、義理と情の一禮に、兩將並んで亡骸を、押戴きし志し、二人の妻は回向文、唱ふる聲が鬨の聲。

正成　互ひの勝負は戰場にて

公綱　先づそれまでは

正成　宇都宮公綱。

公綱　楠多門兵衞正成。

正成　さらば。

兩人　さらば。

〽詞殘して。

ト皆々よろしくあろ、おとは、照葉、子役二人を抱へながら、死骸を見せる。

兩人　モシ。

ト皆々、よろしく引張りの見得にて、

幕

楠　昔　噺（終り）

佐々木盛綱
佐々木高綱

近江源氏先陣館

六幕

この淨瑠璃は歌舞伎に入つても、奇體に番附にはカタリがいつも缺けてゐる。たうとう適當なものが見出されなかつた。

下掲の繪版は幕末頃大阪で上演した折の繪本の表紙である。錦繪も多くは發見されなかつた。八段目と九段目だけに入れて置いた。

近江源氏先陣館

序幕　鎌倉御所の場

役名――源の實朝。政子の方。北條相摸守時政。佐々木三郎兵衞盛綱。片岡造酒頭春久。比企判官能員。三浦之助義村。

造り物、一面、二重舞臺、金襖。正面に實朝、西の方に時政、東の方に政子の前、下の段に佐々木盛綱、並び大名、並び居る。下がり葉にて幕明く。

ト淨瑠璃。

〽新玉の春立ち初めて御園には、木にも緑の四方の波、靜けき君が御代とかや、されば右大將頼朝公、奢る平家を西海に切り沈め、源氏一統の御威風、野邊伏す草の鎌倉御所。〽泰平の地を占め給ふ、時は建仁三年正月元旦の御壽き、二代の君右大臣實朝公、御母公政子の御方、武將の祖父北條相摸守時政公、その外關八州の大小名、烏帽子、素袍もさゞめきて、袖を連ぬる大廣間に、列を正して出勤ある。

實朝　立春の壽きとて、諸大名のめい／＼、未明の出勤、祝着々々。

大名　ハア、。

政子　御意の通り新玉の御祝儀、千秋に萬年樂を重ね、めでたき中にも取分けて、父上時政さまの御果報、御先祖より傳はり、數代の執權職と申し、外ならぬ君の御後見、御壽命も積る六十餘州の御壽き、おめでたう存じます。

時政　如何にも政子の方の挨拶、武士たる者の身に取つて、果報の司と云ふは某が事。これと申すも若年の砌りより忠義一圖に武を勵み、命を的にかけ、功名手柄の餘慶と云ふもの。各々方も羨ましく思はるゝならば、めい／＼に忠義を勵まれたがよい。なんと皆、さうでないか。

盛綱　成る程、時政公の御意の通り、御先祖より忠勤のお家柄と申し、分けて政所の御親父と申し、當君の御祖父君、御果報のいみじき段を祝せし今日、御祝儀のお能番組は、老松、梅ケ枝、弓八幡と壽きしも、弓は袋、太刀は鞘に、納まる御代の春立つ今日の御祝賀、千秋萬年、

おめでたう存じます。

實朝　今に始めぬ盛綱の頓智の采配。幸ひ今日の祝儀に、近江一國を宛て行ふ間、先祖よりの故郷なれば、これより直ぐに立越え、國詰めをなし、長く領地と致してよからうぞ。

三郎　ハア、不功の某に、身に餘る御恩賞、有り難く存じ奉ります。

時政　オヽ、喜びは道理々々。これと申すも、御身の親父、源藏秀義より打續き、忠勤を擢んでらるゝゆゑの儀。猶も君恩忘れず、忠義を盡されてよからう。

盛綱　時の面目、身に餘り、大慶に存じます。

政子　故郷へは錦を飾ると云ふ本文もあれば、美を盡し華麗に入部さつしやるが、即ち當家の繁榮。この上は何事によらず、願ひあらば遠慮なう、自らが取次ぎ致しませう。

盛綱　重々有り難き、御意に甘えし事ながら、かゝるめでたき折に幸ひ、一ツのお願ひ。某が弟、佐々木四郎左衞門高綱、先年源平の戰ひに、兄弟ともに先陣を相勤めしに、高綱ばかりに御恩賞なかりしを憤り、十ケ年以前鎌倉を出奔し、行き方知れず。老いたる母が嘆き、旁々以てこの度、在所を求め召出され、江州の内にて、分地拜領なし下されませうならば、この上の君恩と、如何ばかり有り難く、存じ奉ります。

〽恐れ入つて言上す、北條どの莞爾と打笑み。

時政　兄弟孝心の道を兼ねたる、尤もの願ひながら、この度盛綱へ江州を遣はすは、計り事あつての事。その故は、先君賴朝薨去の後、嫡男ながら左中將賴家公、放埒懦弱の生れつきゆゑ、舍弟實朝公に武將を越えられしを心外に思ひ、鎌倉を立去つて、京都へ引込み早三年、この頃聞けば、謀叛の催しあるとの風聞。それゆゑ御邊の器量を見立て、江州へ發向させるは、京都を押ふる計り事。殊に弟佐々木四郎左衞門は、軍法の奧義を極めし勇士なれば、行くへを尋ねて心を合せ、逢坂の關を固むる用意、一時も早う致してよからう。

盛綱　ハア、畏まり奉つてござります。

政子　日頃の願ひ叶ひ、さぞ喜びであらうなう。

盛綱　御意の通り、三郎兵衞、弟高綱を尋ね出し、兄弟心を一致に致さば、たとへ如何なる大敵なりとも、暫時のうちに取挫かん事氣遣ひなし。御賢慮易く思し召し下されませう。

政子　オヽ、勇ましい〳〵。
實朝　江州安堵の墨附。
　ト書き物を差出す。政子、受取つて渡す。
政子　有り難う頂戴せよ。
　〽御墨附を賜はれば、盛綱三度頂戴し、時の面目身に施
し。
盛綱　然らば、これより直ぐに。
時政　出立しやれ。
盛綱　ハヽ。
　〽御前を立つて退出す。折節廣間に案內して。
內より　京都よりのお使者。
政子　都よりのお使者とござります。
時政　オヽ、その使者待兼ねた。早々これへと申せ。
大名　ハア。
　ト一人立つて入る。
　〽鎌倉の附き家老、片岡造酒頭春久、京都の近習、比企
判官能貞、遙か下がつて小姓立の若侍ひ、三浦之助義村、
十八才の角前髮、諸士に式禮衣紋の着振り。
　ト造酒頭、三浦之助、能員、いづれも長上下にて出る。
造酒　これまで數度のお召し下されども、折惡しく頼家所
勞ゆゑ、遲參ながら立春の御祝賀、申し上げん爲名代の
使者、片岡造酒頭春久、參上仕つてござります。
比企　お召しの參る度に、早く御下向々々々と、お勸め申
しても、たゞ酒と遊興のみに心を奪はれ、放埒の餘り、
承引なき若氣の大將。
三浦　イヤ、コレ〳〵判官どの、粗略仰しやるな。大切な
る立春の御祝儀、先づお使者の趣きばかり。
比企　イヤサ、でも譯を云はねば。
三浦　ハテサテ、云うてよければ、御年輩の造酒頭どのが
ござる。先づ〳〵お扣へなされ。
　〽怯めず臆せず一器量、人に勝れて見えにける、實朝御
覽じ。
實朝　都の使者、大儀々々。
時政　三人ともに、遠路の所を、祝着々々。
政子　いよ〳〵都にもお變りないか。
造酒　ハア、有り難き御上意。先づは御親子樣とも御機嫌
よく、御重歲の體拜し奉り、恐悅至極に存じ奉ります。
三浦　拙者は三浦之助義村、若年なれどもこの度のお使者
の、役目蒙むり奉りしは、この身の大慶。幸ひのお目見
得、憚りながら、お見知り下さりませう。

政子　ホウ、名は兼ねて聞き及べど、對面するは今日が始めて。京鎌倉とは隔たれども、餘所外ならぬ御連枝の中、互ひに睦しく、國家の政事までも申し合して、他事なう勤めさつしやれや。

時政　イヤ／＼、近しき一家の中とは云ひながら、この頃は心得ぬ取沙汰もあれば、餘り睦ましいとも云はれぬ云はれぬ。

造酒　こは存じよらぬ時政公の御意。世上の風聞、心得ぬお取沙汰とは、且つ以て覺えなき事ども。

時政　ヤア、覺えないとは、白々しい僞はり。賴朝公御他界の後、京都へ退き、再三召しの使ひを遣はせども、今に於て參覲もなく、酒宴遊興に日を送らるゝ放埓の行跡。其方を附け置くは何の爲。左樣な墮弱あらば、なぜ諫言は致さぬ。これなる實朝は、現在某が孫なれば、祖父の時政後見いたす上は、即ち武將も同然。身が詞を用ひぬ賴家、心に一物あるに極まつた。それに附き從ふ諸士の方々、この時政を侮り輕んずるに違ひない。サア、云ひ譯あらば一々聞かう。

〽凜然たる賢命に、恐れ入つたる造酒頭、心を察し政子の方。

政子　父上のお憤りは御尤もながら、人の噂を取上ぐれば、大道の事までも、恨み誹るは下々の習ひ。分けて自らは、賴家どのとは生さぬ仲ゆゑ、その氣の毒さを推量してたも。繼しき仲の自らゆゑ、分け隔てもあるやうに人の云ひなし、鎌倉を狙ふの御謀叛のと、よしない事を聞く度に、自らが心の苦しさ。

〽推量せよ片岡と、仰せにハツと頭を上げ。

造酒　貞節正しき御前の御意、御尤もには存じ奉れど、鎌倉のお目鑑を以つて、京都に附け置かるゝこの造酒頭、何れに諛らひ、何れに僞はり虚心を、申し上げんやうとてはござりませぬ。

時政　サア、僞はり虚心なくば、都の樣子、有やうに云へ。

造酒　ハツ、再三お召し下さるれども、鎌倉に御下向なきは、元より御多病のお生れつきゆゑ、御殿を離れ御他行とては一切なければ、御疎遠の段、さして意趣などある儀は、毛頭ござりませぬ。

時政　ムウ、すりや、多病ゆゑ、館を離れぬとな。

造酒　少しも僞はりはござりませぬ。殊に實朝公、時政公、御兩將樣に對し、お恨みとてもなければ、御謀叛などとは跡方もなき雜說。その儀のお疑ひならば、いづくまで

も拙者罷り出で、キッと申し譯仕りませう。
時政　イヤ、呑み込めぬ。賴家が身持ち放埒は、付き從ふ比企の判官さへ、愛想を盡かす。造酒の頭、云ひ譯はあるまい／＼。
造酒　成る程、その御放埒のお咎めばかりは、相違なき若氣の至り、若狹と申す白拍子を、殊の外の御寵愛にて、思ひ者に引上げられ、晝夜を分たぬ酒妾の興。この儀も達つてお諫め申せども、更にお用ひなきゆゑ、世の誹り、惡説も重なる元は、好色のお誤り。
時政　すりや、放埒に違ひはあるまいがな。
造酒　サア、この儀はお若氣ゆゑの儀。お齡だに長じ給はば、自然とお心も改まるの道理。憚りながらこの儀は、拙者にお預け下さりませう。日を追つてキッと諫言を加へ、野心なきお疑ひを、晴らさせ奉りたう存じます。
〽事を飾らぬ申し條、比企の判官進み出で。
能員　イヤ／＼、酒妾遊興ばかりでない、賴家公に御謀叛の兆し、滿更ないとも云はれぬは、現在御惣領の賴家公を差措き、時政公のお指圖にて、孫の實朝公を武將に立て、祖父君の後見は、自然と四海を手に握る、北條どのの計略と、宇治の方のお疑ひも無理でもない。又よく思ひ廻せば、賴家公御親子の御無念なも尤も。餘り無理とも云はれませぬ。
〽舌三寸で内輪から、比企が底意ぞ訝かしき、聞き兼ねて造酒頭。
造酒　ヤア、一度ならず二度ならず、御前をも憚らず、尾籠の一言、扣へて居やれ。
能員　イヤサ、拙者が申すは順道。物の理屈と申すもの。
造酒　まだ／＼申すか……ナニサマ、理に暗き判官、譯を知らねば疑ふも理り。近き例しは、アレあの上段に掛け置かれし兜こそ、源家の重寶、龍頭に鍬形打つたる大將軍の御印し、その大切なる御兜を、實朝公に讓り置かれしこそ、賴朝公明智の御眼力。それを今更僻事とて、何しに賴家公に、御謀叛あらう謂れがない。お身達如きの佞人が、お傍に徘徊するゆゑ、賴家公が今のお身持ち。皆お身達の科ぢやぞや。
能員　待たう、造酒頭、賴家公のお身持ちの善惡は、附き家老のお身が知る筈を、うつかりひよんと、何にも知らぬ造酒頭、もし又、賴家公に御謀叛のお心あつたら何とする。
造酒　ヤア、過言なる判官、諫めを入るゝは臣下の役。も

し頼家公に御謀叛あらば、飽くまでも諫言申し、御代泰平に治めて見せう。

能員　すりや、お身が見事、諫言するぢやまで。

造酒　何でもない事。恐らくこの造酒頭が御諫言申すならば、御謀叛の悪名さつぱりと、洗ひ落す忠義の一心。黄金の板に一點の墨、曇りなき大將軍に仕立てゝ見せう。

能員　イヽヤ、心元ない。

〽争ひ募る無道の判官、末座に扣へし三浦之助、つッと出で。

三浦　双方ともに御前なるぞ、静まり召され。

能員　ぢやと申しても。

三浦　ハテ、尾籠千萬な。最前より承はれば、やゝともすれば主人のお身の上、曇りなき御事に詮なき争ひ。頼家公に御別心のあるなきは、申すに及ばぬ事。凡そ謀叛とは、下より上を討たんと計るを、これ謀叛と云ふ。御若年なれども頼家公は、正しく先君の御惣領、時政公は今こそ武將の祖父君と尊敬さるれど、以前は御家臣に相違ない……そりやハヤ、以て申すも憚りながら、もし頼家公、お憤りの思し召しもあらば、何を恐れ、誰れに遠慮。時政切腹いたせと上意あつても濟む事……謀叛なんどとは、下から思ふ私し料簡……判官どの、いらざる論に無益の舌の根動かさずと、マア、扣へてござれ。

〽一句に静める三浦が才智、人々感するばかりなり、時政、御機嫌斜めならず。

時政　若年なれども、天晴れ器量ある三浦之助。とくと對面せう。近う／＼。

三浦　ハア、國家のお爲を存ずるゆゑ、憚り多き一言も、主人のお身を思うての事。却つてお詞を下され、大慶に存じます。

時政　健氣の一言、理の當然、出かした。今日よりは造酒頭同然に、心置きなく往來いたせ。對面の印をくれう……

……コレ、この一腰は、其方が名に寄せし義弘の一腰、當座の引出。

三浦　ハア……お志しの賜物、頂戴仕つてござります。

〽誠に當座の眉目なり、政子の方しとやかに。

政子　三浦之助の一言にて、父上のお心も解け、自らも心の安堵、人の噂のとり／＼なるも、互ひに疎遠なるゆゑなれば、縁に縁を重ねる爲、幸ひ父上のお局、牧の方に出生ありし、乙の娘時姫を、頼家公の北の方に備ふれば、京鎌倉の和順の印。なんと、この儀は如何でござりませ

う。

時政　オヽ、發明なる釆配、予が娘を遣はせば、泰平の瑞祥……とは云ふものゝ、賴家寵愛の若狹とやらを、追ひ退けし上にて、娘は遣はさん。萬事の取計らひは造酒頭、キッと申し渡したぞ。

造酒　畏まつてござります。

實朝　オヽ、滿足々々。父上の御年忌なれば、都東大寺にて、追善供養を取行へば、母上も宇治さまも、この靈場にて對面の上、婚姻の御契約あらば、御父尊君にもさぞお喜び、供養の催ほし、諸大名、キッと申し渡したぞ。

大名　ハアヽ。

政子　御上意の通り、婚姻の取結びは都にて

時政　萬事は造酒頭。

實朝　三浦之助。

時政　判官能員。

政子　三人ともに、

時政　退出々々。

三　ハア

〽皆退出の谷七鄕、底はかりなき鎌倉山、御代の榮えぞ　ト大三重にて、皆々引張りの模樣よろしく　幕

二幕目　東大寺法會の場

役名——政子の方。腰元、千鳥。同、霰。宇治の局。腰元、梅ヶ枝。同、難波。同、瀧浪。比企判官能員。榮西和尙。片岡造酒頭春久。三浦之助義村。北條息女、時姬。腰元、住の江。

造り物、大佛殿の體。正面、蓮臺少し見えるやうにして、東西は扉開きし所に、太刀と弓矢を奉納の體。西の方に錦の幔幕、その上の方に三鱗の幕打ちあり、幕の內より、坊主谷海、玄海、掃除して居る見得、寺の鐘にて幕明く。

〽八重櫻、散りしく法の東大寺、惣追捕使の御菩提を、弔ふ結構工を盡し、金銀、瑠璃、玻璃、錦の幟、廻廊、石垣、五色の織り絹幾重に包み、照る日に輝く粧ひは、これ彌陀境を寫されたり。

谷海　サア〱、玄海坊、ちつと休まぬかい。

玄海　イヤ〱、滅多に休まれぬ。常は男どもに掃除を云ひつくれども、今日は大切な御法事ゆゑ、下部どもは寺

中に叶はぬゆゑ、愚僧が直の掃除。塵一本あつても不念になる。隨分隅々隈々氣を附けて、掃き掃除せにや、和尙樣に叱られるぞや。

谷海　マア、わが身はいかう愚痴になつたぞや。常は掃除も氣を附けたがよいけれど、今日は大槪にやつて置いたがよい。なぜと云や、何が大切な御法事ぢやと云うて、めい／＼に素袍とやら云ふ、萬歲のやうな物を着た侍ひどもが、夜の內からザワ／＼と、長い物を引摺らして歩くに依つて、塵一本ないやうに、袴の裾で掃いてあるわいの。

玄海　イカサマ、それで面妖な、掃いても／＼埃がないと思うたてや。

谷海　埃どころぢやない。いつも掃除の時は、賽錢のこぼれ、小間物屋どもが落して去んだ簪や、楊枝差しなど、二つと三つと拾はぬ事はないに、今日はす錏一文拾はぬわいの。

玄海　ハテ、その代りにはしつかりと、お布施を戴いたぢやないかいなう。ついに見ぬ金氣のお布施を戴いたからは、冥加の爲ぢや。ぼやかずと精出して、掃除ぢや／＼。

谷海　イヤモウ、この上は鳥箒で掃かうより外、掃除の仕樣はないわいの。

玄海　イカサマ、建長寺の庭を鳥箒と云へば、それもよからう。サア／＼、ちやつと片づけて、彼のお布施で、宮川町へ出かけうぢやあるまいか。

谷海　イヤ／＼、おりや窮屈な若衆より、矢ッ張り本當の素人が望みぢやてや。

玄海　有やうは愚僧も、餘り若衆は好かねども、マア、宮川町へと云ふを外題にして、有やうは藪の下か小つぼかえ。

〽この度の導師、建長寺の前住榮西和尙、朱の衣もいと尊く、兩人に打向ひ。

ト榮西和尙出て

榮西　コレヤ／＼兩僧、お客人のお出でぢや。扣へて居ぬか。

兩人　ハア。

ト扣へる。この間に造酒頭、比企能員、出て、よろしく會釋する。

榮西　誠に今日は警固のお役目、御苦勞に存じます。

造酒　これは／＼御挨拶。我れ／＼は役目の儀、さのみ苦勞に存ぜねど、和尙には御老體の勤行、さぞ御辛勞と推

察いたしてござります。

榮西　ハッ。併し天氣もよろしく、愚僧も甚だ滿足に存じます。御前にも皆々、御機嫌よろしくござるかな。

造酒　仰せの通り天氣快晴にて、上にも殊の外の御滿悅。且つ御法莚に御出御ある筈でござれども、女儀の不淨も如何と、御遠慮申し罷りあり、拙者に萬事取計らへよとの儀。猶この上とも怠りなく、御勤行下さりませう。

能員　イヤ〳〵、造酒頭どの、餘りお世話燒かるゝな。なんぼ各々方が問ひ弔ひを、千僧萬僧の供養も、亡君頼朝公、なんのお喜びなされうぞ。なぜと云はつしやれ、先君御逝去のお跡目の實朝公は、政子の方の若殿、また宇治の方はお部屋樣なれども、頼家公と云ふ御惣領を、蹴み落さつしやつたが修羅の胤。弟に天下を乘取られて、なんの心がよからうぞ。それに何ぞや、北條のお姫樣を、頼家公へ御緣組みの祝言のと、樣々の痴言を、出かし顏に仲人の取持ち。武士の役目はどこへやら、馬鹿々々しい。イヤモウ、見るもをかしい腹筋千萬な。ハヽヽヽ。

ト取つてもつかぬ當こすり、耳にもかけず和尚に向ひ。

造酒　供養の庭にて似合はざる緣邊の儀、和尚の思し召しも如何なれども、京鎌倉のこの度の婚姻を、拙者取持ち仕つるも、國家の無事を願ふ基。なりやコレ、天下萬機[illegible]の一つでござれば、和尚にもお喜び下さりませう。

榮西　左やう〳〵、婚姻は吉[illegible]事の始めと申せば、子孫繁榮の印、めでたう存じます。

能員　へヽヽヽ、鎖[illegible]も云へば云はるゝ、、、自體鎌倉よしの附き人風が氣に食はぬ。サヽ、イヤサ、宇治の方さまのお氣に入らぬぞ……彼方へも此方へも、ぬらりくらりとぬり廻す。二股武士とは汝が事だ。

造酒　イヤ、最前より聞き逃がし置けば、出る儘の過言、この造酒頭が批判より、先づお身が不忠不義の性根を改めい。

能員　ヤ、なんと。

造酒　主人に諫めも入れず、邪氣を吹き込む邪まな非道。表面は善を作つて、お爲ごかしに惡を勸むる佞人。二股武士と云ふは、却つてお身が事ぢやわい。

能員　ヤア、舌長なる雜言。いま一言云つて見よ、おと骨切つて切り下げるぞ。

造酒　イヤ、小癪な奴の。

ト双方詰め合ふを、榮西、割つて入り

榮西　アヽ、コレ〳〵、御兩所、大切の供養の場所。先づ

先づお靜まりなされ。
能員　ぢやと申して。
榮西　ハテサテ、互ひの論に、もし刃傷などに及んで、後日の云ひ譯は、何となさるゝぞ。
能員　サ、それは。
榮西　ア、若い〳〵。何事も愚僧が預かる。サア〳〵、御料簡々々。供養の時刻までは、まだ間もござらう。先づ御兩所ともに、暫らく御休息。サア〳〵、先づ〳〵。
　ト よろしくあつて、兩人を伴ひ入る。
〽イザ先づ〳〵と勸むれば、互ひに摺れ合ふ大紋の、袖ゆり直し兩人は、和尙の詞に從ひて、休息所へと入りにけり、供養のお幕引きはへしは、北條の乙の君時姬御寮、作らぬ木形手入らずば、いづくへ枝の振りの袖、都まばゆき姿なり。
　ト 時姬、腰元の梅ヶ枝、瀧浪、難波を連れて出る。
難波　なんとお姬樣、大佛樣々々々と、しつかい物の譬へには云へど、目で見たは今日が始めて、此やうな佛樣のお內儀樣が見たいわいなう。
瀧浪　何を云やるやら。佛樣にお內儀樣があつてよいものかいの。ほんにお內儀樣で思ひ出した。お姬樣は都への御緣組み、今日お約束が極まる筈。さぞお嬉しうござりませう。
難波　イヤ〳〵さうも云はれぬ。京の大佛樣と奈良の大佛樣とは、女夫ぢやと云ふぞえ。
梅枝　ムウ、そんなら、こんな大きい佛樣が、まだどこぞにあるかえ。
難波　ある段ぢやない、丁度この通りの大佛樣があるわいの。
瀧浪　なんとマア、この佛樣が、ひよつと立つて歩かしやんしたら、怖い事ぢやあるまいかいな。
梅枝　そりやモウ、ほんに天までも屆くであらうぞいな。
瀧浪　この大きな佛樣が、立つて歩かしやんしたら、風でしわつて、ひよろ〳〵さしやんせうぞいな。
難波　サア、そこでこそ大阪の、千石船の帆柱を、杖にあげるのぢやわいなう。
時姬　何をマア、わが身達は云やるぞ。自らはとんと合點がゆかぬわいの。
難波　イカサマ、世上の噂は御存じない筈の事。この廣い境內も、埋るゝばかりの賑ひ。殊に都への御緣組みとやら、今日お約束の極る筈ぢやげにござります。さぞお

嬉しうござりませうな。

時姫　モウ／＼、その縁組みの事は、必らず云うてもたもんな。その賴家さまには、若狹さまとやら云うて、御寵愛のお手かけもあるげな。その中へ自らが嫁入りしたら、思ひ合うてござる、戀路の仲を裂くやうなもの。よしない事に人の恨み嫉みを受け、なんの樂みがあらうぞいなう。

瀧浪　それ／＼、こりやあなたの仰しやる通り、とんとその嫁入りの噂は取措いて、わつさりとした面白い話しをさつしやれいなう。

難波　ムウ、そんなら今度の御縁組みは、あなたのお氣に入らぬかや。

瀧浪　お氣に入らぬ段ぢやない……餘所外に、たんと愛しう思うてござるお方があるわいなう。

難波　我折れ……まだ手入らずのお姬樣、初心な／＼と思うて居たりや、そんならちやんと外に。

瀧浪　ある段ぢやない、云うて聞かさうか。

時姫　ア、コレ／＼、はしたない。必らずそんな取沙汰せぬものぢやわいなう。

難波　イエ／＼、なんぼお隱しなされても、こればかりは聞かにやなりません。サア、瀧浪どの、誰れぢや。話して聞かさつしやれいなう。

瀧浪　外でもない。今度お使者に見えたその中でも、極上生粹の角前髮樣ぢやわいなう。

難波　ヤア、そんなら、あの前髮樣にかや。

瀧浪　オイノウ、都への嫁入りより、疾からあなたの心に、三浦の方へ走つてなれど、ひよんな事には、狀文の繼ぎも權でも行き憎い、荒磯の岩侍ひぢやわいなう。

難波　イヤ、そりや堅い程、お姬樣の思ひの増すも、御尤もぢやわいアな。

瀧浪　サイノ、どうぞ、その堅いを打ち碎いて、お手に入れたらよからうぢやあるまいかいなう。

難波　よい段ぢやない、そりや敵の城を落したよりは、大きな手柄ぢやわいの。

時姫　ならう事なら思ふ人と、一つ添ひ寢の閨しや、賴むは幸ひ、共に居る住の江、日頃の思ひを打明けて、話して置いた事もあれば、わが身達も、とも／＼賴んでたもらぬかいなう。

難波　オヽ、イカサマ、住の江どのは、片岡どのゝ娘御、定めてよい計り事もありさうなもの。

瀧浪　こりや、いつち好い思ひつきでござりますわいな。
時姫　ハテ、物堅い三浦之助、自らと云うては、何の彼のと辭退しやるは知れた事。住の江の戀のやうに云うて、互ひの戀の棧橋、年に一度の七夕樣も、天の川には鵲の渡しがなうてはならぬとやら、云ふではないかいの。
難波　左樣でござりますとも。マア、住の江さまを表向きの惚れ手にして、その後はお主樣の御威光ごかし。今にでも三浦さまが見え次第
ト向うを見て
オヽ、アレ／＼、人事云はゞ目代置けと、向うへ見えるが、三浦さまぢやないかいなア。
時姫　ドレ／＼、ほんに目印の古文字の紋所。オヽ、あれぢやあれぢや。
瀧浪　サア／＼、急になつて來たぞえ。
難波　マア、ちやつと住の江どのを、呼ばしやんせ／＼。
瀧浪　コレ、住の江どの／＼。
ト口々やかましう云ふ。
時姫　アヽ、コレ／＼、方丈には政子さまもござるのに、其やうにザワ／＼せずと、マア、あの森の內へ。
瀧浪　何でも住の江どのゝ手柄に、生捕りして差上げませう。
時姫　わが身達も、とも／＼賴むぞや。
〽姫は猶しも恥かしの、森の木隱れ森の內、打連れてこそ。
ト這入りになり、皆々森の內へ入る。
〽入りにける、斯くとは知らぬ使者男、やさ風流の角髮は、三浦之助義村、のつし熨斗目に掛け烏帽子、素袍の袖に春風の、そよと訪ふ內意の使者。
ト向うより三浦之助出て
三浦　宇治のお局より、時姫さまへのお使者。三浦之助義村、參上仕つてござります……どなたぞお取次ぎを賴みまする……これはしたり、お女中方、お取次ぎ下さりませう。
ト內より
難波　お使者の趣き、お取次ぎ申し上げませう。暫らくそれにお扣へなされませ。
〽勿體つける戀の仕掛け、とは知らずして三浦之助、素袍の角髮面つくり、待つ間程なく住の江が、出合ひ頭に義村を、見ても見ぬ目の心意氣、これ戀知りの印なり、三浦之助、謹んで。

ト住の江出て、思ひ入れ、

三浦　宇治の方さまの御意には、今度造酒頭仲立を以て、時姫さまと主君頼家、緣邊の御契約。未だお輿入れとてもござらねども、嫁御と申せば心安さの餘り、東大寺の名香進上仕るは、いと珍らかなる夢もがなと、心ばかりの贈り物。お慰み下されよとの御口上。御前よろしく、御披露下さりませう。

へ袱紗包みを取出せば。

住の　これは〳〵、御叮嚀な御口上と申し、お使者柄と申し、御持參の名香よりも、色香り深い戀知りの。

へ愛しらしい殿振りを、見るに思ひのまさり草。

三浦　ア、、コレ〳〵、御奏者、拙者への御挨拶よりは、早くお上へ使者の趣き、仰せ上げられ下さりませう。

住の　オ、忙しな。そしてマア、まだ御元服もなさらねば、定めてお内方様は、まだござりますまいな。

三浦　成る程、まだ部屋住み前の私し、妻女などとては且以て

住の　ないかえ。

三浦　左やう〳〵。

住の　それでも又、内證でこつそりと、云ひ交しなさつた、可愛らしいお方があらうもの。

三浦　且以て、左樣な猥らな儀は毛頭。

住の　エ、嘘々、お前のやうな、可愛らしい前髪樣を、なんのマア、誰れが今まで。

三浦　ハテサテ、じやら〳〵と仰しやらずと、先づこの一品を、お取次ぎ下さりませう。

へ差出す包みの手をぢつと。

ト住の江、三浦之助の手を取る。

ア、コレ、何なさるゝ。無作法千萬な。この三浦之助、ついに女中と手から手へ、物取り交した事もない。家中の格式、御座興も事によります。お放しなされ。

へ突き退くれば、躓きそこにこけながら、袂を扣へ。

住の　コレモシ、京家のお格式は、どんな事やら存じませねど、女中方の格式は、また格別。いかう譯のある事、教へて上げようかえ。

三浦　イカサマ、女中の勝手は不案内の私し。御前よろしく御案内下さりませう。

住の　そんならわたしに案内を、教へてくれと仰しやるのかえ。

三浦　左やう〳〵。
佳の　ちつとさうもござんすまい。格式々々と、滅多無性に堅くろしう云ふ三浦さま。案内お頼みなさるゝからは、今のやうに沒義道に、突きこかす事はならぬぞえ。
三浦　イヤ〳〵、今のは怪我の拍子。眞平、御免々々。
佳の　そんならどんな事でも、わたしが云ふ通りになされますかえ。
三浦　如何やうとも〳〵。
佳の　イエ〳〵、それも無理にとは申しませぬ。お否ならどうなりと。その代りに此方も、この取次ぎは否でござります。
三浦　それは迷惑。如何やうともお指圖は遁れますまい程に、只今の不調法は御免なされて、先づこの一品と、御口上の趣きを、早くお取次ぎ下さりませう。
佳の　イエ〳〵〳〵、今のやうに突者を侮つたなされ方。突きこかされては……アイタ〳〵〳〵。
〽持病の積と苦しむ風情、拗ねて見せると知りながら、女子相手に短氣も出されず。
三浦　ハテサテ氣の毒。左樣ならば、積氣の藥を、ドレドレ。

〽お藥あげんと用意の印籠。
佳の　イエ〳〵、初對面から押しつけがましい。どんなお心ぢややらお氣が知れぬ、お藥はどうもわたしや。
三浦　ハテ、お疑ひなさるゝなら。
　　ト服んで見て
コレ〳〵、斯くの通り、毒味いたした藥。サア〳〵、お用ひなされ。
佳の　御心底見えましてござんす。このお藥をお前の手づから、受けましたが祝言の杯。幾千代かけて末長かれと長門印籠。エヽ忝ない。この賴みの印、受取るからは。
〽女夫ぢややいのと抱きつけば。
三浦　これは又、きついお嬲り。
佳の　イエ、嬲るのぢやない、三浦さま、なんぼ斯やうなされても、もう斯うなるからは、否とは云はさぬ。必らず必らず女夫ぢやぞえ。
三浦　成る程、私しとても、まんざら岩木でもござらねども、今はどうも
佳の　否でござんすかえ。
三浦　イヤ、お志しは、忝なうござれども。
佳の　否と仰しやると、わたしが積は、いつまでも癒らぬ

ぞえ。

三浦　ハテ、むつかしう仕込んだ績でござるなう。

住の　むつかしい段ぢやござんせぬ。女でこそあれ、今日の役目の奏者の績。アイ、績も績、癇績でござんすわいな。

三浦　有やうは此方も、斯うして見せるは刀の手前。

住の　そんなら、ほんの心は。

三浦　しつくり具合のその印籠。

住の　そんなら、この印籠は仲人かえ。

三浦　オヽ、いつまでも替らぬ。サア薬の變らぬ徳は、その長門印籠、重々情のお禮。口では申さぬ。諸事はコレ、斯うぢやわいなう。

へしめ返す手のやわらぎに、のぞきこぼれて腰元ども。

ト腰元三人出て

瀧浪　ようへ三浦さま。

難波　しつくり具合のよい長門印籠さま。

三浦　ヤア、すりや最前からの様子は、

難波　皆見て居りましてござんす。

三浦　面目次第もない。

ト逃げようとするを、皆々捉へ

難波　ドッコイ、逃がさぬ〳〵。

瀧浪　住の江どのはお姫様の名代。

難波　肝心隣門は、この間からの文の御返事を

瀧浪　サア否とは云はれまい、三浦さま。

三浦　ムウ、すりや只今の

住の　恥かしい事の有りたけも、皆お主のお爲。如何に名代と云ひながら、あんまり具合が出來過ぎて。

へどうやらひよんな氣になれど、悋氣もならぬ辛氣顏。

難波　しつくりと變らぬ印の、印籠で仲人に取つてあるからは、否とは云はさぬ。サア、あの幕の内へござんせいなア。

三浦　ハテ、滅相な。頼家公とお云ひ號けのある、お姫様のお幕の内へなどとは、勿體ない。私しはこの名香のお使ひ。

住の　サイナ、その名香のお使ひが、頼家さまとお姫様と、御縁のない證據。

三浦　とはな。

住の　匂ひの物を取交せば、縁の切れると云ふ世の譬へ。お姫様と御縁が切れるからは、憚りも遠慮もない。ちやつとあの幕の内へ行つてしつぽりと……お使ひの御口上

お云ひなされいなア。

難波　オヽ、それ／＼、お前は自體、氣にむらがあるに依つて、氣むら／＼と異名を取つたお前、延び／＼にして置いて、氣にむらが出來ては、折角世話燒かしやんした住の江どのも立たぬ。

瀧浪　それ／＼、ちやつとござんせ／＼。

トてんでに引ッ張る。

三浦　イヤ／＼／＼、たとへ御縁は切るゝとも、天下の後見、北條家のお姫樣、我れ等風情にお心をかけられしとは、世の人口も勿體ない。

住の江　イカサマ、仰しやればそこもあり。矢ッ張りお姫樣は、賴家樣へお嫁入り遊ばして、いつそわたしと三浦さま。ナア申し。

〽寄り添へば、

難波　どこえ／＼、住の江どの、さう得手勝手は、此方がさゝぬ。

住の江　どうでも斯うでもお姫樣、エヽ、もどかしい。

〽エヽもどかしいと兩方が、さゞめく中へ。

内より　お成り。

〽御兩所お成りとお知らせの聲、驚ろき外す三浦之助、

名殘惜しげに住の江も、幕の内へと入るあとへ、案内も同じ東西の、幕絞らせて政子の方、宇治の局も氣高さは、吉野龍田か月雪の、光り合うたる風情なり。

トこの間、三浦之助と腰元、別れ入る。宇治の方に千鳥、霞、長刀持ち附き出る。西の方より政子の前に右の瀧浪、難波、梅ヶ枝、長刀持ち、附き出る。双方牀几の上へ坐り

宇治　これは／＼政子さま、御佛前へ御燒香もお勤めなされました。誠に今日の御追福も、あなたと自ら御一緒に、お弔ひ申す事、さぞ我が君もお嬉しう

〽思し召さんとありければ、こなたもとかう御挨拶、

政子　飽かずして、別るゝ君が名殘こそ、後のかたみに包みてぞ置く、と、古歌の心も年月も、三年と過ぎし果敢なの浮世、懷かしの

〽今日のその日とばかりにて、互ひの袖に玉こぼす、露こそ手向なりけらし、局はいとゞしをれ入り。

宇治　老少不定の憂き世も、いつの世に何人の、始め置きたる言の葉ぞ。我が君この世にましまさば、自らが事、若の事、今の思ひはあるまいものを、若木の花を徒らに、埋れ木となさんかと、思へば果敢ない浮世、口惜しい身

の上と、思へば悲しい過越し方を、思ひ出されし今日のこの日。士は功に依つてその家を、立つる慣ひとこそ聞き傳へしに、淺ましい世の盛衰ぢやなア。

〽悔み涙は嫉みぞと、心に障る政子の方。

政子　イヤナウ、宇治の方、あの武藏野に見る月も、賤が伏屋の濁り江に、宿りし月も元一つ、所々の風雅により、歌も違ふと云へば、その時々を辨まへて、世上に附くが、よささうなものではあるまいかいなう。

宇治　成る程、御尤もなお詞なれど、春の花咲き冬は雪、天道四季に私しなし。時を乘り順を越え、辭儀も作法もなき時節なれば、善惡邪正とても分らぬ浮世かと、マヽ私しは果敢なう存じます。

政子　サア、其やうに思すが心の僻み。尤も、賴家どのも、君のお胤とは云ひながら、妾腹なれば是非なき不運。

宇治　イエ〳〵、そりやお詞が違ひます。例へその母母の、品位は變るとも、賴家に惣領、實朝どのには弟なりや、その惣領の賴家を差措き、弟が上に立つと云ふ事が

政子　オヽ、あるとも〳〵。例へ乙に生れても、君の妻たる自らが、産み落したる實朝を、世に立てるのが天下の掟。殊更、子は母に依つて尊しと云ふでないか。そもじは誰ぞ、伊藤祐親の娘、現在我が君とは仇なる仲、[illegible]の孫娘、お咎めもあるべきを、却つて君のお情、[illegible]樂榮耀の餘り、源氏の後を繼がんとは、みそさゞいの巣を鶉ケ枝にかけるよりは遙かの事、なか〳〵及ばぬ〳〵、叶はぬ望みと、諦らめたがよからうぞえ。

宇治　羊の綱は順に引けども逆に歩むと、我が邪を直ぐと思うて、聞き惡い一言。女でこそあれ、自らが念力で賴家を、一度武將に取立てませう。

政子　ホヽ、そりや蟷螂の斧同然。この日の本の惣追捕使、取らるゝなら取つて見や。

宇治　オヽ、取つて見せう。

政子　イヤ、及ばぬ事さ。

宇治　イヤ、及ばぬ望みも猿猴が、その星月夜の、鎌倉山を手の内に。

〽オヽ、取らいではと裲襠ひかり、持たせし長刀互ひに握い込み。

宇治　國家の分け目は眞劍勝負。

政子　見事刃向うて見やしやんすか。

宇治　おんでもない事。サア、尋常に。

兩人　サア〳〵〳〵。

〽サア／＼＼と詰め寄りしに、野分に騒ぐ荻萩の、亂れ合うたる如くにて、すわ事こそと腰元はした、手に汗握る寺中の騒動、佛の台座も忽ちに、修羅の巷へ駈けくる片岡。

造酒　御兩所待つた、必らず聊爾なされな。

〽待つた／＼と氣も狂亂、押し隔てどつかと座し。

ト造酒頭出て、眞中へ入り

造酒　エヽ、情なき御有樣。御兩所の爭ひは、偏へに天下亂れの端と、お心が附きませぬか。如何に女儀なればとて、エヽ、淺ましい御所存。殊に今日は亡君尊靈、お祥月の御命日、そのお位牌の御前にて、かゝる善惡なき賤の女同然のお爭ひ、お止め申したは國家の爲を存ずるゆゑ。京鎌倉御緣を結はゞ、自然と互ひのお心も和らがんと、存じ附きたるこの度の御緣組、御代長久の礎、亡君もさぞ御滿足ならんと思ひの外、かゝる御有樣。エヽ、情ない。身不肖なれどもこの造酒頭が、胸中を苦しむる千變萬化、九牛が一毛も聞し召し分けられて、何卒和順なされて下さりませ。コレ、モシ、御兩所様、何事も拙者に免じられ、御料簡なされて下さりませ。

〽精ツつ口説いつハラ／＼＼、涙は忠義隨一の、上に立つたる武士の、諫めに誠を顯はせり、榮西和尚、しづしづと、御弟子引連れ出で給ひ。

ト榮西、所化出て

榮西　尤もなる造酒頭どのゝ御諫言。御兩所へ愚僧が御意見はこの一軸……これにて萬事を、お悟りなされい。

〽持たせし一軸、傍なる、松の小枝にさらりとかけ。

なんと御覽なされたか。天の時正に至ると云ふ文字、兎角天下を治むるに、天より自然、その人に與へ、給はねば、なか／＼治める事能はず。既に以て今日追福奉る右大將、蛭ヶ小島のさすらへも、後には天の時至り、六十餘州の惣追捕使。お跡目の御述懐、お互ひに遺恨とならば、いよ／＼御代の爲にならぬ。ナア、この理をとくと、御合點なされましたか、御兩所様。

〽出家形氣の一行、和尚も名にし建長寺、すつぱりとした意見なり、政子の方理に服し。

政子　ハア、御尤もの御仰せ。先君の御追善に、はしたない云ひ諍ひ。造酒頭の諫めの通り、誤まりました。イヤナウ、宇治の方、必らず心にかけて下さるなや。

宇治　何がさて、改まつたお詞。只今の無禮、お免しなされて下さりませ。

〽互ひに和らぐ御挨拶、造酒頭頭を下げ。

造酒　憚り多き諫言を、お聞入れ下されし、御恩の重きさざれ石、巖となりし御代萬歳、見せ奉るが直ぐに追善、佛事も終れば御廟所にも、イザお立ちあられませう。

〽いざ歸館と勧むれば、解けぬ心を襦袢に、包む式禮政子の方。

政子　左様ならば宇治の方にも、御下向なさるゝか。

宇治　あなた様にも。

政子　和尚にも今日はお心遣ひ。

榮西　早ございますか。

宇治　おさらば。

政子　サア、造酒頭。

造酒　何れも、お立ち。

〽片岡和尚お見送り、館をさして歸らるゝ、後に局に張り詰めし、心の怒り止み兼ね、千々に碎くる思案の體、始終の樣子を三浦之助、さあらぬ體に手を仕へ。

ト政子に造酒頭、榮西附いて向うへ入る。宇治の方、思ひ入れ。三浦之助出て

三浦　日も夕陽に斜なれば、最早お立ちあられませう。

〽お立ちざうと申すにぞ、しづ〳〵傍に歩み寄り、懸け奉る雌雄の名劍、一腰に手挾み。

宇治　如何に義村、泰平の印を見せんと我が君様、この大佛殿に納め給ひしこの劍、雄劍は自ら、雌劍は其方、これを帶せん良將を、選んでおぢや。

三浦　ヤ、なんと、

宇治　それまでは、勘當の印。

〽差出し給へば兩手に受け。

三浦　四海泰平なる時は、弓は袋に太刀は鞘に納むると雖も、再び用ゆべき時節、近きにあるとの御所存な。

宇治　オヽ、云ふにや及ぶ。先君の御恩を忘れし、北條一家の權柄我まゝ。鎌倉山の月影を、餘所に眺めて賴家を日影の花となし果つる。

〽その口惜しさは如何ばかり、例へ滄海は平潟となり。巖は湯玉と變るとも。

〽恨みは晴れぬ我が心。推量してたも、三浦之助。

三浦　ハヽ、お憤り御尤も。三浦之助が心根に徹し、逐一承知仕つてござります。

宇治　すりや、自らが心底、尤もと思やるか。

三浦　御存念達しさせ奉らんと云ふ、誓ひの蟇目。

〽同じく寄つて懸け置きし、弓矢押取り奉り。アレ／＼、御覧ぜあの一軸、天の時正に至ると云ふ、中なる文字こそお恨みの目當。只一矢に御欝憤、晴らされませう。

ト右の掛け地を柱にかける。

〽的を外さぬ黒星に。

宇治　三浦之助が即座の才智。

〽心得しと打ち番ひ、きり／＼／＼と引き絞り、手先上りに切つて放てば過たず、文字の只中はつしと書く暮れの鐘。

ト宇治の方、掛け地を射抜くと、本釣り鐘。

嬉しや念願成就。

三浦　天晴れ門出。

宇治　めでたい。行きや。

三浦　ハア。

〽別れ、勇んで。

ト三浦之助、宇治の方、双方思ひ入れ。三重にて

幕

三幕目　高宮村居酒屋の場

役名――駕籠舁き、四斗兵衛。八藤軍治。鬼山曾平。駕籠舁き、仁作。鹽賣り、長蔵。

造り物、野邊の體。正面に煮賣屋あり、東西松原、前に草井戸あり、在郷唄にて幕明く。

ト旅人の仕出し二人出て

旅一　なんと九郎兵衛、今のを見やつたか。

旅二　オヽ、見たが、ありやア何ぢやぞいな。

旅一　彼れがこの間流行る鹽屋ぢやが、なんと派手な形ぢやないかいな。

旅二　おりや又、祭りの練り物かと思うた。

旅一　あのやうな派手な形をして歩いたら、よう賣れさうなもんぢや。

旅二　形と云ひ、男つきと云ひ、如何な女子も鹽の目で、じなつきさうな鹽梅ぢやぞや。

旅一　サア、知つての鹽梅と云ふ字は、鹽梅と書く。彼の鹽屋に、お梅と云ふ女子が惚れたゆゑ、鹽梅と云ふ事が

始まつたと云ふ。

旅二　何を云はつしやるやら。おりや草臥れて、口合ひどころぢやないわいの。

旅一　イヤ、おれもしんどいによつて、この口合ひが好い鹽ぢやわいなう。貴様も其やうに鹽々せずと、サア、もちつと歩かつしやれ。

旅二　さうでもおりや、ア、しんど。

ト跛引き〳〵連れ立ち入る。また在郷唄になり、駕籠舁き、四斗兵衛、仁作、出て

四斗　コリヤ、仁作、なんと立てんかい。

仁作　旦那はお急ぎぢや。通せやい〳〵。

ト云ひ〳〵駕籠下ろし

四斗　何をうろたへ者が。幸ひの酒屋、爰で立てゝ、親方にもお茶でも上げやい。後の酒屋で立てりやよいのに、阿房らしい、奈落の底まで掻き込むかい。性根を附けい。

仁作　可愛盡すない。おのれと棒組みになるが最期、定付けの立場でも、すつとこなにして、酒屋さへ見りや何度でも休みたさうな面付き。それと云ふも、呑みたいから。どうでおのれは、八日の大蛇の再來か、酒呑童子の眷屬でがなあらう。エヽ、いげちない喰ひ抜けではあるわい。

四斗　おのれ又、日がな一日、同じ所を行つたり戻つたり、蜘蛛の巣見るやうに、重荷かたげて歩くのも、一杯呑まうと思ふ樂しみばつかり……なんと親方、一つ上がりませんかい。

ト亭主出て

亭主　サア、お休みなされませ、燒酎、諸白、田樂、燗酒よし、お上がりなされませ〳〵。

〽亭主が詞に駕籠の垂れ、上げて床几へ歩み寄る、十河額の東武士、悠々と押直り。

ト軍治、駕籠より出て床几へ直り

軍治　ナニ、後肩の者、これへ參れ。

仁作　ソレ、旦那が呼ばつしやるワ。

軍治　最前其方に云ひ付けた通り、急用ある身共なれば、立場を抜けてぼッ付けよと、云うた通りになか〳〵精が出た。オヽ、早かつた。極めの外に、褒美をくれうわい

ト錢をやる。

四斗　それは有り難うございます。

軍治　聞けばおのれは酒好きとやら。亭主、彼の者に酒を呑ませい。

亭主　ハイ〳〵、畏まりました。旦那のお振舞ひぢや。氣入らずに呑ましやれ。

四斗　これは〳〵、ハア、、天晴れなお侍ひ様、極めの外の褒美と云はど、五十がところ増しを下さるが高ぢやに、酒を呑めとは又、違うたもんぢや。大將々々。なんと仁作よ、聞いたか。見てあらうがの。

仁作　なに聞すやら。申し、旦那、結構の御意でござりますれど、御褒美と下さります、酒よりわしは餅がようござりますに。

軍治　なんぢや。わりや餅が好いか。

仁作　アイ。

〽同じ事なら餅がよい。酒に優つた餅の徳。〽年の始めも鏡餅、重ねて神の二柱。或ひは茶請の柱とも、腹の減る事。〽遊いたり。第一駕籠舁きに酒呑ますは、嗅に地黄を呑ますやうなもんで、どこその程では乗手の身に、怪我の出來るは知れた事。酒をとんと止めにして、なんと餅になされませんかい。こりや酒よりは餅をお振舞ひなされたが、上分別でござりますぞえ。

〽下戸と上戸の得手勝手、咽喉は鎌倉海道の、食爭ひと見えにけり、侍ひは苦笑ひ。

軍治　イヤ、餅の因縁、なか〳〵聞き事であつた。望みとあらば兩人とも、勝手の方を振舞ふワ。

仁作　エ、、これは有り難い。サア、御意が出たぞ。亭主、餅を出せ〳〵。餅ぢや〳〵。

亭主　イヤ、爰に餅は。

仁作　無いか、南無三、ハア悲しや。

亭主　この見世には酒ばかりで餅はないが、其やうに力を落すまい。あの堤の餅屋も、此方の出見世ぢやに依つて、あそこまで行かつしやれ。

仁作　よし〳〵、餅とあれば、いづくまでも行くてや。

亭主　コレ、貴様はなんぼなりと、あの壺から旦那のお指圖次第に呑ましやれ。

四斗　よし〳〵。

亭主　サア、餅好きどのは、此方へごんせ。

〽亭主が案内に相棒は、おのれ存分食ふべしと、旦那へ默禮機嫌取り、五文取らうと急ぎ行く、跡肩は立ち上がり、勝手知つたる賣り場の酒、有り合ふ桝を杯に、柄杓

から注ぎ移し。
四斗　然らば旦那、お辭儀なしに食べますから、下さりませ。
軍治　桝から呑むか。こりや見事ぢやワ。なんぞ肴をくれたいな。
四斗　イヱ／＼、お肴には及びません……持合せがござります。
〽先づ一口と角呑みに、がぶ／＼と一息つぎ、腰の胴亂引明けて、取出す唐辛子。
コレ、旦那、御覽じませ。安立町の名物、鷹の爪、お肴はこれでござります。
軍治　ハテ、思ひ切つた肴ぢやな。とてもの事にその肴で、一首聞きたいが。
四斗　サア、この肴で一首とは、赤いと云ふのか。こいつは面白いわい。
軍治　どうぢや。聞きたい／＼。
四斗　斯うもござりませうかい。
軍治　浮んだか／＼。
四斗　擂粉木も紅葉しにけり唐辛子。
軍治　出來た。

四斗　この紅葉をお肴でござります。
〽一口喰うてぐつと乾し。
ムウ、旨い／＼。こりや堪らぬワ。申し旦那、ちつとお願ひがござりますが。
軍治　願ひとは何事ぢや。
四斗　イヤ／＼、外の事でもござりません。とてもの御造作次手に、も一つこれで食べませうかい。ハ、、、、。
軍治　なんぢや。まだその上呑むのか。
四斗　もう一つ下さりませ。
軍治　ハテ、嚴しい上戸だな。何程なりと勝手に、呑め呑め。
四斗　でござりませう、こりや有り難いワ。
〽手酌の量り思ふ儘、丁度ついで
へゝゝ、また食べます。今度は一息にやります。
〽桝引ッ抱へ鯨が、瀧の流れを呑む如く、侍ひは呆れ顏。
軍治　此奴、人間業ではないわい。どうでも猩々の生れ替りぢやさうな。
四斗　エヽ、忝ない、命々。酒はこれからぢやけれど、この上をお振舞ひなされと云ふも不作法ぢや。もうこれで納めませう。押へる氣はないかえ……あるまい／＼。ハ

ア、さてと、慮外は御免ぢや。ちつとの間、そろ／＼とやりますでござります。

ト桝を枕にして寢る。

〽芝にころりと邯鄲の、枕いらずにはや鼾、仙人界も斯くやらん。

軍治　イヤ、何かと云ふうち、餘程の隙入り。急の道中、これより直ぐに、さうぢや／＼。

〽立上がつて身拵らへ、用意の内に都路を、東の方へ急ぎの武士、顏見合せ。

ト曾平出て顏見合せ

曾平　軍治どのか。

軍治　これは／＼、曾平どの、好い所でお目にかゝつた。貴殿の御主人、大江の入道どの、兼ねて鎌倉方への御内通の忠臣、京家にては出頭の入道どののゆゑ、鎌倉へ内通とは、神も知らぬ計り事。お互ひに三日目に、逐一の御文通。定めて貴殿も、此方の主人への、お使ひでござるかな。

曾平　成る程、仰せの通り、主人大江どの御油斷なく、京城内のはたらく、萬事の樣子、具さに内通仕るところ、この頃賴家公には、諸國の武士を狩り集め、密々の評議。その儀に付いてのお使ひ。幸ひ途中の對面、なんと、双方の書状を取替へ、一刻も早く歸國いたさうではあるまいか。

軍治　これは一段の御料簡。然らば左樣仕らう。

〽互ひに密書の箱取替へ、懷中して立ち上がり、鬼山曾平あたりを見廻し。

曾平　イヤ、軍治どの、我れ／＼兩人より外に、聞く人なしと存じ、一大事の物語り。見れば彼れに醉ひたる下郎め、ありや何者でござります。

軍治　ホヽ、御不審御尤も。彼奴は拙者が爰まで舁いて參つた駕籠の者。喰ひどれであの態。イヤモウ、他愛もない下素下郎、お氣遣ひはござらぬ。

曾平　ナニサマ、殊の外熟醉の體には見えますれども、彼奴が人相、なか／＼逞ましき生れ付き。木にも萱にも心置かるゝ時節でござれば、もし外へ漏れては一大事。

軍治　イカサマ、御尤もの御念。

曾平　拙者が存ずるはな。

〽これ斯う／＼と八蔵に、囁けば打頷き、寢入りし下郎が側へ寄り、耳近く聲張り上げ。

軍治　ヤイ／＼、駕籠の者、用事がある。

両人　目を覚ませ。
四斗　エヽ、誰れぢやい／＼、何ぢやい／＼／＼。
　ト云ひ／＼寝て居る。
軍治　イヤ、用事がある、目を覚まさぬか。
　トきつと云ふと頭を上げ。
四斗　エヽ、誰れぢやと思うたりや、先刻のお侍ひ様か。まだ呑めと云ふのかえ。イエ／＼、全く一人では呑めませぬ。ちよつとお相を頼まんせうかい。サア／＼、おさしなされませ。
〽寝ても覚めても酒の事、鬼山はつッと寄り。
曾平　ヤイ、下郎め、先づおのれが名を云へ。どこの村に住居するぞ。
四斗　住居とは、何の事でごんす。
曾平　ハテ、おのれが住ひする所の事ぢやわい。
四斗　ムウ、所かえ。ハデ、替つた事を尋ねる旦那どんぢやわい。我れら住居は何所とも定まらず、この海道でこんもりと、よう茂つた森の所は、慮外ながら拙者が寝所。また名がお聞きなされたくば、本名は雲助、また替名が呑助、呑む事は二斗三斗、まだその上も食べますに依つて、この頃は名が替つて、四斗兵衛々々々々と、どつこでも申します。イヤ又、酒に於ては天晴れの手利者、どなたでも敵ふまい／＼。
　ト云ひ／＼眠る。
軍治　ヤイ／＼、眼を覚まさぬか。
　ト引起す。
四斗　オツト、合點ぢや／＼／＼。オヽ、なんと仰しやる。我れらに肴を致せか……イヤモウ、我れら大無器用者、駕籠舁く事と酒呑むより外は、なんにも存ぜんぢや。シタガ、なんぞやらかしたいものぢやが。イヤ、ほんに、この間、子供らが海道筋で唄ふ唄、アヽ、なんとやら覚えて居たが。ヤ、てんぽの皮、やつてのけうかい。お萬が股倉へ太々神楽が飛込んだ、また鈴振つて跳ね込んだ。ハヽヽヽヽ、面白い／＼。
曾平　ヤイ、下郎め、戯言云はずと性根を付けて、コリヤ、われに格別に頼みたい事がある。
四斗　ムウ、お前方がわしに頼みたいとは、ナヽ、なんでごんす。
曾平　外の儀でもない。其方の命が欲しい。
四斗　エヽ。
曾平　イヤ、其方の體が貰ひたい。

四斗　エヽ、そりやマアなんの科で。

曾平　オヽ、驚ろくは尤も。只今このお方と、主人の密事を話し合ひ、何心なく後を見れば、其方が酔うたる體。よもや聞きもせまい……なれども、先づ差當つて、我れ我れが不覺。助けては置かれぬわい。

四斗　エヽ。

軍治　其方酔ひ臥したるに相違なく、密事を聞かぬにもせよ、此まゝに捨て置いては、我れ〳〵が後日の誤まり。是非がないと諦めて、命をくれよ。貰つたぞよ。

四斗　てもさても、様子を聞けば聞く程、膽が潰れて、興も酒も醒め果てました。お二人が口を揃へて、其やうに仰しやるからは、定めて譯はござりませうけれど、わしや何にも聞いた覺えもなし。

軍治　ヤア、聞分けない下郎め。たとへ聞かぬが誠でも、この場に居合せたが、おのれが不運と諦めて、それへ直れ。

曾平　念佛の一遍も唱へさせくれんと、詞甘く云へは付け上がり、伸した下郎めが。

軍治　所詮助からぬ命と觀念し

曾平　覺悟せい。

ト詰めかける。

四斗　アヽコレ、短氣な事せまい……待つて下んせ〳〵。これは又、情ない所に居合せた事ではあるぞ。わし一人の命なら構ひはせんけれど、内には八十三になる悴もあり、六つになる母者人もござります。なんぼ雲助して居ても大事の命、一人ぢやござりません、三人四人の命ぢやと思うて、お助けなされて下さりませ。お赦されて下さりませ〳〵。

〽哀れを作る空恍け、詫びるより詞なし、軍治怒つて。

軍治　默り居れ。おのれたつた今、住所を尋ねし時、所々の森に寢ると吐かしたではないか……すりや、知れた宿無しの分として、妻子があるなどゝは、偽はり者めが。

曾平　ヤア、軍治どの、手緩い〳〵。こま言云はずと一打ちに。

兩人　覺悟せい。

〽刀するりと抜き放せば、ワッと飛び退き、

四斗　マア〳〵、私しが云ふ事も聞いて下さりませ。先刻に宿がないと云うたは、一杯機嫌の出放題でござります。よう思ひ出して見りや、内はある段ぢやござりません。

ア、、思へば〳〵、此やうな無法な事に出合ふのも、悪い星に當つたのか。どう思ひ直しても、この身の因果。さつぱりと諦めて、成る程、命上げませう。

軍治　オヽ、よい覺悟。

曾平　觀念せい。

四斗　アヽコレ、マア、急くまい〳〵。たつた今も云ふ通り、今年八十三になる倅もあり、六つになる母もあり、母者人にも、ちよつと暇乞ひが致したうござります。ツイちよつと去んで參じませう。

〽逃げ出す後逃がさじと、肩先かけて一刀、切つたか飛んだか古井戸へ、眞逆樣に落ち込んだり、鬼山透かさず手頃の木片、古井戸へ打込み〳〵、とつくと見。

ト切りかけられて四斗兵衛、井戸へ飛びこむ。兩人、あたりの木片を井戸へ投げこみ

曾平　もう〳〵、斯う致したれば、氣遣ひはござらぬ。

軍治　見かけに依らぬ、脆い奴でござる。

曾平　役にも立たぬ奴に、殊の外骨を折りました。

軍治　存じ依らぬ下郎めにかゝつて、時刻も延引いたした。これより夜道をかけて、拙者は直ぐに國元へ。

曾平　然らば拙者も、これより直ぐに。

兩人　お別れ申す。

ト兩人、左右へ別れて入る。

〽互ひに禮儀、兩人、京と東へ別れ行く、始終の樣子を前より、木蔭に窺ふ鹽貫長藏、差足して歩み寄り、井戸へ落ちたる下郎こそ、只者ならず訝かしく、試さんものと兼ねてより仕込む拐に穗長の鎗、井戸に立寄り道溜し、ぐつと突き込む手練の手應へ、透かさず拔き取る鎗の穗先、ほつくと折れしはさてこそと、逡らふうちに井戸よりも、ぬつと出でたる件の駕籠舁き、上るや否や發止と打つ、穗先の手裏劍長藏は、俯向けに倒れ伏す。四郎兵衛は見向きもせず、何か心に打ちなづき、のさり〳〵と懷手、村道指して行き過ぎる。後に長藏空死の、鎗の穗先を手に受留め、むつくと起きて身繕ひ、はや暮れ渡る空の色、曲者が行く道筋を、遙かに見やり見定めて、後を慕うて。

ト文句の通り長藏出て、井戸へ槍を突ツ込む。中より先を折り取る。これにて長藏窺ふ。井戸より四斗兵衛出る。長藏、捕へる。これより兩人、ちよつと暗仕合ひあつて、槍を手裏劍に打つ。長藏、倒れる。四斗兵衛、悠々と向うへ入る。長藏、起きあがり、思ひ入

れあつて、三重にて跡を追ひかけ入る。

幕

四　幕　目　醒ケ井四斗兵衛住家の場

役名――鎧造り、長藏實ハ三浦之助義村。片岡造酒頭春久。北條息女、時姫實ハ腰元住の江。腰元住の江實ハ北條息女時姫。四斗兵衛女房、お卷。奴、可内。下人、與太郎。駕籠舁き、四斗兵衛實ハ和田兵衛秀盛。

造り物、貧家の體。四斗兵衛、仰向けに寢て居る、女房お卷、糸車廻して居る。麥搗唄にて幕明く、淨瑠璃になる。

〽所の名さへ醒ケ井と、云へど朝夕醉ひ伏して、酒手に諸式道具まで、酒屋へかき出す駕籠舁きあり、名は四斗兵衛が内一杯、ふんぞり返る高枕、側に女房が賃仕事、小遣ひだけを紡ぎ出す、ぶんぶ車も世渡りも、廻り兼ねてぞ見えにける、四斗兵衛は大欠伸、體擦つて起き上がり。

四斗　エヽ、耳の端でブウ〳〵と、アタやかましい。あつたら夢を覺ましくさつた。目覺ましに一杯せう。一走り行て買つて來い。

〽奈良漬臭い噯氣しながら、まだ呑みたがるいげちな上戸、女房仕事の手を止め。

まき　エヽ、嗜なまんせ。たつた今その德利を呑み乾して目が明くと又かいな。

四斗　又であらうと、げんこであらうと、小みづつかずと、早う買つて來いやい。

まき　買ひに行かうにも、價がござんせぬ。

四斗　仔細らしい。價とは、れその異名か。錢がなきや、おのれが褞袍ぶち殺して買つて來いやい。

まき　さいな、わしが單衣は惜しうはないけれど、其やうに呑ましやんしては、身の養生になるまいぞえ。ちと扣へたがよいわいな。

四斗　また男の咽喉締めしをるがな。おのれは飯は喰はいでも、酒を呑まずに居られるものかい、小言云はずと買つて來いやい。コリヤ、賴むわい、どうぞ一杯呑ましておくれいなア。

〽猫撫で聲も呑みたさの、餘りの事に女房は、呆れて詞

なかりける、折柄笈をひよろ／＼と、通り過ぎる奴らさ、四斗兵衛見るより飛んで出で。

ト奴一人出てくる。

四斗　コレ／＼、可内どのや、權平どの／＼。

可内　誰れぢや／＼、今おれを呼びかけたはお身か。

四斗　ハイ、私しでござります。

可内　私しだと云ふ、其方は誰れだ。

四斗　誰れぢやとは他所々々しい。さて先日は段々御馳走にあづかりまして、忝なうござります。マア／＼、お入りなされませ。

〽云はれて合點の行かぬ奴。

可内　こな男は、何を云ふ。おらはついぞ

四斗　サア／＼、ついぞ沁み／＼と、お禮にも參りませんと、さぞお叱りもなされてござたつでござりませう。

可内　イヤ、いま叱らうにも叱るまいにも、近付き事もないものを。

四斗　ハテサテ、近いうちにお禮に參じませうと、存じて居りました所でござります。マア／＼、お入りなされませ。

〽無理に伴ひ内に入れ。

それからちよつとお禮に參りませうと存じましても、とんと貧乏隙なしで、お禮も遲れましてござります。コリヤ、嬶、ちやつと彼方へお禮申してくれ。

まき　お禮とは、なんのお禮を云ふのぢやえ。

四斗　イカサマ、われにや云はなんだに依つて、合點の行かぬ筈。この中、ソレ、アヽ、いつやらであつた。結構なお料理を振舞はれたその上、結構なお酒を強ひられて、それは／＼近年の御馳走に合うて、ソレ、えらう醉うて戻つた時の事ぢやい。

まき　こなさんの醉はずに戻らしやんした事が、いつあつて。

四斗　エヽ、それを爰で云ふ事かい。マア、ちやつとお禮申してくれ／＼。

〽滅多無性に喜べど、根つから覺えのない奴。

可内　アヽ、これサ／＼、それは何の事だ。おらはおてまへに何も振舞つた事はないもせんもの。

四斗　エヽ、物覺えの惡い。あれ程振舞うて置いてからにエヽ、こりや振舞ひ返しでもせうかと思うて、お禮におやな。イヤモウ、御覽じまする通りなれば、振舞ひ返しとては、得いたしませんけれど、せめて御酒一つ上げま

せうかい。又こちの嬶が悪い癖で、人樣に振舞はれて居る事が、きつい嫌ひでござります。嬶が心休めぢや。何もなくとも、一つ上がつて下さりませ。コレ、嬶、一走り行て買うておぢやらぬか。

〽云はれて否とも客の手前、不承々々に女房は。

まき　あの山田屋は、最早戸が締めてあつたが、留主か知らんて。

四斗　ハテ、山田屋が留守なら、濱の高砂屋で買つておぢやいの。

まき　そんなら、どうしても買つて來にやならぬかえ。

四斗　おりや呑みたうはないけれど、あなたへの愛想ぢやわいの……ヤイ、早う行て來いやい。

まき　そんなら行て參じやんしよ。

〽德利提げて出でて行く、奴は猶も不思議な顏付き。

トお卷、德利下げて出て行く。

可内　おらに酒呑ますとは、どうやら嬉しい事だんべいが、振舞つたなどとは、びやくらい覺えもない事を。エヽ、こりや酒の美人局だな。

四斗　エヽ、旨い和郞ぢやわいの。なんの有やうは、酒一杯振舞はれた事はなけれど、あんまり嬶めが呑まさぬに依つて、斯う云ふ手段を廻らしたは、彼奴に酒買ひにやらうばつかりぢやわいの。

可内　エヽ、それで讀めた。こりやおらを餅の形ではない、酒の形にしたのだな。アヽ、それ程呑みたがるからは、貴樣も呑助ぢやな。

四斗　呑助の段か、名さへ四斗兵衞。

可内　なんだ四斗兵衞。えらい名ぢやなア。

四斗　サア、初手は一斗兵衞であつたれど、二斗兵衞となり三斗兵衞となり、段々呑み上げて、立身出世をして、追ッつけ菰被りまで呑みあげると云ふ心で、今の名は四斗兵衞。なんと、えらい呑助であらうがな。

可内　えゝぢや／＼。一斗兵衞から四斗兵衞までの立身。その位なら今の間に、五斗兵衞と名を萬天に上げるであんべいぞ。

四斗　五斗兵衞の段ぢやない、六斗兵衞までも七斗兵衞までも呑み上げて、おれ一生には、百萬石も呑みたいわいやい。

可内　エヽ、天晴れ酒の計り事。

〽肖り者めと話しのうち、德利ぶら／＼女房のお卷。

トお卷、歸つて來て

まき　サア、買つて來たぞえ〳〵……ちと隙が入らうかな。
四斗　オヽ、待兼ね山の時鳥。
〽鳴く音はほぞんかけ德利。
マア、お客から、サア、お始めなされ〳〵。
まき　ほんに、たま〳〵のお出でに、酒はあつても、何も肴がないが。
四斗　かます子でもだんないわい。
まき　奴さんへの御馳走に、湯奴なと、して上げうかえ。
四斗　よからう〳〵。ちやつと持つて來い〳〵。
まき　ドリヤ、拵らへて上げうか。
〽お卷は勝手へ入りにける。
可内　湯奴とは忝ない。出來るまで、ドリヤ、一杯、底入れうかい。
四斗　エヽ、この和郎も、近渇えぢやの。
可内　イヤモウ、德利の顏を見ると、口に唾が溜るてや。
四斗　そんなら、それからお始めなされ。
可内　左樣ならば、お辭儀なしに。
〽エヽ忝ないと茶碗に引受け、がぶ〳〵一口二口目口を皺め。
可内　なんだ、こりや新酒か水臭い……エヽ、こりや酒ぢやない。水だわい。
四斗　なんぢや水ぢや……人の振舞ひ酒を不作法千萬な。嫌なら此方へおこした。滅相な、折角
ト云ひ〳〵、茶碗に注いで一口呑んで見て
エヽ、ほんに水ぢやワ……ハテ面妖な。
ト云ふうち、お卷、出て
まき　なんと、一つ上がつたかえ。
四斗　コリヤ、おのれ、男をやり仕事に掛け居つたな。
可内　エヽ、すりや内儀の計り事か。
まき　アイ、この手で再々こちの人に、騙られた振舞ひ返しの御馳走。奴さん、よう上がつて下さんしたなア。
〽云はれて月夜に鎌髭奴。
可内　ても酷い目に合はせたな。こりや湯奴ぢやわい、水奴だ。エヽ、いま〳〵しい。
〽アタ分の惡いと、呟き〳〵立歸る、引違うて來る男、酒樽片手に肴籠。
ト奴入る。引違へて與太郎、酒樽を持つて出て
與太　申し、ちよつと物が尋ねたうござります。
まき　なんでござんす。
與太　どこぞ爰らに、堺屋の三右衛門どのと云ふお人はご

ざりませんかな。
まき　イエ〳〵、爰らにそんなお人はござんせぬが
與太　ハア、どこやら此あたりぢやと聞いたが、そんなら外を尋ねて見ますでござりませう。
ヘ　肴樽に目の付く四斗兵衛。
四斗　ア、コレ〳〵、待たしやれ〳〵。こなたの樽肴、どこへ持つて行かしやるぞ。
與太　サア、堺屋の三右衛門どのゝ所へ。
四斗　アノ、その酒を遣るのか。
與太　左樣でござります。けれど、その三右衛門どのが
四斗　知れてある。爰ぢやわいの。
與太　でも、たつた今お内儀どのが、爰らにないと云うてであつたが、
四斗　エヽ、わりや知らん筈ぢや。堺屋三右衛門と云ふは、わしの名前、本名は……おれぢやわいの。
與太　エヽ、そんなら内方でござりますかな。
四斗　爰の殿ぢやない。三右衛門と云ふは、おれぢやわいの。
與太　これはしたり、左樣ならあなたが、聟どのでござりますか。

まき　ヤア、聟とはえ。
四斗　ハテ、マア、默つて居いやい。
與太　仲人は獨屋善兵衛申します、追ッつけ嫁御樣もお越しでござります。これは些少ながら、聟どのへ嫁御樣の、お土産でござります。
まき　ア、コレ〳〵麁相な。そんな事は、此方に覺えはござんせんぞえ。
四斗　何を又左平次が。エヽ、こりや雇ひ女でござります。何もわりや知らん筈ぢや。雇ひ女ぢや〳〵。
まき　ナニ、滅相な。それでも。
四斗　何をまだ〳〵、すりや、これが嫁御の持參でござりますか。
與太　左樣でござります。ほんの印までゞござります。
四斗　イヤ〳〵、これは御叮嚀な。女夫の中で氣を張らいでもよい事を。祝言の杯は後の事。マア、手附けに一杯いたさうかい。
ト　茶碗を出す。
まき　エヽ、滅相な。この酒呑んで、嫁御とやらが爰へ見えたら、どうせうと思うて。
四斗　ハテ、どうせうと斯うせうと、高がその嫁を、女房

に持ちやいゝぢやないかい。

まき　アノ、わしと云ふ女房のある上に。

四斗　オヽ、酒さへ持つてくりや、幾人でも女房にする。おのれも矢ッ張り女房になつて居たきや、酒を買うて来い……何を、水を呑まして置いてからに。見や、ほんに酒戻しはせんものぢやわい。

〽茶碗に注いでぐつと呑む。

与太　ヤア〳〵、もう嫁御が爰へ見えますぞえ。

まき　エヽ、嫁が来て堪るものかいな。ちやつと去なして下さんせ。

与太　でも、もう見えましたもの。

ト云ひ〳〵走り入る。

まき　これは又、ひよんな事ぢやぞ。コレ、こちの人、もう嫁が来るといな。

四斗　来るもだんない。酒さへ呑めは、よいわいやい。

〽云ふ間表に風かをる、二八の花の振りの袖、町家にあらぬぶつ裂き羽織、大小の拵らへも、理法を好む着流しの侍ひ。

ト向うより造酒頭、時姫の手を取り、出で来り

造酒　誰ぞ案内頼もう。

〽訪ふ声にお巻がむつと。

まき　ドウレ……門違への嫁御様……アヽよう お出でなされました。

〽呟く女房、四斗兵衛は、酒が仲人の儀か舞。

四斗　ようお出でなされました。サア〳〵、ズッとお通りなされませ。

〽これへ〳〵に打通る、並々ならぬその勿體。

まき　ヤア、兄さんか。

造酒　妹……堅固にあつたな。内縁あれば格別、今日これへ参つたは、四斗兵衛どのへ折入つて、頼みたき仔細あつての事。

まき　エヽ、そんなら嫁御と云ふのも。

造酒　ホウ、これに渡らせ給ふこそ、鎌倉の大將、北條家の御息女、頼家公へ御縁邊を取結びしところ、お若氣の至りに、三浦之助と謂りなき戀路。京鎌倉御和睦の、種と思ひ縁組みせしも、却つて破れの端となり、時姫のお首討つて渡せと、京都よりの難題。時政公も不義ある御息女ゆゑ、御親子の縁切つたと、鎌倉へも入れられず、御身一つの御難儀、是非もなき有様と、この片岡が一身に迫り、さま〴〵思案を廻らせども、何を云うてもリ

餘儀の沙汰。先づお姿を隱し置き、その上にて事を計らん儀、魂ひを見屆け、お預け申す。四斗兵衞どの、お頼み申すはこの一儀。

〽くれ〴〵頼み存ずると、餘儀なき體にお卷が喜び。

まき　ほんにマア、父御樣や兄樣の、お許しもないに、我まゝな男選み、憎い奴不義者と、お叱りを受け、たとへお手討に合ふとても、無理とは思はぬ我が身の徒ら、今さら悔んだとて詮ない事ぢやけれど、叱る代りに、お姫樣の事を頼むとは、親は泣寄りとは、よう云うたものでござんす。こちの人を男と見かけて頼むとは、よう云うて下さんした。お氣遣ひなされますな。お匿まひ申されますからは……とは云うても、氣の毒なは、酒を呑むと忽ち心の轉々する氣質……ぢやと云うて、折角頼みに來て下さんした手前もあり……酒さへやめて下さんすなら。

四斗　ヤイ〳〵〳〵、二言目には酒々と、男を打込むさいまぐれめ、魂ひを見込んでとあるからは、如何にも四斗兵衞が、命にかけてお匿まひ申ませう。

まき　イヤ、合點がゆかぬ。その氣ならよけれども、酒呑ましやんすと、忽ち替るお前の心。

四斗　ハテ、そりや氣遣ひすな。お匿まひ申すうちは、禁酒ぢや〳〵。

まき　そんなら、必らず禁酒ぢやぞえ。

四斗　サイヤイ、大事を頼まれるからは、一吸ひも呑まん……けれども、匿まひ負ふせたら、その時に褒美に、四斗樽四五本も、ナア、ようござりますか。マア、それまでは、香も嗅がんぢや。

まき　オヽ、出かしやんした。お前さへその心なら、慥かぢや。ハイ、兄さん、いつまでなりと、お匿まひ申しませう。その代りに、主の身の上を。

四斗　よろしうお頼み申します。

〽夫婦が詞に片岡喜び。

造酒　妹が縁につれ、姫を匿まひくれうとは、町人ながら天晴れ頼もしき心底。首尾調ひし上にては、妹諸とも鎌倉へ同道いたし、拔群の知行、侍ひに取持ち致さう。

まき　エヽ、そんなら、こちの人を、侍ひにして下さんすかえ。

造酒　イカサマ、其方も武士の妻となれば、兄までの面目。オヽ、さぞ喜びであらうな。

まき　喜びの段かいな。コレ、こちの人、知行取り、侍ひ

にするといふ。

四斗　オツトよし〳〵。奉行取りになつたら、嬶よ、われを酒買ひにやるのも、乗り物に乗せてやるぞ。

まき　アレ、まだ酒の事云はんすかいの。

四斗　オツト、云はんぞ。

まき　主の出世さつしやるも、お姫様のお出でなされて下さりましたゆゑ。兄樣もよう連れまして來て下さんした。ほんにマア、ついぞお目にかゝりませんに、見苦しい所へ、ようお出で遊ばして

〽下さりましたと追從も、夫思ひと知られたり、時姫も顏を上げ。

時姫　不思議の縁で、夫婦の衆の心遣ひ。ついに逢はぬそもじにまで、世話になる身は陽炎の、あるかなきかの憂き命。

〽ときにとばかり後云ひさして、顏差入るゝ懐の、内や涙の淵ならん、片岡座を立ち、夫婦に向ひ。

造酒　世を忍ぶ時姫さまを、兩人に預け置けば、この上の安堵なし。大切なるお身の上、必らず人に氣取られぬやうに、隨分心を付けて、御介抱頼み入る。

四斗　イヤモウ、この四斗兵衞が預かるからは、ゆつくりと通し駕籠に、乗つたやうに思うてござりませ。

造酒　それは過分。品に依つては引返し、お迎ひに參る儀もござらう。

四斗　ハテ、御念に及ばぬ。お勝手次第。

造酒　然らばお暇……姫君にも、何かは夫婦が指圖次第。必らずお心を痛められずとも、御機嫌よろしうお渡りなされませう。

時姫　造酒頭、もう行きやるか。

造酒　おさらばでござります。

四斗　ようお出でなされました。

〽姫にも禮儀片岡は、元來し道へ立歸る、後に夫婦が氣もいそ〳〵。

ト造酒頭、思ひ入れあつて向うへ入る。

コリヤ、嬶よ、きつう勢ひ口がようなつたが、祝うてお神酒でも上げぬかい。

まき　エヽ、たつた今、禁酒ぢやと云うて置いて、もうかいの。

四斗　ほんになア。その禁酒を、とんと忘れた程にの。

まき　ちと忘れぬやうに、指でも括つて置かんせいの。

四斗　ヘエ、それでも飲み付けた酒、呑まずに居たら、氣

が遣さて堪るまいかい。イヤ、それよりはお姫樣が、アア、さぞ御退屈にござりませう。お慰みに酒の粕なと、買うて來て進ぜんかい。

まき　エヽ、嗜なましやんせ。なんの、そんな物、あなたが上がらうぞいな。

四斗　イヤ〳〵、さうぢやない。內裏女郎も喰はにやならんてや。

まき　シタガ、御不自由も暫しのうち。やんがてあなたの思し召し、戀人樣に逢坂山のさねかづら、人に尋ねてツイお出でござりませうぞいな。

〽諫め申せば時姬も。

時姬　由なき戀に絡まれて、我が身ばかりか片岡にまで、苦勞かけるも自らゆゑ。

〽夫婦の手前も恥かしと、顏は照葉に置く露の、袖を浸せる有り樣に、お卷も詞淚ぐみ、暫しいらへもなかりけり、折柄來る鹽賣りが、上下ため付け酒樽を、肩にぶらぶら足音の、中にもしやとお卷が機轉。

まき　アレ、誰れやら參じました。ひよつと見咎められては大事のお身。見苦しけれど彼の一間へ、サア、お出でなされませ。

〽女房に誘はれ、靜々立つて入り給ふ、表に鹽屋がとんきよう聲。

　ト長藏出で來り

長藏　ちと物が尋ねたうごんす。駕籠の四斗兵衞どのと云ふは、爰でごんすかの。

〽ずつと入つて顏と顏。

ホウ、こなさんが四斗兵衞どのかいの。ついに逢うた事も近付きでも、內儀さんは留主でごんすか。

四斗　アヽ、嚊は內に居ますが、なんの用ぢや。貴樣、どこからござつたぞ。

長藏　イヤ、おりや鹽賣りの長藏と云ふ者でごんすが、アア、鹽商賣も身の廻りに張り込んで、合ふこつちやごんせぬ。それで元手の要らぬ駕籠舁きがしたさに、こなさんの弟子になりに來やんした。マア、近付きの爲、些少ながらこの一樽、寢酒に呑んで下んせ。

〽酒樽直せば、につこり笑顏。

四斗　ハヽヽヽ、こりや忝ない。酒さへ貰へば、どこからでもだんない。ようごんしたの。シタガ、駕籠舁きの弟子入りに上下とは、アヽ、裸で茶の湯に行く裏ぢやの。そしてマア、こりやきつい氣の張りやうぢやが、これも

長蔵　又、水ぢやないかや。

長蔵　ハテ、そんなぢやない、こなから酒や、八文酒呑み付けた口にや、ちと重うて呑み憎からう。並酒でもない、こりや鎌倉山。

四斗　ヤ、なんと。

長蔵　サア、鎌倉山と云ふ大切な名酒ぢや程に、マア、味はうて飲んでもらひませうかい。

四斗　ムウ、如何にも飲みましよ。如何にしても云ひやうが面白い。また四斗兵衛が飲むからは、たとへ日本國でも、鎌倉山でござらうが、富士の山でござらうが、コレ、この茶碗に引受けて、いざと云はゞ、グッと一呑み。マア、試みに一杯いたさうかい。

〽樽の口からどく〳〵〳〵。

お辭儀なしに下さりませ。

〽引受け〳〵續け呑み。

長蔵　こりや見事、さらばお肴仕らうか。

〽藁苞解いて黄金作り、太刀の魚の作り物、麁末なれど受けてもらひませう。

四斗　ムウ、こりやお肴がにく過ぎて我れら少し食べ憎い。マア、お預け申さうかい。

長蔵　イヤ、お辭儀には及ばぬ。こればかりでお肴が足らずば、コレこの鎗の切尖。

ト差出す。

四斗　これは。

長蔵　なんの苦もなくスッパリと……サア、嚙みこなした齒ぶしの丈夫、サ、天晴れ四海の軍師。

四斗　ヤ、なんと。

長蔵　イヤサ、醉狂人と見極めてのお肴、受けてスッパリ、切つてもらひたい。

四斗　切れとは何を。

長蔵　時姫の首を。

四斗　なんと。

長蔵　たつた今、匿まはれた、時姫のナア、その首が貰ひたいが、よもや貴様は、えゝ切るまいの。

四斗　そりやモウ何より心易い事……切つてやろ〳〵。

長蔵　すりや、時姫の首打つぢやまで。

四斗　なんのおれが首ぢやなし、人の首の一つや二つ、望みなら目の前でスッパリ……切つてやりもせうが、ま一つ呑んでからの事にせうわい。

〽また引受けてごぶ〳〵〳〵。

長藏　とても事にこの肴も。

四斗　ハテ、お志しぢや、戴かうかい。

長藏　先づ以て忝ない。次手に姫の首も。

四斗　ア丶、しち諄い。切つてやるわいの。

〽初めの心猶ゆゑに、打つて替つた詞詰め、一曲者と知られたり、始終一間に聞き居る女房、走り出で。

まき　コレ、こちの人。

四斗　なんぢやぞい。

まき　たつた今兄さんに、詞番うたこなさんの出世。知行取りになる事も、酒で忘れる他愛なし。如何に酒が呑みたいとて、お姫樣の首を切らうとは、あんまりな他愛なし。こなさんはこなさんとも思はうが、滅相なお人は、コレ、こなさん、どこの人やら知らんが、酒の醉を相手にせずと、とつとゝ去んで下さんせえ。

〽詞樣はして腹立つ女房、夫は酒に廻らぬ舌付き。

四斗　ヤイ、そげめ、知行々々と吐かすが、なんの五萬石や十萬石、この酒に替へらるゝものかい。

まき　エ丶、こなから酒に國傾むくと、大事の〳〵お姫樣と、酒とを替へる心ぢやの。

四斗　知れた事。なんぼ美しうても、お姫樣の首は呑めぬわい。ぢやに依つて、お姫樣の首討つて、酒に替へるがナ、なんとした。

まき　すりや、どうあつても、お姫樣の首を切る氣ぢやの。

四斗　オ丶、切る氣ぢや〳〵。

まき　それ聞いて、もう爰には置きまされぬ。わしがお供して、兄さんへ手渡しせにやならん。

〽一間に駈け入り甲斐々々しく、姫の手を取り立出づる、囂きせぬ縁か見合す顏。

時姫　ヤア、懷かしや三浦

ト云はうとする。四斗兵衞、姫の首を切る、

〽立寄る姫を拔討ちに、首は前にぞ落ちにけり。

まき　ハア。

〽はつとお卷が氣も半亂、聲賣り突ッ立ち。

長藏　オ丶、天晴れ四斗兵衞、出かした。

〽云ひ捨てゝぞ駈り行く、後に女房が聲を上げ。

ト長藏、思ひ入れあつて入る。

まき　さても〳〵お前はしや、どうぞお前のお命を、助けうばかりにいろ〳〵と、心を碎いて兄さんが、爰まで預けに見えたもの。此やうに果敢ない御最期。この悲しみを見やうより、逃げましてござんした時、つれなう云う

て頸からずば、斯ういふ事は出來まいもの。これがほんの讐への道り
〽佗積んで地獄の牛頭馬頭。
もし今にても兄さんが、お迎ひにござんしたら、なんと云はう、どうせうぞ。コレ、こちの人、四斗兵衛どのひよんな事して下さんしたなう。酒の科とは云ひながら、わしや云ひ譯がないわいなう。
〽いつそ殺して／＼と、夫に取付き齧噛みつき、恨み嘆けばころりと轉け、前後も知らぬ高鼾、斯くとは知らず片岡が、禮儀上下折目を正し、お迎ひの乘り物釣らせ、悠々と戸口に立ち。
ト造酒頭、乘り物を從へ、出で來り
造酒　家來ども、云ひ付け置きし品々、この家へ持參し、案內せよ。
侍ひ　ハア。
〽衣服大小白臺に、輝く兜は龍頭、あたり狹しと並べ置く、片岡靜々內に入り。
造酒　誠に、雷の落つる急難、事故なく相濟みしゆゑ、早速姫のお迎ひに、參上いたしてござる。
まき　エ、

ト悧り。
造酒　イヤモウ、これと申すも、四斗兵衛どの、お匿まひ下されしゆゑ、助かるまじき姫が命、存命いたす、命の親、四斗兵衛どの、直さま鎌倉へ同道いたし、時致公へ御目見得。サア、契約の通り只今より、武士に取持つ印の音物、御受納下され、姫諸とも、御出立下さらば、この上の喜び。拙者までも如何ばかり、大慶に存じます。
〽さも慇懃に述べければ、女房あるにもあられぬ思ひ、兄が脇差拔き取つて。
まき　兄さんへの云ひ譯。南無阿彌陀佛。
〽自害と見やるを片岡押へて。
造酒　待て。こりや何ゆゑ生害する。
まき　イエ／＼、どうもお前へ詞がない。放して死なして下さんせいなア。
造酒　イヤサ待て。ハテ、心得ぬ。身へ云ひ譯がないとは。
〽刃物もぎ取り眼を配り。
ヤ、こりや姫君の御死骸、何者が手にかけた。ハア。
〽齒を喰ひしばる怒りの面色。
某へ云ひ譯なく、自害せんと云ふからは、すりやこの殺し手は四斗兵衛ぢやな。主人の敵、一分試しおちや。覺悟

せい。

ト切りつける。

〽心得むつくと起き上がれば、滞つて切り込む刀は稲妻、こゝたの早業、飛鳥のかけり、勢ひ雲に蜻蛉の、兜を片手にけつ摑み、一間を指して駈け込んだり。

ヤア、卑怯者、逃げるとて逃がさうか。

〽續いて駈け行く向うに妹

まき　マア〳〵、待つて下さんせ。

造酒　ヤア、止めな〳〵。

まき　サア〳〵、お腹立ち、尤もぢやけれど、酒ゆゑ亂るる心根を知つて居ながら、お匿まひ申したはわたしが科。お腹が立つなら夫より、先へわたしを殺して下さんせ。なんぼうでも奥へはやらぬ。マア〳〵、待つて下さんせいなア。

造酒　ヤア、おのれを殺してなんの益。邪魔すな、のけ。

〽駈け行く鐺に叉取り付き、やらじ放せと爭ふ最中、表の方に大聲上げ。

ト長藏、また出て

長藏　江州醒ケ井の住人、和田兵衛秀盛どの、御用意よくば坂本の城へ御入城。三浦之助義村、お迎ひの爲、伺候仕つてござります。

〽呼ぶ聲聞けば以前の鹽賣り、初めには似ぬ勇士の出立ち、急きに急いたる片岡も、樣子如何とためらひ居る、女房不思議と立向ひ。

まき　ハテ、合點のゆかぬ。包み隱せし夫の本名を、和田兵衛秀盛と知つて、坂本の城へ誘はんとは、いつ味方に付けて、いつ約束をしやしやんしたえ。

長藏　ホヽ、女の身の不審に尤も。陳平韓信が腸を探り、市人に姿を窶し隱されるも、美名は四海に香ばしく、宇治の方の仰せを受け、何卒して味方に招き、雌の劍を授けん爲、姿をやつし徘徊すれども、元より面體とても見知らぬ某、如何はせんと心を碎くうち、中仙道にて不思議に出逢ひしゆゑ、取敢へず某が、姓名を記したる、手鎗を以て試し見るに、手練の働らき、なか〳〵和田兵衛どのならで、凡人の及ばぬ稀代の手の内。さてこそと思ふより、何卒味方に賴み入れんとは思へども、近寄り賴まん手段もなく、いとゞ案じる時も時、時姫を匿まはれしこそ、これ幸ひとこの家に來り、首討つて渡されよと、先刻渡したる劍が卽ち雌の劍。某が心底を、敏くも推量ありし和田兵衛どの、事故なく受けられしは、味方に

加はる印の割印。
〽この上は片時も早く打立ち給へ。
サヽ、御供仕らん。御用意なされ、和田兵衛どの。
〽高らかに呼はつたり、片岡聞くより猶も急きたち。
造酒　さては和田兵衛先達て、京方へ荷擔いたしたるゆゑ、姫の御首討つたよな。一旦頼まれしと詞を番ひながら、鎌倉方の約を變せしその上に、京鎌倉と引分かるれば、某、京方の奴ばら、一人も助け置かれぬ。姫の敵。
〽いづくまでもと、駈け行く一間の内。
四斗　ヤア〳〵、片岡造酒頭、和田兵衛秀盛、それへ參つて對面いたさう。暫らく待て。
造酒　なんと。
〽隔ての障子踏み開けば、内に四斗兵衛悠々と、褞袍に替る肌着の小具足、唐縫ひしたる陣羽織に、十王頭の小手脛當、太刀と兜を兩の手に、床几にかゝる有樣は、實に百萬騎の軍師と、骨柄ゆゝしく見えにけり、和田兵衛兜を座前に直し。
四斗　如何に片岡、時姫の身に替り、殺されしその娘は、定めて貴殿の息女であらうが。
造酒　ヤ、なんと。

四斗　老少不定と云ひながら。
〽痛はしさよと悔みの詞。
造酒　ムウ、すりや某が娘と、覺つての身替りか。
四斗　ホヽ、敵の氣を見て士卒を使ふこの和田兵衛、一人の女づれ、如何ほど僞はればとて、親子の慈しみ、上下の人相、一目にも見違へやうか。賴家公に緣邊は切れたれども、不義の科ある時姫ゆゑ、娘を身替りに立て、時姫の心の儘に、三浦之助に添はせんと、心を碎く片岡どのゝ、忠義の心を感じ入り、不便ながらその女が首、討つて捨つれば、この世に時姫と云ふ名は消えて、誰れ憚る者とてもなし。お迎ひの乘り物に忍びまします時姫君。早々、これへ〳〵。
〽和田兵衛が詞に片岡陳じもならず、表の方、乘り物明くれば時姫君、こけつまろびつ佳の江が、死骸に取付き、縋り付き。
時姫　親の赦さぬ戀路ゆゑ、兼ねて亡き身と諦めて居た、自らが命に替つて、死んでたもつた佳の江の志し、嬉しいとも、忝ないとも、詞で禮は云ひ盡されぬ……とは云ふものゝ、憎たらしい造酒頭、斯う云ふ譯と露程も、自らに知らしてたもつたら、やみ〳〵と殺さすまいもの。さ

ぞ悲しかつたであらう。住の江の心の内が、思ひやられて愛しやなア。

〽恨み託ちの涙川、袖に淵なすばかりなり。

造酒　ヤア、住の江とは紛らはしき一言。その死骸こそ時姫君。

時姫　ヤア。

造酒　イヤサ、コリヤ、娘、ナア、其方は身が娘の住の江ぢやが、御合點が參つたか。親に勝つた娘が忠義、必らず麁相な事云うて、犬死させて下さりますなや。

〽目を瞬たゝく片岡が、心を察して妹は、三浦之助に打向ひ。

まき　成る程〳〵、時政公の御息女樣と、云うては添はれぬ敵味方。兄さんの娘御の、住の江さま、ナア、お前は兄さんの娘御なりや、誰れに遠慮も障りもない。味方同士にコレ申し、どうぞ御料簡はござんせんかいなう。

長藏　ヤア、味方とは穢らはしい。鎌倉へ裏返つたる不忠侍ひの娘に、なんの緣組み。某に心を寄せられし、時姫の首討たれよと望みしも敵の緣に引かれぬと云ふ潔白。それともに、是非に姫を娘として、この三浦へ送りたくば、聟引出に片岡が首、サア、受取らう、覺悟せい。

四斗　ヤレ早まるな、三浦待て。

長藏　なぜ留める。

四斗　武士たる者の一命を捨て、名を上げるこそ譽れなるに、名を捨て忠義を立つる造酒頭。即ち證據はこの兜、これこそ武將宣下のお望み。譬へ賴家、軍に打勝ち、四海殘らず押領あるとても、この兜なき時は、將軍宣下思ひも依らず。そこを計つて片岡が、鎌倉方へ裏返り、不忠者の名を取られしゆゑ、念なう奪ひ取り、渡されしこの兜。名を捨て忠義を立つる片岡どのこそ、古今の忠臣。この兜手に入る上からは、これより直ぐに坂本の城へ馳せ向ひ、鎌倉勢と分け目の軍。

〽たとへ時政、何萬騎にて向ふとも。

宇治瀨田に砦を構へ。

〽變に應じ、氣に乘じ、或ひは顯はれ或ひは隱れ、千變萬化に寄手を惱まし。

大將に舌卷かせんは、この和田兵衛が方寸にあり。

〽心安かれ方々と、居ながら謀る軍師の軍配。

造酒　ホヽ、驚ろき入つたる和田兵衛どのゝ明智。かゝる軍師、味方にあるからは、軍の勝利疑ひなし。某はあつても益なき身。今こそ三浦の望みに任せ、聟引手を進上

仕らん。

〽云ふより早く差添抜き、腹にがばと突き立つれば、なう悲しやと姫妹、縋り嘆くを押し退け〳〵突き退けて。

ヤア、未練な妹。姫君……ではない住の江、見苦しい、こりや何事、京方には誰れ〳〵と、指折りの數に入りし某が、暫らくにても鎌倉へ、裏返りの悪名、何を以て雪がうぞ。味方の内にも、追從表裏の大江の入道、某再び城に歸らば、兼ねて鎌倉へ内通したる、事どもの顯はれん事もやと、我が身の大事に後先の辨まへなく、如何なる非道の謀計を以て、味方の心を迷はさば、まち〳〵になる人心。我れ疑へば人疑ふと、人氣和せざるその時は、軍の勝利思ひも依らず。そこを思うてこの切腹。死後にても片岡は、返り忠せし不忠の臣と、末代に名は穢すとも、一心五臟に忘れぬ忠義。何卒名ある軍師をお味方させんものと、心の當途は和田兵衞どの、妹が連れ添ふと聞きしは幸ひ、住所を尋ね、某が志しを立てん事、この人ならではと、娘を誘ひて、某が存念を立てたれば、最早この世に思ひ置く事なし。妹、悔むな。姫君も、お嘆きなさらずとも、御身に替る娘めが志しを、必らず無にして下さりますなや。不便やお主の爲と聞き、喜ぶ事は喜びながら、とてもの事に男の子に生れなば、戰場の一大事、お馬の先の御用に立つて、武名を上げる討死したならば、父上までお嬉しからうに、女の身の腑甲斐なさ、父樣堪えて下されと、云うた時は、オ、出かしたと。

〽褒める事さへ胸に逼り。

一言一句も出なんだに、親に勝つて先に立ち。

〽親に遅れて歩む足。

この家へ來る道々の、堅牢地神の頭には、さぞ某が踏む足が。

〽大盤石とこたえやせん。

重き忠義に替へたる娘、よう死んでくれたな。出かした出かし居りましたなう。

〽鍛えに鍛えし忠義の體も、子ゆゑの鞴に吹き立てられ、咽ぶ涙は熱湯の、湯玉迸しる如くなり、妹は正體泣き沈み。

まき　なんぼ親子の恩愛でも、お前は男の忠義と云ふ、諦めもあらうが、女子同士の、わしが悲しさは、どのやうにあらうと思うて下さんすぞ。よく〳〵緣の薄い兄弟仲、たつた一人の姪子にさへ、名乘り合ひもする事か、顏見合したも今日の今。他人向きの挨拶も、他所々々し

い一家の附合ひ。二人が二人で同じ日に、死出や三途を後や先、閻魔樣の帳面に、筆の當途も住の江が、惜しや盛りの花の姿、散り行く兄樣、お愛しや、如何に忠義と云ひながら。

〽果敢ない別れ悲しやと、嘆くは共に時姬君。

時姬　とても添はれぬ敵同士、疾から自ら死んだなら、斯うした憂目は見まいもの、どうぞ添ひたい〳〵と、未練な心の迷ひから、親子の衆のこの最期。コレ、堪忍してたも。思ひ切らうと思うても、儘にならぬが戀路の因果。つれない命を死に遲れ、面目ない、恥かしい。叶はぬ戀を諦めて、この身の果は尼法師。それがせめての云ひ譯と、料簡して下されや。

〽身を裏菊の兩袖に、保ちかねたる露涙。

せめて親子の衆へ、心ばかりの追善供養。

〽兜を時の香爐に、燻らす煙り蘭奢待。

まき　冥加ない、お姬樣のお手づから、手向け賜はる名香は、東大寺の御寶物。

時姬　この佛緣に誘はれ

まき　未來成佛。

時姬　佛果菩提。

兩人　南無阿彌陀佛。

〽未來の佛果と合はす手に、又も涙の珠數の玉。

造酒　ハ、ア、有り難き御手向け。娘も我れも、成佛得脫疑ひなし。とてもの事に三浦之助へ、媒介賴む、和田兵衞どの。

四斗　オ、、その儀は少しも氣遣ひ無用。萬事某、媒介いたさん。

〽兜を取つて、三浦に向ひ。

四斗　聟引出と望まれし首、この兜ゆゑ一命を捨てられし片岡どの、一身五體は卽ちコレこの兜に……殘る方なき造酒頭の忠節。サア、これを引出に姬の事、ハテサテ、遠慮は無用。氣強きばかりを武士とは云はぬ。

〽情も武士の道具ぞと、渡せば取つて三浦之助。

長藏　和田兵衞どのゝお志し、この上は何しに辭退仕らん……如何にも……と申す筈なれども、大切の門出、勝利を得るまでは、お預け申す、おまきとの。

まき　そんならどうでも……お姬樣は、

長藏　ハテ、家を出る時妻子を忘れ、戰場に及んで身を忘るゝは勇士の常。もしも運盡き賴家公、御大事とならん時、コレこの龍頭の兜を着し、君に替つて討死せん。名

香薫る首取りしと、沙汰ありしその時こそは、この三浦
が討死と。
〽詞は末と逢坂や、關の淸水と湧き返る、淚ながらの暇
乞ひ。
四斗　三浦どの。
長藏　和田兵衞どの。
四斗　逢坂山へ
兩人　御同道。
〽伴ひ出づる軍の門出。
造酒　はや出陣か。オヽ、潔よい。天晴れ〳〵。
〽羨やましげに伸び上がり、見送る手負を介抱し。
時姫　隨分無事で
まき　御吉左右を
兩人　待ちますぞえ。
〽共に見送る姫女房。
皆々　さらば。
〽戀と無常を見捨て行く、武士の道こそ。
ト三重、皆々引張りにて、

幕

五幕目　盛綱陣屋の場

役名——北條相摸守時政。竹の下孫八。古郡新左衞門。榛谷十郎。和田兵衞秀盛。佐々木小四郎。佐々木小三郎。盛綱妻、早瀨。高綱妻、篝火。盛綱母、微妙。信樂太郎。垂井藤太。佐々木三郎兵衞盛綱。

造り物、通し二重。下手落ち間、上手障子屋體、正面、襖通り二枚飾り。下手逆茂木。幕の內より母微妙、早瀨、腰元向き、並び居る、淨瑠璃にて幕明く。
〽その源は近江路の、比叡山颪し隔てられ、便り片田の雁訛せて、武士の義は石山や、月の弓張り矢叫びの、矢橋の歸帆陣幕も、閃めく比良の陣館、小三郎が初陣の、手柄初めと父の喜び、妻の早瀨、老母の微妙、軍の安否聞くまでは、心許さぬ持ち刀、腰元どもゝ鉢卷しめ、追ひ追ひ告ぐる功名噂。
腰元　サア〳〵、めでたい〳〵。和子樣が今日の手柄の一番帳、同じ初陣、同じ年の小四郎を、生捕り給ふは、大

の男子を仕留めしより、遥かのお手柄でござりまする。

早瀬　モシ、お聞きなされましたか。ほんそ孫の小三郎、これからは祖母様の、甘やかしが思ひやられまする。さりながら、ひよんな事は、その手柄の相手が他人なればよけれども、矢ツ張りお前の孫の小四郎、嬉しいと悲しいとの、片身替りのお心を、思ひやる程、

ト云はうとする。

微妙　アヽコレ嫁女、そりや祖母への當て言か。尤も孫と云ふ名はありながら、不所存な忰佐々木高綱、音信不通の、中に出來た小四郎とやら、ついに顔見た事もなし、よしや不便に思へばとて、此やうに敵味方と分れた上、殊には妾も誰れあらう、源藏義秀と云ふ弓取りを夫に持ち、盛綱を產んだ母。涙かけてよいものか。そんな事は云ひ出しても下さるないの。さうして、兵衛盛綱、孫の小三郎も、まだ歸館召されぬかや。

早瀬　ハイ、お二人ながらお具足を、お上下に召替へられ、道より直ぐに石山の御陣所へ、お出で遊ばしたとの注進。定めてきつい、御褒美でござりませうわいな。

〽さゞめき渡る程もなく、立歸る佐々木兵衛、小三郎盛清、諸人の尊敬身の面目、上下衣服も華やかに、自然と威を持つその後に、無殘やな小四郎は、高手に締むる縛しめ繩、雜兵に取卷かれ、才播叶はぬ悄げ鳥の、顔見初めの孫かとも、云ふに云はれず面差しの、別れし我が子高綱に、似たと思へば不便さを、嫁の手前と紛らせど、胸つほらしうなり形、見まいと思へど目にかゝる、血筋の因果ぞ詮方なき、兵衛盛綱謹んで。

ト盛綱、小三郎出る。跡より小四郎、縛られて出る。

盛綱、二重へ上がり

盛綱　忰小三郎、初陣の手柄初め、これなる繩附き生捕りし事。誰れ〳〵よりも目指す大敵、佐々木四郎左衛門が忰、虜にせしは味方の強味。拔群の功名と、時政公御感斜めならず、お喜びの杯を下され、お手づから感狀を下し置かれ、家の面目、身の大慶。御前に並み居る諸大名、凡そ子を持つ程の人に、羨まぬ者とてもなく、忰が武勇にあやかる爲とあつて、そこへも杯、爰へも頂戴と、持囃さるゝ身の本懷。それゆゑに退出も遲なはる。併し、御前の首尾殘る方もなし、お喜びなされ下されませう。

〽お喜び下されと、語るうちより早瀬が浮き〳〵。

早瀬　なんと御覽じましたか。可哀さうにこれまでも、軍の供をしたがるものを、足手纏ひぢやの、邪魔になるの

何の彼のと滅多無性に叱りつけ、留守して居れと云うて、鎌倉に殘してお出でなされたれど、今度の軍に外れては、生きては居ぬと、やんちやばつかり、せがみ立てられ、せう事なしに、いつその事、母樣と三人連れ、後追うて來た時にも、大抵や大方のお叱りではなかつたれど、今日の手柄を見た時は、よう連れて來た事ぢやと、こりや一番私しが自慢。オヽ、出かしやつた〳〵。其方が今日の手柄で、この母までが、俄かに肩が怒つて來たわいの。オヽ、出かしやつた〳〵。

腰元　和子樣、お出かしなされた。お手柄〳〵。

早瀨　よう手柄してたもつたなう。

〽譽めそやしたる姦しさ、微妙も共に出かしたと、勇んで見てもどこやらに、濟まぬは胸の汐堺、分け兼ぬるこそ道理なれ、小三郎手を仕へ、

小三　分けて君の御諚には、囚人の小四郎、首討つ事必らず無用、いつまでも助け置き、虜とするが味方の計略。縛しめは其まゝにして、隨分大切に仕れとの御事。イヤナニ小四郎どの、こなたとは從弟同士、初陣の軍に打負け、さぞ無念にござらうなう。

〽云はれて小四郎、顏振り上げ。

小四　父樣の兼ねての敎へ、勝つも負くるも軍の習ひ。まさかの時に逃ぐるのが、侍ひの耻辱ぢやげな。生捕られても耻とは思はぬ。早う首切つて下されいなう。

〽目を塞いだる立派さは、誠に父が子なりけり、物見の侍ひ罷り出で。

侍ひ　申し上げまする。和田兵衞秀盛と名乘り、盛綱公へ見參いたさんと、供廻り僅か一兩人召連れ、見えましてござりまする。

盛綱　ハテ心得ぬ。敵方の侍ひ大將、輕々しく來るは、何ぞこりや一物あるに極まつた……ソレ、囚人を奧へ連れ行き、取逃がさぬやうに、キッと申しつけい。皆行け皆行け……和田兵衞どのを、此方へお通し申せ。

侍ひ　ハッ。

ト侍ひ、橋がゝりへ入る。皆々奧へ入る。

〽騷がず座席取片づけ、衣紋繕ろひ出で迎ふ、甲冑の姿引替へて、長上下踏みしだき、伊達拵らへの大小も、さしも武骨の荒くれ男、目禮式禮悠々と、上座にどつかと押直り。

ト和田兵衞、長上下にて出て、上座へ通る。

盛綱　和田兵衞どのには今日のお出で。この盛綱に見參せ

んとは、如何やうな儀でござるな。

和田　イヤ、別儀でもござらぬ。この度の合戰、佐々木三浦、斯く申す和田兵衞、火水の勝負を決せんと、牙を嚙んで相待つ所に、鎌倉の悠長武士、一日寄せては二日見合せ、睨み合うて日を送るうち、此方はホッと退屈。それゆゑ今日は具足も取措き、泰平の姿で坂本の城より、使者に參つたのでござる。

盛綱　ハア〳〵、これは〳〵、名にし負ふ和田兵衞どの、よく〳〵の儀なればこそ、大身のお使者。御苦勞千萬に存ずる。御口上の趣き、逐一仰せ聞けられ下されませう。

和田　今日使者の趣きは、今朝高綱構へにて、其許の手へ生捕られし、小四郎高重、ちと此方に入用なれば、只今お返し下されいとの、使ひでござるサ。

〽事もなげに述べければ。

盛綱　ハ、、、何事かと存じたれば、これは思ひも寄らぬ儀、何ぞや一人の童づれに、侍ひ大將の和田兵衞どの、自身馬を向けられしは、珍說々々。あの子倅が一人なければ、合戰もえ、なされぬか。イヤモ、餘りの事で、事をかしう存じまする。ハ、、、。

〽あざ笑へば。

和田　成る程、貴殿の詞、尤も〳〵。併し、此方にも不審なるは、その童の小四郎を、貴殿の子息が生捕られしを、一國一城をも乘ッ取りしが如く喜び勇み、鎌倉方の勝軍の基なりと、箙を叩き、勝鬨作つて引かれしはコレ如何に……さほど鎌倉方に懇望せらるゝ小四郎ゆゑ、此方にも惜しう存じまする。是非返さつしやれて下されい。その代りには少分ながら、この和田兵衞が髭首を進上申す。お望みならば手柄次第、隨分取つて御覽なされい。

〽むつと座したる不敵の顏色、盛綱、打笑み。

盛綱　さて〳〵、弟ながら高綱は、大功ある勇士と思ひしに、倅に迷ふ未練の性根。そこを察して朋輩のよしみ、命を救ふ情のお使者。あれしきの小童、如何やうにもと申したけれども、生捕りの帳に記せし上は、時政公より預かりの囚人なれば、この盛綱が私しの計らひにもならず、それとも達て御所望ならば、踏ん込んで奪ひ取られよ。その座は一寸も立たしはせぬ。サア、秀盛、返答は、ナ、なんと。

ト反り打つ。

〽反り打つて、詰めかくれば。

和田　アヽイヤ、お急きなされな〳〵。貴殿と拙者、只今

爰で刺し違へては、敵味方に好き大將を二人失ひ、双方とも損と申すもの。よい〳〵、御邊の儘にならぬ囚人ならば、この和田兵衞が、これより直ぐに石山の陣所へ行き、時政どのに直談して、自他とも所望いたして歸る。盛綱どの、さらば。

〽盛綱さらばと立ち上がり、廣庭に下り立てば。

盛綱　オヽ、そりや兎も角も勝手次第。然らば石山へ、御案内を致させませう。ヤア〳〵、誰れかある。和田兵衞どのを御案内申せ。

侍ひ　ハアヽ。やらぬ。

ト大勢、槍を持つて出て取卷く。

〽小具足固めし覺えの力者、ばら〳〵と取卷きたり。

和田　ハテ、仰山な案内者。敵の陣所へのう〳〵と、一人參るこの和田兵衞、不知案内の武骨者、萬事よろしう頼み存ずる。

盛綱　お氣遣ひなされな。ソレ、侍ひども、必らず大將の御座近く、ナ……ソレ、お引合せ申すならば、大事の珍客、隨分御酒を、ナ、合點か。

和田　イヤ、御酒とは忝ない。我れら別して大好物。御馳走ならば、湖もかへ干してお目にかけう。お肴の飛び道具、鎗長刀の串肴、何本なりとも賞翫いたす。盛綱どの。

三郎　和田兵衞どの。

兩人　おさらば。

和田　案内大儀。

〽案内大儀と長袴、虎を放してやる勇氣、火焔の中へ行く大膽、心の具足鐵石の、石山……指して出で行く。盛綱は只茫然と、軍慮を帷幕の打傾むき、思案の扇からりと捨て、

ト和田兵衞に侍ひ附いて入る。盛綱、思ひ入れあつて障子屋臺の側へ寄り

盛綱　母人、それにござりまするか。

〽訪なふ聲に立出づる、陣屋の隈々後先見廻し、母の膝に摺り寄つて

ト微妙出る。

親の役目を子が勤めるは順なれども、御老體の母人に、御苦勞お頼み申さねば叶はぬ事。申さぬ先から心得たとある、御誓言を承はりたう存じまする。

〽事ありげなる願ひの品、聞かねば流石佐々木の後室、打頷き。

微妙　親子の中に改めて、頼むとあるは、よく〳〵の事で

あらう。仔細は何か知らねども、心得ました、頼まれませう。

盛綱　ハッ、早速の御承知、忝なう存じまする。

微妙　サア、その頼みの品は何ぢやな。

盛綱　サア、そのお頼みの仔細と申すは、最前の囚人、拙者が爲には甥、母人の爲には孫の小四郎を、今宵のうちに母人の、お手にかけられ下さりませうならば

微妙　コレ〱盛綱、最前我が君よりの仰せ渡されには、必らず小四郎に過ちさすな、殺すなとの御諚ではなかつたかや。

三郎　サア、その殺すなと御諚ゆゑ、猶以て殺さねばなりませぬ。

微妙　殺すなとの御諚を背いて、殺さにやならぬとは、

三郎　サア、辯舌を以て人を馴くる北條どの、小四郎を殺すなとの諚意は、生け置いて人質とし、子を餌にかうて弟高綱を、味方に附けん謀計とは、鏡にかけて顯はれたり。なか〱心を變ずべき、弟高綱とは思はねども、如何なる大丈夫も、我が子の愛着に迷ふは慣ひ。萬が一この謀計に陷つて、降參などの心附かば、子ゆゑに不忠の名を流さん事、殘念の至り。よしさはなくとも小四郎が、虜となつて生きあるうちは、恩愛と云ふ大敵に、高綱が弓勢も弱り、刃金も自然となまる道理。迷ひの種の小四郎、一時も早く殺してしまへば、弟が義心も猶々鐵石、これが誠の兄弟弓矢の情と云ふもの。と云うて我が手にかくる時は、主君北條時政公の命に背く道理。幼な心にこの理を辨へ、自身に切腹するならば、我れは油斷の誤まりばかり。兄が義も立ち、弟が忠も立つ。双方全きこの役目は、御苦勞ながら母人樣、密かに小四郎に切腹させて下さりませい。アヽ、とは云ふものゝ、現在の甥が命、申し宥めて助けるこそ、情とは云ふべきに、殺すを却つて情とは。

〽情なの武士の有樣や。

如何なれば兄弟、敵味方と引分れ、今朝の矢合せに、敵は甥なり味方には我が子、肉身と肉身の、劍を合はす血汐の瀧。

〽修羅の巷の攻め太鼓、胸に磐石こたゆる辛さ。

弓馬の家に生れし不肖、コレ、モシ。

〽聞き分けてたべ母人と、事を分けたる物語り。

微妙　オヽ、道理ぢや、尤もぢや。兄の其方も、弟の高綱も、我が子に依怙はなけれども、隔て居るほど不便も增

明治十年四月新富座上演　八世岩井半四郎の篝火

り、有やうに其方にも、心を置いて居りましたが、弟に不忠の惡名を、附けさすまいとさほどにまで、心遣ひの深切、オヽ、忝ないぞや、嬉しうござる。世の例へにも小の蟲を殺して、大功を立つる事、眞實親身は我が子より、可愛い者は孫なれども、其方のその深切な心を思ひ計つて、成る程、孫の小四郎に、切腹をさせませう。

ト泣く。

盛綱　ナニ、すりやお聞き届けあつて。アヽ、オヽ、お出かしなされた。シタガ、健氣には見ゆれども、幼なき小四郎。もし小腕に切り損じなば、母人よろしう御介錯なされて、おやり下されませう。何かと申すうち、はや短日の暮れ近し。佐々木兄弟が苗字を穢すか、名をあげるか。二つ一つの境なれば、必らず未練の出ぬやうに。

微妙　オヽ、氣遣ひ召さるな。後れはせぬ。

盛綱　隨分、強う、遊ばしませう。

ト刀を渡す。

〽渡す一腰、受取る腰の張り弓に、詞番うて別れ入る。

トこの淨瑠璃にて、よろしくこなしあつて、兩人別れ入る。暮れ六つの半鐘鳴る。

〽峰吹き返す風に、はや園城寺の鐘もろとも、誘はれ來る白羽の矢、紅葉の茂みに射込みしは、主を誰れとも人目せく、陣笠まぶかに篝火が、男出立ちの半弓に、やわか仇には歸らじと、陣屋間近く慕ひ寄り。

ト篝火、陣羽織着て出て來り

篝火　和田どのゝ供廻りに紛れ込み、爰までは忍び入つたれども、用心堅き陣屋の木戸口。心を通はす矢文の謎。小四郎が目にかゝればよいが……祝ひ祝うた初陣に、忌はしい縫目の耻。外の者でもある事か、從兄弟同士の小三郎が、憎てらしい手柄顏、盛綱どのも盛綱どの、甥を縛らせ伯父の身で、それが本意か、恨めしいわいなう。エヽ、胴慾な兵衞どの、どうして居るぞ只一目、逢ひたいわいの〳〵。

ト泣く。

〽見たい逢ひたい間の戸に、我が身をひしと楯板も、通すは涙の矢數なり、洩れてや奥に聲高く。

早瀨　侍ひ中〳〵、夜廻り怠りなきやうに、隨分嚴しくさつしやれや。

〽女の聲も敵の中、胸驚ろかれ篝火は、差足ながら忍び行き、障子をさつと目早の早瀨、紅葉の矢文拔き取つて

トこの淨瑠璃にて早瀨出で、矢文を取り、開き、よく

早瀬　（よく見て）羽響きもなき忍びの矢、女業と推量に、違はぬ手蹟。

トまた見て

ハテ、合點のゆかぬ。狀の文體にもあらず、「名にし負はば逢坂山のさねかづら、人に知られて來るよしもがな」と古歌を書きしは……ムウ〳〵、手は見知らねど、相嫁の篝火どの、捕はれの小四郎に、この陣屋を拔け出で、人知らず來るよしもがな……爰は卽ち近江路や、世に逢坂の關の戶を、明けて逢はんと知らせの謎。ムウ、ア、、侍ひの母のやうにもない、未練なさもしい心ぢやなう。軍に立つからは、討死は覺悟の前と、立派な小四郎に惡氣をつけ、もしこの家を取逃がしなどしたら、その不調法は誰れにかゝる。矢ッ張り一家、その一家と云へば、兄御なり姑御の家の耻辱。そこへ心も附かず、一筋に我が子可愛いばつかりの母御の心。また此方とても一家のよしみ、生捕つても命には別條ない。樣子知らせて安堵さす程に、必らず爰らにうろたへて、親子一緒の繩目を受け、夫の名まで穢さぬやうに、早う去んだがよささうなものであらうかいなア。

〽恨みの裏の反古文を、打返したる返事の古歌、矢立の硯さら〳〵と、書き認めて括りつけ、內にも人目重籐の、弓打番ひ陣外の、小松にひようと手ごたへと、共に立も切る障子の內、幼な心に油斷せぬ、繩附きながら小四郎は、そつと一間を忍び出で。

ト矢文の遣り取りあつて、兩人入る。小四郎、縛られしまゝ出て

小四　いま伯母樣の讀ましやつた、矢文の手はわしが母樣。爰を拔けて戾れとの、知らせは聞いても敵の中、見咎められては耻の耻、とは云へ母樣は、どこにござる。たとへ此まゝ死ぬるとも、ちよつと別れにお顏が見たい。母樣は、どこにござる。

〽そろり〳〵と拔き足も、危ふき毒蛇の陣の口、あはや後より窺ふ微妙。

微妙　小四郎待ちや。

ト恟りして

小四　ア、イ、どつこへも行きや致しませぬ。お免されて下さりませ。

〽お免されてとばかりにて、わな〳〵顫ふ有樣を、つくづく見れば見るにつけ、同じ佐々木の血筋でも、さても

果報拙ない子や、囚人の身となれば、子心にも氣後れして、見すぼらしい顏形、今宵限りの命とは、云はねど蟲が知らすかと、思へばそゞろ先立つ涙、胸に押下げ撫で下ろし。

微妙　ヤレ、孫よ、爰へおぢや。コレ、其方の祖母ぢやわいの。器量骨柄揃うた子に、痛々しいこの繩目。解いて其方にこの祖母が、云ひ聞かす事があるぞや。

〽立寄りほどく血筋の繩、子ゆゑに引かれ篝火が、また立戻る陣屋の前。

ト篝火出て

篝火　矢文の返事は早瀬どのゝ手蹟、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關、とは時節を待てとの事か。ハテ、何とであらうなア。

〽見やるこなたの戸の透間、微妙は孫の手を引いて、一間の障子押開き。

微妙　ナウ小四郎、高綱に別れてから、十三年のこの年月、孫ありとは聞いたばかり、懷かしき逢ひたさは、膝許で育つた小三郎より、顏見ぬ其方の不便さは百倍。殊更長の浪人の、貧しい中に育てられ、武具馬具までもさぞ不自由に、口惜しう暮らしたであらうものと、思ひやる程片時も、忘るゝ隙はなけれども、思ふに任せぬ敵味方。コレ、この上下はこの祖母が、其方への引出物。着てたもいなう。

〽着てたもやいのと差出せば、何心なく押戴き、取上げて不審顏。

小四　モシ、祖母樣、この上下には、なぜ紋がござりませぬ。また九寸五分が添へてあるは、功名手柄せよとある、首掻き刀でもあるまい。こりや私しに、腹切れとの、死裝束でござりまするかな。

〽悟る悧發に驚ろく篝火、微妙はがばと泣き倒れ、暫し詞もなかりしが。

微妙　オヽ、流石は親の子程あり、人に勝れて其やうに、聞分けよい程助けたさは、胸一ぱいに迫れども、殺さにやどうもならぬと云ふは、父親の高綱が、武勇智謀の勝れたが、其方の身の仇敵。助けよとある北條どのは、子を人質に高綱を、降參さする計り事。それまでは殺しもせず、まして助けて歸しもせず、いつまでも陣中に、捕へて置けとの主命、生きて居る程、高綱が武勇の妨げ。爰の道理を聞き分けて、潔う腹切つてたも。ヤ、エヽ、見れば見る程、目附きなら、鼻筋なら、眉に一つの黒子ま

で、父親にこの似やう。智恵才覺まで違はぬもの、生ひ先も見ず、むざ〳〵と。

〽蕾の花を散らすかと、老の繰り言涙のはぐき、洩れて外面に聞く嫁の。

篝火　なんぼ道理は道理でも、あんまり氣強い阿母樣。我が子は、殺さぬ〳〵わいなア。

〽伸び上がれども芦垣の、隔てる中ぞ是非もなき、母の心の通してや、小四郎おとなしく手をつかへ

小四　私しが命一つで、父樣や伯父樣の、手柄になる事なら、なんの命を惜しみませう。尤も腹の切りやうも、稽古して置いたれば、切り損ひもせまいけれど、わたしが願ひがござりまする。昨日軍の初陣に、直ぐに敵へ生捕られ、此まゝ死ぬるは弓矢神の、冥加にも盡きたかと、なんぼう悲しい口惜しい。どうぞも一度お歸しなされ、父樣や母樣に、たつた一目逢うた上、せめて雜兵の首なりと、取つて立派に死んで見せませう。どうぞ此お願ひを。

微妙　ア、コレナウ、賢いやうでも流石は子供。預かりの囚人、敵へ返して、盛綱の武士が立つものか。父や母に逢はされる程なれば、この憂目はないわいの。とは云ふものゝ、逢ひたいは道理ぢやわいの。尤もぢやわいの。世が世の時なら二人の孫、右と左に同じ花と、並べて置いて老の樂み、この上もあるまいに、生捕る孫、生捕らるゝも孫、小三郎が手柄したと、あふぎ立てる陣中へ縛られて引出されし、顏見た時の祖母が胸は、張裂くやうにあつたわいの。とても甲斐ない其方の運、最期が未練にあつたなどゝ、口の端にかけられては、親高綱が弓矢の名折れ。尋常に死んでたもや。ヤ、サア、この祖母が介錯する。可愛い孫を先立てゝ、いつまで因果の耻さらさうぞ。祖母も直ぐに自害して、三途の川を、手を引いて渡るわいなう。

〽渡るわいのと抱きしめ、泣く〳〵劍差つくれば。

小四　父樣や母樣に逢ふまでは、免して下され。祖母樣いなう。

〽未練も親子の恩愛に、道理といとゞ目もうろ〳〵、孫もうろ〳〵隙あらば、逃げんと見やる木戸口の、爰にと母の呼子鳥。

ヤア、母樣か。

〽駈け出す孫を引留めて、急きたつ老母の聲あらゝか。

微妙　エヽ、未練者、卑怯者。さては母親と内通して、爰

を抜け出る心ぢやな。それなれば猶助けられぬ。望みの通り、親にも一目逢うた上は、サア〳〵切腹。但しは祖母が手にかけうか。

小四　サア、それは。

微妙　切腹するか。

小四　サア、それは。

微妙　手にかけうか。

小四　サア。

微妙　サア。

二人　サア〳〵〳〵。

微妙　サア、なんと。

ト附け廻す。

〽脅しに抜いて振り上げる、劍の下に手を合せ。

小四　母様の離間いてから、一倍命が惜しうなつた。どうぞ助けて。お情ぢや、堪忍して下さりませ。アレイ〳〵。

〽あれい〳〵と逃げ廻り、後れる孫に猶氣後れ。

微妙　エヽ、未練な。最前の健氣な覺悟忘れたか。とても叶はぬこの期になつて、臆病卑怯の名を取るか。

小四　サア、覺悟は極めて居るけれども。

微妙　サア、そんなら伯父が見ぬ先に、自害して、立派な最期と譽められてくれ。コレ、祖母が方から手を合す。早う死んでたもいなう。

ト泣き〳〵云ふ。

〽頼むと云へど逃げまどふ、外には酷やつれなやと、恨みも三方三惡道。

前生の敵同士か、愛し可愛いの孫や子に、生れて憂き目を見る事かいなう。

ト泣く。

〽老母が眞身の血の涙、時雨の中の枯れ紅葉、露より先に散りぬらん、折柄さつと山風の、遙かに陣鉦、攻め太鼓、鳴るこそあれと早速の早瀬、長刀搔い込み走り出で木戸口開けば駈け入る篝火。

トこれにて早瀬、長刀持つて出て、木戸を明ける。

早瀬　待つた〳〵、高綱どのゝおかもじ。こりやどこへ。

篝火　ハテ知れた事。我が子の小四郎取返しに。

早瀬　イヤ、滅多にさうは、なるまい〳〵。相嫁の初見參、この長刀に乘りたいか。サア、ならば手柄に小四郎を、取返して見やしやんせいの。座は立たせぬ。サア、なんと。

篝火　兄嫁樣の長刀に、乘せらるゝとて我が子をば、取返

さいで置かうかいな。そこ退いて通さんせ。
早瀨　イヤならぬ。
篝火　退かしやんせ。
〽いや推參なとぎしみ合ふ、眞中に三郎兵衞、小四郎小脇にひん抱へ。
ト盛綱出て
三郎　石山の御陣所に、事ありと覺ゆるぞ。ヤア〳〵、小三郎はいづくにある。早く〳〵。
小三　ハア、、即ち只今御加勢の、用意いたしてござりまする。
三郎　オヽ、出かした行け。
小三　ハア。
ト小三郎、鎧形にて出て、會釋して入る。
〽用意の小具足、兜の緒、締むる間遲しと駈け出す、引違へて信樂太郎。
ト太郎、駈けつける。
盛綱　待ち兼ねし信樂太郎、して〳〵樣子は、なんと〳〵、
太郎　ハア、時政公の計略の如く、佐々木四郎左衞門高綱。我が子を捕られし憤り、今宵自身に馬を出し、手勢やうやく二千餘騎、鎌倉の惣大將、時政公に見參せんと。

〽死物狂ひのその有樣、鬼神の如く見え候ふ。併し味方は兼ねての用意、大將の陣は數萬の警固、盛綱公には氣遣ひなく。
〽虜の悴を守護あるべしとの御事なり、猶追ひ〳〵に御注進と、申し捨てゝぞ駈り行く、三郎兵衞、太息つぎ。
ト太郎、よろしくあつて入る。
盛綱　ハヽア、南無三方死なしたり。さしもぬからぬ弟高綱、子ゆゑの闇に心暗み、計り事に陷つたな。摩利支天なればとて、數萬騎のその中へ、一騎駈けの死軍、討死せん事眼前たり。この上は親のお慈悲、佛間で御回向なされて遣はされい。
微妙　盛綱。
盛綱　母人樣。
兩人　力なき、武運の末。
〽殘念さよとばかりにて、眼を閉ぢて奧に入る、篝火、猶も氣はそゞろ、我が子も氣遣ひ、夫も如何、千々に碎くる軍の破れ、エイ〳〵オ、と勝鬨は、敵か味方か二人の妻、胸の陣鉦足も空、二度の注進、勇みの大音。
ト盛綱微妙入る。女形二人思ひ入れ。藤太、駈け出で
藤太　お喜びなされませ。軍は十分味方の勝利、大軍に取

明治十四年四月新富座上演

中村芝翫の時政　中村宗十郎の盛綱

囲まれ、集まり勢の高綱方、道失うて逃げ走る。
〽或ひは掻き首或ひは射取り、殘る兵さん〴〵に追ひまくり。
諸葛孔明と呼ばれたる、四郎左衛門高綱を、榛谷十郎が、討ち留めましてござりまする。
ト入る。
〽聞くより妻はハアハツと、心散々燃え立つ篝火、夫の首は渡さじと、行くをやらじと止むる早瀬。
ト兩人少し立廻りのうち、橋がゝりより
呼び　時政公のお成り。
トこれにて篝火、思ひ入れあつて入る。
〽呼はる聲、ハツと早瀬は大將の、御座設けにと走り入る。龍の雲にひいるが如く、一陽の春をまつ平の時政、近習の武士古郡新左衛門、佐々木小三郎盛清、お供に扈從して、お召し替への鎧櫃、御座の次に飾らせて、寛然と入り給へば、三郎兵衛同微妙、敬ひ請じ奉る。
トこの淨瑠璃にて時政、新左衛門、小三郎、その外を連れて出て、二重へ通る。軍卒、鎧櫃を直す。盛綱、微妙、早瀬、出迎へると、孫八出る。
〽竹の下孫八、慌たゞしく罷り出で。

孫八　最前和田兵衛秀盛、御陣所へ參りしところ、日頃好める酒を強ひて醉ひ伏させ、居間の四方に金網をかけたれば、籠の鳥同前と思ひの外のしれ者、隱し火矢を以て屋根を打拔き、御座の間の白旗を奪ひ取り、立退きましてござりまする。
時政　ハヽヽヽヽ、敵の中へ鎧も着せず只一人、踏み込む程の不敵者、汝等が手に合ふべきか。第一の大敵、佐々木高綱を討ち取つたれば、腹心の害は拂うたり。さりながらこの佐々木、古への將門に倣ひ、一人ならず二人三人の影武者あつて、何れをそれと見分け難し。誠の佐々木が死首か、汝が爲にも現在の弟が首、よも見損ずる事もあるまい。盛綱、あの首實檢せよ。ソレ、新左衛門、その首これへ。
トこれにて新左衛門、首桶持ち行き、盛綱が前へ直す。
〽仰せの下に新左衛門、首桶御前に直し置く、三郎兵衛、承はり、大將に一禮し、無慘の弟が死首に、是非もなき對面やと、呑み込む涙、後より、父の死顔拜まんと、窺ふ小四郎、盛綱が、引明くる首桶の、二目とも見も分かず。
ト小四郎、窺ひ出て

小四　ヤア、父様、さぞ口惜しうござりませう。わしも後から追ッ附きまする。
〽氷の刃雪の肌、腹にぐつと突き立つる。
盛綱　ヤレ、母人、お留めなされ。コリヤ小四郎、何ゆゑに切腹する、仔細はなんと。ド、どうぢや。
〽様子は如何にと人々慌て介抱に、小四郎、きつと目を見開き。
小四　何ゆゑとは、伯父様とも覚えぬ。卑怯未練も父様に逢ひたさ。父を先立て、何まざ／＼と生恥を晒しませう。親子一緒に討死して、武士の自害の手本を見せまする。
〽きりゝ／＼と引き廻す、その手に縋り母微妙。
微妙　ナウ、その立派な心を知らず、叱つた祖母が面目ない。堪えてたも、堪忍してくれいよ。可哀や／＼。
ト泣く。
〽堪えてたもと右左、目をしばたゝく三郎兵衛。
時政　猶豫は如何に、はや實檢。
〽なんと／＼と御上意に、疵口拭ひ耳際まで、とつくりと改め、古實を守り、謹んで両手に捧げ。
盛綱　矢疵に面體損じたれども、弟佐々木高綱が首に、相違ござりませぬ。

〽御前に直し押下れば。
時政　ホヽウ、骨肉の兄が實檢と云ひ、首に向つて小四郎が、恩愛の涙、切腹の有様、誠の首の證據明白。思へば昨日はこの首に、後を見せし時政が、いま手の下に誅罰する武運の強さ。ハヽア、心地よや、嬉しやなア。今と云ふ今時政が、初めて枕を安く寝るは、盛綱が働らき。我が着替への鎧一領、當座の褒美に殘し置く。小三郎その外には、陣中にて勝軍の恩賞せん。皆萬歳を唱へよや。
皆々　おめでたう存じまする。
〽悦喜のよそほひあたりを拂ひ、本陣さして歸陣ある、盛綱、あたりをとつくと見廻し。
ト時政の同勢、一同向うへ入る。
盛綱　佐々木高綱が妻篝火、計略の似せ首、仕負ふせたれば、小四郎に最期の暇乞ひ、免す、これへ。
〽一言を、聞く間遅しと轉び出で、我が子にひしと抱きつき、わつと泣くより外ぞなき、涙ながら母微妙。
ト篝火出て、縋り附く事。
微妙　ムウ、すりや似せ首と知つて、大将へ渡した其方は、京方へ味方する心ぢやなう。
盛綱　イヽヤ、いつかな心は變ぜねども、高綱夫婦がこれ

程まで、仕込んだ計略。父が爲に命を捨てる、幼少の小四郎が、餘り神妙健氣さに、不忠と知つて大將を、欺むきしは弟への志し。彼れが心を察するに、高綱生きてあるうちは、鎌倉方に油斷せず、一旦討死せしと僞はつて、山奧にも姿を隱し、不意を討たんず計り事、されども底深き北條どの、一通りの身替りでは、なかなか喰はぬ大將、そこを計つて一子小四郎を、うまうまと此方へ、生捕らせしが手段の根組み。最前の首實檢、似せ首を見て、父上よと、誠しやかな愁嘆の有樣に、大地も見拔く時政の、眼力を晴ませしは、教へも教へたり、覺えも覺えし親子が才智。見す／＼似せ首とは思へども、斯ほど思ひ込んだ小四郎に、なんと犬死がさせられう。主人を欺むく不調法、申し譯は腹一つと、極めた覺悟も負うた子に教へられ、淺瀨を渡るこの佐々木。甥が忠義に比べては、伯父がこの腹百千切つても、かけ合ひ難き最期の大功。其方が命は京鎌倉の運定め。オヽ、出かいた／＼出かいたなア。

〽手負ひの顏を打守り／＼、悲嘆の涙にくれければ、篝火いとゞかきくれて

篝火　子を譽めらるゝ親の身の、喜ぶは常なれど、生きて功名手柄して、今の仰せにあづからば、なんぼう嬉しかるべきに、年相應より悧發なが、生れ附いたこの子が因果。如何に武士の慣ひぢやとて、斯う／＼して自害せいと、教へる親の胴慾さ。可哀や初陣の始めから、死にゝ行くこと合點して、おりや侍ひの子ぢやに依つて、討死するは嬉しいけれど、死んだら父樣や母樣に、つい逢ふ事がなるまいかと。

〽そればつかりがと云ひさして、泣き顏見せず勇んで行た、その立派さ。

天晴れ弓矢打ち物まで、誰れに劣らぬ物覺え。腹切る事までこれ程に、器用になくば何事ぞ。コレ、小四郎いなう。

ト耳際へ寄り

この深手ぢやもの、耳も遠くなり、目も見えまい。いま伯父樣の仰しやつた事、聞き取りやつたか。其方の命捨てたので、高綱どのゝ忠義が立つと、褒美のお詞。それを未來の引導に、迷はずと佛になつてたもや。よう死んでたもつたなう。

ト泣く。

〽云ひ聞かすれば嬉しげに。

小四　そんならわしが死ぬるので、父様の軍が勝ちになるか。エヽ、忝ない。祖母様はどこぞ。わしや縛られても卑怯者ぢやないぞえ。これで死んでも本望ぢや。伯父様、伯母様、祖母様にも、母様にも、逢うて死ぬるは嬉しいが、たつた一つ、悲しいは、父様に〳〵。

微妙　〽後は得云はず舌強ばり、次第々々に弱り行き、惜しや莟みの初花も、無常の風に散りて行く。

微妙　コレナウ孫やい、小四郎やい。今端の際に父親を、尋ねて死んだ子の心、思ひやつて只一目、なぜ顔見せに来てくれぬぞ。千騎萬騎の大將にも、なるべきものを栴檀の

〽二葉で枯らせし胴慾は、神も佛もなき世かと、嘆く微妙の聲限り、涙の早瀬、篝火も、消えるばかりの思ひなり、三郎兵衞、泣く目を拂ひ。

盛綱　ハア、嘆きに紛れ遅れたり。實檢を仕損じたる、鎌倉への申し譯、母人、おさらば。

ト刀に手をかけ、死なうとする。

和田　ヤア〳〵盛綱、和田兵衞秀盛、これにあり、敵を見かけて自害とは、後れたか盛綱。サア、尋常の勝負々々。

ト和田兵衞、後より鐵砲持つて出る。

盛綱　しや幸ひのよき敵。歸らば其まゝ歸さんに、運盡きたる秀盛。遁がれはあるまい、覺悟せい。

和田　〽逃がしはせじと突ッ立てば。

和田　オヽ、和田兵衞が習ひ得し、南蠻流の懐鐵砲、受けて見よ。

〽受けて見よやとどうと打つ、狙ひは外れて鎧櫃、内に忍びし榛谷十郎、太腹射拔かれのた打ちたり。

ト和田兵衞、鎧櫃を射拔く。鎧櫃こはれて、榛谷十郎出て倒れる。

和田　見よや盛綱。底の底まで疑ひ深き、北條の隱し目附け、汝が手にかけざれば、不忠にもならず、彼れめが不運。今また御邊自殺せば、鎌倉への義は立つべきが、佐々木が首は似せ物なりと、忽ち露顯し、これまでも、砕きし心は水の泡。時を待つて佐々木高綱、誠は爰にと名乘つて出る、その時に潔く切腹せば、忠も立ち、義も全し。腹の切りやう、早い〳〵。

〽仁ある勇士の一言に、差留められて盛綱も、暫し詞もなかりしが。

三郎　實に誤まつたり〳〵。惜しからぬ命なれとも、暫らく生きるは弟へ、これも情の一つには、甥への寸志、追

善供養、野送り萬事も一家の内證。諸事何事もこの座ぎり。

和田 オヽ、如何にも〳〵。表は京方、鎌倉方、右大臣實朝の御座の白旗奪ひ取りしは、軍の吉左右、重ねて再會。もう歸る。留めて見ぬか。

ト白旗を出す。

〽留めて見ぬかと出でて行く。

盛綱 ヤア、盛綱が陣中にて、味方の武士を討つたる曲者。返せ、戻せ。

〽弓矢の規式、因は兄嫁小姑、孫に甥子に亡骸に、憂き事三井の暮れの鐘、消え行く子より親心、我れ唐崎の夜の雨、父には一目粟津の嵐、木の葉の紅葉かき寄せて、夕を照らす勢田の橋、門火は烽火敵味方。

ト この淨瑠璃のうち、早瀬、木の葉を掻き寄せるこなしにて門火を焚く。微妙、死骸を抱き居る。

盛和 さらば。

〽さらばとばかり、別れ行く。

ト三重にて、早瀬、微妙、篝火、「ハア、ヽ」と泣く。盛綱、額外向ける。和田兵衛、橋がゝりへ行く。

幕

大詰

佐々木隠れ家の場
坂本城内の場

役名——船頭、次郎作實ハ佐々木四郎高綱。女房、およつ實ハ篝火。阿房、盆太郎。花岡園部之助。北條相摸守時政。時政實ハ稻毛入道重賴。谷村小藤次。四の宮六郎。大江入道東元。宇治の方。局、千草。和田兵衛秀盛。三浦之助義村。

造り物、二重屋體の世話場。雪颪しにて幕明く。

〽比良の暮雪と賞せしも、誠は寒き暮れの雪、冬ぞ淋しき大津の浦に、世を漕ぎ渡る船長の、妻もとも〳〵外稼ぎ、内は十五の涎くり、留守の手習ひ机の上、草紙に六道の切書いて、天かまいかの玉錢を、一人打つたり飛び廻り、遊びに他愛なかりける。

ト この淨瑠璃のうち、盆太郎、阿房の拵らへ、六道して居る見得。玉錢を持ち居る。

〽その日も西へ入相の、鐘に散り行く花ならで、雪解を凌ぐ相合傘、よその舍りに身を寄せて、我が家に歸る女

房およつ。
　トおよつ、園部之助、相傘にて出る。
よつ　阿房よ、戻つたぞよ。
〽云ふ聲聞いて玉錢隠し。
盆太　オヽ、お家さん、ようごんしたなう。
よつ　オヽ、彼奴わいの。餘所から來た者のやうに。さうしてマア暗がりに、灯もともさず、愚圖々々と、何して居るのぢや。
盆太　サア、其やうに愚圖々々すると叱られるに依つて、愚圖々々するかせんか、暗がりにして、お前の臍探ろと思うて。
よつ　また阿房めが。キリ／＼と灯をともせやい。
盆太　オツト合點。
〽云ふに合點と角行燈、硫黄の花に。
ハツくつさめ……エヽ、また、人をそゝらんすかいの。
〽云ひ／＼戸口さし覗き
オヽ、アレ、門口に誰れやら居る。誰れぢや、どこの人ぢや／＼。
よつ　イヤ、あなたは傘を御無心申したお侍ひ樣。お庇で雪を凌ぎまして、忝なう存じまする。マア／＼、お入りなされませ。
園部　然らば御免なされい。
　ト入り
これがこなたのお宿元か。さて／＼綺麗なお住居でござりますなア。
よつ　イヤモウ、やう／＼この頃、この家へ參りましたゆゑ、まだ取締りもござりませぬ。
園部　イヤ／＼、なか／＼よい所でござる。して、御亭主の御商賣は、何をなさるゝな。
よつ　イヤ、亭主と申すはわたしばかり。營みとても僅かな暮らしでござりまする。
園部　ムウ、すりや後家御か。
　ト思ひ入れ。
よつ　ハイ、マア、左樣でござりまする。
園部　これは／＼、まだお若いに、さぞ御不自由にござらうな。
よつ　イエ／＼、獨り身も馴れましては、さして不自由にもござりませねども、この浦風の烈しさに、又しても／＼夜が冴えまして、心細い折しもは、アヽ、誰れぞ力になつて欲しいと、サア、思ふやうな緣もないものでござり

ますわいな。
〽どこやら甘い話しに侍ひ、襟かき合せ差寄つて。
園部　イヤナニ、物でござるて。拙者、花岡園部之助と申す浪人でござるが、未だ定まる妻もなければ、折節は清水の花盛りには、この園部を戀ひ慕ふ短册もあらうかと、そこらあたりの櫻の枝を見廻つても、近年は彼の時節が悪うて、歌詠む姫もないかして、短册色紙などは、一向にござらぬて。そこで拙者、よく／＼思ひまするに、拙者が宅より清水は、金神に當つて方が悪うござる。それゆゑ又、所を變へて、この秋、高尾山へ參つたところが枝振りよき紅葉の下に短册一枚、忝なしと拾ひ上げ、よく／＼見ますれば、短册は短册なれど、七つ屋中納言の鼠喰ひ。ア、今時は、刃に心の判じ物もござりませぬて。時に今、申した通り、閨淋しう暮らす某、なんと相談する氣はないか。どうか／＼。
〽しなだれかゝれば、こなたも打笑み。
よつ　それはマア／＼。さうして聞きますれば、あなたのお名は園部さまとやら。薄雪姫の相合傘、お情深ひも御緣の端。さうして、どうやら愛しらしい、お姿と云ひお顔つき、目元なら口元なら、女をなづます風俗。可愛らしい殿御ぶり、お前のやうな殿御に思はれて居る、お方もあるでござんせうなア。
〽こぼれかゝりし形振りに、現ぬかして氣は上摺り、側に阿房は差覗き。
盆太　エヽ、悪い身をする侍ひぢやわい。何の事はない、股ぐらへ山猫挾んだやうにしてぢやわい。
よつ　コリヤ、また阿房口叩かずと、爰に用はない程に、奥へ行け／＼。
盆太　アイ、奥へ行けなら行かうが、おれが奥へ行たら、挾んだ山猫出し居らうぞえ。
よつ　まだ仇口を。
盆太　アイ。
〽盆太は奥へ立つて行く、およつは門の戸さし寄せて、押入れ明けてこと／＼と、取出す蒲團打ひろげ。
よつ　オヽ寒。こんな寒い晩は、ちつとなりと早う寝て、ドリヤ、肌ぬくめうか。
〽肌ぬくめうと身を横に、なるたけ堪える侍ひが、青うなり赤うなり、つく息さへも絶え／＼に。
園部　もうそこへ入らうかえ。エコレ、もう寝てかえ。モシ、女中樣、コレモシ、こりやモウどうも堪えられぬ。

ト此うち着る物脱ぎ、よろしくこなし。
〽どうもならぬと蒲團の中、入ればおよつが起き直り。
よつ　そんならお前は、いよ〳〵わたしと寢るお心かえ。
園部　イヤモウ、心はどこへやら飛んでしまうて、體中が張り切れるやうなて。
よつ　そりやお前、眞實でござんすかえ。
園部　イヤ、眞實の何のと云ふは愚かな事ぢや。もう根問ひせずと、ちやつと寢たい。
トいろ〳〵をかしき身振り。
よつ　サア、それが定ならお前様へ御無心があるが、なんと聞いて下さんすかえ。
園部　サ、それは聞きたうても、上氣して耳が聞えぬ。少少の事なら、マア寢所での事にせう。
よつ　イエ〳〵、賴む事を賴んでから、その上でしつぽりと、抱かれて寐るわいな。
園部　サア〳〵、そんならちやつきりちやつと、聞いてしまはうかい。
よつ　サア、その賴みたいと云ふは、何を隱さうわたしは、敵持ちでござりまする。
園部　よし〳〵、敵持ち呑み込んだぞ。
よつ　サア、それぢやに依つて、もし敵に出合うた時は、助太刀してもらはにやなりませぬが、御合點でござりますかえ。
園部　よし〳〵、助太刀呑み込んだぞ。
よつ　萬一、返り討にあふ時は、命を捨てゝ下さんせにやならぬぞえ。
園部　よし〳〵、返り討、呑み込んだぞ。
よつ　オヽ、何を云うても呑み込んだ〳〵と、大腹中なお方ではあるわいな。
園部　よし〳〵、大腹中呑み込んだぞ。
よつ　オヽ、そりやお前、何云ふのぢやぞいな。
園部　何云ふか知らぬが、早う寢たい。
よつ　マア、よしれぬ事を云はずとも、わたしが敵と云ふは兵法の達人、助太刀せうと仰しやる、お前の手の內が見たうござんす。
園部　なんぢや、はつち坊主か何ぞのやうに、手の內とは、なんの事ぢや。
よつ　サア、兵法の御鍛練が。
園部　アヽ、兵法使ふのか。そりや心易い事。いつなりと使うて見せう。

よつ　そんなら、御手練の程をお見せなされて。ヤレ〳〵嬉しや、と申してからが、心掛けねば竹刀の用意もなし何を以て御手練を。

園部　氣遣ひせまい、騒ぐまい。竹刀は用意いたした。

よつ　ナニ、竹刀を御用意とは。

園部　世の常の武士とは違うて、兵法使ふ某なれば、兼ねて心掛けの用意した竹刀。しかも長いと短いと、りやんこあるてや。

〽兩腰するりと拔き放せば。

なんと、赤鰯でもない備前竹光。なんと天晴れ、竹刀であらうがの。

よつ　ムウ、すりや、これがお前の魂ひかえ。

園部　イヽヤ、魂ひは飛んでしまうて、こりや人をだましいぢや。

よつ　アノこれが。

ト見ようとする。

園部　イヤ、それから御覽じ。

よつ　オヽ、いつそ呆れて物が云はれぬわいな。

園部　おれも上氣して、胸がドキ〳〵するて。

よつ　イヤモウ、御手練見るに及ばぬ。そのお心なら、寢て語らうわいな。

園部　なんぢや寢よう。こりや忝ない。

トおよつ、行燈吹き消す。

ヤ、こりやなぜ火を消したぞい。

よつ　サア、これは明いと、わたしや恥かしいわいな。

園部　エヽ、明くても大事ない事を。

〽勝手知らねば爰かしこ、尋ね探る其うちに、阿房をそつと蒲團の内、およつは勝手へ探り行く、此方は知らず高這ひに、探り當る蒲團の內、何かはなしにぐづ〳〵ぐづ、入れば阿房が大聲あげ。

盆太　アヽ、イタヽヽ。ヤレ、盜人め、出合へ〳〵。

〽呼はる聲に悔りし、こけつ轉びつ侍ひは、いづくともなく逃げ歸る、後に盆太が高笑ひ。

ト園部之助、逃げて入る。

盆太　ハヽヽヽ、逃げるワ〳〵。ヤイ、侍ひめ、おのれが血氣に任せ、家尻切らうとかゝつても、滅多に切られる盆太ぢやないわい。シタガ、お家樣もお家樣ぢや。なんの、あんな奴が心を試す事があるもので。この間から來る奴に、碌な奴は一人もない程にの。エヽ、いらざる隙づひえな事ばつかりしてからに。追ツつけ旦那樣が戻つ

てゞあらう。湯なと焚いて腰湯さそわいし
〽あたりこと〳〵取片づけ、納戸へ入るや入狹の月、影さへ暗くしめ〳〵と、空にちらつく雪よりも、齡の雪を覆うたる、簑笠着たる老人を、乘せて我が家へ戻り船、艪を押し切つて陸に漕ぎつけ。
ト次郎作、時政を船に乘せて漕いで出る。
次郎　急ぎ候ふ程に、はや船が着きて候ふ。卽ちこれが、我れらが內。サア〳〵、お上がりなされませい。
〽歩み渡せば老人は、しづ〳〵上がる陸の方、船頭ももやい綱、亂杭に括りつけ。
サア、御案內申しましよ。
ト內へ入り
女房ども、戻つたぞよ。お客がある。どこに居るぞい。
〽夫の聲に女房が、としや遲しと納戸を出で。
よつ　オヽ、次郎作どの、戻らしんやしたか。今日は定めて寒かつたでござんせうなア。
次郎　イヤモウ、寒い段ぢやない。雪はちらつく、向ひ風の比叡颪、艪柄持つても切れるやうにあつたれど、風に逆らうて艪押したので、おれは寒さを忘れたが、あなたにはさぞ、お冷えなされたでござりませう。サア、マア、あれへお通りなされませ。
〽いざ先づあれへと進められ、簑笠脫ぎ捨て上座に直り。
時政　一樹の影、一河の流れ、不思議に亭主が世話となり、寒夜の一宿、過分〳〵。
〽過分の至りと、聞いて女房呆れ顏。
よつ　てもマア、仔細らしい物の云ひやう。さうして見りや、生きた兜人形見るやうなお方、ありやマアどなたでござんすえ。
次郎　イヤ、どなたやら、おれも知らぬが、今日は草津の方に、軍があると聞いたゆゑ、なんでもそこらあたりへ行たら、よい儲けがあらうかと、矢橋の濱に船つけて、見合して居る所へ、あなたがひよつこりお出でなされ、何がなしに船へ飛び乘り、ヤレ出せ、ソレ漕げと、滅多無性に煽てられ、合點がゆかねどマア沖へ漕ぎ出して、樣子はと尋ねたれば、石山の陣所へ歸る者、それまで急ぎ船を着けよ、船賃は望み次第と仰しやるゆゑ、畏まつたと精出して、押しても漕いでも向ひ風、一向石山へは船は寄らず、せう事なしに爰まで連れまして戻つたが、今夜は此方にお泊め申して、風が凪いだら石山へお供する。隨分御馳走申してくれ。

よつ　それはマア、御難儀でござりませう。見ましたところが、鎧とやら云ふ物を召してござれば、定めて軍に行くお方。ナモシ、左樣な事でござりますかえ。

時政　ホヽ、推量の通り、今日の軍に思はぬ敗北。それゆゑかゝる世話にあづかる。

よつ　コレ、こちの人、敗北とは、何の事ぢやえ。

次郎　ハテ、軍に負けるを、敗北と云ふわいやい。

よつ　ムウ、そんならあなたは、軍にお負けなされて、敗北なされたのかえ。

次郎　さうぢやわいの。

よつ　それは、マア／＼お笑止や。見ればお年に不足もなささうなに、命がけの軍せうより、お子樣もあらうに、隱居してござらつしやつたら、敗北とやらもあるまいに定めてお腹が立つでござりませうな。

時政　なんの／＼、勝負は時の運によるもの。一旦の勝より始終の勝を善とす。佐々木の四郎が謀計に乘せられ、無念の敗北、石山へも歸られず、途方にくれて漂ふ所に、幸ひなる渡し船、危ふき難儀遁がれしも、全く其方が情ゆゑ。オヽ、嬉しいぞよ。

〽始終を話す軍の樣子、聞いて女房が差寄つて。

よつ　モシ、その佐々木とやら云ふ人は、討死と聞きましたが、矢ッ張り生きて居られますかえ。

時政　されば／＼、これまで佐々木を討取りしも、度々なれど皆影武者。六日以前の戰ひに、佐々木が悴小四郎と云ふ者を味方へ生捕り、討死せし佐々木が首、實檢さすれば、誠の親と悲しみ、直さま切腹。さてこそ佐々木は討取りしと、安堵の思ひに、又も佐々木に追ひ立てられしは、幾人あるとも知れ難き佐々木めが計り事。思ひ出すも、恐ろしや／＼。

〽舌を卷いて物語る、聞く女房が打ちしをれ。

よつ　今の話しを聞くにつけ、侍ひと云ふ者は、少さい子でも軍して、命を捨てると云ふ事は、果敢ない事と云はうか、いぢらしいと云はうか、その親々の身に取つては、さぞかし

ト云はうとする。

次郎　アヽ、コリヤ、何のかけかまいもない餘所の事を、イヤモシ、斯うお宿を申しますからは、とても の事に、あなたのお名を。

時政　ホヽ、某こそ……イヤ、端武者なれば、烏滸がましう名乘るにも。

次郎　御尤も。芒の穂にも怯ぢるとやら、船頭風情の私しどもが、承はつても益ない事。定めてお疲れでござりませう。見苦しうはござりますれど、奥へござつて、御休息なされませぬかい。

時政　イカサマ、老體なれば餘程の疲れ。詞に附いて暫らく休息いたさう。

次郎　イヤモウ、何にもお氣遣ひな事はござりませぬ。ゆるりとお休みなされませ。

時政　ホヽ、何かにつけて心遣ひ。過分々々。

次郎　イヤ、何にもお搆ひ申しませぬ。

時政　然らば亭主。

次郎　先づ、お出でなされませう。

〽過分々々と老人は、しづ／＼立つて奥に入る、後に女房がくし／＼と、思ひわびたる憂き涙、夫も思案あり顔に、手を拱いてさし俯向き、互ひに詞納戸より、ひよかひよか出づる阿房の盆太、重箱片手に。

ト盆太郎出て

盆太　コレ、お家様、お前は忘れて居やんすが、今日は坊さんの一七日の逮夜。それで一文餅三つ買うて來た程に祝うて佛様へ進ぜて下さんせ。

〽云ふに思はずせき上げて、わつとばかりに伏し沈む。

よつ　オヽ、しをらしい、よう氣がついた。愚かなわれが志し、供へいで、なんとせう。

〽しを／＼立つて押入れの、襖あくれば吊り佛壇、お明しの灯はありながら、しめる香炉の香もりかへ。

智覺院幼眞童子、佛果菩提の爲、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

〽手を合せ、伏拜む目も涙なり。

コレ、モシ、佐々木どの。

ト云はうとする。

次郎　シイ。

ト奥を敎へ、鎭める。兩人こなしあつて

よつ　イヤサ、次郎作どの、お前もこちら向いて、せめて一遍の回向なと、してやつて下さんせ。わたしが千遍稱へるより、お前のたつた一遍が、あの子の功德になりますわいな。

ト泣く。

次郎　白痴者、奥にはお客人もござるに、見苦しいその泣き聲。エヽ、未練な奴の。

よつ　イエ／＼、なんぼう叱らしやんしても、これが泣か

ずに居られうかいな。如何に男の高下ぢやとて、お前ばかりの子かいな。わたしが爲にも子ぢやわいな。まだ年端もゆかぬ者に、斯う／＼せいと酷たらしい、父御の詞を子心に、大事々々と忘れもせず、立派にあつたその時の、姿が今に目先に見え、なんとこれが忘られうぞいな。わしやどうも忘られぬ。お前もわつと泣いたとて、滿ざら人も笑ふまい。ちつとは泣いてやつてくれたがよいわいな。わしやいぢらしい、悲しい／＼、悲しいわいなア。

ト大泣き。

〽悲しいわいなと撞と伏し、嘆けば流石恩愛の、涙は胸に突かけながら。

次郎　コリヤ、聲が高い、靜かに泣けやい。我れとても肉緣の悴、不便になうてなんとせう。側であり／＼見た其方より、見ずに案じる我が心、どのやうにあらうと思ふぞ。骨は碎かれ、身は刻まれ、肝の束ねへ燒き金を、刺されるやうにあつたわやい。

ト ぢつと堪え泣く。

〽涙隱せば、阿房は目を摺り。

盆太　アヽ、悧巧な坊樣ぢや。先度もおれと穴一して居たら、コリヤ、阿房よ、穴一すると手が下がると云はしやつたに依つて、おれもムツとしたさかいで、そんなませた事云ふと、つい死ぬるぞやと云うたればな、オヽ、おりや侍ひの子ぢやに依つて、死ぬる事は何ともないけれど、ひよつと早う死んだりや、さぞ母樣が泣かしやろと云うてゝあつたが、つい泣かしやるやうになつてのけたわいの。

ト大聲にて泣く。

〽大聲あげておい／＼泣き。

次郎　コリヤ、もう云うてくれな。聞く程苦しいこの胸が、裂けるやうになるわいやい。

〽裂けるやうなと伏し沈む、涙は琵琶の湖に、漣寄する如くなり、かゝる嘆きの時しもあれ、長押に掛けたる鳴子の音、風かあらぬかぐわら／＼／＼、次郎作聞くより突つ立ち上がり。

コリヤ／＼、女房、城内より知らせの早打ち。ソレ、奥の間に氣を附けい。阿房よ。裏道へ行け／＼。

〽戸口を丁とさし固め、居間の疊を跳ね上ぐれば、下よりぬつと鎧武者。

ト小藤次、疊の下より出る。

次郎　シイ……音高し谷村小藤次。して城内に變はなきや。

今日の一戰味方の勝利、次第一々物語れ。なんとなんと。
〽次第聞かんもひそ〳〵聲。
小藤　さん候ふ。味方の軍勢、粟津の汀に屯を構へ、戰ひを催ふす所に。
〽敵の大軍どつと押寄せ。
無二無三に懸け立つる、味方はわざと負け色見せ、十町ばかり引き退く。
〽勝に乘つて追ひ來る大軍、潮の湧くに異ならず。
味方も爰に踏み止まり、火花を散らして攻め戰ふ。仰せ置かれし時分に爰ぞと。
〽四つ目結ひの旗さつと靡かせ、敵を後に大聲上げ。
ト次郎作、「コリヤ」と靜める。小藤次、口塞ぐ。兩人よろしくこなしあつて
佐々木の四郎高綱これにありと、名乘りかけ〳〵、驀らに懸け立つれば、そりやこそ佐々木が又出たぞ。
〽計り事に乘らぬうち、引けや〳〵と我れ一に、うろたへ騷げば後陣より、大將時政采配振り立て。
佐々木とて、鬼神にてはよもあらじ、騷ぐな者ども、備へを立てゝ戰へと、高らかに呼はれども、佐々木と云ふ名に聞き怯ぢして、崩れ立つたる敵なれば、耳にも更に聞き入れず。
〽風に散り行く木葉武者。
逃げ行く者に目はかけず、目差すは時政只一人、餘すな洩らすな者どもと、稻富竹藏と取卷きしか。
ト此うちよろしき所にて、鎭める事度々あり
〽天を翔つて遁がれしか、また地へ潛つて走りしか。
無念ながら時政は。
〽討ち洩らして候ふと、息つき敢へず訴ふれば。
次郎　ホヽ、天晴れ功名手柄々々。併し、時政を討ち洩らせしは殘念至極。して、時政が出立ちは、なんと〳〵。
小藤　鎧は緋威、錦の直衣。
次郎　ナニ、緋縅に直衣とや。して、歩立ちか、騎馬か。
小藤　イヤ、乘馬はその場に射すくめられ、乘替へもなく身は歩立ち。
次郎　ムウ、さこそ〳〵。汝は直ぐに城内に立歸り、勝ち軍の油斷を窺ひ、夜討ちをかけまいものでもない。萬事油斷のなきやうに、コリヤ、變あらば早速知らせよ。はや行け〳〵。
〽云ひ渡し差寄つて耳に口。
小藤　ハア、畏まつてござりまする。

文政三年十一月玉川座上演

三世坂東三津五郎の高綱　二世坂東簑助の小藤次

〽引返して拔け道へ、飛び込む後の古疊、元の如くに押直せば、女房篝火ゐみ立ち。

ト小藤次、元の所へ入る。

よつ 今の注進聞くにつけ、割符を合す奥の客人、時政に極まつた。この家へ來るは天の與へ、百萬騎を討ち取るより、たつた一人を討つ取れば、四海浪風靜まる手柄。用意さしやんせ、四郎どの。サア、早う／＼。

〽早う／＼と急き立つ女房、騒がぬ高綱。

次郎 ホヽ、計らず我が手に陷る時政、とても今宵は過さぬ命。

よつ イヤ／＼／＼、落ちつくも事に依る。油斷大敵、小敵とて侮らずとは、常々お前が敎へる軍法ぢやないかいな。サア、落ちつかずと、早う／＼。

〽急きに急き立つ折もあれ、又も知らせの鳴子の音、四郎心得手取り早う、疊を丁と跳ねのくれば、すつと出でたる四の宮六郎。

ト また疊の下より六郎出る。

六郎 御注進々々々。

ト次郎作、「シイ」と靜め、奥を窺ふこなしあつて、密やかに

次郎 ヤア、汝が五音は甚だ不吉。心元なし、如何に／＼。

六郎 されば候ふ、城内には今日の勝ち軍、何れも酒宴の興を催ふし、中に取分け和田兵衞どの。

〽例の大酒に數杯を傾むけ、餘程酒興の折柄に。

大江の入道、銚子一杯携へ出で。

〽和田兵衞の軍功、大將感じ思し召し。

お喜びの御酒を下さる、頂戴あつて然るべしと。

〽聞くより何の思慮もなく、土器取つて押戴き、てうと受けて干し給へば、忽ち顔色土の如く。

六穴より迸る、血汐は瀧の如くにて、さしも剛氣の和田兵衞どの、虚空を掴んで七轉八倒。

〽其まゝ息は絶え候ふと、語るにはつと佐々木が仰天。

次郎 して／＼、その座に、三浦之助は有り合さずや。

六郎 さん候ふ。取分け無慘は三浦どの、毒酒を以て和田を殺せし、强惡不道の大江の入道、摑み拉いでくれんずと。

〽阿修羅王の荒れたる如く、入道目がけ駈け上る、板間に兼ねて落し穴、踏み外して眞逆樣、下に植ゑたる劍に裂かれ、身はずた／＼と三浦の最期、みな入道が謀計なれば。

この上は頼家公、御身の上も危ふし〳〵。
〽片時も早く城内へ、御入りあつて守護あるべしと、云ひ捨て又も引返せば、始終こなたに立聞く時政、佐々木は兎から呆れ果て、暫し詞もなかりしが。
ト六郎、元の所へ入る。次郎作、無念のこなし、いろいろあつて、凄き乗り地になり
ハア丶天なるかな命なるかな。和田兵衛と云ひ、三浦と云ひ、いづれ秀でる當時の英雄、入道などが術に乗りしは、よく〳〵味方の運の盡き。この上は片時も早く、城内へ馳せ向はん。篝火、用意々々。
〽用意々々と氣を急く折柄、俄かに表騒がしく、馬の嘶き數多の人音、三ッ鱗の旗指し物、弓鎗持ち筒引く馬の、飾りもきらつく鎧武者、門口に謹んで。
ト侍ひ大勢、出て來り
侍ひ　鎌倉の大將時政公、この家に遁れまします由。忍びの物見が知らせに依つて、お迎ひの爲、參上いたしてござりまする。御館あつて
皆々　然るべう存じまする。
〽呼はり皆々平伏す、内に女房が猶急き立て。
よつ　アレ、時政を迎ひの大勢。この場を助け歸しては、龍を淵へ放すも同然。サア、今のうち、本望々々。
〽サア〳〵〳〵とあせるうち、時政公一間を立出で。
ト時政出て
時政　誠に危ふき難儀を遁がれ、殊に今宵の一宿まで、淺からぬ亭主が情け、町人なれば褒美には、この濱に屋敷を建て與ふる間、濱屋敷として長く所持せよ。猶も望みの事あらば、重ねて沙汰に及ぶべし。
〽さらば〳〵と馬引寄せ、ゆらりと乗れば諸軍勢、四方を圍うて立歸る、天の助けは人力の及ばぬ運ぞ類ひなき。
ト時政、馬に乗り、侍ひ附いて向うへ入る。
よつ　エヽ、手に入る敵をやみ〳〵と、遁がし歸すは何事ぞ。未練とも卑怯とも、云ふに云はれぬ腰抜け武士。お前は天魔が見入つたか。エヽ、情ない心にならしやんしたなう。
〽耻しむれば、につこと笑ひ。
次郎　ハヽヽヽヽ、敵の計り事について計り事を行ふ高綱、女如きの知る事ならず。急く事はない、控へて居よ。
よつ　ムウ、手に入る敵をやみ〳〵と、取逃がすが計り事か。計略でござんすか。
次郎　ホヽ、いま歸つたは時政でない。ありや似せ者サ。

よつ　エヽ、ナニ、すりや、あの時政は似せ者とはえ。
次郎　ホヽ、これまで數度の戰ひに、この高綱に欺むかれ、その無念やむ事を得ず、面體恰好似たるを選み、時政に出立たせ、今日の軍に討死させ、時政こそ討ち取つたりと、味方の者に油斷させ、その虚を討たんと云ふ手段と、疾より計り知つたるゆゑ、攻め口を弛めさせ、わざと助けてこの家へ伴ひ、城内の變一々聞かせて歸せしは、誠の時政を城内へ誘き出さん我が智謀。なか／＼女如きの知る事でないわい。
ト語るにさてはと女房が、初めて悟る夫の心、感じ入つて横手を打ち。
よつ　天晴れ我が夫、稀代の計略。そんなら和田どの、三浦どのも。
次郎　シイ、計り事は密なるをよしと云ふ。密かに／＼。
ト云ふ間に取出す種ケ島、狙ひは松が枝バッタリ人音。
　ト鐵砲打つ。忍び、松ヶ枝より落ちる。
よつ　今のは。
次郎　敵方よりの忍びの曲者。はや明け方も近づけば、我れはこれより城内へ急ぎ、猶も軍の駈引せん。ソレ。
ト又も叠を明け烏、かはい／＼の聲に連れ、思ひ出したる小四郎が、名は消えもせでその主は、親を殘して西方淨土、彌陀の御國の道塚は、計り知られぬ佐々木が拔け道、拔け目なさ、智謀の程こそ。
　トこの淨瑠璃にて、兩人、少し愁ひのこなしあつて、およつ、奥へ入る。次郎作、拔け道へ飛び込む。三重にて、

引返し

　造り物、舞臺端、一面に城を段々にセリ上げる。此うち奥の道具、千疊敷になる。よき時分、前の城、殘らず綱張りの引拔き、段々奥打拔き、よき所にて城半分過ぎ程セリ下げる。此うち三重弾いて居る。淨瑠璃になる。
ト類ひなき、江州坂本の城と申すは、後には峨々たる比叡を負ひ、前には湖水を滿々として、日本無双の名城に、立籠る源の頼家公、數度の軍に戰ひ勝てども、目に餘る敵の大軍、味方は小勢、矢も盡きて、はや落城と見えにける、城内には大江の入道、御母君を始めとし、女中殘らず居並んで、頼家公の御居間と、隔つる座敷は大廣間、今日を最期の首途と、お湯引き、髪に櫛削り、留め木の

伽羅に諸軍勢、心ときめくばかりなり、入道母君に打向ひ。

ト宇治の方に女中大勢、入道附いて出て來り、よろしく住ひ

入道　天命とは申しながら、和田、佐々木、三浦之助、おのれおのれが片意地を云ひ募り、この入道が下知を用ひず、その罰で殘らず討死。所詮開くべき運ならねば、御生害を進め參らせ、某とても後より御供。時刻移らば敵の軍、この城に亂れ入らん。敵に首を渡さんより、片時も早く御自害あつて、然るべう存じまする。

〽頻つて勸むる入道が、底意の程ぞ恐ろしき、宇治の方打頷き給ひ。

宇治　和田、佐々木、三浦の輩、討死せしとある上は、最早叶はぬ味方の運命。なに惜しからぬ自らが命。さりながら、おのれ〳〵の身の始末、疎かになし置かば、これまた死後の物笑ひ。ヤア、皆の者、心殘りのないやうに、めい〳〵心を附け合うて、自らが自害も見屆け、その上は心次第。必らず早まる事はないぞよ。

〽女ながらも上に立つ、心は遙か奥よりも、賴家公のお使ひとして、お局千草、しとやかに手をつかへ。

ト千草、出て

千草　我が君樣よりのお使ひ。味方の面々討死の上は、母上樣にもお心靜かに、御用意を遊ばされませいとの、御口上でござります。

〽涙隱して述べければ。

宇治　オヽ、此方からも使ひを以て、申し上げんと思ひし折しも。局、大儀ぢや。して、我が君には、お覺悟ようお入り遊ばすか。

千草　ハイ、左樣でござりまする。たゞ母上樣の御菩提と、お經讀誦遊ばしてゞござりまする。

宇治　ナニ、自らが佛果の爲に。

〽ハアと答ふも尋ぬるも、後は涙の玉あられ。

コリヤ、千草、御前へ歸つて申さうは、御念もじのお使ひ。斯くなる上は、互ひに申す言の葉もなく候へども、今生の名殘に、お顏ばせ今一目、見まほしく候へど、入道の計らひゆゑ、それも叶はず、冥途の旅へ赴く間、必らず母にお心をかけられず、大將たるお身なれば、潔う御生害を、くれ〳〵も賴みまするぞや。

〽云ふ聲涙にむせ給へば、付添ふ女中も一同に、お道理樣やと伏沈む、涙限りはなかりけり。

入道　ヤア、姦ましい女輩。局も早く立歸り、賴家公に、早く切腹なされいと云へ。行け〳〵。
〽疾く〳〵行けと追ひ立てられ、是非なく〳〵も立つて行く、後に入道醉ふらゝげ。
ト千草、入る。
とても泣いても悔んでも、最早叶はぬ、さつぱりと諦らめて、どれからなりと出陣しやれ。この入道が始めたけれど、年役なれば後から罷る。女輩は誰れ彼れなしに、立並んで一緒に死ね。サア、宇治の方、時刻が移る。早う早う。
〽三方取つて差しつけ〳〵、サア〳〵〳〵とせり立つるは、この世からなる苛責の鬼、外面は修羅の攻め太鼓、矢叫びの聲かまびすく、母君耳を塞で給ひ。
宇治　ハテ、訝かしや。昨日の軍に、和田、三浦を始め、佐々木の四郎も討死せしゆゑ、最早この城保ち難し、生害せよと入道の勸め。誠と思ひ極めしに、いま城外に和田、佐々木と、ほの聞えしは。誰ぞ遠見して參られよ。早う〳〵。
入道　ヤア和田、佐々木、三浦を始め、その外頼む味方の大將、殘らず討死したは違はぬ。死ぬるのが悲しさに、血迷うての空耳。こま言云はずと生害々々。
宇治　イヤ、この實否の糺さぬうちは、滅多に自害はなるまいわいの。
入道　ならずば、いつそ介錯を。
〽すらりと拔いて切りつける、どつこいさうはと三方に受けてもかよわき女わざ、強氣の入道たゝみかけ、既に危ふきその所へ、後の襖蹴はなして、佐々木の高綱飛んで出で、入道を取つて投げのけ
ト高綱出て、入道を押へ
高綱　某始め和田、三浦、討死と僞はり、お二方に生害勸め、それを手柄に時政に、味方せんとは太い企み。これまで味方の計り事、内通したるも皆おのれ。主を賣るの大惡人、最早遁がれぬ、覺悟せい。
〽詰めかけられて、ちつとも動ぜず
入道　ホヽ、よい推量。おのれが忠義立てが胸わるさに、賴家親子が首取つて、時政公へ降參せんと、心を碎いた我が手段。十が九つ仕負ふせしに、見顯はされて殘念私念。もうこの上は死物狂ひぢや。うぬ等一々、覺悟せい。
〽佐々木を目がけ切りつくる、さしつたりとかい潜り、刀を丁と踏み落せば、詞には似ぬ大江の入道、奥を差し

て逃げ行くを、遁がさじやらじと追うて行く、後には母君御聲高く。

ト入道を高綱、追うて行く。

宇治　ヤア／＼者ども、かゝる事ともしり給はぬ頼家公、御身の上氣遣はし。この通り、注進申せ。早う／＼。

ト此うち向うへ、高綱、簑、笠にて、セリ上がる。

〽急げ／＼に女中達、皆々奥へ走り行く、如何忍び入りたりけん、北條時政廣間に駈け出で、

ト時政出て

時政　入道が知らせに依つて、時政直に向うたり、覺悟せよ、宇治の方。

〽云ふ間もあらせず胸板へ、發矢と響く筒音に、脆くも息は絶え果てたり。

トすさまじき鐵砲の音、宇治の方、悶りする。

高綱　ヤア、お騷きあるな宇治の方、斯くあらんと察せしゆゑ、詰まり／＼に守護する高綱。入道めが惡企み、如何なる事も計られず、先づ／＼奥へ／＼。

〽奥へ／＼と諫めやり、高綱勇んで大音上げ。

ト女形皆々を奥へ入れ

次郎　鎌倉の大將北條時政を、佐々木の四郎が討ち取つたり。何れも勝閧々々。

〽高らかに呼はれば、主人の敵遁がれじと、拔き連れ拔き連れ切りかゝる。

ト軍兵出て切つてかゝる。立廻り。

次郎　ナア、事々しき雜兵輩、一々この世の暇をくれん。覺悟せい。

〽群がる中へ割つて入り、薙ぎ立て／＼切りまくる、その太刀風に木の葉武者。むら／＼ぱつと逃げ散れば、佐々木も上帶しめ直し、太刀のはめきを冷さんと、鎌倉に突つ立つ折柄、矢一つ來つて高綱が、肝の束ねにかつきと立てば、うんとばかりに撞と伏し、果敢なく息は絶え果てたり、誰れが所爲とも白書院、弓矢携さへ悠々と、入り來る北條時政。

ト高綱、矢にて倒れる。眞の時政入り來り

時政　これまで佐々木めに騙られしその返報、稲毛ゝ前司、某によく似たるを幸ひ、佐々木めにあてがひし敵、誠と思ひ本體を現はせし憎て者。和田三浦には先達て、入道が計り事に死したる由、最早高綱只一人と思ひの外、我が矢先に最期を遂げし誠の佐々木、今は大將一本立ち、ヤア／＼ヤア、頼家は何くにある。時政直に向うたり。見參々々。

ト此うち向う戸屋際へ、高綱、簑笠にて、鐵砲を持ち、せり上がる。

〽呼はり／＼奥の方、のさ／＼歩む耳許へ、又もどつさり種が島、悔り仰天振り返る、お花畑の鳥威し、簑笠取つて高笑ひ。

高綱　ハヽヽヽ。イヤ、お騒ぎあるな時政公、近江源氏の嫡流、佐々木四郎左衞門高綱、それへ參つて見參々々。

〽呼はる聲に流石の時政仰天あり。

時政　稻毛の前司に勸められ、深々と入り來り、又も佐々木が術に乘りしか。エヽ、無念やなア。

〽表の方より和田兵衞が、三方携へ立ち出づれば、こなたよりは三浦之助、長柄の銚子携へ出で。

ト和田兵衞、三浦之助出て

三浦　只今城外に於て賴家公實朝公、御兄弟御對面の上、御和睦も相調ひ。

和田　兩將心解け合ふからは、時政公にも異議あるまじ。お喜びのお杯、頂戴あられませう。

高綱　某、方寸の計り事を以て、時政公を城内へ引入れしも、御和睦調へん爲。君一人のお心にて、萬民塗炭の苦を遁るゝと申すもの。御承引下さらば、敵對申せし我れ

我れ、御刑罰に合ふとても、聊か恨みとも存じませぬ。

三人　何卒お聞屆け下さらば、忝なう存じまする。

時政　ホヽ、天晴れ忠臣。某に何の野心。此方よりも、和睦は願ふところぢやわい。

三人　ナニ、すりや御承引。エヽ、忝ない。

ト此うち入道、軍勢連れ出で

入道　ソリヤ。

軍勢　やらぬ。

ト高綱、軍勢、立廻りにて、皆々逃げ入る。入道も逃げうとする。三人にて引挾み

高綱　これまで企みし惡の報い。ソレ、三浦。

三浦　合點ぢや。

ト首ポンと切る。

和田　兩家の不和も讒者の業。

三浦　その惡人は亡びたれば

高綱　この通りを禁廷へ奏聞せん。

皆々　めでたい／＼。この場はお立ち。

ト打出し　　幕

近江源氏先陣館（終り）

南朝延元二年

雪も芳野に 暦奏の採物諷

北朝建武四年

花も平安に 旦朔の神樂唄

蘭奢待新田系圖

二幕

表のカタリは安政三年八月中村座で上演した時のものである。

下の凸版もその時の畫本の一部である。本文中に挿入した錦繪も同じくその折に發行されたもの。

蘭奢待新田系圖

上の卷

生田川の場

役名——新田左中將義貞。黑川軍太。助市女房、おそね。小山田幸內。勾當の內侍。田樂屋助市。

造り物、うしろ黑幕、後に切つて落すと、生田川の遠見、眞中に松の樹、これに矢數多射かけ、所々に軍兵の死骸、鎧兜、長刀、太刀など取散らしある事。上下蘆原、舞臺前、河原の流れ、窓を下ろし、すべて生田川亂軍の體。ドンチヤン、鬨の聲にて幕明く。

ト床の淨瑠璃になる。

〽頃は水無月初め方、野山に照らす遠篝、數千本の旗印、一度に上がる鬨の聲、天地も裂くる如くなり。

トどんちやん、アリヤ〳〵、荒れやうの鳴り物になり、軍兵大勢逃げて出て來り、橋がゝりへ入る。

〽夜目にもそれと芳ばしき、蘭奢の香も類ひなき、新田左中將義貞公、數多の敵を切り散らし、太刀のはめきを冷さんと、暫し逡ひ在する有樣、この勢ひに辟易して、近くは寄らねど數萬の軍兵、大將目がけ八方より、遠矢に射る矢は霰、心得たりと義貞も、佩いたる小太刀拔き放し、一刀に振つて爰かしこ、打ち拂ひ〳〵切り拂ひ、淸さ武者振りや、仁義に堅める御身は楯、矢種盡きれば足利勢、右往左往に押つ取卷き、切つてかゝればしをらしやと、あたるを幸ひ薙ぎ立て〳〵、縱橫無盡に切り立つれば、ざつと逃げ散る木の葉武者、穢なし返せと追つて行く、心も空も東雲に、輝く勇士の龍頭、夜も明け渡る。

ト此うち上手より義貞、龍頭の兜、緋縅の鎧、大將の拵らへにて、拔刀を持ち、戰ひ疲れたるこなしにて、前後に氣を配り出て來る。此うち上下より、差し金の矢射かくる。右手差しを拔き、兩刀にて切り拂ふ事いろ〳〵あつて、また上下より軍兵大勢出て來り、切つてかゝる。義貞、兩刀にて立廻りよろしくあつて、皆々橋がゝりへ逃げ込む。直ぐに後戻りして出て來り、あたりへ思ひ入れあつて領き、兜を脫ぎ、鎧を取つて、

松の木の枝にかけ、こなしあつて、上手へ入る。淨瑠璃の切れに、本釣り鐘を打込み、後の黒幕切つて落し、窓蓋を一時に明ける。

〽惡ぢやなけんど山や川を通りやよ、鎌腰にぬつちやいて、足中をはいてそれより辷るな、すんべる〳〵ずんべるな、生田の川の端五郎太道、しよんがいな。

〽謳ふ氣輕の柴刈りども、通りかゝつて。

トこの淨瑠璃へ鳥笛をかぶせ、上手より柚六、作兵衛太助、五兵衛、輕衫、斧を腰に差し、柴刈りの拵らへにて、柴を脊負ひ

四人　サア〳〵、ござれ〳〵。

ト出て來り、柚六、松の木の鎧を見て

柚六　なんと皆の衆、あれ見やしやれ。あの松に掛けたは結構な鎧さうな。見れば兜も下にあり、こりやマア、わざと捨てたのか、但しはどこぞへ行かれたかいなう。

作兵　イヽヤ、そればかりぢやない。爰にもたんと落ちてあるは、鎧の脫け殼ぢや。

五兵　これを思へば、軍と云ふものは、餘ッぽど鷹揚でなければ、ゆかぬと見えるわいなう。

〽知らぬ中にも知り自慢。

太助　エヽ、五兵衛の何を云ふぞい。今度の軍は、新田と足利、互ひに腹を立て合うて、それから起つたどつさくさ。中でも尊氏と云ふ人は、どうでも強い人かして、鎌倉からこの京へ攻め上り、たうとう新田方を、この比叡山へ追ひ登せ、また昨夜の軍に新田方が負けたかして、大將始め付き〳〵も、此やうに脫ぎ捨てたは、逃げる勝手のよいやうに、みな落ち武者の看板ぢやわいの。

〽後先知らぬ話し口。

柚六　ハアヽ、それで讀めた。おれは又、鎧や兜の土用干しかと思うた。

三人　エヽ、何を云ふぞい。

四人　ハヽヽヽ。

〽どつと笑ひの最中へ、往來人に荷ひ賣り、仕出しの田樂鹽梅よし、豆腐の燒き立て蒟蒻餅、田樂と賣り聲に、腹も幸ひ晝下がり、よかろ〳〵と立ち來り。

ト向うより助市、ぼつとかつら、石持ちの着付け、田樂屋の荷を擔ひ出て來り、直ぐに舞臺へ來る。四人これを見て、捨ぜりふにて側へ寄り

柚六　丁度時刻も鹽梅よし。コレ、田樂屋、爰へ豆腐を二三本。

作兵　貴樣、豆腐かい、おりや、餅にせうかい。
太助　そんなら、わし等も付合ひに
五兵　餅ぢや〳〵。
助市　ハイ〳〵、畏まりました。
〽そこへも爰へも差出す、顏は互ひに知つた同士。
ト助市、荷箱の内より、餅、田樂を出し、捨ぜりふにて持つて來る。皆々受取り、思はず助市の顏を見て
作兵　こなたは幸内どのに勘當しられた、助市ぢやないか。
四人　オヽ、助市ぢや〳〵。
助市　オヽ、こりやアわしが、在所の衆、太助、作兵衞、ヤレ〳〵久しや〳〵……五兵衞、まだ達者かいの。
五兵　イヤ、おれよりは貴樣の親仁、アヽ、今に頑丈な和郎ぢやの。
助市　サイナウ、あの人は元が侍ひ、そこでおれも武士奉公と出かけて見たが、又しくじり、ちいとの間二本差したから、思ひついた田樂屋。彼の新田足利軍場の眞中へ、鹽梅よし餅田樂と賣つて行くと、なにか一日、エイヤツトウに、腹のへつた軍兵ども。
〽我れも〳〵と馳せ集まり、賣る程に喰ふ程に。
助市　なんでも錢儲けの晝ぢやと思ふと、中にも大將分の侍ひが、おれを呼んで。
〽ヤア如何に田樂屋、某が喰ひし餅の代、只今渡さんと思へども、戰場に錢金なし、今日の軍に手柄を顯はし、大國の主とならば、その時キッと算用せん、さらば〳〵と云うたばかり、見知りごしの喰ひ逃げ、催促すれば軍兵どもが、結局おれを取卷いて、やらぬ〳〵と嚇し居る。何しても仇な事はないぞいの。こなさん方も馴染み甲斐、どうぞ親仁に勘當の、詫びの願ひを頼みます。
柚六　オヽ、そりや此方らが云ひ合せ、安定詫びして進ぜませう。
太助　その代りに今の田樂代は
四人　振舞ひにさつしやれや。
助市　ハテ、なんとせう事がない。コレ、隨分今のを頼むぞや。
四人　ハテ、よいわいの。
助市　ほんまに詫びして下されや。
四人　サア〳〵、ゑい〳〵さつサ。
〽柴苅り仲間が一つになり。
追つツけ吉左右。さゝ豆粉。

〽まめでござれと立別れ、我家〳〵へ立歸る。

ト四人、向うへ入る。助市、後を見送り、捨ぜりふあつて、思はず向うを見て、幸内が來ると云ふ思ひ入れあつて、下手の蘆原へ小隱れする。

〽爰に小山田幸内とて、昔の武士も今は早、都の外に身退き、浮世構はぬ侘び住居、釣り竿かたげ悠々と、誠や齊の東門を步み出で、漢陰の里に行いて至ると謡ひしも斯くやとばかり口すさみ、この川傳ひにさしかゝり。

ト向うより幸内、白髮鬘、片入れ着付け、一本差し、浪人の拵らへ、編笠を持ち、釣り竿をかたげ出て來り、花道にて

幸内 アヽ、人心とは云ひながら、この度新田足利兩家の爭ひ。我れも昔にあるならば、錆び鎧にても一ツ提げて馳せ向はん身なれども、世を見限つて我まゝ暮らし、流れに棲み魚を取り、その日を送ると云ふでもなし、只樂しみのこの釣り竿。ハテ、さま〴〵の世の中ぢやなア。

〽一人呟き靜々と、川端近く座を占めて、釣り竿下ろして水の面、幸内見るより不思議の顏色、あたりをキッと打眺め。

ト此うち幸内、舞臺へ來り、釣り糸を浪板の後へ下ろし、水底をキッと見て、合點のゆかぬ思ひ入れあつて、後を見返り、義貞の鎧を見て

ハアヽ、さては噂に違はなく、大將始め士卒まで、爰に捨て置く鎧兜、小手臑當もそのまゝに、取り散らしたる有樣は、齊の宣王は自ら楚の雄兵と戰ひ、修羅場の下に死し給ふ。これはそれに引替り、敵を謀かる新田義貞、十六騎の兵まで、討死したる體に見せ、退いて勝利を知る天晴れの計略。これも偏へに楠の、肺肝より出でしならん。我れ最前より計り見るに、魚水中に躍ると雖も、それに引替へ水底まで、あり〳〵と見えたるは、あの松に掛け置きし、鎧の光りに水底を顯はせしは不思議にて、不思議にあらず、三嵩潜りし川浪へ、名劍を浮べる時は、忽ち干砂になると聞く。それは名劍、これは又、大將の着捨ての鎧、此まゝ置くも。

〽如何ぞと、寄らんとせしが。

イヤ〳〵、町人同然の身を以て、近寄るも壽命の障り、見捨て歸るが一德ならん。

〽立歸らんとする後より、おづ〳〵出づる我が子の助市餘所に見なして幸内が、行く袂に縋りつき。

トこの以前より助市、蘆原の蔭より出かゝり、詞をか

けようとしては云ひ憎きこなし。幸内、助市を見て、知らぬ振りに行きかけるを、助市、幸内の袖に縋り

助市　モシ、親仁樣、勘當御免。

〽平れ伏せば。

幸内　ムウ、勘當の詑びするは、侍ひの性根が附いて、主取りでも致したか。

助市　ハイ、新田方へ有りつきました。

幸内　ナニ、義貞を主に取つたとは、こりや出かした……が、鎧一領身に着せず、この度の軍の供には、なぜ外れた。

助市　サア、その事でござります。心は矢竹に逸れども、鬨の聲、矢叫びの音、聞く度毎に五臟に冷汗。所詮軍の用には立つまじ。足手纏ひと追ひ拂はれ、佇む方もない身の上。侍ひ捨てゝこの後は、百姓か或ひは又、所相應な漁師でも致し、兩親とも樂々と養ひませう。聞入れてたべ、親仁樣、申し〳〵。

〽取り縋り、身の臆病に引かされて、耻もいとはぬ男泣き、餘所の見る目もいぢらしゝ、幸内怒りの聲あらゝげ。

幸内　ヤイ助市、おのれを勘當しつる時、云ひ聞かした事、なんと聞いた。生得未練な魂ひを改め、武士になつて立歸らば、赦してやらんと、おのれが女房おそねを、矢張り嫁にして置くは、誠の緣を切らぬ證據。よい主を取り居つたか。今度の軍のその中にも悴は居らぬか、手柄して歸れかしと、待つ甲斐もなく、のめ〳〵と、主君の敗軍を餘所に見て、命を惜しみ漁師にならん、百姓にならんのと痴言。卑怯とや云はん、腰拔けとや云はん。キリキリそこを立つてうせう。

〽はつたと蹴据ゑて立ち上がる。

助市　左樣でもござりませうが、そこをどうぞ。

　トまた袖に縋り。

幸内　エヽ、見るもなか〳〵、穢らはしいわい。

〽止むる袂を振り切つて、心強くも立歸る。

ト幸内、袖を荒く振り切り、思ひ入れあつて橋がゝりへ入る。

〽理の當然に助市も、あぐみ果てたる折柄に、斯くとはいざや白露の、道が取次ぐ夫婦の緣、幸内が嫁おそね、男の迎ひに息せきと、尋ね來かゝる川岸に、思はず見合す顏と顏。

ト向うより、おそね、世話女房の拵らへにて出て來り、助市と顏見合せ

安政三年九月中村座上演

それ　ヤア、助市さまか。
助市　オヽ、女房どもか。
それ　逢ひたかつた〳〵わいなア。
〽逢ひたかつたと取縋り、後は詞も涙なり。
ト　おそれ．助市に取縋る。助市、思ひ入れあつて
助市　オヽ、懷かしいは道理〳〵。こなたに逢うて面目ない。なんでも武士になつてくれうと、所々方々にありついて見たれど、よう思案して見れば．侍ひの出世は、軍で手柄せねばならず、ひよつと軍に出て、首切られたら土壇から仕舞ひを附けねばならぬ事。侍ひになるは、太平に治まつてからがよい。こんな時に武士になるは、雷見かけて天神參りするやうなもの。どうでも町人と分別極めて、戻つて見れば親仁樣の立腹。頼みと思ふは其方一人、母者人へも、どうぞよいやうに、詫び言してたも、南無喋．
〽如來と伏拜む。
それ　アヽ、これはしたり助市さま、其やうにされては、わたしに罰が當るわいなア。シタガ、どうでもお前が侍ひにならしやんせにや、父御の機嫌は直るまいぞえ。
助市　おやと云うて、この風體．手柄せうにも鎧兜、太刀刀の才覺ならず、素肌武者ではどうも行かれぬ。この儀にとんと困るわい。
〽と夫の案じ、女房も、共に思案にくれ居たる。
ト　兩人當惑の思ひ入れあつて、助市．義貞の鎧に目を附け
助市　オヽ、よい事思ひついた。アレ、あの松の木に掛けてある、鎧兜．小手脛當、幾つ着ようと儘な事、拾うて着ても大事あるまい。
それ　なんの大事がござんせう。主も知れぬこの鎧．人の見ぬうち．サア、ちやつと着やしやんせいなア。
助市　合點ぢや〳〵。
〽足場も松の枝高く、やう〳〵屆く心も空、下には女房が小手脛當、拾ひ取る間に助市が、鎧もろとも落ち兜．着て見さしやんせと立寄つて、心開くる緋縅の、鎧着せたり小手脛當、上帶しやと忍び緒の、またも見交す粧ひは．實に侍ひの子なりける。
ト　此うち助市、松の木に掛けたる鎧を取る。おそれは落ちてゐる小手脛當を拾ひ、助市、鎧兜を着る。おそれも手傳ひ、小手脛當を當てる事あつて
それ　誠によい侍ひ。モシ、ちよつとそちら向いて見やし

やんせ。
助市　オヽ、斯うか。
　ト裏に向いて見せる。
それ　ても、マア、立派な事わいなア。ちやつとこちら向いて見やしやんせ。
助市　ソレ、斯うか〳〵。
　ト又こちら向いて見せる。
それ　ほんにマア、斯うした所は、どう見てもよい大將。
助市　なんと強さうに見えやうがな。
それ　見える段ではござんせぬ。その勇ましいお姿を、父御に見せたら、御機嫌直るは追ツつけ。
助市　早う吉左右を聞かしてたも……返事を待つは伯母貴の所。
それ　必らず待つて居て下さんせえ。
〽心いそ〳〵松による、おそねは別れ急ぎ行く。
　トおそれ、向うへ入る。
〽お痛はしや勾當の內侍、別れ程經し義貞の、行くへ如何にとさまよふ道、ちらりと見しも覺えある。
　ト此うち橋がゝりより勾當の內侍、御臺の拵らへにて出て來り、助市の姿を見て

內侍　ヤア、我が夫か。お懷しう存じます。
〽と聲に悔り助市が、振返つて見合す顏。
ヤア、我が一と思ひの外。
〽こは人違ひ恥かしや。
さるにても不思議なは、この龍頭、緋縅の御着せ長、姿が取つて着せ參らせし、我が夫の御物具。何ゆゑ斯くは着給ふぞや。
〽問はれてぎつくり。
助市　南無三、こりや、早う尻が來た。深い樣子は知らねども、わしが急に入用な事があつて、たつた今、爰で拾うたのぢやわいの。
〽聞いて等しく駈け寄つて、あたりに落ち散る物具も、皆それ〳〵のお目印、御臺はわつと聲を上げ。
內侍　さても由々しき武士の運盡き、弓の矢も折れて、敢へなく討ち死し給ひしか。覺悟の上とは云ひながら、思へば悲しき憂き別れ。いつの世にかは忘るべき。思へば果敢ない御最期ぢやなア。
〽鎧にひつしと身を寄せて、前後も分かず泣き給ふ、ややうに淚を押へ。
今は悔んで返らぬ道、夫に別れこの身をば、なに面目に

長らへん、妾も共に、さうぢや〳〵。
〽帶せし小太刀拔き放し、既に自害と見えけるを、助市押し止め。
ト内侍は懷劍を拔き、自害をせうとする。助市、見て恟りなし
助市　ア、コレ、待つた〳〵……オヽ、そんならお前が勾當の内侍さまか。氣遣ひなされな。義貞さまは死になされぬ。
内侍　エヽ。
助市　サア、譯はわしもちいとの間、侍ひになつて見たがイヤ、モウ〳〵、なんぼ武士でも惜しいは命。滅多に討死がなるものぢやござりませぬ。殊に新田ほどの名將が、なんの滅多に死にませう。マア〳〵、お待ちなされませと、止めますもちつと由縁のこの男。
トこの時、向うにて
軍太　ヤレ、來いやい。
トこの聲に驚ろき、助市、向うを見て
助市　アレ〳〵、向うに數多の人音。暫らくこれへ。
〽薄へ御臺を忍ばす間もあらせず、討手の侍ひ、黑川軍太、手の者引連れ駈け來り。

トこれをドンチヤンバタ〳〵になり、向うより、軍太、陣立て、三枚目の拵らへにて、軍兵大勢附添ひ出て來り、花道にて
〽助市を遙かに見つけ。
軍太　待て〳〵〳〵、家來ども。龍頭の兜を着たは、疑ひもなき新田義貞。ソレ、逃がすな。
〽ばら〳〵と押つ取り卷く、助市、俄に色青ざめ
ト軍太・軍兵、バラ〳〵と舞臺へ來り、助市を取卷く。助市、恟りなし
助市　ア、コレ〳〵、それは大きな人違ひ。外を御詮議なされませ。
〽と云はせも立てず。
軍太　ヤア、云ふな。譬へなんと云ひ譯しても、遁がれぬ證據は龍頭。この緋縅の鎧が目印。ソレ、者ども、生け捕つて手柄にせよ。
皆々　心得ました。
〽大勢寄つて助市が、手取り足取り引き廻し。
ト軍兵寄つて、助市を仰向けに引き倒し、軍太、顏をよく〳〵見て、恟りなし
軍太　ヤア、こりや何ぢや、新田ではない、にた山め……

エヽ、何でもない奴にかゝつて、内侍めを逃がした。家來參れ。

〽行かんとするを、向うへ廻つて顔眺め、

ト軍太、行かうとするを、助市、顔を見て、

助市　ヤア、こなたは昨日の田樂の喰ひ逃げ、逃がしはやらじ。

〽逃がしはやらじと取りつくを、蹴やり蹴飛ばし駈け行く軍兵。

トこの淨瑠璃へドンチヤンをかぶせ、助市、留めるを、軍太は突き退け、軍兵附添ひ、向うへ走り入る。

助市　ヤア、穢なし返せ、喰ひ逃げども、餅の代が十六文田樂が三十二文。

〽返せ戻せと罵れども、空吹く風と。

アヽ、そウ逃げたか……サア〳〵、この間に早う御臺樣。

〽落ちさせ給へと御手を取り、伴ひ出づれば。

ト助市、蘆原の後より、内侍の手を取つて出る。この時下手より幸内、出かゝり居て

幸内　助市、待て。

〽聲をかくるは父幸内。

ト幸内、前へ出る。

助市　さう云ふお前は親仁樣。待てとは、勘當お赦しあつてか。

幸内　オヽ、勘當赦されたくば、幸内にわが命をくれい。

助市　エヽ。

幸内　コリヤ、なに驚ろく事がある。身が云ふ事をよつく聞け。最前追手の奴輩が、汝が着たる鎧を見て、義貞と見違へしは、勘當、赦され時。御謀計略ぬかりなき名將なれども、時の變にて千に一つ、やみ〳〵と、討死あらば、都方の、柱絶え果つる大切のお命。忠義を立つるは今日只今、物具を其まゝに戦場に打向ひ、足利勢に割つて入り、新田左中將義貞と名乘り、潔よく討死せよ。

助市　アノ、左樣に致したら、御勘當をお赦しなされて下さりまするか。

幸内　その時は幸内が悴、命を惜しまば猶々勘當。

〽父の詞に是非なく〳〵。

助市　聞き分けました、親父樣、成る程命捨てませう、

幸内　オヽ、出かした。よく云つた。五十餘年を暮すは夢、義貞の身代りに、死したるその名は千萬年、これぞ誠の長生なれ。深山の木々は紅葉して、散るゆゑにこそ惜しまるゝ。死するとも未練の最期をすな。生きて歸らば七

〽生までの……ナ、心得たか。

〽諫めの詞、嬉し涙を押拭ひ。

助市　その仰せを聞く上は、我が討死も背かぬ道、時刻移れば、早おさらば。

〽勇む助市、萎れぬ幸内、御臺も開くる襠襴の、下より出す錦の直垂。

ト内侍、裲襠の下より、直垂と黄金造りの太刀を出し

これこそ夫が形見の太刀、直垂もろとも軍の餞別、冥途の晴れ着。

〽渡せば取つて押戴き

ト二品を受取り、思ひ入れあつて

助市　仰せに隨ひ、討死の、場所は卽ち粟田口。

幸内　義貞の首討ちしと云はゞ

助市　親仁樣、御褒美には、勘當赦すと只一言。

幸内　云ふにや及ぶ。

内侍　とは云へ、あたら若者を

幸内　殺しにやるも忠義の道。

助市　左樣ならば親仁樣。

幸内　急ふれ、忰。

助市　ハツ。

〽消え行く水の粟田口、引別れてぞ。

ト助市、花道まで行き

さらば。

〽急ぎ行く。

トこれへドンチャンをかぶせ、助市、一散に向うへ走り入る。幸内、内侍は後を見送る。この見得よろしく　幕

下の巻　幸内住家の場

役名――小山田彌太郎實ハ新田左中將義貞。小山田幸内實ハ備後三郎高德。雛の君。彌太郎女房、磯浪。助市女房、おそね。幸内女房、露芝。勾當の内侍。田樂屋助市實ハ妻鹿孫三郎。

造り物、高足、本緣附きの二重。藁屋根、鼠欄間。上手、障子屋體、襖通り石摺りの襖、後に引抜くと、うしろ丹波路の山の遠見になる。下手後へ下げて鼠壁、物置きの横手、この前、松の立ち木、稲村、藪

疊、いつもの所に藁屋根の門口、すべて脇の濱、幸内住家の體。二重に露柴、母親の拵らへにて、俎板を前に置き、大根を刻み居る。下手に前幕のおそれ、椀を拭き、膳拵らへをして居る。この見得在郷唄にて幕明く。

ト床の淨瑠璃になる。

〽その昔、武具を納めし名を殘す、兵庫に備る脇の濱、小山田の幸内が、世を樂に住む佗び住居、妻も流石は武士の果て、夫婦の仲も堅地椀、刻む鱠の白髮まで、世帶に世話を燒き物の内輪の祝儀、水入らず、膳立てしながら嫁のおそれ。

トこれを在郷唄の合ひ方になり

それ　モシ、母樣、今朝父樣の連れ立つて、お歸りなされた女中さん、ありやどこのお方でござんすぞいなア。

露柴　サイナウ、わしも知らぬが、親仁どのゝ昔のお主と云ふやうな事さうな。お氣もじ惡いかお食も進まず、夕御膳は日が暮れてからと仰しやる。マア、それまでに誕生の祝ひ、祖父殿にも据ゑたがよい、晝寢の夢の今が最中、目の明くまで待たずばなるまいわいなう。

それ　さうして母樣、今日の誕生と仰しやるはえ。

露柴　これはしたり、餘所々々しい。其方の夫の助市が、誕生日を知りやらぬかいなう。

それ　サア、存じて居りますけれど、勘當なされたお子の事、父樣が叱りはなされまいかと。

露柴　ナンノイノ、あの助市を勘當したには譯のある事。親仁どのは筋目の侍ひ、世に諂らはぬ生れつき、主選みして奉公せず、年寄つての今の後悔、我が子を武士に仕立て、苗字を引起したい望みなれど、どうした事やら武藝が嫌ひで、高い聲にも悸りする弱い生れつき、武家方へ奉公に行つても〳〵戻つて來る、所詮親の内があるからぢやと、懲しめの勘當、侍ひになつて戻つたら、そこでこそ眞の親子、緣切つて切られぬ證據には、嫁の其方を云なさずに、出世して歸る日、今日や明日やと待つて居れど、幸内どのは侍ひ氣。この母は女子の事。口へこそ出さねども、片時案じぬ日とてはないわいの。

〽涙ぐみたる姑の、詞は詫びの手かゝりと。

それ　モシ、母樣、そのお慈悲深いお心に甘へての一つの願ひ。助市どのは昨日、戻られましたわいなア。

露柴　ナニ、助市が戻つたとか……さうしてアノ、侍ひになつてか。

それ　イヽエ、矢張り有つきの口が無いと泣いてばかり：
：これと云ふも孝行な氣から、親御の事が苦にたつて、兎角お側に居たいが病ひ。詫び言してくれと、女房のわたしに、手を揃つての願ひ言。どうぞ御料簡遊ばして、お戻しなされて下さりませ。
〽と云ふに力も投げ首し。
露柴　そりやモウ、其方が云はいでも、わしが産んだ忰ぢやもの、戻したいは山々なれど、堅むくろな幸内どの、詫び言はして見ようが……さうして助市は、どこに居るぞいなう。
それ　サア、わたしが伯母様の所に、待つて居さんす筈なれば、最前も行つて見たれど、まだ見えぬげな。友達衆の所にか、尋ねても來たし、次手に氏神様へも參つて、父さんの御機嫌直るやうに、お願ひ申して參じませう。
露柴　オヽ、それ／＼、わたしも助市の、まめな顔がちよつと見たい。そんなら大儀ながら呼んで來てたも、その間に隨分詫びして見ようわいの。
それ　そんなら、わたしはちよつと行て參じませう。
　ト云ひながら、門口へ出るを
露柴　シタガ、コレ、嫁女、構へて此やうに、甘う云うたと云やんなや。
それ　ハイ、そりや、よう合點して居りますわいな。
露柴　そんなら嫁女。
それ　姑御様、ドレ、行て來うか。
〽逢ひたい見たい心は一つ、願ひを深く神かけし、褄引繕ろひ出でゝ行く。
　トおそれは、イソ／＼して、向うへ入る。
〽隱居の間にしはぶき聲。
　ト上手障子屋體の内にて
幸内　お婆／＼。
〽と云ひつゝ出づる主幸内、母は見るより。
　トこの淨瑠璃にて、障子屋體より、幸内、眼鏡をかけ、讀みさしの本を持ち出て來る。
露柴　オヽ、幸内どの、いま目が覺めたかいの。
幸内　イヤモウ、年寄れば根がない。平家物語の讀みかけ讀むうちに、思はず知らず、眼鏡かけて寢入つたは、駕籠に乗つて、山上參りしたやうなもの。ナウお婆。
露柴　ほんに、さうぢやわいなう。
　ト兩人顔見合せ
ホヽヽ。

幸内　ハヽヽ。
〽と皺に笑顔の睦じ仲、
して、御臺樣には御機嫌よいか。必らず端近う出します
な。最前から料理拵らへ、お客人があるなどゝ、目に立
つては一大事、ちと量さびにしやれいの。
露柴　イヤ／＼、それはぬかりはしませぬ。この料理拵ら
へは、氣に入るまいが知らねども、今日は勘當された助
市が誕生日、蔭の膳でも据ゑたさに。
幸内　なんぢや、助市が誕生の祝ひぢや。勘當した悴に、
なに祝ひ所。ごくにも立たぬ事ばかり。
露柴　サア、そこぢやわいなう。こなさんも憎うて追ひ出
しもなされまい。好い主取つて手柄して、出世さしたさ、
慈悲の勘當。我が子の心勵ます爲と、可哀や酷う辛う云
うて、追ひ出したれど、その晩から夜の目も合はず、ど
うか斯うかと案じるは、わしばかりぢやない、こなさ
んも、追ひ出した後影、送つて、ホロリと泣かしやんし
たは、可愛い證據。武士は取分け身祝ひが肝心。何はせ
いでも鰯鱠、燒き物がなかつたゆゑ……コレ、見やし
やんせ、よい物を買うて來たわいの。
ト籠に入れし鯔を取つて

この鯔と云ふ魚は、江鮒から段々に出世する魚、助市も
鯔にあやかつて、よい侍ひになる吉祥……祝うてこなさ
んも、坐てやつて下されいなう。
幸内　ムウ、如何にも悴助市が出世を、例へて見ればこの
鯔。すべて魚と云ふものは、生きて居るうちは賤ない物。
漁師の網にかゝつて、命を取られた上でこそ、貴人高位
に賞翫せらるゝ。これを魚の出世と云ふ。侍ひも先ツ
その如く、出刃庖丁の刃にかゝり、腹を切つて燒かるゝ
か、又は首を切らるゝか、それが武士の立身出世……思
へば悴は、この魚に。
〽あやかつたかと目に浮かむ、涙紛らす讀みさしの。
トちよつと愁ひの思ひ入れあつて、本を取上げ
ほんに、年は寄るまいもの。目が霞んでならぬわい。
〽目を擦りこする。
ト涙を紛らす思ひ入れ。
露柴　おとましや。あれ、事云ひ出すと、其やうにあちら
向いてばかり……氣に入らずと大事の誕生、今日はニッ
コリ祝うてやつて下され。ドレ、拵らへて進ぜませう。
〽と立つを引留め。
ト立ちかゝるを

幸内　コレ、お婆、浪人こそしたれ、幸内は侍ひ、其方も侍ひの女房ぢやが、合點か。

露柴　ハテ、知れた事を云はしやる。貧しい世渡りはして居れど、わしも武士の娘、こなさんに連れ添ふからは、侍ひの魂ひを、なんの忘れませうぞいの。

幸内　ムウ、その詞に違ひなくば、悴助市に逢はしてやらう。

露柴　ムウ、そんならこなさん、逢はしやんしたか。

幸内　オヽ、勘當も赦して、連れて戻つた。逢うてやりやれ。

〽と立ち上がり、開く佛間の兼ねてより、位牌の墨のかすり文字。

ト幸内、障子屋體へ入り、白木の位牌を持ち來り

忠死利劍信士、俗名助市二十三才……ハヽ、ツ、出かし居つたなア。

〽と半分聞かず。

露柴　エヽ、そんなら助市は死んだのかいの。

〽わつと泣く聲。

幸内　それ／＼／＼、お婆、侍ひの魂ひを失はぬと云ひながら、その涙。未練至極な、武士の女房忘れたか。

露柴　なんの忘れてよいものかいなう。

幸内　忘れずば、なぜ泣くぞ。

露柴　アイ。

幸内　泣くな。

露柴　アイ……もう泣きやせぬ、泣きやせぬけれど胴慾な、こなさんばかり合點して、どうした譯で死にました。侍ひらしい死をしたか。もしや無駄死ではなかつたかいの。

幸内　コレ、お婆、そりや何云ふぞい。無益の事に子を殺す親があらうかいの……淸和源氏の嫡流、新田左中將義貞と、名乘つて討死すれば、君の爲、天下の爲……ア、幼少から氣の弱い生れな奴、所詮生きてお役に立つ事は叶はぬ。潔よう死ね／＼と、往生づくめに追ひやつたれど、侍ひぢやとて、子の可愛さに、なんの違ひがあらうぞ。せめて佛にしてやりたさ。頼み寺の和尚を頼み、位牌にして戻る時の、親の心を推量せよ。産み落すから今日まで、おのれやれ出世させ、一ヶ國二ヶ國の、主ともなさんものと、思うてこそ育てもすれ、討死させて獄門に、曝さうとて育てようか。思ひ切つて死に行つた、その潔よさを見る時は、滿更武士の魂ひが、生れついて無

いではない……ア、、少さい時から、千切れ具足も着習はせ、瘦せ馬に乘らせたらなア、弓取りの數にも入るべきに、浪人のこの幸内が、鋤鍬の中で育てしゆゑ、腰拔けに仕立てたは、矢ッ張りこの親が惡さ。

〽免してくれよ助市と、叱りし夫も取亂し、前後不覺に見えければ、母も淚の顏を上げ。

露柴　その一言は助市が、百萬石の出世よりは、嬉しうて嬉しうて、微塵さら〳〵、未練に泣く氣はないものを、わしに云うたら邪魔せうかと、隱し包んで、健氣の最期の武者振りを、一目見せて下されぬ。これほどつかりが恨めしい。誕生日が命日に、なつたとは夢にも知らず、靈供に供へるこの膳に、生魚を据ゑると云ふやうな、こんな弔ひがあるものかいなう。

〽位牌を抱きしめ、母が、ばら〳〵髮の云ひ甲斐なき、生き過ぎし身を恨み泣き、やう〳〵心押し鎭め。

わしとした事が、侍ひの女房を忘れて、ツイまた泣きました。討死したは武士の出世。

幸内　お婆、水なと手向けてやりやれ……南無阿彌陀佛。

〽佛間へ。

ト送りにて、幸内、先に位牌を持ち、露柴附き添ひ、上手へ入る。あと本釣り鐘。

〽立つや老いの波、哀れ暮れ添ふ鐘の音、黄昏分かぬ軒のつま、武士の妻とは一目にしるき、鬢の白妙、黒どんの、奴が手ふる松の木雛、柴の戸口に立ち休らひ。

ト此うち向うより、礒浪、片はづし、裲襠衣裳、奧方の拵らへ、後より陸尺二人、切り棒の乘り物を舁き、供廻り大勢附き添ひ、出て來り、門口にて思ひ入れあつて

礒浪　山中の一つ家、幸内さまのお住居は爰さうな。供廻りには、暫らくあれにて休息しや。

供廻　ハア、。

ト乘り物をよき所へ舁き据ゑ、供廻り皆々橋がゝりへ入る。

〽小腰かゞめて差覗ひ。

ト礒浪、思ひ入れあつて

礒浪　ちとお賴み申し上げます。幸内さまのお屋敷は、こなたでござりまするか。

〽訪なふ聲に念佛をやめ。

ト此うち始終障子屋體の内にて、鉦を鳴らす事あつて、幸内、行燈を提げて出て來り

幸内　此あばら家の侘び住居、お屋敷と尋ねて來たは、以前の武士を知つた人。

〽何人なるぞと訝かしながら。

ト合點のゆかぬこなしにて、門口を明け

幸内宅は卽ちこの家。見れば麗々のお女中。何は格別、先づ／\これへ。

磯浪　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

〽内へ入るさの宵月に、戻るおそれが門の口、誰れぞと怪しみ立ち聞けば。

ト磯浪、思ひ入れあつて、内へ入る、この淨瑠璃のうち、向うよりおそれ、出て來り、内へ入らうとして、磯浪を見て、合點のゆかぬ思ひ入れにて、門口にて後へ小隱れする。磯浪、思ひ入れあつて、

幸内さまは、あなたでござりまするか。餘り／\お懷しさ、これまで尋ねて參りました。イヤモシ、舅御樣、わたしはお前の嫁でござりますわいな。

幸内　ヤ、たんと仰しやる。見ればばうづ高い武家方の女中樣、この在所親父を舅御樣、嫁と聞いても、讀めぬ／\

磯浪　成る程、ついにお目もじ致さねば、御合點の參らぬ筈。わたしはお前のお子、彌太郎どのに連れ添ふ、磯浪と申す者。夫彌太郎どのは、八つの年から家出して、それより方々流浪のうち、申し交して夫婦となり、時がな來れ立身して、お喜びのお顏が見たいと、朝夕祈つた甲斐あつて、夫も只今は、よい主取りを致されしが、二十年近う音づれせぬ、不孝の科をお赦しあり、悴よ嫁よとお詞下され、お宮仕への身の願ひ。お聞き届け下さりませうならば、有り難う存じまする。

〽身を裲襠の願ひ言、眞實見えて一間より、妻も立出で

ト障子屋體より露柴、出て來り

露柴　ヤレ／\、珍らしや、親仁どの、以前の子、彌太郎のお内儀ぢやの。わしは幸内どのゝ後添ひ。ついに逢うた事はなけれども、血こそ分けね親子の仲、逢いたうてならなんだが、出世とは、ア、、めでたい。ちやつと逢はして下されいなう。

磯浪　そんたら、お逢ひなされて下さりまするか。それはお嬉しう存じまする……サア／\、早うお出なされ、我が夫彌太郎さま。

〽聲に隨ひ立派の骨柄、故鄕に飾る錦の袖、白木の首桶弓手に掻い込み、父が前に謹んで。

トこの淨瑠璃にて、乗り物の内より彌太郎、好みの鬘

衣裳、長上下、大小の拵らへにて、首桶を抱へ出て來り、内へ入り、平舞臺下手に住ひ

彌太　恙なき御尊顏を拜し、我れらが大慶、この上なし。

〽平れ伏せは、幸内もにこ／＼顏。

幸内　ホヽウ、珍らしや彌太郎、無事であつたな。七つ八つの時には、世話に云ふ七里とやら。手に合はぬ短氣者、折檻したを憤り、家出して行き方知れず。此方、器量ある奴、成人せば一廉の、侍ひになるべき者と、獅子の子の例しを思ひ打捨てしが、目鏡に違はず、さて／＼健やかに生ひ立ちしな……して、先づどなたへありつきしぞ。

彌太　ハヽア、某が主人と申すは、忝なくも足利治部大輔尊氏公。

幸内　ナニ、アノ尊氏に。

ト思ひ入れあつて

ハテ、よい主を取つたなア。

彌太　先づ親人、お喜び遊ばせ。イヤハヤ、尊氏公は古今の名將、新參の我れらお見出しにあづかり、昨夜の合戰に高名を顯はさば、大國の主となす印とあつて、御覽下され。

ト懷中より二ツ引き兩の紋つきし白旗を出し

二つ引き兩の御旗を、下し賜はる身の冥加、何かな手柄と存ずる矢先、運に叶ひ、身に過ぎたる功名いたし、只今戰場より歸りかけ、久々の親子の對面、軍出立ちも如何と存じ、鎧兜を上下に改め、取敢へず推參仕つてござりまする。

幸内　ハテサテ、それは入らぬ遠慮。とてもの事に花々しい、鎧振りを見しやらいで、身に過ぎた手柄とは、大將分の首でも取つたか。

彌太　イヤ、大將も大將、鬼神と呼ばれし敵の惣大將、新田左中將義貞を、討ち取つてござりまする。

〽聞いて慄り。

幸内　ヤ、なんと、新田を討ち取りしとな。

露柴　アノ、こなたが義貞を。

ト兩人ちよつと顏見合せ

幸内　ハテ、天晴れな手柄を致しなア。

〽云ひながら、胸に當りし我が子の身の上、奥に立ち聞く勾當内侍、樣子如何にと差覗く。

トこの時、正面の襖を明け、前幕の内侍、樣子を窺ふ。幸内、これを見て、彌太郎と顏見合せ、ギックリ思ひ

〽入れあつて

〽楔をびつしやり。

ト楔を立て切る。

彌太　親仁樣、今のは何でござりまする。

幸内　餘り潔よき話しに、思はず力んでハヽヽヽ。して義貞を討つたは、そりやいつの何時に。

彌太　則ち今朝の合戰に。

幸内　アノ、今朝の軍にや……ムウ。して、その義貞の年の頃は幾つばかり。

彌太　されば、二十二三と相見え、名ほどにもなき小兵の男。昨夜の亂軍に引き兼ね、細川定禪が手の者に取圍まれ、雜兵に紛れ、落ち失せんと思ひしが、馬にも乘らず。

〽只一騎にて落ちて行く、所は生田の小松原。幽かに誰れとは知らねども。

スワよき敵と見るよりも。

〽穢なし返せと呼ばつて、よツ引き兵と放つ矢に、膝の口をのぶかに射られ、よろめき平砂にかつぱと伏し。

叶はじと思ひけん。

〽むつくと起きて大音上げ、都方の忠臣淸和源氏の嫡流、新田左中將義貞が、最期の樣をこれ見よと、高紐切つて解かんとす。

幸内　して／＼、潔よく腹切つたか。

彌太　されば、切腹と見えたる所を、某得たり賢しと、走りかゝつて取つて引伏せ。

〽首搔き切つて捨てたりしが。

よく／＼見れば、紛ひなき龍頭の五枚兜、源氏の大將義貞ならで着るべき者なし、我れながら天晴れの功名。首はこの首桶に、持參仕つてござりまする。

〽始め終りを物語り、聞く母親は堪り兼ね、なう懷かしや死顏を、一目見せてと取りつく母を、幸内取つて突き退け。

ト彌太郎、物語りよろしくあつて、首桶を幸内の前へ持ち行く。露柴、首を見ようと寄るを、幸内、とめる事あつて

幸内　首實檢も濟まぬうち、我れ／＼が見るは憚りあり、殊更お身は、涙脆い生れつき。身にかゝらぬ他人なれど、死骸を見て愛しやなどゝ、涙をかけては出世の妨げ……コリヤ、この首桶の、大事の忠義が無になるがや。ハ、ア、さるにても悴。

〽出かしたなア。

如何なる分捕り功名も、この首に勝る忠義があらうか。
それこそ武士よ、弓取りよ。
〽手柄者、孝行者、子ゆゑに親も名を揚げると思へば。
嬉し涙がこぼれるわいやい。
〽胸を張り裂く愁嘆を、我が身の事と夫婦が喜び。
磯浪　彌太郎どの、聞かしやんしたか。父御様の今の褒美
有り難いと申しませうか。いよ／＼これから二人して、
御大切に致しましせう。
〽心いそ／＼笑ひ聲、門に始終を洩れ聞くおそれ、餘所
の手柄の羨ましさ、接穂なければ揉み手して。
トこの以前よりおそれ、藪疊の蔭より出て來り、門口
に様子を聞いて居て、この時、内へ入り
それ　これは、マア／＼、おめでたい様子。あれから聞い
て居りました、わたしはおそれと申しまして、お前の弟
嫁でござりますわいなア。
磯浪　オヽ、これはしたり、彌太郎さんの弟御に、助市さ
んと云ふ者があると、常々聞いて居りましたが、そんな
らお前が、お連合ひであつたかいなア。わたしとは相嫁
同士、今から仲よう致しませう。
それ　サア、その仲ように付きまして、夫助市どのは父様
の御勘當、こんなめでたい折柄に、こなた方にあやかつ
て、次手に勘當お赦しなされて下さつたら、兄御様と兄弟
御一緒に、兄嫁御、弟嫁、打揃うて、御孝行が申したい
お願ひ。御機嫌の直るやうに、お執成しを頼みまする。
お情、お慈悲、お二人を、神様とも佛様とも、共々にお
詫びを、どうぞ父様へ。
〽お詫び／＼と手を合はせ、拜んで廻る佛より、夫は佛
になつたとも、知らぬ不便さいや増り、母は涙にくれな
がら。
露柴　コレ、おそれ、親仁どのの機嫌は、疾に直つてある
わいなう。
それ　そんなら、お赦しなされて下さりまするか。
幸内　オヽ、助市が勘當は、たつた今、赦したぞ。
それ　それはマア／＼、有り難うござりまする。これと云
ふも氏神を祈つた印、あんまり嬉しうて／＼、胸がダク
ダク落ちつかぬ。早う聞かして喜ばしたい。こちの人は
何をして居さんす。ドレ、一走り見て參じませう。
〽と行かんとするを。
幸内　ア、コレ、待ちや／＼。もう尋ねずと、よしにしや。
勘當受けても親の内、まだ家の棟は離れまい。どこぞ爰

らに、うろついてがな居やうぞいの。

それ　イエ〳〵、伯母様の所に待つて居ると云はしやんしたが、面妖な、よもや外へは。もう追ッつけ様子を聞きに歸られませう。これと云ふも兄御様が、お出でなされて下されたお蔭。此やうな嬉しい事はござんせぬわいなア。

〽門を眺めつ禮云ひつ、喜ぶ程猶兩親は、はたと塞がる胸の闇、肉をしめ出す涙なり、かゝる思ひの折柄に、助市は義貞の、身替りと思ひ立ちながら、生れ附いたる未練者、俄かに命おし鳥の、女房に心うしろ髪、鎧かたげてすご〳〵と、歸る我が家の門の口、おづおづ覗くをおそれは見るより。

ト此うち向うより、前幕の助市、枴の先に鎧兜を括りつけ、これをかたげ出て、門口へ來り、入り兼ねる思ひ入れあつて、内を覗く。おそれ、助市を見て

それ　オヽ、こちの人、戻らしやんしたか。最前から待ち兼ねて居たわいなア。父御様の御機嫌が直つてな。

助市　なんぢや、親仁は内にか。ハアヽ、悲しや。

それ　これはしたり、なんの悲しい事がござんせう。勘當赦すと云うてぢやわいなア。

ト助市を無理に内へ入れ

ハイ、こちの人が、歸られましてござりまする。

〽と聞いて恟り。

ト幸内、露柴、助市を見て恟りなし

露柴　親仁どの、助市が戻つたわいなう。

幸内　ヤ、誠に矢ッ張り助市め。

助市　親仁様、面目次第もござりませぬ。

〽俯向く夫浮き立つ女房、知らぬが、花嫁彌太郎も。

彌太　これは〳〵、今まで逢はぬ我が弟、對面いたさう。イザ〳〵これへ。

それ　コレ、こちの人、あなたはお前の兄御様、祝うてめでたうお杯。

〽と云へどしよげ鳥羽脱け鳥、父は顚倒立居もそぞろ、首桶に手をかくれば

ト幸内、首桶を明けようとする。彌太郎、刀にてキッと押へ

彌太　親仁様、こりや、なんとなされまする。

幸内　イヤ、ちよつとこの中を。

彌太　イヤ、罷りならぬ。大將の實檢も濟まぬうち、親人でも見せられぬ。それとも是非御覽じたくば、某もこの

一間の内を、ちよつと拜見し
〽立寄る襖をしつかと押へ。
ト彌太郎、刀を持ち、立ち上がらうとするを、幸内、
襖を押へ
幸内　親の内でも寢間帳臺、母が着類の置き所、明けるは
不躾し
彌太　ムウ、大内小袖のこうとう模樣。
幸内　ヤ。
彌太　サ、詮議の糸を見つけたからは、殊によつたら親子
の縁の綻び口。ゆるりと吟味仕らう。女房、來い。
〽引立てゝ、首桶携へ奥に入る。
ト彌太郎、首桶を抱へ、礒浪、附き添ひ、障子屋體へ
入る。
〽内侍は一間を轉び出で。
ト奥より内侍、走り出て來り
内侍　委細の樣子はあれにて聞く。思へば果敢なき御最期
おやなア。
〽かつぱと伏して泣き給ふ、幸内突立ち助市が、髻摑
んで引据ゆれば、また御機嫌が損ねしかと、取りつくお
それを突き退け、突き退け、打ち叩かれても一句も涙。

ト幸内、平舞臺へ下り、助市の髻摑み、打ち据ゑる。
助市　親仁樣、御尤もでござりまする。覺悟して行て見
たれど、どうも命が惜しうなつて、女房や母者人にも、
一度逢はうかどうせうと、行きつ戻りつ隙取るうち、何
者やら義貞どのを討つたと聞いて、いつその事、死なぬ
覺悟に胴を据ゑ、歸りましてござりまする。
〽歸りましたと聞くに猶。
幸内　エヽ、畜生め、獄卒め。日本の名將新田どのを、や
みやみと討たせ、内侍さまの在所まで、見附けられたも
おのれゆゑ、褒め損なうたる恥曝し。ごくには立たずと
我が前で、キリ／＼腹を切り居らう。
〽脇差取つて投げ出せば。
ト幸内、脇差を助市の前へ投げ出す。助市、恟りして
助市　エヽ、そんなら、どうでも死ぬのでござりまする
か。
〽うろ／＼眼、見苦しさ、見兼ねておそれが我が咽喉へ
ぐつとさしもの幸内夫婦、恟りしなが　助市も、側へは
得寄らず氣をひやす、夫には目もやらず。
トおそれ、脇差を拔き自害する。露柴、幸内、恟りな
し、捨ぜりふにて、おそれを介抱する。おそれ、苦痛

の思ひ入れあつて

それ　父様、母様、お願ひでござりまする。助市どのが今死なれましても、お役に立たねばほんの犬死。差當つたこの難儀は内侍さま。不束なこの顔でも、代りになるなら夫の手にかけ首討たせ、それでどうぞ堪忍して、助けて進ぜて下さりませ。生れ附いて、氣の甲斐ないのが主の越度。侍ひにせうと仰しやるも、立身出世をさせたさではござりませぬか。腹切つて死ぬのが出世なら、侍ひにならいでも大事ない。

〽矢ツ張り仕馴れた柴刈りして。

外の女房を持たずに。

〽まめで長生きして下されと、わつと叫べば。

幸内　ナウ嫁女、その健氣さを百分一、あの助市にやりたいわいやい……コリヤ倅、今のおそれが詞を立て、女房に心殘さず、首討つがせめて詫びの種、思ひ切つて介錯せい。

〽差出す刀押し戴き。

ト刀を差出す。助市、受取り

助市　さりとてはおそれ、いつの世に、この恩を報ぜうぞ。女房とは思はれぬ。命の親の其方を殺すは、なんぼうか悲しけれど、それでもおれは死にともない。

それ　オヽ、出かしやんした。サア／＼、ちやつと首切つて下さりませ。

助市　オヽ、心得た。

幸内　サヽ、早く切らぬか。

助市　ヤア、そんならやらかしませう。

〽おづ／＼立つて、切らんとしたる一間より、さつと薫るは蘭奢待、助市は不審の思ひ。

傳へ聞く、漢の沛公座する所に、紫の雲氣立つたる例し。今この屋根に怪しき人氣、貧家に似合はぬ蘭奢待の名香の、匂ひは必定新田義貞、この家にあること疑ひなし。

〽云ふより早く内侍が首を打ち落し、其まゝ抱へ一散に飛ぶが如くに駈けて行く。

トこの淨瑠璃のうち、薫りの香を内にて焚く。助市、不審の思ひ入れあつて、内侍の首を討ち、橋がゝりへ走り入る。これをドンチャン、遠攻めになる。

〽こは狂亂の仕業かと、呆るゝ折しも寄せ手の太鼓。

ト幸内、向うを見て、キッとなり

あの攻め太鼓は敵の伏勢。さては倅助市は、尊氏に奉公せしよな。何にもせよ味方の大事。

それ　エヽ、そんなら、こちの人は、お前とは敵同士か。
ハアヽ。
〽はつと手負ひが絶入る息。
　ト おそれ、落入る事。
幸内　エヽ、そこどころか。新田の身の上氣遣はし。心得がたきは奥の一間、この由を、オヽ、さうぢや。
〽老人ながらも勇氣の幸内、奥の間さして
　ト 三重にて道具ぶん廻す。
　造り物、三間の高二重、本緣つき、藁家根、鼠欄間。上手、障子屋體、襖通り石摺りの襖、後に引拔くと、うしろ六甲山、所々に旗幟、吹拔きの書割りの遠見になる。日覆より松の吊り枝。下手後へ下げて矢張り六甲山續きの書割り。松の立ち木。いつもの所に藁屋根の門あり、前側障子立て切り、道具納まる。
　ト 床の淨瑠璃になり
〽行く空の、雨さへ時は宵も過ぎ、はや初夜告ぐる鐘の音も、無常を示す庭の面、締めし伏家の奥の間に、人靜まつて物淋し、折しも息せき幸内は、こなたより立ち出でて。

　ト 此うち橋がゝりより、以前の幸内出で
幸内　ヤアヽ、新田左中將義貞公に、見參仕らん。
〽呼はつて、障子明くればさし薰る、香に聞えし名將の首に手向けの蘭奢待、悠然と座を占め給ひ
　ト 此うち障子明くと、義貞、鎧兜、采配を持ち、床几にかゝり、前に首を置き、其また前に、卓の上に香爐に蘭奢待を焚き住ふ。
義貞　ヤア、騒がれな幸内、敵方の伏勢ありと見しゆゑ、姿を變へ、彌太郎と名乘り來る某を、新田左中將義貞と、貴殿も初めより知りつらん。尊氏が軍兵、如何ほどありとて恐るゝに足らず、氣遣ひは無用々々。この首こそは貴殿の子息、即ち助市が兄の彌太郎、小山田太郎高家と名乘つて、我れに仕へし忠義の武士。一旦不興の云ひ譯に、求女塚にて我が身に代り、腹切つて相果てたり、敵に首を渡さじと、わざ／＼これまで持參せしは、せめて死顔に對面させたさ。蘭奢待の名香を、手向けの燒香、冥途の餞別、跡弔はれよ。
〽渡し給へば涙もかけず。
幸内　お志しは有り難けれど、これしきの事にかゝつて、斯やうの所へ輕々しくお出であり、敵の勢に取卷かれ、

命を失ひ給はんは、大將の身持ちに似合はぬ似合はぬ。

義貞　ホヽウ、尤もの不審。義貞これへ推參せしは、一應の事ならず。雛の君のお迎ひに參つたり。イヤ、隱されな幸内どの、守るとは思はじながら小山田の、徒らになき案山子なりけり、案山子の姿に君を守護し、隱まひ置かれし忠義の心底。ハアヽ、實に誠、時に范蠡なきにしもあらず、備後三郎高德どの、お手柄の程感じ入る。ヤアヤア、雛の君を伴ひ奉れ。内侍々々。

ト呼ぶと内にて

内侍　ハアヽ。

ヘハッと答へて勾當の内侍、姿改め、靜々と、立ち出づる。

ト内侍、子役の雛の君を連れ、上手障子屋臺より出る。

幸内　ハア、御大將の目星の如く、尤も至極に存じまする。

ヘ詞の中にも母親は、不審ながらも立ち出でゝ。

鐵柴　ヤア、あなたが内侍さまなら、先刻に切られた内侍さまは。

義貞　オヽ、彌太郎が妻の礒浪。

鐵柴　エヽ、そんならあれが嫁かいな。可哀い事をしましたわいなア。

ヘかつぱと伏して泣き居たる、折柄窺ふ孫三郎、初めの姿引きかへて、甲冑に身を堅め、さも潔きその出立ち。

ト以前の助市、鎧、大童にて、奥より出て、義貞の前なる首と、以前の内侍の首を、兩脇に抱へ

助市　都方の總大將、新田左中將義貞と、勾當の内侍の首を、長宗が討ち取つたり。皆々、勝鬨々々。

ヘ呼はり／＼出で行くを。

義貞　ヤア、孫三郎、うろたへたか。眼前新田を置きながら、似せ首取つて立歸るは、命が惜しさの卑怯至極。

ヘ卑怯至極と嘲ければ。

助市　似せ首とは事をかしや。日本に類ひなき、蘭奢待の名香を、内兜に焚きしめたる優美の最期。義貞ならであるべきか。よし名香は焚かすとも、義に依つて命を捨つる。

ヘ心の内こそ芳しき、勇士の手本のこの首を。

なんと犬死させられう。この首取つて立歸るは、親兄への申し譯。元弘の亂れより、世を退きし我が親人。

ヘ尊氏たつて懇望あれども、奉公をし給はず。

伜の内一人、味方に參らせんと、約束ある事お隱しあつても、親子の仲、よく存じて、足利の家來となりしこの

助市、我が子にも本名を打明かされぬ、父の心底、探らん爲の卑怯未練。

〽親兄弟は敵味方、女房を殺して兄嫁の、首を討つての手柄顏。

武士には何が

〽なる事ぞや。

赦してたべ、親人樣。

〽身をへり下る我が子の義心。

幸内　オヽ、兄と云ひ弟と云ひ、恥かしからぬ二人の若者子に持つ我れは、なんとした果報者。

〽目に泣かぬ、心を汲んで孫三郎。

助市　攻め口を退けたれば、この隙に綜の君を、吉野の都へ、早く〳〵。

〽勸め申せばにこつと笑ひ。

義貞　優しき情、さりながら、足利方に伏勢あれば、此方にも用意あり。華頂山の合戰に、奪ひ取つたる二つ引、これを見よ。

〽敵の旗を燒き捨てんと、香爐に移せば山風に、はつと忽ち六甲山、白旗赤旗陣松明。

あれ見よ、君の御守護氣遣ひなし。軍の勝負は天にあり、さしも剛なる楠も。

〽湊川にて失せしぞかし。

都より賴まれ參らせ、世を泰平に鎮へす、それまでの我が命、助からんとの軍にあらず。一度は敵に取らるゝ首、必らず〳〵その時は、孫三郎に討たるべし。

〽我れゆゑ死したる彌太郎が、墓に手向けよ孫三郎。

助市　斯ばかり深きお情に、敵對ふ矢先はあらねども。

〽主命辭する所もなし。

義貞　再び出會ひは戰場にて

助市　義貞公の御首を

義義　見事汝が

助市　討つて見せう。

〽詞を番ふ弓取りの、仰せは兼ねて鐘が崎。

幸内　我れは元來浪人の、主もなければ我が子もなし。

露柴　二人の嫁も夏の露。

内侍　果敢なく消えし三人の

義貞　菩提の道を

幸内　南無阿彌陀佛。

義貞　南無阿彌陀佛。

〽よし定めなき世の中に、しぐれぬ袖こそ

幸内　さらばッ

助市　さらば。

〽なかりけり。

トこれにて皆々、引ッ張りよろしく、段切りにて

幕

蘭奢待新田系圖（終り）

菊池大友姻袖鏡

四幕

頃は彌生の仲の町櫻まばゆき大籬通ふ菊池と吉川が全盛くらべ二の町と起證誓紙の戀仲を奸栗原の僞迎ひ戸平を打つたる詞の早速は粋な家老が櫻の墨染謎の心は胴助袖菊云ひ合されど輿入れを急ぐ心の紅取りおさん金藤太が無理酒も醒めての上の分別に廓の手管を菊がされ慈童が例しを立浪主税衆道の情も戀衣濡れぬ先こそ露の袖前司太郎と有綱が忠義比ぶる十字街も戀の闇路な奴らさ梓の弓を引當の葛籠を隱す庵室へ尋れ木樵のちよん兵衞が名乘る形見の兄弟優法師が執着心胸の炎も折琴多門が一期も榮ふる

忠臣入江藏人呼子浦國入船裝

表のカタリは文久二年九月中村座で上演した時のものである。

下の凸版もその時のものである。

本文に挿入したのは、大正十一年四月の新富座で珍らしく上演した折の幕切れの舞臺面である。

菊池大友姻袖鏡

序幕　島原廓の場

役名——菊池多門之助。同家老、入江藏人。吉川金藤太。笹原源八。金澤軍次。栗原戸平。傾城、二の町。奴、胴助。

本舞臺、向う一面黒塀。上手、畫心に大門の書割り、蔀の格子より物の出る誂らへ。左右に、丸に火と記したる長提灯を四つ吊し、下の方、柳の立ち木、埒を結び、これへ出口の柳と記したる建て札、同じく吊り枝。上の方、建て札に、「廓遊興のうち男禁制、菊池多門之助在判」と記しあり、すべて島原廓門外。爰に床几三脚ばかり置き、關內、十手助、奴の拵らへ、伊達衿、一本差し、一升樽、笹折の肴を並べ、酒盛りをしてゐる。紺看板の中間五人、同じく酒盛りの體。めい／＼箱提灯を前に並べ、供待ちをしてゐる。踊り三味線にて幕明く。

中一　カウ／＼、大門外で、星を肴に茶碗酒とは、格別旨く飲めるぢやアねえか。

中二　さうよ。夜櫻なら門の內、柳の下で酒とは、ひねつた供待ちのやうだ。旦那衆は傾城買ひの、藝者狂ひのと、なんと羨やましいぢやアねえかえ。

中三　そんなにこぼすにやア及ばねえ。身分相應に鐵砲もぶッ放さう。おれと一緒に來やれ。

中四　馬鹿ア云ふな。どうして行かれるものかえ。

中三　なぜ／＼。

中四　それ見ろ、男禁制とあるからサ。

中三　成る程、殿樣方は違つたものだなア。

中五　大名は大名だけの遊興だ。

中一　菊池多門之助さまは、ちよつとござつても、總仕舞ひ、千兩なけりやア出來ねえ事だ。

中二　そんなら、おら達にもお手當があるだらう。

中三　そこが大名の懐子で、主ばかりよけりやア。

皆々　エヽ、下素張つた事云ふなえ。

土手　コレ／＼、下として旦那方の噂は、云はねえもんだ。

酒肴の手當は、殿様方の散財だ。有り難いと思はねえか
え。
中一　それもさうだ。呑め／＼。
　ト皆々、呑みにかゝる。
關内　カウ、おらが旦那は男が好くつて、金持ちで、お情
深いから、廓の女は云ふに及ばず、大友さまの御息女、
折琴姫さまと云ふ、お云ひ號けが戀ひ焦れてござるさう
だ。なんと、女殺しとは多門助之丞さまの事だわえ。
土手　おらが旦那は、吉川金藤太さまと云うて、武藝は云
ふに及ばず、御發明の上に、御内福は誰れあつて、肩を
並ぶる奴がない。ところが、まだ若輩の分際で、同じや
うに廓通ひの揚げ詰めのと、イヤモウ、お臍が茶を沸か
してけつかるワ。
中一　カウ／＼、土手助、金びら切らにやア、色が出來ね
えと云ふか。男は氣で持て、膽は酢で食へと、蓼食ふ虫
も好き／＼だ。
中二　さうよ。ちやんころ無しでも、惚れ合つたとなつち
やア、人の知らねえ樂しみのあるものだ。
中三　おきやアがれ。おらア女より食ふが樂しみだ。
土手　カウ關内、おぬしが旦那も、おらが旦那のござる揚
屋、花松へ毎夜ござるが、なんと云ふ相方だえ。
關内　小町とか二の町とか云ふさうな。
土手　そんなら、おらが旦那と一つ相方……それぢやア、
いよ／＼鞘當に。
中一　オイ土手助、剛氣に固くなつた。おらの方へ廻され
えか。
土手　サア、やらかせ／＼。
關内　茶碗でぐい呑み。
皆々　それがいゝ／＼。
　トめい／＼茶碗にて飲みにかゝる。門の内にて
大勢　喧嘩だ／＼。
皆々　ナニ喧嘩だ。どうしたのだ／＼。
　ト皆々、提灯を持つて立ち騷ぐ。
土手　コレ／＼、マア、靜まれ／＼。
　ト門の前へ行き
喧嘩とは氣遣はしい。
關内　相手は誰れだ。
皆々　名を聞かせろ／＼。
　ト門の戸を叩く。内にて
若者　誰れかは知らねえが、喧嘩の相手は、この印籠と、

その小柄だ。

ト印籠と、小柄を紙の中より投げ出す。土手助は小柄、關内は印籠を取上げる。

中一　土手助、それは。

土手　てまへの旦那が秘蔵の小柄。

中二　關内、その印籠は

關内　主人の提げ物。

土關　そんなら喧嘩は

五人　菊池と吉川。

土關　さては御主人。

五人　場所もあらうに口論とは。

土手　兼ねて斯うとは思つたが、門は締まつて、往来に叶はず

關内　御主人さまのお身の上。オヽ、さうだ。

ト下の方へ行かうとするを

土手　關内、どこへ行くのだ。

關内　聞き捨てならぬ喧嘩の様子、裏手の塀を飛び越えて。

土手　われが主人も大切なら、この土手助も加勢に行くわえ。

關内　さうはならねえ。

土手　なにを。

ト太鼓入り、相生獅子になり、兩人抜き合せ、皆々止めるを、撥き退け／＼切り結ぶ。皆々は、下座へ逃げ込む。跡に兩人立廻り、キッと見得にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間、中足の二重、向う[illegible]りの縁、上下一間の塗り骨障子屋體、壁通りへ櫻、山吹、春草の掛け花活け。酒肴、臺の物を取散らし、銀張りの煙草盆、雪洞附きの燭臺を照らし、爰に金藤太、羽織衣裳、大小、源八、軍次、同じ形、三人とも刀の反りを打つて詰めかけ、下の方に、多門之助、羽織衣裳、大小にて、同じく、反りを打つて立ちかかり居るを、二の町、禮補、傾城の形にて止めてゐる。小鶴、お幸、禿子の形、お松、お竹、仲居にて、駒吉、兵六、太鼓持ちの拵へ、先一人、皆々、立ち騒いでゐる。バタ／＼、鳴り三味線にて道具納まる。

皆々　マア、お待ちなされませ。

金藤　ヤイ、多門之助、二の町は身が揚げ詰め、妨げなせ

ば手は見せぬぞ。
源八　遊里へ参つて刃物三昧。
軍次　女童は、怖ぢもせうが
金藤　この金藤太に刃向へば、その身の破滅。
多門　ヤア、云はせて置けば重々の過言。貸し借りは廓の大法、二の町は予が相方、連れて参るを不審なか。
金藤　オヽ、身が揚げ詰めなければ、外の座敷へやる事は
源軍　罷りならぬワ。
多門　何を小積な。
ト兩人キッと詰め寄る。
二の　マア、待つて下さんせ。皆わたしから起つた事、悪うはせまい。下にゐて下さんせいなア。
小蝶　互ひに忍びの御遊興、お名が立つてはお爲にならぬ。
かう　太夫さんのお心遣ひ、推したがようござんすぞえ。
まつ　もしもの事があつたなら、花松の外聞。
たけ　お静かになされても、事の解るは同じ事。
駒吉　中まん丸な杯で、手を替へてやんわりと。
兵六　太夫さまが行司役……東西々々、左門さまは下地のお馴染み、金藤太さまは、昨今ながら揚げ詰めと云ふ強味あり。
駒吉　どちらも負けず劣らぬ取組み。
金藤　默らう此奴。
兩人　ヘイ／＼。
金藤　菊池は隣國肥後の領主、叔父吉川大領は筑前の領主、都在番の折柄、私しの遊興とは申しながら、引けを取つては武士が立たぬ。
源八　金藤太さまは一國の御主、それに向うて買ひ論などは、野太き詮鑿。
軍次　叶はぬ事ぢや。
兩人　出直せ／＼。
多門　部屋住みの某なれど、帯せし刀の切れ味を、膽の束ねへ試してくれう。
金藤　見事切るかよ。
多門　切つて見せう。
多金　なにを。
二の　モシ、お二人さん、この二の町が誠を立てる、可愛いお客がござんすぞえ。
皆々　ナニ、誠を立てる客があるとは。
二の　アイ、今日の揚げの吉川さんと、これまで馴染みの菊池さん、互ひに武士と廓の意地、お二人さんのお顔を

立て、花を持たせるわたしが心は。

ト後の活け花を見て

オヽ、幸ひ……その山吹と桃櫻、爰へ取つて下さんせ。

仲居　アイ〳〵。

ト持つて來る。

二の　サア、斯う竝べた三つの花、譬へて云はゞわたしとお客。どちらが吉川、菊池さん、この二の町をなんと見立てゝ下さんすえ。

源八　流石は二の町、縺れかゝつた買ひ論を、柳に流す糸捌き。

軍次　花、物云はねど色見えて、ハテ、奥床しい品定め。

金藤　それなる櫻が傾城二の町、桃は百年、金藤太、幾年長く契る心か。

多門　イヤ、この山吹の七重八重、重なる馴染みは多門之助、桃は東方朔が古事を引き、盗んで喰ふ例しもあり、殘る一木の櫻花、散るか保つか傾城の、誠を立つる夕櫻

二の　吉川さんと菊池さんと、心々な詞の花。手爾葉は解けぬわたしの心。

四人　すりや、どちらへも、靡かぬとの。

二の　アイ、お二人は、色も香も、散らす心か知らねども、勤めする身の傾城は、この山吹と云ふ譯を

金藤　金ゆゑ靡くとお云やるか。

二の　イエ、花はあれども、實のない物、桃は深草少將の、百夜通うて下さんす、多門さまは馴染みのお客、花は櫻木人は武士、吉川さんは御昨今、逢うて心を打明かす、誠と云ふは只一人、花に開くの縁あれば、わたしが取持つ仲直り、詞の花も散らさぬやう、顏を立てゝ下さんせいなア。

金藤　イカサマ、外ならぬ太夫が頼み。源八、軍次、こりや如何いたしたものであらうなう。

源八　客と色との花くらべ、どちらも解けぬ闇の紐。

軍次　廻し枕の船底を、探る手管は御兩所の、自由になるか、靡かぬか。

金藤　斯うなるからは多門どの、杯代りにこの一枝。

ト後の掛け花活けにある梅の枝を投げる。多門之助、受取り

多門　垣越しも理不盡ならぬ梅の枝、今日一日は揚げなりとも、馴染み重ねて來るからは、我が物にせん宿の花。

金藤　手折りかゝつた花びらを、散らさぬ工風は金藤太、今より我が手に入れて見せるワ。

多門　見事貴殿が二の町を
金藤　おんでもない事。
源軍　こりや話せるわえ。
金藤　サア、酒にせい〳〵。
　ト皆々、臺の物、銚子を出して、酒盛りになる。
小蝶　サア〳〵、皆さん、太夫さんへお禮を申さにやならぬぞえ。
かう　ほんに、どうなる事と思ひの外
仲居　お二人さんの御機嫌も
駒吉　直つてこれから藝づくし。
兵六　棚の達摩は古いから、新文句の樂屋落ち。
源八　早く〳〵。
　ト奥より亭主、羽織、着流しにて、出て來り
亭主　これはお歴々樣、ようこそこれに。只今多門さまへ、大殿樣よりお使者とやらで、侍ひ衆が、お越しなされました。
多門　ナニ、親人より使ひとな。
金藤　多門之助は、われ達に預ける。使者の樣子を聞かせてよからう。
源八　イカサマ、使者を肴に酒宴とは、また新らしい料理の献立。
軍次　左やう〳〵、席を離れて高見で見物。これへ參つて酌など致せ。
駒吉　畏まつたと云ひながら、立つて銚子の燗直し。
兵六　先づ〳〵あれへ。
　ト酒、肴を平舞臺の上手へ直す。金藤太、源八、軍次、三人は上の方へ住ひ、二の町、思ひ入れ。女形皆々、多門之助の側へ寄る。
多門　構はずと酒にせい……太夫は、爰へ來や〳〵。
　ト二の町の手を取つて二重へ住ひ、お松、お竹は、外の肴を並べる。小蝶、煙草をつけて、二の町へ出す。お幸、多門之助へ、酌をする。橋がゝりより、戸平、絹織物、袴、股立ちの侍ひ一人、以前の高札を持ち出る。
戸平　これは若殿でござつたか。
多門　オヽ、誰れかと思へば栗原戸平、意見であらう、取措け〳〵。
戸平　御推量の通り、大殿肥後守さまには、明朝未明、御本國へお歸りとの事。それゆゑ再三のお迎ひもお聞入れなく、剰さへコレ。

ト高札を取つて

廓遊興のうち男禁制。菊池多門之助在判。かゝる高札を出口に建て、往來を止むるは驕りの第一。

多門　コリヤ／＼、驕りと云はうが、榮耀と云はうが、國に去んでは出來ぬ遊興、碎け居れ／＼。

戸平　すりや、如何やうに申し上げても。

多門　兎角呑まねば夜が明けぬ。サア、一つつげ／＼。

ト杯を出す。

戸平　大殿より嚴命。

ト云ひながら多門之助を引据ゑ、二重より蹴落す。敵役皆々、えせ笑ふ。

多門　ヤイ、家來の身として某を、土足に掛け、蹴据ゑても大事ないか。

戸平　多門之助、勘當ぢや。

多門　何がなんと。

戸平　諫言を用ひずば、我れに代つて勘當せよと、大殿の嚴命。

金藤　ハテサテ、心柄とは云ひながら、現在家來に恥しめられ

源八　土足にまで掛けられては、武士たる者は立ちますまい。

軍次　誠の武士なら命の瀬戸、舌など嚙んで死するが増しだ。

三人　ハテ、笑止千萬な。ハヽヽヽ。

戸平　それにござるお客人、拙者は主命、お家を大事と思ふから、手荒き諫言いたすのだ。緣も由縁もない、お身達、嘲り譏りは無用にさつせえ……ヤア／＼、家來ども、用意の紙子に着替へさせ、この場よりぼッ拂へ。

侍ひ　畏まつてござります。

ト多門之助へ立ちかゝり、大小をもぎ取り、羽織を脱がせ、帶に手をかけるを

二の　マア、待つて下さんせ。

ト縋り付いて留めるゆゑ、金藤太、よせと目にて知らせる。侍ひ心得て、紙子をよき所へ置き、挾み箱を持つて入る。

二の　斯う云ふ事になつたのも、皆わたしから起つた事、堪忍して下さんせ。

金藤　コリヤ、二の町、なんと思ひ諦らめたか。親がゝりの部屋住みで、勘當受けりやア天竺浪人、これぢやアよもや愛想が盡きやう。

二の　この身は賤しき傾城でも、お大名の若殿を、夫と定めたわたしが心底。せめて未來は連れ添うて下されや……南無阿彌陀佛。

ト金藤太の刀へ、手を掛ける。

金藤　太夫、待ちやれ。

二の　イエ〳〵、死なせて下さんせ。

金藤　オヽ、死にたくば戀の意趣、金藤太が殺してくれうワ。

源八　勘當うけた馬鹿者に、くさり付いた賣女根性。

軍次　目に見えた出世を嫌ふは、貧乏神に見込まれたと申すもの。

金藤　覺悟がよくば、それへ直れ。

二の　どちらの道にも死ぬる命、多門さま、さらばでござんす。云ひたい事は山々なれど、もうなんにも申しませぬ。皆樣、さらば。サア、切つて下さんせ。

金藤　オヽ、いゝ覺悟だ。

ト拔刀を、目先へ出して

南無阿彌

ト切らうとする事、二三度あつて

多門之助どの、二の町が心底見えた。

ト刀を納める。

源八　お使者役には、中田頭の戸平も大儀。

軍次　役目は濟んだ。休息いたせ。

戸平　仕馴れぬ事とて、滅法界な御家老役。

多門　ハヽヽヽ、狂言の手爾葉揃うて、取分け戸平が出かし居つた。もうよいわい、取措け〳〵。

戸平　ハツ。ヤレ、窮屈や〳〵。

ト衣裳を脱ぐと、足輕の拵らへになる。

女皆　これは。

二の　申し、殿さん、わたしや合點がゆかぬ。譯を聞かせて下さんせいなア。

多門　イヤモウ、拔け目のない太夫でも、流石は女子、これは金藤太どのゝ思ひ付き。

二の　それではわたしに悔りさゝうと、戲むれ事でござすか。

多門　それと云ふも、大友左衞門兼房の娘折琴姬と、この多門之助とは、兼ね〴〵の云ひ號け、近々に祝言をすれば、聟入りは今日の、イヤ明日のとやかましく、家來どもが責むれども、そもじと云ふ手活けの花を餘所に見て、しゆみ切つた大名の娘、伽羅で作つた佛も同然。見ると

文久二年九月所演繪番附

聞くとて有り難さうに思ふばかり、いつそ館へとては去なぬ心。斯う云ふ趣向も、其方の誠を見ようが爲。疑うたのは御免々々。

二の　さうとは知らいで、幾世の案じを、ナア申し、皆さん。

小蝶　そんなら金藤太さんが

たけ　太夫さんを口説いて多門さまへ

太鼓　悪口仰しやつたも。

金藤　嘘だ／＼。

源八　人を計るは軍慮の心得。

軍次　今の軍師は吉川どのサ。

亭主　かゝる仕組みも太夫さんの、心を引いて見る思し召し。

兵六　女子と玉子は、當つて碎けろと申しますれば

駒吉　只ひたすらに。

兩人　御尤々々々々。

二の　數ならぬ身を思し召しての譯なれば、誓文腹は立たぬわいなア。お姫様の御祝言を、妨げる氣はなけれども、恨み云ふのは女子だけ。シタガ、今ので心も落ち付いたわいなア。

ト橋がゝりより、奴一人、出て來り

奴　ハツ、申し上げます。若殿様へ急御用とあつて、御家老入江藏人さま、これへお越しでござります。

ト引返し、入る。

戸平　ヤア／＼、本眞の使者がござつたとな。

源八　コリヤ、戸平、爰に居つては何かの手間へ。

戸平　又お目玉を貰はぬうち。

軍次　奥へ参れ。

戸平　成る程なア、逢ふは始めて。さりながら、天津乙女のその粧ひ。

金藤　この廓での大立者。

戸平　若殿のあのお身持ちでは、菊池のお家も

金藤　何がどうした。

戸平　ドレ、お座敷を見立てませうか。

ト奥へ入る。

源八　アヽ、折角狂言も巧く行つたと思ひの外

軍次　入江藏人どのゝお出でとは。

多門　また祝言の催促であらう。金藤太どの、頼む／＼。

金藤　イヤ、あの毛虫は身共でゆかぬわ。

多門　貴殿が智恵に及ばずば、源八、軍次、どうか仕様が

あるまいか。
源八　マア、入江氏を此方へ取込む思案と申すは、傾城二の町。
軍次　如何な堅藏の家老でも、二の町が愛嬌・吸ひつけ煙草の長煙管、ざんす、ざますの廓詞。
金藤　それでゆかずば太鼓の滑稽。ツイずる〳〵と碎けまするて。
女皆　こりや好い思ひ附きぢやわいなア。
金藤　然らば座敷へ、兩人參れ。
源軍　承知いたしてござる。
金藤　そんなら太夫、菊池どの。
多門　いづれ後方。
二の　吉川さん。
金藤　サア、來やれ〳〵。
ト金藤太、源八、軍次、奥へ入る。あと酒盛りになる。下手より藏人、衣裳上下、大小にて出て來り
藏人　若殿・これにお渡り遊ばしますか。詳しくは申すに及ばず、一人亂れて末治まらずと、エヽ、淺ましいお身持ちでござるなう。
多門　云ふな藏人。紙子を着やうが、襤褸を纏はうが、其方の構はぬ事。其方參つたは、大友の館へ聟入りの事であらう。多門之助が心に叶はぬ。離緣いたす。立歸つて披露いたせ。折琴姫で候ふの、琴が折れたで候ふのと、そんな琴より、爰にゐる太夫、いつ來ても調子のよい、その音〳〵、感に堪ふる面白さ。サア〳〵、皆もなぜ騷がぬ。陽氣を入れい。何を愚圖々々。
亭主　イヤ、御新客もござりますれば、私しがお取持ち、廓中のお話しに、遊女屋を轡と申す異名の荒まし、申し上げるも御一興かと
藏人　默れ。
亭主　存じますれば、そこらこゝらを
藏人　默れ〳〵、默り居らう。
亭主　へイ〳〵。
藏人　コレサ若殿、斯く申す藏人は、菊池譜代の家老職、國家の破滅を餘所に見て、安閑として居らうか。武將家へ訴へ上げしこの度の御縁談、去つたと申して濟みませうか。明日は吉日良辰、聟入りの儀式萬端御披露あらば、菊池、大友、兩家の和風。御先祖への御孝心。
多門　アヽ、姦ましい。兎角我れらは色と酒。龍田川には紅葉を流す。我れは君ゆゑ浮名を流す。ヨイ〳〵ヨイヤ

ナ……サア、皆も奥へ、太夫も、おぢや。
二の　サア、参らぬではなけれども
藏人　何卒今宵は御歸館あろやうに。
多門　興が盡きたら歸らうわえ。
藏人　御歸館なければいつまでも、この場は去らぬ入江藏人。
多門　ハテ、それは其方が心任せ。
藏人　サア、自他とも御歸館。
ト多門之助の、袖を留める。
多門　エヽ、くどいわえ。
ト皆々、奥へ入る。
藏人　ハテ、なんとしたものであらうなア。
ト下手より胴助、角字の紋、奴衣裳の下へ、小倉袴、印付きの細法被、高股立ち、胴金の大小にて、窺ひ出て來り
胴助　藏人さまへお願ひがごわりまする。
藏人　ヤ、其方は館にて見知らぬ者。
胴助　ヘイ、私しは大友家に於て、折琴姫へのお付き人とは云ふものゝ、もつそう奴の頭分、胴助と申す者でごわります。

藏人　ムウ。して身共へ對して、申し入れたき仔細と云ふは。
胴助　この度の御緣邊の儀に付きまして。
藏人　ヤ。
胴助　ちと、お願ひがござりまして。
藏人　ムウ、酒色に浮かれる若殿を勸め、姫と早々婚姻を調へくれいと申すのか。
胴助　如何にも左樣でござります……折琴さまには多門之助さまが、聟がねと定りしその日より、明暮れ焦れてござるとの噂。御祝言が調へば、菊池大友の確執も、御和談となる九國の治まり。數ならぬ下郎まで、枕も高く寢らるゝ事。それゆゑお願ひ申さうと……斯樣な身形でお目通り、無禮の段は幾重にも、御免なされて下さりませ。
藏人　下部の身にて殊勝な願ひ。この藏人が刀に掛け、日ならず御緣邊を取結ぶであらう。
胴助　して、その手段は。
藏人　イヤ、その仔細は申されぬ。
胴助　そりや又、なぜでござりまする。
藏人　ハテ、大友家の其方へ、迂濶に大事を明かさうか。
胴助　ムウ、御尤も……明後曉までに御祝言調はねば、武將

家の命に背く兩家の浮沈……身分は輕き下郎なれども、先殿樣より大小まで、賜はつたるこの胴助。

ト金打して

まツこの通り……斯く心底を御覽に入るゝ上からは、思し召し、お聞かせなされて下さりませ。

藏人　天晴れ胴助……近う〳〵。

胴助　ハヽア。

ト前へ出る。

藏人　御祝言は明日調へ、武將家の御前を繕ふ手段の極意……ハテ、何をがな。

ト掛け花活けに挿してある、櫻の枝を二本拔き取り

この二株の盛りの花、胴助、判斷いたして見やれ。

胴助　ハアヽ。

ト花の枝を受取り

嵯峨や御室は知らねども、吉野にまさる八重咲きの花、形は似たれど一本は、花の白いのその下に、薄墨色を顯はすは。

藏人　それぞ世に云ふ墨染櫻……また一本の花の名は、御門櫻を時に取り、左門櫻と呼び替へる、この藏人が祕密の謎々。

胴助　おかけなされしこの花の……左門櫻を大友の、接穗と云ふべき手詰めさへ、今宵につゞまる御祝言……それゆゑもしや連なる枝……サ、その御連枝の若殿を、多門と呼び替へ、お聟がねと云ふやうな。

藏人　ヤ。

胴助　よい御思案がござりますか。

藏人　サア、その御連枝は在さねば、當分一木の墨染の、櫻を假りに投げ入れて、日ならず誠の多門之助……イヤサ、左門櫻を撓め直し、その時晴れて色直し、めでたく婚姻調ふ手段。

胴助　とは云ひながら二人とも、一世一度の御祝言……この色里では名代新造、廻し床とは聞きましたが……名代聟とは新らしい……して、その席へ聟樣ぢやと、伴ひ申すその人は。

藏人　サア、その人は……コレ。

ト藏人囁く。

胴助　ナニサマ、それぞ墨染櫻。

藏人　この岩倉の宗玄御坊、若年ながらも悟道の名僧。明日の首尾、繕ろふべきは外にあるまい。

胴助　すりや、宗玄御坊を假染めに

藏人　その祝言の密事に奥にて。

胴助　藏人さま。

藏人　胴助、參れ。

胴助　ネイ〳〵。

ト立ち上がる。

藏人　コレ。

トあたりへ思ひ入れ。獅子とらでんの唄、鳴り物になり、よろしく

ひやうし幕

二幕目　大日堂の場

役名――奴、胴助。役僧、賛禎。奥女中、櫻木。腰元、千草。同、彌生。佛具屋八兵衛。北岩倉宗玄法師。

本舞臺、三間の間、中足位にして土手の上へ石垣の蹴込み、向ふ漏斗にして、櫻の盛りの間々より瓦燈窓ある廻り廊。朱塗りの遠見。正面へ大日堂、瓦葺。金箔置き、彩色彫り物の唐戸などの書割り。上下、櫻の植込み、同じく吊り枝。この二重、奥深にして、この前へ一間程の假供養の壇を設け、金欄の打敷、同じく水引を引き廻し、四方へ竹を建て、これへ白絹の旗、天蓋に眞言派の梵字佛號を記し、壇の上へ六器香爐、供物、眞中へ金箔厨子入りの本尊、扉を開き、この壇より向う透かして白木の大卒塔婆を建てゝある事。爰に賛禎、役僧の拵らへ、色紗の衣袈裟を掛け、舞臺へ毛氈を敷き、この上へ經机を置き、經木の卒塔婆へ施主の名前を記してゐる。上の方、二疊臺位の上へ毛氈を掛け、爰へ、世話方兩人、麻上下、各々机に向ひ、帳を扣へ、下の方に婆、職人、商人、百姓、爺の拵らへの五人居並び、木魚入り合ひ方にて幕明く。

世一　御信心の方々は、大師堂、常燈明の施主にお附きなされませう。

世二　劍難、厄病除けのお守りが望みならば、頂戴あられませう。

兩人　冥加錢は、お心持ち次第でござります。

五人　ハイ〳〵、後でお初穗を上げませう……南無大師遍

照金剛、南無大師遍照金剛。
ト拜み居る。
賛績　只今導師宗玄御坊は、日中の御回向濟んで、御拜禮にお出でござる。參詣の各々方、志しの佛の戒名、俗名たりとも云はつしやれ……この經木へ一々記し、今宵滿願の御回向を受けさつしやれ……先祖代々菩提の爲でござりますぞ。
婆　私しは、只今記しておもらひ申した、二人の佛のお經料。
ト小錢包みを出し
少しではござりますが。
ト持ち行く。
賛績　此やうに多分の布施物には及びませぬ。經木料は、少銅三錢でよくござるぞ。
婆　それはマア廉いもの。併し、私しが志し、お取りなされて下さりませ……南無大師遍照金剛々々々々々々々々
賛績　志しとあれば、別段の事ゆゑ、受納いたすでござる。
職人　いま附けましたは、私しの馴染の女郎、この間ころりで死んだから、その菩提の爲に附けましたが。
商人　私しも今の塔婆料。
ト包み錢を出す。
百姓　俗名作十、菩提の爲。
ト米、一升の袋へ、錢三文、添へて出し
百姓　これは私しの志しでござります……施主、婆藏とお記し下さりませ。
賛績　オヽ、よし〳〵……こなたの名は戸田屋七兵衛か。
商人　ハイ、左樣でござります。
ト役僧、經木へ記す。
爺　私しは死にました先の女房が、佛になるやうに……さうして私しは、もう六七十年、生きて居りますやう、お祈りなされて下さりませ。
ト錢を出し
これは私しの志しでござります。
ト皆々、錢五六文づゝ世話人の方へ持ち行く。
世話　これはお志し、御信心な事でござります。
ト帳へ記す。役僧、向うを見て
賛績　アレ〳〵、向うへ宗玄法師がお歸りでござる。
婆　そんならあれが
五人　宗玄さまか。

ト皆々、抑へる。

〽實に紅は闇生に植ゑて隱れなし、泥中に咲く蓮花。

トこの上手より、胴助、袴、股立ち、大小にて、目錄
臺に、銀包みを乘せ、携へ出て

胴助　導師御入りとござるからは

禎賛　イザ、お出迎ひ

兩人　致すでござらう。

ト向うより宗玄、青坊主、白綸子の衣服の上へ、紫の
紋紗の衣、白地、金襴の袈裟、衿卷きなして、手に金
鍍金の蓮花座付きし本道具のやうなる花皿へ、紫、紅、
柒色と、好みの如くぼかした小さき短册へ、發句を三
通り程、好みの如くちよつと疊みて、花瓣のやうにし
て盛り上げ、見物へ撒き散らしながら出て來る。この
次へ子役の所化、腰衣にて金箔置きの手香爐を持ち、
次に所化兩人、麻の黑衣、袈裟を掛け、經机の上へ經
卷を載せたるを、一人携へ、次の一人、唐木造りへ、
泥粉にて蒔畫したる般若櫃の小さき箱を携へ、この次
へ奧女中櫻木、ひらり帽子、かいどりにて、銀の花筒
へ櫻、玉椿を活け交ぜ、次に腰元千艸、同じく桃、紅
白の花筒、彌生、花筒へ早咲きの躑躅、山吹などの活
け花を持ち、この次へ絹法被の供侍ひ二人、付き添ひ、
出て來る。

賛禎　これは導師、宗玄御坊。

胴助　只今これへお戾りとや。

賛禎　お出迎ひいたして。

兩人　ござりまする。

〽宗玄、會釋しとやかに。

宗玄　爾時世尊の申さく……漂うたる麗水あり、天人の見
る事瑠璃の如く、餓鬼の見る事猛火に等し、佛鬼、一如、
諺を悟れば、深き法、海……住職阿闍梨の御意を受け、
身にも應ぜぬ導師の役目……數ならぬ某を、出迎ひ下ざ
る各々方、過分に存ずる。

胴助　始めて見えし宗玄御坊。

女皆　イザ、先づあれへ。

皆々　お越しあられませう。

ト宗玄、花瓣を散らしながら、舞臺へ來り、本尊へ禮
拜し、花皿を置き、正面の床几へ掛ける。

宗玄　足利武將の台命とあつて、過ぎつる嘉吉文安の動亂
に相果てし、有緣無緣の亡者の爲、隨求供養のこの壇上
……滿願の今日まで、貴賤老若の隔てなく、參詣のある

が中に今、爰へ故ありげなる女性の面々、御家来同道召
さるゝは。
賛禎　いづくの御大家、御主君の御姓名、承りたう存じま
する。
ト胴助、答へなきゆゑ
サア、女中方、何方よりの御參詣でござるな。
櫻木　サア、主人の名前を申し上げるも面伏せ。御逝去遊
ばせし殿様の、御中陰は過ぎしかども、卽ち今宵が滿願
の供養との噂を承り
千艸　その檀上へ捧ぐる爲、後室より信を掛け
彌生　宗玄さまの道德を、聞し召されし
女三　供への手向け花。
胴助　拙者が持參の一葉は、供養を願ふ佛の法名、一封の
布施物、花諸とも佛前へ供へられ、偏へに御回向願ひ上
げ奉りまする。
宗玄　ナニ、法名持參いたされしとか。これへ〳〵。
胴助　ハア、。
ト目錄臺のまゝ持ち出で、宗玄へ渡す。宗玄、經机の
上へ置き、法名を開き
宗玄　英名院秋譽昌盛居士……こりや只人ならぬこの戒
名……添へて賜はる布施物にも、姓名を包まれしは、ハテ
奥床しい……殊に勝れし盛りの花筒……彼の佛、七莖の
靑蓮華を、七片の金錢に替へ、これを三世の諸佛に供へ、
釋迦文といひたる事を得たり……佛に花を奉る、これに
勝りし功德はあらじ。
ト法名を佛前へ差置く。女形、皆々、花筒を檀上に置
く。宗玄、手香爐を取り
眞言阿字本不生……法號英福卽心菩提……南無大師遍照
金剛……南無大師遍照金剛。
賛助　有り難う存じまする。
宗玄　後にてゆる〳〵回向申さん……して、その外の人々
には。
禎賛　これなる經木へ、それ〳〵に、記してござる。
ト經机に載せて、多くの經木を持ち行く。宗玄、一
々讀みて
宗玄　白露夢幻信女……この施主は、何れでござるの。
ト職人出で
職人　ハイ、それは私しが馴染みの女郎でござります。
宗玄　釋の頓去信女とは。
商人　ハイ、それは私しが阿母の戒名、どうぞお賴み申し

まする。
宗玄　耕作水損信士と申すは。
百姓　それは、私しが親仁、年貢不納を苦に病んで、死んでしまひましてござりまする。
賛績　香桶茶呑信女とは。
爺　私しの前の女房。
賛績　俗名甚助……お種とは。
婆　ハイ、私しが伜でござりますが、お種と心中して、くたばりました不孝者……併し、あの世は助けてやりたいと存じます。南無大師遍照金剛々々々々々々々々。
宗玄　各々方の志し、二世の諸佛に奉りなば、信心供養の徳に依り、二世、安楽は疑ひなし。南無大師遍照金剛。南無大師遍照金剛。
胴助　尊き導師の今日の引請け
櫻木　その有難い御佛の
腰雨　誓ひを聞くも法の庭。
職人　御用も済めば
胴助　一先づお暇。
職人　あなた方が、お立ちとあれば
商人　これから弘法さまへお参りして
皆々　御一緒に参りませう。
五人　南無大師遍照金剛々々々々々々々々。
宗玄　よく御参詣下されたなう。

ト奥女中始め、女形は揚げ幕へ、跡より供侍ひ附き添ひ入る。胴助は、上の方へ、参詣の皆々は、橋がゝりへ入る。

宗玄　多くの信者志す、輩の法名記せし、これなる經木。
賛績　イザ、本尊へ。
宗玄　猶も回向を致すでござらう。

〽浮世の塵を打拂ふ、念數爪繰り佛の名、暫し回向に時移る。

ト此うち、役僧、件の經木を供へ、宗玄、回向の模樣。少し老けたる拵らへの八兵衛、木綿やつしにて、揚げ幕より、雪駄がけにて出て來り

八兵　なんでも爰に來てゐるとの事。丸い頭が四つ五つ揃つてゐるから、どれがどれやら分らぬわえ。

ト舞臺へ來り、皆々を見廻し

ヤ、見違へるやうな立派な拵らへ。あれだ／＼。

ト宗玄の側へ寄るゆゑ

世一　モシ、供養を拜みにござつたなら

世二　世話人は此方でござります。
八兵　おらア、あの宗玄に用があるのだ。
世一　マア、待たつしやい。
世二　御回向中でござる。
兩人　後にさつしやい〳〵。
八兵　イヤ、待たれぬ〳〵。
積賛　ア、コレ、町人衆、宗玄御坊は滿願の供養の最中。
八兵　イヤ、その供養より、此方には急用の間を合せてやつた大事の掛合ひ。コレ、宗玄〳〵。
　ト皆々留むるを、立ちかゝり、いろ〳〵ある。
〽高聲聞きかね、振返り。
宗玄　オヽ、八兵衞どの、さては參詣でござるか、ようこそ〳〵。
八兵　ようこそ〳〵どころか。イヤ、こなたは〳〵、一夜檢校と云ふ事は聞いたが、一夜坊主の俄か立身、どえらい出世をさつしやつたの。
〽呆れる體に打笑みて。
宗玄　アヽ、イヤ、八兵衞どの、愚僧元より、官祿僧位の望みはござらぬ。生涯、草の庵を結び、行ひ濟ます志し。然るにこの度の勸求供養は、淸僧に導師を勸めさせよとある、これなる東寺の老敬阿闍梨、拙僧を見出しにあづかり、七日の間祈念のうちは……コレ、この法服も俗に申す借り物同然……併し、靑同心の身を以て、この大役を勤めまするも、出家冥利に叶ひし事……八兵衞どの、喜んで下さりませ。
八兵　オヽ、サ、その立派な袈裟で、七日のうちの出世やら、また生涯の出世やら……喜ばないでどうするものか……その喜び次手に、返して下さい。
宗玄　ア、コレ、返せとは、何を云はつしやる。
八兵　コレ、とぼけまい。われに貸した十兩の
宗玄　アヽ、コレ、それを爰で
〽云はれてハッと諸僧の手前、耻らふ宗玄、打消さんと氣遣ふを
　トいろ〳〵八兵衞を留めるこなし。
八兵　イヽヤ、云はなくつて。大枚十兩と云ふ金を、この宗玄に貸したのだ。
〽あたり聞けがし大聲に、ハッとばかりに差俯向く、白けし座中を八兵衞見廻し。
八兵　コレ、坊さん達、何もキヨロ〳〵する事はないワ。おらア誓願寺通りで佛檀屋の八兵衞、人に知られた慈悲

深い佛性の男だワ……貸した金の催促に、北岩倉の庵室へ、通つたとも〳〵……地藏の顔も三尊の、三度行つてもし〳〵と、跡では箔の剝げた挨拶。五道の冥官、六道の辻、談議をしてなりとも返さにやならぬ恩金を、七面倒に、ハ、ア、爰の宗旨が眞言だけ、おんあぼきやイ蛙の顔へ水にぶん流し、しやアつくでのうまかむだアに、足を運ばせまにはんどま、こんぱら腹を立てさせちやア、濟むまいが〳〵。コレ、貴様の居所を弘法探したが知れやアしねえ。南無大師返事をさつせい〳〵。

〽くぜり並べし立催促、宗玄赤めし顏を上げ。

宗玄　段々の仰せ御尤も。成る程、その金の事も捨ては置きませねども、岩倉の庵室は、御存じの通りの貧地の事、併し、あの金は、身の榮耀に用ひましたと云ふ儀ではござりませぬ。愚僧が故郷は播磨の國飾磨、一人の母が國元に、殘りござつて長々の大病、人參なと用ひなば、苦痛も遁がれやうと、村の樂よりの文通、據なく貴公を賴んで、借り受けたあの十兩、早速國元へ遣はしたれど、ついには病死との知らせ。尤も介抱が屆かぬは是非なけれど、これが孝行の仕納め、偏へに其許樣のお庇ゆゑ、なか〳〵仇には存じませぬ。近々御返進を申さう。

〽と云はせも立てず。

八兵　エヽ、やかましいわい。役にも立たねその云ひ譯、建立の寄せ金で、倍にして戾さうと吐かした賣僧の、口車に乘つたのが一生の誤り……幸ひ供養の導師とあれば、マア身に付いた袈裟衣、爰に並べた本尊佛具、奉納の布施物、賽錢を殘らず浚ひ集めたら、十兩位なものはあらう。

〽と立ちかゝるを。

宗玄　アヽ、これはしたり、佛具屋どの、紙一枚も宗玄が物と云ふ譯ではござらぬ。阿闍梨へ納めにやならぬ。

八兵　イヤ、その云ひ譯は、もう聞かぬワ。

役僧　アヽコレ、八兵衞どの、待つた〳〵。

八兵　お所化達、止めるのは譯を附けるか。

贊楨　オヽ、サ、宗玄どのも、よくせきの事と見えれば、兎に角、阿闍梨に申し上げて

皆々　金の埒を付け申さう。

宗玄　アヽ、コレ、待つて下され。各々方の思し召しは、辱いが、いま阿闍梨のお聞きに達せば、七日七夜の勤行も水の泡。マア、お待ち下され。

八兵　その挨拶を止めるからは、外に金の手段があるか。

宗玄　サア、それは。

八兵　浚つて行かうか。

宗玄　ア丶、滅相な。

八兵　挨拶させ、譯付けるか。

兩人　サア〳〵。

八兵　もうこの上は。

〽檀上へ、かゝるを見兼ねて宗玄役僧、縋り止むるを突き退ける、小戻りせしか以前の侍ひ、八兵衞が首筋摑み、取つて投げれば砂まぶれ。

ト胴助、窺ひ出で、八兵衞を投げ退ける。

宗玄　ヤ丶、其許は最前お出での

胴助　如何にも、供養を願ひし、拙者は菊池家の家老職、入江藏人が組下にて、柾木勇藏と申す者。

宗玄　ハテ、存じがけない。

八兵　アイタ丶丶。ヤイ、侍ひめ、なんで投げた。宗玄の肩持つ氣なら、小判で十兩辨まへるか。サア、どうだ。イサもクサもあるものか。うしやアかれ。

〽また立ちかゝるを突き退けて、目先へ投げる一包み、悄りしながら取上げて。

八兵　ヤ丶、こりや丁度十兩。

胴助　金子を戻せば云ひ分あるまい。長居をすると手は見せぬぞ。

八兵　ア丶、コレ〳〵、イヤモウ、結構な御挨拶……日分は取らねど、よろしうござる〳〵。

皆々　事が濟んだら、疾く〳〵爰を。

八兵　とは云へ痛い

胴助　どうしたと。

八兵　いたいお世話でござりまする。

〽金懷ろへ、摺剝いた、膝を抱へて逃げ歸る、宗玄こなたへ打向ひ。

ト八兵衞入る。

宗玄　入江藏人どのゝ御家來には、大枚のお金をお取替へ下さる段、辱うはござれども、何とも以て氣の毒千萬。

胴助　イヤ、御心配は御無用々々。藏人どのより頼み入れたき一儀あつて、佛の回向頼みに事寄せ、窺ひゐて、存じがけなく今の體裁。

宗玄　何がさて、只今の御恩といひ、殊には入魂の仲でござれば、承らいでなんと致さう。して、御用の筋は。

胴助　サア、出家と見掛け折入つて、お頼み申す筋ながら……爰は寺中の往來もござれば、委細は館でお談し申

さう。御苦勞ながらお越し下されい。
胴助　イヤ、猶豫ならざる火急の御用……用意の乘り物、早く／＼。
ト橋がゝりにて
供人　ハア、。
ト袴、股立ちの侍ひ兩人、紺看板の中間四人、挾み箱一人、留守居駕籠を擔ぎ出る。
〽ハッと答へて用意の乘り物、供人それ／＼出で迎ふ。
宗玄　すりや、斯くまで御用意あられしかな。ムウ。
賛績　入江どのゝ頼みとござれば、心願の諸用でござらう。
宗玄　如何にも、無下にも相成るまい。イヤナニ賛績御坊佛具布施物、それ／＼に
賛績　阿闍梨の元へ屆け申さん。
所化　經木は我れ／＼預かりて
皆々　明朝、未明に流れ灌頂。
胴助　サ、宗玄法師。
供皆　イザ、乘り物へ。
宗玄　ア、、勿體ない、矢張り此まゝ。
胴助　イヤ、これとてもお指圖なれば、何卒お乘り下されい。
〽平に／＼と乘り物へ、無理に勸めてのりの道。
宗玄　これは又、迷惑な。
賛績　供養成就の
皆々　大施餓鬼。
ト役僧始め皆々、經木、佛具を持ち、立ち上がる。
胴助　乘り物急げ。
供皆　ハア、。
ト少し乘り物、舁き出す。
〽出家侍ひ一道に、伴ひてこそ。
ト乘り物の戸を閉す。役僧、皆々見送り、行列三重に、音樂の鳴り物をあしらひ、胴助付いて揚幕へ入る。役僧皆々は、上の方へ入る。

ひやうし幕

三幕目　大友家の場　十字町の場

役名――前司太郎。奴、胴助。後室、渚の方。吉

川金藤太。萩原兵衞。笹原源八。腰元、紅。同、初江。同、千草。同、彌生。入江藏人。息女、折琴姬。北岩倉宗玄法師。

本舞臺、三間の間、常足、黑塗り上段の心、正面金襖、黑塗り糸欄間。上の方、一間の障子屋體、塗り骨の襖、彩色畫。上の方、正面共に出入り、下手奥深に折り廻し、塗り骨の障子屋體、この見切り網代塀、柴垣などあしらひ、下の方、いつもの所に木彫り物透かしの栞り扉。平舞臺へ薄縁を敷き、黑塗りの上がり段、すべて大友家館、奥殿の模様、爰に後室渚の方、結び髮、かいどり衣裳、褥の上に座し、側に鼻紙臺、脇息を据ゑ、金藤太、衣裳、上下にて、刀を提げ、立ちかゝりゐる。次に源八、上下、衣裳にて、同じく立ちかゝりゐる。これを萩原兵部、上下、衣裳にて止め居る。舞臺先に、卷樽、卷絹、箱入りの鯣、しら毛など、結納の白木の臺置き散らしある。立廻りのツケ、舞ばたらきにて幕明く。

兵部　斯く事を分け申しても

渚の　無得心なるこの場の狼藉。

金藤　イヽヤ、望みかゝつた折琴姬、身共が妻女に申し請けんと

源八　頼みの印のこの音物、是非姬を召連れ歸るゥ。

兵部　イヤ、御主人大友左衞門さまには御逝去あつて、あれなる後室、渚の方さま、女儀の御身で國の政道、館の掟、それ〳〵に、お治めなさるゝ當家の奥殿。

渚の　はや中陰もすぎしゆゑ、武將よりの御沙汰として、肥後の國、菊池の嫡子多門之助を、娘折琴が聟がねと相定め、結納取交す上からは、最早主ある若木の花、手折らうとは落花狼藉。

金藤　イヤ、左衞門どのが死去の上は、延び〳〵ならぬ家督の納まり。

源八　菊池多門之助は、取り所もない身持ち放埓。

金藤　家督の跡目延引は、他家の聞え、武將家へ恐れ。

源八　誰れ彼れと云はうより、これなる金藤太さまは、一家と云ひ、折琴姬には似合ひ相應。

金藤　ぢやに依つて、召連れ歸つて身共が妻女。

渚の　イヤ、婚禮萬事は、それ〳〵に古禮、作法があるものぢやぞや。

金藤　ヤ。

兵部　その辨まへもござらぬか。お姫樣を、聟樣が直々のお迎ひとは、近頃以て麁相千萬。

源八　云ふな兵部。善は急げと申すから、御自身推參。

金藤　是非、此方へ申し請けるぞ。

渚の　イヤ、娘折琴が夫と云ふに、多門之助、廓通ひは若氣の至り、誤まつて改むれば、憚りあらぬ二人が緣邊。

兵部　卽ち今日最上吉日なるを以て、聟入りの儀式を調へんと、菊池よりも先觸れが到來いたしてござる。

渚の　祝儀の島臺、銚子、土器、三々九獻の用意まで、もう調うて居りますぞえ。

金藤　ムウ。すりや今日、聟入りの儀式をば。

渚の　折角のお越しなれど、最早後緣。ほんにお笑止千萬ぢやなう。

源八　正しく多門は曲輪に居續け。

金藤　それにこの屋敷へ聟入りとは……ハテ、面妖な。

ト思ひ入れ。これを床の淨瑠璃になり

〽工合違うた金藤太、面膨らして煙草の煙、あきれ輪を吹くばかりなり。

ト向うより、袴、股立ちの侍ひ一人、走り出て來り

侍ひ　菊池どのよりお使者として、入江藏人さま、只今御入來でござりまする。

渚の　ナニ、藏人參りしとや。

兵部　これへと申せ。

侍ひ　ハア、。

ト引返して入る。奥より諸士二人、上下、衣裳にて出て來り

諸一　菊池さまより、お使者とあれば

諸二　我れ〳〵、兩人

兵部　イザ、お出迎ひ。

兩人　ハア。

〽ハアと白洲に出で迎ふ、入り來る菊池の家老職、入江藏人行定、行儀崩さぬ上下も、折目高なる役目の骨柄。

ト金藤太は二重に居て、渚の方、兵部、諸士、兩人、出迎ふ。藏人、衣裳上下にて、撚り緒の草履、跡より以前の侍ひ、並びに麻上下の侍ひ一人、付添ひ、出て來る。

兵部　これは〳〵藏人どの、今朝內意のお使者と云ひ、

渚の　菊池家補任の身を以て、自身の入來喜ばしい。

兵部　これまで出迎ひ、いたしてござる。

藏人　これは後室渚の前さま、萩原氏にも一別以來。

兵部　其許様にも御賢勝にて。
三人　先づ〳〵これへ。
藏人　然らば御免下さりませう。
〽互の挨拶細やかに、一揖してぞ座に直る。
ト藏人、舞臺へ來り、侍ひ、刀を渡す。藏人これを引提げ通る。一人の侍ひ、藏人の草履を取つて、兩人、下手へ入る。
渚の　行定には、使者大儀。菊池は肥後の名家、この度の縁談は、双方家内繁昌の基……殊に多門之助は聞ゆる美男、見ぬ戀にあこがれし娘が喜び、この母も喜ばしうござるわいの。
藏人　これは御挨拶。此方主人、肥後守、本國へお暇の願ひ叶ひ、夜前、當地を御出立遊ばさるゝに付いては、當家と約束の御縁邊、急ぎ取結べよと、上よりの嚴命、それゆゑにこそ右の仕合せ……若殿にも申し上げ、今日儀式を取結ばん爲、わざ〳〵推參仕つてござりまする。
渚の　さすれば多門之助どのも承知の上。
藏人　如何にも……それに付いても金藤太さまには、夜前廓にての體裁と云ひ、ハテ、變つた所で御對面仕りました。

金藤　身共とても、存じがけない面會であつたなァ。
兵部　此方とても、若殿をお迎ひの爲、胴助が妹神菊を、夜前島原へ遣はせしに、何やら怪しきその場の風説……然るに今朝多門之助さま、聟入りとの内意のお使者參りしゆゑ、胴助を聟君のお迎ひに遣はしたれば、先づは安堵いたしてござる。
金藤　イヤ、寄つてかゝつて勸め込み、多門之助が聟入りをしようとも、魂ひは拔け殼。
源八　あたら娘を疵物にされて、後悔さつしやるを見るやうだわえ。
藏人　愚か〳〵、遊里通ひは若氣の至り、東山どのへ御披露ありし、表向きの御縁談。
渚の　親々の云ひ約束、婚禮は萬歳の始めといへば、今更變じて、武家の作法に立ちませうか。
金藤　でも、あの通り結納までも
ト品物へ思ひ入れ。
兵部　イヤ、賴みの印は疾より、菊池多門之助どのより、送られてござるぞ。
金藤　ヤ。
兵部　たつて妨げなさるゝは、當館に遺恨があつてか。

金藤　イヤ、全くさうでは。
藏人　其許さまには、似合ひ相應、御縁組みを京洛中、お
尋ねなさるがよくござる。ハ、、、氣の毒千萬な……
多門之助とのを唆かし、遊里に於てあざとき工み。
金藤　なんと。
藏人　イヤ、申さぬぞよ……當家はめでたき今宵の祝言。
氣をあせられずと、胸を鎭めて……お開きなされい。
金藤　ムウ。折角送りし品ながら、まツ斯う〳〵して。
〽蹴散らす品は亂離骨灰。
源八　これからは、聟入り變じて石打ちの祝ひ事。
金藤　ハテ、萬事は身共が胸にある。來やれ。
〽睨み廻して立歸る。
ト金藤太、二三人を連れて入る。
渚の　この上は聟どのゝ、お出での樣子を折琴に、兵部、
島臺、何かの用意を。
兵部　委細承つてござりまする……おてまへ達兩人は、
藏人どのへ。
兩人　畏まつてござりまする。
近習　イザ、我れ〳〵が御案内を
藏人　イヤ、若殿の御入りまで、我れらはこの場で。

渚の　そんなら藏人。
藏人　後室樣、兵部どの。
兵部　後刻面談
兩人　いたすでござらう。
〽打連れてこそ。
ト渚の方、兵部、諸士兩人付添ひ、奥へ入る。
〽跡見送りて藏人が。
藏人　兩家の安堵に心を碎く忠義の胴助、我が心腹を打明
かし、世上へ知らせぬ今宵の密計。ムウ。
〽胸の思案にくれかゝる、早入相の時計の音」
ト六つの時計になる。
ありやモウ黃昏、最早お出に間もあるまい。
〽見やるこなたへ持ち運ぶ、座敷〳〵の銀燭臺」
ト以前の諸士兩人、銀燭臺を持ち出て置き並べ入る。
正面の金襖、左右へ引拔く。奥深に漏斗の座敷、遠見
灯入りにして美事なる道具になる。
〽光りまばゆき折こそあれ、北岩倉の閑居にいます宗玄
法師、慈悲を頭に附け髮鬘、聟入りの晴れ小袖、祝儀の
上下花やかに、介添へ役も下部胴助」
ト宗玄、附け髮、見事なる着附け、大小。後より胴助、

着付け、鞭先袴、大小、宗玄の刀を袱紗にて持ち、付
添ひ出て來り

胴助　藏人さまより、お頼みの通り、立居振舞ひ、萬事に
附け、大名の若殿らしく、御合點でござらうな。
宗玄　成る程〳〵、歩き振りも練供養に仕らう。
胴助　サヽ、お越しあられませう。
　ト本舞臺へ來り、藏人、出迎ひ
藏人　これは若殿、先刻より藏人、餘程お待ち申した。お
迎ひの役人、胴助大儀。
胴助　ハア、只今お連れ申してござりまする。
宗玄　非時の設けもござらうに、遲刻はせぬかと、心急き
に存じました。
胴助　先づお座敷へ、お出であられませう。
宗玄　御免なされ。
〽教へし通り宗玄が、出家氣質の正直一遍、待ち設けた
る通ひの役人、運ぶ菓子盆、莨盆、お茶の花香も初昔。
　ト宗玄、よき所へ直る、腰元三人、下手より菓子、茶、
　など持ち出て
初音　聞き及んだ多門之助さまのお聟入り。
千鳥　お姫様にもお待兼ね。
彌生　御馳走を申し上げよと
初音　後室様の
三人　仰せ渡されでござりまする。
宗玄　これは〳〵、何より御供養、
胴助　エヘン〳〵。
宗玄　アヽ、此かすてらは、鷄卵で拵らへると申すからは、
精進物ではござらぬぞや。
　ト胴助、氣を揉んで
胴助　ア、コレ女中方、若殿のお入りの様子、後室へ取次
ぎ召され。
女三　畏まりました。
　ト腰元三人、上の方へ入る。
〽宗玄あたりを見廻し〳〵。
宗玄　さて〳〵、よい檀家があるかして、結構な御普請で
ござる。
　ト此うち、中の舞。
アレ、どこでやら鼓太鼓、寺方と違うて、在家は賑はし
うござるてなう。
藏人　イヤ、若殿、晴れのお座敷でござる。必らず麁相な。
宗玄　成る程〳〵、高座へ上がつて說法の格でやりませ

う。

〽奥へ知らせの腰元に、誘はれ出る折琴姫、今宵を晴れの白小袖、綿帽子まぶかに着て、嫁の座に附き給へば。

ト以前の腰元三人付添ひ、腰元紅、白小袖、かいどり、振り袖、丸綿を深く冠り出て座に付く。腰元のうち、島臺、長柄の銚子、杯など持ち出る事。

〽跡に引添ひ、萩原兵部、列を正して出で迎ふ。

ト藏人は、平舞臺へ下りて、上の方に住ひ、兵部、諸士、麻上下にて、橋がゝりの方へ、出て居並ぶ。

兵部　先づ御祝言を取急がんが爲、即ち當家の息女折琴姫さま、今日の御婚禮、斯く調ふ上からは、千秋萬歳

諸士　おめでたう存じまする。

兵部　お姫樣。ソレ、聟君へ御挨拶を……ナニサマ、ソワソワ思し召すもお道理……イヤナニ、藏人どの、よきに媒介をお頼み申す。

藏人　若殿には、姫君へ、お詞おかけ下さりませう。

〽云へどうつかり刀の提げ緒、珠數つまぐりに手持ち不沙汰。

胴助　コレサ若殿。

藏人　多門之助さま。

宗玄　オット合點、只今法談を繰り出して居りまする。

藏人　ハヽヽ。若殿には、お喜びの餘り、御挨拶も出かぬ勝ち。御婚禮調ひなば、水魚の因みに、御家門の末廣がり、如何ばかりの喜ばしう存じまする。

〽座を繕ろへば。

宗玄　左やう／＼、貴公の申さるゝ通り、嫁入りも葬禮も

〽云ふを打消し。

胴助　コレサ、何を御意なさるゝ。お心を附けてナ。御合點でござるか。

宗玄　婚禮の座敷に麁相を……申したら誤まります……藏人どのも、呵つて下されなや。

藏人　詞多きは品少なし……最早挨拶に、御無用々々。

宗玄　無言の行を致さうかな。

藏人　ソレ、御祝言の式作法。

兵部　早く／＼。

腰元　ハア、。

〽指圖と共に女中達、松竹飾りし大島臺、三方、土器、熨斗、昆布、長柄の銚子蝶花形、儀式を揃へて持ち運ぶ。

藏人　作法の如くお姫樣より。

兵部　いづれも御祝儀。

ト下座にて、四海波の謡になり、紅、土器を取上げ、腰元初音、酌をする。千舛、三方を宗玄へ持ち行き

初音　サア、お酌を致しませう。

宗玄　呑まねばなりませぬか。

初音　いつもはならずと、今宵はお一つ。

藏宗　女の手より物を取れば、五百生まで浮かまぬと申すが、如何に頼まれたと云うて

宗人　ア、コレ。

宗玄　オット、無言の行を忘れは致さぬ。

ト宗玄、不承々々に杯を取り、初音、酌をする。一口呑んで下に置く。

兵部　めでたい〳〵。お杯は拙者が預かり、これからが色直し。

ト立つて件の杯を取つて、自身の前へ置く。

藏人　この上は、若殿にも用意のお小袖……ソレ、お挾み箱を持參いたせ。

胴助　畏まつてござりまする。

〽其まゝ次へ立つて行く。

ト胴助、橋がゝりへ入る。

藏人　先づは異儀なく相濟む上は

兵部　この趣きを後室樣へ。

藏人　よきに御披露下されい。

兵部　イザ、御入り

皆々　あられませう。

〽兵部が詞に姫君も、打連れ奥へ入り給ふ。

ト紅、兵部、腰元三人、諸士、皆々入る。

〽跡にはホッと息をつき。

宗玄　ヤレ〳〵、氣詰まりや〳〵。イヤ、藏人どの、お頼みゆゑ、爰まではやりましたが、長居いたせば女犯肉食……最早お暇と仕らう。

〽立ち上がるを。

藏人　イヤ、暫らくお待ち下さりませう。

宗玄　大事なくば、去なして下されいの。

藏人　ハテサテ、先づ下にござれ。先づ〳〵……貴僧のお庇により、御婚禮事なく調ひ、御禮の申しやうもござらぬ。先刻、屋敷にて申す通り、大友左衞門どの死去の後、跡目相續の男子なく、此方の若殿を姫に妻合せ、家相續の約束。然るところ若殿には、二の町と申す傾城に本心を奪はれ給ひ、約束を變ずれば、菊池大友兩家の確執。そこを察して貴僧をば頼みしも、淸僧なれば、不義放埒

のないを見込み、今宵の聟入り、今暫らくのうち若殿となつて、當館にお止り下されなば、誠の若殿に諫言いたし御本心におなりあらば、後宗姫にも仔細を明かし、誠の婚禮、いま暫らくの御辛抱、お頼み申す、宗玄どの。

〽爲に兩手を藏人が、思ひ込んで頼むにぞ、宗玄は迷惑顔。

宗玄　これは又、大きな難題、聟入りの間を合さば、家の爲、國の爲、大勢の人が助かる事と、聞けば聞くほど否とも云はれず、坊主頭に髪鬘……斯う云ふ形で、まづ爰までは仕負ふせたが、小僧の時から食べつけぬ、祝言の夜の難行苦行、情ぢや程に藏人さま……どうぞ歸して下されいなう。

藏人　御尤もでござるが、今お歸りあつては、折角の心盡しも、早僞はりと相成つて、御縁は破れ、この藏人は切腹いたさうより外はござらぬ。

宗玄　ぢやと云うて。

藏人　お歸りあるは、これにて切腹、殺生戒を破りめさるか。

宗玄　サ、それは

藏人　暫し辛抱下さるゝか。

兩人　サア〳〵〳〵。

藏人　宗玄どの、偏へにお頼み申しまする。

〽拔差しならぬ頼みの詞。

宗玄　これは又、なんたる目にあふ事ぢや。

〽雇はれ聟の立ツつ居つ、眞面目になるぞ笑止なり、奥は酒宴の聲高く。

ト奥にて

腰元　三國一ぢや、聟取り濟ました。しやんのしやん。おめでたう存じまする。

藏人　後宗にもさぞお待兼ね。知らせのあるまで、暫らくこれに。

宗玄　ナニ、愚僧一人この座敷に。

藏人　仲人は宵とやら、若殿後刻、御意得ませう。

ト奥へ入る。

宗玄　ア、コレ、待たつしやれ、どうあつても、去ぬる事はなりませぬか。かゝる責苦も前の世で、惡い事したその報い。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト奥より折琴姫、小姓の形、縫ひ模樣の振り袖、織物の袴にて、袱紗に茶碗を載せ、持ち出て

折琴　聟君には、御退屈に思し召しませう。不調法な手前

文久二年九月中村座上演番附

宗玄　なれど、お茶一服、召上がられませう。

宗玄　イヤ、お茶もたべとうはござらぬ。この藏人は何をして居めさつか。心細うてなる事ではない。

折琴　只今後室様とお物語りのその間、御機嫌を伺ふやうにと、お上よりの御意でござりまする。

宗玄　イヤモウ、御機嫌は散々。なんの事はない、生贄に上がつたやうな。

〽奥を見やつて氣もそゞろ、思はず振向く宗玄が、面をぢつと詠むれば、此方も小姓の顏つくづく。

宗玄　ハテ、よい器量ぢやなア。御身は當屋敷のお小姓でござるかな。

折琴　ハイ。

宗玄　お名は何と。

折琴　立浪主税と申しまする。

宗玄　ハテサテ、しをらしい。

〽萌す迷ひの衆道の情慾。

宗玄　主税どの、ちよとこれまで。

ト折琴姫、恥かしき思ひ入れ。

宗玄　これはサテ、ズッと寄らつしやれ。

折琴　御用でござりまするか。

宗玄　愚僧が……イヤサ、身が申す事を、聞入れて下されうか。

折琴　そりやモウ、身に叶ひました事ならば。

宗玄　眞實きいて下さるか。

折琴　私しも武士の忰、なんの僞はりを申しませう。

宗玄　それは忝ない。なんと、兄弟分の約束して下されぬか。

折琴　エヽ。

宗玄　但しはお否か。

〽思ひも寄らぬ戀慕の素振り。

折琴　でも、左樣な事を致しては、お姫樣のお呵り。殊に二の町とやら申す傾城に、お心を寄せらるゝとの噂。品こそ變れ情の道、その事ばかりは、お免しなされて下さりませ。

宗玄　ハテサテ、姫であらうが傾城であらうが、此方は構ひはない。

折琴　それでは表向きの御祝言が。

宗玄　それも構はぬ。彼れこれと申すなら、其方を連れて傘一本、館を開けば濟むぢやないか。

折琴　サア、それ程のお心なら、變らぬと云ふ御誓言が、

承りたう存じまする。

宗玄　オヽ、よい誓言を立てませう。これまで讀んだ八萬餘卷の經文書籍、手に取らぬ法もあり。

折琴　左樣な事は存じませぬ。侍ひの誓言は、金打を遊ばされませ。

宗玄　イヤ、金打は寺方にない。何よりかよい誓言は、コレ、斯う致すより外にはない。

〽引寄すれば、多門之助と思ひ込む、心一つの嬉しさに、懷中より取出せし香包み。

折琴　この一木は、先殿樣より拜領せし、柴船と申す名香、これをあなたへ。

宗玄　ムウ、この香木を贈られしは。

折琴　後ほど間を見て忍び逢ふ、薰りを知るべのその一品。

宗玄　人目を包む思ひの焚き物。

折琴　多門之助さま。

宗玄　主稅どの。

折琴　必らずともに

宗玄　違ひはせぬ。

折琴　有り難う存じまする。

〽ちつと寄り添ふ兄弟の、誓ひは堅き戀仲や、いづれわりなく見えにける。

ト奧にて

初音　主稅さま／＼、後室樣の御用でござりまする。

折琴　ハイ／＼、只今それへ。

ト以前の腰元三人出て

彌生　サア／＼、早うお出でなされませ。

宗玄　何かは後に。

折琴　そんなら必らず。

腰三　サア申し、お出でなされませ。

〽主稅は奧へ入りにける。跡に宗玄只茫然と見送るばかり、折柄こなたへ胴助が。

ト胴助、橋がゝりより服臺へ、柴の袱紗に包みし衣服を載せ、抱へ出て來り

胴助　若殿樣……これはしたり、若殿樣。

宗玄　オヽ、勇藏か。

胴助　お次へござつて、お小袖をお召替へなされ。

宗玄　それどころではござらぬわい。

胴助　これはしたり、其お姿では、御窮屈でござりませう。

宗玄　ナニサマ、これでは。

胴助　サヽ、お越しあられませう。

〽一間へこそは入りにける、
ト宗玄、上の方を見て思ひ入れ、胴助、急き立てる。
この仕組みよろしく、この道具ぶん廻す。
本舞臺、三間の間、正面、上の方へ寄せて上段の書院のやうに、黒塗り緣、瓦燈窓、爰へ半御簾の下より緣張りの障子を見せ、これより見附け下、銀張りの襖、これへ彩色畫、上の方、折り廻して同じく銀襖、下手折り廻し、畫心に飾りし塗り骨緣張りの障子建て切り、後に引拔くと、此うしろ奧、金襖に付いて柱欄間とも白木造り、欄間同じく銀張り、誂らへの色畫、すべて平舞臺なり、一面に薄緣を敷き、上の方に銀燭臺二つ程照らし、絹夜具を敷き、錦の掻卷、長枕など飾り付け、爰に初音、香爐の灰を直し、千艸、枕を並べ、彌生、金屏風を建てゐる。琴唄にて道具納まる。
ト直ぐに、補衣の獨吟になり
初音　彌生どの、千草どの、御寢所の用意はよいかいなア。
千艸　お羨やましい新枕。
彌生　年月積るお寢間の睦言。
初音　さぞお姫樣にもお喜び。
千艸　もしも脇から洩れ聞いたら
彌生　どうやら今宵の一人寢が
千艸　辛氣な事ぢやわいなア。
初音　こりや、ほんまの事ぢやわいなア。
三人　ホヽヽヽ。
〽とりどり噂かしましき、姫は小姓の姿に引替へ、花を飾りし振り袖も、今宵逢瀨の新枕、腰元どもに誘はれ、一間の内を出で給へは。
ト折琴姫、廣振り袖、寢間着姿の心、髮を後ろへ垂れて花櫛、姫の形になり、腰元紅、以前の白の着付けの儘にて、手燭を持ち、出て來る。
初音　お姫樣には、もう御寢所へ
三人　入らせられまするか。
折琴　サイナウ、母樣の仰せゆゑ、なんぢややら、こちや恥かしいわいの。
初音　これは御尤も。後室樣のお計らひにて、お腰元の紅どのが、嫁入りの白小袖。
紅　綿帽子にて顏を隱し、私しが御名代で、お杯の間を合したも、殿樣のお心を引いて見ようが爲ばつかり。

折琴　サア、それゆゑに自らも、立浪主税と、小姓どもの假の名をして、密かにお目にかゝつたれば、兄弟分の約束事。その上、傾城の事を問うたれば、それは／＼潔白な仰しやりやう、忍び逢ふとの堅い約束。これと云ふも母様や、兵部を始め其方衆の計らひ、嬉しいわいなう。

紅　お嬉しいはお道理。暮れてから程もあれば、聟様にもお待兼ね。

千艸　お枕二つに屛風の城廓。

彌生　随分後れを取らぬやう

初音　サア、申し、お床へお入り遊ばせいなア。

紅　サア／＼ちやつと

皆々　お越し遊ばせいなア。

ト姫を蒲團の上へ坐らせ

紅　これから私しらは、粹を通して。

ト皆々囁き、側にある几帳の衣を左右の短檠へ掛ける。

〽皆打連れて入りにける。

ト皆々、正面の下手へ入る。

〽跡見送りて折琴姫、割符に分けし香包み、今宵逢瀬は薪に花、柴船一焚き焚きしめて、今や／＼と待つ身より、待たるゝ思ひ宗玄は。

ト下手の一間の障子引拔く。爰に宗玄、着付け羽織、衣裳にて同じく香を焚いてゐる

〽共に合ひ圖の香くゆらせ、戀に心も空蟬の、夜にあらで伊達模樣、花奢風流の優姿

ト此うち、双方、香をきゝ取りし思ひ入れあつて、姫は手燭を消す。

宗玄　ムウ、香の薫りは、主税どのゝ合ひ圖ぢやな……。

〽匂ひを包む夜の梅、慕ひ寄るべき眞暗がり。

宗玄　主税どの。

折琴　多門之助さま、待つて居りましたわいなア。

〽こがるゝ姫は手を持ち添へ、襖の内へ伴へば。

宗玄　ホヽ、こりや蒲團が敷いてある。ヤレ／＼、嬉しや、僅かの待つ間を千歳の心地、賴まれた善根が、忽ち廻りて有り難いこの首尾。アヽ、よい種は蒔かうものぢや。サヽ、主税どの。

折琴　それでも、どうやら改まつたやうで。

宗玄　改まつたやうでとは、エヽ、聞えた。こりや、先刻の詞は僞はりでござるか。

折琴　なんのマア、僞はりを申しませう……又あなたも、

お逢へ遊ばすなえ。

宗玄　それを逢へてよいものか。

折琴　お傾城の二の町どのも

宗玄　イヤモウ、女子といへば。

折琴　エヽ。

宗玄　こなたは若衆。打解けたその上で、話さねばならぬ譯がある。その期に及んで、變替へをさつしやるなや。

折琴　そりや私しも同じ事、枕を並べたその上で、斯うした譯とお話しを、申す時に御變替へをなさるなえ。

宗玄　ハテ、濡れぬ先こそ露をもいとへ、屋敷の衆がなんのかのと、妨げするなら連れ退いて、深山の奥の果へも行て、この世は愚か二世三世、彌勒の世までも變りはせまいな。

折琴　なんのマア、様子が知れるとこの館も、めでたう治まり、幾千代變らぬ國のお跡目。友白髪まで離れまいぞと存じますれば、此やうな嬉しい事はござりませぬ。

宗玄　何かの様子は

折琴　先ッ斯う／＼と打明かし

宗玄　思ひの丈を

折琴　申し上げまするわいなア。

ト宗玄の袴を解く。

宗玄　ヤ、こりやモウ袴を。

折琴　此お羽織も、取り遊ばせいなア。

宗玄　サア、早う。

折琴　お嬉しう存じまする。

ト屏風を引き廻す。

〽妹脊にあらぬ蝶つがひ、屏風の内の柴船も、思ひはいつか空焚きの。

折琴　ア、申し、ちやつと待つて下さりませ。

宗玄　この期に及んで、そりやなんで。

〽折柄吹き來る風につれ、灯の絹の落ち散れば、變りし姿に互ひの恟り。

ト屏風の内より折琴姫、逃げて出る。宗玄、袖を捕へる。この時、宗玄の鬘落ちて、坊主鬘になる。短檠の衣、風にて吹き飛びし心にて落ちる。

宗玄　其方は女子か。

折琴　あなたは御出家。

ト立ちかゝるを

宗玄　主税と名乗つて愚僧をば、騙した譯が聞きたい、聞きたい。

折琴　こりやモウ爰には。
〽身を穢さじと飛び退く姫、やらじと止むる寢所の物音、
洩れて奥より後室兵部、手燭携へ腰共ども。
ト奥にて
渚の　心ならざる物音は、姫の寢所か。
兵部　ソレ、腰元衆、早く〳〵。
腰元　ハアヽ。
ト渚の方、兵部、腰元四人、手燭を携へ出て來り
渚の　ヤ、其方は娘か。
兵部　心得難き、正しく似せ物。
ト宗玄を引付ける。渚の方は姫を庇ふ。
宗玄　イヤ、譯を聞かねば、逃がさぬ〳〵。
ト兵部、立廻つて引据ゑる。
渚の　多門之助と名を僞はり
兵部　出家の身を持ち、入り來る曲者。
渚の　伴ひ連れし藏人が、心の底意合點ゆかず。
兵部　イデ、引ッ縛つて
ト思ひ入れ。奥にて
藏人　いづれも、聊爾しめされな。
〽云ひつゝ一間を立出る藏人。

ト藏人出て
斯く計らひしは身共が指圖。
渚の　心得難きその一言。
兵部　仔細はなんと。
〽主從前後に詰め寄せれば、藏人はちつとも動ぜず。
藏人　行定が所存の底意、お話し申さん……若殿の御放埒、
御諫言もお用ひなく、兩家の縁談、御契約の日限も延引
し、當館より數度の催促、武將家にても家督の評定、
兎やせん斯くと肝膽を碎きし上……それなる御坊に北岩
倉の、宗玄とて大淸僧、若殿に面體の、似たるも時の幸
ひと、是非にと頼み右の仕合せ。聖きつたる出家なれば、
姫君のお名の疵にもならぬと、思ひ付いたる藏人が思慮
の切端……事を糺さば折琴さまを、入れ替へし僞はりは、
互ひの苦肉五分と五分……斯く申す某に、野心ありとの
疑ひならば、サア、立寄つて、存分に計られよ。
〽覺悟極めてどつかと座せば、後室兵部も理に服し、返
す詞もなかりけり、聞く姫君も涙にむせび。
折琴　さてはさう云ふ仕儀であつたか。一期と思ふ殿樣を
傾城とやらに見替へられ、この身はなんとせうぞいな
う。

〽かこち給ふぞ道理なり、後室も聲曇らせ、

諸の　聞けば聞く程藏人が、道理正しき申し譯。我が夫お果てなされてより、家の大事にとつ置いつ。

兵部　譜代の家來前司太郎は、勘當うけて行くへ知れず、お家安穩にあれかしと、願ふところは今宵の祝言。御近習外樣に至るまで、郡君お入りと存じますれば、他に洩らされぬこの體裁。

諸の　表向きに家督を定めば、家も安堵。其うちに諫言して、また改むる祝言の、色直しは藏人。よきに賴むわいなう。

〽賴むわいのとのたまへば、藏人は打うなづき。

藏人　ハア、その儀に於ては、やがて吉左右お聞かせ申さう……さて、御坊には段々の御苦勞。お禮はゆる〳〵、追つての見參。勝手次第に歸りめされ。

〽云へど此方は折琴の、顏に見惚れて現の如く。

宗玄　ア、、我れながら、我が心が、儘にならぬは戀慕の闇。ア、儘よ……一旦思ひ込むからは、若衆にもせよ、女にもせよ……コレ、折琴どの、どうぞ愚僧の思ひを、晴らさせて下されいなう。

〽寄るを藏人押し隔て。

藏人　こりやこなた、氣ばし違ひは致さぬか。

〽なぢる詞につこと笑ひ。

宗玄　イヤ狂氣はせぬ。破戒した。

藏人　ヤ。

宗玄　我れ六歳にて出家得道、これまで積りし難行苦行も、あの美しい姿を見ては、どうも思ひ替へられぬ……とても奈落へ沈む體、いま宗玄が破戒して、思ひを晴らすは、憚りあらうか。

藏人　ヤア、見下げ果てたる人畜生。立つて行きやれ。ヤアヤア、家來ども、早參れ。

侍ひ　ハア、。

ト侍ひ四人、袴、股立ちにて、割り竹を持ち、下手より出て來る。

藏人　この僧の衣類を引ッ剝ぎ、門前よりぼッ拂へ。

四人　ハア、……サア、脫ぎ居らう。

〽手取り足取り身に纏ふ、小袖を脫がせ引据ゆれば、宗玄は身をあせり、姫を目がけて駈け行くを。

ト兵部、刀にて止め

兵部　ヤア、飽くまで不敵の賣僧が振舞ひ。もうこの上は。

〽下げ緒を取つて早速の早繩、高手小手に縛し上げ。

兵部　キリ〳〵妾を、立ち居らう。
　ト下手の方へ突きやる。
宗玄　たとへ繩目を受くるとも、戀人ゆゑの憂目と思へば、いとはぬ〳〵、いとひはせじ。
侍ひ　エヽ、キリ〳〵立て。
　ト割り竹にて叩き立てる。
宗玄　傳へ聞く、清盛入道淨海は、最期に火の病を受け、一生なせし惡心の、炎となつて死したる例し。宗玄が執着心、炎となる事目のあたり。エヽ、名殘り惜しい折琴どの、離れともない。
渚の　飽くまで戀慕の宗玄どの。
藏人　早、ぼッ立てい。
侍ひ　サア、うせ置らう。
〽なぐり情もなく〳〵に、名殘り惜しくも姫の顔、返りては見つ二足三足、流石に不便と見返る姫、行きては戻り、今一度顔をと云ひたげに、伸び上がり〳〵、心殘してしを〳〵と、みすぼらしくも。
侍ひ　キリ〳〵うせう。
宗玄　ハアヽ。
〽出でて行く。

　ト侍ひ四人、宗玄を追ひ立て、向うへ入る。
〽終始の體に渚の方、兵部も共に跡打見やり。
兵部　出家の身にて姫君へ、戀慕は報ふあの有樣。
渚の　又も災ひなきうちに、姫を一間へ。
初音　畏まりました。
腰四　サア、姫君樣。
〽と進むれば、姫もしを〳〵立ち上がり。
折琴　多門之助さまのお身の上、頼むは藏人。
藏人　委細は胸に。
渚の　早う奥へ。
腰四　サア、申し、姫君樣。
〽腰元どもに誘はれ、涙ながらに入り給ふ、折柄息せき下部胴助。
　ト向うより胴助、走り出て來り
胴助　後室樣、兵部さま……藏人さまにもお出でなさるか。一大事でござりまする。
藏人　ナニ、一大事とは。
胴助　承はれば、夜前菊池の大殿樣、御歸國の御出立なりしを、山崎に於て、何者とも知れず、飛び道具を以て擊ちとめ、勘合の印も紛失せしと、京洛中は俄かの騷動。

聞くと其まゝ、立歸つてござりまする。
藏人　すりや、大殿には御逝去あつて、勘合の印紛失とや。
渚の　これぞ大友、菊池の兩家に
兵部　災ひをなすのみならず
藏人　天下を望む叛逆人の、正しく仕業と極まつた。
胴助　下郎はこれより事の實否を。
藏人　オヽ、見屆け參れ。
兵部　早う／＼。
胴助　畏まつた。シテコイナ。
ト向うへ走り入る。
〽息つきあへず引返す、折に腰元慌だしく。
ト奥より腰元三人、出て來り
初音　御前樣、一大事。
千艸　悲しい事になりましたわいなア。
渚の　ナニ、悲しい事とは。
初音　姫君樣の御座の間へ、お庭傳ひに入込む曲者。
彌生　私しどもが支ゆるうち
初音　情なやお姫樣の、お首を討つて
千艸　立退きましてござりまする。
渚の　ヤア／＼、娘を打つて立退きしとは……オヽ、心當りは正しく吉川
兵部　金藤太が心定仕業。
藏人　遠くは行くまい。御詮議々々々。
渚の　ソレ。
ト長柄の長刀を取り
兵部、早う。
兵部　ハア、。
〽右往左往に館は混亂。
ト渚の方、兵部、腰元、付添ひ、奥へ入る。
藏人　搗てゝ加へて當家の珍事。胴助が安否、聞く間も氣遣ひ、都の館が心元ない。
〽押取り刀に庭前より。
ト忍び一人窺ひ出て
忍び　觀念。
ト切つてかゝるを藏人、拔打ちに切る。
藏人　家來ども。
忍び　なにを。
ト又かゝるを、ポンと投げる。
藏人　乘替へ、引け。
ト向うにて

大勢　ハア、。
〽館をさしてぞ。
ト三重になり、向うへ走り入る。この道具ぶん廻す。
本舞臺、通し瓦屋根、庇付きの屋敷塀、この正面に開き戸の非常門、簾のかゝりし小窓。門の上の方に用水溜、この側に大きなる松の樹、塀の内よりも見越しの松、白壁の藏、寢所の屋根を見越し、上の方、外屋敷の練塀にて見切り、すべて大友家裏手の模樣。雨車、雷の音にて道具納まる。
ト金藤太、袴、股立ち、黒の忍び頭巾、大小にて、片袖に包みし首を抱へ、塀の内より上がり、松の木へ傳ひ、用水溜の上より下へ下り
金藤　拵らへ事の似せ聟入り、事が破れて屋敷の混雜。そこを付込み折琴姫を、引ッ淩はうと思ひし折柄、支へ立てした腰元にした。とても望みは叶はぬと、姫の首を打ち落せしが、今さら思へば惜しいものだ……折も折とて眞の闇……戀の闇とは、この事であらうわえ。
ト下手より源八、出て來り
源八　金藤太さま。

金藤　コリヤ。
源八　最前からの樣子をば
金藤　如何にも殘らず聞き取つた……我が推量に違はず、似せ聟を以て事を治める、不敵の計らひ致すは藏人。
源八　祝言の席に臨み、底割りなせば手も濡らさず、菊池の自滅は目のあたり。
金藤　當家の主左衛門も、病死すれば、菊池大友兩家の所領、一つに握る我が大望。先つ頃菊池肥後守もぶッ放して、勘合の印も、まッこの通り。
ト懷中より、勘合の印を出す。
源八　この上邪魔な藏人も、折を見合せ只一討ち。
金藤　大望成就は、コリヤ。
ト囁く。
源八　金藤太さま。
金藤　コリヤ……密かに〳〵。
ト向うにて足音するゆゑ、兩人、上下へ忍ぶ。向うより前司太郎、うしろ茶筌、伊豫袴を高く端折り、大小、肩衣、竹笠をかざし出て來り
太郎　我が武術の爭論より、主君大友左衛門どのに、御勘氣を蒙むりて、浪々の身も早五歳、九州にて漁師となり、

只今の名は猟師幸作、先非を悔み誤まりを、何卒お詫び申さんと、この程戻りし折柄に、主君には御逝去と聞き及ぶ。何は然れ高恩ある、爰ぞ故主の館の裏道。

ト舞臺へ來り

後室始め姫君にも、御健勝にましますか。どうぞ樣子が聞きたいものぢやなア。

ト金藤太、源八、上下より出て來り

金藤　ヤ、そこにうせるは前司太郎か。

太郎　さいふは金藤太國景どの。

金藤　怪しい太郎。ソレ者ども。

ト黑四天の捕り手四人、下手より出て、太郎を取巻き

捕人　動くな。

太郎　こりや何ゆゑに。

金藤　ヤア、折琴姫を殺したは、おのれが仕業であらうがな。

太郎　姫を討つたとはそりや何事。左樣な覺えは曾てない。

金藤　さうは云はさぬ。白狀ひろげ。

太郎　イヽヤ存ぜぬ某より、館を隔てしおてまへさまが、姫の最期を、どうして知つた。

金藤　サア、それは。

太郎　こりや、この方から實否を糺して

金藤　なにを。

ト捕り手四人、十手にて打つてかゝる。太郎、抜き合せ、立廻り、四人逃げて入る。金藤太、源八かゝるを、太郎、源八を當てる。金藤太逃げて入る。門の內より折琴姫、蛇の目の傘さし、初音、千艸、赤合羽、竹笠にて出て來り

初音　そこにゐやるは何者ぢや。

太郎　拙者事は、このお屋敷に、用事あつて參りし者。

千艸　して姓名は。

太郎　前司太郎有國、久々にて立歸りしが、館の內の騷動は、如何なる仔細でござりまする。

初音　それ云ふ間も心急き、忠臣無二の前司太郎どの、姫君の御供なし、一先づこの場を。

太郎　その姫君には、御最期と承はりしが。

千艸　サアそれは、お腰元の紅どのが、姫に代つて相果てしぞ。

折琴　早う連れ退いてたもいなう。

太郎　左樣ござらば、少しも早う。

ト源八、起き上がり
源八　姫をやつては
　トかゝるを太郎、突き廻して、姫を連れ、花道へ行き
太郎　イザ、お越しなされませ。
　ト向うへ連れて入る。源八、行かうとするを、初音、千鳥、支へる見得にて、この道具ぶん廻す。
　本舞臺、正面より、上の方へ寄せて、石垣の上、青き芝原の高土手、この上に低き猪矢來、この影より切り出しの彩色櫻の植込みの間より御殿を見たる道具。上の方に櫻の大樹、同じく吊り枝。上の方、常の植込み、この高土手より正面、下迄二尺餘りの土手の張り物、二の手にして、向う遠見、爰に正面、公卿屋敷を見せて、下の方は朱塗り門の大寺、門外に戒檀本堂の屋根、所々の山々、塀の遠見、内より櫻盛りを浮世畫に書割りし遠見、霞に灯入りの月を下ろし、木魚入りの合ひ方にて道具納まる。
　ト爰に宗玄、顔色青ざめ、白無垢、雨に濡れし體、これを、紺看板、土器帯の中間四人、六尺棒にて突きのめし、棒の先へ宗玄、縋り留めし見得。

四人　エヽ、見下げ果てたる生臭坊主め。
仲×　以後の見せしめ
四人　カウ〳〵〳〵。
　ト一人々々に打つ。宗玄苦しみ
宗玄　エヽ、さりとは得無心な奴達。最前追ひ立てられしその時に、あの割り竹で呵責の笞、その上今の村雨に、濡れしほたれしこの姿、最早命も風前の、灯火よりも果敢なき宗玄、息あるうちに……あの折琴どのゝ顔が見たい……慈悲ぢや、情ぢや今一度、姫の顔を見せて下され。
中一　コレ、われが逢ひたいと云ふお姫様は、とつくに死んで
四人　しまつたわえ。
宗玄　そりや、眞實か。ヤ、、、、……どうして死なれた。譯を〳〵。
中二　われが門外へぼいまくられ、半時立たねえ其うちに何者の仕業やら
中三　お姫様の首を切り
中四　逃げうせたと云ふ
四人　屋敷の騷動。
宗玄　そんなら、いよ〳〵死なれしか。

中一　われも地獄へ
四人　やつてやるワ。
ト四人、打つてかゝるを潜り抜けなどする立廻りあつて、トヾ、宗玄、急所を打たれ、倒れる。
中一　どうやら息が止まつたやうだ。
中二　てめえが餘り、ひどくぶつたから。
ト四人、宗玄を川へ抛り込む。
中三　これで世話がないと云ふもの。
中四　そこらの酒屋を叩き起して、二升ばかり提げて行かう。
四人　それがいゝ〳〵。
ト上手へ入る。宗玄、川の中より這ひ上がり窺ふ。上手より、太郎、姫を連れ、出て來り、宗玄と行き合ひ、ちよつと立廻り、宗玄、姫を支へる。太郎、蛇の目の傘にて宗玄を引き戻す。傘の柄抜けて、宗玄、花道、よき所へ行く。雷の落ちし心にて、本鐵砲の音して、姫は氣絶する。
太郎　折琴姫さまいなう。
ト姫は、氣の附きしこなし。
宗玄　風の音さへ、折琴姫と聞えるは。
ト傘の骨を肩へ掛けるを木の頭。
宗玄　折琴どのイなう。
ト忍び三重にて宗玄、呼びながら向うへ入る。太郎は姫を介抱する。この仕組みよろしく　拍子幕

大詰

巫女町の場
松原の場
宗玄庵室の場

役名――菊池多門之助。奴、胴助。傾城、二の町。梓巫子、小万。西陣の妙貞尼。紙屋川の仁藏。栗原戸平。前司太郎。山賤、ちよん兵衛。北岩倉の宗玄法師。

本舞臺、三間の間、向う赤壁、納戸口。上手、反古貼り障子屋體。門口、暖簾黒格子、小万と白紙に記し、橋がゝり、合ひ長家の表口。これに瓢箪名灸師と記し、看板に大きなる瓢箪を印に掛け、梓巫子小万、

艾を捻り、三里を据ゑ居る。在郷唄にて幕明く。
〽爰に都の片ほとり、平野の在に年を經て、暖簾に記す梓巫子、隣りは瓢箪名灸の、艾の煙り世渡りに、いづれ愚かはなかりける、紙屋川の仁藏とて、爰ら名うての惡者作り、跡から尼が杖とぼ〳〵。
ト仁藏、妙貞、向うより出て
妙貞　卒爾ながら、巫子どのゝ所は、いづれでござりまする。
仁藏　ハテ、日印しの暖簾、爰ぢやわい……小万どの、内にか。オヽ、灸を据ゑるかいの。
小万　オヽ、仁藏どの、隣の瓢箪灸が流行るに依つて、三里を据ゑたが、さて熱い事の。
仁藏　おれも火を借りて、一服吸はうわい。
妙貞　わしは西陣の者ぢやが、寄せてもらひたい佛があつて
小万　口寄せにござんしたのか。ドレ〳〵。
〽云ひつゝ梓の箱取つて、時代襠裲綿帽子、手早に用意も商賣がら。
ト支度して
小万　さうして、生口か、死口か、目上か目下か。

妙貞　ハイ、目下で、死口でござります。
仁藏　おれは目上で、生口が望みぢや。
小万　こなさんも寄せるのかいの。
仁藏　オヽ、賽の目上でねこんぞう、博奕の生口と掛けたい。寄せたいわい。ハヽヽヽ。
小万　エヽ、何を云はつしやる。サア、寄せまするぞや。
妙貞　御苦勞でござりまする。
〽引手に弓や、寄せかゝる巫子、寄り來るや〳〵、いとし可愛と思ひ子の、烏帽子賣であらうとも、膝を離れぬ寵愛の、祕藏烏帽子が來ましたわいなう。
妙貞　オヽ、懷しかつた〳〵。
小万　朝夕焦れて居ましたわいの。
妙貞　オヽ、道理ぢや〳〵。泣かぬ日とてはござらぬわいなう。
小万　オヽ、おれも死なうとは思はなんだ。密柑籠の產着より育てられ、こなたは可愛がつてくれたが、飯焚きはようどづき居つたぞいの。この身は成佛したけれど、あぢな所へ行て幸ひ、皮は八ッ乳なり、三味線の表皮に張られて
〽今は聲もかんばつて、ぴん〳〵べん〳〵だら〳〵と、

名残り惜しけれど、去ぬるぞいの。ニャン。
小万　般若心經。
妙貞　オヽ、三毛よ、可哀い事をしましたわいなう。ハアン。
ト泣く。
仁藏　ヤア、嫁か孫を寄せるかと思へば、猫の口寄せかいの。馬鹿々々しい。
小万　イヤモウ、猫であらうが寄るが不思議。來世は畜生界を離れるやうに、弔らうてやつたがよろしうござんす。
妙貞　ハイ〳〵、孫より可愛いはんそ猫。些少ながら今のお禮。
ト包み錢を出す。
小万　茶でも上がつてござりませ。
妙貞　忝なう存じます。こなた、これにござりませ。
〽涙に交る水洟を、すゝり上げてぞ立歸る。
ト妙貞入る。
仁藏　時に小万どの、今夜は內野の五郎作が胴ぢやが、二三兩こまにごんせぬか。
小万　イヤ〳〵、十四五兩、こなさんの口車に乘つて倒されてゐる。もうよしにしやんせう。
仁藏　イヤ、天神の社內で人相を見せたら、今日は血色がよいと吐かす。なんでも勝ち軍に違ひなしぢや。
小万　さう云ふ事なら出掛けて見よう。爰に二朱が七つと、板金が二丁、この金を五十兩程にしてほしい。
ト手箱より金を出して渡す。
仁藏　なんでも、これから一合戰。
小万　凱歌を待つてゐます。
仁藏　ドリヤ、戰場へ赴むかうか。
〽慾の熊鷹合口の、嫉刃合して出て行く、取片付けて棕櫚箒、あたり掃き出す折こそあれ。
ト向うより多門之助、着流し、一本差し。中間戶平、木綿やつし、風呂敷包みを脊負ひ、出て來り
多門　コレ戶平、どこを當に連れて行くのぢやぞいやい。
戶平　どこと申したら、お前もわしも天竺浪人。誰れあらう菊池の若殿多門之助さま、主從がこの有樣。
多門　素人には敢へない御最期。太夫には引別れ、如何なる身の果てぢやぞいやい。
戶平　太夫どころか。島原の駕丁が所に、三月の上掛り人、物の見事にほい出されたが、この平野の梓巫子は、わし

が伯母貴、二三日養うてもらひませう。

多門　して、その伯母と云ふは、賴もしい人か。

戸平　ねつから賴もしげのない所が付け目ぢや。マア、ござりませ。

ト本舞臺へ來て、內を覗き

オヽ、居るぞ／＼。所で、お前を金持ちの巫子ぢやと云うて騙すのぢや。呑み込まつしやりましたか。

多門　でも、巫子は、女子でないか。

戸平　ところで、持參のこの着物、引ッ張らつしやりませ。

ト風呂敷より着物、帶を出し、着せる。

多門　こりや體は女子、頭は男ぢや。

戸平　ところを、この綿帽子……物云ひ何か、女子の身振りを忘れまいぞ。

多門　呑み込んだ／＼。

戸平　そこにござりませ。先づ窺うて見よう

ト內へ入り

伯母樣、達者でござんすか。

小万　ヤア、甥の金太郎か。

戸平　久しう逢はぬゆゑ、案じてばかり居ましたわいなう。

小万　吐かしやんな。聞けば西國の大名屋敷へ、侍ひ奉公にうせたさうなが、素寒貧な形で今頃うせたは、しくじつて舞ひ戻つて來たのであらう。

戸平　イヤ、伯母樣、おれが來たはこなさんに、金儲けささうと思うてぢや。

小万　こりや耳寄りぢやわいの。

戸平　その儲け筋と云ふは、表に居らるゝ若い女中。

小万　ほんに、此方へ入らしやりませ。

多門　左樣なら免しなさんせえ。

ト入る。

戸平　何も遠慮はない程に、ズッと通つて、心得違ひのないやうに、茶漬でもしてやつたがよい。

小万　コレ／＼、金太や、マア、樣子を聞かせやらぬかいの。

戸平　この女中は、大阪天王子の巫子町で、白拍子のおくどのと云ふ大金持ちぢや。

小万　そんなら、こちとは同じ商賣。これはマア、ようござんしたなう。

多門　わたしや白拍子の、おくと云ふ巫子でござんす。內に金があり餘つて、藏の內で呻くのが氣になつて、そ

こで養生の爲、その家來……ではない、近所の此お人を賴んで、この京へ上つて來ましたのぢやわいなア。
小万　金の呻くので氣合ひが悪いとは、結構なものがお嫌ひぢやなう。
戸平　なんと、隱まうて置かつしやらぬか。一日の飯代が小判一兩宛、右から左ぢや。
小万　オヽ、隱まはいでなりませうか。
戸平　承知とあれば喜ばしい。マア、茶漬を喰はさぬかいの。
小万　飯も酒も、あの人には振舞はうが、われにはならぬ。
戸平　ヤ。
小万　おのればかりは、出て行き居れ。
戸平　ア、コレ、それではちつと算用が
小万　合はうが合ふまいが、出てうせい。
戸平　イヤ、出てうせまい。
小万　うせぬてゝ捨て置かうか……一昨日來い〳〵。
　ト締にて突き出し、門口を締める。
多門　アレ、あの人もどうぞ。
小万　ハテ、構はぬがよい。ドレ、茶を沸して、茶々漬でも進ぜうか。

戸平　喰ひ潰しに逢ひもなし、この返答には行き暮れて。
〽佇みてこそ。
　ト送りにて、戸平、最明寺のやうにして、橋がゝりへ入る。小万、釜の下を焚き付ける。
〽潜み居る、神ならぬ身はそれぞとも、知らぬ野道を二の町が、多門之助を尋ね佗び、慕ひ寄るべの門の口。
　ト向うより二の町、手拭を吹き流しにかぶり、走り出て、門口へ來り
二の　卒爾ながら、お賴み申しまする。
小万　誰れぢや。
　ト門口を明ける。
二の　私しは島原の者、聞き及んだ梓巫子は、お内方でござんすか。
小万　口寄せのお望みか。此方へ入らしやりませ。
二の　左樣ならお免しなされ。
〽云ひつゝ入る上がり口。
　ト二の町、入る。多門之助、顏を見て
〽ヤア其方は、と云ひたけれど、それと云はれぬ小万が手前、心であせるばかりなり。
小万　サア、寄せて上げませう。

多門　ア、、小万さま、こりや私しが寄せませう。お前は休んだがよいわいな。
小万　そんなら爰で仕掛けた縫ひ物。
多門　わたしは口寄せを始めようか……コレ、女中樣、目上か目下か、生口でござんすか。但しは死口でござんすか。
二の　アイ、わたしが爲には目上の方、お行くへが知れぬゆゑ、御無事にござるか、どこにござるか聞きたさに。
多門　よし〱、それならば生口を、隨分信を取らしやんせえ……天清淨、地清淨、內外清淨、六根清淨、雨の宮、風の宮、內宮には八十末社、外宮には四十末社、寄り來るや梓の神、集まつて來ましたわいなう……わしを大切に思へばこそ、問うてたもつて嬉しやなう。問はれて今の懷かしやなう。
　ト梓に乘るやうに云ふ。
二の　アイ、わたしも懷かしいは同じ事。なぜわたしも連れて退いては下さんせなんだぞいなア。
多門　廓に居續けをした時は、千年も萬年も添ふやうに思うて居た甲斐もなう、惡人どもの仕業ゆゑ、散り〱になつたわいの。二人が仲を外から嫉む嫉み草、梓の糸を繰り亂したやうに思やらうわいなう。
二の　サア、ゆかしい中にもお姬樣の事、もしやお屋敷へ行てゞもござらうにと、わたしやそれが嫉ましうてならぬわいなア。
多門　サア、これも何者やら殺して立退いたとの噂。それよりは其方の事、廓で別れて音信をしやらぬに依つて、おりやモウ、腹が立つて〱……恨んでばかりゐましたわいなう。
二の　便りをせうにも行く先は知れず、それでわたしや、廓を駈落ちして來たのぢやわいなア。
多門　サア、その駈落ちは、外の客の目當があつてゞあらうがな。
二の　わたしが心は變りやせぬ。わたしよりはお前の惡性。
多門　おれが惡性とは。
二の　云ふぞえ。
多門　聞かうわえ。
二の　エ、、お前は〱。
多門　もう此方も料簡が
　ト立ちかゝる。小万、多門之助を止める。
オ、、生口も破れ口ぢや。

ト縫ひ物を引ッたくつて、打ちつける。
小万　これはどうするのぢや。
　ト片付けうとするを
二の　エヽ、退かしやんせ。
　ト小万を引き退ける。多門之助、立ちかゝる顔を見て
　ヤア、お前は殿様。
　ト多門之助、ちやつと、綿帽子を下ろし
多門　イヽヤ、殿様の生き口を寄せた、白拍子のおべく。
二の　思ひがけない
多門　コレ、神上がりに奥の間で、なんにも云はずと、ご
　ざんせ。
〽打連れ奥へ、入る跡を。
　ト両人、奥へ入る。
小万　天王寺の巫子と云ふも、起居素振りの心得ぬ奴。一
　人は傾城。マア、取込んで置いたら金儲けになりさう
　な。ドリヤ、火を灯して看経でも申さうか。
〽なんでも取込む慾垢の、爪を伸ばして入りにける、表
　口には戸平と仁蔵、窺ひ戻つて。
戸平　金儲けとは耳寄りぢやが。
仁蔵　その工風は、お尋ね者の菊池多門之助ぢや。引ッ括
　つて、吉川大領さまの屋敷へ連れて行くと、御褒美のお
　金をせしめるぢやわい。
戸平　ハテナウ。
仁蔵　ところで、貴様が多門之助になつて、この内へ入り
　込むワ。爪の長い小万めが、金になるかと隠まひをる。
　そこへおれが行て、多門之助を引ッ縛ると、褒美になる
　と味いづくしを云ひ並べて、それから金を繰り出すのぢ
　や。
戸平　オット解つたが、あの小萬は、おれが伯母貴で、た
　つた今、にじり込んで、しくじつてしまうた。
仁蔵　なんぢやあらうと、面體を變へればよいワ……オッ
　ト、あるぞ〳〵。
　ト瓢箪の灸の看板を取つて来て
　これを頭へ
戸平　かぶるのか。
　ト瓢箪を頭へかぶる。
仁蔵　巧いワ。時に、なんぞ頬かむりを。オヽ、幸ひ、爰
　に紫の頬かむり。
　ト二の町が頬かむりを渡す。
　味いワ〳〵。

ト瓢簞の上より頬冠りをする。

仁藏　儲けた金は二つ山、隨分ともに、ぬからぬやうに。

戸平　合點ぢや〳〵。

仁藏　おりや隣に隱れてゐて、程よい所へ仕掛けるワ。サア、やりかけた〳〵。

〽仁藏は隣へ、出來合ひの、若殿めきて足ばた〳〵、走り込んで肩息吐息、行燈片手に主じの小万。

小万　コレ〳〵、どこの人ぢや。コリヤ、目を廻したさうな。餘所のお人イなう。

ト介抱する。

戸平　爰はいづく。某を介抱なせしは其方よな、神妙〳〵。氣を慥かに持たしやんせいなア。

小万　ても横柄な。こなさんは、どこのお人ぢやっ

戸平　我れこそは肥後の領主、菊池多門之助ぢやわい。

小万　ヤ、、、。

戸平　讒者の爲に罪せられ、跡より追手の者がかゝれば、二三日隱まうてくれい。世に出でなば今日の返禮、金をふんだんに與へるであらう。

小万　イヤモウ、金さへ貰へば、隱まはいでなんと致しませう。追手がかゝれば幸ひ、密かにあの一間へ。又お嫌ひかは存じませぬか、出來合はした麥の飯。

戸平　麥飯とは醍醐味、賞翫をせいでならうか。主、案內。

小万　先づお入りあられませう。

〽馳走の麥飯、吹替へを、一杯喰うて入る跡へ、來かゝる胴助、附け來る捕り手、前後に目配せ、押取り廻し。

ト胴助、葛籠を脊負つて出る。捕り手四人、圍んで

捕一　下郞め、待て。大友の下郞胴助、葛籠の內に隱したは、折琴姬であらうがな。

胴助　お姬樣は、人手にかゝつて、お果てなされたわい。

捕二　ヤア、うぬが妹、紅が、身替りに相果てし事知るまいと思ふか。

胴助　すりや、妹がお身替りに……知らなんだ。妹、出かした。よく死んだ。お姬樣が御無事なとは、嬉しや日本晴れがして來たわい。

捕三　ヤア、空とぼけして遁がれう爲か。

捕四　どうあつても胡亂な葛籠。

捕皆　此方へ渡せ。

胴助　この葛籠は、おらが古着。

捕一　然らば中も

捕皆　改めようか。

胴助　破れ葛籠もおらが為には城廓同然。改めさす事罷りならぬ。

捕一　見せねば曲者。ソレ。

ト葛籠に手をかけ引下ろせば、しや猪口才なと支ゆる胴助、匪け隔たつて蓋押取り、見れば着替への一張羅、もう免されぬと鐵拳偏向、眉間顔桁ぶたれて逃げ出す捕り手の大勢、いづくまでもと追うて行く。

ト胴助、葛籠を置き、皆々を追うて入る。

トこなたの門口、出て來る仁藏。

仁藏　灸屋の屏風に張つてあつたこの大津繪、これを玉に味いワ〳〵。

ト懐中して、内へ入り

小万どの、内にか。

ト小万、奥より出て來り

小万　オヽ、仁藏どの、吉左右か〳〵。

仁藏　イヤ、盆の上は跡へ廻し、よい儲け口を知らさうと思うて。

小万　儲け口とは。

仁藏　サア、菊池多門之助と云ふ、お尋ね者に繩を掛けて、吉川大領さまへ引渡すと、御褒美は二百兩。

小万　エヽ、そのお尋ね者は菊池多門之助。

仁藏　心當りがごんすか。

小万　サア、あるでもなし。ないでもなし、して、その多門之助を、見知つてゐやしやるか。

仁藏　イヤ、顔は知らねど、大領様から預かつたこの繪姿。

ト大津繪を出す。

小万　この頭の長い人が多門之助か。

仁藏　されば、人相世の常に替り、世に隠れなきお尋ね者。

小万　それに又、長い頭へ、梯子を掛けて登つてゐる人は。

仁藏　サア、それは。オヽ、さうぢや。それこそは菊池の大殿、焙烙頭巾は隱居の目印し。併し、親の方に構ひはない。

小万　頭へ梯子を掛けた心は。

仁藏　それにこそ仔細あり、梯子に登るの理を以て、都の方へ上つたと、繪圖で知らせた京家の計略。

小万　この繪姿買ひませう。なんと賣つて下さるまいか。

仁藏　値段がよくば賣りもせうかい。

小万　最前預けた二朱と板銀、爰にも小玉で五十匁ばかり。馴染み甲斐ぢや、賣つて下され。

仁藏　ト前の巾着より出してやる。
搦め捕れば二百兩儲かれど、こなさんの頼み、賣つてやりませう。
小万　それは忝ない。
仁藏　多門之助は、平の將門が末孫、それゆゑ一家一門は殘らず不死身。今にも多門之助に出會うたら、病に事寄せ、頭の上へ灸を据ゑても、熱がらぬが不死身の證據。
小万　よし〳〵、旨い〳〵。
仁藏　此方も味い金儲け。
小万　掘出しのこの畫姿。
仁藏　賣つて仕合せ。
小万　買うて德。
仁藏　エヽ、あやかり者め。
〽脊中をとんと喜ばせ、足早にこそ立歸る、サア、してやつたと咽喉ずんばい、何氣なき顏・一間の方。
小万　多門之助さま、ちよつとこれへ。
戸平　ナニ、某に對面とや。
ト上手の間より出て來りして、
麥飯はまだ出來ぬか。
小万　後程御膳も差上げませうが、お頭の此やうに長いのは、なぜでござります。
戸平　今更語るも恥かしながら、我れ幼なき頃、智惠文珠を深く祈り、その智惠、頭へ吹き出して、智惠病になつたのぢやわいやい。
小万　隣の灸屋の祕法を請けた大名灸、そのお頭へ、たつた一火の艾を用ひ、よい色男に仕立て上げて見せませう。
戸平　それは過分。
小万　左樣なら、据ゑかけませうか。
ト小万、大艾を捻り、頭へ灸を据ゑる。戸平、煙草をのんでゐる。
小万　申し、これ程の灸でも、熱うはござりませぬか。
戸平　至極快い。
小万　さてこそ將門が末孫。
戸平　ナニ將門とは。
小万　イヤサ、まさかの時は祕密の名灸、これからお脊中へ、寸を取つて下ろしませう……なんぞ寸を取るものは、オヽ、幸ひ、この荒繩で……油斷を見濟まして
ト繩にて縛る。
戸平　こりや、某をどうするぞいやい。

小万　お尋ね者の多門之助、寸分違はぬこの繪姿。
　ト大津繪を見せる。
戸平　こりや、配符が廻つたか。
小万　夜が明けたら、吉川の屋敷へ渡して金にする。
　ト繩の端を柱へ括りつける。
戸平　こりや又、あんまり。
小万　ドリヤ、寢酒でも吞みかけうか。
　ト納戸へ入る。
〽忘れんと、思ふ心の儘ならで、工合違うた縛り繩。
戸平　又しくじつたこの繩目。アヽ、いかう腹がへつて來た。檜山の火は檜より、我れも心の火を持つて、しがらむ繩目を燒き切るに、なんの手間隙。さうぢや〳〵。
〽硯の海の深かれと、筆と墨とが仲人して、立てし誓ひの緣の糸。
　ト此うち、うしろ手に硯を引寄せ、筆を口にくはへ、障子へ書かうとして屆かぬゆゑ、筆を捨て
障子が遠いか。括りやうが短いか。ハテ、なんとしたものであらう。オヽ、行燈の灯で、さうぢや。
　ト行燈へ摺り付き、いろ〳〵あるうち、瓢簞落ちる。
納戸より多門之助、二の町、出て

多門　ヤア、戸平ぢやないか。
　ト繩を解く、
戸平　御主人、二の町さま。
多門　何ゆゑ繩目に。
戸平　サア、あなたを縛つて褒美にすると、亭主めが强慾、爰には居られぬ。駈落ち〳〵。
〽うろたへ騷ぐ後より、立ち聞く小万が二度悔り。
小万　さては多門之助、傾城の二の町よな。訴人する、うせい。
〽摑みかゝるを支ゆる戸平、邪魔ひろぐなと投げ飛ばせば、二人が寄つて足小股、まろぶ小万を棕櫚帚、取つて戸平が滅多打ち、なぐり据ゑられ息ひい〳〵、この間に早うと門の口、起き上がつて駈け出るを、外からぴッしやり。
多門　二の町。
二の　殿樣。
戸平　なんにも云はずと、ござりませ。
〽命から〴〵落ちて行く。
　ト小万、表へ出て
小万　どつちへうせた。

文久二年九月中村座上演番附

〽西か東かうろ／＼きよろ／＼、前司太郎は姫君の御手を取つて、拔刀持ち、それと見るより。

ト太郎、折琴姫の手を引き、出て來り

太郎　跡より追手のかゝる者。この女中を、暫らく隱まうてもらひたい。

小万　そこ所ぢやない、慥かにこの道。

〽雲を目當に追つて行く。

太郎　ハテあわてた奴。

ト刀を納め

誠に姫君樣には、存じ掛けない御對面。

折琴　菊池のお家騷動より、多門之助さまのお行くへ知れず、自らも館を拔け出で、北嵯峨の乳母が所に、忍ぶ日數も百日餘り、多門之助さまに逢ひたさに、さまよひ出し折も折、追手の者に見付けられ、危い所へ前司太郎。

太郎　さてゝ左樣でござりましたか。いつぞや主家騷動の砌り、お供申して北嵯峨にて、お別れ申し、今日計らずお身の難儀のその場所へ、再び折よくお出會ひ申せしは、喜ばしう存じまする。

折琴　この上は多門之助さまの

太郎　お行くへを、尋ぬるでござりませう。

ト内にて、アリヤ／＼の聲、早太鼓を打つ。

あの人聲は又もや追手……幸ひの葛籠、暫らくこれへ。

〽有り合ふ葛籠に入れ參らせ、紐引きしむる間もあらせず、以前の捕手に仁藏が引添ひ。

仁藏　ソリヤ、逃がすな。

捕手　動くな。

〽逃がさじとこそ押取り卷く。

太郎　こりや、旅人に何ゆゑの狼藉。

仁藏　金藤太さまから注文の折琴姫、連れてゐるを頑張つて、訴人したのぢや。

捕手　尋常に姫を渡せ。

太郎　イヤ、此方に覺えはない。

〽葛籠をしつかと氣配り、目配り。

仁藏　さてこそ怪しい葛籠を詮議。

捕手　合點ぢや。

〽一度にかゝるを引退け／＼、行き過ぐれば引き戾す、止まれば急ぐ、在の細道砂煙り、蹴立てゝこそは。

ト立廻り段々ある。淨瑠璃の送りにて返し。

本舞臺、屋體西へ引き、松原を引き出す。雪降りか

かる。始終早太鼓、タテの見得にて納まる。

〽爭ひしが、勢もやらじと前後を圍ひ

捕手　察する所菊池の家來、前司太郎、この葛籠を。

〽武者振り付くを取つて投げ、投げ立てられて組子ども散り／＼ぱつと逃げ散つたり、折しも此方へ胴助が、戻りかゝつて、見付ける葛籠。

ト捕り手は臆病口へ逃げる。橋がゝりより胴助出て

胴助　盗人め。

〽頃は追手と氣は半亂、拔打ちに切り付くれば、かい潜つて腕首とらへ。

此奴、月を明けて盗み居れ。茶袋のやうなこの葛籠、置いてうせい。

〽と突き飛ばす、さては葛籠の主なるかと、斷わり云ふも追手の大勢、また引返して茅花の穗先、盗人仲間の喧嘩かと、拔けつくゞりつ胴助は。

葛籠さへ取りや云ひ分ないワ。

〽紐のしやらどけ幸ひに、ついと取られて身輕の太郎。

太郎　奴、預けた、頼んだぞ。

〽五人三人まくり切り、こなたの森へと追うて行く、跡にきよろりと。

ト太郎、捕り手を追うて入る。

胴助　おらが葛籠を、奴預けたと吐かした。イカサマ、盗人は、イケ太い者ではあるわい。

〽背にしつかり、主人とは、知らで隔つる葛籠の一重、神ならぬ身は白雪の、降りみ降らずみ定めなき、歩む向うへ又もや大勢。

ト捕り手出て

捕手　先刻の奴め、葛籠を渡せ。

胴助　エヽ、最前うぬ等が改めた葛籠。執念深い奴等だわい。

捕手　面倒な。息の根を。

皆々　奴め、くたばれ。

〽拔き連れ／＼切り込む刀、片付けてくれんずと、鋼作りのだんびら物、皆氣を呑まれ逃げ惑ふ、後へ廻つて駈け來る仁藏、してやつたりと。

仁藏　ヤ、天の與へのこの葛籠。

〽葛籠をかたげ、駈け行く向うに前司太郎、どつこいやらぬともぎ放し、二の句の當に頭轉倒。

太郎　先づ御安泰。

胴助　また盗人め。

太郎　イヤ、この葛籠には。
胴助　何を。
〽争ふ中から仁藏が引取り、また駈け出すを引戻せば、太郎が引き取り、仁藏がかゝれば胴助もぎ取り、せり合ふ所へ捕り手の大勢、葛籠一つを手玉に突き、渡せ戻せと三方が、松の茂みを姿かしこ、追ひ詰め／＼引返す。太郎胴助、兩方より、引ッ張り合うて振り返り、始めてとくと見合す顔。
太郎　ヤア、そちや胴助。
胴助　前司太郎さまか。
太郎　變つた所で
兩人　不思議の出合ひ。
〽少しは心、安堵の思ひ。
太郎　館の騒動は、ほゞ聞いたか。
胴助　妹の紅がお身替りに立ち、お姫様は無事なと聞いたもたつた今。
太郎　某も折擧さまに。
胴助　さては貴殿がお姫様を。
太郎　オ、サ、御安泰にましますぞ。
胴助　して、いづくに。
太郎　大勢を防ぐうち、この葛籠へ。
胴助　すりや、この葛籠に。
〽立寄る後へ群がる大勢。
太郎　性懲りもない捕り手の者。大事な葛籠、ほてさへさすな。
胴助　オ、サ、合點。
〽脊にしつかと、してこいまかせ、左右へ別れて眞向眉間。
捕手　葛籠を渡せ。
胴助　なにを。
〽葛籠く／＼もつゞら折り、踏み立て蹴立て。
トこの三重にて、左右に、皆々を取り投げ、見得にて留る。
太郎　行きやれ。
胴助　合點だ。
トよろしく　ひやうし幕
ト雪颪しにてツナギ、道具出來次第、引返す。
本舞臺、二間の庵室、中足、丸木の柱、二重の下手

圍爐裏、向う鼠壁、これへ開き戸の佛壇、上下とも石塔卒塔婆、下の方に紅梅、振りよき柳、柳の吊り枝、門口より花道へ通して雪布を敷き、すべて雪持ちの道具。爰に栗丸太の柱、竹編みにして開き戸の門口、屋體の軒より伊豫簀を下ろし、爰に宗玄、病み臥し、枕屏風を建て廻しあり、一セイ、雪颪しにて幕明く。

ト伊豫簀を揚げる。床の淨瑠璃になり

〽雪は頻りに降り積る、深山隠れの軒の庵、北岩倉の宗玄が、爰にも住める萎れ衣、拂はゞやがて消えやせん、山賤の身にも應ぜぬ物好きは、薪にちよつと梅の枝、山より山の戻り道。

ト向うより、ちよん兵衛、柴の高荷を脊負ひ、出て来り、門口にて

ちよ　宗玄どの、内にござりますか。

〽どつかと聲、病の床に打臥せし、疲れ果てたる枕を離れ。

宗玄　オヽ、ちよん兵衛どの、ようごさつた。入らつしやれ〳〵。

ちよ　そんなら、免さつしやれ。

〽雪打拂ひ。

さて、氣分はどうでござる。食はいけますか。くど〳〵、思はつしやるな。村中が寄り合うて、觀音講を結んだから、本堂は建ちまする。京へ夜念佛に出りや、しつかいこなたの願ひは叶へてやります。病は氣から發るげな。氣を晴らさゝうと思うて、谷間のこの梅、折つて來ました。

宗玄　これはお志し、直ぐに一輪生けへ。

ちよ　この寒いのに火の氣がござらぬか。柴をくべて温まらしやれ。

宗玄　アヽ、そりや無用にさつしやれ。老人の寒氣もいとはぬその刈り柴。

ちよ　ハテ、譯もない。身内が凍えては病が重る。ドレ、焚いてやりませう。

宗玄　イヤ、薪になすのは、ソレ、その梅ヶ枝。

ちよ　ヤア、こなたは氣は違ひはせぬの。來る者も〳〵、この花が樂しみゆゑ、枝一本、佛様へも供へぬ人が、折つて焚くとは何事。

宗玄　イヤ、物に狂ひはせぬが、心に思ひなくてこそ。

〽月雪花の詠めもあり、心の障り切つてたべ。

ちよ　この柴が氣に入らずば、氣に入つたやうに、この梅の枝。ドレ、下ろしておまさうか。

〽老木の親仁も鐵作り、磨ぎ立つ鎌で、くわつち〳〵、ゆすり下ろして

ト軒づらの梅の枝を下ろし、囲爐裏へくべ

サア、焚き付けた次手に、おらもあたりませう。

〽へし込み押燻べ焚き付ける、囲爐裏の梅花の薫りより、心の花香よう出た茶。

ト兩人、焚火にあたりゐるうち、茶煮える。

サア、茶が出ました。

ト茶を汲んで出し

イヤモウ、我れらも暖まつた。宗玄どの、休まつしやれ。跡の火は、わしが消して置きませう。

宗玄　そんなら、こなたの進めに任せ、とろ〳〵と。

ちよ　さうさつしやれ〳〵。

宗玄　そんなら頼みましたぞえ。

〽云ひつゝ又も傍なる、臥床にこそは入りにける。

ト宗玄、蒲團の上に直り、屏風を立て廻す。

ちよ　コレ、冷えぬやうにさつしやれや。

〽降り積む雪を踏みしめ〳〵、葛籠を脊負ひ胴助が、來かゝる庵、これ幸ひと戸口より。

ト胴助、葛籠を脊負ひ出て

胴助　お頼み申します。

〽聲聞きつけて

ちよ　誰れぢや〳〵。

胴助　山道に踏み迷ひ、連れにははぐれ、日暮れにも程近しと、心が急げば精々草臥れ、暫らくのうち、緣先なと、貸しては下さるまいか。

〽頼むその間も氣はわくせく。

ちよ　そりや困るであらう。遠慮なしに掛けさつしやれ。

胴助　左樣なら御免下され。

〽御免々々と内に入り。

ト胴助、緣端へ葛籠を下ろす。

ちよ　見れば、重たさうなその荷物、雪道で難儀さつしやれたであらう。

胴助　イヤ、御推量下されい。

ちよ　サア、手足なと溫めて、澁茶なと參らつしやれ。

胴助　それは千萬忝ならござる。

ちよ　して、こなたは、何れへござらつしやるのぢや。

胴助　手前は、丹波路より、京地へ戻る者でござるが、降

り積む雪に踏み迷ひ、やう／＼これまで參つてござる。
ちよ　イヤモ、住み馴れた者でさへ、吹雪の折には、踏み迷ふは間々ある事。マヽ、ゆつくりと休んで行かつしやれ。
胴助　〽山家氣質の親仁の素振り、胴助は氣も落ちつき。マア、お庇さまにて溫まりました。私しも連れの者が一人ござりましたが、途中にて見失ひ、定めて迷うて居りませうと存じますれば、ちよつと尋ねて參りたうござるが、この葛籠を暫くのうち、お預かりなされては下さりますまいか。
〽賴みに此方も打うなづき。
ちよ　そりや早、易い事ぢやが、待たしやれや。
ト宗玄に云はうかと思ひ入れあつて
イヤ、暫しのうちなら、預かつて進ぜませう。
胴助　それは千萬、有り難う存じまする。
ちよ　そこらへ片寄せて置かつしやれ。
胴助　左樣なら、斯樣いたして置きませう。
〽預ける軒は宗玄が、住居と知らず、戀ひ慕ふ、姫とも知らぬ白雲の。
左樣なれば、この家の御亭主。

ちよ　旅の衆。
胴助　ドリヤ、行て參りませう。
〽道引返し急ぎ行く、跡にちよん兵衛、空うち詠め。
ちよ　オヽ、雪も小止みになつた。この間に歸りませう。
コレ、宗玄どの、わしはモウ、お暇いたしませう。さうして今、旅の奴どのから葛籠を預かりましたが、戻つて來たら返してやつて下されい。隨分大事にさつしやれや。
〽云ひつゝ表へ立出でゝ。
コレ、門を立てつけて置きます。跡で締りをさつしやりませ。
〽跡の締まりと世話やき親仁、馴れし山道戻り行く、宗玄は何氣なく起き上がり、あたりを見廻し。
宗玄　ちよん兵衛どのを、この家の人と思ひしか、預けて行きしこの葛籠、いづくの人か知らぬ山道、迷ふと云ふ字は、誰が書き初めしぞ。
〽また思ひ出す煩惱の、いと物淋しき遠寺の鐘。
ハヽア、今日も暮れたか。
〽朝に谷の流れを呑み、夕は肱を枕となし。
アヽ、忘れたい／＼、と思ふより只

〽忘られぬ折琴姫。
ア丶、思ふまい〳〵。ドレ、御灯でも上げませうか。
〽云ひつゝ立つて行燈へ、灯す火影はさゆれども、心は暗き佛壇の、扉を開く、本尊は、生けるが如き姫の繪姿。
オヽ、さぞ氣詰りにござらうなう。昼も顔を見たけれど、流石は人目、尋ぬれば里を離れた庵室、遠慮はない。物を云うて下されいなう……其方がくれたこの柴船、忍び寄つたが因果の始まり。もう、惚れて惚れて、身も世もあられぬわいなう。これ程云ふが通じませぬか。たとへ繪姿なりとても、其方の五臟へ分け入り、思ひを晴らさで置くべきか。ア丶、恨めしの折琴姫。
〽罵しる聲も恐ろしく、側にこたへて葛籠の内。
ト葛籠の内にて
折琴　ハア丶。
〽ハアと叫びし聲に愕り。
宗玄　ハテ心得ぬ。今のは慥かに女の聲。もしや繪姿が物云うたか。
〽怪しみあたりを見廻し〳〵、葛籠にきつと目を附けて。
オヽ、いま預かりしこ葛籠。ハテ、訝かしい。
〽合點ゆかずと紐引切り、蓋明くれば内よりも、走り出でたる折琴姫、透かさず飛び下り庵の戸、ハタと塞がる胸の内、此方も愕り夢見し心地。
ヤア、姫か。よう來て下さつた。こなたに逢ひたい逢ひたいの、心が通じて、嬉しうござるわいなう。
〽慕ひ寄る程身を縮め。
折琴　最前から葛籠の内で、様子を聞けば自らを、それ程までに思うて下さる志し、嬉しいは嬉しいけれど、多門之助さまと云ふ、殿御のある身。愛の道理を聞き分けて、免して下され、宗玄どの。
〽涙ながらに詫びければ、宗玄は只默然と打詠め。
宗玄　思ひ切れとは胴慾ぢや。わしがこの手をヂッと取り、多門之助どのぢやと思ひ込み、戀しゆかしの戯れ事、よもや忘れはさつしやるまい。算へて見れば一歳餘り、片時も忘れた事はござらぬわいなう……コレ、この佛檀を見て下され。別れし時のこなたの姿。
〽重ね扇の比翼の模様、數も十本、要のつがひ。
こなたとおれも、つがひ緣起。思ひ込んだが凡夫心。
〽六つの年から今年まで、堅固に出家勤めしに、愛看の道に搦まれ、佛祖の法恩、日過の勤行、兩親の忌日命日も、いつかな勤めぬ。

三千世界に宗玄が、望みと云ふは、たつた一つ。聞いて下され、情ぢやわいなう。

〽泣きつ口說きつ一心の、物狂はしき有樣に、姫は心も消え入るばかり、生きた心地もせざりけり。

ト姫「ハア、」と俯向く。

エヽ、わしにばかり物云はせ、何が怖うて慄ふのぢや。アヽ、道理々々、まだ如月の殘の吹雪、雪を凌ぐこの園爐裏。ドレ、焚染くべて參らせう。

〽云ひつゝ枯れ柴さしくべて。

コレ姫、爰へござつて、あたらつしやれ……サア／＼これへ。

〽サア爰へと、情ある程猶うるさく、逃げ行く首筋鷲掴み、引き戻して身を慄はし。

女め、逃げるとて逃がさうか。最前より云ふ事は、うぬが耳へは入らぬか。もう斯うなる上からは、應と云へばその通り、但しは否か。

折琴　サア、それは。

宗玄　應と云ふか。

兩人　サア／＼／＼。

宗玄　返事はどうぢや。

〽怒れる聲は噛み付く如く、肝にこたへて折琴は、身をくの人に敬まはれ、傅かれぬる御身にも、獄卒の口の憂き難儀、餘所の見る目も痛はしゝ。

もう、この上は

〽我れを忘れて驅けよるを、支はることなたはかよわき女、既に斯うよと見えける所へ、雪を蹴立てゝ戻りし胴助、内には女の叫ぶ聲。

ト胴助戻つて、門口をいろ／＼すれども、明かぬこなし。

〽さてはと勇力あり／＼／＼、當るを幸ひきつかせと、握んで投げる荒氣の胴助。

胴助　ヤア、あなたは姫君。

折琴　其方は胴助、危ふい所へ。

胴助　さてはこの家の主めが、葛籠を解いて姫君を。

折琴　サア、主と云ふは宗玄どの、其方、よう戻つてたもつたなう。

〽云ふもおろ／＼泣きじやくり。

胴助　奴めが參るからは、お氣遣ひなされますな……イヤナニ宗玄どの、姫君を預け申した、お禮は詞に盡されぬ。若殿樣の在所を求め、めでたく御祝言済む上は、改めて

今宵のお禮。心も急けばお暇申す……サア、お越しなされませ。

へいざ御供と立ち出づるを。

宗玄　イヤ、そりやならぬ。其方はいつぞや愚僧をば、伴ひ行かれし奴どの。折琴姫と多門之助、祝言さすとは妬ましい。金輪奈落餘人には、添はさぬ／＼。

胴助　サ、清僧なりと思ひ込み、お頼み申して主家の無事を、計らはんその爲に、藏人どのゝ意に從ひ、共々下郎が誘ひしも、却つて今では鵙の嘴。その執念をさつぱりと、思ひ止つて下され、宗玄どの。

へ事譯云へど宗玄に、思ひ込んだる執着心。

宗玄　否だ。

胴助　エ、。

宗玄　奴どの、こなたが大友の館へ勸め、連れ行かれしが、戀慕のきづな。思ひがけなく來りしは、よく／＼深い緣の端。こりやモウ釋迦でも、見遁がせぬわやい。

へ傍若無人の一言に、姫君大事と氣を取り直し。

胴助　ナ、尤もだ。そりや全く兩家安穩を思うて、假にこなさんを頼み、祝言はしたれども、聟君のある折琴姫。妾の道理を辨へて、姫君の事は思ひ切り、出家堅固に致されよ。下郎が手を下げ、頼む／＼。

へと赤心の、詞を此方は耳にも入れず。

宗玄　オ、、その婚姻が氣に入らぬ。手足も冷える雪の夜に、どうマア、今宵歸されう。日頃の思ひを晴らさにや置かぬ。

胴助　すりや、これ程までに頼んでも。

宗玄　オ、、くどい。

胴助　ムウ。

へ威しに柄へ手をかくれば。

折琴　ア、コレ、憎いやうでも御出家に、過ちさせては罪深し。

へ透かしなだむる姫君の、詞をしほに胴助は。

胴助　エ、、姫君の仰せなくば、一討ちにしても飽き足らぬ奴なれど、この後、思ひ切るとあらば、命ばかりは助けて遣はす。

へと云へども此方は聞き入れず。

宗玄　イヤ、思ひ切らぬ。所詮この世で叶はぬ戀……サア、殺せ。姫ゆゑなれば、いとはぬ／＼。

胴助　うぬ。

へまた立寄るを引き退くる、途端に落ちる肌の守。

ト宗玄、錦の袋入りの守を落す。胴助、これを拾ひ見る。

宗玄　我れ幼少より劍難の相あるゆゑ、出家になさば遁がるゝと、父母が一句も今この時……サア、切れ、殺せ。

〽身を摺り寄せる宗玄が、面ざしつくづく打見やり。

胴助　コリヤ宗玄、もしやこなた幼名を、飾磨の曾根松と云ひはせぬか。

宗玄　オヽ、我が幼名を知つた其方は。

胴助　オヽ、その幼名を知つたのは、コレ、この荒磯裂れの筐の守。

　ト守を見せて

其方が兄の、曾根吉ぢやわいやい。

宗玄　ムウ、そんならこなたが……幼少の時別れたる、實の兄であつたるか。

胴助　ようマア、無事でゐてくれたなア。

折琴　そんなら宗玄どのは、胴助が弟であつたよな。

胴助　斯く名乘り逢ふ上からは、兄が爲には主人の姫君。サア、誤まつて改むるに、憚りなき事ながら、御免を願うて一念發起、一時も早く、お詫び〳〵。

〽勸むる兄が詞もきかず。

宗玄　イヽヤ、詫びぬ。兄の意見もいつかな聞かぬ。戀に上下の隔てはない。

胴助　思ひ切らずば、是非に及ばぬ。

〽刀引き拔振り上げる、刃の下に身を寄せられ、流石同腹同性の、血筋の切端に刃金もなまり。

エヽ、それ程までに、ようも天魔が魅入つたな……コリヤ、其方が妹の紅るはナ、お姫樣の身替りになり、女に稀れなる忠義の最期。それに引きかへ弟は、主君を惱ます極惡人、髮下ろさせたは六つの時、一子出家すれば、九族天に生ずと聞く。おのれは親を奈落へ落すか。エヽ、茲な不忠者めが。

〽浮かむ涙は兄弟が、血筋の縁の亡き魂の、位牌取出し、目先に突き付け。

利秋居士、利照信女、肌身離さぬ父母の戒名。兩親の誡め。土性骨に覺え居らう。

〽位牌を持つて散々に、打たるゝ身より打つ兄が、積る思ひは山々の、雪にも勝る涙なり、宗玄は折檻の、位牌を手に取り打守り、移り變りし兩親の、命日忌日の弔らひも、

宗玄　今日まで忘れ過せしは、これも誰れゆゑ、折琴姫ゆ

大正十一年四月新富座所演

中村吉右門の宗玄　片岡市藏の胴助　中村福助の折琴姫

る。

両人　ヤ、

宗玄　堕落なしたる上からは、思ひ切られぬ。

折琴　エヽ、

胴助　エヽ。なんたる因果な、おのれはなア。

〽積りの雪に胴助も、呆れて涙も泣き伏す姫、折しも雪の山風に、蹤を迷ひ、飛び来る山鳥。

折琴　アレエヽ。

ト鳥飛び違く拍子に、宗玄の方へ行くを捕へ

〽宗玄見るより、きつと捕へ。

ト山鳥を捕へ

宗玄　雪に路を失うて、迷ひ来りし山鳥の、迷ひは同じ宗玄が、破戒の罰、これを見よ。

〽引き裂くしゝむら、鬼一口。

ト鳥を引裂き、肉を喰ふ。

〽含みし血汐を佛壇の、姫が繪像に吹きかくれば、焔となつて炎々たり。

ト大どろ／＼になり、佛檀の畫像、燃える。姫は悶絶する。胴助、介抱する事。

胴助　殺生戒は魔界の所業、深くも魅入りし汝が悪行、忠義の爲だ、覺悟なせ。

宗玄　斯う云ふからは、生けては置くまい……サア殺せ。

胴助　オヽ、そウこれまで、

〽思ひ切つて切り込む白刃、抜けつ潜りつ兄弟が、この世からなる修羅道の、降り積む雪は八寒地獄、閃めく劍は呵責の笞、挑み爭ひまた姫の、轉ひし姿に飛びかゝるを、取り直して滅多打ち。

ト姫を楯に、面白き立廻りあつて、トヾ正面の壁を打ち抜き、キツとなるを、知らせにて、この道具、ぶん廻す。

本舞臺、屋體の裏手になり、一面の萩原、すべて雪持ち。上手よき所に、柳の立ち木、同じく吊り枝、床の切りの見得より、下座の鳴り物になり、道具納まる。

ト両人、よろしく立廻り、トヾ、宗玄の脇腹へ突ッ込み、宗玄、落入る。胴助、姫を介抱する。これにて心付き

折琴　して、宗玄どのは。

胴助　據ろなく下郎めが、手にかけました。

折琴　アヽ、不便な事をしやつたなア。

胴助　斯うして置けば犬の餌食。せめては死骸を、さうおやさうおや。

ト胴助は、宗玄の死骸を、柳の元へ埋める。折琴姫、墓所にある、樒水、茶碗など持ち行く。胴助はこれを供へる。

折琴　自らゆゑに敢へなき最期。

胴助　これも定まる皆因縁。

〽其まゝ手を取り立ち出づる。

トどろ／＼になり、兩人、花道へ行くと、スッポンより、宗玄の亡靈、顯はれる。胴助、刀を拔き、これを拂ふ。これにて宗玄の姿、消える。

サア、ござりませ。

ト手を取り、早足に向うへ入る。

〽彼所をさして駈けり行く。

ト又ドロ／＼になり、柳の元へ、宗玄顯はれ、胴助、折琴姫、連理引きになり、戻り來る。

〽怪しや吹き來る風につれ、引戻されて兩人は。

胴助　ヤヽ、わりや迷うたな。

宗玄　オヽ、迷うた／＼。つれなき心の折琴姫、共に奈落へ連れ行かん。

胴助　出家に似合はぬ汝が惡念。成佛得脱、立去れ／＼。

ト刀を拔き、切り拂ふ。宗玄、連尺にて、日覆へ上がる。大ドロ／＼になり、燒酎火燃える。

〽怪し恐ろし。

ト床の三重、大ドロ／＼にて、三人、見得よく

幕

菊池大友姻袖鏡（終り）

解説

渥美清太郎

人形歌舞伎即ち義太夫狂言は、ズッと後から歌舞伎團へ飛び込んで來たものであるが、その勢力は頗る强大なもので、今日では寧ろ純粹の歌舞伎よりも、その本據らしく觀られてゐる位で、歌舞伎史の重要な頁を占められる譯である。その中でも時代物は殊に勢ひが强くて、現存歌舞伎時代狂言の殆んど七分を占める程であるから、その戲曲化された臺本は斯うした戲曲集にとつて何としても大立者である。その時代狂言集が一册では足りない、どうしても二册欲しいといふ大方の御希望に應じて一册殖やしたので、重要な義太夫狂言を數十種集め、現今でも非常に上場數の多いものと、上場數は少ないが面白いものとを七分三分位の割で両册へ區分した次第である。

人形芝居と歌舞伎芝居とは、種々なる點でお約束が違つてゐるから、義太夫の原作を全部やるといふ場合は非常に少ない。また人形通りの舞臺といふ事も殆んどなく、歌舞伎劇に化せられた場合には必要なる添削が必らず施されてゐる。それらが又現今では漸次淘汰されて來て、今日の舞臺に見られるのは全く一篇の義太夫の一部分に過ぎない場合が多い。そこで本册に收容するに際しては、成べくその戲曲の眼目の場面、今日でも行はれる幕だけを採る方針を原則としたが、戲曲に依つては、餘り上場されない場面でも非常に面白い幕とか、筋の上に極めて重要な幕とかは、成べく入れる事にしたのである。

義經千本櫻（よしつねせんぼんざくら）

「忠臣藏」「菅原傳授」と並んで義太夫狂言の三羽烏と稱してもいゝ程、人に知られた狂言で、延享四年十一月十六日から、大坂竹本座の舞臺へ初めて上つた。竹田出雲、三好松洛、並木千柳、三人の合作になつた五段物である。

大序は「大内の場」で、義經が八島の戰ひから歸つて參内すると、平家の一門の中で知盛維盛教經の首が無いのが問題になる。姦惡な左大臣朝方は、勅諚と稱して初音の鼓を義經に與へ、暗に賴朝を討てと命じる。義經は勅諚を背く譯にはゆかず、兄を討つ事もならぬ苦境に陷り、一生鼓を打たぬ決心で拜領退出するのが發端で、原作が初めて歌舞伎へ移入された頃はこの場も舞臺に上つたらしいが、後には全然上場しなくなつた。初段の中は「北嵯峨庵室の場」で、維盛の御臺若葉の內侍が、夫が高野山にありと聞き、六代君と小金吾を連れて出立する場面で、爰も殆んど上場を見ない。切は本卷收錄の序幕になつてゐる「川越上

使の場」である。第二段目は「伏見稲荷」から「大物浦」、第三段目は「椎の木」から「鮨屋」これ等はいづれも今日上場される。四段目の口は「道行初音旅」で、義太夫には大抵附き物の景事であるが、江戸で上場される場合には、單調を破る都合から、景事は大抵江戸固有音樂の地に直して純舞踊劇化する習慣なので、本巻にも常磐津の淨瑠璃が入つてゐるのである。同じく中は「吉野藏王堂の場」で、河連法眼が義經を隱まつた事について、覺範や衆僧と論議をする場面であるが、同じ意味から本巻には缺けてゐる。切は狐忠信の件であるが、終末の方は大分原作とは行き方が違つてゐる。これ等は歌舞伎へ移入された結果、特に江戸歌舞伎では斯うした場合、固有の荒事式の形を採るので幕切れなぞ「かた〴〵さらば」になつてゐる。これらが義太夫と歌舞伎の相違である。歌舞伎では爰までしか演じないが、原作には五段目に「吉野山の場」があつて、忠信が義經と名乘つて奮戰する所へ、朝方の姦惡を見出した川越太郎が朝方を引摺つて來る。萬事はこの惡公卿の仕業と判明し、教經が朝方を切つて忠信に討たれるといふ、院本常套の終末になつてゐる。これは原作にしても、ほんの申し譯に過ぎぬ場である。

　この狂言を最初に歌舞伎で上演したのは三都でなく、寛延元年正月、伊勢の芝居であつたが、忠信が山本小平次、銀平と覺範が片岡仁左衞門であつたといふ以外、役割は判明しない。次は寛延元年五月五日初日の中村座で、この時の役割は

　銀平(中村傳九郎)辨慶(中島三甫右衞門) 小金吾(松島八百藏)内侍(嵐玉柏)義經(歌川四郎五郎)川越(市川勘十郎)土佐坊(鳴見五郎四郎)大之進(澤村藤三郎) [illegible]の尼(市川團五郎)小せん(澤村歌菊) 彌左衞門女房(澤村源次郎)靜(澤村小傳次)典侍局(尾上菊五郎)お里(嵐富之助)川連、梶原(市川宗三郎) 彌助(中村七三郎)權太、忠信、源九郎狐(澤村長十郎) 彌左衞門、覺範(市川海老藏)

一ケ月遲れて、寛延元年六月の森田座でもこの狂言を上場した。その役割は

　銀平、權太(中島勘左衞門)辨慶、覺範(大谷廣右衞門)義經(富澤辰十郎)小金吾(佐野川千藏)靜(嵐吉彌)典侍局、忠信、源九郎狐(芳澤あやめ)川越(坂田藤十郎)彌助(花井才三郎)お里(岩井喜代太郎)内侍(三條勘太郎)小せん(瀧中甚之助)梶原(市川和十郎) 土佐坊(宮崎十四郎)川連(津打門十郎)彌左衞門(岩井半四郎)

京坂での上演は、寛延元年八月、大坂中の芝居が初めである。この時の役割は

　義經、彌左衞門女房(坂東豊三郎) 小金吾、彌助(大和

屋甚兵衛)卿の君、お里(三保崎富松)典侍局、飛鳥(富澤喜代崎)梶原、藥醫坊(村山平九郎)辨慶、權太(中村歌右衞門)銀平、川連(市川團藏)静(芳澤崎之助)忠信、源九郎狐、川越(嵐三十郎)彌左衞門、覺範(姉川新四郎)龜井(市川龍藏)

以後は殆んど毎年三都及び地方に上演され、今日に及んでゐる。近頃では全部を通して上演する場合は少なく、大抵はその一部ぎりである。

道行を江戸淨瑠璃に直した初めは、寶暦十二年森田座で佐野川市松が忠信をやつた時らしいが、正本が無いので判然しない。次は明和四年七月市村座の「道行初音旅」で、市村羽左衞門の忠信に瀨川菊之丞の静、常磐津若太夫の出語りであつた。この以後常磐津では幾種類も出來てゐるが、安永六年四月森田座上演の「雪颪卯花籬」と、享和三年八月市村座上演の「戀中車初音旅」とが最も好評で、後に殘つたが、現今では殆んど廢曲になつてゐるらしい。富本では文化五年五月中村座上演の「幾菊蝶初音道行」が最も有名で今日まで殘つてゐるが、今では富本が衰微してゐるので、これを殆んど其まゝに移調した淸元を使ふのが通例になつた。何かの都合で常磐津でやるにしても、矢張り富本の作曲を踏襲してゐるのである。

本卷に收錄した臺本は、文政八年五月に市村座で上演した時のものである。淨瑠璃は「新曲初音旅」で、この時の新作である。

權太、銀平(關三十郎)卿の君、小金吾(岩井紫若)梶原(淺尾友藏)大之進、六藏(坂東三津右衞門)飛鳥(瀨川路之助)丹藏(惣領甚六)川連、彌左衞門女房(市川門三郎)內侍(中山龜三郎)相模五郎(中山富三郎)辨慶(坂田半五郎)小せん(小佐川常世)おちよぼ(坂東玉三郎)義經(坂東彥三郎)彌左衞門(嵐冠十郎)お里(岩井半四郎)靜(瀨川菊之丞)川越、忠信、源九郎狐、彌助、典侍局(坂東三津五郎)太郎松(市村羽左衞門)

斯ういふ役割であつた。この頃既に權太や覺範の件へ、歌舞伎化された仕草やセリフが澤山入つてゐる事に氣が附く。今日では權太の幕なぞ、義太夫の原作とは非常に隔つた世話物風になつてゐるが、これは代々の俳優の工風が積り積つて斯うなつたのである。猶、この時の典侍の局は俳優の都合で老女でやり、銀平の母といふ事になつてゐたがそれは餘り異例であるから、これだけは原作に依つて直して置いたが、他は臺本の通りである。この臺本で見ると、文政八年から今日までの間でさへ、可成り演出に變遷のあつた事が解る。

菅原傳授手習鑑（すがはらでんじゆてならひかゞみ）

延享三年八月に竹本座へ書き卸された淨瑠璃で、竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作になる。非常な好評で、翌年三月まで打ち續ける程の當り方であつた。近松の「天神記」が粉本になつてゐるやうであるが、中心になつてゐる松王梅王櫻丸三子の兄弟の趣向は、當時大坂の天滿に三子を産んだ女があつて、當局から前例により五十貫文の鳥目を貰つたのが大評判であつた所から、これを菅公の「梅は飛び」の歌に思ひ寄せて當込んだものである。

誰れも知つてゐる事であるが、この作では出雲松洛千柳の三人が相談の結果、互ひに持ち場を骨肉の別れの趣向と定めて書き合つたところ、松洛は道明寺で菅公と苅屋姫の生別れ、千柳は賀の祝で白太夫と櫻丸の死別れ、出雲は寺子屋で松王と小太郎の死別れが出來て、いづれも趣向が犯し合ふ事なく、三つとも勝れた筋なり文章なりに書けてゐる所は、慥かに名作と稱されるべきである。

例に依つて五段物で、大序は「大内の場」「加茂堤の場」「傳授の場」「門外の場」で、各幕歌舞伎になつても有名な場で、本集にも入つてゐるが、傳授の場は尾上家と澤村家の型では、丞相と源藏を早替りで勤めるのが例で、この場合は局が丞相の代りをやる事になつてゐる。また門外の場へ出る梅王は、俳優の都合で、俱梨迦羅太郎で演じる場合もある。加茂堤の場にも原本でゆくと、松王梅王が出るのであるが、歌舞伎でこれを省略するのは止むを得ない。丞相の御臺の名は原本にない。歌舞伎では近頃は園生の前とするのが普通で、時に花園御前とする場合もある。

二段目の初段は「道行詞甘替」で、これは櫻丸が齊世の君と苅屋姫の供をして、安井の岸へ菅丞相に逢ひに行く道行で、櫻丸は飴賣りに身をやつしてゐる景事である。中が「安井の岸の場」で、輝國の計らひで丞相は、風待ちの間に伯母の覺壽の許へ宿る事になる。齊世の君と姫が來て歎くが丞相は逢はない。結局、齊世の宮は櫻丸が供奉して法皇の御所へ赴き、苅屋姫は立田に連れられて土師の里へ行く件で、切の「道明寺の場」へ移るのである。

三段目は「車引の場」から「賀の祝の場」であるが、「車引」の場が江戸歌舞伎へ移つてからは、固有の荒事が加味され、今日での型になつた事は、義太夫劇の歌舞伎化された好例證である。この場に杉王丸といふ、原作にない舍人が出るが、これは松王丸の出を引立たせる爲に歌舞伎で寛政頃から作り出した人物である。本家の人形でも近頃は虎王丸といふ舍人を出して、代役をさせてゐる。

四段目は「筑紫配所の場」「安樂寺の場」「嵯峨隱れ家の場」「寺子屋の場」で、本卷に收錄された「天拜山の場」は

歌舞伎の方での創作である。この安樂寺の塔は、嵯峨の山に丞相の御臺が隱れてゐる一睡の間の夢といふ趣向で、爰には春と八重とが仕へてゐる。時平の家來星坂源吾が御臺を奪ひに押寄せる。八重が防戰して遂に死んでしまふ。源吾が御臺を淩つて行かうとする所へ山伏が現はれて御臺を奪つてしまふ。これは松王丸で、次が寺子屋に變るのである。

　五段目は「大内の場」で、時平が玄蕃の似せ首を持つて歸つたのを怒つて殺し、暴れに暴れる所へ丞相の靈は雷となつて現はれ、櫻丸夫婦の亡靈に惱まされ、遂に時平は亡びてしまふ。丞相の靈は天滿天神と崇めらるゝ事になり、めでたし〳〵と納まるのであるが、例の法性坊阿闍梨も現はれて活動するのである。人形では爰へ天神の拜殿を現はし、看客に拜禮させたものであるが、歌舞伎では舞臺に上つた事がない。

「菅原傳授手習鑑」が初めて歌舞伎に移入されたのは、人形で上演されてから僅か二ヶ月後、延享三年十月の京都淺尾元五郎座であつた。この時の役割は

　菅丞相（榊山黨助）櫻丸（大和山林左衛門）源藏（民屋十三郎）覺壽（淺尾元五郎）時平（榊山四郎太郎）春（榊山十太郎）戸浪（三保木七太郎）八重、千代（中村富十郎）松王丸（櫻山四郎三郎）

大坂での初上演は延享四年八月、中の芝居で、嵐三十郎、市川團藏、三桝大五郎、嵐七五郎、中山新九郎等の一座であつたが、嵐三十郎の菅丞相以外、役割は不明である。

江戸では延享四年五月に中村市村兩座で競爭的に初上演をした。この折、中村座の方の役割は

　菅丞相（中村七三郎）時平（中島勘左衛門）輝國（花井才三郎）覺壽（澤村源次郎）兵衛（嵐音八）玄蕃、宅内（仙國左十郎）松王丸（大谷鬼治）千代、櫻丸（嵐小六）八重（澤村小傳次）梅王丸（中村傳九郎）春（玉澤才次郎）苅屋姫（嵐玉柏）宿禰、白太夫（市川宗三郎）御臺千里御前、戸浪（芳澤あやめ）源藏、四段目の雷神（市川海老藏）

市村座の方は

　菅丞相（岩井半四郎）時平（中島三甫右衛門）櫻丸（佐野川市松）八重、御臺（吾妻藤藏）松王丸（中村助五郎）千代（瀨川菊次郎）宿禰（澤村喜十郎）兵衛（鶴屋南北）春（山本みやこ）苅屋姫（瀧中秀松）輝國、平馬（大谷龍左衛門）白太夫（山本京四郎）戸浪（嵐富之助）源藏（荻野伊三郎）梅王丸（市村龜藏）四段目の菅丞相（瀨川菊之丞）

この時は四段目の丞相を作者津打菅祈が女に書き直して演じた。中村座の方は雷神になる所は荒事だといふので、和事の七三郎は、わざ〳〵この場だけを海老藏に讓つたほどであるが、此方は女に書き直した、對照が面白い。

森田座でやつたのはズツとその後、寛延三年四月であつた。この時の役割は

覺壽(津打門十郎)苅屋姫(三條勘太郎)輝國(坂東礒五郎)八重(山本岩之丞)春、戸浪(玉澤才次郎)櫻丸(吾妻藤藏)梅王丸(嵐音八)千代(嵐吉彌)丞相(富澤辰十郎)御臺うてなの前(嵐富之助)時平、白太夫(中島三甫右衛門)兵衛(宮崎十四郎)宿禰(大井川又藏)立田(岩井喜代太郎)希世、玄蕃(中島三甫藏)源藏(山本京四郎)

本卷に收錄したのは、文化八年七月中村座上演の臺本で坂東彦三郎が一世一代引退披露に、忠臣藏と一日替りに演じた時のものである。この時の役割は

菅丞相、白太夫(坂東彦三郎)八重、苅屋姫、戸浪(澤村田之助)兵衛(澤村治之助)時平(尾上松綠)希世(中村東藏)御臺園生の前、春(市川おの江)齊世の君(中村七三郎)櫻丸、玄蕃、輝國(尾上松助)覺壽、松王丸(澤村源之助)立田、千代(瀨川路考)梅王、宿禰太郎、源藏(中村歌右衛門)

一谷嫩軍記(いちのたにふたばぐんき)

寶曆元年十二月、大坂豐竹座に書きおろされたもので、並木宗輔、淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豐竹甚六等の合作になつてゐる。宗輔はこの三段目を絶筆として、上演前の九月に死んでしまつた。記錄によると三段目までを書いたといふのであるが、大序から同じ作者がズツと書き續ける例は殆んどないから、恐らく宗輔の書いたのは三の切だけか、以上書いても二段目だけであらう。豐竹座としては珍らしい大當りで、翌年夏過ぎまで打ち續けたと云ふ。

型の如き五段物で、序の口は「堀河御所の場」義經が直實と六彌太に制札と櫻とを渡し、平家の公達を助けよとの意を含める發端である。俗に「制札渡し」と云つて、歌舞伎に入つても昔は三建目式に時折出たものであるが、義經は三段目の俳優であつたとしても、直實と六彌太は各々家來を代理に出したり、或ひは原作通りの役名でやるにしても全部が代役であつたり、頗る安く扱はれたものである。中は「北野天神の場」で、義經と卿の君が花見の所。卿の君は平家方の時忠の娘なので、義經へ疑ひのかゝるを恐れて自害をするといふ、千本櫻と同じ筋の場である。切は「經盛館の場」で、敦盛は經盛の子とはいへ、院の御胤であるから出陣させまいとするが、敦盛は遮つて出陣する。養女の玉織姫は卿の君と姉妹であるが、平山武者所が嫁に懇望するのを、姫は使者の大館玄蕃を切つて敦盛の跡を追ふ筋で、歌舞伎でも時折出る事は出たが、矢張り三建目式にどうでもいいやうな扱ひ方をされてゐた。

二段目は「陣門の場」「組打の場」「菟原の里の場」で、いづれも本卷に收錄した通り、歌舞伎でも大した變りはないが、水中で熊谷敦盛の格鬪を子役にさせたり、二人をセリ上げで出したりするのは歌舞伎特有の案である。

三段目の口は「彌陀六内の場」で、彌陀六の内に隱まれてある重盛の娘小雪と、熊谷に助けられた敦盛との色模樣を見せる。敦盛は爰でも人間か幽靈か曖昧にして、院本にも名を現はしてない。宗輔は用意周到である。中は「石塔の場」で、彌陀六は敦盛から石塔を誂らへられた代りに青葉の笛を貰ふ。その笛が又、藤の方の手に渡る筋である。藤の方は番場の忠太や須の股運平に圍まれるが、百姓達の助力で逃げて行く。次が眼目の「熊谷陣屋の場」になるのである。

四段目の口は「道行花追風（みちゆきはなのおひかぜ）」忠度の身を案じた菊の前が林と共に鎌倉へ下る道行景事。中は「鶴ケ岡八幡宮の場」で、菊の前と林が、六彌太自身の口から、忠度の仇は六彌太と敎へられる所。切が「六彌太屋敷の場」で、二段目の太五平は六彌太を助けて忠度を討つた爲に、今は男の樂人齋と敬まはれてゐるが、實は後藤兵衛守長の一子である。源家に恨みん爲、六彌太を切らうとして、誤まつて忠度を切つたので、傾城に姿を替へて入込んだ菊の前に智慧をつけて六彌太を討たせようとするが、却つて裏を掻かれ、菊の前の手にかゝり、六彌太の妻として來た菅原と、兄妹の名乘合ひをするといふ筋である。この場は後に西澤一鳳が改作して、「琴吹物語」と題し、新歌舞伎十八番に入れられた事もあつた。

五段目は「大内の場」爰は賴朝義經云ひ合せて、時忠が秘め置く神寶を奪ひ返すところ。「平山陣所の場」では、六彌太が平山を攻めて亡ぼすところ。例によつて、めでたしめでたしの大團圓である。

「一谷嫩軍記」を歌舞伎で上演したのは江戸の方が一足お先で、まだ大坂では人形で演じてゐる最中の、寶曆二年五月に、中村森田兩座で競爭的に上演した。中村座の方の役割は

直實（松本幸四郎後の四世團十郎）相模、菅原（瀨川菊次郎）平山（中島三甫右衞門）敦盛、小次郎（佐野川市松）玉織姬（吾妻藤藏）平山（坂田半五郎）經盛（松島茂平次）藤の方（佐野川花妻）忠度（澤村宗十郎）太五平（中村助五郎）彌陀六（藤川平九郎）義經、六彌太（澤村長十郎）

森田座の方の役割は

直實（市川宗三郎）義經（中村七三郎）相模（芳澤あやめ）敦盛（坂東伊三郎）平山（中島勘左衞門）六彌太（中村傳九郎）

大坂での初演は、寶曆二年十一月、中の芝居である。こ

の時の役割は

直實(市川團藏)相模(三條浪江)義經(嵐藤十郎)太五平(中村歌右衛門)彌陀六(岩井半四郎)藤の方(松島小楽)忠度(市野川彦四郎)菅原(中村喜代三郎) 菊の前(姉川大吉)六彌太(中村十藏)

本卷には眼目の二段目と、三の切だけを收れて置いた。臺本は文久三年正月、市村座所演のものである。

本朝廿四孝(ほんてうにじふしかう)

明和三年正月竹本座に上演された五段物で、近松半二を筆頭に、竹本三郎兵衛、竹田小出雲、三好松洛、竹田因幡、竹田平七等が作者に名を連れてゐる。半二式の技巧澤山な臭味はあるが、如何にも竹本座再盛期を思はせる花やかな淨瑠璃である。

初段の口は「室町御所の場」で、足利十二代義晴公の御前へ諸國の大名が集まつて、賤の方の男子懷胎の御祝ひを言上する。その席で武田長尾の確執が問題になる。北條氏時、村上義淸が故意に兩家を引裂かうとする。そこで義晴の發案で兩家和睦の爲、長尾の娘八重垣姫を勝頼の妻にさせる事とする。武田晴信と長尾景勝はこれを了承する。中は「誓願寺の場」で、直江山城と腰元八ツ橋の不義が義淸の爲に發かれさうになるのを、賤の方が助けてやる筋。切は「室町奥御殿の場」で、賤の方が北の方手弱女御前に義理を立て、わざと山城に戀を仕掛けて義晴の手にかゝらうと計るが、手弱女御前の明察で無事に納まる。薩摩の侍ひ井上新左衛門といふ者が蘭兵器の鐵砲を献上と云ひ立て入込んで、義晴を擊ち殺して逃げてしまふ。誰れとも知らぬ大男が賤の方を奪つて逃げて行くので、景勝が押止めると小柄を打つて逃げて行く。これが三段目の伏線である。曲者の一件で館の騷動になり、武田晴信長尾謙信は義晴三回忌までに曲者を尋ね出す事、もし尋ね出さなければ、兩人とも倅の勝頼景勝を討つて出す事を手弱女御前に約束する。爰で晴信は入道して信玄となる。賤の方を奪はれた越度で、山城と八ツ橋は追放される。この八ツ橋が三段目のお種である。序幕は斯うして、複雜な筋を賣る發端に過ぎぬので、歌舞伎では初期の京坂劇場以外、殆んど上演を見ないのである。

二段目は本卷收錄の「諏訪明神の場」から「武田館の場」で、爰もあまり上演はされないが、なか／＼面白い場であるし、筋の上からは大必要なので、入れて置いたのである。

三段目は「桔梗ヶ原の場」から「勘助內の場」爰が眼目で、廿四孝の故事を巧みに疊み込んだ半二が技倆を見せる場である。井上新左衛門に序幕の大男、疑問の人物を二人出して、幕毎にその絲をほぐして行きながら、一方いろい

ろな山を儲けて、飽きぬやうに進行させて行くところ、探偵小說式の興味さへ豐富である。

　四段目の口には「道行似合女夫丸」勝頼と濡衣が薬賣りに姿をやつして信濃へ行く例の道行景事。中が「氏時別所の場」で、村上義清が腰元八ツ橋を手に入れ、南彈正を討つたと思つたのは實は諏訪の狐に化かされたのだといふ滑稽た場。切が「謙信館の場」即ち十種香から狐火の段である。幕切れに齋藤道三は切腹し、小田原の北條の塞の內容を說明するのが本文であるが、歌舞伎では簑を大詰とする必要上、例の通り「また再會は戰場にて」一方々さらばの形式を取つてゐる。尤もこれは江戶に限る事であらう。京坂では本文通りに上演したらしい。

　五段目は「川中島の場」で、武田長尾は他愛もなく和睦してしまふ、簡單な大團圓である。

　これを初めて歌舞伎で移入したのは、明和三年五月、大坂中の芝居で

　　簑作、勝頼(嵐三五郎)八重垣姫(嵐雛助) 横藏(三桝大五郎)勘助母(嵐小六)慈悲藏(中村吉右衛門)

等であつた。江戶では安永五年六月の中村座が最初で、左の通りの役割であつた。

　　慈悲藏(市川團藏)お種、濡衣(山下金作)横藏、高坂(中村仲藏)越名(中島勘左衛門) 板垣兵部(大谷友右衛門)八重垣姫(瀨川菊之丞) 簑作、勝頼(嵐三五郎) 勘助母(中村助五郎)唐織(中村里好)

　本卷の臺本は、文久元年十一月市村座所演のものを基とし、序幕と二幕目は天保頃に大坂で上演した折の脚本を以て補つたのである。

八陣守護城（はちぢんしゆごのほんじやう）

　文化四年九月、大坂吉田芳松座へ書き卸した十一段續きの淨瑠璃で、中村漁岸と佐川藤太の合作、義太夫としては衰頽期に生れたのであるが、不思議に今日まで上演を絶たない。題材は大坂陣であるが、「近江源氏先陣館」のやうに鎌倉時代の背景は借りず、「應仁以來一百餘年」と年代さへ明らかに本文に書き出してある。たゞ流石に役名だけは憚つて替名にしてあるだけである。

　大序は「南天竺の場」で、怪しい道士が幻術を學んで惡龍と化し、大日本國を亡ぼす爲に飛行するといふ場。二册目は「小田館の場」で、幼君春若の後見を叔父北畠春雄がして、南蠻寺怪異につき評定を開く。加藤肥多守嗣清の一子主計之助に、此村隼人之助が附添うて怪異探檢に出張する事になる。第三册は「南蠻寺の場」で、隼人之助に戀する春姫を局八十瀨が取持つて、代りに二人に連判させようとする。主計之助が妨げるので局は道士の惡龍と變じて南

巖寺を大海と化するが、朝淸の勇力と、大內島の冠者義弘の鳴絃の德で、道士は退散する。

四册目は本卷收錄の序幕になつてゐる「毒酒の場」から、二幕目の「湖水御座船の場」で、怪しい旅人實は雪總が三尾島大藏から小田家の赤旗を奪ふ場。第六册目は「此村屋敷の場」で、此村の後室三浦と片岡造酒頭の計らひで、啞娘實は此村の忘れ形見お時を春姬の身替りに立てる筋。この幕は近頃でも上演された事がある。次が「海賊住家の場」で、隼人之助が海賊鰐ヶ瀨の一味を亡ぼして大功を立て、三浦之助と改名する場。七册目は「お通の方下館の場」で、主計之助がお通の方に別れを告げて父の本城へ向ふ場。八册目は本卷收錄の大詰になつてゐる「本城の場」である。

九册目は「栗津春雄陣所の場」で、既に合戰の始まつた後、春雄が卑怯な振舞をするので、淺雲九郎左衛門が諫言をする。そこへ忍び込んだ怪しい比良の百姓が捕へられる。十册目は「比良獄不動堂の場」で、百姓次郎作と變名した正木左衛門雪總が、お通の方に味方し、主計之助と計つて春雄を一杯くはせる。春雄は窮地に陷つたのを九郎左衛門が助け出す。十一册では「比良合戰の場」に小田方北畠方の和睦で終つてゐる。

その名で推察される通り、春若は秀賴、お通の方は淀君、朝淸は淸正、義弘は島津、元兵衛は後藤又兵衛、雪總は幸村、隼人之助は木村長門守、造酒頭は且元、九郎左衛門は大久保彥左衛門、南巖寺は南禪寺、八十瀨の局は那蘇の當込みである。繪本太閤記さへ絕版の憂目に遭つた時代にこの淨瑠璃が無事に上演し得たのは、全く不思議と云つてもよろしい。

歌舞伎で上演する時には、前々から呼び慣れた通り、朝淸は佐藤正淸、雪總は佐々木高綱で行くのが普通のやうである。明治になつてからは、本當に加藤淸正、後藤又兵衛の本名でやつた事すらあつた。

初めて歌舞伎に上演したのは、文化五年三月の京都北側芝居であつたが、この時の役割は、いま判然しない。

大坂は文化五年九月の中の芝居で、この時の役割は左の通りであつた。

朝淸（市川團藏、後に病氣で市川市藏）義弘、三左衛門（嵐吉三郎）元兵衛（大谷友右衛門）隼人之助（市川市藏）

桐（中村大吉）雛絹（中山よしを）春姬（叶珉子）

江戶では、文化七年五月の森田座が最初であつた。

正淸、高綱、市ノ川市藏）春姬、お時、雛衣（藤川友吉）

八十瀨、桐（叶三右衛門）義弘、三左衛門（荻野伊三郎）

主計之助（尾上紋三郎）道士（嵐龍藏）玄蕃、大藏（山村儀右衛門）春雄、元兵衛（大谷門藏）隼人之助（淺尾勇次

郎）三浦・葉末（三條浪江）山蔭（小川十太郎）

本巻收錄の底本は、明治二年十一月森田座で「高麗陣歸朝入船」と題して中村芝翫が正淸を演じたものである。

新薄雪物語

寛保元年五月、竹本座に書き卸された三段物の淨瑠璃で、作者は文耕堂、三好松洛、小川半平、竹田小出雲の連名になつてゐる。寛文九年に再版された「薄雪物語」といふ假名草子に材を求めたのだといふ。

上の口は「六波羅北條館の場」で、北條成時が若君誕生の祝ひに幸崎伊賀守、園部兵衞、秋月大膳、葛城民部が參着する。若君の守り刀を打つのに、來國行と、正宗の伜團九郎とが呼ばれたが、結局國行が打つ事になる。爰で又、澁川藤馬と妻平との試合も見せてゐる。中は「築地外の場」で幸崎の奥方が薄雪姫に左衞門の事を褒めて聞かせ、藤馬が大膳の姫所望の仲立するのを、いゝ加減にあしらつて歸す場。切は「淸水花見の場」で、本巻收錄の序曲である。歌舞伎へ入つてからは、この場なぞ、思ひ切つて賑やかに增補されてゐる。

中の巻は「詮議の場」と「三人笑ひの場」とである。この場の歌舞伎は大體原作と變らない。幸崎の奥方は原作に名が無いが、これは松ヶ枝と附ける場合もあるし、萩の方と名乘る時もある。

引續いて薄雪と左衞門、別れ〳〵の道行から、「地藏の五平次內の場」になる。五平次の女房小女郎は妻平の妹である。その緣で左衞門も薄雪も爰に隱まはれる。月光の久藏といふ惡人が二人を訴人しようとするので、五平次は久藏を殺す。小女郎は自殺して久藏殺しの罪を負ふといふ場である。

下の巻は「鍛冶屋の場」本巻收錄の通りである。しまひが「二條河原仇討の場」で、左衞門薄雪、妻平籬、國俊おれんが民部の許しを受け、大膳を討つて恨みを晴らすといふ大團圓である。

この狂言を初めて歌舞伎に上演したのは、同じ寛保元年八月、京都の早雲座であつた。

兵衞（民谷四郎三郎）大膳（榊山段四郎）國行（篠塚嘉左衞門）薄雪（岩井喜代太郎）籬（嵐辰三郎）妻平（民谷十三郎）左衞門、國俊（竹中兵吉）小女郎、梅の方（嵐小六）正宗（榊山小四郎）團九郎（榊山四郎太郎）

江戶では延享三年七月の中村座が初めで、この時は

兵衞、五平次、正宗（藤川平九郎）伊賀守（市川宗三郎）團九郎（大谷鬼次）大膳（市川勘十郎）國行（松島茂平次）梅の方、小女郎（瀨川菊次郎）籬（佐野川市松）薄雪（玉澤才次郎）左衞門（中村七三郎）妻平、民部（中村傳九郎）

道行の場は例によつて、江戸では豐後淨瑠璃に改作された事が多い。中にも有名なのは、安永八年八月市村座の「歌枕戀初旅」(富本)文化二年四月中村座の「道行念玉蔓」(富本)文政二年七月中村座の「大和文字戀の歌」(常磐津)の三つであらう。この中でも「道行念玉蔓」は俗に「長作」と云つて、今でも富本に名曲として殘つてゐるが、これは「舞踊劇集」へ別に入れて置いたから、その方を見て戴きたい。この「長作」が出來た時は「練供養妹脊緣日」といふ名題で、薄雪を通したのであるが、流石に江戸の芝居で、全篇一つの義太夫も使はず、歌舞伎式に押通してしまつたのが面白い。またこの時の五平次內の場は改作して妹のお光が左衛門に戀慕し、兄の手にかゝるといふ筋に變つてゐた。

本卷へ收錄した脚本は、天保十年三月河原崎座所演のものを底本とし、弘化四年二月中村座所演のものを參考としたのである。

小野道風青柳硯

寶曆四年十月、竹本座初演の五段物で、竹田出雲、吉田冠子、中邑閏助、近松半二、三好松洛といふお歷々の合作淨瑠璃である。

序の口は「大內の場」で、大極殿造營の番匠の中から、小野の篁の遺子、道風賴風兄弟が發見され、直ぐに杢頭に任官される。中は「誓願寺の場」で、女郎花姫が賴風を見染めて色模樣の場。下は「逸勢館の場」で、橘逸勢が謀叛を企らみ、道風を味方に引入れようとするが、諾はずに力者共を蹴散らして歸る。そのあとで美名野川の女御を助けうとて、出羽の次郎良實の妻笹鶴が忠死の事、笹鶴の父で逸勢の家來である鷲取兵部が切腹する事などを附けてある。二段目は本卷所載の「東寺の場」「道風館の場」である。

三段目の口は「珍篁寺の場」で、良實は蘇鐵といふ木彫師になつて、仁介の娘お町の聟に入り、筑波の宮を隱まつてゐる。お町が寺詣りの歸り、逸勢の手勢に宮を見出されお町は防いで落命する。切は「仁介內の場」で、お町の亡靈が宮を奪ひ返してくる。良實は娘小千代を殺して身替りに立てようとしたが、亡靈が切なる賴みで思ひ切り、そこへ押寄せた道風から、逸勢へ荷擔したのは謀計と聞さ、兩人力を合せて逸勢を亡ぼさうと計る。この娘小千代が後に小野の小町になるといふ筋である。

四段目の口は「天王寺の場」で、賀霜が女郎花の賴風に逢ふ所。中は「駄六內の場」は、駄六に基經を討たれた賴風夫婦が、仇を報じに入込んだが、駄六の妹お縫が賴風に戀して葛籐が起り、結局お縫も女郎花も悲觀して池へ身を

投げに行くのが「池道行思家名所(いけのみちゆきおもひのいへめいしよ)」で、池の邊で頼風が駄六を討たうとして窟の中に突き入れられる。中には殺されたと思つた基經はじめ朝臣が扣へてゐる。駄六は本名文屋の秋津といふ忠臣で、僞はつて逸勢に組みした事を明かすといふ場である。五段目は道風頼風良實秋津が首尾よく逸勢健宗を亡ぼす所で終る。

翌寶曆九年二月には、早速京都南側芝居でこの狂言を出した。

道風(山山小四郎)頼風(岩井染五郎)良實(坂田藤十郎)置霜(辰岡久菊)駄六(桐島儀左衞門)篠鶴(山山四郎太郎)お縫(澤村國太郎)逸勢(中村國藏)お町(嵐庄松)篠鶴(山山四郎太郎)女御(山下字源太)

同年七月、大坂中の芝居でも續いて出した。

道風(三桝大五郎)大藏(村山平十郎)置霜、お町(姉川新太郎)健宗　藤川八藏)女御(吉田萬四郎)女郎花(姉川大吉)逸勢(坂東國五郎)菊の上、お町(三條浪江)良實、頼風(市野川彥四郎)仁介、駄六(藤川平九郎)お縫(嵐三右衞門)

江戶での最初は寶曆八年八月の中村座であつた。

道風(市川團十郎)基經(松本大三郎)大藏(中島勘六)團八(中村庄九郎)健宗(坂田佐十郎)軍太(中村藤藏)兵部(中村仲藏)頼風(市川武十郎)女御(嵐薗菊)逸勢(中島三甫藏)法輪尼(市川升藏)仁介(中島勘左衞門)良實(市川八百藏)篠鶴(嵐和歌野)お縫(瀨川菊之丞)菊の上(嵐富之助)駄六(坂東三八)置霜、お町(中村喜代三郎)女郎花(芳澤五郎市)

本卷には最も廣く行はれる二段目の口切を收容した。用ひた藁本は、天保頃の物らしいが、年月不明の寫本であつた。

楠昔噺(くすのきむかしはなし)

延享三年正月、竹本座に初上演の五段淨瑠璃。五段を五節句に分けたなぞ茶氣がある。作者は並木千柳、竹田小出雲、三好松洛である。

初段は正月、口は「笠置皇居の場」で、召しに應じて楠正成が參內し、坊門淸忠が企みを挫いて門松の中から日の御旗を見顯はす所。これが正作の夢で、中の「松原村の場」になり、藤房の召しに應じて正作實は正成が御味方する所。切は「六波羅御所の場」で、北條仲時の命によつて公綱が出陣するまでゞある。二段目は三月で、口の「渡邊橋の場」は藤房の奴伊達介が奴を騙して主人が難儀の密書を奪ふ所。切は「八尾別當顯幸館の場」で雛祭の夜に云ひ號けの折鶴姬の許へ藤房が忍んで來る。坊門淸忠の家來が姬を淩はうとするのを伊達介の忠義で助かるといふやうな

件、三段目は菖蒲の筋句で本巻所載の「どんぶらこの場」「德太夫住家の場」である。

四段目は「道行戀花火」で折鶴姫の道行。切は「觀心寺の場」で七夕祭り。公綱が藤房の諫めで遂に官軍へ味方するといふ件、七夕の道具を巧みに使つてある。五段目は重陽の節句で「葉室の里顯幸隱れ家の場」で顯幸が楠へ組みし、仲時を亡ぼすといふ大團圓。爰で正成が泣男佐兵衞に化けて來る筋がある。

歌舞伎に上演したのは人形より直ぐの翌月、卽ち延享二年二月、京都の中村粂太郎座であつた。

正成、顯幸(中村十藏)德太夫(神山四郎太郎)伊達介(民屋十三郎)藤房(今村七三郎)德太夫女房、公綱(山本京四郎)照葉(中村富十郎)折鶴姫(中村粂太郎)

江戸ではズッと後、元治元年正月中村座に「昔噺譽曾我」と題して上演したのが最初であつた。

德太夫(坂東龜藏)婆(市川團藏)正成(坂東彥三郎)公綱(河原崎權十郎)音羽(岩井紫若)照葉(市川新車)

本巻に收めた脚本は眼目の三段目だけで、文政の末頃、上方の演芝居あたりで使つた臺本らしい。賤の女の踊なぞ餘計な入れ事があるが、今日でも上演の場合はこの通りである。近頃は德太夫と公綱、婆を正成を各一人の俳優が早替りで演じるのが習慣なので、その拵らへのツナギに、原作には無い人物を出したり、順序を變へたりしてある。

近江源氏先陣館

明和六年十二月、竹本座初演の淨瑠璃で、作者は近松半二を筆頭に、八民平七、松田才二、三好松洛、竹田春松、近松東南、竹本三郎兵衞の名を連ねてある。誰れもが知る如く、大阪冬の陣の一件を、鎌倉時代に准へて脚色したもので、時政は家康、賴家は秀賴、宇治君は淀君、高綱は幸村、和田兵衞は後藤基次、三浦之助は木村長門守、大江東元は大野道犬、造酒頭は且元、時姬は千姬、盛綱は信幸、等を當てたものである事は直ぐに解るが、それにしても中中巧く嵌め込んだものである。

全部が九段から成つてゐる。第一段「鎌倉御所の場」第二場「東大寺の場」は本巻に入つてゐる。第三段「坂本城內の場」は、佐々木高綱が花賣りとなつて入込み、宇治君の味方をするといふ場。第四段の「道行旅路の濡衣」は時姬住の江の道行に鹽賣り長藏が絡む景事。第五段「高宮村の場」第六段「四斗兵衞內の場」は本巻收錄の通り。第七段「坂本城の場」は盛綱が高綱を味方に附けようとして失敗する所から、小四郎の初陣、小三郎が生捕るまで。第八段は最も有名な「盛綱陣屋の場」第九段は「高綱隱れ家の場」に坂本城中の場」で、いづれも本巻に入つてゐる通りで

ある。三四七の三段は歌舞伎では殆んど上演を見ないので省いた。その外は、引續き盛んに上場されたもので、今日でも八ッ目だけは絶えず舞臺に現はれてゐる。

歌舞伎に現はれた初めは、明和七年五月の大坂中の芝居で、本卷に收錄した脚本は實にこの時の物である。尤も、盛綱陣屋へ出て來る二人の注進は、脚本からして名が無いので、近頃多く用ひられる役名を宛てゝ置いた。この時の役割は左の通りであつた。

政子(中村玉柏)時姫、住の江(市川吉太郎)入道(山村光藏)能員、小藤次(嵐金妻)おまき、宇治君(芳澤あやめ)造酒頭、微妙(市野川彥四郎)盛綱(三桝大五郎)早瀨(花桐豊松)三浦之助、盆太(小川吉太郎)篝火(澤村國太郎)四斗兵衛(藤川八藏)高綱、時政(中山文七)

江戶では寛政五年七月の市村座で、左の役割で上場したが、盛綱の件はこれを省いた。

高綱(市川門之助)篝火(瀨川菊之丞)三浦之助、小藤次(中山楷藏)造酒頭(坂東彥三郎)四斗兵衛(嵐龍藏)時政(中島勘左衛門)盆太(大谷德次)六郎(市川團十郎)

寛政九年八月、都座で上演した折に初めて盛綱の件が出た。この時の盛綱は森田勘彌で、高綱が市川八百藏、篝火が中村野鹽、小藤次が市川團十郎であつた。

蘭奢待新田系圖

明和二年二月、竹田平七、竹本座に書き卸された五段の淨瑠璃、作者は近松半二、竹田平七、竹本三郎兵衛である。

初段の口は「神泉苑雨乞の場」で、勾當の內侍を新田義貞に賜はる件。「なぎの宮の場」では藤の宮を怪漢が奪ひ、櫻の樹に天勾踐云々を書き殘して行く件。切の「義貞館の場」では、義貞が栗生才門と心を合せ、內侍に溺れると見せて尊氏の謀叛を見出す件。二段目の口は「鞍馬山の場」で大塔の君と織部姫との戀物語。「巖窟の場」では淵部伊賀守が間違へて法印を討つ件。切の「伊賀守屋敷の場」では、楠正行が和田新兵衛と心を合せ、伊賀守の實心を見出す心。いづれも平凡な筋で、後まで傳はらなかつたのも無理はない。三段目は本卷所載の「生田川の場」「幸內住家」の場である。

四段目は「道行園生の紫竹」で大塔の君の道行。中が「住吉祭の場」で大塔の君の危難。切が「寺子屋の場」で楠の後室が君と織部姫を匿まつてゐる。娘おこのが君に戀慕して母の手にかゝる。大森彥七と村上彥四郎が君を鬼女に仕立てゝ助けるといふ場で、おこのゝ件は日高川の淸姬をソツクリである。五段目は新田足利兩家の和睦で、終りである。

歌舞伎での初演は明和二年九月の大阪中の芝居で、左の通りの役割であつた。

おこの(嵐雛助)おそれ(姉川大吉)幸内女房(三條浪江)伊賀守(坂東三八)助市(嵐三五郎)幸内(中村吉右衛門)彦四郎(坂東岩五郎)彦七(三桝大五郎)

江戸では明和四年九月の森田座が最初である。

彦七(坂田左十郎)彦四郎(澤村大治)尊氏(鎌倉平九郎)栗生(松本友十郎)助市(坂東三津五郎)義貞(市川染五郎)おこの(尾上松助)おそれ(森田勘彌)正行(澤村宗十郎)

本巻に収錄したのは後に最も行はれた三段目の口切で、天保頃の大坂脚本であるが、俳優の名が記してない爲、年代は詳かでない。

菊池大友姻袖鏡(きくちおほともこんれいそでかゞみ)

明和二年九月、竹本座上演、七段續きの淨瑠璃で、作者は近松半二、三好松洛、竹田因幡、竹田小出雲、竹田平七、竹本三郎兵衛の連名になつてゐる。元來が「花系圖都鑑(はなけいづみやこかゞみ)」といふ院本の飜案で、歌舞伎の淸玄櫻姫を取入れてある爲か、それでなくとも歌舞伎式の半二の筆が、一層その色を濃くしてゐる。原作も大體本巻の脚本通りで、あとに「不知火の段」と「道行戀慕の三界」とが附いてゐるだけである。歌舞伎に入つて特に變つたのは「庵室の場」で、原作では宗玄が胴助の意見について姫を潔く思ひ切り、後段に至つてから死ぬ順序なのであるが、歌舞伎では淸玄と行き方を同じうする必要から、この場で胴助の手にかゝり、亡靈が現はれる風に改まつてゐる。これは庵室を大詰にする爲と、歌舞伎在來のお約束に從ふ爲とからで、拙ない改作だと思はれる。

歌舞伎にも、他の義太夫物ほど多くは入つてゐない。明和三年九月、大阪中の芝居で上演したのが最初であらう。この時の宗玄は三桝大五郎であつたが、他の役割は不明である。江戸では寛政十一年の夏、森田座での上演が最初で宗玄に市川荒五郎、折琴姫に澤村金藏、胴助に津打門三郎であつた。

本巻に収錄したのは、文久二年九月中村座で「岩倉宗玄戀慕琴(いはくらそうげんれんぼごと)」と改題補訂して上演した時の脚本で、この時は

宗玄(坂東彦三郎)胴助(尾上梅幸)多門之助、前司太郎(澤村訥升)藏人、ちよん兵衛(坂東龜藏)戸平(淺尾與六)二の町、折琴姫(澤村田之助)

等の役割であつた。

年表については前巻同樣、山形の秋葉芳美氏に非常な御厄介をかけた。末筆ながらお禮を申しあげる。

編纂校訂責任
渥美　清太郎
鈴　木　　侃

日本戲曲全集・第二十八卷
歌舞伎篇・第四回配本

編纂者檢印

昭和三年七月二十二日印刷
昭和三年七月二十五日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彥
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
　　　　　四一五
振替東京　一六一七

製版所　新倉東文堂

（神田區・松下町・明治印刷株式會社印刷）